

これが逃げるという事だ

福泉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは我々の知る世界と少しだけ異なる結末を迎えた馬の世界。

そしてそんな世界の影響を受けたウマ娘の世界の物語。

そんな作者の妄想に少しだけおつきあいください。

目次

01話	有マ記念への道	その1	1
02話	有マ記念への道	その2	8
03話	有マ記念への道	その3	14
04話	有マ記念に向けて	その1	22
05話	有マ記念に向けて	その2	28
06話	皆の有マ記念、皆の気持ち		36
07話	有マ記念		43
番外編01	名馬ツインターボ(馬世界)		61
番外編02	ライスシヤワー(ウマ娘)		67
番外編03	ナイスネイチャ(ウマ娘)		78
第2シーズン第1話	うまれました(馬)		86
第2シーズン第1話	うまれました(ウマ娘)		92
第2シーズン第2話	競走馬生の始まり(馬)		100
第2シーズン第2話	競走人生の始まり(ウマ娘)		109
第2シーズン第3話	波乱の重賞レース(馬)		116
第2シーズン第3話	波乱の選抜レース(ウマ娘)		123
第2シーズン第4話	G I初挑戦(馬)		133
第2シーズン第4話	スカウト初挑戦(ウマ娘)		143
第2シーズン第5話	夢の日本ダービー(馬)		157
第2シーズン第5話	夢に抱く日本ダービー(ウマ娘)		165
第2シーズン第6話	次のレースは・・・(馬)		172
第2シーズン第6話	次のデビューレースは・・・(ウマ娘)		182
第2シーズン第7話	激闘!ジャパンカップ!(馬)		191
第2シーズン第7話	激闘!札幌ジュニアステークス!(ウマ娘)		

第2シーズン第8話 俺の有馬記念、皆の有馬記念(馬)

205

第2シーズン第8話 私の皐月賞、皆の皐月賞(ウマ娘)

215

第2シーズン第9話 レース、レース、またレース(馬)

230

第2シーズン第9話 ダービー、ダービー、いざダービー(ウマ娘)

236

第2シーズン第10話 いざ!秋古馬三冠へ!(馬)

246

第2シーズン第10話 いざ!夏季強化合宿!(ウマ娘)

256

第2シーズン第11話 ジャパンカップ大逃走!(馬)

263

第2シーズン第11話 菊花賞大闘争!(ウマ娘)

271

第2シーズン第12話 目指せ!有馬記念!(馬)

283

第2シーズン第12話 目指せ!ジャパンカップ(ウマ娘)

294

第2シーズン第13話 5歳を迎えて(馬)

302

第2シーズン第13話 有馬を迎えて(ウマ娘)

312

第2シーズン第14話 ラストラン(馬)

323

第2シーズン第14話 r u n a l o t (ウマ娘)

335

第2シーズン第15話 まだ血は続いている(馬)

343

第2シーズン第15話 まだ想いは続いている(ウマ娘)

350

第2シーズン第16話 いざ各種牡馬(馬)

359

第2シーズン第16話 いざ名ウマ娘(ウマ娘)

366

第2シーズン第17話 繋がる血脈(馬)

375

第2シーズン第17話 繋がる想い(ウマ娘)

382

第2シーズン第18話 忘れ物(馬)

391

第2シーズン第18話 忘れ物(ウマ娘)

396

第2シーズン第19話 ライバル(馬)

408

第2シーズン第19話	ライバル(ウマ娘)	414
第2シーズン第20話	韋駄天(馬)	423
第2シーズン第20話	韋駄天(ウマ娘)	428
第2シーズン第21話	時は流れて	435
インパクトターボとは?		441
IF・・・		448
ファンが選ぶ名馬ランキング		454
ウマ娘プリティダービー 公式動画編		458
コラム インパクトターボ『日本競馬を変えた馬』		464
IF・・・2		469
競馬四方山話		475
祝勝会		481
二人だけの有マ記念		487
インパクトターボの産駒(一部のみ)		496
掲示板小ネタ集		503
皇帝の凱旋		512
お知らせ:新シリーズについて		516
第3シリーズ	皇帝のキセキ	520
	皇帝入学	
第3シリーズ	皇帝のキセキ	529
	鍛錬の日々	
第3シリーズ	皇帝のキセキ	538
	ケモノの衝動	
第3シリーズ	皇帝のキセキ	544
	能鷹隠爪	
第3シリーズ	皇帝のキセキ	550
	栄光への道	
第3シリーズ	皇帝のキセキ	557
	菊の戴冠	
第3シリーズ	皇帝のキセキ	568
	臥薪嘗胆	
第3シリーズ	皇帝のキセキ	574
	飛翔の時	

	第3シリーズ	皇帝のキセキ	09話	先を征く者	583
	第3シリーズ	皇帝のキセキ	10話	天皇賞と来訪者	590
	第3シリーズ	皇帝のキセキ	11話	日本の皇帝VSドイツの皇	
	帝				596
	第3シリーズ	皇帝のキセキ	12話	包囲網	603
	第3シリーズ	皇帝のキセキ	13話	フランスへ	611
	第3シリーズ	皇帝のキセキ	14話	前哨戦	617
	第3シリーズ	皇帝のキセキ	15話	皇帝の凱旋	624
	第3シリーズ	皇帝のキセキ		エピソード+オマケ	632
	番外編	とある競馬番組にて		インパクトターボ編	636
	番外編	とある競馬番組にて		マキシマムターボ編	643
	番外編	アプリ版インパクトターボ、サムシングブルー衣装違いVer			648
	r & 実装時開催イベント				
	番外編	アプリ版	インパクトターボ	ウマ娘ストーリー編	前編
	番外編	アプリ版	インパクトターボ	ウマ娘ストーリー編	後編
664					
656					

01話 有馬記念への道 その1

これは我々の知る歴史からほんの少しだけ異なる結末を迎えた馬の世界。

その違いを如実に表すJRAのCMがこれだ。

『94年、有馬記念』

その馬がハナを切らなかつたレースは一度もない

驚異の逃げ率100%

GIはおろかGIIですら未勝利の馬が

有馬記念という大舞台で伝説と呼ばれる大逃げを見せる

小柄なボデイに巨大なエンジン

その馬の名は

『ツインターボ』

「最終コーナーを回ってまだツインターボが先頭だ！後続馬は苦しいか！

しかしやはりこの馬！シャドーロールの怪物ナリタブライアンが大外から一気に捲り上げる！

場内はどよめきと歓声に包まれている！残り200を切っているがナリタブライアン苦しいか!?

ツインターボがまだ先頭！懸命に粘る！ナリタブライアン苦しいながらも追い上げる！

内ツインターボ！外ナリタブライアン！ツインターボ！ナリタブライアン！

まさかまさか！まさかのツインターボ逃げ切ったゴールイン！

これが逃げるといふ事だ！」

その走りは無謀か、それとも挑戦か

次の挑戦者を見よ。有馬記念

そしてこれはそんな世界の影響を受けたウマ娘の世界のお話である。

個性派ぞろいのチームカノープス。

しかし仲の良さはどのチームにも負けない、かもしれない仲良し

チーム。

そんなカノープスのメンバーがトレーニングを終えてトレーナーの前に整列していた。

「さて、今年の有《font:ul40》馬《font》記念ですが、タンホイザさん、ネイチャさんお二人の出場が決まりました」

その様子にマチカネタンホイザは驚きをもって、ナイスネイチャも照れた様子で髪の毛をいじりながら喜んだ。

「ねえねえトレーナー！ターボは!？」

「ターボさんは惜しくもはじかれてしまいました。結構ファンも多いのでもしかしたら、とは思ったのですが」

「ブー」

自分は出られないと分かったツイインターボはほつぺを膨らませるという分かりやすい不満げな表情をする。

そんなターボを苦笑しながらイクノデイクタスがなだめる。

「でもお二人とも出場出来て良かったですね。特にネイチャさんは四回目ですし」

「あはは、三年連続三着なんていうあたらしい記録作っちゃったけどね」

イクノデイクタスにいつもの様に少し斜に構えた様子で答えるナイスネイチャ。

中々勝ちきれない自分に、その気はなくなるともつつい卑屈になってしまうナイスネイチャだがそれでもファンはかなり多い。

いつか必ずファンに答えて見せると心の底には熱い思いが眠っている。

「よし！有《font:ul40》馬《font》記念がんばるぞ
く！えい！えい！むん！」

どこかずれた様子で気合(?)を入れるマチカネタンホイザ。

彼女も実力は高いのだがここぞという時にトラブルに巻き込まれて実力を発揮できずに終わってしまうという何とも間の悪いウマ娘である。

「そうだ！ねえトレーナー、明日は確か全員トレーニングはお休みだ

よね！」

「ええ、明日は休日ですし、まだ有《font:ul40》馬《fo
nt》記念まで少し時間がありますから明日なら大丈夫ですよ」

ツインターボの言葉にトレーナーが頷きながら答える。

「ねえ皆！明日はネイチャとマチタンのげ・・・げきれいかい？をやる
うよー！」

「そうですね。それは良い考えかと思えます」

ツインターボの提案に硬そうに見えて意外とノリの良いイクノ
デイクタスが賛同した。

「ええ!?ネイチャさんにはそういうのは似合わないというか・・・」

「え〜ネイチャさんも行きましようよ〜」

内心嬉しいのだがやっぱり一歩引いてしまうナイスネイチャをマ
チカネタンホイザが笑顔で説得する。

「う〜ネイチャ〜」

「あ〜もう分かりましたネイチャさんも行きます行かせていただきま
す」

泣くツインターボには敵わないとヤレヤレポーズでナイスネイ
チャは諦めた。

「よし！じゃあ明日は皆でパーティだー！」

泣く子がもう笑ったとばかりにコロっと表情を変えてツインター
ボが手を上に突き上げた。

「「おー！」」

「あ〜ほどほどでお願いしますね」

トレーナーの言葉は残念ながら皆の言葉に掻き消されてしまった。

そして翌日。

「マチタン遅いぞ〜！」

「ふえ〜すいません」

「いや、集合時間1時間前からいるターボがおかしいから」

「実際まだ予定していた時間より十分も早いですからね」

待ちきれないとばかりにツインターボがマチカネタンホイザに怒
るがその様子にナイスネイチャとイクノデイクタスがあきれた様子

でたしなめる。

元々早めの行動を心がけるイクノディクタスと周りの空気を読むのが得意なナイスネイチャはどうせツインターボが待ちきれないだろうと二十分前から集合場所でツインターボにつきあっていた。

マチカネタンホイザも決して遅刻しているわけではないが相対的に遅くなってしまうペコペコと皆に頭を下げている。

「おや？今日は皆さんでお出かけですか？」

そこを偶然マチカネフクキタルが通りかかった。

「お、マチタルだ〜」

「むむ！なんとも珍妙な呼び名ですね！」

略称を好むツインターボがマチカネフクキタルにやや変わった略称をつけた。

「今日はネイチャさんとタンホイザさんの激励会なのです」

「おお！そういうえばお二人とも有《font:ul40》馬《font:記念出場おめでとうございますー！」

やたらと占いやらシラオキ様とやらに傾倒してはいるが基本良い子のマチカネフクキタルは素直に祝福する。

「あはは〜、まああたしなりに頑張りますよっつと」

「ありがとうねフクちゃん」

やはり恥ずかしそうにするナイスネイチャと素直にお礼を言うマチカネタンホイザ。

「むむ！急にシラオキ様の予言が来そうですね！はんにやらほんにやらほりゃー！」

どこに持っていたのか突如水晶玉らしき球体を取り出したマチカネフクキタルがブツブツと呪文を唱え始めた。

「むむ！これは！なななんと！」

「どうしたのさ〜」

中々結果を言わないマチカネフクキタルにツインターボが訝しげに首をかしげる。

「ふ、不吉な予感がいたします！今日のお出かけは中止したほうが！」「え〜！せっかくネイチャとマチタンのお祝いしようと思ってたのに

〜!」

いきなりの不穏な発言にツイインターボが不満げに声をあげる。

「いやいやたかが占いでしょ。それにフクキタルってばしょっちゅう不吉だー!とか不幸がー!とか言ってるしあんまりあてにならないでしょ」

「それもそうですね」

呆れた様子の子のナイスネイチャと元々占いを信じていないイクノデイクタスは全く気にしていなかった。

「よーし出発だー!」

「ああこらターボ待ちなさい!」

待ちきれないとばかりにツイインターボが走り出してしまったので慌ててナイスネイチャが追いかけていく。

「あはは、ありがとうねフクちゃん。十分気を付けるね」

「タンホイザさん行っちゃいますよ」

「ああ!シラオキ様の予言は絶対なんですよー!」

お礼を言いつつイクノデイクタスに促されてマチカネタンホイザが皆を追いかけていく。

そんな彼女たちにマチカネフクキタルが悲鳴のような声を上げるが残念ながら彼女たちが足を止めることは無かった。

「さて、とりあえず商店街まで来たけど何するの?」

「ん〜?」

「・・・無計画だったのね」

発起人のツイインターボが首をかしげているのでナイスネイチャは呆れてしまった。

「そうですね、いくら激励会とは言えあまり羽目を外す訳にもいきませんし有《font:ul40》馬《font》記念の事を考えるとしてスイーツ食べ放題、という訳にもいきませんから・・・お決まりにはなってしまうですがカラオケやゲームセンターあたりが無難かと推測します」

イクノデイクタスが提案をする。

「え〜ターボお腹すいた〜」

「あはは、実は私も・・・」

「まあ程々ならトレーナーも文句は言わないんじゃない？」

「そうですね。少々食べる程度ならウマ娘である私たちなら問題ありませんね」

ウマ娘にしては小食のツインターボだがそれでも人に比べれば非常にたくさん食べる。

特に年頃のウマ娘たちにとってはスイーツの魅力には抗い辛い。

だがここで食べすぎてしまつては折角の有《font:ul40》馬《font》記念をふいにしてしまいかねないのでそこは自重する。

幸いな事に体調管理の鬼であるイクノデイクタスがいる以上カノープスでは太り気味はめつたに起こらないのでトレーナーもそこは心配していなかった。

ただ放置しておくともどこまでも暴走してしまうツインターボや何かと間の悪いマチカネタンホイザ、意外とノリがいいので抑え役としては少し不安の残るイクノデイクタスに常に一歩引いているせいでやや主体性にかけるナイスネイチャの四人が揃うと良くどうしてこうなった！が起きやすいのでそこがトレーナーの心配の種なのである。

それでもチームカノープスを取りまとめていられるトレーナーは実は他のトレーナーからは一目置かれている。

まだベテランとは言えない年齢で線が細く、一見押しに弱く見えるカノープストレーナーだがその実は調整力に関してはベテランでも舌を巻くほどの実力者なのだ。

中央トレセン学園でチームトレーナーを任せられるというのはそれだけの実力が認められていないと出来ない事である。

「あークレープ屋さんがあるよ！ターボクレープ食べたい！」

商店街の広場にクレープのキッチンカーが止まっている事に気が付いたツインターボが三人に提案、とうか自分の意見を言う。

「クレープか、いいわね」

「私も食べたいです」

「そうですね、クレープを食べ歩きしながら何をするか決めましょう

か」

「わーい」

反対意見が出なかった事に喜んだツインターボは一目散にクレープ屋に走り出した。

「おう！可愛い嬢ちゃんいらっしやい！」

「わ！怖い顔！」

クレープ屋の可愛らしい外見とは異なり店主は強面の男性がやっていた。

「こら！失礼なこといわないの！」

「はっはっはっ！自分でも似合わん顔しとるとは思っとなるから大丈夫だ」

ナイスネイチャがツインターボを叱るが店主は気分を悪くした様子もなく笑っている。

「副業でね、子供もいるし少しでも家計の足しにと思っ定期的にここでやっとなるんだ。顔は悪いが味は保証するぜ」

「それはすばらしいですね」

「お友達にも紹介しておきますね」

素直に感心するイクノデイクタスとマチカネタンホイザ。

「おうありがとなお嬢ちゃん、それで注文は何にするんだい？」

店主に促されて四人はメニューを見つめる。

「よし！ターボはミックスベリー&クリームで！」

「あいよ、当店の一番人気だな」

「じゃあネイチャさんはチョコバナナで」

「あいよ、三番人気のチョコバナナね」

「では私はチョコアーモンドをお願いします」

「あいよ、大定番のチョコアーモンド一つと」

「え〜つとえ〜つと、フルーツミックスでお願いします」

「あいよ、二番人気のフルーツミックスつと、焼き上がりまで少し時間かかるからちよつと待っててくれよな」

「「は〜い」」

注文を受けた店主は慣れた手つきでクレープを焼き始めた。

02話 有マ記念への道 その2

「ほいお待ちませ！こぼさない様に気を付けて食べてくれよな」

「はいありがとうございますございます」

調理の順番で一番最後になったマチカネタンホイザがクレープを受け取ると料金を店主に手渡した。

「それじゃあ行きましようか」

「モグモグ、おいしーよーマチタン」

「ターボさん、クリームが鼻の頭についてますよ」

待ちきれないと一足先に食べ始めたツインターボがどうやったのか鼻の頭にクリームをつけている。

「ああもうターボったら仕方ないわね。イクノ、悪いけどちよつと私の持つてて」

ナイスネイチャが自分のクレープをイクノデイクタスに渡すとティッシュを取り出してターボの顔を拭いてあげた。

「ありがとねナイスネイチャン」

「誰がネーチャンか」

パシッと軽くターボの頭をナイスネイチャが叩く。

そんな様子を笑いながら見ていたイクノデイクタスがマチカネタンホイザが少し奇妙な表情をしている事に気が付いた。

「タンホイザさん、どうされたのですか？」

「え？ううん！何でもないよ」

一口食べた自分のクレープを首をかしげながら見つめていたマチカネタンホイザだったが何でもないと言っていると首を振って改めてクレープを食べ始めた。

その様子が少し気になったイクノデイクタスだったがナイスネイチャにクレープを返してほしいと言われてすぐにその事を忘れてしまった。

四人はそのまま商店街をブラブラと散策し、ウマ娘御用達のアミューズメントパーク・・・というド直球なネーミングのカラオケ店兼ゲームセンターに入っていった。

「『君の愛バが♪』」

やはりこれを歌わないと中央トレセン学園のウマ娘でないだろうとばかりにうまぴよい伝説は良く歌われている。

なのでこのカラオケ店では大体履歴にうまぴよい伝説が入っているため景気付けで歌われる事が多い。

皆歌えるし嫌いなウマ娘はまず居ないのでトップバッターは誰かでもめるより皆で合唱して盛り上がってそのまま続けていった方が乗りやすい等の理由もある。

そのままハナは譲らないとツイインターボが曲を入れていたのでツイインターボ、マチカネタンホイザ、ナイスネイチャ、イクノデイクタスと一周した時だった。

「ねえマチタン、大丈夫?」

お手洗いに行こうと立ち上がったツイインターボが少し様子のおかしいマチカネタンホイザに気が付いた。

「ほんとだ!タンホイザ大丈夫なの!」

ナイスネイチャも異変に気が付いて慌てて駆け寄った。

「顔が真っ青です!それに震えています!」

イクノデイクタスがマチカネタンホイザの体の様子をうかがいながら内線用の電話を取った。

「はい、ご注文は〜」

「すみません救急車を一台お願いします!」

「へ!?あ、はい!」

慌てた様子で内線が切られるとすぐに店員がやってきた。

「今救急車を呼びました。それとこちらを使ってください」

店員が差し出した毛布をイクノデイクタスは受け取るとマチカネタンホイザにそっとかけた。

「イクノはタンホイザについててあげて!私はトレーナーに電話をかけてくるから!」

「ターボは!」

「えっと・・・お会計お願い!」

「分かった!」

スマホを手にお店の外へと出ていくナイスネイチャに店員にお会計を頼んでいるツインターボ、そしてマチカネタンホイザが少しでも楽なようにしようと服を緩めたり姿勢をゆっくりと変えさせたりするイクノデイクタス。

三人はそれぞれ慌ただしく動いていた。
ウマ娘に対応できる病院は限られている。

まだまだ未解明の部分が大きいウマ娘に医療技術が追い付いていないのだ。

骨折などの外科医であれば普通の人間と大きな違いが少ない為、辛うじて普通の医者でも対応ができるが内科医となるとその数は非常に限られている。

さすがに中央トレセン学園のおひぎ元である為にそれほど遠くない場所にウマ娘担当医が所属している総合病院があるがそこで担当医は頭を悩ませていた。

「喉を中心に蕁麻疹が出ていますから恐らく食物アレルギーの一種だとは思いますがマチカネタンホイザさんにアレルギーはありますか?」

「いえ、少なくとも日常口にする食べ物にアレルギーがある事はありません。トレセン学園でもアレルギー検査を入学時に実施しておりますのでまず漏れは無いかと・・・」

全寮制である中央トレセン学園ではウマ娘第一を掲げる理事長が本人も無自覚なアレルギーがあつてそれが原因で体調を崩す事などあつてはならないと入学時にアレルギーテストを念入りに行っている。

一般的な食物アレルギーから花粉症やハウスダストまで調べた後、治療可能な物や治療した方が良い物には専門医と相談しながら対応している。

幼い頃の苦い経験から体調管理に関して強い思いのあるイクノデイクタスは学園側の実態もしっかりと把握していた。

体調不良の原因が分からない。

これがこの二人を悩ませる。

「す、すみません！タンホイザさんの容体は！」

「トレーナー！」

診察室に飛び込んできたトレーナーにイクノデイクタスが駆け寄った。

「現在は抗アレルギー反応薬を投与して様子を見ている状況です。食物アレルギーの一種だとは思いますが原因が特定できない事には……」

医者がそう告げるとトレーナーは力なく椅子に座り込んだ。

「ああ、なんて事だ。折角の有『font:ul40』馬『font』記念が……」

「今ネイチャさんとターボさんがタンホイザさんの病室に居ます。二人もかなり動揺していますからそちらにも……」

「すみませんイクノさん、トレーナーで大人の私がしつかりしないといけないのに」

「いいえ……私も来ていただいて助かりました……」

気丈に見えるイクノデイクタスだがやはり年頃の女性には辛い状況だったらしくトレーナーが来て明らかにホッとしている。

「一度病室に行きましょう」

医者はそう言って立ち上がった。

「あ、トレーナー」

「ネイチャさん、大丈夫ですか？」

「あたしはなんとか……でもターボが……」

「う……ドレ……ナ……」

先ほどまで泣いていたのであろう目を腫らしたツインターボがトレーナーに抱き着いた。

「タンホイザさんの容体は？」

「ひとまず小康状態といったところです。原因が特定できない以上対処療法しか方法がありません」

アレルギー反応と一括りにしてもその治療法はアレルギー事に大きく異なる。

特に食物アレルギーの場合原因物質が特定できないと一時的に症

状を緩和させる薬を投与するしかなく、治療が難しい。

「さらにひどい蕁麻疹が喉を中心に発症しています。この治療は簡単には終わりません」

蕁麻疹は治療が難しい症状の一つだ。

あつさり治る事もあれば半年以上も症状が治まらない事さえある。

「じゃあマチタンの有《font:ul40》馬《font》記念は！」

「無茶です！最悪走っている最中に呼吸困難で死ぬ事だってありえるのですよ！」

食物アレルギーは軽く見られがちな症例であるが実は最悪の場合命に係わる非常に厳しいものだ。

食べて直ぐに症状が現れる即効型、食べてしばらくしてから症状が現れる遅延型。

この二種類の食物アレルギーはどちらも命に係わる可能性があるのだが、他人が共感し辛い症状という事もあってどうしても軽視されてしまう。

命を繋ぐことを第一に置く医者として到底許可出きる事ではなかった。

「仮に症状が治まったとしてもそれが治療が済んだのか単に潜んだだけなのかは我々医師でも判断が難しいのです。ましてその後に激しい運動をして大丈夫という太鼓判を押せるのはかなり先の話になります。せめて原因が特定できれば少しでも早く判断出来るのです
が・・・」

医者も真剣に悩んでいるからこそ悔しそうな表情で眠っているマチカネタンホイザを見つめる。

「・・・クレープ・・・」

「え？」

「いえ、先ほどクレープを食べている時にタンホイザさんの様子が少しおかしかった気がしたのですが・・・」

トレーナーが来たことで落ち着いたのか、イクノデイクタスがふと先ほどの事を思い出した。

「でもクレープはあたしたちも食べたし普段だって全く食べた事の無いものじゃないわよ?」

「それに入ってた食材も特に変なものは無かったよ?」

「ええ、ですがどうしてもそれが気になってしまつて・・・」

三人の言葉を聞いたトレーナーはずつと握りしめていた拳をほどくと真剣な表情で三人に尋ねた。

「そのクレープ屋さんはどこに?」

「商店街の広場です。お店ではなくキッチンカーですのでまだそこに居るのなら、ですが・・・」

「分かりました。皆さんはタンホイザさんについてあげてください。私はそのキッチンカーにあたってみたいと思います」

「あ!トレーナー!」

「廊下は走らないでください!」

医者の忠告も聞こえないままにトレーナーは走り出した。

03話 有マ記念への道 その3

トレーナーは商店街へと車を走らせた。

焦る気持ちがついつい速度を上げてしまいがここで自分が事故など起こせばそれこそナイスネイチャの有《font:ul40》馬《font》記念にすら影響を及ぼす。

必死に気持ちを抑えながらトレーナーは慎重に運転をする。

運がいい事に信号に恵まれて直ぐに商店街へと到着することができた。

近くのコインパーキングへと車を止めたトレーナーは広場へと急いだ。

買い物客や遊びに来ている学生などで賑わう商店街をかき分けて広場へと到着するとそこにはクレープ屋と思わしきキッチンカーがあった。

「ちよつと店長さん！これは無いんじゃない!？」

キッチンカーの前ではダイワスカーレットが怒りをあらわにしていた。

「全く！いくら副業だからって衛生管理を疎かにしていいわけないじゃない！」

「まったくその通りで！本当に申し訳ない！」

怒鳴るダイワスカーレットに平謝りする店主。

「ダイワスカーレットさん、何があったのですか？」

「ああ、カノープスのトレーナーさん！このクレープ見てください！」
そういつてダイワスカーレットが差し出したクレープの上には小さい蜘蛛が「オッス！オラ蜘蛛！」という感じでクリームに乗っていた。

「どうやら気が付かないうちに天井と棚の僅かな隙間に蜘蛛が卵を産み付けてたみたいでして・・・」

「たまにしか使わないならそういう時は丁寧に隅から隅までチェックしなさい！」

「おっしやるとおりです・・・」

も最善を尽くします。貴方はできるだけ彼女を支えてあげてくださいね」

「はい！それはもちろん！」

トレーナーは力強く頷いた。

「あ……トレーナーさん……」

病室に向かうと目を覚ましたマチカネタンホイザが喋りづらそうにトレーナーを呼ぶ。

「無理なさらなくてください。それと、原因ですがイクノさんの読み通りクレープに原因がありました」

「そうですか……やはりあの時……」

もつともその時すでに食べてしまった後だったので何かできた訳ではないのだがそれでもイクノデイクタスは責任を感じずにはいられなかった。

「貴方の責任ではありませんよイクノさん」

トレーナーはそう言ってイクノデイクタスを慰める。

「……いだ……」

「ターボ？」

「ターボのせいなんだあ!!ターボがあ!!ターボがクレープ食べようなんていったからあ!!うわああー!!!」

「落ち着いてくださいターボさん！貴方の責任では！」

泣き出してしまったツインターボをトレーナーが必死に宥める。

「ターボのせいなんだあ!!!マチタンの有《font:ui40》馬《font》記念を台無しにしちゃったあー!!!」

しかし自責の念に囚われてしまったツインターボは泣き止まない。

「ターボちゃん……だいじょうぶ……だよ……」

「マッヂダンッ〜!!!ゴベンネェ〜!」

ツインターボはマチカネタンホイザに縋り付いて泣き始めた。

「そう！お嬢ちゃんには何の責任もねえ！」

「クレープ屋のおじさん」

そこにはクレープ屋の店主が何やら木の板とタオルに包まれた何かを持って立っていた。

「お嬢ちゃん、この度は俺のせいで大変な目に合わせてしまつて申し訳ねえ！さらに大事な試合までフイにしちまつた！男、五十嵐龍二！ケジメをつけにきやした！」

すると店主は木の板を床に置き、タオルに包まれていた包丁を握りしめると自身の左手の指を切り落とそうとした。

「ちよつと！何してるんですか！」

「放してください！ケジメをつけさせてくださいええ！」

トレーナーが慌てて店主の腕をつかんで止める。

イクノダイクタスとナイスネイチャはどうしたらいいのか分からずただオロオロとし、何が起こったか分からないツインターボとマチカネタンホイザは困惑した表情でその状況を見つめていた。

最終的に通りがかつた看護師が「病院だけが人を増やすな！」の声と共に店主を気絶させた。

「大変面目ねえ……」

話を聞くとこの店主、10年以上前に暴力団を辞めたのだという。

現在はその時から世話になつている土木事務所で働きながらクレープ屋もやつていふとの事だ。

「色々苦勞させてきた妻には迷惑かけねえ、何とか責任を取らなきゃいけないと思つたら頭の中が真っ白になつちまつて……つい昔の癖が……」

「そんな事をしたら余計に奥さんに迷惑かかるでしょ」

ナイスネイチャは呆れた様子で店主を叱る。

「それでタンホイザさん、どうしますか？」

「私は……気にしてません……不幸な……事故……ですから」「せめて入院費用などは負担させてくださいええ。それぐらいしないと妻に合わせる顔がねえ」

その後トレーナーと店主、医者で話し合い、費用負担などを決めていった。

いつまでも病院に居るわけにもいかないのでトレーナーは三人を車に乗せて学生寮へと送り届けた。

「私は明日、タンホイザさんに荷物を届けてから来ますのでそれまで

自主練をお願いします」

「分かりました」

「ネイチャさん、気持ちは分かりますが貴方は自分のレースに集中してくださいね」

「そうね。タンホイザの分も頑張らなきゃ」

「ターボさん、何度も言いますが貴方の責任ではありません。あまり気に病まないでくださいね」

「うん・・・」

三人はそれぞれの寮へと戻っていった。

「そうなんだ・・・タンホイザさん出られないんだ・・・」

「うん・・・」

寮の食堂でライスシャワーとツイインターボが話をしていた。

「ライスも、タンホイザさんの分までがんばるね」

「ありがとうねライス。きつとマチタンも喜ぶよ」

いつもの元気がないツイインターボにライスシャワーもどう励ましていいか分からない。

そんな時だった。

「皆さん！今日もバクシンしてますかあ!?私はしています！」

「あ、バクシンオーさん」

果たして彼女に悩みはあるのだろうか。

日々之爆進のクラバクシンオーが二人の所へやってきた。

「やや!?ツイインターボさん元気がバクシンしていない様子ですがどうかしましたか!?まさか今日のご飯に大嫌いなピーマンが出たとかですか!?!」

「いや・・・そう言う訳じゃないんだけど・・・」

「では私に相談してみてください！これでも学ツ級ツ委員長!ですから!」

ちなみに中央トレセン学園に学級委員長という身分は無い。

「実は・・・」

ツイインターボはクラバクシンオーに事情を説明した。

「なるほどー!それなら私に名案があります!」

「大丈夫かなあ・・・」

不安なライスシャワーだったが一応クラバクシンオー的には励ましているのだろうと口を挟まなかった。

「ツインターボさん！ズバリ！バクシンあるのみです！」

「・・・やっぱり・・・」

不安が的中したとライスシャワーは困った表情でツインターボの方を向く。

「ターボさん？」

しかしそこには珍しくとても真剣な表情で悩んでいるツインターボが居た。

「そっか・・・そうだよね」

ツインターボはガタツと椅子を鳴らして立ち上がった。

「ターボ！有《font:ul40》馬《font》記念に出る！マチタンの分まで・・・ううん！マチタンと一緒に走る！」

「おお！それでこそバクシンです！」

「ターボさん・・・でも有マ記念の締め切りは・・・」

「リジチョーにジカダンパンしてくる！」

そう言ってツインターボは走り出した。

「ちよつとツインターボさん！もうすぐ寮の門限ですよ！」

「たづなさん！リジチョーはどこ!？」

校門前で門限破りの見張りをしていたたづなさんにツインターボは尋ねる。

「理事長ならまだ理事長室に・・・」

「ありがとう！」

「ああ、こら待ちなさい！」

走り出したツインターボをたづなさんが追いかけていく。

二人はあつという間に走り去ってしまった。

「リジチョー！」

「もう！廊下は走ってはいけませんし理事長室にはノックをしてからにして下さい！」

「ターボさんにたづなさん!？」

ツインターボが理事長室の扉を勢いよく開けて中に入るとそこにはカノープスのトレーナーも居た。

「あれ？トレーナーなんているの？」

「私はタンホイザさんの事を報告しに来たのですよ。ターボさんは？」

「そうだった！リジチョー！頼みがあるの！」

「拝聴！聞こうではないか！」

いつもの通り扇子を広げて理事長がツインターボに話を促した。

「ターボを有《font:ul40》馬《font》記念に出場させて！マチタンと一緒に走るんだ！」

「いやいやターボさん何をおっしゃってるのか分かっているのですか！タンホイザさんは走れない・・・」

「静粛！まだ続きがあるようだ！」

「マチタンが走れないのは分かっている！だからターボがマチタンの思いと一緒に走るの！マチタンの衣装で！ターボ絶対に勝つから！」

真剣な表情をするツインターボに理事長は笑みを浮かべる。

「許可！URAの方には私から話を通しておこう！」

「ありがとうリジチョー！」

「ですが理事長、ツインターボさんとマチカネタンホイザさんの衣装ではサイズが合いませんよ？」

たづなさんの意見ももつともである。

ウマ娘の中でもかなり小柄なツインターボとマチカネタンホイザでは衣装のサイズはどうがんばっても合わない。

ましてウマ娘のレース用衣装は特殊な造りでフィッティングを含めれば数か月はかかる代物だ。

「えっとえっと全部じゃなくてもいいから！」

「タンホイザさんの帽子ぐらいならいけるのではないのでしょうか？」

「トレーナー！」

ツインターボはトレーナーの方を向く。

そこにはいつもの柔らかい笑顔をするトレーナーが居た。

「ですがターボさん、分かっているとは思いますが有《font:ul

40《馬／font》記念はそう簡単に勝てるレースではありません。特に今年は怪物と呼ばれた三冠馬、ナリタブライアンさんが出場しています」

トレーナーは表情を引き締め、厳しい口調でツインターボを諭すように言う。

「分かってる！それでもターボが勝つんだ！どんなきついトレーニングだってするからー！」

「・・・分かりました。」

ツインターボの真剣な表情にトレーナーは頷いた。

「たづなさん、お願いがあるのですがよろしいでしょうか？」

「なんででしょうか？」

「明日、ターボさんの為にやりたい事が出来てしまったので私の代わりにタンホイザさんへ着替えなどの荷物を届けていただけないでしょうか？」

「理事長、よろしいですか？」

「許可！私も手伝える事があれば何でも相談してほしい！」

「ありがとうございます！」

トレーナーは二人に深々と頭を下げた。

04話 有マ記念に向けて その1

翌日、トレーナーはチームスピカの沖野トレーナーを訪ねた。

「お前が俺を訪ねてくるなんて珍しいな」

「先輩にお願いがありました」

沖野トレーナーは席に着くように促した。

「タンホイザの事はスカーレットから聞いている。残念だったな」

喫煙事情が厳しくなつてからすつかり啜えることが癖になつてしまった棒付きキャンディーを啜えると沖野は話を聞く姿勢をとる。

「実はタンホイザさんの変わりにターボさんが有《font:ul40》馬《font》記念に出る事になりました」

理事長の仕事はとも早く、今朝一番にたづなさんからトレーナーにツイッターボの代理出走の許可が下りたと連絡があった。

「それはおめでとぅ……とは言ひ辛いな。それで頼みつてのはなんだ？」

「ターボさんの適正距離延長トレーニングをお願いしたいんです」

その言葉に沖野トレーナーは顔をしかめた。

「お前、俺がテイオーの適正距離延長に失敗した事を知っていてそれを言うのか……」

「私ではそもそも適正距離延長のトレーニングすらままなりません。それに先輩の適正距離延長は失敗してはいません。テイオーさんの適正距離はおそらく2000メートルから2400メートルでしょう。本来なら有《font:ul40》馬《font》記念は適正外です。ですが先輩のトレーニングがあったから有《font:ul40》馬《font》記念を勝利する事ができました。天皇賞春には届きませんでした。がそれでもテイオーさんの適正距離は私の見立てでは少なくとも2800メートルまでは伸びているでしょう」

その言葉に沖野トレーナーは腕を組んで考え込む。

「お願いします…ターボさんのトレーニングを引き受けてはいただけないでしょうか！」

立ち上がって頭を下げるトレーナーに沖野トレーナーは頭をかく。

「いいじゃんトレーナー、ツインターボ師匠のトレーニング手伝ってあげようよ」

「テイオー、来ていたのか」

「はちみつドリンクを手に持ったトウカイテイオーが入り口に立っていた。」

「師匠にはまだ恩返し出来てないし、ボクも師匠とは走りたいたいからさあ。ねえいいでしょ?」

「しかしなあ・・・」

「私からもお願いトレーナー」

「スカーレットもか・・・」

「どうやらトウカイテイオーと一緒に来たらしいダイワスカーレットもいた。」

「はあく・・・分かった。俺で良ければツインターボのトレーニングをしよう」

「沖野トレーナーは観念して額を手で押さえながら了承した。」

「ありがとうございます先輩!」

「ただし必ず成功するとは保証できないからな」

「やったー!」

「トウカイテイオーとダイワスカーレットは沖野トレーナーの言葉に手を取り合って喜んだ。」

「とりあえずツインターボの詳細なデータを、分かる範囲でいいからくれ。一から調べているだけの時間もない。それとこちらの準備期間として二日ほど必要だ。それで良いな?」

「はい!よろしくお願いします!データはすぐに持ってきます!」

「トレーナーは直ぐに自室へと向かって走り出した。」

「こちらがターボさんの最近のトレーニング状況と1000メートル、2000メートルの参考タイムです。こちらがターボさんが出場したレースデータと映像です」

「トレーナーは沖野トレーナーの机の上にこれまでの記録ノートや映像を収めたメモリを置く。」

「それだけあれば十分だ。お前はナイスネイチャのトレーニングに集

中しろ。ツインターボは明後日の練習からこちらに合流するように伝えておいてくれ」

「分かりました。どうかターボさんをよろしくお願いします」

「引き受けた以上は最善は尽くすさ」

それだけを言うと沖野トレーナーはすぐさまツインターボの記録ノートを見始める。

その様子を見てトレーナーは頭を下げて退室した。

「ねえねえトレーナー、師匠は有《font:ul40》馬《font:記念勝てそう?》」

「・・・はつきりいって現状では無理だな」

トウカイテイオーの質問に記録ノートのチェックが終わり、パソコンの画面に映し出されているツインターボのレースの様子を見ながら沖野トレーナーが答える。

「これを見てくれ、このレースはお前も覚えていたろう?」

そこにはトウカイテイオーに見せつけたオールカマーのレースが映っている。

「あ、ボクのミニライブの時のレースのだね。もちろん覚えてるよ」

そのレースを見るとトウカイテイオーは少し泣きそうになるのだが今はそうじゃないと抑える。

「それとこつちがその前の七夕賞の様子だ」

映像を隣に並べて沖野トレーナーが同時にスタートさせた。

「・・・あれ?オールカマーの方が遅い?」

「そうだ、七夕賞の時は逃げ馬がツインターボ含めて5頭というありえない状況だったと言うのもあるがそもそもオールカマーの時はツインターボは実はそれほど飛ばしていないんだ」

本来逃げ馬同士が複数争う事はあまり起きない。

逃げ自体あまり多用される戦術ではないし何より先頭争いに負けた時点で逃げは勝てない事が決まるのだ。

作戦を指示するトレーナーとしても実際に走るウマ娘達としても逃げの適正があつたとしてもリスクは選びたくないのが本音だ。

だから通常のウマ娘は逃げを選ぶ事は多くても逃げしかないウ

マ娘はまず居ない。

そこがツインターボのある種異常ともいえる部分である。

「大きく引き離しているから一見すると早いように見えるが実際には中盤はあまり速度を出していない」

「そっか、大逃げしてるから早いはずだと皆思い込んじゃったんだね」

「ああ、実際この時他のウマ娘達はツインターボがバテるのを待っていた。しかしここだ」

「あ、ライスシャワーが上がってきてる。かなりのロングスパートだね」

ツインターボがコーナーに入る少し前にいつもならまだ抑えているライスシャワーが何かに気が付いたのか早くも仕掛け始めていた。

その様子を見た他のウマ娘達は困惑しながらもライスシャワーについていく形で上がっていく。

「ライスシャワーは恐らく時計を見て自分たちが遅い事に気が付いたんだろうな。あの状況でも冷静に周りを見れるのは流石だ」

「そうだねってライスシャワーの話はいいから師匠の話してよお」

「ああ、すまんそうだったな」

話が逸れ始めていたことをトウカイテイオーに指摘されて沖野トレーナーは改めて映像を戻して再生する。

「ここだ。七夕賞でもオールカマーでもそうだがツインターボは1800メートルを過ぎた辺りで明らかにタイムが落ちている。七夕賞は全体がハイペースのレースになっていた為に後続のウマ娘達がバテて差し切れず、オールカマーは道中を少し抑えていたおかげで失速が始まってはいるが事前に築いたセーフティリードと最後の気力でなんとか押し切っている。別の負けたレースでも明らかに1800メートルを迎えた辺りでスタミナが尽き始めている」

「じゃあ師匠の適正距離って」
「1800から2000・・・2200は辛うじてと言った所だろうな・・・」

適正距離を500メートルも伸ばさなければならぬ。

トウカイテイオーの時もそうだが適正距離というのはそう簡単に

は伸びない。

あのミホノブルボンでさえ地獄のようなトレーニングを長期間やって初めて中長距離の適正を手に入れたのだ。

期間の短いツインターボがトレーニングをやってどれほど伸ばせるのか。

「こいつは厳しい戦いになりそうだ・・・」

「でも師匠ならきつと諦めないよ。これまでも、そしてこれからもね」
「・・・とにかくやれる事は全部やってみるか」

沖野トレーナーはそう呟くとトレーニングの為の準備をする為に電話をかけ始めた。

二日後、ツインターボがスピカのチームルームを訪ねてきた。

「今日からしばらくお世話になるターボだぞ！」

「昨日話したがお前たちはしばらくレースも無いし俺はツインターボにつきつきりになる。何せ時間が無いんでな。手伝いたいって言うなら助かるが自分のトレーニングは疎かにしないように！」

「二」「はいー」「三」「ウゝッス」

膝の定期健診で休みのメジロマックイーンを除いた全員が返事をする。

メジロマックイーンは復帰が不可能と思われる膝の怪我から奇跡の回復を見せたがそれでも不安が残るため頻繁に医者に通っては異常は無いが、トレーニングで負荷がかかっていないかをチェックしている。

それはトウカイテイオーも同じでやはり三度の骨折はトウカイテイオーの足に不安を残し続けている。

その為にトウカイテイオーも頻繁に医者に通ったり骨を丈夫にするサプリメントを飲むなど再発防止に必死である。

「それじゃあツインターボ、まずはこれを着けてくれ」

「テーテツ？って重お！」

それはメジロマックイーンが使っていた重量蹄鉄であった。

片手で受け取ろうとしたツインターボはあまりの重さにガクンと沈んだ。

「これからレースまでその蹄鉄をつけてトレーニングを行う。トレーニング内容はスタミナ強化、これ一辺倒だ」

「タイムは？」

「スピードはこの際気にするな。スタミナさえつけばなんとかなる」

ツインターボのスピード自体は実はサイレンススズカにそれほど劣らない。

ただサイレンススズカに比べて圧倒的にスタミナが足りないのだ。

さらに狭い適正距離が足を引っ張るといふ欠点もある。

「まずはコースをランニングだ。そのあとに坂も走るぞ」

「よし！ターボがんばるぞー！」

ツインターボの元気な声が練習場に響き渡った。

05話 有マ記念に向けて その2

「たりやー!」

「ちよつと師匠おーランニングだよお!」

どうしても全力疾走し始めてしまうツインターボをトウカイテイオーがなんとかだめながらランニングをする。

「あの全力疾走癖はトレーニングでも収まらないのか・・・ゴールドシップも癖が強いが負けず劣らずか・・・あいつ良くあのチームをまとめ上げられるな」

沖野トレーナーは妙な関心をしながらツインターボを注視する。

「それにしてもあの蹄鉄を渡したのはなんでだ?あれはマックイーンの色度を上げるのに使ってたやつだろ?」

何度も踏まれて少しトラウマになっているゴールドシップが背中を気にしながら訊ねる。

「あの蹄鉄じゃあ最高速度は殆ど上がらないぞ」

「マジで?」

「ああ、あの時マックイーンの色度は主に筋力、車で説明すればトルクの強化だ。最高速度はマックイーン元々の素質があったから後はそこに加速力を追加してやったという訳だ」

「ん?じゃあなんでツインターボにも使わせてるんだ?スタミナ強化ならテイオーにやったトレーニングでいいんじゃないのか?」

トウカイテイオーが距離延長を行っていた時はひたすらスタミナ強化のトレーニングだけだった。

その事を疑問に感じたゴールドシップが沖野トレーナーに訊ねた。

「それはツインターボの体が小さい事が理由の一つだ。あいつもマックイーンと同じで加速力が低い。そのせいでスタートの加速でハナを取りに行く時にスタミナを多く消費してしまう。スタミナ強化も確かに必要だがそれだけではツインターボの距離延長は難しい。最大燃料だけではなく燃費改善も必要だ。だからあの蹄鉄で筋力強化をしつつスタミナトレーニングを重点的に行うという方針だ」

「はくトレーニング一つでもそんだけ複雑なんだな」

「お前はもう少し自分のやりたいトレーニング以外ちゃんとやれ。こっちはちゃんと一人一人のデータを元にトレーニングを考えてるんだぞ」

「嫌でゴルシ」

相変わらずのゴールドシップに沖野トレーナーはため息をついた。

「はひい〜これで2往復う〜」

坂路を終えたツインターボがへたり込む。

「よーしいったん休憩だ。水分補給はしっかりと」

「ありがと〜」

沖野トレーナーが差し出したスポーツ飲料をツインターボは笑顔で受け取ると勢いよく飲む。

「ツインターボ、腹は大丈夫か？」

「ん？別に何ともないけど？」

「それじゃあこれを食べておけ」

そうって沖野トレーナーはエナジーバーをツインターボに渡した。

「分かった〜」

程よく疲れていた事もありツインターボは喜んでエナジーバーを食べる。

「あ、師匠いいな〜」

「テイオーも食べるか？」

「いいの!？」

「食べすぎは厳禁だからな。テイオーはこの一個だけだぞ」

「わーい！」

トウカイテイオーもエナジーバーを受け取ると喜んで食べ始めた。

「このエナジーバーって結構おいしいね〜」

「ね〜」

「ウマ娘用に開発されたエナジーバーだな。人参味とリンゴバター味が売りらしい」

仲良くエナジーバーを食べる二人に沖野トレーナーも少しほっこりする。

「さて、食べて少し休憩したら次のメニューに移るからパツと食べ

てしつかり休んでおけよ」

「うん！分かった！」

ツインターボは元気よく返事をした。

「はう〜午前中だけでへロへロだよ〜」

「流石にあのトレーニングは私でもキツイわね」

鬼トレーニングを自分に課すダイワスカーレットでもツインターボのトレーニングはキツイと感じていた。

「それにしてもツインターボってそんな少しの飯で足りるのか？」

ウオツカがウマ娘の食事量にしては少ないツインターボの食事を見てそう訊ねた。

「ターボはいつもこれくらいだぞ？」

「ええっ!?そんなちよつとじゃ直ぐお腹すいちゃいますよ！私ぐらい食べないと！」

ツインターボの言葉にスピカーの大食漢（ただし甘味はマックイーンに譲る）のスペシャルウィークが驚きの声を上げる。

「スペちゃんはちよつと控えましょうね？最近またムツチリしてますよ？」

「あげません！」

「いやスペちゃん誰も取らないから！」

アメリカ遠征から帰ってきたサイレンススズカに注意されたスペシャルウィークだったが必死の形相で食事を死守しようとする様にトウカイテイオーが呆れる。

「ツインターボ、これくらいなら追加で食べられるか？」

自分の食事を持ってきた沖野トレーナーがツインターボに小ぶりのおにぎりを渡す。

「ん〜何とか食べられそうだけどなんで？」

「スタミナをつけるには今のツインターボの体格だとちよつと難しくてな。まず最初に少し太る必要がある」

「ええ!?ターボ太っちゃうの!?!」

「少しだけだ。それに最終的にはトレーニングで元に戻るから安心してくれ」

「うゝ分かつたゝ」

乙女的にちよつと納得しがたいがこれも有《font:ul40》馬
《font》記念の為とツインターボは頑張つて食事を食べ終えた。

「ひい！ひい！」

「まだ200メートル残っているぞー！」

「はひいゝー！」

ダートコースを懸命にツインターボが走っている。

トレセン学園のダートコースは1周2000メートルで作られて
いる。

1周毎に水分補給と小休憩を行うが既に4周走っているツイ
ンターボは重い蹄鉄とあまり得意ではないダートコースにへろへろ
だった。

ツインターボはなんとか残り200メートルを走り切るとその場
に倒れこんだ。

「よしダートはここまで。休憩だ。これ、食べれそうか？」

「はひ、はひ・・・なんとか・・・食べるぞ・・・」

「そうか、がんばれよ」

沖野トレーナーが差し出したエナジーバーとスポーツドリンクを
受け取りながらツインターボはいつもの笑顔を浮かべた。

その日の晩、沖野トレーナーの元にカノープストレーナーが訪ねて
きた。

「どうですか？ターボさんの様子は」

「同じトレーニングを続けると少し飽きっぽさが見えるが本人なりに
真剣に取り組んでいるよ。苦しくても投げだす事は無かった」

「・・・そうですか」

普段は中々同じトレーニングをやりたがらないツインターボが同
じトレーニングをやり続けている。

カノープストレーナーは真剣なのは嬉しい事だがツインターボが
気負いすぎていないか心配になる。

「大丈夫だ。メンタル面もしっかり見ている」

「すみません、顔に出てましたか・・・」

「考えることは皆同じさ。何せ俺たちはウマ娘が大好きでトレーナーやってるんだからな」

「・・・はい」

沖野トレーナーの言葉にカノープストレーナーはうなずいた。

2週間後・・・

「よし4往復終了だ〜!」

「よしよし、いい調子だぞツインターボ」

ツインターボは確実にスタミナが付き始めていた。

小柄だった体も最初に少し太らせたおかげで痩せずにながしりとした体になり始めている。

食事量もトレーニングだと頑張っただけで増やし、今では一般的なウマ娘より少し多いくらいに食べられるようになっていた。

「師匠今日もがんばってるね〜」

「おう!今のターボならテイオーにだって負けないぞ!」

「お!言ったな〜!」

トウカイテイオーとじゃれあう程に体力に余裕が出来てきたツインターボを見て沖野トレーナーは少なくとも2200であれば問題なく、2400でも辛うじて走り切れるであろうスタミナが付いたと予測する。

勿論まだまだ有《font:ul40》馬《font》記念を走り切れるかどうかは分からないが0だった数字が1にはなった。

それは大きな進歩である。

「テイオーさん、今日のトレーニングはまだ終わっていませんわよ」

「あ、ごめんねマックイーン今行くよ。それじゃあ師匠も頑張っただけ〜」

「おう!」

メジロマックイーンに促されてトウカイテイオーが手を振りながら走っていく。

「さ、休憩を取ったら次のメニューに移るぞ!」

「おう!エイエイムン!ってやつだな!」

「なんだそりゃ?」

「兎と亀という童話がありますでしょ？登場する兎は亀を意識し続けていた為に負け、亀はゴールのみを意識していたから勝った。天皇賞の前にお婆様にそう言われましたわ」

「なるほど、ボクが負けちゃったのもマックイーンを意識しすぎちゃったからなのかなあ？」

「さすがにそれだけではありませんわ。適正距離が有りますもの」

あの時は確かにメジロマックイーンの事ばかりを考えて勝てる事が当たり前と思っていた。

トウカイテイオーは自身の才能に天狗になっていたのだと改めて反省する。

勝って当たり前が続くと気持ちで負ける。

それはメジロマックイーンもトウカイテイオーも経験してきた苦い記憶である。

「あのシンボリドルフですら3回の負けがあるんだ。世の中に絶対って言うのは絶対にありえないんだ」

「全戦無敗のウマ娘は確かに何人か居ますがそれも様々な理由が絡んでの結果ですわ。確かに永遠に勝者として君臨するのは不可能ですわね」

ウマ娘として必ず訪れる引退。

それは敗北ではないが勝者としては終わりを迎える。

「そっか、そうだよな」

「お前たちは数あるウマ娘達の中でも最高の頂に手をかけたウマ娘達だ。それは誇って良い事だぞ」

沖野トレーナーはそう言ってスピカの面々を笑顔で見つめた。

「良いセリフですね。先輩」

「うっ！聞いていたのか・・・」

沖野トレーナーが振り返るとそこにはカノープストレーナーともう一人影があった。

「・・・マチタン！もう退院できたの!？」

その影がマチカネタンホイザだと気が付いたツインターボがガバツと起き上がった。

「ウマ娘だから何があるか分からないってお医者様が言うから症状が治まっても念の為に入院してただけど、しばらくは激しい運動さえしなければもう大丈夫だって」

そう言ってマチカネタンホイザが笑顔を見せた。

「うゝマゝヂダンゝゝ！」

「わっ！」

ツインターボがマチカネタンホイザに抱き着く。

「ターボちゃん重いつてば〜」

「おがえりマヂダンゝ！」

嬉しそうに、だけれども困った様に笑うマチカネタンホイザと泣き笑いの表情で叫ぶツインターボ。

そんな二人を見て全員が笑顔になった。

06話 皆の有マ記念、皆の気持ち

有《font:ul40》馬《font》記念に向けてウマ娘達やトレーナー達が忙しく動いている時、他にも忙しく動いている人達がいる。

それはウマ娘達の記事を書く記者達である。

少しでも売れるために記者達は必死に人気ウマ娘達に取材を試みる。

SIDE：ナリタブライアン

「ナリタブライアンさん！有《font:ul40》馬《font》記念に向けての心境をお聞かせください！」

「ナリタブライアンさん！ライバルとなるウマ娘は居るのでしようか！」

記者たちは注目頭であるナリタブライアンに取材しようと必死でお互いを押し合いながら取材する。

「有《font:ul40》馬《font》記念は当然以前から楽しみにしていたし当然全力で勝ちに行く。ライバルは女傑と名高いヒシアマゾンとメジロマックイーンに勝ったライスシャワーくらいだろうな。姉貴が出れないのが残念だがまた戦う機会もあるだろう。うだうだと語るのは趣味じゃない。トレーニングがあるからもういいか？」

「ああ！待ってください！」

ナリタブライアンの素っ気無い態度に記者達は何とか話を続けようと必死になる。

「お前たちの仕事はウマ娘のケツを追いかける事か？随分と楽な仕事だな」

元々の気質とマスコミに対してあまりいい印象の無いナリタブライアンはそう言って記者を睨みつけると記者が怯んだ隙に立ち去って行った。

「全く・・・マスコミは嫌いだ。そもそも貴様らの記事だと私にライバルなどいないと書いていたではないか。白々しい」

ナリタブライアンはそう言つてトレーニングの準備としてストレッチを開始する。

「・・・ライバルか」

ナリタブライアンにライバルは居ない。

それはナリタブライアン自身が自覚している事だ。

「姉貴が羨ましい。鎬を削るライバルに私も出会いたいものだ」

ヒシアマゾンは良く自分に突っかかってくる。

だがライバルと呼べる程ギリギリの闘いをした事は無い。

ライバルが居ない。

ナリタブライアンが強すぎるのか、それとも己に匹敵するだけのウマ娘が居ないだけなのか。

ナリタブライアンはそんな事を考えながらトレーニングを開始した。

S I D E：ヒシアマゾン

「ヒシアマゾンさん。有《font:ui40》馬《font》記念に向けて何か一言お願いできますか？」

「ナリタブライアンに勝つ！そうすれば優勝だろ？」

強気なヒシアマゾンは記者達にそう答える。

「他にもライスシャワーなど有力なウマ娘が出場していますが・・・」

「勝つのはアタシかナリタブライアンのどっちかだ。他のウマ娘には悪いがそれは譲らない」

「成程！それだけ自信があるという事ですね」

ヒシアマゾンの強きの発言に記者たちが声を上げる。

「ナリタブライアンのライバルはアタシだ！他の誰にも譲らない！」

記者たちにヒシアマゾンはそう宣言した。

「・・・ライバルか」

記者たちの取材が終わった後ヒシアマゾンは一人そう呟いた。

「本当にアタシはライバルなんだろうか」

人一倍負けん気が強く同期のナリタブライアンに突っかかっては行くがナリタブライアンとギリギリの闘いをした事はまだない。

自称ライバル、それを裏付けるかの様に週刊誌の記事にはナリタブ

ライアンの事は書かれていてもそのライバルについては書かれていない。

怪物に女傑では太刀打ちできないのか。

「そんなはずは無い！アタシはナリタブライアンを超えてやるんだ！」

一瞬の弱気を振り払ってヒシアマゾンに己に活を入れた。

SIDE：ナイスネイチャ

「ナイスネイチャさん、今年も有《font:ul40》馬《/font t》記念おめでとうございます」

「はくいありがとうね。ネイチャさん今年も頑張りますよ」

バー経営者の母を持つナイスネイチャは母親譲りの気軽いトークで記者たちに答える。

小さい頃から人と接する事、応対した相手に求められるキャラクターを演じる事になれているナイスネイチャは記者からの受けもいい。

ただしそれは同時に記者に悪意無き偏見を持たれる要因にもなっていた。

「今年はその怪物と呼ばれた三冠ウマ娘のナリタブライアンさんに女傑ヒシアマゾンさん、漆黒のステイヤーライスシャワーさんと強力なライバルが居ますが入賞できそうでしょうか？」

今までGIに勝った事がない。

確かにそれは事実である。

だが最初から入賞ありきで優勝と問われないのは何故だろうか。

「あつははく、今年強いライバルが多いですからね。ネイチャさん4年連続の入賞危うし！なんてね。全力で頑張りますよ」

そんな気持ちは全く見せないようにしながらナイスネイチャは取材に答えていった。

「・・・優勝か」

いつからだろうか、善戦マンとしての自分を否定しなくなったのは。

いつからだろうか、優勝はと尋ねられる事がなくなったのは。

いつからだろうか、張り付けたような笑顔で喋るようになったのは。

もちろん自分自身だって勝てない事への口惜しさはある。トウカイテイオーが怪我で出られなかった菊花賞。

あの時4着で涙していた自分が今の自分を見たらなんて思うだろうか。

あと一歩が永遠に遠い。

「私だって・・・勝ちたいんだ・・・」

ナイスネイチャはそう呟くとトレーニングを開始した。

SIDE：ライスシャワー

「ライスシャワーさん、有font:ui40馬font記
念はやはりナリタブライアンさんをマークするつもりでしょうか？」
「えっと・・・ライスはそれしかできないから、ブライアンさんはやっぱり強い三冠ウマ娘ですから。でも皆強いウマ娘ばかりだから。ライスも負けないように頑張ります」

おどおどしながらもライスシャワーは記者たちに答える。

以前より悪意のある声は少なくなつた。

応援してくれる人も増えてきた。

それでもやはり以前の光景が頭を過る。

『なんでお前が勝つんだよ!』

「あの・・・ライスまだトレーニングがあるから・・・ライス、もう行くね」

「ああ!もう少しだけ!」

何かから逃げるようにライスシャワーは記者達から離れていった。

「・・・やっぱりブライアンさんに勝ったらまたブーイングされちゃうのかな?ライスは勝つてもやっぱり誰も喜ばないのかな?」

菊花賞の時も、天皇賞春の時もライスシャワーは祝福されなかった。

それは未だに古傷としてライスシャワーの心に残っている。

「・・・負けても怒られて・・・勝つても怒られて・・・ライス、走る意味あるのかな?ブルボンさん、ライス、分からないよ・・・」

もしそこにミホノブルボンが居たらどんな風に声をかけてくれるのか。

ライスシャワーは陰鬱とした気分のままトレーニングを始めた。

SIDE：ツインターボ

「すみませんがツインターボへの直接の取材は断らせていただきます。彼女は今懸命にトレーニングしています。有《font：ul40》馬《font》記念までの残り僅かの時間を無駄にする訳にはいきませんから」

沖野トレーナーの声に記者達はムツとした表情をする者、残念そうな表情をする者など様々だった。

「では質問しますがナリタブライアンさんに勝てる秘策でもあるのですか？」

「そんなモノがあれば皆それをやっていますよ。無いからギリギリまでトレーニングをしています」

「本来出場するはずだったマチカネタンホイザが出られなくなった代わりとお聞きしましたが」

「マチカネタンホイザの事は不幸な事故です。だからこそ彼女の為に走るとツインターボは頑張っています」

「ははっ！望んでも出られないウマ娘が多いのにラッキーなウマ娘だな！」

悪意ある声に沖野トレーナーの表情がゆがんだ。

周りに居る記者は不快そうな顔する者もいるが大半は同じような表情だ。

「師匠はそんな事全然思っていない！」

「テイオー！お前いつから！」

いつの間にか来ていたトウカイテイオーが記者達を睨みつけている。

小柄で可愛らしい顔立ちのトウカイテイオーだがその迫力は歴戦の覇者だ。

あまりの覇気に記者たちは気圧される。

「走りたいのに走れない辛さが君たちに判る!?誰かの思いを背負って

走る足の重さが判る!?!判るならそんな無責任な事言えないよね!」

どちらも経験したトウカイテイオーだからこそ言える言葉に記者達は何も言えなくなった。

「私は月間トウインクルの乙名史と言います。では最後に一つだけお願いします。ツインターボさんの有《font:ul40》馬《font:馬》記念への思いとは何ですか?」

「それはもちろんイッチバンでゴールして走れなかったマチカネタンホイザと一緒にライブだね」

「実現する事を祈っています」

「うん!師匠に伝えておくね」

トウカイテイオーはそう言っていていつもの笑顔を見せた。

「あー・・・以上で質問を終了とさせていただきます。ほらテイオー、行くぞ」

沖野トレーナーは呆気にとられている記者たちをそのままに取材を打ち切るとトウカイテイオーを連れてツインターボの元へと向かった。

幾人かの記者がその姿に頭を下げていた。

「テイオー、お前なあ」

「分かっているよお勝手なことしたってのは!でもあんな事言われて放っておけなかったんだもん!」

「まったく、そう言うのは大人の仕事だろうに・・・でもまあ、さすがテイオーだな」

「えっへへ」

沖野トレーナーに褒められてトウカイテイオーは無邪気に笑った。

「おいトレーナーテイオー遅いぞ〜!」

「すまん、今行く!」

先にトレーニングを始めていたツインターボが二人を大声で呼ぶ。

「師匠〜!」

「どうしたんだテイオー?」

「有マ記念、絶対勝とうね!」

「おう!ターボ負けないぞ!」

ツインターボはトウカイテイオーに笑顔で答えた。
そして、有《font:ul40》馬《font》記念がやっ
てくる……

07話 有マ記念

有《font:ul40》馬《font》記念、一年の競バを締めくくる最高のレース。

実力と人気を兼ね備えたウマ娘しか走る事が出来ないレース。

そんなレースを見ようと中山競《font:ul40》馬《font》場には多くの観客が押し寄せている。

「・・・大丈夫・・・ターボはやれる・・・」

ツインターボは自身に与えられた控室で勝負服に着替えながらそう呟く。

いつも元気で強気なツインターボだが今回は様々なプレッシャーと戦っていた。

「ターボちゃん」

「マチタン」

控室にやってきたマチカネタンホイザがツインターボに声をかけた。

「はい、私の帽子だよ」

「ありがとうマチタン」

「私こそありがとう、私と一緒に走ってくれて」

マチカネタンホイザはそう言ってギユツとツインターボをハグする。

「見ててねマチタン。ターボ一番でゴールするから」

「うん！」

交わす言葉は少なくともしっかりとその思いは伝わった。

ツインターボはさらに決意を固めていつもの笑顔をマチカネタンホイザに見せる。

「私が実況ですとなぜかがっかりされている。最近そんな気がしています実況の茂木です。解説は細江さんですよろしくお願いします」

「そんな事は無いと思いますよ。よろしくお願いします」

独特な口調で喋る実況者と女性解説者のトークが競バ場に響き渡る。

「暮れの中山競《font:ul40》馬《font》場、天候は晴れ、良バ場となっておりませんが冷え込みは厳しいです。ですが観客の熱気は最高潮、レースの始まりを今か今かと待っております」

「やはり有《font:ul40》馬《font》記念は一年の閉めのレースですから皆さんの熱気が違いますね」

「さあ有《font:ul40》馬《font》記念を走るウマ娘達の登場です」

実況の声を受けてパドックにウマ娘達が現れる。

「1枠1番、ダウジングサーバル、前走の鳴尾記念では三着と好走をしております」

「今回のメンバーの中では少し厳しい勝負になるかもしれませんね」

「2枠2番、マチカネアレクサ、アルゼンチン共同杯では見事一着、有《font:ul40》馬《font》記念でも一着を取れるでしょうか」

「上がり調子が続いているみたいですから期待は持てますね」

「3枠3番はマチカネタンホイザでしたが尋麻疹を発症し、残念ながらドクターストップにより出走は取りやめとなりました」

「本人も非常に悔しい思いをしているでしょうね」

「3枠4番、カシマミブリン、ダービー三着、菊花賞二着とナリタブライアンへの反逆はなるか期待です」

「悔しい思いをしていますから人一倍気合が入っているでしょうね」

「4枠5番、ツインターボ、今日もハナは譲らない大逃げ：．んん？

あの帽子はどこかで見たような？」

「マチカネタンホイザの帽子に見えますが．．．」

「ああ、資料によりますと同チームのマチカネタンホイザの代わりに帽子を付けて走ると本人が言っていたそうです」

「思いを受け継いで走る。是非とも頑張つて欲しいですね」

ツインターボはいつもの落ち着きのない行動はせず帽子を手に取ると胸に当ててマチカネタンホイザの方を見る。

それをマチカネタンホイザはしっかりと受け止める。

「4枠6番、スウィフトンダッシュ、何やらツインターボを睨んでいま

す」

「去年の七夕賞でやられていますし苦手意識でもあるのではないでしょうか」

「5枠7番、ハイサイシーサー、天皇賞秋を取った二番人気のウマ娘です」

「ナリタブライアンのお姉さんであるビワハヤヒデには何度も負けていますから妹であるナリタブライアンにも負けたくないと言っていましたね」

「5枠8番、ヒシアマゾン、女傑と呼ばれるに相応しい成績を残してきております」

「ナリタブライアンの事を特に強く意識しているみたいですから打倒ナリタブライアンの筆頭かもしれませんね」

「6枠9番、有《font:ul40》馬《font》記念の常連ナイスネイチャです。今年こそ一着を取れるでしょうか」

「惜しい所まで何度もいっていますからね。その思いはとても強いでしょうね」

「6枠10番、ライスシャワー、今年も有マにやってきました漆黒のステイヤー。ナリタブライアンを捉えられるでしょうか」

「最近少し調子が思わしくないとの事ですが少し心配ですね」

「7枠11番、怪物三冠ウマ娘、ナリタブライアンです。果たしてこの怪物を倒す者は現れるのでしょうか」

「非常に力強い走りをするウマ娘ですからね。まさに名ウマ娘中の名ウマ娘ですね」

「7枠12番、サクラチトセアメ、長距離の挑戦は今回が初ですがどうでしょう?」

「あまり長い距離は得意ではないみたいですね。厳しいかもしれません」

「8枠13番、チュウハイキャロル、櫛の冠を手にしております」

「少ないレースでここまで来ていますから落ち着いて勝負できると良いですね」

「8枠14番、ムツシユシエイク、長距離が得意なウマ娘です」

「ちよつと調子が悪いように見えますが大丈夫でしょうか」

「以上13人のウマ娘達が走ります」

ウマ娘達の紹介を終えて多くの歓声上がる。

「さあウマ娘達がターフへと入ってきます。各自ウォームアップを開始します」

「この寒さですからしっかりと体を温めておかないといけませんね」

「ゲートの準備が整い今スターターが台の上に立ちます」

そしてファンファーレが演奏される。

手拍子と観客の声で競バ場を包み込む。

「さあ各ウマ娘が続々とゲートに入っていきます。選び抜かれた13人、有《font:ul40》馬《font》記念を取るのは誰か。最後のウマ娘が収まりました。・・・スタートしました！ナリタブライアンが好スタートを見せました！ですが内からやはり予想通りにツインターボが飛ばして行きます！」

全力でツインターボがナリタブライアンを抜いて先頭に立つ。

「ツインターボ早くもリードを広げて行きます。二番手集団にはハイサイシーサーなどが居ます。先頭との差は早くも7、8バ身と言ったところ。ナリタブライアンは・・・二番手集団の後方につけておりませんがライスシャワーなどがガツチリとマークしております。集団を嫌つてかナリタブライアン外へ出ます。一度目のスタンド前ですがツインターボさらにリードを広げてははや50メートル以上開いているでしょうか。ツインターボが大きく逃げます。外に出たナリタブライアン二番手集団に並びかけます。さらにその外ライスシャワーとサクラチトセアメがマークしております。ナイスネイチャも外へ出ました」

観客の歓声を受けてウマ娘達が一度目の正面を過ぎてカーブへ入っていく。

「有《font:ul40》馬《font》記念の距離は2500メートル、長距離としては短いがそれでもスタミナを問われる距離だ」
「どうした急に」

ウマ娘ファンで競《font:ul40》馬《font》場の常

連のメガネの観客が友人に話しかける。

「早すぎるんだ」

「ツインターボが飛ばすのはいつもの事だろう？」

「確かにツインターボのペースは56秒に近い尋常ではないペースだが、他のウマ娘達ですら58秒切りそうだぞ」

「なんでそんなに」

「ナリタブライアンが好スタート過ぎたんだ」

「どういう事だ？」

「おそらくナリタブライアンは好スタートを切る事で他のウマ娘達にプレッシャーを与えようとしたんだろう。前寄りではあるが差しが得意のナリタブライアンが前を走ろうとしているとトリックを仕掛けたんだ」

「でもそれが何でハイペースに？」

「ナリタブライアンの予想外だったのがツインターボだ。逃げウマ娘は複数いても大逃げ、しかも後先考えない破滅逃げとも呼べるウマ娘はそうそう居ない」

「そうか！全員がナリタブライアンを意識し過ぎたあまりに！」

「ああ、ナリタブライアンの好スタートをツインターボがあまりの速さでハナを取ってしまったから二番手集団がペースメイクをミスったんだ。自分達が遅すぎると勘違いした。さらにナリタブライアン自身は下がろうとしたが」

「徹底マークのライスシャワーやサクラチトセアメ、全体のペースが速くなった事で引つ張られた後方集団に押し上げられたって訳か」

「ああ、さらにナリタブライアンは集団を嫌う質だ。外へ逃げたが下がろうにもマークがついている」

「そして二番手集団は外に出たナリタブライアンを意識してさらに飛ばす……」

「ある種の悪循環が出来上がってしまったな……」

二人がそう結論付けた。

「すっごいね〜」

「わ！君は……？」

「私来年トレセン学園に入学するから学校の下見しながらレース見に来たの！」

二人に話しかけたのは栗毛の幼いウマ娘だった。

「あの青いお姉ちゃん早いね〜」

「だが最初が早いだけでは勝てない。それがレースだよ」

「え〜ずっと一番って格好いいのにな〜」

「ならあのお姉ちゃんが勝てるように応援してあげよう」

「うん！」

素直な幼ウマ娘に二人はホッコリした。

(チツ！自分の作戦が裏目に出るとは)

ナリタブライアンは予定外にハイペースになったレースに悪戦していた。

むろんその程度で勝利できなくなる程甘いトレーニングをしてきた訳ではないが長距離レースでのハイペースによる消耗戦はまだ経験した事が無かった。

菊花賞でも先頭は逃げだったがそれでも距離を考えていた為に早いペースとは言えなかつたからだ。

思ったよりスタミナの消耗が激しい事にナリタブライアンは少し焦り始めている自分を自覚していた。

(だが大丈夫だ。落ち着け私。このペースのままでも十分先頭に立てる)

この時ナリタブライアンは意図的にツインターボの事を意識から外していた。

そもそもツインターボの勝利は去年のオールカマー以来一度もない。

その全てで大逃げをして玉砕している。

だから最初から居ないものとして計算していた。

だから今の先頭はツインターボではなく自分が付けている二番手集団としている。

(後ろにいるライスシャワーとヒシアマゾンが厄介ではあるが脅威ではないな)

不気味ではあるがどこか覇気の欠けるライスシャワー。
強く自分を意識しているが恐怖を感じるほどではないヒシアマゾ
ン。

もちろん油断して勝てる相手ではないが勝てるかどうか分からない相手ではない。

(私は私のレースをするだけだ)

だがナリタブライアンはどこか漠然と感じる不安を拭い去れぬまま向こう正面の直線へと入っていった。

(ブライアンさんに付いてく、付いてく・・・)

ライスシャワーはナリタブライアンに常にプレッシャーを与えられ、スリップストリームを使える位置を取り続けている。

(でもこのペース・・・ブライアンさんも辛いはず。やっぱりターボさんを警戒から外せない)

ライスシャワーは以前ツインターボとの対戦で苦い思い出がある。

息を入れない大逃げ、それがツインターボの走りだと思い込んでいたが為に仕掛け遅れたオールカマー。

(今日の走りは確かに以前みたいな大逃げ・・・だからこそ仕掛けのタイムニングはターボさんで決まる・・・)

ツインターボがどの位置で力尽きるのか、あるいはこっそりと息を入れていのか。

(強いのはブライアンさん・・・でも怖いのはターボさん・・・)

既に一人直線走るツインターボを必ず視界に入れながらライスシャワーはナリタブライアンを追走する。

(ターボ・・・気負い過ぎていて・・・訳じやあないみたいね)

ナイスネイチャは遠くを走るツインターボを見る。

(トレーニングでどれ程スタミナを上げれたのやら・・・ターボの疲れる位置は知っている・・・そこを過ぎたら仕掛ける！)

チームメイトとして練習を重ねてきているナイスネイチャはツインターボが力尽きる距離をしっかりと把握している。

もちろん態々トレーナーが先輩を頼って別のトレーニングをさせた事も把握している。

だがそもそも長距離レースの適性が低いターボがいくらトレーニングをしても限界がある。

だからこそナイスネイチャは仕掛けるタイミングを変えない事に決めた。

それで逃げ切られたらターボの勝ち、差し切れたら自分の勝ちだ。

(後は勝利するだけ・・・！そう！優勝するんだ！)

自分だってマチカネタンホイザのチームメイトだ。

自分だって勝ちたい。

様々な思いを抱えたままナイスネイチャはその時を待つ。

(アタシとした事が、ブライアンを意識し過ぎた)

ヒシアマゾン は確実に減っていく己のスタミナを自覚する。

元々前目で走るナリタブライアンがまさか先頭を走るとかと思わせる程の好スタートを切った。

実際に先頭を走ったのはツインターボだったがそれでもヒシアマゾンを始め他のウマ娘達は思わず序盤から足を使う事になった。

元々末脚勝負が得意なヒシアマゾンは早いペースのレースに焦る。

(だがブライアンも先頭集団につけている。あいつを無視して抑える訳にもいかない)

ナリタブライアンだって末脚に定評があるのだ。

スタミナを残しても追いつけなければ意味がない。

(とにかくこのペースを維持しつつスタミナを何とか残すんだ)
ヒシアマゾンは大きく息を入れた。

(ターボは大丈夫！最後まで走れる！)

ツインターボは後ろを振り向く事すらなくひたすら走り続ける。

トレーニングの効果は絶大で好スタートを切ったナリタブライアンを簡単にかわして先頭に出ることができた。

【無理だよお・・・勝てないよお・・・】

(大丈夫！まだ全然疲れてない！)

ツインターボは自身の弱い心を叱咤激励する。

ツインターボは自分の中に常に弱気で臆病の自分がいる事を自覚している。

その自分が表に出てくる事は無いがレースでは常に弱音をはいてツインターボを諦めようとさせる。

あのオールカマーの時でさえ、弱気の自分は変わらなかった。

トウカイテイオーに向けた言葉は弱気の自分に向けた言葉でもあった。

【どうせターボなんて誰も見てないよお・・・】

(少なくともマチタンとイクノとトレイナーは見てくれてる！テイオー達だって応援するって言ってくれてた！)

控室には来られなかったがテイオーからのメールで競《font:ul40》馬《font:ul40》場まで来てくれていることは確認済みだ。

【でもお・・・】

(大丈夫！ターボならやれる！まだ足は軽い！肺も心臓も痛くない！)

スタミナは確実に減ってきている。

どこまで持つかは分からない。

それでもツインターボは走る。

自分だけでは無い、マチカネタンホイザと一緒に。

「先頭は変わらずツインターボ、ターボエンジンは好調の様です。後続との差は果たしてどれほど開いているのでしょうか？このハイペースで走り切れるのか。この走りは無謀かそれとも挑戦か。場内の盛り上がりは鰻登りです。二番手集団先頭はハイサイシーサー、外目後方に怪物ナリタブライアンが居ます。その後ろに徹底マークのステイヤー、ライスシャワーがおります。女傑ヒシアマゾンもナリタブライアンの動きを警戒している所でしょうか。ナイスネイチャは中団好位置で控えております。後方のウマ娘達はまだ動かないか」

「中山競《font:ul40》馬《font:ul40》場は仕掛け所が難しいですからね。特にゴール直前の坂を意識せずにはいられませんね」

「さあ！早くもツインターボが第三コーナーへ入ります！ライスシャワー動いた！ナリタブライアンを抜いて前に出ます！」

レースが終盤にかかり動き始めた。

(何だど!?)

ナリタブライアンはライスシャワーが自分を抜き始めた事に驚いた。

(徹底マークが売りのライスシャワーがなぜこのタイミングで!?掛かったのか!?)

ナリタブライアンは横目でライスシャワーを見る。

(違う!私を見ていない!)

ライスシャワーがナリタブライアンを意識して仕掛けたのなら自分を見ているはずだ。

(・・・待て!ツインターボは今どこにいる!?)

この時初めてナリタブライアンはツインターボを意識した。

(・・・ありえない!?)

この時ナリタブライアンはすでに第三コーナーへと入っているツインターボを見つけた。

(あんなハイペースで走ってまだ落ちてきていないだと!?)

とつくにツインターボとの距離が詰まり始めている。

ナリタブライアンはそう思っていた。

(今から仕掛けるしか!間に合うのか!?それとも持つのか!?)

ナリタブライアンは迷いながらもライスシャワーを追って前に出始めた。

(やっぱり怖いのはターボさんだった!)

ライスシャワーはツインターボが第三コーナーに入ってもあまり減速していない様子を見て仕掛ける事に決めた。

(ターボさんもライスと同じで限界までトレーニングしてきたんだ!才能を努力で補ってきたんだ!)

かつての自分を、そしてライバルのミホノブルボンを思わせるその姿。

(負けない!誰かのヒーローで有り続ける為に!)

まだ迷いは完全に無くなった訳ではない。

それでも自分に出きる事はこれしかない!とライスシャワーはツインターボを追いかけた。

(・・・ここね!ターボが疲れるのはカーブの途中!ここで仕掛ければ

抜けるはず！)

ナイスネイチャは決めていたタイミングで動き始めた。早いペースであった為に予想よりスタミナは消耗したがそれでも十分抜けるとナイスネイチャは前に出始める。

周りもライスシャワーやナリタブライアンの動きに呼応して前に出ようと動き始めていたが一足先に動いたナイスネイチャには敵わない。

(負けない！三度目の正直はできなかつたけど！四度目で！何度目だつて！私を信じてくれる人の為に！)

決意を秘めてナイスネイチャは前に出た。

(ナリタブライアンが動いた!?!しまった出遅れたか!)

予定より早くナリタブライアンが動いた為にヒシアマゾンは焦つた。

第三コーナーの直前まで動かないと思っていたナリタブライアンが早くも上がり始めた事に驚きながらも離される訳にはいかないとヒシアマゾンはペースを上げた。

(くそ！なんだつてこんなに早く・・・!?)

ヒシアマゾンはまさかナリタブライアンが掛かったのかと一瞬思ったがそうでは無い事に気が付く。

(な!?!ツインターボがもう第三コーナーに居るだど!?)

まだ離され続けているとは思っていなかった。

(ナリタブライアンも予想外だつたつて訳か!)

ヒシアマゾンは自身もツインターボを意識していなかった事を後悔したが今更どうにかなるものではない。

(とにかく追い付くんだ！反省はそのあとだ！)

ヒシアマゾンは重くなりつつある足を持ち上げた。

【もう無理だよお・・・】

(まだ大丈夫!)

【後ろから来てるよお・・・】

(まだ歩いてない!)

【もう限界だよお・・・】

(いつもより残ってる！)

弱気の声が大きくなってきている。

ツインターボはその声に必死に反発しながら走り続ける。

いつもならもうこの声に負けていたかもしれない。

第三コーナーももうすぐ終わる。

【もう十分走ったよお・・・】

(まだ走り終わってない!!)

いつもならゴール直前かゴールを過ぎている距離。

だがまだ直線にすら入れていない。

(まだまだああああ!!)

起き上がりそうになる体を懸命に前に倒し、ツインターボは第四コーナーへと突入した。

「さあツインターボが最終コーナーに入ります！後続ウマ娘達が懸命に追い上げる！距離がググつと縮まりますが果たして間に合うのか!?それともセーフティリードになるのか!?集団が縮まりここで二番手集団の先頭がライスシャワーに変わります！その後ろを外からナリタブライアン、その後ろ内からヒシアマゾン外からナイスネイチャが追い上げます！」

「このハイペースで皆足が残っているのでしようか!?!」

「最終コーナーを回ってまだツインターボが先頭だ！後続の娘達は苦しいか!しかしこのウマ娘!怪物三冠ウマ娘ナリタブライアンが大外から一気に捲り上げる!場内はどよめきと歓声に包まれている!」

観客の熱気は最高潮を迎えた。

(ハハッ!これだ!私が追い求めていたものは!謝罪するツインターボ!だが勝ち譲らない!)

ナリタブライアンはどうしようもなく興奮する自分を自覚した。

負けた事が無いわけではない。

だがその負けに対して妙に冷めた自分がいた。

(調子が悪かった。集中できていなかった。自分の走りができなかった。今日はそんな言い訳はできそうに無い!)

勝てるかどうかがぎりぎりの闘い。

死力を尽くした戦いにナリタブライアンは熱く燃えていた。

(やつぱりブライアンさんは強い！先に仕掛けたのにもう追い抜かれた！)

ライスシャワーは懸命に走るが足が言うことを聞かなくなりつつあった。

スタミナはまだ十分残っている。

だが速度を上げられるだけのパワーが残っていない。

(負けたくない！ヒーローである為に！)

どこか燻っていた心に火が付いた。

ライスシャワーは懸命に前を追い続けた。

(やるじゃんターボ！ここまで粘るなんて！)

いつもならとつくに失速している距離を過ぎてもまだ先頭にたつツインターボを見てナイスネイチャは称賛を送った。

(でも私だって！私だってえ！)

きつと私は勝てないだろう。

ナイスネイチャはそう思ってしまったがそれでも足を止める事なく全てを出し切ろうと走り続けた。

それは自分の心へのせめてもの反抗心であった。

(まずい！行けるのか！アタシは！)

ヒシアマゾン自分が完全にミスを犯した事に気が付いていた。

残すべき足はもう残されていない。

(ちくしょう！ナリタブライアンのライバルは！アタシなのに！)

まだ先頭を、フォームがボロボロになりながらも走るツインターボを見てヒシアマゾンは悔し涙を堪えながら走り続けた。

【十分がんばったよお！】

(まだ終わってない！)

残り200メートルが永遠に感じる。

【このままだと転んじやうよお！】

(ゴールしてから転ぶ！)

体を前に倒す事でウマ娘は最高速度を出せるがそれはバランスを保つのに非常に体力を使う姿勢だ。

今のツインターボは起き上がりそうになる姿勢を必死に堪えているがそれでも頭がずいぶんと上がってきましてしまっている。

【マチタンだつてきつと褒めてくれるよお！】

(それは・・・)

ツインターボの一瞬心が揺らいだ。

「師匠く！あと少しだよく！」

(!?)

「もう少しですターボさん！」

「行きなさいターボ！貴女の為に！」

「ターボ！最後まで気張れ！」

「ターボちゃんならあの景色を知っているはずです！」

「お行きなさいターボさん！」

「うおつしやー！行けるぜー！」

「頑張れー！ツインターボー！」

(テイオー！スピカの皆！沖野トレーナー！)

「ターボちゃん！」

「ターボ！」

「ターボさん！」

(マチタン！イクノ！トレーナー！)

「あと少しだぞー！」

「ツインターボ行けー！」

(いつも競《font:ui40》馬《font》場にいる人たち！)

「がんばれく！青い髪のお姉ちゃくん！」

(あんな小さな子まで！聞いている！もう一人のターボ！)

【でもお・・・でもお・・・！】

(お願いだよもう一人のターボ！力を貸して！ターボ一人じゃ勝てない！二人のターボが揃わないと勝てないんだよお！)

【・・・分かった】

(ありがとお！)

初めて、ツインターボの心が一つになった。

「あれは!?」

カノープストレーナーはターボが淡い光に包まれている光景を目にした。

そして以前沖野トレーナーから聞いた話を思い出した。

『ゾーン・・・ですか?』

『ああ、ウマ娘達がレースで走っている時にゾーンと呼ばれる現象がある。そいつはウマ娘ごとに条件が異なるがそのゾーン状態に入るといつもより速度が出せたりスタミナを温存出来たりするらしい』

『そんなものがあるのですか』

『俺も詳しい事は分かつちやいないがな。ウチのメンバーだとマックインやスカーレット、ゴールドシップはゾーンに入りやすく、ウオツカが一番入りにくいみたいだな』

『それは羨ましいですね』

『入ったからといって必ず勝てるものではないがな。それに条件も良く分からん事が多い。そんなものがある、位に覚えておけばいいさ』
ラストでスタミナが尽きた時、

『負けられないんだあ!!』

後続が迫ると最後の気力で先頭を維持しやすくなる。

『今日だけはあああああ!!』

ツインターボは起き上がってしまった体を無理やり前に倒すと必死に速度を維持した。

『残り200を切っているがナリタブライアン苦しいか!? ツインターボがまだ先頭! 懸命に粘る! ナリタブライアン苦しいながらも追いつける! 内ツインターボ! 外ナリタブライアン! ツインターボ! ナリタブライアン! まさかまさか! まさかのツインターボ逃げ切ったゴールイン! これが逃げるという事だ! なんとなんとツインターボが有《font:ui40》馬《font》記念を逃げ切りました! 友の思いを背中に乗せて! 見事に走り切りましたとお!? ツインターボゴール後に転倒! 大丈夫でしょうか!』

『速度は落ちていましたから怪我は大丈夫だとは思いますが・・・』

(あれ・・・? ターボどうなったんだっけ・・・?)

最後の最後まで出し尽くしてしまったツインターボは霞む視界で

微かに見える地面をただ見つめる。

「ターボ！しつかりしなさい！」

（あれ・・・ネイチャ・・・？）

ナイスネイチャが体制を変えてくれたようで青空と自分も息を切らせながら心配そうに見つめるナイスネイチャが視界に入る。

「ターボちゃん！」

「ターボ！」

「ターボさん！」

「あれえ・・・？皆あ・・・？」

「良かった気が付いたのね」

ツインターボはようやくはつきりしてきた意識と視界でチームの皆を見つめる。

「ああ！レース！ターボ勝ったの!?!それとも・・・！」

「ほら！ターボちゃん」

「ぐえー！マチタン痛いよ・・・ッ!?!」

マチカネタンホイザに首だけを無理やり方向転換されて悲鳴を上げるツインターボだが掲示板を見て何も言えなくなった。

そこにははつきりと一番上に自分の番号が示されている。

距離差はハナ。

ランプは確定。

「ああ・・・うああ・・・」

自覚して数秒後、込み上げてきた涙が頬を流れ落ち、続いて声にならない声が湧き出る。

「マチダン！」

「おめでとう！そしてありがとうターボちゃん！」

マチカネタンホイザに後ろから抱きしめられるツインターボ。

二人の目からは大粒の涙が次々と零れ落ちていた。

（負けた・・・全てを出し切って・・・）

ナリタブライアンは掲示板を見つめ、次に天を仰いだ。

（ああ・・・姉貴もこんな気分だったのだろうか・・・）

負けたのにどこか清々しい。

もちろん悔しくもある。

だがこれが自分の望んでいたものだだと初めて実感した。
ナリタブライアンはきつく握りしめていたコブシをゆっくりと解くとツインターボの方へと歩き出した。

「ツインターボ」

「ぶええ？」

涙と鼻水だらけのツインターボは名前を呼ばれて振り向いた。

「まずは謝罪を、お前を悔っていた。次に賞賛を、優勝おめでとう。そして最後に・・・次があれば負けない！」

そう言ってナリタブライアンは右手を差し出した。

「ぐずー！ありがとう！次もターボが逃げてやる！」

鼻をすするとツインターボはナリタブライアンと握手をした。

(すごい・・・ターボさん・・・)

ライスシャワーは何とか3着に入りこめた事を喜びつつもツインターボの走りを思い出していた。

(自分の得意な距離じゃないのに・・・ブライアンさんに勝っちゃうなんて・・・！きつと皆のヒーローになれるね！)

その称賛を自分も受けたいとライスシャワーの心ははつきりと燃えていた。

(ライスも次の天皇賞春！がんばるぞ！おー！)

次の目標に向けてライスシャワーは決意を固めた。

(やったねターボ・・・ネイチャさんは5着だったけど・・・)

ナリタブライアンと握手するツインターボを少し離れた位置でナイスネイチャは見つめていた。

(やっぱりネイチャさんには入賞がお似合いですなあ)

いつもの自虐に戻ってしまったナイスネイチャにトレーナーが近寄る。

「大丈夫ですナイスネイチャさん。きつと！必ず勝たせて見せますからー！」

「うええ！トレーナー近いってば！」

「私が必ず！必ず果たして見せますから！」

「分かった！分かったてばあ！」

その言葉が現実になるのはもう少し先の事である。

(負けた・・・4着・・・ブライアンと競り合ってすら居ない・・・)

ヒシアマゾンはまだただ悔し涙を流し続けた。

(こんなんじゃ！本当のブライアンのライバルなんかになれない！見てろブライアン！次こそは必ず勝ってやるからな！)

ヒシアマゾンは涙を拭うと立ち去った。

「本日の優勝トロフィー授与ですがツインターボさんの強い要望を受けたURAがそれを了承したのでマチカネタンホイザさんと一緒にいきます。もちろんウイニングライブもツインターボさんとマチカネタンホイザさんが一緒にセンターで踊りますのでこの特別なライブを皆さん是非お愉しみください」

こうして二人は満面の笑みでトロフィーを受けると二人で高く掲げた。

そしてその後に行われたライブを二人は最高の笑顔で歌いきった。

カノープスメンバー、スピカメンバー、ファンの人たち、そしてあの幼いウマ娘もライブを見ていた。

その後、チームカノープスのチームルームにはトロフィーと一緒にその時の二人の写真が飾られる事になった。

番外編01 名馬ツインターボ（馬世界）

20世紀名馬100選

ランキング：81

ツインターボ 1988年4月13日生 鹿毛

父：ライリツジレーサー

母：レーシングジーン

母父：サンシー

通算成績

22戦6勝 2着2回

主な勝ち鞍

H3 ラジオたんぱ賞

H5 七夕賞

産経賞オールカマー

H6 有馬記念

平成の世に現れた超快速の飛ばし屋ツインターボは逃げの魅力を知らしめたまさにターフのエンターテイナー。

平成3年 第40回ラジオたんぱ賞（GⅢ）福島／良 芝1800

M

「外の方からカミノスオードが上がってまいりました。田中勝春であります。内の方で白い帽子がヒデノグラスちよつと下がっております。さあ400のハロン棒を切りました。前がちよつと四頭ほどが抜け出しております。4コーナーカーブを曲がるところであります。さあツインターボがまだ逃げております。ツインターボが逃げています。外の方からカミノスオードがやって来たぞ田中勝春カッチーです！後200メートル！ストロングカイザーは4番手！その前におりますのはキリスパート！外の方からはフライトピアもやってきたまだ5番手です！さあ後100メートル！懸命に粘った懸命に粘ったツインターボ！二番手カミノスオード！ツインターボが粘ったか！ツインターボが粘った！ツインターボが逃げ切りました1800メートルであります！」

1着ツインターボ（大崎） 2着カミノスオード（田中勝） 3着フライトピア（蛭名正）

平成3年 第45回セントライト記念（GⅡ）中山／良 芝2200M

「ラチ一杯にツインターボ逃げる！レオダーバン追う！レオダーバン三番手！ツインターボ逃げる！ストロングカイザー！そしてレオダーバン！ツインターボ逃げる！ツインターボ逃げる！ツインターボ！レオダーバン！レオダーバン追いかけてきたが届きません！レオダーバンの壁！ゴール前伸びてきました！ツインターボ！ストロングカイザー二頭を捉える事はできませんでした」

1着ストロングカイザー（増沢） 2着ツインターボ（大崎） 3着レオダーバン（岡部）

4歳時には菊花賞を目指す同期の馬達を後目に、平坦コースの福島を好み、菊花賞の権利を取ってもやはり福島へ。

平成3年 第27回福島記念（GⅢ）福島／良 芝2000M

「馬場の内側を通りまして！ツインターボムチが入った！ユキノサンライズ！外の方からはユーワビーム！さらに外からはヤグラステラ！ヤグラステラがやってきたミスタースペイン！さらにはハシノケンシロウから先行はヤグラステラか！内でツインターボか！ヤグラステラだ！ヤグラステラです！鋭い決め手です！関西馬ヤグラステラ！」

1着ヤグラステラ（田島裕） 2着ツインターボ（大崎） 3着ユキノサンライズ（増沢）

故障により5歳時には僅か一戦しか戦えず、その鬱憤を晴らすかのように6歳夏には劇的な逃げを披露したツインターボ。エンジンの調子が次第に上がる。

平成5年 第29回七夕賞（GⅢ）福島／良 芝2000M

「さあ、3、4コーナー中間地点にツインターボがかかりますがかなり飛ばしております！ターボエンジン全開で！その差が7、8馬身！さあこのまま逃げ切れるか！400ハロンをきって4コーナーに迫ります！さあ9番、ダイワジェームスが2番手に上がってきた！そして

アイルトンシンボリがその外にあります！さあ直線コースに入った！後200メートルあまり！ツインターボムチが入った！懸命に粘る！外からアイルトンシンボリ！ツインターボ！アイルトンシンボリ！内からダイワジェームスが3番手！そしてスナークベスト！それからハヤブサオーカンこれは差がある！吼えるツインターボ！全開だターボエンジン逃げ切った！ツインターボが勝ちました！」

1着ツインターボ（仲館） 2着アイルトンシンボリ（田中勝） 3着ダイワジェームス（蛭名正）

平成5年 第39回産経賞オールカマー（GⅢ）中山／良 芝2200M

「さあしかし…この場内のどよめきは！ツインターボの兎に角逃げ！ツインターボの兎に角逃げ！何馬身開いているかとても実況では！今の段階では分からないぐらい！大きく大きく差をつけて逃げて行っています！ツインターボが逃げる！ツインターボが逃げる！さあ追いかけるライスは3番手あたりまで上がってきたか！現在ライスは4番手！ライスは4番手！ホワイトストーンが2番手！ハシルシヨウグンが3番手！さあ！早くもツインターボだけが！ツインターボだけが4コーナーのカーブに入ってきました！ツインターボが大きく逃げる！ツインターボが大きく逃げる！そして、ライスは現在4番手！ライスは現在4番手！さあ、200の標識にツインターボがかかる！ツインターボが200の標識を切った！先頭はツインターボ！そして、ホワイトストーンが伸びる！ホワイトストーンが伸びる！ハシルシヨウグン！その、外を通過して！ライスはツインターボ！見事に決めたぞ！逃亡者ツインターボ！グレードスリー見事2戦続けて逃げ切りました！」

1着ツインターボ（仲館） 2着ハシルシヨウグン（的場文） 3着ライスはシャワー（的場均）

ハマれば強い逃げ馬の宿命か、敗北のインパクトもまた強い。それがツインターボの魅力でもあったのだが。

平成3年 第36回有馬記念（GI）中山／良 芝2500M

「依然としてメジロが2頭！メジロマックイーンとメジロライアンが並んでいつている！さらに3番のヤマニングローバルであります！後方でありますが赤い帽子！ナイスネイチャがぴったりとマークしている！ダイユウサクもいる！そしてその後方からであります！現在7番メインキャスターが最後方！あ、おっと1頭遅れているオオスミシャダイが最後方であります！さあ3コーナーにかかる！ペースは依然として幾分、早いペースとなっている！さあ、ツインターボが僅かに先頭！ツインターボが僅かに先頭！プレクラスニーがスーッとかわしてここで先頭にたった！天皇賞馬プレクラスニー！さらにダイタクヘリオス！」

1着ダイユウサク（熊沢） 2着メジロマックイーン（武） 3着ナイスネイチャ（松永） 14着ツインターボ（大崎）

平成5年 第108回天皇賞・秋（GI）東京／良 芝2000M
「櫂の向こうに抜けていく！さあ17頭がとけて行く！さあ秋の風を切り裂いて！懸命に3番のツインターボが逃げているが！さあ外からはナイスネイチャ！ヤマニンゼファアもやってきた！そしてインコース、ライスシャワーちよつと押しているか！さあどうか！さあここで！ここでツインターボが捕まった！ツインターボの逃げは！早くもゴール前500メートルで壊滅している！」

1着ヤマニンゼファア（柴田善） 2着セキテイリユウオー（田中勝）
3着ウイツシユドリーム（藤田） 17着ツインターボ（仲館）

勝利か玉砕か、そんな走りに魅了されたファンの熱い応援を受けて走るツインターボ。しかし勝てない日々が続く。そんなツインターボにあるチャンスが舞い込んできた。それは二度目の有馬記念への招待だった。本来であれば出られないはずの有馬記念がなぜツインターボに来たのか。それは様々な不運が重なり有力馬がナリタブライアンを除いて出馬できないという事態に陥ってしまったからだ。ナリタブライアンに対抗できる馬が居らずレースが盛り上がらない事を恐れたJRAが大逃げでレースを盛り上げてくれるツインターボに白羽の矢を立てたのである。そう、ツインターボは道化師として求められたのである。これには調教師達も屈辱と感じ、ツインターボ

に出来る限りの調教を施した。勝てるかどうかは分からないが、せめて一矢報いてやろうとしたのだ。そしてツインターボは逃げの頂点に立った。

平成6年 第39回有馬記念(GI) 中山/良 芝2500M

「スタートしました。ナリタブライアンが好スタートを見せました！ナリタブライアンが好スタート！やはり予想通り内からツインターボが行きます！ものすごい加速で早くもリードを3馬身以上に開いていきます。2番手にはネイハイシーザーが大方の予想通りの展開、アイルトンシンボリが3番手！そして外からチョウカイキャロルがついて行つて3、4コーナーの中間に入りました。ツインターボのリードは7馬身から8馬身。その後ろには・・・さあ・・・ナリタブライアンが先行集団の直後につけています。それをびったりマークするのは外からサクラチトセオーと内のライスシャワー。さあ4コーナーを抜けて直線に入つてまいりました。ナリタブライアンの周辺はごった返していますが外に出てまいりました。ツインターボの逃げ。リードが・・・50メートル以上は開いています。大きなリードを取りましたツインターボ。2番手ネイハイシーザー、その外にチョウカイキャロル、アイルトンシンボリと外の、外のナリタブライアンは並んでいます。それをびったりとマークするのはライスシャワーとサクラチトセオー。さらに直後にヤシロソブリンとヒシアマゾン、このあたり有力馬が固まっております。ナイスネイチャが外を回っております。第1コーナー回つていってすでにツインターボのリードは80メートルぐらいひらきました。さあツインターボ大きなりードを取つて2コーナーに向かいます。大きく下がつて二番手はネイハイシーザー、ナリタブライアンはまだ控えています5番手。ようやく先行集団が向こう正面に入りました。ツインターボとの差は果たしてどれほど開いているのか。ナリタブライアンの後方にはライスシャワーとサクラチトセオー。ヒシアマゾン、ナイスネイチャはその後ろ。最後方はダンシングサーパス。さあ残り800メートルを切つてツインターボが第3コーナーに入ります！ここでライスシャワーがナリタブライアンをかわして前に出ました！ナリタブラ

イアンがそれを追走します！ナイスネイチャも上がってきています！ヤシマソブリンはつまって動けないか！ヒシアマゾンも出遅れました！さあ3コーナーを抜けてツインターボが最終コーナーに入ります！ここで先行集団の先頭がライスシャワーに変わります！ツインターボとの差がググッと縮まっていきます！間に合うのか！それともセーフテイリードなのか！ライスシャワーを外からナリタブライアンが並びかける！最終コーナーを回ってまだツインターボが先頭だ！後続馬は苦しいか！しかしやはりこの馬！シャドーロールの怪物ナリタブライアンが大外から一気に捲り上げる！場内はどよめきと歓声に包まれている！残り200を切っているがナリタブライアン苦しいか!?ツインターボはまだ先頭！懸命に粘る！ナリタブライアン苦しいながらも追い上げる！内ツインターボ！外ナリタブライアン！ツインターボ！ナリタブライアン！まさかまさか！まさかのツインターボ逃げ切ったゴールイン！これが逃げるという事だ！ツインターボ！悲願のGI初勝利を！有馬記念という大舞台で見事に逃げ切りました！」

1着ツインターボ（田中勝） 2着ナリタブライアン（南井） 3着ライスシャワー（的場均）

誰もがあり得ないと思っていた有馬記念での勝利。しかしツインターボはそこで完全に燃え尽きてしまった。全てを出し切ってしまった有馬記念以降のツインターボはスタートではハナこそ取るもののレース中盤で先頭を譲るほどになってしまった。

そして95年の新潟大賞典を最後に引退。種牡馬入りする事になった。その後はのんびりとした余生を送るはずだったツインターボだったが、99年4月1日、心不全により死亡した。その早すぎる死に多くのファンが悲しみ、天国まで逃げなくても、と別れを惜しんだ。ツインターボの血統はその殆どが走らずわずか1頭しか残っていない。最後の年に生まれた1頭だけが、彼の意志と血統を世に残している。

番外編02 ライスシャワー（ウマ娘）

これは《font:ul40》有馬記念《font》を逃げ切ったツインターボを見たライスシャワーの物語

（すごい・・・ターボさん・・・）

ライスシャワーは何とか3着に入りこめた事を喜びつつもツインターボの走りを思い出していた。

（自分の得意な距離じゃないのに・・・ブライアンさんに勝っちゃうなんて・・・！きつと皆のヒーローになれるね！）

その称賛を自分も受けたいとライスシャワーの心ははつきりと燃えていた。

（ライスも次の天皇賞春！がんばるぞ！おー！）

次の目標に向けてライスシャワーは決意を固めた。

「だからねお姉さま！ライス！次の天皇賞春は勝ちたいの！」

控室でライスシャワーを待っていたライスシャワーのトレーナーはその言葉に驚いた。

ライスシャワーとの付き合いは長い。

どんなトレーニングでも真面目に行い、その才能を發揮できる様に努力し続けた。

それが見事に開花したのがミホノブルボンとの菊花賞にメジロマックイーンとの天皇賞春だった。

しかしそれ以降ライスシャワーは覇気が無かった。

練習は変わらず真面目に、タイムだって悪くない。

だが勝てない。

いや、トレーナーも目を逸らしていたが勝ちたいという思いが足りないのだと薄々感じていた。

元々大人しいライスシャワーはあの二回の勝利を祝福されなかった事により勝っても褒めてもらえないからとウマ娘が本来持つ闘争心が完全に無くなってしまったのだ。

さらに不幸な事に目標であったトウインクルシリーズからのミホノブルボンの早期引退、メジロマックイーンの怪我による引退と追いか

けていた憧れの存在が消えてしまった喪失感が彼女の足を完全に鈍らせていた。

それでもトウインクルシリーズに残り続けていたのは残った僅かな闘争心がそうさせていたのだろうか。

いや、優しいライスシャワーの事だ。

自分の事を思っただけで目標が無くなったから引退しますとはとても言い出せなかったのだろうか。

ああ、こんな事なら私からミホノブルボンが所属しているドリームトロフィーリーグへの移行を強く推し進めるべきだったと眠れない日々を過ごした事もある。

だが言い出せなかったのは私がライスシャワー以外を勝利に導けなかったからに他ならない。

ライスシャワーならまだやれる！もつと沢山のGIを取れるという思いが私の口を開かせなかった。

それはトレーナーの弱さであり、初めての私のGIウマ娘というブランドを手放したくない醜い欲望からだった。

お姉さまお姉さまと慕ってくれるライスシャワーに依存していたと言っても良い。

そんなライスシャワーがあんなに目を輝かせて勝ちたいと言ってくれた。

嬉しさと同時に申し訳なさを涙が止まらない。

「ええ・・・きつと貴女を勝たせて見せるわ。ライス」

（天皇賞春が終わったら私から切り出そう。ミホノブルボンと、メジロマックイーンと戦う為にドリームトロフィーに行きなさいと・・・）

「はっ！はっ！はっ！はっ！」

ライスシャワーは懸命にドレーニングを続ける。

（ライスの得意な長距離！GI最長の3200メートル！スピードには自信は無いけれど！スタミナならライス負けない！）

何度も同じ距離を走ってはタイムを計る。

「ライス！前よりタイムが遅れてるわ！もつとコーナーを意識しなさい！長いレースだからこそコーナーの速度はとても重要よ！」

「はい！コーナーの練習いいですか！」

「もちろんよ！」

トレーナーの指示を受けてライスシャワーは走り出した。

「いいライス、次の京都記念とその次の日経賞だけれども」

「はい」

トレーナールームでライスシャワーとトレーナーは出走予定のレースについて話し合っている。

「今回は最初から勝たなくていいわ」

「え？でも・・・」

「大丈夫、天皇賞春にはちゃんと出られるから。今の貴女に必要なのは勝つ事じゃないわ」

トレーナーはライスシャワーを安心させるように微笑む。

「今の貴女に必要なのはライバルが居なくても勝ちたいと思う心の強さと、勝負勘よ」

「あ・・・」

ライスシャワーはミホノブルボンとメジロマツクイーンに憧れていた。

無敗の二冠ウマ娘のミホノブルボンに天皇賞春2連覇のメジロマツクイーン。

その二人と同じ場所に立ちたい、同じ輝きになりたいという強い憧れがライスシャワーの原動力だった。

「今まで貴女は憧れを追い続けるだけだった。恐らく天皇賞春に勝ちたいと思ったのもツインターボの走りに憧れたから。違わない？」

「うん」

ライスシャワーは確かにあの時ツインターボに憧れていた。

ナリタブライアンに勝った事もそうだが勝っても負けてもファンに愛され、輝いているツインターボにミホノブルボンやメジロマツクイーンのような輝きを見たからだ。

「それは構わないわ。でもねライスシャワー。憧れを追い越した先には何があると思う？」

「それは・・・」

ライスシャワーに思い浮かんだのは罵倒された苦い記憶だけだ。

「それはね、新しい憧れになる事よ。ライスシャワー、貴女がね」

「え……？ライスが……憧れ？」

思わぬ言葉にライスシャワーが顔を上げた。

「そうよ。憧れを超えたチャレンジャーは次のチャレンジャーを待ち受ける憧れになるの。ミホノブルボンが、メジロマックイーンがそうだった様に、貴女も新しい憧れになるの」

「でもライス……誰にも……」

「そんな事無いわよ。今うちにいるメンバーが一番の古手が貴女つてのは知ってるでしょ？ほかの子達は皆貴女に憧れて入ってきたのよ」

「え……？」

「貴女みたいなステイヤーになりたいって。お蔭でメンバー全員ステイヤーばかりでレース考えるの大変なんだから」

ライスシャワーが所属しているチームはまだまだ有名チームとは言えない。

トレーナーもライスシャワー以外のGIウマ娘は出していない新人だ。

「誇りなさい。ライスシャワーのこれまでの軌跡を。ヒーローつてのは勝つからヒーローじゃないの。チャレンジを諦めずに戦い続け、そして皆の憧れになるからヒーローなのよ」

「うん！ライス、皆の憧れになる為に！頑張るね！」

ライスシャワーの久々の心からの笑顔にトレーナーは安堵すると共に今まで笑わせてあげる余裕すら失わせていた自分を殴りたくなかった。

（大丈夫！まだ間に合う！天皇賞春が終わったら！絶対に言うのよ！）

これ以上ライスシャワーに依存してはいけない。

ライスシャワーは偶然自分の手元にやってきた金の卵を産むガチョウだったのだ。

そのガチョウはもう十分卵を産んでくれたではないか。

もつと卵が欲しいと強欲者が腹を切り裂く前に手放すべきだ。

(自由にしてあげるべきなんだ！彼女を！)

ライスシャワーが退室した後、トレーナーはそう自分に言い聞かせた。

「今日は攻めたレースをしたライスシャワー。しかし後半は精彩を欠き6着です」

(勝てなかった・・・やっぱりお姉さまの言う通り、ライス、自分から動くのが下手なんだ)

トレーナーに言われたとおりライスシャワーは如何に自分の勝負勘が悪いのかを自覚した。

今まではずっとライバルが前にいた。

ライバルの動きに合わせて動いてきた。

それがライスシャワーの必勝パターンだったが、勝ちたいと願うライバルがいない今はその戦法は使えない。

《font:ul40》有馬記念《font》の時はブライアンさんとターボさんが居たから・・・あとレースは1回ある。それまでに掴まなくちゃ！)

ライスシャワーは決意を固めるとターフを後にした。

「今日はライスシャワー仕掛け遅れました。残念ながら6着です」

(・・・今度は遅すぎた、早すぎず・・・遅すぎず・・・難しいなあ・・・)

ライスシャワーは足の速さは決して遅くはないが速度自慢のウマ娘ではない。

ゆえに早く仕掛けすぎれば追い付かれ、逆に仕掛け遅ければ追い付けない。

(もう次は天皇賞春・・・どうしたら・・・あ！)

ライスシャワーは何かを思いつくと急いでターフを後にした。

「それでライスさん、私達に頼みたいことは一体何ですか？」

「ライスの頼みであれば吝かではありませんが」

ライスシャワーはメジロマックイーンとミホノブルボンを呼んで話し合っていた。

「あのね、今度の天皇賞春ライスと一緒に走ってほしいの」

「それはどういう事ですか？」

「既に我々はドリームシリーズに移っています。そのオーダーは不可能かと」

「あ、えっとそういう意味じゃなくて・・・その・・・」

元々喋るのが得意ではないライスシャワーは中々言葉が出てこずあわあわする。

「・・・もしかして私達に練習に付き合ってほしいって事ですか?」

ライスシャワーの言いたい事をメジロマックイーンが察した。

「あ!うん!ライスの練習を手伝ってください!お願いします!」

「そのオーダーであれば可能です。流石に毎日と言うわけにはいきませんが」

「そうですね。私も時間がある時ならばお手伝いできますわ」

「ありがとうございます!よろしくお願いします!」

ライスシャワーは何度も頭を下げた。

「天皇賞春を目標の練習ですから3200走ると言うのは分かりますがどの様なお手伝いをすればよろしいのですか?」

「はい、私たちが併走する事に何の意味があるのでしょうか?」

「えっと・・・何ていうか・・・」

「そこからは私が説明させてもらうわね」

ライスシャワーのトレーナーが言葉に詰まるライスシャワーを手助けする。

「ライスが調子を落としているのは二人も知っていると思うけどそれは貴女達というライスの絶対的ライバルがない事が原因なの。今までライバルを徹底マークする事で勝利してきたライスは自分でレースをする事がとても苦手だわ。先のレースでそれを克服しようと頑張ったんだけどどううまくいかなかったの。だからライスは名案を思い付いたのよ。ね?ライス」

「お姉さまありがとうございます!あのね、ライスは自分でレースを作るのが苦手だから、その・・・幻のマックイーンさんやブルボンさんをマークしたいと思うの」

トレーナーに促されてライスシャワーは伝えたいことを言葉にできた。

「なるほど、幻影の我々をマークする事で苦手であるレースメイキングを意識しないようにしたいのですね」

「それはライスさんらしい作戦ですわね」

二人とも笑顔でライスシャワーの作戦を受け入れた。

「流石に以前のライスさんと競り合った時ほどの速度は出せませんが簡単には抜かせませんわ」

「はい、私も長期のリハビリを終えて調整中ではありますが問題ありません」

「マックイーンさん、ブルボンさん、ライス、がんばってついてくね！」
「準備はいいかしら？それじゃあ行くわよ。よいい、スタート！」

三人はトレーナーの声に合わせて走り出した。

(ついてく！ついてく！)

「ライスシャワーがズーツと良い所へ上がっていきます」

ライスシャワーは幻影のメジロマックイーンとミホノブルボンを追いかけて続ける。

(マックイーンさんが上がっていく。ブルボンさんは変わらず先頭にいる)

極限まで集中するライスシャワーには明確に二人の姿が見えてくる。

他のウマ娘たちは意識しない。

自分の中にしっかりと焼き付けた二人の姿を懸命に追い続ける。

レースは丁度半分を過ぎた所だ。

「ライスシャワーが行く！ライスシャワーが行く！まもなく先頭を捉えようというところ！」

(いける！ライスなら！)

得意の上り坂でライスシャワーはついに先頭へと立った。

だがライスシャワーの目にはさらにその前を走るメジロマックイーンとミホノブルボンが映っている。

(第3コーナー……ここぞ！)

先に行くメジロマックイーンとミホノブルボンの幻影を抜き去るべくライスシャワーは力強くコーナーを回る。

(ツ！足が!?)

ライスシャワーの左足に僅かに痛みが走った。

(ああ!?!追いつけない!)

幻影の二人がどんどん離れていく。

「ライスさん！あと少しですわ！」

(マックイーンさん！)

「ライス！がんばりなさい！」

(ブルボンさん！)

二人の応援が聞こえたライスシャワーは懸命に前を向いて走り出した。

そして幻影を追い抜いた。

「さあ、ライスシャワーが先頭だ！やはりこのウマ娘は強いのか！ライスシャワー先頭だ！ライスシャワー先頭！ライスシャワー先頭！」

(ライスが！次の憧れヒコロに！なるんだ！)

「ライスシャワー完全に先頭だ！ライスシャワー先頭！ライスシャワー先頭！外からコテージキャンプが来る！コテージキャンプ二番手に上がった！ライスシャワー！やあやったやった！ライスシャワーです！見事二年ぶり！天皇賞春を制しました！漆黒のステイヤー復活です！」

「はあ！はあ！やった・・・ライス！やったよ！」

ライスシャワーは笑顔でメジロマックイーンとミホノブルボンが居るスタンドを見る。

笑顔で拍手をする二人を見てライスシャワーは嬉しくなった。

(二人が褒めてくれるなら・・・)

ライスシャワーは以前の事を思い出したブーイングが来るのだからと身構えた。

「ラーイース！ラーイース！」

「え？」

ライスシャワーが顔を上げるとそこには自分の名前を呼ぶ観客の姿があった。

「」「ラーイース！ラーイース！ラーイース！ラーイース！」「」「」

その声は次第に大きくなり、やがて《font:ul40》競馬場
《font》全体を包み込む。

「「「ライイス！ライイス！ライイス！ライイス！ライイス！」」」

それはライイスシャワーが初めて受ける祝福だった。

「皆・・・ライイス！やったよ！ありがとう！」

ライイスシャワーは手を振ってその祝福に答えた。

その様子をメジロマックイーンとミホノブルボンは嬉しそうに見つめていた。

しかし二人は控室に戻ろうと歩き出したライイスシャワーの歩きがおかしい事に気が付いた。

「マックイーンさん、ライイスは」

「ええ・・・」

二人は急いでライイスシャワーの控室へと向かった。

「ライイス！おめでとう！」

「ありがとうお姉さま！」

トレーナーはライイスシャワーをハグした。

ライイスシャワーも嬉しそうにハグし返した。

「ライイス・・・皆の憧れヒコロになれたかな？」

「あの声を聴いたでしょ!?当り前よ！」

まだ少し信じ切れていないライイスシャワーにトレーナーが満面の笑みで答える。

「失礼しますわ。ライイスさん優勝おめでとうございます」

「ライイス、がんばりましたね」

「マックイーンさん！ブルボンさん！ライイス！ライイスやったよ！」

嬉しそうに笑うライイスシャワーに二人も笑顔を見せる。

しかしメジロマックイーンはすぐに真剣な表情をする。

「ライイスさん、レース中、左足を怪我されましたね？」

「え!?ライイス怪我してたの!?!」

トレーナーは慌ててライイスシャワーを椅子に座らせた。

「大丈夫だよお姉さま。ちよつと左足が痛かっただけだから」

「ライイス、貴女の動きには明らかに異常が見られます」

「それは・・・」

ミホノブルボンに言われてライスシャワーは何も言えなくなってしまうた。

「ここで無理をしては後に差し支えますわ。テイオーの様に」

トウカイテイオーはダービーで骨折を隠したままライブを行った。

もしそれが無かったとしても菊花賞までに治ったかどうかは分からないが少なくとも影響があつた事は間違いないだろう。

「でもライブが！」

「ライブはまたいつでも行えます。今は体を労ってあげてください」

「いいえ、ライブには出なさい。ライス」

トレーナーがミホノブルボンの言葉を遮った。

「貴女は何を！」

「ライス。貴女はもう十分戦ったわ。私にも夢を見せてくれた。こんな終わり方は不本意かもしれないけれど、今日をもって引退しなさい」

「お姉さま!?!」

「もつと早くに貴女に伝えるべきだったわ」

「お姉さま・・・」

「トウインクルシリーズだけがウマ娘の生きる場所ではないわ。メジロマツクイーンやミホノブルボンの様に、ドリームトロフィーに行きなさい」

ドリームトロフィーリーグはトウインクルシリーズを引退したウマ娘たちが走るレースである。

トウインクルシリーズの様に前提条件を満たさなければレースに出られないという事は無く、ある程度ではあるがウマ娘達の望むようにレースを走る事ができる。

「でも・そうしたらお姉さまのチームからは！」

「ええ、外れる事になるわね」

ドリームトロフィーのトレーナーになるには一定以上のGIウマ娘を出した事があるトレーナーと定められている。

ライスシャワーしかGIウマ娘を出せていないトレーナーではラ

イスシャワーを指導することができない。

「貴女は私に与えられた幸運の女神。願いを叶えたのなら次の人の元へ行くのが貴女の役目。私はもう十分幸せになったわ」

「お姉さまー!」

ライスシャワーはトレーナーを抱きしめた。

「ライスも!ライスもお姉さまに会えて幸せだったよ!ライスみたいなダメダメを!ずっとずっと支えてくれて!」

「私こそありがとう...碌な実績もない私の指導にずっとついてきてくれて」

その後、トレーナーはURAにライスシャワーのトウインクルシリーズの引退とドリームトロファイリーグへの移行を連絡。

優勝ライブは同時にライスシャワーの引退ライブとなった。

「皆、ライスは今日初めて皆のヒーローになれたけど...ごめんね、ライス今日で引退します」

ライブが行われるまでの準備の時間に医者に応急処置を行ってもらった左足には簡易の固定具が取り付けてある。

幸い骨折まではしていなかったが大きく罅が入っており、もし折れていたら走るどころか日常の生活にすら支障が出るレベルだったと伝えられた。

「ライスこれからドリームトロファイで走るから!もしライスの事!まだ応援してくれるなら!ライス!ライス!」

「ライスー!俺は菊花賞からずっとお前がヒーローだったぞー!」

「ふえ!?」

突然の観客の声にライスシャワーは戸惑いの声を上げた。

「その小さい体で良く頑張ったー!ありがとー!」

「二二」ラーイース!ラーイース!ラーイース!ラーイース!」

「ライス!がんばるね!」

その日のライブはライスコールが中々止む事は無く、ライスシャワーは感激の涙を流しながらライブを歌った。

それは、ライスシャワーが望んでも中々手に入らなかった、祝福に満ちたウィニングライブだった。

番外編03 ナイスネイチャ（ウマ娘）

「まいどお馴染み3着う〜」

あたしはここで良い。

「なんとまさかの2着う〜！」

あたしは2番星でいい。

絶対的な輝きを持つ天才には敵わない。

良い資質、それは秀才の証であって天才の輝きではない。

だからあたしはここで良い、ここが良い。

ずっとずっとそう思ってきた。

・・・本当に？

4着で涙していた私は誰？

ありえないと言われた逃げ切りをしたターボを羨ましく思ってい

た私は誰？

（うるさい！ネイチャさんはここが良いの！）

嘘。

（嘘じゃない！）

私は嫌。

（ネイチャさんは嫌じゃない！）

私は私、ネイチャさんじゃない。

（黙れ！）

「はっ!?・・・夢・・・か・・・」

ナイスネイチャは夢に魘されて目を覚ました。

《font:ul40》有馬記念《font》以降ずっとこの夢・・・

ナイスネイチャはまだ薄暗い部屋の天井を見つめる。

ネイチャ^あさん^たを見つめる私。

（はあ・・・まさか多重人格者にでもなっちゃいましたかね〜ネイチャ

さんは）

ナイスネイチャはいつもの苦笑いを誰に向けるでもなく浮かべる

と起きるにはまだ早いともうひと眠りする事にした。

「・・・と言うわけでネイチャさんの次のレースは・・・おや？ネイ

「チャヤさん聞いてますか？」

「ふえ？ごめんなさい聞いてなかったわトレーナー」

「珍しくボーつとしていたナイスネイチャをトレーナーが不思議そうに見つめる。」

「何か悩み事でもあるのですか？相談に乗りますよ」

「あははく・・・悩み事っていうかちよつと最近夢見が悪くて・・・」
話すつもりは無かったがなんとなくナイスネイチャはその事を口に出してしまった。

「夢見・・・ですか？」

「本当に全然対したことじゃないから！それじゃあネイチャさんトレーニングに行つてきまーす！」

「あちよつと！」

トレーナーの静止を振り切つてナイスネイチャはチームルームから出て行つてしまった。

「・・・ネイチャさん、貴女がその一人称を使う時は何かある時なんですよ・・・」

付き合いの長いトレーナーにはお見通しであった。

（なんで逃げてきちゃったんだろ・・・ネイチャさんおかしいですなあ）
トレーニング場で走りながらもナイスネイチャは悩み続けていた。

（なんでだろう・・・最近チームルームに居ると息苦しい気がする・・・）
チームメンバーとの仲は悪くない。
なのに何故か妙な距離感を感じる。

（はあ・・・止め止め、トレーニングに集ちゅツ!?!）

上の空で走っていたナイスネイチャは小さな窪みに足を取られて転倒した。

「ネイチャさん！」

トレーナーが慌てて駆け寄つてきた。

「輝が入ってはいませんが折れてはいません。暫くレースは避けた方が良いでしょうね」

「そう・・・ですか・・・」

ナイスネイチャは固定された左足をじつと見つめる。

「大丈夫ですよ。走れなくなる訳ではありませんから」

「医者はそう言つてナイスネイチャを励ます。」

「ありがとうございます。ネイチャさんリハビリがんばりますね」

「ナイスネイチャはいつもの笑顔を浮かべてそう言った。」

その様子を隣で見ていたトレーナーは何かを考えこんでいた。

「ナイスネイチャさん、何を悩んでいたのか。今何を思っているのか話してくれませんか」

帰りの車の中でトレーナーはナイスネイチャにそう話を切り出した。

「いや、ネイチャさんやっちゃいましたね。折角調子が登つてきた時なのにまいっちゃいますね」

「本当の事を言つてください」

「いやいやネイチャさんは何も・・・」

「普段の貴女は自分をネイチャさんとは呼びません。そう呼ぶ時は自分の心を隠している時なんですよ」

「ッ!？」

トレーナーの言葉にナイスネイチャの浮かべていた困り顔と笑顔の混ざり合った表情が引きつった。

そしてゆっくりと息をするとどうにかその表情を元に戻す。

「ネイチャさんそろそろ引退しようかなーって。立つ鳥跡を濁さず、ネイチャさんもそろそろ後輩に道を譲る時が来たんですな〜って」

「それは本当に貴女の願いですか？」

「・・・して・・・」

ナイスネイチャの表情は完全に崩れ、大粒の涙をボロボロ流し始めた。

「どうして私は勝てないの!?! どうして私はあと一歩が届かないの!?!」

長年積み重ねられてきた思いが溢れて止まらない。

「イクノみたいに沢山のレースで走る事もできない! ターボみたいにどんなレースでも諦める事無く走り続けるなんてできない! タンホイザみたいに自分の不運を受け入れて、それでも走るなんてできない!」

同じチームのメンバーに感じていた劣等感が溢れ出る。

「・・・ネイチャさん」

「分かっている！皆だつて勝ちたいって思ってる事も！でも皆期待を掛けられているのに私に向けられる期待はいつも3着！なんで優勝じゃないの!?!私が勝つたらいけないの!?!」

それはずっと堪えていた思い。

自分で蓋をして隠していた本音。

「指導力不足で貴女を輝かせて上げられなかった私のせいですね・・・」
「違う！私が弱いから！私に才能が無いから！私が！私が・・・」

あふれ出るモノが無くなったのか、ナイスネイチャの声に力がなくなっていく。

「ネイチャさん、貴女に才能が無いなんて事はありません。確かにGⅠを勝つ事がウマ娘として誇らしい記録である事は事実です。ですがGⅢやGⅡですら勝つことができないウマ娘が殆どなんです。自分で自分を認めてあげなくて！誰が貴女を認めてくれるんですか！」
いつも静かで覇気のないトレーナーの強い言葉にナイスネイチャは顔を上げた。

「イクノさんも、ターボさんも、タンホイザさんも皆さん勝ちたい事は同じです！心無い声が辛いのは貴女だけではありません！落ち込むのは分かります！ですが自分で自分を虐めて何になるんですか！」

「トレーナー・・・」

トレーナーのまつすぐ目にナイスネイチャは顔を上げた。

「諦めてはいけません。諦めずに走り続ければ、かならず良い事があ
るはずですよ」

「怪我の影響が心配されるナイスネイチャでしたがどうやらさほど問題は無いのか今日も3着です」

（久々のレース・・・今日も勝てなかった・・・でも何でだろう・・・次は行けるっていう確信があるのは・・・今まで無かったのに・・・）
怪我からの復帰戦である京都大賞典。

ナイスネイチャは今までにない手ごたえを感じていた。

確かに勝てなかった。

でもそれは久々の試合に仕掛けるタイミングを計り損ねたからだと分かってる。

(自分が早くなった・・・訳じゃない・・・皆が遅くなった・・・なんで?)

ナイスネイチャは答えの出ないままライブの準備のため控室に戻っていった。

「ネイチャさん、作戦を変えましたか?」

「うん、どうしても私は最後の伸びが足りないみたいだから前の方で走ろうと思って」

練習中、イクノディクタスに聞かれてナイスネイチャはそう答えた。

「いえ、それだけではなくて・・・なんとというか並走しているとすごいプレッシャーを感じる時があるので何かそういった作戦なのかと・・・」

「え?」

(私そんなにプレッシャーなんてかけてたっけ?)

プレッシャーをかけて走るウマ娘というのは確かにいる。

以外に思うかもしれないがああシンボリドルフでさえ他のウマ娘にプレッシャーを与えながら走っているのだ。

ウマ娘の中にはそういったプレッシャーに極端に弱いウマ娘もいる。

「ターボも感じたぞー。なんかこのまま走っていると何かが壊れちゃうみたいなの?そんなプレッシャーだぞ」

(はて?私はそんな威圧的なんだろうか?)

思いもよらない仲間からの言葉にナイスネイチャは頭を悩ませる。

確かに今まで他のウマ娘達に何とか勝とうとプレッシャーを与えたこともあるがあまり効果的ではなかったと記憶している。

「もしレースでそれだけすごいプレッシャーを出せたらきつとネイチャちゃんも勝てるね」

「いやいやそんなに簡単じゃないから」

マチカネタンホイザの言葉を否定しながらもナイスネイチャはこ

のプレッシャーを生かせないか考えていた。

「今度のジャパンカップですがナイスネイチャさんとマチカネタンホイザさんの出場が決まりました」

「おー、マチタンにネイチャ、がんばれ〜」

ツインターボが笑顔で応援する。

「たしかブライアンさんも出場を予定しているのでしたね」

「ええ、ですがこの前の怪我以降調子を崩しているようですね」

イクノデイクタスの情報にトレーナーが追加をする。

「やはり足の怪我は怖いですね。幸いネイチャさんの怪我はあまり影響がなかったようですが」

足の怪我に対して人一倍思いの強いイクノデイクタスが改めてナイスネイチャの足を見る。

「そうになると強敵は女傑のヒシアマゾンさんと海外からのウマ娘さん達ですね〜」

「海外のウマ娘達は情報があんまりあてにならないのよね〜」

海外と日本の《font:ul40》競馬場《font》は条件が大きく異なる。

その為に日本で強いウマ娘が海外で、逆に海外で強いウマ娘が日本で実力を発揮できないという事が良くある。

まあ中には《font:ul40》馬場《font》適正問わずという天才・・・いやある意味変態の域のウマ娘もいたりするのだが・・・。

「ヘクチツ！アッ！ツ！オシウマ娘ちゃんの写真にデジタンの唾があー！」

「情報があてにならないからと言って油断していい相手ではありませんせんからしっかりトレーニングをしましょうね」

「はい」

二人は元気よく返事をした。

「スタートしましたジャパンカップ！おっとヒシアマゾン出遅れたか最後方からのレースになります。ナリタブライアンは好スタート、真ん中デュークワインが出ていきます。しかしタイキフリーザーが先

頭に立ちます。先頭集団固まったまま第1コーナーへ入っていきま
す。ヒシアマゾンが最後方のままレースは進んで行きます。タイキ
フリーザーが現在先頭で逃げております。しかしそれほど離れずに
先行集団が形成されております。ナイスネイチャは先行集団の外目
につけております。」

(よし！いい位置につけた！)

ナイスネイチャは上手くスリップストリームが生かせる位置につ
く事ができた。

「ナリタブライアン今日は中団待機の様子。後ろの方にマチカネタン
ホイザ。最後方は変わらずヒシアマゾンであります。ヒシアマゾン
最後方のまま中間点を過ぎました。タイキフリーザーまだ先頭です。
先行集団はポジション争いが激しくなってきた。ナリタブライ
アンはまだ中団に抑えたままだ。ヒシアマゾンは最後方のままです。
3・4コーナーの中間点に入ってまだタイキフリーザー先頭！櫂の向
こうを過ぎてまだタイキフリーザー先頭だ。しかし外からナイスネ
イチャが上がってくる。ナリタブライアン外に出た！ナリタブライ
アンが外から行った！ナリタブライアンここから行けるのか！ヒシ
アマゾンも外から行く！」

(行ける！今日は！行ってみせる！)

ナイスネイチャはあれから何度も試したプレツシャーを発動させ
た。

理由は分からない、なぜか知らないが最終直線に入ると強いプレツ
シャーが出るようになっていた。

そのプレツシャーは周りのウマ娘達を無意識に失速させる。

「タイキフリーザー失速！ナイスネイチャ前が出る！ランスも前に出
る！しかしランス伸びない！ナイスネイチャがまだ先頭！ナイスネ
イチャ頑張れ！ヒシアマゾンが上がってくる！ナリタブライアンは
厳しいか！」

(お願い！耐えきって私の体！)

軋みを上げる全身を動かしてナイスネイチャは最後の直線を走り
切った。

「ナイスネイチャだ！ナイスネイチャが！今！長い長い時を経て！やつと手に入れました！着ゴールイン！善戦ウマ娘と呼ばれて幾年！ナイスネイチャ、悲願のG1初勝利！長年ナイスネイチャを応援してきたファン達の歓声！割れんばかりの拍手！ああ、私はこの試合を
！」

（ああ・・・これが・・・憧れの・・・）

ナイスネイチャはただただ掲示板を眺め続けた。

夢ではないのか、幻ではないのか、涙を何度も何度も拭って確かめて、それでも消えない自分の数字。

「ネイチャちゃん、おめでとう」

振り向けばそこには一緒に戦っていたマチカネタンホイザが居た。

「おめでとう。よく頑張ったな」

近寄ってきたヒシアマゾンがそう言って拍手をする。

ナリタブライアン達も口々におめでとうと言いながら拍手をしてくれる。

「ありがとう！」

ナイスネイチャは初めての笑顔を皆に見せた。

それは今までの人に好かれる愛嬌のある笑顔ではなく、心の底からの笑顔であった。

第2シーズン第1話 うまれました(馬)

なんだろう、妙に頭がくらくらする。

ぼんやりとした視界で辺りを見回すと喜んでいる何人もの人と疲れた様子の牝馬が見える。

はて？何故こんな所に？

立ち上がるうにも手足に・・・前足でした、前足後足に力が入らず立ち上がれない。

ははん、どうやら流行りの生まれ変わりと言うやつらしい。

しかし馬ですか。

畜生道に落ちた理由は・・・思い出せないというかそもそも前世が人間かどうかも分からないなあ。

そんな事をぼんやりと考えていると鋭い声がした。

「私の息子ならさっさと立ちなさい！」

「イエス！ママ！」

今まで力が入らなかったのは何なのかと思うほどに全身に力が漲り立ち上がる事ができた。

「厳しいねえイクノ姉さんは」

「私の息子なのでですからこれぐらい出来て当然です」

「どうやら僕の母親はイクノ姉さん・・・イクノディクタスらしい。」

「さあ息子よ。立ち上がったのなら母のミルクを飲むのです」

「はっい」

まだ少しフラフラするがゆっくりと歩いてイクノ母さんの元へ行くときイクノ母さんも母乳を吸い易いように体を動かして誘導してくれる。

「しっかりと飲んで立派な馬になりなさい」

先ほどの厳しい印象は和らぎ、慈愛に満ちた声と視線で僕を見つめてくれる。

「早くあのひとにも貴方を見せてあげたいですね」

「あゝ・・・イクノ姉さん・・・その事なんだが・・・」

先ほどまで笑顔だった老齢の男性が渋い表情で言い辛そうに切り

出す。

「ツイインターボなんだがな・・・昨日心不全で死んだらしい・・・」

「え・・・?」

母の体が強張る。

「お産間近だったお前さんに言うのは体調的に拙いと思つてな・・・」

「そう・・・ですか・・・」

明らかにイクノ母さんは動揺している。

「すまん・・・まだ体調が整っていない状況で・・・」

「いえ・・・私にはこの子がいます。辛くないと言えば嘘になりますがこの子の為にも悲しんでばかりいられません」

「強いな、イクノ姉さんは」

男性はそう言つてイクノ母さんをそつと撫でた。

しかし父ツイインターボ、母イクノデイクタスなんて馬いたかしらん？

よくは分からないが生まれる時からある記憶ではそんな馬は居ないと言っている。

多分この記憶は前世の記憶の欠片ではなからうか。

きつと前世の自分は競馬が大好きで仕方がない人間だったのだから。う。

きつと死んだら馬になりたいと願つたのかもしれない。

人間だったという確証は無いが多分そうなのだろう。

しかし何故自分に該当する馬が居ないと断言できるのだろうか？

うーんよく分からない母乳ウマー・・・いかん思考がまとまらない。

とりあえず良く分らない事は後で考えるとして今は母乳を味わう事を優先しよう。

ちなみにそんな風に百面相する僕をイクノ母さんは少し変わった子ですねと思ひながら見つめていた。

数日後・・・。

「いいですか。私たち馬にとって足のケガや病気は死につながります。健康に気を使わず惰性で生きるのはとても危険です」

「ふむふむ」

イクノ母さんが健康の大事さを語る。

自分が幼少期に体験した怪我による死への恐怖。

そしてそれを克服した後の自分の激走の歴史を語る。

「足のケガと体調不良さえ注意していれば私のように61のレースを走りぬく事ができます」

ん？今おかしな数字が聞こえたような。

「イクノ姉さんの健脚は本当だぞ。当初はそこまで走らせる予定ではなかったんだがな。走らせても走らせても全然疲れた様子のないイクノ姉さんに馬主も調教師もイケイケになっちまってな。気が付けば61戦も走ってたんだよな」

僕たち親子の様子を見ていた厩務員がイクノ母さんの話を補足してくれる。

あつれー？自分の記憶だと51戦・・・それでも十分異常だけどそこからさらに増えてませんか？

どうやら細かな違いはまだまだあるらしい。

しかもなぜか分からないが馬と人間が普通に会話してるし。

ただどうもお互いに会話をしてるって認識は無いみたい？

意思疎通は出来ているけど会話しているとは認識しないって何とも不思議な光景だなあ。

「うん、おかしな様子も無いしそろそろ放牧の時期だな」

どうやらそろそろこのお部屋から出してもらえるらしい。

馬になった本能なのか早く走りたくてウズウズしている。

「いいですか、貴方はまだまだ体の使い方になれていません。怪我だけはしない様に注意しなさい」

「分かったよイクノ母さん」

母の言葉に返事をしながらまだ見ぬ外へ憧れていた。

「ひゃっほー！」

本能全開で走るのタノシー！

語彙が死ぬー！

「走るときの感じはツインターボそっくりですね。毛色は私そっくりですが」

勢いよく走る僕をのんびりと眺めるイクノ母さん。

「疲れ切る前に休むのですよー！」

「ひやはーいー！」

絶叫と返事が混じり合った声を返すとそのまま走り続けた。

その結果……。

「私は言ったはずですよ。疲れ切る前に休みなさいと」

「はひゅ……」

本能を抑えきる事が出来ずバテバテの状況でイクノ母さんの隣にへたり込んだ僕を冷たい目でイクノ母さんが見つめる。

「楽しいのは分かりますが限界をちゃんと把握しなさい。極度の疲労は怪我の元ですよ」

「ふあい……」

疲れから眠たくなってきたのでその返事を最後に眠ってしまった。

人間と違い馬の成長は早い。

半年もすれば離乳して子馬だけでの生活になるからだ。

周りからは母馬と引き離された子馬達の悲痛な叫びが聞こえてくる。

「いいですか。これで永遠の別れという訳ではありません。少々寂しいかもしれませんが落ち着いて行動しなさい。貴方ならそれができるはずですよ」

「分かったよイクノ母さん」

その後、何人かの厩務員が馬房に入ってきてイクノ母さんを連れて行った。

急に一人で部屋に残された不安はあったもののイクノ母さんに後で叱られる事を思えば我慢できるものだった。

「さすがイクノ姉さんの息子ねお前は。随分と落ち着いてるわね」

そうでもないんだけどいい子いい子してくれる若い女性厩務員の手に癒しを感じながら大人しくしていた。

その後しばらくは一人が寂しかったが直ぐに慣れていった。

「まってまって」

「やだよ」

今日も今日とて放牧中。

同じ年の子馬達とかけっこするのが存外楽しい。

これも馬の本能のなせるものなのか。

ただ追い付かれるのは嫌いだし一緒に合わせて走るのも落ち着かない。

「先頭は譲らない！」

「まてまて〜」

その後全員が疲れるか飽きるまで追いかけっこを続けた。

「ほれほれ！走れ〜！」

「わ〜！」

冬が近くなってきた時期になると厩務員に追い立てられる様になった。

なるほどこれが追い運動というやつか。

後ろから大人の馬に追い立てられて走らされる。

ものすごく早く走る訳ではないが運動不足にならない様にする為に結構な時間走ることになる。

そこでも当然先頭は譲らなかつたがかなり疲れるのでできればほどこほにして欲しい・・・ダメか。

「お前はいつもバテバテだな」

性分なんです仕方がないんです。

「やっぱターボの息子だねえ。群れを嫌うのは」

そう言えば自分ツインターボの息子でしたっけ。

名前は知ってるけどレースははつきりと見た事無いなあ。

大逃げで有名だったってのは知ってるけど。

「そうだ、お前の親父のレースを今度見せてやるからな」

ありがたいとございまーす。

数日後、馬房で休んでいると厩務員の田中さんが小型のモニターを持ってやって来た。

「お前の親父のレース映像あったぞ。ちよつと画質が悪いけどな」

早速モニターに映像を映してくれる田中さん。

その映像を食い入る様に見つめた。

そこには有馬記念を逃げ切る父ツインターボの雄姿が映っていた。ありえない、あの有馬記念で勝ったのはナリタブライアンの筈。しかし映像は最終直線でも先頭を譲らず、ギリギリの所で勝利した父ツインターボが映っている。

「あの時は誰もがナリタブライアンが勝つと思っていた。ツインターボは大逃げしても途中で潰れると誰もが思っていた。だがお前の親父はその全てを出し尽くす事で逃げ切って見せたのさ。ツインターボ一世一代の大逃げ。あの時は思わずテレビに向かって叫んじまったよ」

そう言って田中さんは映像を消すとモニターを片付け始める。

なれるかなあ・・・父さんみたいに・・・。

「なれるさ、お前はツインターボとイクノ姉さんの息子なんだぞ」

そう言って田中さんは笑った。

第2シーズン第1話 うまれました（ウマ娘）

ぼんやりとする視界に笑顔の大きな女性が見えた。

「目が覚めましたか。ママでちゅよ〜」

手足にも力があまり入らないし動けない事を考えるとどうやら赤ん坊に生まれ変わったらしい。

なるほど、今流行りの転生というやつか！

「どうやらこの女性が母親らしい。」

まだあまり定まらない視界で辺りを見回すが極々普通の病院に見える。

「どうやら異世界転生ではないらしい。」

それにしても妙に頭の上がヒクヒクするがなぜなのだろう？

「よくやった卓子！」

ほぎゃ〜！喧しい〜！

突然の大声に驚いてついつい泣いてしまった。

赤ん坊は泣く以外にはまだまだ感情表現ができないのだろう。

「あなた！大きな声出しちゃだめじゃない！」

「・・・すまん」

小さな声で叱る母親に父親と思わしき男性が小さくなって謝る。

しかしびっくりした。

あんなにも大きな声を出せるとはすごいな父！

「それにしてもウマ娘か・・・まさか俺たち夫婦にウマ娘の子が生まれるとはな・・・」

「私の家系には何人かウマ娘が入っているらしいから遺伝よきつと」

ウマ娘とはなんぞや!?

その疑問が解決するのはだいぶ先の話だった。

「どうも！さんしやいになりました！」

失礼かみまみた！

「どうやらある意味異世界転生で間違いなかったようです。」

「この世界には哺乳綱奇蹄目馬科の動物は存在しないみたい。」

「代わりにいるのがウマ娘。」

人間の容姿にウマの耳と尻尾を取り付けた不思議な生命体。

分類的には人間に入るらしく性別欄が男・女《font:ul40》馬《font》になつていたのは驚いた。

ウマ娘というのは俗称らしく正式な性別は《font:ul40》馬《font》が正しいらしい。

なおウマ娘は須らく娘、女性しかいないみたい。

割合は男女《font:ul40》馬《font》比で5:4:

1。

結構少ないのねウマ娘。

その為に昔から神聖視されてきたらしく、古代ではファラオはウマ娘かウマ娘から生まれた男児であったり、日本でも卑弥呼はウマ娘だった、とか天皇家には何人ものウマ娘が嫁いでいたりするらしい。

実際今の皇后陛下もウマ娘ですしね。

後は歴史的偉人も何人かウマ娘だったりする。

父親は歴史の教師らしくその手の本には困らなかったのがありがたい。

有名どころであればナイチンゲールやジャンヌダルクもウマ娘であつたようだ。

後は前世で好きだつた三国志に出てくる赤兔馬はどうなつたのかと調べてみたら吕布と合体していた。

吕布奉先の二つ名が赤兔だつたらしく、敵將の血に塗れながら飛ぶような身軽さで戦う姿から血まみれ兔、赤兔と言う二つ名がついたらしい。

『吕布ですーヒヒン！』

一瞬間の中にやたらイケメンボイスのUMAが浮かんだがすぐに消し去つた。

「あらあら、またお父さんの本を引っ張り出してきちゃって駄目じゃない」

「あゝかえして〜」

今読んでいたのは近代日本史の教科書だつた。

流石に子供が読む本ではないので悪戯していたと思われたのだろ

う。

「はい、こっちの絵本をお母さんと一緒に読みましょうね」

そう言っつて母が持つてきたのは白雪姫だった。

おお、白雪姫もウマ娘になつてるのね。

まあこの世界だと美しい娘≡ウマ娘の公式が成り立つから仕方がないのかもしれないけれど。

あ、白雪姫の継母女王もウマ娘になつてて自分で手を下すんじゃないの？

最後は隣の国の王子様（白馬がいないので輿に乗つてるのが何とも面白い）に義母共々助けられるつて話になつてるし……。

後で絵本を色々読んでみたら基本お姫様はウマ娘になつていた。

実際英国王室でもウマ娘のお姫様はいらつしやるし何より現役女王陛下がウマ娘だもんね。

尊い血筋には必ずと言つて良いほどウマ娘の血が入つていゝるし仕方がないね。

過去にはウマ娘の伴侶はとてつもないステータスだったのだから。

なお私の両親は二人とも普通の人間だが私はウマ娘として生まれつてきた。

これは割とよくある話らしく、ウマ娘の妻から普通の女兒が生まれる事もあるしその逆もしかりだそう。

また生まれてすぐのウマ娘の身体能力は普通の女兒とほとんど変わりが無い。

強いて言うなら視野範囲が広いのと聴覚が敏感なぐらいしか違いが無い。

だが年齢とともに少しずつ差異が大きくなつていき、小学生になると完全に運動能力では大人と子供以上の差が生まれる。

なので小学校では体育のみ別授業となつてゐる。

一緒にしたらそれこそ事故が怖い。

そりゃ〜小学1年生の時点で頑張つて走れば原付の制限速度（公道では30キロです）を追い越せるんだからねえ。

もちろん都会の小学校ではウマ娘専用クラスを作る事もできるが

田舎の学校ではそれも難しい。

私の生まれは物凄い田舎では無いけれどウマ娘専用クラスを作れるほど人数がいる小学校ではなかった為に学校側も色々工夫しているらしい。

運動会などは別の学校と合同開催にしてウマ娘同士で競わせるなど色々大変なのだとか。

父が夜にお酒を飲みながらそうぼやいていたのを覚えている。

早く他のウマ娘達と遊ぶの楽しみだなくつとぼんやりと絵本を眺めながらそう思った。

そして気が付けばもう小学6年生である。

いや時間飛びすぎ！と思うかもしれないが何せ小学校の内容は前世とほとんど違いが無いのだからしょうがない。

ウマ娘用の体育なんかも基本別枠で授業を受けるだけで内容に大きな違いが無かったからだ。

色々な都合で球技系はほとんどやれませんでした。

サッカーのシュートなんかしたら某子供名探偵か某少年サッカーキャプテンの強烈シュートだからしかたないね。

リアルで○○君ふつとばされた！は洒落にならない。

さて今私は二つのパンフレットを前に頭を悩ませている。

一つは地方トレセン学園のパンフレット、もう一つは中央トレセン学園のパンフレットである。

地方トレセン学園のメリットは実家が近い為に土日に戻る事ができる事くらいか。

デメリットはウマ娘達の中に向上心があるウマ娘が少ない事やトレーニング施設などの質で劣る事、レースもあまり注目されない事か。

中央トレセン学園のメリットは質の高いトレーニング施設やトレーナー、上を目指すウマ娘達で溢れかえっている事、レースの注目度はそれこそ前世の比ではない。

デメリットは実家が遠いので長期休暇以外では完全に寮生活になる事と都会暮らしに適応できるか分からない事……。

色々メリットが多い中央トレセン学園がやはり魅力的なのだが果たして私は入る事が出来るのだろうか。

当然だがレベルが高い分入学難易度も高いと聞く。

落ちてしまったからじゃあ地方トレセン学園に・・・とは気分的にも中々上手くいかないだろう。

逆に地方トレセン学園に最初から決めてしまうと後で後悔しそうではある。

そんな風に頭を悩ませていると母がそつと頭を撫でてくれた。

「大丈夫よ。学校の先生もこの成績なら十分中央トレセン学園でやっていけるって言っていたし後はあなたのがんばり次第よ」

「そうだぞ。お前は俺たちの娘なんだ。大丈夫さ」

両親に背中を押されて私は中央トレセン学園を受験する事に決めた。

そして私は見事に合格する事が出来たのであった。

「ふわ〜ん」が《font:ul40》中山競馬場《font:ul40》中山競馬場《font:ul40》母に連れられて(父が仕事の都合で来れなかった為)やってきた《font:ul40》中山競馬場《font:ul40》。

今日は12月25日、そう《font:ul40》有馬記念《font:ul40》である。

物凄い人の数に苦勞しながら私たち母子はレースを見るために中へと入っていった。

「暮れの《font:ul40》中山競馬場、天候は晴れ、良馬場《font:ul40》となっておりませんが冷え込みは厳しいです。ですが観客の熱気は最高潮、レースの始まりを今か今かと待っております」

解説の人の声を聴きながら私はレースが見えるように一番前に出る事にした。

幸い私が子供のウマ娘と気が付いた周りの人が笑顔で前を譲ってくれたので簡単に一番前へと出てくれた。

「さあ各ウマ娘が続々とゲートに入っていきます。選び抜かれた13人、《font:ul40》有馬記念《font:ul40》を取るの誰か。最後のウマ娘が収まりました。・・・スタートしました！ナリタブラ

イアンが好スタートを見せました！ですが内からやはり予想通りにツインターボが飛ばして行きます！ツインターボ早くもリードを広げて行きます。二番手集団にはハイサイシーサーなどが居ます。先頭との差は早くも7、8バ身と言ったところ。ナリタブライアンは・・・二番手集団の後方につけておりますがライスシャワーなどがガツチリとマークしております。集団を嫌ってかなりタブライアン外へ出ます。一度目のスタンド前ですがツインターボさらにリードを広げてもはや50メートル以上開いているでしょうか。ツインターボが大きく逃げます。外に出たナリタブライアン二番手集団に並びかけます。さらにその外ライスシャワーとサクラチトセアメがマークしております。ナイスネイチャも外へ出ました」

目の前を13人のウマ娘たちが走っていく。
周りの唸るような歓声に驚きつつも私の眼はレースに釘付けだった。

「font:ui40》有馬記念《font》の距離は2500メートル、長距離としては短いがそれでもスタミナを問われる距離だ」
「どうした急に」

重度の《font:ui40》競馬ファン《font》であろう男性二人が話し合っている声が聞こえてきた。

「早すぎるんだ」

「ツインターボが飛ばすのはいつもの事だろうか？」

「確かにツインターボのペースは56秒に近い尋常ではないペースだが他のウマ娘達ですら58秒切りそうだぞ」

「なんでそんなに」

「ナリタブライアンが好スタート過ぎたんだ」

「どういう事だ？」

「おそらくナリタブライアンは好スタートを切る事で他のウマ娘達にプレッシャーを与えようとしたんだろう。前寄りではあるが差しが得意のナリタブライアンが前を走ろうとしているとトリックを仕掛けたんだ」

「でもそれが何でハイペースに？」

「ナリタブライアンの予想外だったのがツインターボだ。逃げウマ娘は複数いても大逃げ、しかも後先考えない破滅逃げとも呼べるウマ娘はそうそう居ない」

「そうか！全員がナリタブライアンを意識し過ぎたあまりに！」

「ああ、ナリタブライアンの好スタートをツインターボがあまりの速さでハナを取ってしまったから二番手集団がペースメイクをミスったんだ。自分達が遅すぎると勘違いした。さらにナリタブライアン自身は下がろうとしたが」

「徹底マークのライスシャワーやサクラチトセアメ、全体のペースが速くなった事で引つ張られた後方集団に押し上げられたって訳か」

「ああ、さらにナリタブライアンは集団を嫌う質だ。外へ逃げたが下がろうにもマークがついている」

「そして二番手集団は外に出たナリタブライアンを意識してさらに飛ばす……」

「ある種の悪循環が出来上がってしまったな……」

「すつごいね〜」

「わ！君は……？」

二人の結論に思わず感嘆の声を出した私を二人は驚きながら見ていた。

「私来年トレセン学園に入学するから学校の下見しながらレース見に来たの！」

その言葉に二人は笑顔になった。

「あの青いお姉ちゃん早いね〜」

あれだけ引き離しているのだ。

きつと強いウマ娘に違いない。

「だが最初が早いだけでは勝てない。それがレースだよ」

「えくずつと一番つて格好いいのに〜」

「ならあのお姉ちゃんが勝てるように応援してあげよう」

「うんー！」

私の素直な返事に二人は微笑ましいものを見た顔と顔をいい笑顔をしていた。

「最終コーナーを回ってまだツインターボが先頭だ！後続の娘達は苦しいか！しかしこのウマ娘！怪物三冠ウマ娘ナリタブライアンが大外から一気に捲り上げる！場内はどよめきと歓声に包まれている！」
レースも最終直線に入って大盛り上がりだ。

まるで地響きのような歓声を受けて青い髪の小柄なウマ娘と黒い髪のウマ娘が競り合っている。

青い髪のウマ娘はもう限界なのかもしれない。

走るフォームはメチャクチャで、顔もとても苦しそうだ。

黒い髪のウマ娘の方も苦しそうだはまだ力が残っていそうだ。

「あと少しだぞー！」

「ツインターボ行けー！」

隣にいる二人が大きな声で青い髪のウマ娘、ツインターボに声援を送る。

「がんばれー！青い髪のお姉ちゃん！」

私も精一杯の大声で彼女を応援する。

一瞬だったが彼女と目があつた気がした。

「負けられないんだあ!!今日だけはあああああ!!」

彼女から渾身の咆哮が放たれた。

「残り200を切っているがナリタブライアン苦しいか!?ツインターボがまだ先頭！懸命に粘る！ナリタブライアン苦しいながらも追い上げる！内ツインターボ！外ナリタブライアン！ツインターボ！ナリタブライアン！まさかまさか！まさかのツインターボ逃げ切ったゴールイン！これが逃げるといふ事だ！」

その日、私はあの小さな背中に憧れた。

第2シーズン第2話 競走馬生の始まり（馬）

春になって暖かい日差しの中の放牧中。

心地よい暖かさにウトウトしていると牧場主さんが見慣れない男性を連れてきた。

「どうやら誰かを買いに来た様ですね」

今年是不受胎だった為に現在一緒に放牧されているイクノ母さんがそう言った。

「へへ、僕の馬主になってくれるのかな？」

「その可能性も十分ありますね」

非常に優れた血統ではなかった僕は所謂セリに出される事はなかった。

まだ馬主が付いていない状況では競争どころではない。

このままだとお肉になっちゃう！

「そうなりたくなければしつかりとアピールをなさい」

「イエス、ママ」

厳しい母の言葉を背に受けて馬主候補の方へと歩いて行った。

「お、ちようどこつちに来ましたね。こいつが例のツインターボの息子ですよ」

「ほほう、こいつが」

どうも初めまして。

「本当にこいつを買われるので？」

なんと！僕を購入希望ですと!?

これは是非ともアピールをせねば！

頑張って父や母みたいに走りますので是非とも馬主になってくださいえ！

「ははは、元気がいいな！俺はお前の親父に夢をみたのさ。お前もそんな夢を見させてくれる。そんな気がしたから買いに来た」

父が見せた夢……。

「ああ、最後の直線で抜き去るのも確かに強いだろう。だが最初から最後まで先頭を譲らねえ。負けるときは潔く負ける。そんな姿に俺

は浪漫を感じたのさ」

浪漫……。

その浪漫、僕も追っていいですか？

「おう！誰が呼んだか浪漫男こと室満男！二言はねえ！」

「ははは、氣前がいい事で羨ましいですな」

牧場主さんがそう言つて室さんを褒める。

「まあ大見え切つてはいるが方々に声をかけて資金を集めた組合馬主だけだな」

話を聞くとどうやら室さんは高級輸入車ディーラーのオーナーさんらしい。

収入的に個人馬主をやれない事は無いらしいが家族と相談した上で組合馬主にしたらしい。

「まあうちの常連さんでそっち方面に氣のある人間に声かけただけなんだがね」

高級輸入車を買いに来る人なので資金的に問題がある人はおらず、分散することでリスクヘッジにもなるからと声をかけた所色よい返事を貰えたそうだ。

「ははは、個人馬主なんていまや数えるほど少なくなつてしまいましたよ。高いお金をかけてもレースで勝てるかどうか、馬券を買うよりさらに強烈なギャンブルですからね」

そもそも前提条件がすごい厳しいしね。

「さて、こいつの名前を決めないといけませんね。室さんは案がありますか？」

「資金を出してくれたメンバーには名前の候補を出してもらつたんだがなあ。デュアルジェットとかダブルスラストとかそんなのばっかだったな」

言い間違いシリーズの名前は嫌じゃあ！

「まあどれもピンとこなかったんだがそんな中皆揃つて口に出したのがドツカンターボだったな」

「ドツカンターボですか？」

牧場主さんは首を傾げた。

まああまり聞きなれない名前だしね。

「ああ、ドツカンターボってのはターボエンジン車の中でもターボラグが大きい車の愛称というか蔑称というかちよつと微妙な感じの名前でしてね。ターボってのはエンジンとは繋がってはいませんがアクセルとは連動してないんですわ。エンジンが高回転になるとドカッとパワーが出る。一気に爆発的に加速するからドツカンターボなんて一部マニアの間で呼ばれてるんですよ」

「なるほど・・・しかしドツカンターボですか・・・」

お世辞にもカッコいい名前とは言い難いね。

「なのでドツカン、つまり衝撃、英語でインパクト、インパクトターボってのはどうですか？」

「インパクトターボ、確かにそちらのが格好いいですね。しかし逆ではだめなのですか？」

ターボインパクト・・・なんか類似商品みたいな名前になりそうな気がする・・・。

あ、でもこつちのが先に生まれてるのか。

「まあ簡単な直訳ですがターボの衝撃、より衝撃的なターボ、の方が速そうじゃないですか」

「まあたしかにそうですね」

こうして僕の名前はインパクトターボに決まりました。

とりあえず第一歩は踏み出せたかな？

「どうだー苦しく無いかー？」

あれから暫くして鞍をつける訓練が始まった。

最初は違和感があったがキュツと締められると走り出したい気分になるのは競走馬としての性か。

「よーし、今日は乗馬の訓練もするからなー」

馬具になれた頃を見計らって次は乗りの訓練が始まった。

前世の記憶のお蔭かあまり苦にならず、すぐに人をのせて走るのに慣れた。

「怪我に注意を怠らないようにして頑張りなさい。貴方ならそれが出来るはずです」

「分かったよ母さん」

イクノ母さんに見送られて、馬運車に乗り込んでいく。これから美浦トレーニングセンターへと移されるのだ。

「がんばってこいよー!」

「怪我するなよー!」

牧場主や厩務員達に見送られて僕は旅立った。

やってきました・美浦トレーニングセンター。

ここがあの父も所属していた美浦トレーニングセンターか。

「おう、お前がツインターボの息子だな」

ウツス、インパクトターボです!よろしくお願いします!

どうやら自分の調教師であろう人が近寄ってきた。

「わしの名前は山田だ。室さんとの話はしつかりついとる。お前さんの事はわし等に任せるとの事だ」

まあ素人さんが下手な口出しするよりよっぽどそっちのがいいよね。

「イクノデイクタスの息子でもあるからどれぐらいレースに出れるか楽しみだな」

おっとこれはスパルタになりそうな予感……。

「まずはレースに出れるようにせんといかんな」

よーしエイ!エイ!ムン!で頑張るぞ!

……自分で言ってるエイ!エイ!ムン!ってなんぞ?

「やあ山田さん、うちのインパクトターボの調子はどうですか?」

調教が始まって少ししてから馬主の室さんが美浦トレセンにやってきた。

「やあ室さん、ちょうどインパクトターボの事で話がしたかったのです」

「何かありましたか?」

訝し気に尋ねる室さん。

「今後のインパクトターボの事なんですがね、逃げ一辺倒になりますか?よろしいですか?」

「その様に判断された理由をお伺いしても?」

「ええもちろん、何度か走らせてみて思ったんですがターボは出足の加速は素晴らしいものがあり、速度も悪くなく、スタミナも中々に良いものがあります」

「ふむ、それだけ聞くと良い事のように思えますが？」

「確かに悪い評価ではなさそうに聞こえるけど・・・」。

「ええ、ですがこいつには圧倒的に末脚がありません。全くない訳ではないのですが伸びが悪いですね」

「つまり差しや追い込み向きではない、と？」

「ええ、先行でも辛いでしょうね。何せ目の前に他の馬が居るとレースに集中できてないようですから」

「いゃん、バレてたのね。」

「実際の馬が前に居ると気になるというか落ち着かないのである。」

「そうですか。山田さんがそう判断したのならそれに従いますよ。ああそうだ、あんまり気にするようなら外してやってもいいのですがメンコを着けさせてやってもいいですかね？」

「そうですね。少しは集中力が増す可能性がありますますが馬によっては逆効果ですしね」

「そういつて室さんはメンコを持ってこちらにやってきた。」

「お久しぶりですオナー」。

「元氣そうだな。お前にいい物を持ってきたぞ」

「そういつて取り出したのは青いメンコだった。」

「お前の親父がつけていたメンコと同じ色で作ってきた。気に入ったか？」

「鮮やかな青に耳の先だけ白と緑の縞模様のメンコは室さんの手の中で輝いて見えた。」

「嬉しいです！早く付けて付けて！」

「ははは、そうか気に入ったか！」

「室さんは嬉しそうに笑って近くにいた厩務員にメンコを着けるようをお願いした。」

「おう、良く似合っているぞ」

「顔と耳を覆うメンコ。」

新品のはずのそれからは何故か懐かしい匂いがした。
それから暫くして……。

「山田調教師、お久しぶりです」

「おお若井君元気だったかい。そろそろG1は出られそうかね？」

「はい、今30勝ですから次に勝てれば出られますね」

山田調教師が何やら小柄な男性と話している。

会話の内容から察するにまだまだ若手の騎手なのだろう。

「こいつがお前に乗ってもらいたいインパクトターボだ」

「こいつがああツインターボの息子ですか」

「おう、ついでに言えばイクノデイクタスの息子でもあるな」

「あの鋼鉄の女ですか」

拝啓故郷の母上様。

貴女の二つ名なんかパワーアップしてませんか？

「こいつを走らせる時は難しいぞ。必ず先頭を走らせないと急にやる気を失うからな」

「逃げですか。逃げ馬には何度か乗ったことがありますので様子を見ながら、ですね」

ウツス！自分逃げなら自信あるツス！

「とりあえずデビュー戦はこいつの好きに走らせてやれ。後ろとの距離を意識してしっかりとこいつをゴールまで導いてやってくれ」

「分かりました。よろしく頼むぞ、インパクトターボ」

こちらこそよろしくね。

やってきましたデビュー戦。

場所は中山競馬場。

ここが親父が逃げ切った競馬場……。

そう思うと胸が熱くなる。

「ほら、行くぞ」

厩務員に促されてパドックへと足を運んでいった。

「中山競馬場、第六レース2歳新馬戦1800メートル。今年から馬齢の数え方が0歳からスタートに代わりました。今まで3歳が新馬戦でしたが今年からは2歳が新馬戦となります。そんな節目の年に

デビューする今日の6頭。1番ボンバーストライク、482キロ、騎手は松永騎手です。2番ゴールドヘッド、455キロ、騎手は小田騎手。3番サラリーシーフ、471キロ、騎手は泥田騎手。4番インパクトターボ、443キロ、騎手は若井騎手。5番ワツタイム、461キロ、騎手は暁騎手、6番シルバーボール、騎手は桂騎手。以上六頭です」

ここがターフ、ここが戦場……。

荒ぶるほかの馬たちを余所に一人そんな事を考えていた。

「大丈夫、山田さんが太鼓判を押したお前ならやれる」

騎手の若井さんがそう言って首筋を叩いて宥めてくれる。

大丈夫、ちよつと緊張してるだけだから。

首を振って返事を返す。

誘導員に促され、ついにゲート入りした。

SIDE：実況

「収まりました。……スタートしました。一頭飛び出しました4番インパクトターボ良いスタートを切りました。どんどん後続を引き離していきます早くも3馬身。まだ固まったままの後続一頭インパクトターボだけが飛びぬけていますがこれはどうだ早すぎないか？鞍上との折り合いがつかないのか？いや、若井騎手押しています。これはなんと大逃げです。新馬戦でまさかの大逃げとは大胆な作戦に出ました若井武志。二番手集団から大きくリードを取りましてこれは12、3馬身といったところでしょうか？大きなリードをさらにさらに広げていきます。後方は行くべきなのか抑えるべきなのか悩みどころです。折り合いがつかない騎手もいます。さあインパクトターボの大逃げに場内は新馬戦とは思えないほど沸いています。果たしてセーフテイリードになるのか。それとも後続が差し切るのか。早くも残り800メートル。インパクトターボはまだまだ飛ばしておりません。すでに20馬身近い差が開いています。後続はついに痺れを切らして上がっていくようですが思うように上がりません。インパクトターボだけが第4コーナーに入ります。後続がやっと上がってきますがこれは完全にセーフテイリードだ。直線に入ってインパ

クトターボ一人旅。ですが失速する気配も緩める気配もありません。鞍上の若井騎手ムチは打っていませんが流す様子もありません。インパクトターボ見事な逃走劇で今ゴール板を駆け抜けましたゴールイン。名前の通り衝撃的なデビューをしましたインパクトターボ。見事な大逃げに会場から歓声が上がっております。今後が楽しみな馬がデビューいたしました。」

SIDE：インパクトターボ

決まった！スタートダッシュ成功！

一気に速度を上げて他の馬を引き離す。

「いくぞ！ターボ！」

後ろの若井騎手も走りを手助けしてくれる。

「お前は走りに集中しろ！余計なことは考えるな！」

余計な事は考えない。

後ろも、ペースも無視してひたすら前に進む。

細かなコース取りは若井騎手が指示してくれる。

カーブを曲がるときに重心を移動させて曲がりやすくしてくれる。

前へ、前へ、前へ・・・。

気が付けばあつという間にゴールを超えていた。

・・・あれ？もう終わり？

「すごいなお前は。あれだけ走ったのにまだまだいけそうだな」

若井騎手がそう言っつて首筋を叩いてくれる。

うん、とりあえず勝てたからよし！

「どうだ？インパクトターボの具合は？」

「特に疲れた様子も無くまだまだ走れそうな感じですよ。あれだけの爆走で異常が出る様子もないですし」

実際確かに走った後だから多少疲れてはいるがまだまだ余裕がある。

「ほう、流石はイクノダイクタスの息子だな。室さんとの相談次第だが続けてレースに出してみるのもありだな」

「無茶して潰さないようにしないとイケませんね」

そもそもガラスの足と言われるくらい華奢なんだよねサラブレツ

ドの足って。

「まあさすがに今日明日走らそうって訳じゃあないんだ。様子見て大丈夫そうならな」

多分すぐに走る事になるんだろうなあ。

そんな事を思いながら大きく息をはいた。

第2シーズン第2話 競走人生の始まり（ウマ娘）

時間は遡って中央トレニングセンター学園面接試験日……

5人のトレーナーが教師と思わしき大人と中央に一際小柄で前に理事長と書いたプレートが置いてなければとても理事長とは思えない女性、そしてその斜め後ろに立つ緑の服と帽子の女性が見つめている。

「それでは貴女のお名前と、中央トレニングセンター学園に入りたいという気持ちをお聞かせください」

緑の服に帽子を被った、たづなさんと名乗った女性に促されて私は思いを口にした。

「はい、室インパクトターボです。ウマ娘として生れたからには折角のチャンスを活かすためにはやはり中央トレニングセンター学園に入るのが一番だと思っただけです。私自身どこまで走れるのか、レースで勝てるのかは分かりませんが上を目指す心持は十分にあります。特に質の高いトレーナーが沢山いらつしやる中央トレニングセンター学園での指導は、必ず意義あるものとなると確信して受験をしました」

「はい、ありがとうございます」

結局中央にいた小柄な理事長は一言も喋らなかつた。

「苦痛！せめて一言くらい声をかけたい！」

「理事長が話し出すとただでさえ緊張していて話がまとまらない受験生達がさらに変な方向へ向かつてしまうのでダメです」

私が退室した後そんな言葉が交わされていた。

そして翌日、実力試験日……

「受験番号880番から890番までの人！番号順に内側のスタート位置についてください！」

私の受験番号は881番なので内側から二人目だ。

筆記試験、面接試験、実力試験、この三つをクリアして初めて中央トレセン学園に入学できる。

ちなみに筆記試験は全員同日に行われるが面接試験と実力試験は

人数が多いため受験番号ごとに日が異なる。

私の場合は面接試験が先で実力試験が後の日程だった。

「よいい、スタートー！」

試験官のトレーナーの声に合わせて受験ウマ娘達が走り出す。

当然私も走り出した。

距離はテストの為に1000メートルと短く直線のみだ。

私は得意のスタートダッシュを駆使して最初から最後まで先頭を譲らずにゴールする事ができた。

このレースは勝ち負けよりタイムの方が重要であるために先頭でゴールする必要はあまりないのだが気持的に譲りたくないのと周りに他のウマ娘が走っているのが見えると集中できない為に私は先頭を譲りたくないのだ。

「はい、これで試験は終了です。気を付けて帰ってね」

「はい、ありがとうございます」

トレーナーの助手をしていた先輩ウマ娘さんに声をかけて貰い、私はお礼を言つて受験をする為に泊っていたホテルへと帰る事にした。

一か月後・・・

「ターボちゃん、中央トレセン学園から通知書が来たわよ」

「お母さんありがとうございます！」

学校から帰ってきた私の元に母が中央トレセン学園の封筒と渡してくれた。

さっそくハサミで封を切つて中身を出すと、そこには非常に達筆な字で『合格!!』と大きく書かれた扇が入っていた。

「なんで扇なのかしら？」

「さあ？あ、普通の合格通知も入ってるよ」

『拝啓、室インパクトターボ様。』

貴殿の試験成績、面接を踏まえました結果。

中央トレーニングセンター学園への合格を通知させていただきます。す。

20×年 中央トレーニングセンター学園 代表理事：秋川やよい』

こちらはごく普通にプリントアウトされたものだった。

兎に角、私はこれでトウインクルシリーズへの第一歩を踏み出すことに成功したのであった。

そして入学式当日・・・

「やつぱり大きいなあ。試験の時と下見の時は最低限しか見れなかったから迷わないといいけど・・・」

本当なら学園見学会にも参加したかったのだが両親の都合で無理だったのだ。

《font:ul40》有馬記念《/font》の時の下見は寮の下見や制服の合わせなんかが中心で学園の下見は殆どできなかった。

受験の時は勿論教室と面接室、それから実力試験の時の練習コースしか見れていない。

ウマ娘科中等部高等部だけでなく、専攻学科やトレーナー育成学科などなど多くの学部を構える中央トレセン学園は敷地面積だけでも、もはや小さな町といっても過言ではない。

「えーつと講堂は・・・」

「新入生ですね。私が案内しますのでこちらへどうぞ」

事前に貰った簡易の案内図を見ていると凜とした女性の声がかげられた。

「あ、はい、よろしくお願い・・・」

「さあこちらに・・・」

私と声をかけてくれた女性が同時に固まった。

「・・・なんだろう」

「・・・なんでしよう」

「運命的な何かを感じます」

そこにいたのはストレートの明るい栗毛をきちつと切りそろえ、後ろ髪だけ長い三つ編みにした大きな丸眼鏡が似合う先輩ウマ娘がいた。

「イクノデイクタスと申します」

「インパクトターボです」

自然とほほ笑むイクノデイクタスさんに私も笑顔で挨拶をする。

「さあ、入学式までまだ余裕がありますがのんびりしている訳にも行
きませんし講堂へ案内しますね」

「はい、よろしくお願いします」

自然と出された手をそつと取り、私は手を引かれるままに案内され
た。

「・・・であるからして！諸君らは勉学、競走何方も粉骨碎身の精神で
励み、文武両道を目指し、日々の努力を怠らないようにしてほしい！
以上、生徒会長シンボルドルフからの挨拶とさせていただきます」

かなり堅苦しい挨拶ではあったが無敗の三冠ウマ娘にして七冠の
頂を手にした皇帝シンボルドルフ会長の挨拶に大きな拍手が送ら
れた。

彼女に憧れるウマ娘は非常に多いので拍手をしながらどこかウツ
トリした様子のウマ娘達も居る。

私は流石にそこまでファンと言うわけではないが彼女の様に強い
ウマ娘でありたいとは思っている。

その後、来賓の長い挨拶を聞き流し、教室へと案内され、簡単なレ
クリエーションの後、寮へと向かう事になった。

「よく来たな新入生達！アタシが寮長のヒシアマゾンだ！気軽にヒシ
アマ姉さんとも呼んでくれ！」

褐色肌の姉御肌、ヒシアマ姉さんに案内されて私を含む新入生たち
は美浦寮を歩いていく。

「よーし次はあんただいインパクトターボ・・・ターボ？」

「あの・・・私に何か？」

何だか苦虫を噛んだような表情をしているヒシアマ姉さんを私は
訝し気に見つめる。

「あーすまん、個人的にその名前に苦い記憶があつてな。すまん、お前
のせいじゃないんだが・・・」

そう言えばあの《font:ul40》有馬記念《font》で
私によく似た名前の、やはり運命的な何かを感じるツインターボさん
が勝ってましたっけ。

たしかヒシアマ姉さんは4位・・・。

「はっはっはっ新入生！人の痛い所は突かない方が身のためぞ！」

ミシミシミシミシッ！

「い、イエス！ママ！」

肩が！肩が砕ける！

「分かれればよろしい。それとお前の部屋なんだが少し事情があつて少しの間一人になるぞ」

「へ？何ですか？」

寮は確か二人部屋だったはず・・・

「実はお前の同室になる予定だった新入生が個人的な事情で入寮が少し遅れるそうだ。それほど遅くはならないらしいがそれまで一人部屋だからってあまり散らかさないようにな」

「はい、分かりました」

その後諸々の諸注意やシーツなどの備え付け備品類、詳しい規則の書かれた冊子を渡されるとヒシアマ姉さんは他のの新入生を連れて去っていった。

「んゝ最初は一人部屋かゝ、気を使わなくていいけどちよつと寂しいかなゝ。さて、どっちのベットと机を使おうかなゝ」

部屋は左右対称で作り付けのベットと勉強机、クローゼットや棚が配置されている。

部屋の中央には大きめのテーブルが設置されており、大きめの窓からは日光が差し込んでいる。

また各部屋に一つ共用のテレビも設置してある。

「同室になる子はゲーム好きかなあ？」

一人で黙々とやるゲームも好きだけど皆でワイワイやるゲームも好きな私は同室の子と遊べるといいなゝと妄想しながら手荷物で持ち込んだ携帯もできるゲーム機を設置した。

一応深夜遅くまでのゲーム等は規則として禁止されているがあまり守られていないのが実情であり、持ち込みに関してはあまり煩く言われない。

ただし度を過ぎると反省文などの罰はあるので何事もほどほどが一番だろう。

流石に授業中寝てばかりだと生活指導も入るようである。

「ん〜とりあえず右側を使わせて貰おうつと」

私は事前に送ってもらった段ボール箱を開いては中身を取り出していった。

その後、部屋の準備が終わった後、夕食の時間までゲームをして時間を潰すと食堂へと向かった。

「うん、すごく美味しい」

「はは、そうだろ？」

まだ友達も相部屋の住人も居ない私を気遣ってヒシアマ姉さんが一緒に食事をしてくれる。

寮の食事は質、量ともに充実しており、恰幅のいいおばちゃんが慣れた様子で大量の食事を作っていた。

「あれ？アマゾンさん珍しいね。新入生と食べてるなんて」

「おう、ライスシャワーか。いやこの子の相部屋の子がまだ来てなくてね」

声をかけたのは黒髪で小柄なウマ娘、ライスシャワーさんだった。

「初めまして、新入生のインパクトターボです。ライスシャワーさんって確か漆黒のステイヤーですよね！」

「あはは、ライス、今そんな風に呼ばれてるんだね」

以前に比べて陰りの無くなったライスシャワーは嬉しそうに笑う。

そんなライスシャワーを見てヒシアマゾンもホツとした様子で笑う。

「えつとライスも一緒に食べていいかな？」

「はい、色々なお話聞かせてください先輩！」

小柄な為にあまり先輩と呼ばれないライスシャワーはちよつと困惑しつつも嬉しそうに自分の事を話し始めた。

翌朝……

「ふあ……えつと……あ……そうか……家じゃないんだっけ……」

まだ慣れていないベットで寝たために今一熟睡できなかった私は少し寝ぼけたまま起きると大きく伸びをする。

棚の上に置いてあるメガネをかけるとベットから降りた。

「さて、朝の準備つと」

クローゼットを開けてハンガーにかけてある制服を取り出す。

さっと着替えるとお父さんから貰った緑と白のストライプ模様のお気に入りリボンを右耳につけ、鏡を見ながら明るい栗毛の髪と尻尾にブラシをかけていく。

「自分の事ながら本当に不思議ですなあ。なんで私の髪って毛先にいくと青くなるんだろう?」

染めているわけではないのだが私の髪は毛先だけに青いグラデーシヨンが入っている。

散髪した場合は最初のうちは栗毛のままなのだが時間とともに青くなってくる。

現在ウマ娘の中でも最大の不思議とされている髪色の中でもさらに特異といえるだろう。

「額の星と呼ばれる変色も髪の毛が伸びても同じ位置にあり続けるらしいし、私のこれもその一環なのかなあ?」

前髪を左右に流し、後ろ髪を肩の辺りで一つにまとめると鞆を持って部屋を後にした。

第2シーズン第3話 波乱の重賞レース（馬）

新馬戦レースから暫くして・・・

「スタートしました。一頭好スタート5番のインパクトターボ。他はややバラついたスタートとなりました。先頭を走るのはインパクトターボ早くも5馬身とリードを広げております。早すぎるようにも見えますが鞍上若井騎手折り合いがつかないのでしょうか？いや、追っています。どうやら大逃げを打ちました鞍上若井。若気の至りでなければ良いのですがどうなんでしょう？後続はインパクトターボに引きずられて上がるうとする馬を抑える様子が見られます。2番手集団先頭はバイトデルトクマですが折り合いがつかない様子。さあインパクトターボただ1頭だけが早くも中間を通過しました。その差は15馬身といったところ。非常に縦長の展開となりました。第三コーナーを回るインパクトターボですが失速する様子はまったくみられません。悠々と・・・いえ全力で走り続けていますインパクトターボは第四コーナーに入ろうかという所。後続はいまやつと上がってきましたがこれは間に合うか分かりません。最終直線に入りましたインパクトターボ。これはセーフテイリードだ。完璧な逃げ切り体制に入りましたインパクトターボ。後方一番人気のホワイダニツトが前を塞がれてもがいています。後方を一切振り返ることなくゴール板を超えましたインパクトターボゴールイン。1600メートルを完璧に逃げ切りましたインパクトターボ。これで2戦連勝です」

「スタートしました。1頭飛び出しました3番インパクトターボ。どうやらターボエンジンは見事に受け継がれた模様。全開で走り出しました早くも3馬身。福島競馬場に再びターボエンジンが帰ってまいりました。追いかけるのは2番人気1番モーニングコート。その後ろスワローテイルと続いています。最後方には出遅れましたイブニングドレス。しかし場内のこの歓声はただ1頭インパクトターボに向けられていると言っても過言ではないでしょう。1番人気インパクトターボ大逃げです。その差はもはや実況席では分からないほ

ど開いています。流石に今日は逃がさないとばかりに後続が早くも上がっていきませんがこれはどうなんでしょうか。インパクトターボただ1頭第四コーナーを回っています！まもなく直線です！モーニングコートちよつと疲れたか！スワローテイルが前に出ます！ですがインパクトターボとの差がつまりません！イブニングドレス今ようやく上がってきましたがこれはもう無理だ！唸れインパクトターボ！ターボエンジン全開だ逃げ切った！インパクトターボ逃げ切りです！福島に再びターボエンジンの轟音が響き渡りました！」

「スタートです。やはり1頭インパクトターボが飛び出していきました。他にも先行馬が居ますが今日も先頭は譲りません8番のインパクトターボです。その後ろは3馬身離れてサンライズビームが追いかけてます。その直後にプラムレインとオータムクラウドこの辺りが先行馬集団です。最後尾はこちらもやはり定位置2番ウェイティンクスネーク追い込み馬です。先頭インパクトターボは大きくリードを取りますが今日はやや控えめ10馬身。サンライズビーム早くも疲れたのかプラムレインに前を譲りました。プラムレインとオータムクラウドが懸命に後を追いますがまだその差は8馬身といったところ！インパクトターボ1頭早くも直線！末脚自慢のウェイティンクスネークですがこれは届くか!?今一気に先行馬集団を抜きました。がまだ距離があります！インパクトターボはまだ粘っています！追いつがるウェイティンクスネーク！待たせすぎたかスネーク！3馬身差まで迫りましたが逃げ切られました！勝ったのはインパクトターボです！」

「スタートしました。今日も1頭抜け出したのはインパクトターボ1番です。ここまで非常に連戦が続いておりませんが足色が鈍った様子はありません好スタート。2番手今日は控えめ・・・いえインパクトターボが飛ばしているだけでした2番手はハイスペックジイ。その外にはフルスペックママと続いています。インパクトターボはいつも通り大逃げで早くも中間を通過。この馬の辞書には抑えるという文字は無いのでしょうか。今日も全力で逃げております。ハイスペックジイ追い上げます。ここまで逃げで走ってきた彼が追い上げ

るというのは珍しい光景です！ですが伸びないか！フルスペックママが追い上げる！届くか！伸びきらないか！インパクトターボの逃げ切りですゴールイン！5連戦をすべて大逃げで勝ちましたインパクトターボ！鋼鉄の足が逃亡者魂と融合して恐ろしい馬が誕生しました！果たしてこの馬はどこまで逃げ続けるのか！」

重賞ではないとはいえデビューから続けざまに4戦走らされたんですが！

思った通りスパルタになったよコンチクショウ！

「すごいですうちのターボは」

「ええ、あれだけの連戦を大逃げしても疲弊する処かどこにも異常一つでないなんて」

本当に頑丈に生んでくれたイクノ母さんには感謝しかないよ！ありがとう！

感心するというよりは、与えられた玩具で遊びたがる子供の様な瞳で僕を見つめる山田調教師と室オーナー。

「ではそろそろ重賞デビューと行きますか」

「お、ついにですな」

そろそろお休みくれてもいいのよ！

「これを勝ったら考えてやろう！」

考えるだけなんですわ分かりますん！

やってきたのは北海道札幌競馬場。

北海道とは言え9月はまだ涼しいとは言えないほどだった。

それでも残暑厳しい関東に比べればずっとマシだけど。

札幌2歳ステークスGⅢに出場する事になった僕はパドックをグルグル回っている。

「・・・あ・・・あの」

ん？何やらウイスパーパーボイスが聞こえてきたが・・・？

「は、初めまして。き、今日はよろしくお願ひします」

ちよっとオドオドした様子の青毛の馬が声をかけてきた。

ゼッケンは4番、どうやら隣のゲージの馬らしい。

名前はサムシングブルー、今日の二番人気の馬で牝馬の様だ。

「こちらこそよろしく」

「は、はい」

何やら他にも話したそうだったが残念ながらパドックの時間は終了になってしまったのでそれ以上話す事が出来なかった。

しかしなぜだろうか。

何だか妙な悪寒がするのは……。

「なんだ？今日はちよつと落ち着かないなターボ」

若井騎手が騎乗しても悪寒が消えない僕はちよつとあたりを見回してしまふ。

「お前も重賞の空気になるのか？大丈夫だ。落ち着けて。いつも通り走れば勝てるさ」

若井騎手はそう言つて首筋を触つてなだめてくれるがどうにも落ち着かない。

ええい今更緊張も何もないだろうが！

そう自分を言い聞かせてゲートに入ろうとしたが足が止まってしまふ。

その後、少し歩いて気分を落ち着かせた後に若井騎手に尻尾を引かれて何とかゲートインした。

「今日はインパクトターボがゲート入りを嫌がりました。今若井騎手に促されて何とか収まりました。体制完了。……スタートしました。先ほどの様子から心配されたスタートですが今日も見事に好スタートで先頭に立ちましたインパクトターボ。今日も一人旅……いや！今日は後ろに1頭着きました！4番のサムシングブルーです！」

なんですと!?!逃げ馬だったのこの子!?

「……く……てく」

ん？何かブツブツと呟いているような……？

どうしても後ろが気になってつい後ろを見てしまった。

馬の視界って広いから後ろ見るの便利よね。

ちよつと顔を向けるだけで見れるんだから。

しかし見ない方が良かったと直ぐに後悔した。

「ついでく……ついでく……」

そこには瞳孔全開でブツブツと喋るサムシングブルーちゃん居た。

ヒイ！ウイスパーボイスでブツブツと喋られると余計に怖い！

助けてポリスマン！不審者です！

「まさかターボに付いてくるやつがいるなんて！もつと飛ばすぞ！」

言われずともそうします！

「のがしません・・・！」

ヒイヒイ！助けてオカーン！

(自分で何とかしなさい)

心の中のイクノ母さんは冷たかった！

多分現実でも同じ事言うだろうけど！

「ツインターボ産駒唯一の後継者インパクトターボ！ライスシャワー産駒期待の牝馬サムシングブルー！2頭だけが全く別のレースをしているようです！尋常ではない速さで駆け抜けるインパクトターボとサムシングブルー。ほかの馬たちはこの光景にどうしたらよいのか分からない様子！逃げるインパクトターボ！追うサムシングブルー！勝つのは逃亡者の血筋か！それとも追跡者の血筋か！」

え!?あの子ライスシャワーの子供なの!?

ライスシャワーはこの世界だと予後不良になってないのね良かった！

でも今は良くなーい!!

「ついてく・・・！ついてく・・・！」

声がどんどん近づいてくるよお！

「さあ2頭だけが早くも最終直線！意地と意地のぶつかり合い！インパクトターボムチが入る！サムシングブルーもムチが入った！」

末脚に自信がない？そんな事言ってられません！

逃げ切れなかったらヤバイと本能が警鐘を鳴らしている！

「捕らえました・・・！」

ヒイヒイヒイヒイ！いつの間に隣にい！

ついさっきまで後ろに居たのにい！

まだ完全に抜かれてはいないけどお！

目と目が合っちゃったよお！

「さあ2頭並んでの叩き合い！逃亡者か！追跡者か！懸命に粘るインパクトターボ！並び立てるサムシングブルー！」

逃げなきゃだめだ！逃げなきゃだめだ！逃げなきゃだめだ！！

足よ動け！動いてよ！ここで動かなきゃ何の意味もなくなっちゃう！

「やりますね．．．！」

嫌だあ！

この時恐怖で体のリミッターが緩んだ僕は尋常ではない走りです走っていたらしい。

「2頭並んでいる！並んだままゴールイン！これはどちらが勝ったのか！実況席からでは分かりません！逃亡者が逃げ切ったのか！それとも追跡者が差し切ったのか！まったく分かりません！今ようやくほかの馬がゴールしました！」

何とか逃げ切ったか？

まだ審議中のランプがついて1着2着は空いたままだが辛うじて頭半分程度は前に出ていたと思う。

「あ、あの．．．」

ヒュイツ！

レース後で緊張の糸が緩んでいた僕にあのウイスパーパーボイスが聞こえて思わず奇声を上げてしまった。

「な、何かな？」

「わ、私から逃げ切ったの．．．あ、貴方が初めてです．．．」

レース中とは違いオドオドした様子に戻ったサムシングブルーちゃん。

目も普通に戻っている。

「あ、あはは。それは、光栄だなあ」

何を言っているんだ自分は。

「あ、あの走り．．．とってもすごかった．．．」

おや？何やらうつとりした目でこちらを見てません？

「わ、私より強い馬．．．い、居なかったから．．．」

どうやらサムシングブルーちゃんは牝馬として頭抜けた才能を持つているようだ。

「だ、だから・・・ま、また一緒に・・・は、走りたいです・・・」
「あー、うん。確実な約束は出来ないけど、また一緒に走ろうね」

走るレースはお互いオーナーと調教師次第だし牝馬と牝馬だからレースが重なるかどうかは運だしね。

とりあえずレース中でなければ怖くない・・・寧ろ可愛い子だし何とか平静を取り繕って答えられた。

「は、はい！またよろしくお願いします！・・・ツギハノガシマセン」
ヒイ！安請け合いない方が良かったかも！

一瞬暗い影を落としたサムシングブルーちゃんに怯えつつ僕はターフを後にした。

これがこの後長い付き合いになるサムシングブルーちゃんとの初めての出会いであった。

インパクトターボ 牡2歳 6戦6勝 主な勝鞍 札幌2歳ステークスGⅢ

第2シーズン第3話 波乱の選抜レース（ウマ娘）

トレセン学園での生活が始まって早1週間。

「おはよ〜」

「おはよ〜」

とりあえずクラスメイトに挨拶をする程度にはなってきた。

相部屋の同居人は今日入学、入寮する予定だとヒシアマ姉さんから伝えられたので部屋は軽く掃除しておいた。

友人を作るにあたって大体は隣の席の人と会話をするのがベターだと思うのだが……。

ギロツ！

はい、右隣は全力で睨みつける目付き最悪の不良ウマ娘なので下手に話しかけるのは得策ではない。

そもそも小市民な私には不良に声をかける勇気は無い。

そして左隣はと言うとまだ空席である。

今日来る予定の私の相部屋の住人である。

なので私は必然的にボツチになる……かと思われたが救世主が居た。

「おはようターちゃん」

「おはようキタちゃん」

私の前の席に座ったのはキタサンブラックちゃん。

黒いショートヘアの元気ウマ娘。

「おはようターちゃん」

「おはようサトちゃん」

その左隣に座ったのが淡い茶色の長髪なお嬢様ウマ娘、サトノダイヤモンドちゃん。

そんな仲のいい2人に必死に話しかけた甲斐あってなんとか2人の友人になれた。

2人ともとてもええ娘やあ……。

勇気を出して良かった！

ちなみに2人とも長い名前だから愛称で呼び合っていたので私に

も愛称を付けてくれた。

なんかちよつとジャングルに居そうな名前だけどターボちゃんだと紛らわしい気がしたのでそう呼んでもらう事にした。

「そう言えば今日ターちゃんのパアが来るんだっけ？」

「うん、昨日ヒシアマ姉さんから教えて貰ったから間違いは無いと思うよ。だから昨日の夜にちよつとだけお掃除しておいたんだ」

「まだ1週間だけど埃って結構溜まりやすいもんね」

1人暮らし（実際には寮生活で本来は2人部屋なんだけど）して思ったのはいかに埃が溜まり易いかという事だった。

お母さんには感謝しないとなあ。

「どんな娘なんだろうね」

「一緒にゲームしてくれるかなあ？」

ゲーム好きな私としては折角なので一緒に楽しみたい。

「ターちゃん色んなゲーム持ってるもんね」

「私の住んでいた所ってちよつと田舎だったから同年代のウマ娘が少なかったんだよね」

なので人間のお友達と遊んでいたのだがどうしても体を使った遊びだと差がありすぎてしまう為にゲームで遊ぶ事が殆どだった。

あまり身体能力に関係のないかくれんぼくらいなら外でもやったけどね。

「全員席につけー、朝のホームルームを始めるぞー」

担任の先生が入ってきたので全員が席に着いた。

「さて、以前にも話したが家庭の事情で入学が遅れていたクラスメイトが今日から仲間入りする。さ、入りなさい」

「は、はい」

ちよつとオドオドした様子のウマ娘が先生に促されて入ってきた。

「は、初めまして。サムシングブルーといいいます。み、皆さん仲良くしてください」

ペコリと頭を下げるサムシングブルーちゃん。

黒い前髪が長く伸ばされていて目が隠れてしまっている。

あれで前が見えているのだろうかちよつと気になる。

「サムシングブルーの席はあそこの空いている場所だ。さ、座りなさい」

「は、はい」

サムシングブルーちゃんは相変わらさずどこかおっかなびつくりと言った感じでこちらにやってきて席に座る。

「初めましてサムシングブルーちゃん。私はインパクトターボ。貴女と同じ寮の部屋なんだ。これからよろしくね」

「は、はい。サムシングブルーと言います。こ、こちらこそよろしくお願ひします」

頑張つて笑顔3割増し(当社比)で自己紹介してみたけど彼女の警戒を完全に解くには至らなかつたらしい。

まあ人見知りの強そうな娘だしゆつくりと時間をかけて仲良くなつていこう。

「私はキタサンブラック。これからよろしくね」

「私はサトノダイヤモンドです。私もよろしくお願ひします」

「は、はい。お2人ともよろしくおねがいます」

流石私よりはるかに優れたコミュ力を持つ2人は見事に自然な笑顔で僅かに彼女の警戒を緩めたらしい。

むう・・・ちよつと悔しいがそこは性格の差だから仕方がない。

「ンンッ！新しいクラスメイトと仲良くするのは良い事だが今はホームルームの時間だ」

「二「すみません」三」

軽い注意を受けてしまったが先生も怒っている訳ではないので素直に私たちは謝った。

「さて、今日は午後に選抜レースがある。選抜レースは今後チームやトレーナーからのスカウトを受ける為に必要なレースだ。今回成績が悪かつたからと言つてもまだまだ何度もあるからそこまで恐れる必要は無いが体調不良などの事情が無い限りは原則全員参加だ。昼休みまでに教室の前に設置してある箱に今から配るプリントに自分の名前と走りたい距離を書いて入れておくように」

そう言つて先生は小さなプリントを全員に配った。

「それじゃあホームルームはこれで終了だ。日直」
「きりーつ、礼」

日直の合図に従って全員が頭を下げると担任の先生は教室から出て行った。

「改めてサムシングブルーちゃん、私はキタサンブラック、キタちゃんって呼んでね」

「私はサトちゃんと呼んでください」

「私はターちゃんです」

「は、はい。これからよろしくお願いします。き、キタちゃん、さ、サトちゃん、た、ターちゃん」

「どうやらサムシングブルーちゃんは私たちを受け入れてくれたらしい。」

「それでサムシングブルーちゃんはなんて呼ぼうか？」

「サムちゃん・・・だとサトちゃんと紛らわしいよね？」

「ではルーちゃんはどうですか？」

サトちゃんがそう言ってサムシングブルーちゃんを見る。

「え、えっと、皆さんが呼びやすいならルーちゃんでもいいです」

「それじゃあルーちゃんに決定！」

キタちゃんがそう言ってルーちゃんの愛称が決まった。

それと同時に1時間目の先生が入ってきた。

「また後で色々話そうね」

「ルーちゃん教科書はありますか？」

「え、えっと、まだ無いです」

「じゃあ私の席をくっ付けるから一緒に見ようね」

私は席を動かしてルーちゃんの机と引っ付けた。

「はわわ・・・すいませんよろしくお願いします」

「どういたしまして」

まだちよつと距離を感じるが何とか仲良くなれそうだ。

「それで、皆は選抜レースはどの距離を走るの？」

1時間目が終わった後、キタちゃんがそう話を切り出した。

「最低は1000メートルから、最高は2000メートルまでと幅が

ありますね」

「それに芝とダートも選べるから多分メイクデビューを意識してるよね？」

「そ、そうなんですネ」

朝渡されたプリントには名前を書く欄と走る距離が書かれている。

「一応最低でも1回は走らないといけないうみただね。体力が持つなら全部走ってもいいみたいだけど」

「流石にそれは無理だよ」

私がプリントに書かれた補足説明を見ながら言うときたちちゃんがそう言って苦笑していた。

「2回くらいに抑えておくのが無難でしょうか？」

「た、多分それくらいが多いかと・・・」

「だとすると余計に悩むよね。芝だけにするのかダートも走るのか」

大抵のウマ娘は芝の方が得意だ。

だからといってダートが不得意とは限らない。

自分では分からない才能があるかもしれないのだから最初からダートを切り捨ててしまうのはいかなものかとも思う。

「うくん、私はダートは走らないで芝の1800と2000にしておこうかな」

「私もキタちゃんと同じで芝の1800と2000ですね」

どうやらキタちゃんとサトちゃんは長い距離の方が得意なようだ。

私もあまり短距離は得意ではないのでどうしようか悩んだが・・・

「じゃあ私は芝の1600と1800と2000にするよ」

「さ、3回も走るんですか？」

「うん、なんか行けそうな気がするから」

驚くルーちゃんに私はそう答える。

「無茶だけはしないでね」

「大丈夫大丈夫！・・・タブン」

最後の小さなつぶやきは誰にも聞こえなかったらしい。

「それでルーちゃんは どうするの？」

「わ、私も芝の1800と2000の2回にしておきます」

どうやら私たちは全員長い距離の方が得意らしい。

私たちは決めた内容をプリントに書き込むと教室の前に置かれた箱に入れた。

「それでは名前を呼ばれたら返事をしてゲートに入りなさい！」

体操服に着替えて練習用コースに整列する私たちに試験官のトレーナーが声をかける。

今年の新入生は全員で60人ほど。

中央トレセン学園は定員に満たずとも実力がないウマ娘は入学させないという非常に厳しい試験制度を取っている為、今年は例年より少ないようだ。

「まずは1000メートルは……志望者がいないので飛ばすでしょう。1200から始める！待機中の生徒は各自準備運動などをしていても良いが呼ばれても返事が無い場合無条件で失格となるから注意するように！」

試験官さんからの注意を聞いた後私たち4人は互いにストレッチを手伝ったりしながら自分たちが申請したレースまで待機する。

「よし、次は1600メートルだ！まずインパクトターボ！」

「呼ばれたから行ってくるね」

「がんばれターちゃん」

「がんばってくださいね」

「え、えっと、がんばって、ね？」

3人からの激励を受けて私は試験官の指示したゲートへと入っていく。

「よいい、スタート！」

「ッシー！」

勢いよく飛び出した私に他のウマ娘たちは戸惑いを隠せない。

逃げ、それも大逃げをするウマ娘は非常に少ない。

ましてデビュー前のウマ娘で大逃げを体験したことのあるウマ娘は居ない。

慌てた所ですでに遅く、私は完ペきに逃げ切って見せた。

「ふう……ありがとうございます！」

「おめでとう、1番ね」

お手伝いの先輩ウマ娘さんに褒めてもらった私はルーちゃんたちの所に戻っていく。

「すごい走りだったねターちゃん！」

「ありがとうキタちゃん」

「でもあんなに早く走ってターちゃん疲れてないの？」

「うん、まだまだ走れるよ」

「す、すごいです」

「それほどでもないよ」

3人にそれぞれ褒めてもらい私は嬉しくなった。

「次は1800メートルだ！」

1600メートルも終わり、次のレースが始まった。

「・・・よし次！キタサンブラック！サトノダイヤモンド！」

「キタちゃんサトちゃんがんばってね」

「が、がんばってください」

ゲートに入っていく2人を応援する。

「よいい、スタート！」

前の方で走るキタちゃんと違い、サトちゃんはやや後ろで走っている。

先行型のキタちゃんと差し型のサトちゃんといった感じだ。

第3コーナーの途中で先頭に立ったキタちゃんを大外からサトちゃんが追い上げる。

最終的に2人並んだ状態でゴールを通過した。

辛うじてキタちゃんが先にゴールしたらしくサトちゃんはちよつと不満そうだ。

「2人ともお疲れ様。すごい走りだったね」

「お、お2人ともすごいです」

「次！インパクトターボ！サムシングブルー！」

「おっと、ルーちゃん行こ！」

「は、はい」

ルーちゃんと隣同士のゲートに入る。

ちなみにルーちゃんは普段は他人の視線が気になってしまうので目を隠しているがレースの時は流石に危ないのでヘアピンを使って髪の毛を避けている。

んん？何やら妙な寒気が？

「よいい、スタート！」

少し気にはなつたが何とか走り出す事には成功した。

「……………く……………てく」

ん？この声はルーちゃん？

思わず気になつて後ろを振り向いて見てしまった。

「ついてく……………ついてく……………」

ヒイ！ルーちゃんさん!?

そこには瞳孔全開で無表情のまま私を追いかけるルーちゃんが居た。

ちよ、ちよつと怖いよ！

思いもよらない光景に驚いた私は必死に走って逃げた。

「のがしません……………」

る、ルーちゃんのウイスポーボイスは綺麗だなあ！

若干の現実逃避をしながら私は必死に走り続けた。

完全に私たち2人だけでレースをしている状況に周りのトレーナーや生徒達からざわついた声が聞こえてくる。

「捕らえました……………！」

ルーちゃん！

いつの間にかルーちゃんが隣に並んでいた。

「勝ち譲らないよ！」

「やりますね……………！」

最後の最後まで競り合ったがなんとかルーちゃんより先にゴールする事ができた。

「ふう……………ルーちゃん強いね」

「お、同じ年の子に初めて負けました……………」

さつきまでの気配は霧散して、恥ずかしいのか直ぐに目を隠してしまったルーちゃんが興奮した様子でこちらを見つめてくる。

「あはは、スタートと粘り強さだけは自信があるからね。もうちよつと長かったら負けてたかも」

「つ、次は逃しません！」

早くもライバル兼友人が出来た事に私は嬉しくて堪らなかった。

「次、インパクトターボ！」

1800メートルが終わり2000メートルのレースが始まった。

今回は全員バラバラになってしまい私が一番最後に走る事になった。

ギロツ！

おっと、どうやら隣のゲートは私の隣の席でしょっちゅう睨みつけてくる不良ウマ娘じゃあないか。

自己紹介すらままならない相手だが実力はどのなのだろうか。

「よーい、スタート！」

スタートの良さには自信を持つ私は全力で後ろを引き離しにかかる。

デビュー前の私たちが走る長さとしては最長を誇る2000メートルだが実際には最も標準的な長さのレースと言える。

クラシック重賞を目指す身としては避けて通れない距離だ。

いつも通り他を無視して飛ばす私に1頭ついてきてはいるがルーちゃんほどの恐怖は無い。

他の娘たちはまだ様子をうかがっているようだ。

中間点を過ぎ、あと半分と気合を入れなおす私。

流石にあれだけ大逃げする姿を見せてきた為か後続のウマ娘達も早めに仕掛けてくる。

ギロリツ！

後方から非常に強いプレッシャーを感じる。

後ろを見るとあの不良ウマ娘が強烈な睨みをきかせてくる。

これはやつかいかもしれないな！

私は懸命に足を前へと進める。

「待てやゴオラアアアアアアア！」

ものすごい怒声を上げながら不良ウマ娘が追い上げてくる。

恐ろしいほどの末脚だ。

「逃げ切ってみせる！」

「ぎげんじゃねえぞお！」

逃げる私、追い上げる不良ウマ娘。

「「がんばれターちゃん！」」

皆の応援を受けて私は必死に走って何とか逃げ切る事に成功した。

ふう・・・流石に3連戦はちよつときつかったか。

「チツ！覚えてやがれ！」

不良ウマ娘にめちやくちや睨まれたあと私は嬉しそうに出迎えてくれる友人たちの所へ歩いて行った。

第2シーズン第4話 GI初挑戦（馬）

あの激走GⅢレースの後、北海道にいる事だし流石に走らせすぎたと反省したオーナー達に実家への放牧を、褒美に貰った。

故郷よ！私は帰ってきた！

「おかえりターボ。お前のレース見てたぞ」

牧場主さんに出迎えて貰って僕は放牧場へと移動する。

ふう・・・久しぶりにのんびりできるしお休みを満喫するぞー！

少し走った後心地の良い風の吹いている場所でゆっくり昼寝する事にした。

そして2週間後・・・

「レース・・・レースをクレメンス・・・」

レースが無いという解放感を満喫できたのはたった1週間ほどであり、レースが無いという状況に落ち着かない日々を過ごすようになって早3日。

段々と禁断症状の様になってきた僕を母がさもありませんといった表情で見ている。

「やはり私の息子なだけありますねターボ。見事なレースホリックです」

母上殿、それは誇って良い事なのですか？

とりあえず調教師さんの方針で少し体重を増やすらしいのでレースが暫く無いのは確定だ。

この退屈というか虚無感を如何にして消化するのが今の僕の課題なのであった。

そして次の日・・・

暇を持て余した僕は厩務員さんに悪戯をする事にした。

とはいっても脱走したりなど酷い事はしない。

それは放牧場のボロ（糞）を片付けている厩務員さんにゆっくりと気が付かれない様に近寄って行って驚かそうというだるまさんがころんだみたいなものだ。

「ふう」

「おっと、厩務員さんがこっちを見ているな。」

少し息をついているだけだがこちらを見ているので興味をなさそうにフリをする。

また作業を再開したのでゆっくりと気が付かれない様に近寄っていく。

「ん？」

気配を感じたのか厩務員さんが顔を上げたが僕は地面の草をかじるフリをして誤魔化する。

さつきより近くにいる事に特に思う事は無かったみたいですがすぐに作業を再開した。

「チャ～ンス！」

上手く死角に回り込むと厩務員さんのジャケットを噛んで引張った。

「おわっ！なんだターボ！この悪戯っ子め！」

邪魔されたが遊んで欲しいのだと理解した厩務員さんが顔をワシヤワシヤ撫でてくれる。

「悪いけどもうちよつと待ってな〜」

その後に厩務員さんが作業終了後に遊んでくれた。

それから暫くして・・・

「よし十分でかくなつて帰ってきたな」

山田調教師久しぶり〜。

牧場では調教師の指示でいつもより多めにご飯が出されていた。

牡馬としてはちよつと小柄な僕はよりスタミナをつける為にちよつと太る事になったのだ。

「これから絞って筋肉に変えるからな〜」

ウイ〜ツス。

こうして新たな調教を経てさらなるパワーアップを図るのであった。

「連戦続きだったインパクトターボ。少しの間見かけませんでしたが一回り大きな馬体になって帰ってきました。不調説も囁かれていましたがどうやら体を作ってきた模様です」

調教の仕上げとして参加したオープン戦。

距離は2000メートルだからきつと皐月賞を意識してのレースなんだろう。

覇気のある馬も強そうな馬も見当たらず、いつも通りの走りで逃げ切った。

「ちよつと見ないうちにさらに強くなったなターボ」

若井騎手にそう言って褒めてもらえた。

そして年が変わって3歳になりました。

うくんそろそろ一人称を俺にした方が恰好がいいかな？

新年にそんな風に気持ち新たに今日もレースを走りました。

2月は皐月賞トライアルの弥生賞に向けての調整の為にレースは走らないらしい。

そして弥生賞を経て皐月賞を走る予定だと山田調教師に伝えられた。

ここまでコンスタンスにレースに出る馬も非常に珍しいのではないのかしらん？

あ、イクノ母さんは別です。

とにかく3月の弥生賞が待ち遠しいなあ。

そして3月、弥生賞を迎えた。

「スタートしました！やはり1頭今日も全力疾走のインパクトターボが先頭を走ります。以前より大きくなった馬体がスピードをさらに上げてますます大逃げに磨きがかかりました！2番手集団は激しいポジション争いをしながらインパクトターボを追いかけようという所！インパクトターボだけが1頭離れています。が他は固まったままレースは進んでいきます！果たしてこの暴走特急を止める事ができるものは居るのでしょうか！鋼鉄の逃亡者！今日も逃げ切り濃厚か！後続が追い上げてくる！流石に逃がすわけにはいかないと後続が伸びてくる！しかしインパクトターボの走りは緩みません！一体どんなスタミナをしているんだこの馬は！第4コーナーを回って直線！インパクトターボまだ逃げる！追う2番手集団先頭はバランスオубゲーム！その後ろローマンエンパイアは伸びないか！バランスオ

ブゲーム懸命に追い上げるがこれは間に合いません！インパクトターボやはり逃げ切ったゴールイン！インパクトターボ！なんと9戦無敗で皐月賞への出走権を手に入れました！」

ふう、流石GⅡレース！

出場する馬達も実力馬揃いだった。

やっぱりだいぶ対抗策を練られて来るようになったなあ。

まだ何とか逃げ切れているけど皐月賞は世代の頂点が集うレース。一筋縄ではいかないだろうな。

レースを終えて1週間後・・・

「それでは山田調教師、やっぱりインパクトターボは皐月賞も大逃げを？」

「まあそのつもり、と言いますかこいつは集団で走るには向いてない性格ですから勝とうと思ったら自然とそうなりますね。大逃げできるかどうかは他の馬次第でしょうな」

記者のインタビュウを受ける山田調教師。

「それでインパクトターボの調子はどうですか？」

「先の弥生賞を見てもらった通りタイムは問題なく、今も調教の調子は順調で皐月賞には最高の仕上がりをお見せできると太鼓判を押せますね」

「お忙しいのにありがとうございます」

他にもインタビュウに行かなければならないであろう記者は手早く慣れた様子で取材を終えるとササツと立ち去った。

恐らくオグリキャップ事件以降記者側もこれ以上排除されないように注意しているのだろう。

「お前ならきつと勝てる。おべっかなんかじゃないぞ」

山田調教師がそう言っつて首筋を撫でてくれた。

そして皐月賞本番がやってきた。

「さあ今年もやってまいりましたクラシック三冠の第1戦目であります皐月賞。最も早い馬が勝つと言われるこのレース。晴天に恵まれた中山競馬場。馬場は良馬場です。世代最速を決めるこのレースを見ようと多くの観客が押し寄せております。特に今日は注目馬が沢

山いますね解説の鈴木さん」

「そうですね。1番人気から3番人気まで殆ど差がない状況ですからこれは白熱したレースになるでしょう。特に1番人気になったインパクトターボは近年では珍しい大逃げ馬ですから盛り上がりたらないはずがないですね」

「さあパドックを見てみましょう。1枠1番を見事に引き当てました1番人気インパクトターボ。体重は449キロとさらに1キロの増加であります。鞍上はこれがG1初挑戦の若井騎手であります。乗り換えも噂されておりましたがどうやら相性を考えてそのままの様です」

「いや〜この馬は本当に珍しい馬ですよ。あれだけ多くのレースを走っているのにガレた様子も無く寧ろ大きくなつて次のレースに来るんですから一体どんな調教をすればあんな風になれるのか分かりませんね」

「そうですね。9戦9勝と現在無敗のインパクトターボ。他の馬がまだ4、5戦しか走ってない事を考えると倍のペースですからね。母イクノデイクタスも現役時代61戦ものレースを戦い抜いた鋼鉄の女。その鋼鉄っぷりが見事に受け継がれたと言つても良いでしょう」

「ああイクノデイクタスですか。あの馬も頑丈な馬でしたね」

「今日も大逃げ我が道を行く！そんな走りを期待しましょう1枠1番インパクトターボでした」

どうやら俺が1番人気らしい。

実況の声を聴きながらグルグルと回る。

「続きまして1枠2番は3番人気サムシングブルー1紅一点。牝馬による皐月賞挑戦です」

アイエエ！サムシングブルーナンデー！

思わず後ろをグリツと振り返るとそこには嬉しそうなサムシングブルーちゃんが居た。

「お、お久しぶりです」

「オヒサシブリデス」

思わず片言になった俺を許してほしい。

「あ、あの、調教師さんがお前はマイルより長い距離の方が得意だからこつちを走れって」

なるほどそれは仕方がないですね。

「サムシングブルーですか。この馬はあのライスシャワーに1番良く似た馬だと言われていますね。調教師曰くマイルでは短すぎて本領が発揮できないから牝馬三冠よりクラシック三冠の方が勝てる可能性が高いとの事ですな」

「流石は漆黒のステイヤールイスシャワー産駒期待の1頭。牝馬によるクラシック三冠なるか期待されますね」

実況のそんな評価が聞こえてくる。

「き、今日は貴方に勝って見せます」

「この前みたいに逃げ切って見せるさ」

少しだけ年齢を重ねた事による精神的成長を得たのか最初こそ動揺したものの何とか落ち着きを取り戻してサムシングブルーちゃんと言え事のできた。

そんな風にお互いの事を話し合っている時だった。

「ケツ！チョーシこいてんなテメー！」

何ともガラの悪い声が聞こえてきた。

「6枠11番タニノギムレット、2番人気です」

この馬がどうやら現状人気を3分割している内の1頭らしい。

「君がタニノギムレット？」

「サマをつけやがれこのマスク野郎！いいか！無敗だかなんだか知らねーがそれはテメーが弱いやつらばかりと戦ってきたからだ！このタニノギムレット様が居る限り！テメーの優勝はありえねえ！」

物凄い目付きの悪さで睨みつけてくるタニノギムレット。

「それはどうかな？周りの皆は俺が勝つって思ってるみたいだけど？」

「ケツ！シロートの目利きなんざ当てになるもんかよ！俺様が一番ツエーって事を見せつけてやらあ！精々盛り上げ役でも頑張るんだなマスク野郎！」

それだけ言うとタニノギムレットはどこかへ行ってしまった。

「あ、あの人嫌いです」

「まあ・・・進んで仲良くしたくはないかな」

完璧に無視される形になってしまったサムシングブルーちゃんは不快感を隠そうともせずにし、俺も仲良くしたいとは思わなかった。

「さ、もうすぐ本番だよ。お互い全力を尽くそう」

「は、はい！今日は逃しませんから！」

うくんそれはちよつとご遠慮したいです。

「大丈夫・・・やれるぞ武志。GIもGIIも大きな違いは無い・・・。いつも通りやれば勝てる・・・」

ガツチガチに緊張している若井騎手が鞍上でブツブツと呟く。

割と肝っ玉の強い若井騎手だがGI初挑戦は流石に緊張するようだ。

大丈夫？と若井騎手を見つめる。

「すまんすまん、俺が緊張してたらお前まで緊張しちゃうな。やる事は変わらないんだ。お前を信じて走るだけだな」

馬に心配された事で緊張が弛んだのかいつもの笑顔に戻る若井騎手。

「そうだ、やる事は変わらない。お前はいつも通り走れ。後は俺がやる」

良い表情に戻った若井騎手に嘶いて答えた。

「さあゲートの準備が整いましてスターターが旗を振ります。そしてファンファーレ。中山競馬場に大きな歓声が響き渡ります。最も速い馬が勝つこの皐月賞。注目はやはり1枠1番暴走特急インパクトターボと漆黒の女ハンター、サムシングブルーの駆け引き。そして直線番長ことタニノギムレットの強烈な末脚でしょう。今ゆつくりと各馬ゲートインしてゆきます。最後の1頭が収まりました・・・。スタートしました！今日も好スタートで飛び出したのはやはり大逃げインパクトターボ！それを追いますサムシングブルーのマッチレースと行ったところ・・・いや！もう1頭追っています！これはなんとタニノギムレットです！末脚勝負の直線番長タニノギムレットがなんと今日は3番手を走っております！」

なんだと！サムシングブルーちゃんが付いてくるのは予想内だったけどタニノギムレットまで追いかけてくるのは予想外だった。

「待てやゴオラアアア！」

元々が追い込み向きなのだろうが懸命にこちらを追いかけてくる。流石に加速力がある方ではない為か今は引き離せているがこれは終盤どうなるか分からないぞ！

「後ろは気にするな！走れターボ！」

若井騎手の言葉にハツとして足に力を込めなおして走り続けた。

「さあまだまだ逃げ続けています白い帽子1番インパクトターボ！その後ろに3馬身ほど離れて紅一点牝馬の2番サムシングブルー！少し間が空きまして今日は珍しい1番タニノギムレットが後ろを引っ張る形で走っております3番手！尋常ではない速度で駆け抜けて行きます今年の皐月賞！果たして勝利するのは暴走特急インパクトターボか！女ハンターサムシングブルーか！それとも末脚爆発タニノギムレットか！はたまた他の馬なのか！今1000メートルを通過！タイムは58秒と非常に速いペース！」

俺は懸命に飛ばし続ける。

「ついてく・・・！ついてく・・・！」

しかしサムシングブルーちゃんは3馬身以上引き離されないように走り続けているようだ。

後ろを見ずとも声がある場所を教えてくれる。

「ツザツケンなよゴオラア！」

だいぶ遠くではあるがタニノギムレットの怒声も聞こえてくる。

「いいぞターボ！お前のペースだ！」

若井騎手が走りをサポートしながら教えてくれる。

大丈夫！勝てる！

「さあインパクトターボ早くも第4コーナー！サムシングブルーがじりじりと上がってきた！タニノギムレットはここまでハイペースだったが大丈夫か!?他の馬を引き連れたまま上がっていきます！残り300メートルと短い直線と強烈な坂！インパクトターボにサムシングブルーが並びかける！タニノギムレットも上がってきた！」

ぐう！もう少しなのに！

「今日は！勝ちます！」

「勝つのはタニノギムレット様だあ！」

直線に入った所でサムシングブルーちゃんに完全に隣に並ばれ、その少し後ろにタニノギムレットが迫ってきた。

ちくしよう！ここまで来たのに！

懸命に走るがこれ以上速度を出せそうにない。

その時だった。

目の前に見える小さな体……。

誰だ!?他に走っている馬なんて……!?

あの走りには見覚えがあった。

決して強そうにない、ボロボロの走り。

しかし決して諦めず隣を走る最強馬に先頭を譲らなかつたあの背中。

あの背中に憧れた。

いや、あんな走りをしたかった。

いいや！あの背中を超えたいんだ！

その時、完全に燃え尽きたと思った体に再び火が灯った！

「完全に追い付かれたと思ったはずのインパクトターボがまた伸びる！きつい坂を駆け上がり！その差を僅かにだが広げていく！」

「嘘!？」

「なんだとお!？」

うわあああああああああ！

体の底からの叫びと共にゴール板を走り抜けた。

「やりましたインパクトターボゴールイン！二代目逃亡屋襲名披露の檜舞台！それ選ばれたのはこの皐月賞でした！見事に逃げ切りましたインパクトターボ！一度は追い付かれたかと思いましたが！渾身の走りで見事に先頭を守り抜きました！鞍上の若井騎手が何度も何度もガッツポーズをしております！GI初勝利！無敗の皐月賞馬です！」

ああ……やったよ……父さん……。

あの一瞬だけ見えた幻。

それは生きて顔を見る事すら出来なかった父さんからの応援だったのかもしれない。

「また・・・逃げられちゃいましたね」

「いや・・・強かったよサムシングブルーちゃん」

流星に疲れてウイニングランというよりウイニングウォークといった方が良いほどゆっくりと歩く俺にサムシングブルーちゃんが近寄ってきた。

「やっぱり強いです。優勝おめでとーございます。でも次は逃がしません」

「ありがとう。次も逃げ切って見せるさ」

そう言って笑いあっている時だった。

「チツクシヨオ！何やってんだギムレットオ！こんな俺様の走りだとお！」

怒声を上げるタニノギムレット。

しかしそれは自分に向けての声だった。

「ふざけるな！俺様はこんなじゃ終わらねえ！絶対！絶対にだ！」

咆哮を上げるタニノギムレットを周りの馬達も驚いて見ている。

「やいテメエ！インパクトターボだったな！そのツラ！覚えたからな！次は覚悟しやがれ！絶対に俺様が負かしてやるからな！せいぜい怯えていやがれ！」

一方的に捲し立てるとタニノギムレットは去っていった。

やれやれ・・・厄介なのに目をつけられたなあ。

でも、今日は俺の勝ちだ！

インパクトターボ 牡3歳 10戦10勝 主な勝鞍 GI皐月

賞 GII弥生賞

第2シーズン第4話 スカウト初挑戦（ウマ娘）

第1回選抜レースが終わった後、私とルーちゃんは美浦寮に、キタちゃんとサトちゃんは栗東寮に帰っていった。

寮に入るとヒシアマ姉さんが出迎えてくれた。

「お、お前が遅れてきた新入生だな？」

「は、はい。さ、サムシングブルーと申します。よ、よろしく願います」

「はは、そんなに畏まる必要はないさ。あたしは寮長のヒシアマゾン。気軽にヒシアマ姉さんとでも呼んでくれ」

ペコペコと頭を下げるルーちゃんにヒシアマ姉さんは豪快な笑顔で答える。

「ルーちゃんの案内は私がしますのでヒシアマ姉さんはご自分の事をなさってください」

「お、早速仲良くなれたみたいだな。関心関心」

そう言つてヒシアマ姉さんはルーちゃんに諸注意の書かれた冊子を手渡すと手を挙げて去っていった。

「さ、こっつちだよ」

「うん」

私はルーちゃんの手を引いて部屋へと案内した。

「右側は私が使わせて貰っちゃってるけど良かったかな？」

「は、はい、私も特に強い拘りがある訳じゃないですから大丈夫です」

部屋の左側にはルーちゃんの私物が入っているであろう段ボールがいくつか詰まっていた。

「とりあえず荷物整理から始めよっか。お手伝いするよ」

「あ、ありがとうございます」

私とルーちゃんは手分けしてルーちゃんの荷物を仕舞った。

その後に寮の中を簡単に案内すると丁度夕食の時間になったので食堂へと向かう。

「ここが寮の食堂だよ。ご飯もとっても美味しいし量も沢山あるからお腹いっぱい食べられるよ」

「わあ。良い匂い」

今日も美味しそうな匂いで満たされた食堂にはすでに何人もの寮生達のご飯を食べている。

「あーライス先輩！こんにちは」

「あ、ターちゃんもご飯？」

丁度お盆に夕食を乗せたライスシャワー先輩が通りがかった。

「あ、その子が言ってた相部屋の……」

「は、はい。サムシングブルーと申しま……」

あれ？この光景どこかで見たような？

「なんだろう……？」

「な、なんでしょう……？」

「運命的な何かを感じます」

ああ、私がイクノデイクタス先輩に感じたのと同じでしたか。

このウマ娘同士が運命的な何かを感じるのは良くある事らしく、今の所詳しい事は分かっていないが何かしらの縁があるのではないかとされている。

「あ、あの……ライスお姉さまって呼んでもいいですか？」

「ら、ライスがお姉さま……!？」

小柄で儂げなライス先輩が良く自分の元トレーナーさんの事をお姉さまと呼んで慕っているのは話に聞いていたがそのライス先輩がお姉さまと呼ばれる事に若干違和感がありつつも嬉しいみたいでしっぽがワシヤワシヤと動いている。

「良かったですねライス先輩」

「ありがとうターちゃん」

その後ライス先輩の同室のゼンノロブロイ先輩を交えて4人で夕食を食べた。

そして翌日の登校途中……。

「サムシングブルー君！是非ともウチのチームに入ってくれないか！」

「熱血馬鹿は黙ってなさい！サムシングブルーちゃん、私のチームに入ってちょうだい！」

「サムシングブルー！」

「サムシングブルー！」

.....

「いやゝ人気者ですねえルーちゃん」

「はうゝ・・・」

スカウトの熱気到人酔いしてしまったルーちゃんが机で燃え尽きている。

「ふうゝ！しつこかったあ！」

「本当に大変でしたね」

慌てた様子で教室にキタちゃんとサトちゃんが入ってきた。

「二人ともどうしたの？」

「スカウトがしつこくて参っちゃったよ。私はテイオーさんの居るチームスピカに入りたいのに！」

「私も同じです。スカウトが多くて大変でした」

「どうやら二人ともスカウト攻勢が酷かった様だ。」

「その様子だとルーちゃんも？」

「は、はい・・・あんな勢いで来られると怖いです・・・」

「ようやく復活したルーちゃんがまだ少し青い顔のままキタちゃんに返事をした。」

「ターちゃんは大丈夫そうですねけどどうだったのですか？」

「んゝ私は全然かなゝ」

「「ええ!?!」」

三人が驚いてこつちを見る。

「あんなにターちゃん早かったのにスカウト来てないの!?!」

「うん」

「一人もですか!?!」

「全く」

「ど、どうしてなんですか!?!」

「多分私の走りが問題あったんじゃないかなゝ」

何となく察しのついている私はそう答えた。

「どういう事なの？」

「ほら、私って3つのレースを全部大逃げしたよね？」

「そういえばそうですね」

「大逃げって勝てないウマ娘のする事だってよく言われててね。最近のセオリーだと序盤中盤は抑え気味で後半に全力を出す！ってのが当たり前みたいで、私みたいな大逃げは一か八かの賭けになっちゃうからスカウトもこないんじゃないかな？トレーナーとしてもリスクは取りたくないだろうしさ」

尋常ならざる肉体を持つウマ娘達だが強すぎる力は自身を危険に晒す事もある。

全力疾走しているウマ娘が転倒すれば大怪我、最悪命に係わる事さえある。

普通の人に比べてはるかに頑丈で強靱な肉体も強すぎる力に耐えきれない事があるのだ。

特にウマ娘第二の命と言われる脚は最も影響を受けやすい。

「で、でもスカウトされなかったらレースに出られないです」

「そうなんだよね。どんなチームでもいいからスカウトしてくれると助かるんだけどなあ」

他の走り方をすればスカウトも来るかもしれない。

でもきつと私はその走りでは勝てないだろう。

「だったら一緒にチームスピカに行こうよ！あそこならサイレンススズカ先輩も居ますからきつとターちゃんでも受け入れてくれるよ！」

「うん！それがいいですよ！」

「あはは、二人ともありがとうね。もしどうしてもダメそうなら考えてみるよ」

キタちゃんとサトちゃんはもうスピカに入れる気分で居るらしい。

尤も二人の実力なら十分入ることは出来るだろうけど。

「あ、あの・・・」

「ん？どうしたのルーちゃん」

ルーちゃんがオズオズと一枚のプリントを取り出した。

「い、一緒にチームリギルの特別選抜レースに出ませんか？」

そこにはチームリギルの特別選抜レースの日程が書かれていた。

「さ、さつきマスクを着けた先輩に渡されて・・・是非受けると良いデス！というか受けて欲しいデス!!受けてもらえないとエルが叱られるデス!!」って・・・」

「いや、私はチームリギルとは相性が悪そ・・・」
ウリユリユリユリユリユリユツ！

そ、そんな涙を溜めに溜めた目で見つめないで欲しい・・・。

「マエムキニケントウサセテイタダキマス」

私はルーちゃんの泣き落としに屈した。

「あ、あはは・・・二人とも頑張つて・・・」

私はキタちゃんの肩をガシツつと掴んだ。

「キタちゃん・・・分かるよね？」

「う・・・はい・・・」

私の圧力にキタちゃんは屈した。

「どこに行こうと言うのかね？サトちゃん」

「ちよ、ちよつとお花を摘みに・・・」

こつそりと逃げようとしていたサトちゃんがビクツ！つとする。

「ルーちゃん！」

ウリユリユリユリユリユリユツ！

「うう・・・分かりました・・・」

こうして4人でチームリギルの特別選抜レースを受ける事になった。

そしてチームリギルの特別選抜レースの日・・・。

「良く来てくれたデス！ってそちらのお友達は？」

「わ、私一人だと怖いので一緒に受けてくれるように頼んだんです」

朱色のマスクをつけた先輩ウマ娘がオーバーナリアクションで出迎えてくれた。

「とても助かるデス！・・・これでノルマはギリギリクリアデス・・・」

何かボソツと呟いたが私達には聞こえなかった。

「あの・・・」

「な、なんでもないデス！さ！着替えて着替えて！」

先輩ウマ娘に押しやられる様に私達は更衣室へと入っていく。

「私がチームリギルのトレーナー、東条ハナよ！これよりチームリギル特別選抜レースを行う！」

ビシツと隙が無い女性、トレーナーの東条ハナさんが宣言する。

「す、すごい・・・シンボリルドルフ会長にエアグループ先輩、ナリタブライアン先輩等々ご歴戦の方々ばかりですね」

「うん、テイオーさんのいるチームスピカも凄かったけど・・・チームリギルはもつと凄い・・・」

「ぜ、絶対場違いだね。私たち」

「はうう・・・」

完全に気圧されている私達は必死に受かろうと前のめりになっている他のウマ娘達の後ろでコソコソと話しをしていた。

その時だった。

サワサワツッ！

「ひゃあー！」

キタちゃんがまず最初に悲鳴を上げた。

サワサワツッ！

「ひゃんー！」

続いてサトちゃん。

サワサワツッ！

「ひよわあー！」

私。

サワサワツッ！

「ひゅいー！」

ルーちゃんと次々と悲鳴を上げていく。

「うーん皆いい足をしている。最初の子は見事なしなやかさだ。逃げ・・・いや逃げよりの先行と言ったところか。次の子は見事な力強さだ。きつといい末脚を持っているな。その次の子はかなり頑丈な足をしているな。末脚はあまり強くなさそうだから逃げ向きだな。最後の子はなんとも凄い足だな。戦況に併せて自在に変えられる足か。どちらかと言えば差しの方が得意の様だが先行も逃げも行けそうだ

な」

驚き振り向いた私たちの後ろに屈んだまま真剣な表情で私たちの足を見つめる黄色いシャツに黒いベストの男性が居た。

「「へー！」」

「ん？」

「「へんたいい！」」

「フオボスツ！」

思いつきり私たちに蹴り飛ばされて吹き飛んでいく男性。

「そー！静かに・・・またなのね」

東条トレーナーが私達に鋭く注意を飛ばすが私たちに蹴り飛ばされた男性を見て呆れた表情をした。

「貴方のその悪癖は何とかならないの？いい加減に訴えられてもしらないわよ。ちなみにその時私も理事長も一切助けるつもりは無いわよ」

「むぐぐ・・・注意してるつもりなんだがどうしても有望株を見るとツイな。すまなかつたお嬢さん方。俺はチームスピカのトレーナーをしている沖野だ。もし興味があつたら是非ウチのチームに頼むぜ！」

「・・・今の状況で勧誘できる貴方の神経には恐れ入るわ」

もはや諦めの境地に至った東条トレーナーと鼻血を垂らしながらいい笑顔を決める沖野トレーナー。

「・・・キタちゃん、サトちゃん。本当にスピカに行くの？」

「あ、あはは・・・ちよつと考えようかなあ・・・」

「わ、私はマックイーンさんと一緒に居られれば何とか・・・」

私の問いかけに二人は引きつった笑顔で答えた。

「次！スレッジハンマー！」

「あ、あの不良ウマ娘だ」

次のレースのメンバーにはあの不良ウマ娘が居た。

「あの子スレッジハンマーって名前だったんだ」

「いつも一人だし全然名前知らなかったね」

クラスでも少し浮いている不良ウマ娘ことスレッジハンマー。

誰かと一緒にいる事も無く授業が終われば直ぐにどこかに行つて

しまう為に一体何をしているのかすら不明だ。

レースは最終直線でスレッジハンマーが物凄い末脚を發揮したが残念ながら3着に終わった。

「クソッ！クソッ！」

自分の走りへの不甲斐無さにスレッジハンマーは憤慨している様で東条トレーナーの発表を待つ事無くどこかへと走り去ってしまった。

「次！インパクトターボ！」

「おっと、行ってくるね」

「「ターちゃんがんばれ」」

今回はメンバーの中で一番最初に呼ばれた私がレース場へと移動する。

「私はファインモーション、よろしくね」

「インパクトターボです。こちらこそよろしく」

おっとりふんわりしたウマ娘、ファインモーションさんと隣になった。

「よいい！スタート！」

ナリタブライアン先輩の掛け声と共に私は全力でスタートを切る。

「貴女早いですね。でも負けませんよ」

おっとりとした声のまま、しかし視線だけは鋭く見つめるファインモーションさんが私を追いかけてくる。

あの緩やかな雰囲気のまま、しかしその走りは力強く確実に前を狙っている。

しかも意外な事に先行型の様だ。

（あのおっとり雰囲気からなんて攻めた走りなんだ！）

必死に逃げる私だったが最終コーナーで恐るべき加速力を發揮したファインモーションさんがあつという間に抜かしてゴールを駆け抜けた。

「っ、強い・・・」

あつという間に、しかもあんなに軽々とした表情で抜かれてしまった事に私は驚きを隠せない。

もちろん私だって無敗で居られるとは思ってはいない。

でもここまで格の違いを見せつけられたのは初めてだった。

「うふふ、楽しかったですね」

やはりどこか少しずれた感想なのは天然故なのだろうか。

「惜しかったねターちゃん」

「いやうちよつと今の私じゃあのファインモーションさんに勝てるビジョンが浮かばないなあ・・・」

キタちゃんにそう答える私。

「そんなに強かったんですか?」

「うん、軽々とした表情のまますごい末脚で追い抜かれちゃった」

「す、すごい方なんですネ」

そんな風に話していると・・・。

「次!キタサンブラック!次!サトノダイヤモンド」

「あ、二人とも呼ばれたよ」

「それじゃあ行ってくるね」

「今日は負けないよキタちゃん」

「が、頑張ってください」

私とルーちゃんはキタちゃんとサトちゃんを見送った。

「今日は私の勝ちですねキタちゃん」

「くうう!あとちよつとだったのにい!」

ギリギリの所で差し切ったサトちゃんが満面の笑顔で帰ってくる。

私は悔しそうにするキタちゃんの頭をヨシヨシと撫でた。

「次!サムシングブルー!」

「ルーちゃん頑張つてね」

「は、はい!がんばります!」

まだレースに集中出来ていない為にちよつとあわあわしたままのルーちゃんだったがスタート位置に着くと前髪をヘアピンで持ち上げ、その顔から表情が削ぎ落とされていく。

うん、やっぱり何度見てもちよつと怖い。

レース展開はルーちゃんが完璧なマークと差し切りを見せて勝利した。

「今回のチームリギル特別選抜レースの合格者を発表します！トップ合格はファインモーション！」

「は〜い」

終始おっとりしたままのファインモーションさんだったがその実力の高さは本物だ。

実際のタイムでも他の追隨を許さないトップタイムだったのだから合格は当たり前だろう。

「次点合格としてサトノダイヤモンド、キタサンブラック、サムシングブルー、そしてインパクトターボ！」

ふえ!? てつきり不合格だと思っていた私まで合格とは驚いた。

「今回上げた5人以外のメンバーはリギルには入れません。また誤解無いよう先に伝えておきますが合格者も必ずチームリギルに入らなければならぬ訳ではありません。以上でチームリギル特別選抜レースを終わります。合格者以外は解散しなさい」

残念そうに肩を落として立ち去る不合格のウマ娘たち。

そして残ったのは私たち合格ウマ娘5人とチームリギルのメンバーに東条トレーナーだけだ。

「ではまずファインモーション。改めてチームリギルとして貴女をスカウトします。私の元で走ってくれますか？」

「はい、是非よろしく願いますトレーナーさん」

どうやらファインモーションさんはチームリギルに入る事を決めたらしい。

「ありがとう。貴女みたいな才能あるウマ娘をスカウト出来て誇らしいわ。私の指導の下、必ずその才能を開花させて見せるわ」

実際に会長を始め優れたウマ娘を沢山指導してきた東条トレーナーの言葉には重みがある。

「さて、貴女達はさつき沖野君に絡まれていた娘達ね。特にキタサンブラックとサトノダイヤモンドには見覚えがあるわね。確かトウカイテイオーとメジロマツクイーンに憧れていたはずよね？」

「あ、えっとその・・・大変失礼な話になっちゃうんですけど実は・・・私達はルーちゃんが一人でレースに参加するのが怖かったので一

緒に受けた事を説明した。

「なるほどね。どうするかは貴女達次第だけれども出来れば前向きに考えて欲しいわ。スカウト期間はまだあるけれどもあまり悠長にしているとデビューが遅くなるから決心は早めにね。今日は参加してくれてありがとう。気を付けて帰りなさい」

東条トレーナーはそう言って微笑むとファインモーシヨンさんとチームメンバーを連れてチームルームへと歩いて行った。

私達も更衣室へ向かうと着替えて帰る事にした。

「う〜ん悩むなあ・・・」

私は帰り道で天を仰ぎながら悩んでいた。

「せっかく合格できたんだからリギルに入ったらどう？」

キタちゃんの言葉も最もなのだが・・・。

「でも東条トレーナーさんってどっちかって言うくと逃げは苦手だと思うんだよね。ヒシアマ姉さんに聞いた話だと逃げ馬のサイレンススズカ先輩の才能を開花させられなかったって悩んでみたいだし・・・」

きつとチームリギルでは私は行き詰ってしまうだろう。

しかしこんな変わったウマ娘を受け入れてくれるチームが他にあるかどうか・・・。

「たりや〜！」

その時、私の耳に以前聞いた事のある声が聞こえてきた。

顔を向けた方には練習用コースで全力疾走する青い髪のウマ娘が居た。

「あ・・・あの髪色は・・・」

「どうやらチームで練習中みたいですね。ちょっと見学していきます？」

立ち止まった私にサトちゃんがそう問いかけてくれた。

「うん・・・」

半ば無意識に返事をする私は駆け足でコースへと近寄っていった。

「ゼヒーゼヒー・・・やっぱりターボ・・・以前みたいな走りはできな

いぞ・・・」

「ターボちゃん大丈夫？」

青い帽子を被ったウマ娘がコースでへたり込んでいる青髪のウマ娘を気遣っている。

「《font:ul40》有馬記念《font》以降完全にダメになっちゃったわね。イクノ、心拍の方はどう？」

「時々ですが不整脈が見られますね。まだまだ体調が戻るには時間がかかるみたいです」

入学式で出会ったイクノデイクタス先輩が青い髪のウマ娘がつかえているスマートウオッチを覗き込んで答える。

「あ、あの！イクノデイクタス先輩！」

「ん？貴女はインパクトターボさんですね。お久しぶりです」

イクノデイクタス先輩が嬉しそうに出迎えてくれて私は心が温かくなった。

「イクノ、知り合いなの？」

「はい、入学式で知り合いました、運命的な何かを感じたんです。あ、こちらは私のチームメイトのナイスネイチャとツインターボ、それとマチカネタンホイザです」

「おいつすー、ナイスネイチャです。一応チームカノープスのリーダーやってます」

態とちよつと軽い感じで挨拶をしてくれるナイスネイチャ先輩。

「はい、インパクトターボと言います！よろしくお願いしますナイスネイチャ先輩！」

「あはは、そんなに硬くならなくていいって。そんでこつちが」

「マチカネタンホイザと言います。ターボちゃんと名前が同じなんだね」

「ツインターボだぞ。なんだか名前も似てるし運命を感じるな！」

あの日見たあの背中・・・それが今、目の前にいた。

「おや？見学の方ですか？」

トレーナーと思わしき若い男性がやってきた。

「初めまして、チームカノープスのトレーナーをしております南坂と

申します」

「初めまして！中等部新入生のインパクトターボです！」

私は慌てて頭を下げて自己紹介した。

「ターちゃん1人で先に行かないでよ」

「あ、ごめん皆」

すっかり我を忘れていた私を追いかけてキタちゃん達がやってきた。

「お友達も一緒みたいですね。南坂と申します。皆さんよろしく願いします」

「あ、はい。新入生のキタサンブラックです。よろしく願います」

「サトノダイヤモンドです。ご丁寧にありがとうございます」

「さ、サムシングブルーです。よ、よろしく願います」

三人もそれぞれ挨拶をして頭を下げた。

「あの……ツインターボ先輩どこか悪いんですか？」

「ええ……少し心臓に負担が掛かり過ぎまして、現在はリハビリ中です」

「そう……なんですか……」

もうあの走りを見る事は出来ないかもしれない。

それだけが少し残念ではあるが仕方がない事でもある。

「あの！私をチームカノープスに入れて貰えませんか!？」

気を取り直して私は南坂トレーナーをお願いをした。

「大変嬉しい申し出なのですが今の私ではこれ以上のウマ娘を指導できないんです。すでに新しいメンバーを決めてしまっています。私がトレーナーとして未熟なばかりに申し訳ありません」

南坂トレーナーはそう言って大変申し訳なさそうに頭を下げた。

「そうですか……すみません無理なお願いをしてしまつて……」

「いえ、構いませんよ。もし私で相談に乗れる事がありましたら力になりますね」

その後、後ろ髪を引かれる私を半ば引きずるようにしてキタちゃん達が引つ張つていった。

「はあ……残念だったなあ……」

「しようがないよ。タイミングの問題もあるし、やっぱりターちゃんも一緒にスピカに行こうよ」

「そうですねよ！さっきの沖野さんも言ってたしスピカに行きましょうよ！」

「えつと・・・えつと・・・げ、元気だして」

落ち込む私を3人が必死に励ましてくれる。

「ありがとうね皆。そうだね。落ち込んでばかりもいられないし、まずはチームをどうするか考えないと・・・」

「む！その君達！」

そんな私たちに一人の男性が声をかけてきた。

「まだチームは決まってるじゃないようだな。私は山田。良かったら私のチームハダルに入らないかい？先の選抜レースを見てからずっと君達をスカウトしたいと思ってたんだ」

「全員ですか？」

「勿論全員来てくれれば言う事はないが特にインパクトターボ君！私は君の走りに惚れたんだよ！」

「ええ!？」

山田トレーナーの言葉に私は思わず大声を出した。

「大逃げしか出来ませんけど!？」

「大逃げ結構！タブーは人が作るものだ！定石なんて蹴り飛ばせ！気にする事は無いさ！」

私はその言葉に惹かれた。

沖野トレーナーには悪いけど沖野トレーナーより私はこの山田トレーナーに任せてみたいと思った。

「あの、是非お願いします！」

「ありがとう！これからよろしくな！」

こうして私の所属するチームは決まった。

第2シーズン第5話 夢の日本ダービー（馬）

皐月賞を激闘の末に勝利した後・・・。

「次は日本ダービーだな。これを勝てるかどうかで今後の展開が大きく変わるぞ」

さすがに日本ダービーに向けての調整がある為にほかのレースは自粛して調教に専念するようだ。

確かに日本ダービーは同じクラシック三冠の中でも特別に重いレースとして扱われる。

ダービーに勝てれば引退しても良いとか、ダービーに出られるなら賞金も要らない、などと言われる事すらあるのだから。

もちろん俺だってダービーを走れる事はとても嬉しい。

しかし他の馬だってダービーを勝ちたいのは同じだ。

だからこそ決して気の抜けない日々が始まるのだった。

「山田調教師！先の皐月賞はおめでとうございます！日本ダービーに向けての意気込みとインパクトターボの様子を教えてください！」

取材に来た記者がそう勢いよく訪ねる。

もちろん事前に煩くしない様に注意を受けている為に声は控えめだか語気は強い。

「ありがとうございます。日本ダービーですが当然インパクトターボが勝ちますよ。こいつの逃げ足は伊達じゃない。そんじよそこの逃げ馬とは違うのは皆さんもうお分かりでしょう？日本ダービーも、その先の菊花賞もすべて逃げ切って見せますよ」

「素晴らしい自信ですね！ダービーには接戦だったタニノギムレットやサムシングブルーが参戦すると見られています。が今度も厳しい戦いになりそうです。がいかがですか!？」

「ええ、あの馬達も強敵なのは重々承知しています。ですからこそ抜かりなく調教を行い、完璧に逃げ切って見せます」

「ありがとうございます」

山田調教師の強い言葉に俺も気合が入る。

連日の厳しい調教を乗り越えて俺はまた一つ成長するのだった。

そして日本ダービー当日……。

「さあ、今年もやってまいりました日本ダービー！日本競馬の中でも最も重いレース！走れるのは生涯ただ一度！最も運が良い馬が勝つと言われる日本ダービー！選び抜かれた18頭が貴方の夢！私の夢を乗せて走ります！天候は晴れとは行きませんでした！が馬場は良馬場！実に良い戦いになりそうです！さあパドックを見ていきましよう！」

実況の人の声を聴きながらパドックをグルグルと回る。

あ、俺の応援旗見つけた。

何々、「二代目逃亡屋インパクトターボ」って歌舞伎の隈取模様の上に達筆な字で書かれている旗が一番目立っている。

どうやら皐月賞で実況の人が叫んだ二代目逃亡屋という名実況（迷実況？）が早くも定着しつつあるようだ。

他にも「お前が逃げなきや誰が逃げる！」とか「暴走特急インパクトターボ」など色々な旗を見かけた。

応援される側と言うのはこうも気分が高揚するものなのだと改めて知った。

「2枠3番と好位置を引きました3番人気の直線番長タニノギムレットです！先の皐月賞ではインパクトターボとサムシングブルーとの3頭が纏れ込む大接戦でした！惜しくも3着に敗れましたが打倒インパクトターボを掲げて気合十分です！今日も直線での末脚に期待がかかります！」

タニノギムレットがこつちを睨んでいる。

「皐月賞での借り！きつちり返してやるから覚悟しやがれ！」

尋常ではない覇気でそう宣言するタニノギムレット。

「俺だつて負けるわけにはいかない！」

がつつりとこちらも睨み返す。

「さあ本日の大本命！ここまで全戦全勝の皐月賞馬！1番人気逃亡屋インパクトターボは6枠12番と外枠ですが果たしてどうでしょう！か！皐月賞で見せた驚異の逃げ足がまたまた炸裂するのか！無敗の二冠馬誕生なるか期待されます！」

パドックを見る観客達の視線も強く感じられる。

不甲斐無い走りはできないなこれは。

「牝馬によるダービー挑戦！皐月賞でも2着と好走！今日も狙った獲物は逃さない！7枠13番女ハンターサムシングブルー！彼女が唯一逃している獲物はインパクトターボだけ！逃亡屋が今日も逃げきるか！それとも女ハンターが仕留めるのか！熱い展開になりそうです！」

サムシングブルーちゃんまた隣なのね。

「今日こそ逃しません！」

「逃げ切って見せるさ！」

オドオドした雰囲気は徐々に消え、こちらをしつかりと見つめるサムシングブルーちゃんに俺もしつかりと返事をする。

彼女だつて成長してきている。

いつまで逃げ切れるか分からない。

パドックの周回が終わり、ターフへと移動する。

「・・・お前は本当にすごい馬だよ」

ターフに移動中の地下馬道で若井騎手がそう呟く。

「本当、俺なんかが乗ってていいのかって今でも疑問に思ってる」
確かに技術だけを言うのならもっと上手な人は居るだろう。

まだまだ新人の彼よりベテランは沢山いるのだから。

「でもな！俺はお前を降りたくない！お前に勝たせてもらっているお荷物のまま終わるつもりはない！だから相棒！今日も勝つぞ！」

そう、ダービーに挑むのは俺だけじゃない。

人馬一体は鞍上の騎手だけではない。

俺を支援してくれる室オーナー。

俺を最善の状況に持っていつてくれる山田調教師と厩務員達。

俺に係る全ての人と一つになる事で俺は走り続けられている。

それに答えるのが俺の仕事なのだから。

若井騎手への返事と俺自身の誓いを込めて大きく嘶いた。

「さあ！各馬がターフへとやってまいりました！改めて各馬を紹介しましょう！1枠1番ヤマノブリザード！青葉賞入着で見事ダービー

への切符を手にしました！続いて1枠2番ノーリーズン！皐月賞では入着しております！2枠3番、3番人気タニノギムレット！皐月賞はハナ差で3着と悔しい思いをしました。鞍上は武騎手！インパクトターボへの雪辱なるか！直線の末脚に期待です！続きまして2枠4番ダイタクフラッグ！この馬も先行馬ですが大逃げのインパクトターボに押されてやや影が薄いか！活躍を期待しましょう！3枠5番はアドマイヤドン！朝日杯1着の実力馬！皐月賞では後方に沈みましたがダービーはどうか！3枠6番テレグノシス！NHKマイル1着からダービーへの殴り込み！中距離は今日が初挑戦です！4枠7番モノポライザー！鞍上は皐月賞と同じ後藤騎手です！4枠8番マチカネアカツキ！ここまで連帯に必ず入っております！5枠9番ファストタテヤマ！京都新聞杯1着です！5枠10番メガスターダム！ダービートライヤルのプリンシパルを勝ち上がりました！6枠11番シンボリクリスエス！青葉賞1着の実力馬！6枠12番！お待たせしました1番人気！我らが逃亡屋インパクトターボです！なんとダービーまでに10戦全勝！無敗の皐月賞馬です！果たして彼を捕らえられる馬は居るのでしょうか！その隣！7枠13番には紅一点！牝馬サムシングブルーが参戦です！皐月賞2着の女ハンター！狙った獲物は逃さない！逃した獲物はインパクトターボただ1頭！今度こそ捕えられるのか期待が掛ります！7枠14番サスガ！いい走りに期待しましょう！7枠15番バランスオブゲーム！インパクトターボへの逆襲はなるか！8枠16番バンブーユベントス！青葉賞は2着でした！8枠17番タイガーカフェ！ホープフルステークスの勝ち馬です！8枠18番ゴールドアリュール！ダート戦では好成績ですがダービーはどうでしょうか！以上18頭フルゲートでのレースです！」

皐月賞の時でも非常に強い歓声が聞こえてきたが日本ダービーではそれを上回る大歓声に迎えられるのレースになりそうだ。

重い！空気が！視線が！皆の思いが！

でもそれは皆同じだ。

だからこそ負けられないんだ。

決意と共に俺はゲートに入っていた。

SIDE：実況

「さあ最後の1頭が収まりました！今係員が脇にそれました！体制完了！……スタートしました！先行争いはやはりこの馬インパクトターボが飛び出しました！その後ろには今日こそ獲物を捕らえるのだと狙っていますサムシングブルーが追走しております！タニノギムレットは今日は控えめ中団待機でしょうか！レース展開はインパクトターボの大逃げを許さないと非常にハイペース！第1コーナーに入ってもまだ各馬ポジション争いが収まりません！抜け出したインパクトターボとサムシングブルー以外は激しい競り合いをしております！まもなく第2コーナーを抜けて向こう正面に入ります！1000メートルのタイムはなんと58秒！58秒と非常に速いペース！果たして最後まで走り切れるのでしょうか！インパクトターボが変わらず先頭その差は4馬身から5馬身と言ったところ！2番手で虎視眈々と捕えるタイミングを伺いますサムシングブルー！大きく離れて先行馬集団、ダイタクフラッグなどが前を追います！その後ろにつけましたタニノギムレットは今日は静かに狙いを定めています！インパクトターボ快調に飛ばしております早くも櫂の向こうを通り過ぎていく！サムシングブルーが徐々に差を詰めていきます！タニノギムレットはまだ動きません！最後の直線に向けて今は我慢しております！さあ第4コーナーを回って残りは500メートルの直線と上り坂！インパクトターボ懸命に逃げます！サムシングブルーがその差を2馬身まで縮めました！タニノギムレットが大外から一気に捲り上げてきます！我慢の末脚ここで炸裂！他の馬を置き去りにしてタニノギムレットが優勝争いに名乗り出ました！やはりこの3頭の争い！インパクトターボが坂を上り切りました残り300メートル！サムシングブルーが並びかけます！その後ろにやってきました！タニノギムレット！驚異的な末脚で早くも2頭に並びかけます！インパクトターボがまだ先頭ですがその差は僅か！もはや3頭が完全に並んでおります！インパクトターボか！サムシングブルーか！タニノギムレットか！完全に3頭が並んだままゴールイン！誰が

勝ったのか全く分かりません！大混戦の日本ダービー！タイムはなんと2分25秒2！アイネスフウジンが出した2分25秒3を上回りました！ですが1着はまだ未定の写真判定中！果たしてどの馬が勝ったのか！観客も固唾をのんで見守っております。中々写真の表示が消えません。ここまで長い審議はダービーでは珍しいでしょう。騎手たちも不安そうに掲示板を見つめています。まずは3着が出ました！3着は13番サムシングブルー！ハナ差です！1着はまだか！1着も出ました！1着は3番タニノギムレットです！タニノギムレットが逆襲を果たしました！無敗の皐月賞馬インパクトターボ！ハナ差で2着に敗れる！1着はタニノギムレットです！あっ！タニノギムレット故障か!?足を庇っています！武騎手が急いで降りて医師を要求しています！なんとダービー馬となったタニノギムレットに不穏な気配です！大事で無いと良いのですが！」

S I D E：インパクトターボ
「ッ！」

好調なスタートを切れたが外枠からの走り込みは中々厳しい。迂闊に内側に入り込んでしまえば斜向で失格になってしまう。

「大丈夫だ！今なら内に入れる！」

若井騎手の指示にしたがって内側に入り込む。

その後ろにサムシングブルーちゃんが付いてくる。

「ついてく！ついてく！」

彼女の声を聴きながら第1コーナーへと入る。

しかしタニノギムレットの怒声が聞こえてこない。

何とも不気味だ。

迂闊に気を抜けばやられると思った俺は足をさらに速める。

「いいぞターボ！そのまま後ろなんか振り切ってしまえ！」

向こう正面に入ってもタニノギムレットは静かなままだった。

他の馬達の懸命に追いかける声は聞こえてくるのに騒がしいタニノギムレットの声がしないのは恐怖すら感じる。

何か策があるのだろう。

だからこそいつもより足を速めるんだ！

「ッ！ついてく！」

さらに速度を上げた俺にサムシングブルーちゃんは負けじと速度を上げた。

東京競馬場名物の大櫓を通り過ぎた所でサムシングブルーちゃんがジリジリと上がり始めた。

「今日こそ！逃しません！」

「負けるわけにはあ！」

そのまま最終直線に入った時だった。

「つぎっけんなごおらあ！」

「来たか！」

タニノギムレットの怒声が聞こえてきた。

ものすごい勢いで坂を駆け上がり、一気に俺達に並んできた。

「待たせたなインパクトターボにストーカー女！てめえらなんかや負ける俺様じゃねえ！」

そこには嘲りも傲慢さも無かった。

絶対な自信でもってタニノギムレットはそう宣言した。

「そう簡単にいい！」

「負けてなるものですか！」

「勝つのは俺様だあ！」

誰もが先頭を譲らない。

全身全霊をかけた走り。

「俺様が！俺様がタニノギムレット様だあ！」

最後の明暗を分けたのはたった僅かな気迫の差だった。

「負け……た……」

長い審議を経て掲示板に表示されたのは自分の負けという結果だった。

悔しさも当然あるがそれよりなにより皆への申訳の無さでいっぱいだった。

特に若井騎手は自分のせいだと落ち込んでいる。

負けると言うのがこんなにも辛く重いものだとなんか初めて知ったのだ。

ならば勝者には賞賛を送ろうとタニノギムレットの方を振り向いた。

「お前の勝ちだ。タニノギムレット!」

そこには明らかに足を庇うタニノギムレットが居た。

騎手も異変に気が付いたのか降りて係員に医者を要求した。

「大丈夫なのか!」

「ああ・・・折れちゃあいねえ・・・ちっと痛むだけだ・・・」

先ほどまでの覇気が無く、そこには弱り切ったタニノギムレットが居た。

「どうだ、俺様の勝ちだ」

「ああ、お前には負けたよ」

「勝ち逃げをするつもりはねえ!菊花賞で待つてろよ!」

ただ勢いだけのプライドが高い馬だと思っていた。

しかし彼は彼なりのポリシーで俺に挑んできていたのだ。

「待つている!だから絶対に戻ってこい!次は逃げ切つてやるからな!」

医者の判断で馬運車に乗せられていくタニノギムレットを俺はただ見送るしかできなかった。

そして、タニノギムレットがレース場に帰ってくる事は無かった。

インパクトターボ 牡3歳 11戦10勝 主な勝鞍：G I 皐月賞

G II 弥生賞 G I 日本ダービー2着

第2シーズン第5話 夢に抱く日本ダービー（ウマ娘）

私がチームハダルに入る事を決めた日の寮での夕食……。

「そっか、ターちゃんハダルに決めたんだね」

すっかり仲良くなったライス先輩とロボロイ先輩（本人から呼び辛い名前だからと提案された）と一緒に食事を取りながら今日あった事を話す。

「それで、ルーちゃんはりギルに入るの？」

「そ、それなんですけど……」

ルーちゃん曰くあのメンバーの中では自分など埋没してしまうし、何よりあの雰囲気では身が竦んでしまっってきつといい成果が出せないだろう、という事だった。

ルーちゃんは決して凡才ではないと思うのだが本人が決めた事を周りが無理強いするのは違うだろうと思い、私は反対はしなかった。「でも早く決めないとデビューは遅くなっちゃうし何より毎日勧誘が来るよ？」

「う……」

今朝の事を思い出してルーちゃんが青くなる。

元々人見知りが強くて恥ずかしがりやなルーちゃんが毎日あれだけの人に押しかけられるのは苦痛だろう。

「あの、それだったらライスの元トレーナーのチームはどうか？お姉さまはダメダメのライスの事ずっと支えてくれたしチームメンバーもまだ少ないから」

現在ライス先輩は元居たチームからミホノブルボン先輩のチームに移籍している。

どうやらドリームトロフィーリーグに所属するウマ娘を指導するには一定以上のG1ウマ娘を出したトレーナーでないと指導できないらしい。

ライス先輩の元トレーナーさんはライス先輩しかG1ウマ娘を出

せていない新人さんらしくまだまだドリームトロフィーリーグの指導はできなかつたらしい。

「えっと、一度お話してからでもいいですか?」

「うん、勿論。お姉さまにお話ししておくね」

こうして楽しい夕食は過ぎていった。

そして翌日。

「それで結局ライス先輩の元トレーナーさんのチームに入る事にしたんだね」

「う、うん。優しそうな人だったし、私の事も分かってくれたから」

今朝、時間があると言うことから早速ライス先輩の元トレーナーさんが寮を訪ねてきた。

「初めまして。チームアンタレスのトレーナー、的場瞳と言います」

「は、初めまして。サムシングブルーです」

「お姉さま!ルーちゃんきつと強いウマ娘になると思うの!」

この後色々話し合ったルーちゃんはトレーナーさんの雰囲気などを気に入り、トレーナーさんもルーちゃんを気に入ったらしい。

こうしてルーちゃんもアンタレスに入る事になった。

「それで二人はやっぱりスピカに?」

「うん、やっぱりテイオーさんと一緒に走りたいから諦めきれなくてね」

「私もマックイーンさんと一緒に走りたいんです」

キタちゃんもサトちゃんはやっぱり憧れを追う事に決めたらしい。

「でも、あのトレーナーさんはちよつと心配だなあ。指導力は確かかなだらうけれども・・・」

「あ、あはは・・・」

さすがの二人も言葉を濁していた。

そして授業後・・・。

私はチームハダルの練習に参加する為にチームルームを訪ねた。

「失礼しまーす!」

チームルームのドアを開けて挨拶をしながら中にはいると・・・。

「!!!」新人さんいらっしやう!!!「!!!」

パンパンパンパンパンパンツ！

沢山のクラッカーと共に出迎えられた。

「あ、ありがとうございます！今日からお世話になるインパクトターボです！よろしくお願いします！」

ここまで歓迎してくれるとは思わず胸が熱くなる。

「おう、チームハダルにようこそ。改めて自己紹介させてもらう。チームハダルトレーナーの山田武志だ。皆順番に自己紹介をしてくれ」

山田トレーナーに促されて先輩ウマ娘たちが自己紹介をしてくれる。

「はい！チームハダルチームリーダーのアイネスフウジンなの！よろしくなの！」

特徴的な口調のアイネスフウジン先輩が自己紹介してくれた。

「アイネスフウジン先輩ってダービーウマ娘の！」

「私の事知っててくれて嬉しいの！」

アイネスフウジン先輩が笑顔で握手してくれた。

「さすがアイネス先輩ですね。あ、あたしはメジロパーマー。それでこっちが」

「ハロハロ♪あたしはダイタクヘリオスです！パーマーとはズツ友なんでしくよろ♪」

親しみやすさの中にどこか育ちの良さを感じるメジロパーマー先輩とギャル全開のダイタクヘリオス先輩。

意外に見えるコンビだがどうやら非常に仲が良いみたい。

「はい！次は私ですね！初めまして！クラバクシンオーです！是非バクシンしましょう！」

圧がすごいクラバクシンオー先輩がいい笑顔で謎の勧誘をしてくる。

意味は分からないが何とも気になるワードである。

「初めまして〜！私はスマートファルコンです！あなた！ウマドルに興味ない!?!」

こちららもウマドルなる謎の勧誘をしてくるスマートファルコン先

輩。

「どもどもくセイウンスカイだよ。ま、適度によろしくね」
暢気な感じでセイウンスカイ先輩が自己紹介してくれる。

ん？ちよつと待てよ・・・？

「山田トレーナー」

「なんだ？」

「浪漫に生きてますね！」

「おう！」

私のサムズアップにいい笑顔で山田トレーナーがサムズアップを返してくれた。

「さて、恒例の新人歓迎レースをやるぞ！」

え？新人歓迎レース？

「「「「オー！」「「「「」」」」」

何やら訳の分からぬまま私は体操服に着替えさせられてコースへと連れていかれた。

なして？

「それじゃあ準備はいいな！」

詳しい説明もないままストレッチをやるように言われ、先輩たちとウォームアップを済ませるとそのままレースになった。

「芝2000で各自好きなように走れ！いくぞ！よい！スタート！」

結局そのままレースが始まってしまった。

私は半ば条件反射でスタートを切った。

スタートの良さは自信がある。

完璧なスタートダッシュで私は何とか先輩たちより前に出る事に成功した。

「意外とやるのね新人ちゃん！でも先頭は譲らないの！」

「は、早い！」

私が先頭で居られたのはスタートして僅かの時間だけだった。

あつという間にアイネスフウジン先輩に抜かれてしまう。

「やるねえ！でもあたしだって負けないよ！」

「いえ〜い！パーマーと一緒にアゲポヨでゴ〜！」

メジロパーマー先輩とダイタクヘリオス先輩が仲良く抜いていく。

「例え2000メートルでもバクシンバクシン〜！」

「やれやれ、相変わらず暑苦しいなあ」

サクラバクシンオー先輩が鼻息を荒くしながら抜いていき、それを少しあきれた様子で見ながらセイウンスカイ先輩が追いかけていく。

「ふふふ〜ファル子はターフでも負けないんだから！」

どうやら芝よりダートが得意らしいスマートファルコン先輩にも抜かれてしまった。

「うう．．．みんな早い．．．」

結局私が他の先輩たちを抜き返すことはできず．．．いや、途中で適正距離の関係で力尽きてしまったサクラバクシンオー先輩を除いて私は抜くことができなかった。

「どうだ？お前が目指す背中は」

「強い．．．ですね．．．私なんかたどり着けるかどうか．．．」

当然だが先輩たちの様に走れるビジョンが浮かんでこない。

「今はそうだ。あいつらも嘗てはそうだった。だがお前もいつかあちら側になる。全力を出さなかった．．．いやバクシンオーは別だな。まあ新人に大人げない真似はしていないあいつらにスタートだけは言え先頭を走れたんだ。お前のそのスタートの良さは最大の武器だ。逃げとして最高のポテンシャルを秘めていると言ってもいい。後はその才能を俺が引き出してやるだけだ」

山田トレーナーはそう言って私を真剣な表情で見つめる。

「だからお前は前を向いて走り続ける。そうすれば勝てる」

「．．．は〜」

何時か到る景色。

その明確な姿を私は今日はつきりと見せられた。

トレーナーと一緒にあの憧れを超えていける。

私はこの時、そう強く思った。

「せ〜のー」「」「」「かんぱ〜い」「」「」「」

新人歓迎レースが終わった後、チームルームで本当の新人歓迎会を

開いてくれた。

ジュースやお菓子、フライドチキンやポテトなどが用意されていた。

「改めましてインパクトターボです！よろしくお願いします！皆からはターちゃんと呼ばれてます」

私は先輩達に頭を下げた。

「こちらこそよろしくなの」

アイネス先輩が代表して歓迎の言葉をくれる。

「それでターちゃんはどんなレースに出たいの？何か目標とかある？」

パーマー先輩が私に目標を聞いてくる。

「えつと・・・大それた目標でも・・・いいですか？」

非常に恥ずかしいのだが全員が笑顔で促してくれる。

「ダービーを大逃げで逃げ切りたいんです」

私は恥ずかしくて熱を冷ますためにジュースをゴクリと飲み込んだ。

顔が赤くなっているのが分かる。

「あはは、大丈夫大丈夫。皆だつて大きな夢を抱いてこの学園に入ってきたんだよ。夢は必ず叶う、なんてとても言えないけれど、夢を追いかけるのを貶す人は誰もいないよ。勿論私たちだつて大きな夢を持ってこの学園に入ったんだしね」

「そうそう♪パーマーの言う通り♪」

「ええ！夢は誰もが抱くものです！私だつていつか必ず長距離をバクシンンして見せますとも！」

決して先輩たちは私の夢を笑う事なく肯定してくれた。

「ところでターちゃん！ウマドルに興味は無いかな!?きつとターちゃんなら個性的なウマドルになれると思うの！」

話を聞くとファルコン先輩はどうやら逃げ切りシスターズというウマドルグループを作っているらしい。

ウマドルとはウマ娘アイドルの略称らしくファルコン先輩はこのウマドルでもトップになりたいとのことだった。

なお後でパーマー先輩が教えてくれたがウマドルを自称しているのはファルコン先輩だけらしく、そこでライバルが欲しくてファルコン先輩がピンと来たウマ娘に声をかけているのだとか……。

「ま、何事も程々が一番さ。夢に向かって全力疾走ばかりしているとバクシンオーみたいな息が続かないよ」

「ちよわ!?!」

スカイ先輩がそう言っただけで空になった私のグラスに新しいジュースを注いでくれた。

「安心しろ。お前の夢に向かって俺が導いてみせる」

「はい、ありがとうございます」

私はこのチームハダルで仲良くやっていけそうだと嬉しくなった。

第2シーズン第6話 次のレースは・・・(馬)

日本ダービーの後・・・。

『ダービー馬タニノギムレット引退か!?』

そんな見出しの競馬新聞を山田調教師が読んでいる。

記事を読む限りでは前足に屈腱炎を発症したタニノギムレットの復帰はほぼ絶望的だと書かれている。

ちくしょう・・・勝ち逃げしやがって・・・。

「山田さん、今日はどういったご用件で？」

室オーナーが山田調教師を訪ねてきた。

口ぶりからするにどうやら山田調教師から呼んだようだ。

「ああ、室さん。急にお呼び立てしてしまつてすみません。実は今後の事で色々話し合いたくて電話では伝わり辛いと思つたので・・・」
「すみません！遅くなりました！」

おや？若井騎手も来るなんて何やら大事になりそうな予感だ。

「ああ若井君もよく来てくれた。さて、今後のインパクトターボの事について話し合いを始めましょう」

そういつて山田調教師は話を切り出した。

「まず最初に、宝塚記念から招待を頂いております」

確か宝塚記念は人気投票で出場する馬が決まるルールだったな。

「それは光栄ですな。しかし山田さんはあまり嬉しいようではなさそうですね？」

「いえ、嬉しくない訳ではないのですが・・・室さん。インパクトターボで菊花賞を狙いに行きますか？それとも菊花賞は回避しますか？それによって今後のプランが大きく変わります」

菊花賞回避。

山田調教師のその言葉に室オーナーと若井騎手の表情が変わった。

「山田さんの見立てでは厳しいと？」

「ええ、現状のままでは勝つことは難しいでしょう。私の見立てではインパクトターボは恐らく2600か700が限界でしょう。それ以上に距離を走る菊花賞ではあのサムシングブルーには勝てません」

サムシングブルーちゃんはロングステイヤーとして有名なライスシャワーの血を引いている。

親の特性が必ず子に出るとは限らないが最も良く似ていると言われているサムシングブルーちゃんが長距離を走れない事は無いだろう。

何より皐月賞より日本ダービーの方がギリギリの闘いになった事を思えばきつとサムシングブルーちゃんは長い距離の方が得意なのだろう。

「勿論私も諦めるつもりはありません。可能な限りの調教を施す事で菊花賞でも勝つことはできます」

「・・・その為には宝塚記念が邪魔・・・と？」

室オナーの言葉に山田調教師は無言で頷いた。

「宝塚記念に出れば十中八九勝てるでしょう。ですが菊花賞までに調教が間に合いません。ですので室さんに決めていただきたいのです。菊花賞を取るか、宝塚記念を取るか」

極めて難しい決断だ。

長距離路線を捨てて走らない馬は多い。

皐月賞1着、ダービー2着と既に十分な実力を発揮している。

でもできれば俺は菊花賞に出たい。

「クラシック三冠制覇はできませんでしたが、だからと言って菊花賞を捨てるのは片手落ちでしょう。宝塚記念は惜しいですが、私は出きる事なら菊花賞を走らせてやりたい」

「・・・分かりました。では宝塚記念は断ります。次の話なのですが・・・若井君」

「はい」

今まで無言で二人の話を聞いていた若井騎手が呼ばれた。

「君の今後の話だ。室さん、若井君をこのまま乗せますか？それとも他の騎手を乗せますか？」

おそらく山田調教師としては自分が紹介した若井騎手に乗っていて欲しいのだろう。

しかし室オナーがそれを断れば別の騎手にしなければならない。

「他に騎手の当てがありますか？」

「ええ、何人かの騎手から機会があればという声は頂いております。必ずとは言えませんが良い返事が貰えることは間違いないでしょう。乗せかえて直ぐはなかなか息が合わない事もあります。今回は時間があります。問題なく乗り換えができるでしょう」

その言葉に若井騎手の表情が硬くなる。

まだまだ成績の少ない若井騎手が専属で乗れると言うのは非常にありがたい事なのだろう。

まして自分をG1ジョッキーにしてくれた馬から降りろと言われ
るのだ。

これほど辛い事は無いだろう。

「・・・若井君。君はどう思っているんだい？」

室オーナーは若井騎手の方を向いた。

「自分は・・・！決して上等なジョッキーとは言えません！経験もまだまだ未熟です！正直に言っていてインパクトターボの実力を100%発揮できているかと言われても分かりません！でも！でも自分は！こいつと！相棒と一緒にこれからも走りたいんです！必ず勝ってみせますなんて言えません！ですが負けん気だけは誰にも負けたくありません！お願いします室さん！俺にチャンスを下さい！」

そう言つて頭を下げる若井騎手を室オーナーはジツと見つめていた。

「君は正直だな。真つ直ぐにぶつかる事しか考えていない。それでは生き辛いだろう？」

「ですが自分を曲げて生きるよりは胸を張って行けると信じています！」

その言葉に室オーナーは笑顔になった。

「いいねえその情熱。初志貫徹できる事を応援しているよ。安泰に思ってもらっては困るが、結果がついてくる限りは君を乗せよう」

「ありがとうございますー！」

若井騎手は再び頭を下げた。

それから猛特訓が始まった。

適正距離を延ばす為、ひたすらにスタミナトレーニングが行われる。

坂路を使ったトレーニングやプールを使ったトレーニングが中心でただただスタミナを強化する。

食事もそれに合わせて多めに出されるようになり、また色々な栄養のある物を混ぜるなど可能な限りを尽くす。

こうして俺は約5ヶ月間菊花賞に向けてのトレーニングに専念したのだった。

そして菊花賞当日……。

「さあ、クラシック最終レース菊花賞。今日の京都競馬場はあいにくの雨ですが馬場には影響は無く良馬場となっております。最も強い馬が勝つ菊花賞。果たしてどの馬が勝つのか。注目のパドックを見てみましょう」

それほど強くない雨を背中に受けながらパドックをグルグルと回る。

「3枠5番、今年の皐月賞馬にしてダービー2着の逃亡屋、インパクトターボは2番人気です。やはり長距離の大逃げは厳しいという見方が強いのか、それでも2番人気になりましたインパクトターボです。ですがどうでしょう解説の大西さん」

「なんでも宝塚記念に呼ばれていたそうですが菊花賞の為の調教に専念するからと辞退したそうですよ。実際ダービーの時よりさらに肉付きも良くなっていますし全体的に鍛え上げられている様子が見て分かりますからこれは期待できそうですね」

「なるほど、3000メートルを逃げ切りなるか期待されますインパクトターボでした」

そうなると今日の1番人気は……。

「3枠6番、牝馬によるクラシック挑戦、皐月賞2着、ダービー3着とここまで惜しいレースが続いています1番人気サムシングブルーです。前走のセントライト記念を圧倒的な走りで勝利しましたサムシングブルー。牡馬に負けないスタミナとパワー、ライスシャワーの血を考えれば菊花賞はこの馬が取ると予想されております」

「もしインパクトターボやタニノギムレットが居なかつたら三冠馬になつていたのはこの馬だったでしょう。生まれた時代が悪かつたでしょうか言えないですね」

後ろを振り向くとやはりサムシングブルーちゃんが居た。

「今日こそ、逃がしません!」

「今日も逃げきつて見せるさ!」

そんな風に火花を飛ばしあつていと……。

「オイオイオイ! 俺様を差し置いて何熱くなつてるんだよ!」

え!? このガラの悪い声は!

「7枠15番、復活のダービー馬、タニノギムレットです。ダービー後に引退も噂される程の怪我をしましたタニノギムレットですが奇跡の復活としか言い様がありません。ですがやはり調教のタイムが思わしくない為に5番人気と落ち込んでおります」

「治療が上手く行ったために出馬できましたがこれが引退レースでもあります。おそらく再発を恐れての事でしょう。すでに種牡馬入りの話も出ておりますし、今回は記念出走の意味合いが強いですね」

タニノギムレットがそこにいた。

「タニノギムレット! 無事だったのか!」

「あの程度でくたばる俺様じゃあねえ! …と、言いたい所だったが悪い。こいつがラストランだ」

「治りきつてないんですね」

サムシングブルーちゃんの言葉にタニノギムレットは頷いた。

「一応の症状は治まつてやがる。だがいつまた再発するか分からねえ。子種を期待されてる身としちゃあ予後不良は避けたいんだろうさ」

少し寂しそうにタニノギムレットが笑う。

「だからつて気の抜けた走りなんかすんじやねえぞ! そんな事しやがったら許さねえからな!」

「勿論だ! 全力で逃げてやる!」

「私だつて負けたまま終わりません!」

「おう! また後ろからぶち抜いてやるよ! インパクトターボにサムシ

ングブルー！」

そしてレースが始まる。

SIDE：実況

「さあ、間もなく始まります菊花賞。3000メートルという未知の距離を走る18頭。クラシック最終レースを走るメンバーを紹介いたします。1枠1番ナムラサンクス。神戸新聞杯3着です。1枠2番ヒシミラクル。調教師の話では長距離が得意との事ですがどうか期待されます。2枠3番アドマイヤドン。朝日杯優勝馬ですがクラシックレースでは苦戦しております。2枠4番ダイタクフラッグ。先行馬ですがインパクトターボの影響で今一パツとしません。3枠5番インパクトターボ。2番人気です。皐月賞1着、ダービー2着の実力馬。近年珍しい大逃げ専門の逃亡屋。果たして3000メートルを逃げ切れるのか期待されます。3枠6番サムシングブルー。牝馬にも関わらず1番人気です。皐月賞2着、ダービー3着。G1が欲しい所です。4枠7番ファストタテヤマ。京都新聞杯1着と京都競馬場は慣れたものか。4枠8番ダンツシエイク。2600メートルのレースを1着になっています。5枠9番レニングラード。少ないレースで菊花賞に挑戦します。5枠10番ヤマノブリザード。インパクトターボとサムシングブルーに良い所を取られっぱなしです。6枠11番タイガーカフェ。はたして長距離はどうなんでしょうか。6枠12番ローエンダリン。宝塚記念3着と好走をしております。7枠13番バンブーユベントス。青葉賞2着の馬です。7枠14番メガスターダム。ラジオたんぱ杯1着とマイルには強いようですがどうかでしょうか。7枠15番タニノギムレット。今年のダービー馬です。残念ながらこのレースが引退レースとなってしまうました。無事を祈りましょう。8枠16番バランソブゲーム。セントライト記念で入着し、菊花賞に駒を進めました。8枠17番マイネラムンゼン。セントライト記念3着です。8枠18番アドマイヤマックス。セントライト記念2着、東京スポーツ杯1着です。以上18頭フルゲートでの出走です。さあ、ゲートの準備が終わり、今スターターが旗を振りました。そしてファンファーレ。淀に観客の歓

声が響き渡ります。各馬ゆつくりとゲートインしていきます。体制完了。・・・スタートしました。まずは先頭争いですが一頭好スタートで抜け出しましたインパクトターボ。やはり今日も大逃げでしょう早くもリードを広げています。その後ろを追いかけるのはサムシングブルー紅一点。今度こそ獲物は逃さない。そんな気迫が伝わってきます。一度目の坂を駆け上がりながら各馬がコーナーへと入っていきます。この辺りで隊列が出来上がっていきます。先頭は変わらず大逃げ5番インパクトターボ。その後ろ3馬身から4馬身をキープしております6番のサムシングブルー。2馬身ほど離れて4番ダイタクフラッグ今日は攻めています。大きく離れて14番メガスターダムが後方を引っ張っております。さあ坂を下って一回目のスタンド前を駆けていきます。まもなく1000メートルを通過。タイムは59秒。インパクトターボにしてはやや抑えめか。しかし3000メートルでありますこのレース。果たして最後まで持つのでしょうか。15番タニノギムレットは中段外目につけております。非常に縦長の展開になりました今年の菊花賞。第一コーナーを軽快に走ります先頭のインパクトターボ。その後方4馬身にサムシングブルー。ダイタクフラッグは少し下がっております。隊列は変わらぬまま向こう正面へと入っていきます。14番メガスターダムが後方集団先頭。しかしその外にローエングリンがいます。タニノギムレットが動き始めました。ゆつくりとですが前に出ていきます。さあ先頭インパクトターボが二度目の淀の坂を駆け上ります。サムシングブルーも虎視眈々と狙いを定めています。ダイタクフラッグ疲れたのか引き離されていきます。さあ頂上を超えて下り坂！各馬の動きが激しくなっています！先頭は変わらずインパクトターボ！さあここからスタンド前に入ります！インパクトターボ懸命に逃げる！しかし後方からサムシングブルーが迫ってきます！タニノギムレットも集団を抜け出して追い上げますが足色が鈍い！3000メートルという壁がダービー馬を阻みます！ヒシミラクルも上がってきますが間に合わないか！先頭は変わらずインパクトターボ！しかし苦しいか！サムシングブルーだ！サムシングブルーだ！やはり

この馬は強いのか！ライスシャワーも応援しているぞ！サムシングブルーが今完全に抜け出した！そしてゴールイン！やりましたサムシングブルー！牝馬による菊花賞優勝です！1943年以來の快挙！サムシングブルーがついに宿敵インパクトターボを捕らえました！」

SIDE：インパクトターボ

スタートで先頭を取った後、いつもよりは控えめで走る。

「いいぞ相棒！今日は長いからな！」

若井騎手が焦る気持ちを落ち着かせてくれる。

「ついてく！ついてく！」

今日も後ろにサムシングブルーちゃんが居る。

距離を考えてか今日は少し離れているがそれでもきつちりとついてくるのは流石だ。

「偶には俺だってえ！」

どうやら他にも1頭ついてきているようだが気にしている暇はない。

タニノギムレットは今日も抑えていくようだ。

初めて経験する3000メートルのレースに各自様子を伺っている。

俺もいつもより控えめのペースで先頭を走り続ける。

「今日はまだ終わりじゃないからな！もう一周あるぞ！」

一度目のゴール前を通過しながら若井騎手がそう声をかけてくる。

背中に声援を受けながらコーナーを曲がっていく。

サムシングブルーちゃんとの距離は変わっていない。

やはり彼女のスタミナと根性は非常に強い。

もう1頭はどうやら力尽きたのか離れていく。

二度目の向こう正面を駆け抜けて坂にかかる。

「ハハハ！」

サムシングブルーちゃんがじわりじわりと上がってくる。

「負けるな相棒！」

若井騎手が懸命に後押ししてくれる。

勢いよく坂を下り最後の直線に入る。

「チツクシヨオ！俺様はここまでなのかあ！」

後方からタニノギムレットの怒声が聞こえてくる。

適正距離を超えてしまったらしい。

だがそれはこちらも同じだった。

「相棒！もう少し！もう少しなんだ！がんばれ！」

懸命に足を動かすがスピードは上がらない。

維持することもままならない。

これが適正距離の壁なのか！

それでも必死に進む。

「今日は！貰いました！」

「させるかあ！」

サムシングブルーちゃんが並んでくる。

最後の気力を振り絞って走る。

しかしそれが最後の足掻きだった。

「はあ!!」

「ぐう！」

気合と共にサムシングブルーちゃんが俺を追い抜き、引き離していく。

「ちくしょう！すまない相棒！」

いや・・・俺の方こそすまない。

あと少し、わずか100メートルの距離が俺には永遠に感じられた。

何とか2着を維持する事は出来たが危うく3着になりそうなほど、俺は疲れ切っていた。

「ふふ、リベンジ達成です。やっぱり貴方は強いですね」

「いや・・・今日は完敗だよ。強いね、サムシングブルーちゃん」

資質が、距離適性が、言い訳はいくらでも出来るだろう。

だがそんな事をして何の意味もない。

「さあ、勝者の義務を果たしておいで」

「はい！」

嬉しそうにウイニングランをするサムシングブルーちゃん。

「ち・・・不甲斐ねえ」

「まったくだ。オスが揃ってこのざまだもんな」

何とか入着したタニノギムレットとお互いに笑いあう。

「結局お前との勝負は良く分からんまま終わっちゃったな」

「1勝1敗1引き分け、それでいいじゃないか」

その言葉にタニノギムレットも頷いた。

「ハハ、後の事は俺のガキに託すさ。なんか知らんがガキが快拳を達成してくれる気がしてな」

「なんだそりや、予知ってやつか？」

「かもな」

まあこいつの子供が実際に快拳を達成する訳なんだがそれは黙っておこう。

「お前との因縁はこれからも続く気がするんだ。ガキにやあ悪いが付き合ってもらおうとするさ」

「おいおい、無責任な親だな」

その言葉はきつと当たる。

なぜだか知らないがそんな確信があった。

「元気でな。タニノギムレット」

「予後不良なんてするんじゃないぞ。インパクトターボ」

こうしてタニノギムレットはレースから引退した。

インパクトターボ 牡3歳 12戦10勝 主な勝鞍 GI皐月

賞 GI弥生賞 GI日本ダービー2着 GI菊花賞2着

第2シーズン第6話 次のデビューレースは・・・(ウマ娘)

歓迎会からしばらく、私はまずフォームの練習から入った。

一応小学生時代にこどもウマ娘塾で引退したウマ娘や元トレーナーさんから指導は受けていたがやっぱりしっかりとした指導を受けていない為どうしてもフォームが定まっていなかったらしい。

改めてフォームの修正を受けるとやっぱり色々は無駄にしてしまっている部分があった。

実際数回の練習しかまだ受けていないがその時点でタイムが変わってきているという事実から、如何に一流トレーナーの指導が大事かという事が分かる。

地元の元トレーナーさんも引退ウマ娘さんも地方トレセン出身だったし毎日塾があったわけではないのでどうしても指導は手が行き届いていなかった。

しかも私は先頭を走らないと気が済まない性格だったのでどうしても逃げや大逃げが基本になる。

元トレーナーさんは逃げはあまり指導した事がなかったみたいだし引退ウマ娘さんも追い込み型だったので余計にどの様に指導したら良いのか分からなかったと言うのもあったのだろう。

「いいぞ、さらに良いフォームになってきたぞ」

「はいー」

山田トレーナーにそう褒められて嬉しくなった。

「そっか、ターちゃんも順調なんだね」

お昼休み中に食堂でいつもの4人でお互いの近況報告をしていた。

「うん、やっぱり中央トレセン学園のトレーナーさんはすごいね。地元で受けてた塾と全然違うよ」

「わ、私も本格的なトレーニングは初めてです」

私とルーちゃんは元々一般家庭の出身でトレーナーが付いての指導は初めてだ。

お父さんが有名な演歌歌手さんで資産家出身のキタちゃん、良家出身のサトちゃんの二人はそれぞれ子供時代からしつかりとした指導を受けていた為にフォーム矯正はそこまででは無いらしい。

「早くデビューしたいね」

「ですネ」

とはいえメイクデビュー戦が始まるのはダービーが終わってからだ。

「わ、私はそんなに早くは・・・」

「ルーちゃんはまずその人見知りを何とかしないとライブが厳しいね」

「恥ずかしいからとライブ拒否、なんてのは流石に問題があるだろう。」

「ライブと言えば、キタちゃん、サトちゃん。二人ともちゃんとライブの指導受けてる？以前チームスピカでスペシャルウィーク先輩がデビューの時のライブがボロボロだったって聞いたけど」

「流石に大丈夫だよ。その件でルドルフ会長や理事長からキツイお説教を貰ったんだって」

「ちゃんとマックイーンさんとテイオーさんから指導受けてますから大丈夫ですよ」

色々と抜けている事の多い沖野トレーナーはルドルフ会長や理事長、たづなさんから注意される事も多いのだとか。

指導力は確かなんだろうけど人としてはダメ人間っぽいのが沖野トレーナーなんだろう。

「ターちゃんはライブの方はどうなの？」

「ウマドルを自称してるファル子先輩がその辺りはばっちり教えてくれるから大丈夫だよ」

個性派ウマドル候補としてスカウトを受けている事は黙っておく。新入生にはライブレッスンの授業もあるがあくまで基礎を教えるだけで個々のレッスンはトレーナーに一任されている。

トレーナーが直にライブのレッスンをする場合もあるがチームハダルの場合はライブレッスンは主にファル子先輩が行っている。

勿論ライブレッスン専属トレーナーも学園には居るのでファル子先輩が忙しい時はそちらの指導を受けている。

「とにかく皆順調みたいだしデビューに向けて頑張ろうね」

「おー」

他の人の邪魔にならない程度に私たちは声を上げた。

目まぐるしく毎日は過ぎてゆく。

授業、レースのトレーニング、ライブのレッスン、そして日々の生活。

「ルーちゃん来てる！来てるよ！」

「ヒイイ！出口！出口はどこですかあ!？」

「さつき左にあったんじゃ!？」

「あそこは閉まってましたよ！」

休日、私の部屋で4人で一緒にゲームで遊んでいる。

鬼ごっこ式のホラーゲームで協力プレイ中の私たちは必死に出口を探している。

「ルーちゃんまつすぐ！あの光ってる場所！」

「あとちよつとです！」

「あわわわわわ！」

「大丈夫！鬼は私が引き付けてるから！」

ルーちゃんは命からがら、私は鬼を何とか振り切って脱出に成功した。

「ふう・・・危なかったあ」

「何とか脱出成功しましたね」

無事にゲームをクリア出来て私たちは持ち寄ってきたジュースやお菓手に手を付ける。

そんな時だった。

私のスマートフォンが鳴った。

「あ、お母さんからだ。ちよつとごめんね」

私は三人に断ると部屋を出て電話に出た。

「もしもし?」

『もしもし、ターボちゃん元気だった?』

「うん、元気でやってるよ。急に電話してきてどうしたの？」

もちろん私の方から電話する事は何度もあったがお母さんの方から電話をかけてくるのは珍しい。

『来週のお休みなんだけれどもターボちゃん時間ある？』

「来週ならトレーニングもお休みだしまだ予定いれてないけどどうかしたの？」

まだデビューも決まっていなかったのでそこまで突き詰めた練習はしていない。

『実はね、来週の日曜日にお父さんの仕事の都合でそっちに行く用事があるの。それでもし良ければ一緒にご飯食べたりちよつと遊んだりできないかなって』

寮の門限は厳しいがそれは若いウマ娘達に何か悪い事が起きない様に監督責任として厳しくなっている。

当然両親から申請があれば外泊も許される。

ただし両親のどちらかが同伴する必要があるが。

「えっと私の都合は問題無いけれど事前に両親からの同意が書かれた外出届が無いと門限があるよ。外出届出してもあんまり遅くまでは駄目だけど」

『門限は何時までなの？』

「門限は夏の時期は午後6時半まで、冬は午後5時半までだよ。外出届を出した場合は午後9時までに寮まで送ってくれば大丈夫だよ」

『じゃあ外出届が必要ね。折角だし晩御飯も一緒に食べましょ。ね？』

「うん。じゃあ外出届の書類を送るからそれにサインして送り返してね」

私は電話を切ると部屋に戻った。

「ただいま〜」

「おかえりなさい。お話どうでしたか？」

「うん、来週お父さんの仕事ついでにこっちに来るから一緒に出掛けようって電話だった」

「ターちゃんのご両親かく。どんな感じ？」

私の両親の話題になった。

「えっとお父さんは輸入車ディーラーのオーナーだよ。お母さんは普通の主婦だね。ちよつと変わってる所って言うか二人の趣味はちよつと珍しいかもね」

「ど、どんな趣味なんですか?」

「二人とも歌舞伎鑑賞が趣味なんだって。私も何度か連れて行って貰った事あるよ」

日本の伝統芸能に興味があったお父さんと話題になったイケメン歌舞伎俳優を見ようと劇場に通う内に歌舞伎ファンになったお母さんという入りの違う二人だったが今でも歌舞伎鑑賞は趣味だ。

「中々渋い趣味だね」

「キタちゃんもかなり渋い趣味してるじゃないですか」

カラオケの十八番がお父さんの演歌なキタちゃんは多分人の事言えないと思います。

その後、色んな話をしたりまたゲームをやったりして休日は過ぎていった。

そして私が中央トレセン学園に入学してから早くも3ヶ月が経過した。

「・・・という訳でメイクデビューの予定が決まったよ」

「私も決まりました」

ある日のお昼休憩中、キタちゃんとサトちゃんが嬉しそうに報告してくれた。

「おめでどう二人とも」

中央トレセン学園のデビューシーズンは凡そ6〜9月に纏まっている。

時々トレーナーさんが見つからなかったりなどで遅くなる娘もいるけれど基本的にトレーナーさんがある子はほぼ全員夏ごろにデビューする。

「わ、私も近いうちにレースを決めるってトレーナーさんが言っていました」

どうやらルーちゃんもデビューが近いようだ。

「そうなる私もそろそろかなあ？山田トレーナーからまだ聞いてないけど」

流石にあまり遅くなる事はないだろうと思っているが・・・。

「喜ベインパクトターボ、来週のレースでデビューが決まったぞ」

「ええ!?急じゃないですか!?!」

突然の報告に私は驚いた。

「いやもうデビューさせても良いと思っていただけだがちよつと個人的な事情が重なってレースに登録申請ができてなくてな。申請しようとしてレースを調べていたら来週のレースにまだ空きがあつて、ダメ元で電話してみたらOKが出てな。お前にはちよつと悪いと思つたが滑り込ませてもらった」

「それにしても突然なの。ターちゃんがかわいそうなの」

トレーニングの為のストレッチを手伝つてくれているアイネス先輩がトレーナーさんを叱る。

「それについては正直に謝る。だがなインパクトターボ。今デビューしておけば9月の札幌ジュニアステークスに出られるぞ」

札幌ジュニアステークスとはデビューしたばかりのウマ娘が走れるGⅢの事だ。

「でもデビューから直接は無理じゃなかった?」

「パーマーの言う通りっしょ。確かデビュー戦以外でも2回は勝つてないとダメじゃん」

デビューは6月からとはいえ9月後半までに2回勝利は中々ハードスケジュールである。

「問題ない。インパクトターボの頑丈っぷりなら毎週でも走れるだろう」

「うゝん確かにそうかもねゝ」

いや、そこは止めてくださいスカイ先輩。

「ターちゃん!大丈夫です」

お、バクシンオー先輩何か妙案が?

「すべてバクシンすれば大丈夫です!」

あるわけなかった。

「じゃあトレーニングも大事だけどライブの練習もしつかりやろうね」

「フアル子先輩も止めてはくれないんですね。」

「結局私はデビューからハードスケジュールになる事が確定したようである。」

翌日……。

「……と言うわけで、なぜか来週デビューする事になりました」

「ええ!？」

「それはまた急ですね」

「え、えつとがんばってね」

「三者三様のリアクションを返してくれた。」

「しかも9月の札幌ジュニアレースにも出走するらしいから結構ハードスケジュールになりそうなんだよね」

「えつとGⅢって確か最低でも2勝してないと出れないんだっけ?」

「キタちゃんが授業内容を思い出しながら聞いてくる。」

「正確にはデビュー戦を除いて2勝が最低条件ですね。レース毎に細かい違いはありますけど」

「サトちゃんがそれを訂正する。」

「そ、それは大変ですね。……札幌ジュニアレース……出れるかな?」

「ルーちゃん?」

「な、なんでもないよ!」

「何やら若干挙動不審なルーちゃんだったが残念ながら追及する前に始業の鐘が鳴ってしまったので結局聞けずじまいだった。」

「そして翌週、レース当日……。」

「中山《font:ul40》競馬場《font》でデビューか。何だか運命を感じちゃうな……」

「パドック披露が終わり、ターフに足を進める。」

「おいターちゃん!」

「ここなの!」

「アイネス先輩!それに皆も!」

チームハダルのメンバーと一緒にキタちゃん達も居た。

「デビュー戦だが落ち着いてお前のいつもの走りをすれば勝てるから安心しろ」

「はいーがんばりますー!」

山田トレーナーからアドバイス兼激励を受けて私はゲートに向かった。

「大丈夫。いつも通り」

大きく深呼吸をして私は係員の案内でゲートに入っていった。

SIDE：実況

「さあ本日デビューいたします6名のウマ娘たち、その胸に抱くのはどんな夢なのでしょう。メイクデビュー戦1800メートル、芝のレースです。1番オータムマウンテン。2番ジャラジャラ。3番バイトアルヒクマ。4番インパクトターボ。5番サイドカー。6番ハイグレードレイ。以上6名のレースです。各ウマ娘たちのゲート入りが間もなく完了します。体制完了。・・・スタートしました。1人好スタート。4番のインパクトターボです。勢いをつけて早くもリードを広げていきます。2番手にはハイグレードレイが付きましたが早くも4バ身の差がついています。インパクトターボかなりペースが速いみたいですが焦っているのでしょうか?いや、笑顔です!なんとインパクトターボ、デビュー戦でまさかの大逃げを打ちました!何とも大胆な作戦!果たして最後まで走りきる事は出来るのでしょうか!?ハイグレードレイ慌てて追いかけますが加速力が違います!インパクトターボどんどん後続を引き離していきます!会場は大盛り上がり!その差はなんと20バ身はありますでしょうか!早くも第4コーナーを回って最終直線!中山の短い直線では後続の娘達は間に合いそうありません!完全なセーフティリード!インパクトターボ、今圧倒的な速さでゴールイン!まさに衝撃的なデビュー!今後が楽しみみなウマ娘の登場です!」

SIDE：インパクトターボ

「今!」

何度も練習したスタート。

元々上手だったそれはさらに磨きがかかり、強力な武器となった。あつという間に抜け出し、さらに足の回転を速める。

最高速度に絶対の自信は無いが、加速の良さには自信がある。

「ええ!?むり〜!」

後ろで狼狽える声が聞こえるがそんなものは無視だ。

私は私の走りをするだけなんだから!

「逃げる阿呆に追う阿呆!同じ阿呆なら逃げなきゃ損々!なくんてね!」

なんとなく浮かんだフレーズを口にして、私は全力で走り続ける。

あつという間に大きな差が生まれ、後ろの気配は全く感じられなくなった。

そのままの勢いでコーナーを曲り、最終直線へと入る。

「二!いつけ〜ターちゃん!!」

「いい調子なの〜!」

「あとちよつとだよ!」

「ウエ〜イ!バクニゲでゴー!」

「素晴らしいバクシンです!」

「やれやれ、張り切ってるねえ」

「ライブもその調子でがんばってね〜☆」

「いいぞターボ!」

皆の声援を受けながら、私はそのままゴール板を駆け抜けた。そして皆の方を振り向くと笑顔で手を振った。

第2シーズン第7話 激闘！ジャパンカップ！（馬）

惜しまれながらもタニノギムレットが引退し、サムシングブルーちゃんが制覇した菊花賞が終わって直ぐ……。

「次のレースはジャパンカップを目指すぞ」

国際招待レースのジャパンカップにはあの有名な凱旋門賞にも参加した馬が参戦するなど非常にレベルの高いレースだ。

国内は勿論海外からも注目度の高いレースであり国産馬が勝つか、海外馬が勝つかで毎年論争が起きる。

菊花賞からあまり時間は無いが距離は得意の2200メートルであるので調整には苦労しないだろう。

「海外にもお前のように大逃げする馬は少ない。やつらの度肝を抜いてやれ」

海外の馬がどんなレースをしてるのか分からないけど頑張ります。

「さあ、今日は世間から注目を集めていますインパクトターボ号の厩舎にやってきました」

厩舎には似つかわしくない女性がカメラマンを引き連れてやってきた。

「どうやら今日はテレビの取材のようだ。」

「気になるのか他の馬達もなんだなんだ、と顔を出している。」

「インパクトターボ号の調教師をされています山田調教師にお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

「どうやらテレビ取材は初めてなのか若干の緊張が見られる山田調教師だった。」

「山田さん、インパクトターボ号が世間から非常に注目されていますがどうですか？」

「そうですね。一人のホースマンとして誇らしい事ですね。近年は競馬人気も落ちてきていますから少しでも私が助けになっていると思うところはどうでしょう事はないですね」

「インパクトターボ号と言えば大逃げが有名ですがなぜ大逃げを選ん

「だのですか？」

「大逃げを選んだと言いますか選ばざるをえなかったと言いますか、インパクトターボは周りに他の馬が居るとレースに集中できないんですよ。負けん気が強すぎるせいですね。常に先頭を走っていないと気が済まない。だから大逃げをするんです」

「そうなんですね！こんなに大人しそうな雰囲気をしているのに意外です」

「見た目通り人懐っこくて大人しい馬ですよ。たまに遊んで欲しくてちよつとした悪戯はしますが他の馬から見たら可愛いレベルです。ただレースになるととことん先頭に拘りますね。最後の最後まで先頭を譲りたくないのはレースを見ていれば分かりますよね？」

「はい、ダービーでも本当にギリギリまで先頭を譲りませんでしたもんね」

「ダービーは本当にあと少し運が向いていれば勝っていました。それほどどのレースだったと自負しています」

「菊花賞ではサムシングブルーに引き離されてしまいましたね」

「流石は漆黒のステイヤー、ライスシャワーの血を強く引く馬ですね。完全に適正距離の差で負けてしまいました」

「次のレースの予定を伺ってもよろしいですか？」

「次はジャパンカップを予定しています。そして有馬記念も当然目指していきます」

「ありがとうございます。インパクトターボ号と山田調教師でした」

取材はスムーズに終わった様で、山田調教師は安心して大きく息をついた。

「山田さん、テレビ見ましたよ」

「室さん、見られてましたか」

「恥ずかしそうに山田調教師が頭を押さえた。」

「いいいえ、いい映りでしたよ。ターボ、お前も男前に映ってたぞ」

「室オーナーがそう言っただけ顔を撫でてくれる。」

「お前にプレゼントだ。新しいメンコだぞ」

そういつて室オーナーが取り出したメンコは今までのメンコと同じ配色に加えて目の周りに赤と黒のライン、隈取模様を模した模様が入れられたメンコだった。

「気持ちも新たに、これからも逃亡屋としてがんばってこい」

室オーナーの気持ちに応えるべく俺は気合を入れなおした。

そして、ジャパンカップ当日を迎えた。

「今年もやってきました第22回ジャパンカップ。世界各国から強豪馬がこの中山競馬場に集います。天候は曇ですが馬場に影響はありません。日本の馬が勝つのか、それとも海外の馬が勝つのか。観客たちの熱い視線が送られております。それではパドックを見てみましょう」

パドックをクルクル回りながら他の馬達を見ていく。

外国の馬と言っても見た目だけじゃ良く分からないな。

そりやまあ基本同じサラブレッドだし無理もないか。

そんな事を思いながらパドックを歩く。

「4枠7番、2番人気シンボリクリスエス、牡の3歳です。ダービーではあまり良い成績を残せませんでした。が天皇賞秋に出走。そこでは古馬を差し置いての優勝と今一番調子の良い馬と言えるでしょう」
むむ、どうやら上がり調子の馬のようだ。

確かダービーは4着だったな。

「やあどうもこんにちは。それとも久しぶりの方かな？ダービーの時は全然敵わなかったけど今日は負けないよ」

「こつちだつて負ける訳にはいかないさ」

シンボリクリスエスは少しのんびりしたタイプの馬のようだ。

とはいえ天皇賞秋を勝っているのだから実力は確かだろう。

「ところで僕の後ろの馬がなんか変なんだけどなんでかな？」

「後ろつていうと・・・」

「4枠8番、サラファン、アメリカからの参戦です」

「あくんらワタクシに何か？」

奇妙な口調で話す馬がそこにいた。

「いや・・・その・・・なんでそんな喋り方？」

「別にいいじゃない、どんな喋り方したって」

「ね？変でしょ？（ヒソヒソ）」

「お、おう（ヒソヒソ）」

ヒソヒソと話をしていると別の馬が近寄ってきた。

「そいつはcazzoを取られてしまっておかしくなっちゃったのデス」

「君は？」

「初めまして、イタリアーのファルブラヴデス」

イタリア馬のファルブラヴが少し格好つけて話しかけてきた。

「カツオがどうかしたの？」

「カツーオじゃなくてcazzoデス。イングリッシュで言うとペニースデス」

「あ、セン馬なのねこいつ」

「なによ！オカマが悪いってーの!？」

オカマは別に悪くはない。

だが元は野太い声だったであろう声を無理やり裏声にして奇妙な口調で喋るから変なのである。

「貴方達に分かるの!？他の牡には笑われ！牝にはがっかりされる気持ち!？ワタシの！ワタシのワタシを返してえ！」

他にも2頭程深く頷いているのでどうやら彼らもセン馬らしい。

「悲しいけど俺たち経済動物なのよね・・・」

「なんか・・・ごめん・・・」

微妙に牡馬達のやる気が下がった。

なお牝馬達は呆れた様子でこちらを見ていた。

「5枠9番、1番人気、我らが逃亡屋インパクトターボです。皐月賞1着、ダービー2着、菊花賞2着と全て大逃げ。世界にその大逃げは通用するのでしょうか。メンコも新たに今日も気合十分です」

うん、気合を入れなおそう。

SIDE：実況

「さあ間もなく始まります第22回ジャパンカップ。日本競馬は世界に通ずるのか。はたまた世界が日本を阻むのか。ここ中山競馬場に

7頭の招待馬と9頭の日本馬による全16頭でのレースが行われようとしております。改めて各馬を見ていきましょう。1枠1番ファルブラヴ。凱旋門賞に出走しております。1枠2番インディジェナス。香港のクイーンエリザベスカップで3着です。2枠3番ゴースン。去年に引き続きジャパンカップに参戦です。2枠4番イリジステイブルジュエル。アイルランドから参戦です。3枠5番アメリカンボス。毎日王冠では3着に入っております。3枠6番アグネスフライト。天皇賞秋ではシンボリクリスエスに敗北、果たして逆襲はなるのでしょうか。4枠7番2番人気ですシンボリクリスエス。天皇賞秋1着の実力馬です。4枠8番サラファン。先ほどパドックで落ち着かない様子を見せていました。5枠9番1番人気インパクトターボ。今日も逃亡屋として大逃げを見せてくれるでしょう。5枠10番ジャングルポケット。去年のダービー馬にしてジャパンカップの覇者。天皇賞春以来のレースです。6枠11番テイエムオーシャン。去年の桜花賞と秋華賞を制覇しました。6枠12番ブライトスカイ。フランスG1ディアヌ賞の勝者です。7枠13番ナリタトップロード。天皇賞秋では2着と悔しい思い。7枠14番ストーミングホーム。マクトウム殿下が今年も日本にやってきました。8枠15番マグナーテン。毎日王冠1着です。8枠16番エアシヤカール。騎手の乗り変わりがどう響くか。以上16頭です。さあゲートの準備が完了してスターターが旗を振ります。ファンファールです。多くの観客に見守られながら各馬が今順番にゲートインしてまいります。さあ、最後の1頭が今入りました。・・・スタートしました。先行争いはここまで負けなしインパクトターボがやはり飛び出しました。他の馬はまだそれほどペースを上げていません並んでいます。今日は一人旅になりましたインパクトターボが大きくリードを開いていきます。後方集団先頭はマグナーテンが取りましました。ナリタトップロードにアメリカンボスなどこの辺りごった返しています後方集団です。シンボリクリスエスは中団前よりでしょうか。インパクトターボは我関せずと後続から早くも10馬身以上差を広げました。後続集団はまだポジション争いが熾烈です。各馬

中々落ち着きません。2番手は変わらずマグナーテンですがその後ろでは各馬が様々な動きを見せております。早くもインパクトターボが残り1000メートルを切りました。後方マグナーテンが上がつていきます。シンボリクリスエス馬群に飲まれてちよつと苦しうか。インパクトターボ早くも第3コーナーに入ります。後続集団が差を詰め始めました。ここでサラファンが内側から前に出ます！第4コーナーを回り切ってインパクトターボ直線に入ります！2番手にサラファン！懸命に差を詰めます！シンボリクリスエスもようやく外から上がってきました！ファルブラヴがここで一気に前に出る！インパクトターボ懸命に逃げる！ファルブラヴが追い付くのか！インパクトターボが逃げ切るのか！残り1000メートル！ファルブラヴ懸命に追い上げるが僅かに届きません！インパクトターボ見事に逃げ切りました！世界よ！これが日本の逃亡屋だ！鞍上若井騎手が右手を高く上げました！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー！」

ゲートが開くと同時に足の回転を速める。

海外の馬達は馬場の違うレース場を確かめるようにゆっくりと、他の馬達は海外の馬を警戒してやはり抑え気味にスタートした為に完全に俺1頭だけ抜け出ることに成功した。

そもそも作戦も何も逃げ切れたら勝ち、逃げ切れなかったら負けという単純明快な勝負しかしていないのだ。

他の馬の事など考えず、自分の走りをするだけだ。

「行け！相棒！海外がなんだってんだ！」

若井騎手と共に、ただひたすらにゴールを目指して走り続けた。

「何よあの子！レースの定石を知らないのかしら！」

黙れヤンキーオカマ！定石なんて知った事か！

「面白いデス。貴方の走りが勝つか、私の走りが勝つか勝負デス」

イタリアの伊達男は話が分かるらしい。

「ちよつとどけよー。邪魔するなよー」

シンボリクリスエスはもうやらマークされてしまつて自分の走り

が出来ていない様だ。

悪いが先に行かせてもらおう！

「くそー！このまま逃がすのも拙いが無茶したら俺までつぶれちゃう！」

2番手の馬はどうするべきか迷っているようだ。

サムシングブルーちゃんが後ろに居ないのはちよつと寂しいが久しぶりの一人旅を満喫させてもらおうぞー！

後続を引き離し、久しぶりに大きなリードを作る。

同世代だと大逃げを警戒されていた為に大きなリードを作るのは久しぶりだ。

この走りなら行ける！

最後の直線に向けて勢いよくコーナーを曲がっていく。

「待ちなさいー！貴方の勝手なんかにはさせないわよ！」

来たかヤンキーオカマ！

「オカマオカマ言うんじゃないわよ！オカマの底力見せてやるわ！」

「どけどけー！シンボリクリスエスのお通りだよー！」

「んが！邪魔するんじゃないわよ！」

後ろでシンボリクリスエスとヤンキーオカマが競り合っているが怖いのはそいつじゃない！

「待たせマシタ！勝負デス！」

「来たな伊達男！」

ファルブラヴが後方から一気に迫ってくる。

「悪いが！粘るのは得意なんだ！」

「ナント！追い付けないデス!?!」

最後まで俺は先頭を譲る事なくゴール板を駆け抜けた。その差は半馬身だったが完璧に俺は逃げ切って見せた。

「おう、見事にやられマシタ。悔しいデス。でも見事な走りデシタ」

「はは、逃げ足だけは自信があるんだ。勝たせてもらったよ」

ファルブラヴと健闘を称えあう。

「冗談じゃないわ！ワタシがあんなのに負けるなんて！」

「ふいー、何とか3着だ」

納得がいつていないヤンキーオカマとやっぱりどこかのんびりしたままのシンボリクリスエス。

何とも変わったレースだったが久々の勝利だ！

インパクトターボ 牡3歳 13戦11勝 主な勝鞍：G I 皐月賞
G I ジャパンカップ G I 日本ダービー2着 G I 菊花賞2着

第2シーズン第7話 激闘！札幌ジュニアステークス！（ウマ娘）

私のメイクデビューを終えて翌々週・・・。

「せーの ーがんばれールーちゃん！ー」

ルーちゃんが恥ずかしそうにターフから手を振ってくれた。

「本日のメイクデビュー戦は2000メートル芝でのレースです。デビュー戦としては最長距離の2000メートルを走ります今日の6人を紹介いたしましょう。1番ドカドカ。2番ツーシーター。3番サムシングブルー。4番オータムフェスタ。5番ピンクシュシュ。6番トウオウフウハイ。以上の6名です。それぞれが胸に抱いた夢と共に、本日のメイクデビュー戦を走ります。各ウマ娘のゲートインが完了しました。・・・スタートしました。揃ったスタートになりました。先頭を走りますのは6番トウオウフウハイ。その外、後ろにつきました3番サムシングブルー。内にツーシーター。続いて5番ピンクシュシュ、4番オータムフェスタ。最後方は1番ドカドカといった順番。先頭から最後まであまり差のない展開となりました。各ウマ娘牽制が続いています。まもなく1000メートルを通過します。タイムは1分01秒とゆったりとしたペース。さあここから誰がどう動くのか注目です。第3コーナーにトウオウフウハイが入ります！その外にサムシングブルーが並んでいく！ツーシーター懸命に内側に切り込む！ピンクシュシュ、オータムフェスタは最後の直線にかけているのか!?ドカドカが先に上がっていきます！第4コーナーを回って最初に抜け出したのはサムシングブルー！後続をドン引き離していく！トウオウフウハイ疲れたか!?ツーシーターはトウオウフウハイの前に前を塞がれて出遅れた！ドカドカ懸命に上がっていくがこれは追い付けないか！サムシングブルーです！サムシングブルーが完璧なレース展開で勝利しました！」

「やったー！ー」

私たちは手を取り合って喜んだ。

翌日、学園昼休み、食堂にて……。

「これで全員デビューが終わりましたね。皆無事に勝ってよかったです」

「そうだね。次のレースはいつになるかなあ？」

キタちゃん、サトちゃんも順調にデビューが終わり、全員が勝利した事を喜んでいる。

「私は来週からレースが続くんだよね」

「え、えっと、応援行けないけど頑張つてね」

デビュー戦の時は許可が下りたけど授業もあるのであまり頻繁に応援でのお休みはもらえない。

チームなら割と許可も出易いのだがお友達だとデビュー戦の様な特別な時やGIなど大きなレース以外では中々難しい。

「無理だけはしないでくださいね」

「流石に山田トレーナーも無理はさせないと思うよ」

尤もあの様子だとあまり安心できそうにはないが……。

「入学1週間でデビューさせられたスペシャルウィーク先輩よりは大丈夫じゃない？」

「ほ、方向性が違うと思います……」

いきなりのデビューと連続出場どちらも辛いのではないだろうか。

私は若干気持ちの重いまま食事を終えた。

「スタートしました。一人飛び出しましたのは5番インパクトターボです。他はややバラついたスタートになりました。インパクトターボ早くも大きくリードを取りました。速すぎるようにも見えますが焦った様子は窺えません。大逃げを打ちましたインパクトターボ。果たして最後まで走り切れるのでしょうか。他の娘達は追いかけるべきか抑えるべきか迷っている模様。さあ早くもインパクトターボただ一人だけが中間地点を通過しました。非常に縦長になりましたこのレース。インパクトターボの一人旅はまだ続いています。失速する様子は見られません。全力で走り続けていますインパクトターボは早くも第4コーナーに入りそう。後方が今やつと上がってき

ましたがこれは間に合うか分かりません。最終直線に入りましたインパクトターボ。これはセーフティリードだ。完璧な逃げ切り体制に入りましたインパクトターボ。後方を一切振り返ることなくゴール板を超えましたインパクトターボゴールイン。1600メートルを完璧に逃げ切りましたインパクトターボ」

よし、逃げ切り成功！

「調子はどうだ？」

控室に帰ってきた私に山田トレーナーがそう尋ねた。

「特に疲れも無いですし足が痛いとか捻ったとかそういう事も無いですよ」

「ふむ、なら次も行けるな」

あ、有言実行するんですね。

結局毎週レースとまではならなかったがさらに3回のレースを走った。

幸いな事に極端に疲れたり足に怪我をする事はなかった。

もちろん山田トレーナーも私の足に異常が無いか毎度チェックをしてくれていたし、チームの先輩たちも色々と気を使ってくれた。

そして山田トレーナー曰く私の足の頑丈さはウマ娘の中でも群を抜いて強いらしく、ウマ娘学会に遺伝子提供したら論争になるんじゃないか、との事だった。

なんだろう、嬉しいような嬉しくないような・・・。

そしてついに札幌ジュニアステークスがやってきた。

残暑の厳しい本土と違い、幾分涼しい《font:ul40》札幌競馬場《font》。

私は広大な北海道の空気を胸いっぱい吸い込んで重賞レースへの気持ちが高める。

「それにしても・・・まさかルーちゃんも出るなんて思わなかったよ」「え、えへへ」

全く、キタちゃんもサトちゃんもグルだな。

今朝がたスマフォのチャットには意味有り気に笑う顔のスタンプと両手を合わせて謝るウサギのスタンプが送られてきてレース前に

一体何事かと思っただじやないか。

「悪いけど、友達だからこそ全力で逃げるよ」

「うん、私も全力でついてくね」

私たちは静かに火花を散らした。

S I D E : 実況

「さあ、間もなく始まりますGⅢ札幌ジュニアステークス。デビューしたばかりの新人ウマ娘達。その中でも早くも頭角を現している娘達が初めての重賞に挑みます。ウマ娘達の紹介に参りましょう。1番リンリン。2番ハンクオン。3番インパクトターボ、1番人気です。4番サムシングブルー。5番レッドリボン。6番スイーツシヨウ。7番サマーシー。8番レインコート。以上の8人が走りまです。さあ続々とゲートインが始まりますがおっとこれはどうした事だ？インパクトターボゲート前で立ち止まっています。落ち着きを取り戻すためでしょうか一度ゲートから離れて深呼吸をしたあと、尻尾を引っ張りながらようやくゲートインしました。体制完了。．．．スタートしました。先頭に立ったのはやはりインパクトターボです。先ほどの様子から心配されましたが今日も好スタートで一人旅．．．いえ！今日は後ろに一人います！4番のサムシングブルーが追走しています！ここまで大逃げで全戦全勝してきたインパクトターボにサムシングブルーが果敢に挑みます！勝つのは全戦全勝の逃亡者インパクトターボか！はたまた全戦全勝の追跡者サムシングブルーか！尋常ではないペースです！もはや二人だけが完全に別のレースをしています！後方集団はどうしているのか分からず困惑しています！3番手を走りますハンクオンですが完全にペースを乱されています！そんな後方を見向きもせず先頭をひた走りますインパクトターボ！その差3バ身で追走するサムシングブルー！2人が第3コーナーを抜けて第4コーナーへと入ります！3番手ハンクオンがペースを上げようと必死ですが自分の走りができていないのか思うように上がりません！他の娘達も必死に走っていますがこれは無理でしょう！さあ2人だけが早くも最終直線です！意地と意地とのぶつかり合い！インパクトターボ逃げる！サムシングブルーが並びか

ける！逃亡者か！追跡者か！懸命に粘るインパクトターボ！並び立てるサムシングブルー！2人並んでいる！並んだままゴールイン！これはどちらが勝ったのか！実況席からでは分かりません！逃亡者が逃げ切ったのか！それとも追跡者が差し切ったのか！まったく分かりません！今ようやくほかの娘達がゴールしました！」

SIDE：インパクトターボ

ゲートイン直前、私は目の前に強い何かを感じて立ち止まってしまった。

「大丈夫ですか？」

係員が声を掛けてくれる。

「……少し緊張してるみたいです。一度離れても？」

「はい、あまり遅くなるとペナルティがありますから注意してくださいね」

私は一度ゲートから離れると深呼吸を何度かする。

「大丈夫。落ち着いて。いつも通り走れば勝てる」

自分に言い聞かせるようにそうつぶやくと、それでも抗い難い何かを感じるので尻尾を強く握りしめながら私はゲートに入った。

「……ッシー！」

ゲートが開くと同時に私は飛び出した。

一気に足の回転を上げて前が出る。

よし！いつもどおり！

「ついてく……ついてく……」

後ろにはルーちゃんが居る。

前より力強くなった走りで、確実に私の後を追ってくる。

「今日は……いつもより飛ばすからね！」

「のがしません……」

ただひたすらに全力で前に進み続ける！

そう、やる事は何も変わらないんだ！

私は全力で前に進み続ける。

「ついてく……！ついてく……！」

ルーちゃんの声が少しずつ、確実に大きくなってくる。

そして最終直線。

「捕らえました・・・！」

「まだまだあー！」

一瞬並びかけられた私だったが最後の力でもう一度前が出る。

「やりますね・・・！」

ルーちゃんが再び並びかけてくるがそこがゴールだった。

「やったあー！」

「うう・・・また負けました・・・」

もしゴールが後少し遠かったら私は負けていただろう。

それほどの接戦だった。

「ルーちゃん、また戦おうね」

「うん、次は逃さないからね」

私たちは硬い握手を交わした。

育成目標：GⅢ札幌ジュニアステークスに5着以内に入る C L E

A R

固有二つ名獲得条件：9個以上のレースを全て逃げで勝利し、皐月賞を無敗のまま勝利する 条件継続中

第2シーズン第8話 俺の有馬記念、皆の有馬記念 (馬)

ジャパンカップから数日後・・・。

「おめでとうターボ、見事に有馬記念に選ばれたぞ」

有馬記念はファン投票やJRAからの推薦で出走馬が決まる。

今回、俺はファン投票でもそれなりの順位だった為に問題なく出走できるようだ。

「後は枠順がどうなるか、まあ大逃げのお前なら外枠でもそれほど不利ではないだろうが・・・」

有馬記念が行われる中山競馬場は距離の関係でスタートしてすぐにコーナーに入る。

その為に大回りを強いられる外枠が不利と言われている。

無理に内側に入ろうとすれば斜行と判断されて失格になってしま
う。

「大丈夫心配するな。お前ならやれる」

山田調教師がそう言っつて首筋を撫でてくれた。

SIDE：室満男

「ここが有馬記念の枠番抽選会場ですか」

「そうです。ここに来るのは我々調教師にとつても名誉な事です。室さん、初めての馬でここに来れるなんて貴方の選馬眼は素晴らしい」「いやいや、私はただ単に好きだった馬の子供という理由で買っただけで見ると目なんてこれっぽっちも無いですよ。ターボが頑張ってくれた。全てはそれに尽きます」

決して高値で購入した馬では無かった。

血統が優れた馬でもなかった。

ただあの日に魅せられた浪漫を追い求めてそれを受け継ぐ血を買った。

それが偶然にも素晴らしい結果をもたらした。

だから自分がすごい等とは思わない。

自分はあくまでスポンサーであって頑張っているのは山田調教師や若井騎手、それにインパクトターボなのだから。

「さあ行きましよう室さん。まずは大勝負の第一歩からです」

私は山田さんの言葉に頷くと会場へと入っていった。

SIDE：山田調教師

俺は決して一流の調教師などとはお世辞にも言えない。

キャリアは決して短くはないが時々重賞レースを勝てる程度の馬を育てるのが精々で、有馬記念など縁のない話だった。

しかし今日、俺は有馬記念の抽選会まで来ている。

全ては室さんとの出会いが始まりだった。

懇意にしていた牧場から声を掛けられ、今年のイクノデイクタスの息子の調教を頼むと依頼されたのが室さんとの出会いだった。

そして出会ったインパクトターボ。

大人しい顔立ちに牡馬にしては小柄な体つき。

人懐っこく言うことは良く聞く馬だが果たして勝てるだろうか？ 最初は思った。

しかしその評価が変わったのは調教で初めて併せ馬をした時だった。

負けん気が恐ろしく強いのだ。

併せ馬を後ろから抜かせようとすると、苛立ちを隠そうともせず指示を無視して追い抜く様子からこの馬には差しや追い込みは合わないと感じた。

じゃあ最初から先頭を走らせてみたら何とも気持ちよさそうに走るではないか。

ペースなどどこ吹く風と飛ばしに飛ばしまくる。

しかも中々速度が落ちない。

逃げ馬、しかも近年ほとんど見なくなった大逃げ馬に思わず声に出して笑ってしまった。

大人しそうな外見とは程遠い、尋常ならざる癖馬だった。

だがその癖馬は順調過ぎるほどに勝利を重ね、ついに頂点の一角である皐月賞を勝利した。

ダービーを制する事は出来なかったが、それでも本当にあと少し風向きが良ければ勝利出来ていたと今でも思う。

そして今日を迎えた。

これから先、何度来られるだろうか。

俺は色んな人に感謝の念を送りながら、奇跡の出会いをくれた室さんと一緒に会場へ入っていった。

SIDE：若井騎手

「俺が・・・有馬記念に・・・」

騎手としてのキャリアは決して良くない。

どうにか頑張って30勝を迎えたばかりの下から数えた方が早い騎手だった。

それが今や皐月賞を勝利し、ジャパンカップを制し、有馬記念に出られる騎手になった。

全てはインパクトターボとの出会いからだ。

逃げ馬に乗った事は何度かあった。

しかしここまでの大逃げ馬に乗ったのは初めてだ。

山田調教師から最初に指示された「馬の好きに走らせてくれ」という言葉に、顔や態度には出さなかったが騎手として信頼されていないのだと感じた。

しかし違った。

インパクトターボは押さえつけてはいけない馬だったのだ。

ゲートが開くと同時に一番に飛び出したインパクトターボ。

最初はそこまで逃げるつもりはなかった。

しかし後続を無視して走り続けるインパクトターボに半ば仕方なしに押し続けた。

何度か後ろを気にするような仕種を見せたので気にするなと声をかけた。

気が付けば後ろに大差をつけてゴール板を走り抜けていた。

しかも全く疲れた様子も無く、足を気にする様子一つ見せず。

ターボ自身「あれ？もう終わり？」と言ったような表情だった。

そこから俺は山田さんの言ったことがどういう事か分かった。

インパクトターボは自由に走らせておいた方が強い。

だから騎手の仕事はそれを手助けしてやる事だ。

二度、三度とレースを重ねていく内に細かな癖やコース誘導の仕方、限界までの走りの違いなどをどんどん学習していく。

ダービーで勝たせられなかったのはきつとまだまだ未熟だったからだ。

菊花賞は距離適性の差もあつたがそれでも何とか2着にはなれた。ジャパンカップは完璧に逃げ切った。

なら次は……。

「大丈夫……！俺と相棒なら行ける……！」

緊張と興奮で殆ど寝られないまま朝を迎え、そのテンションのまま一足先に会場入りした若井騎手はロビーで山田調教師と室さんを待っていた。

こうして様々な思いが交錯する有馬記念を迎えた。

「さあ年の瀬の中山競馬場。今年もやってきました有馬記念。1年の締めとなりますこのレース。今年も果たしてどの馬が勝つのでしょうか。貴方の夢、私の夢を乗せて走ります本日の14頭。実力と人気を兼ね備えた各馬を見ていきましょう。解説の吉井さん、よろしくお願ひします」

「はい、よろしくお願ひします」

「見事、1枠1番を引き当てましたシンボリクリスエス、3番人気です。今年の天皇賞秋に出走し、古馬を差し置いての1着。ジャパンカップでも3着と好走しております」

「クラシックでは中々活躍できませんでしたが天皇賞秋から頭角を現してきた実力馬ですね。ジャパンカップでも前を塞がれなければ勝っていたかもしれないと言われていますし今日も期待が持てますね」

俺はパドックを回りながらほかの馬の評価を聞く。

「やっぱり君も来てたんだね」

「もちろんだ」

やっぱりどこかのんびりした雰囲気のままシンボリクリスエスが

話かけてきた。

「この前は前を塞がれちゃったから追い付けなかったけど今日は負けないよ〜」

「ああ、今日も逃げきって見せるさ」

「わ、私だって負けませんから!」

このウイスパーボイスは……。

「4枠6番サムシングブルーです。今年の菊花賞を制した牝馬。1943年以来の快挙を成し遂げた素晴らしいステイヤーズ」

「この馬の恐ろしいのはどんな馬にも併せられる脚質ですね。インパクトターボの大逃げにも併せられるのに本質は差しというまさに徹底マークをする為に生まれてきた女ハンターですね」

「サムシングブルーちゃん、やつぱり来たんだね」

「長距離なら得意ですから。今日も逃がしませんよインパクトターボさん」

「あらら? 強力なライバル登場かな? 僕はシンボリクリスエス。僕だって負けないよ」

「5枠7番インパクトターボ、2番人気です。今年の皐月賞を制覇し、ジャパンカップを勝利した逃亡屋。今日もその大逃げに皆の注目が集まっております」

「この馬は本当に恐ろしい馬ですね。あんな大逃げばかりをする馬なんて普通じゃありませんよ。逃げは勝ちの定石ではないと言われて続けてきた日本競馬会に新しい風を吹き込みましたね」

俺が2番人気……だとすると1番人気は……?

「7枠12番ファインモーション、1番人気です。現在無敗の牝馬。秋華賞とエリザベス女王杯を勝利した、まさに常勝無敗の女王です」
「もしサムシングブルーが菊花賞ではなく秋華賞を目指していたらどうなっていたのか。口の悪い人間はそう言いますがたらればの話に意味はありません。今日本当の実力が分かります」

ファインモーションを見た時背筋にゾクリと寒気が走った。

ここに居るどの馬よりも素晴らしと言えるバランスの取れた体躯。

一見おっとりした目に潜む強い意志。

まさに実力を秘めた馬だ。

「はじめまして、ファインモーションと申します」

間延びした、雰囲気通りおっとりとした牝馬。

「ああ、インパクトターボだ」

「さ、サムシングブルーです」

「僕はシンボリクリスエスだよ」

「うふふ、皆さん強そうですね。私も頑張りますのでお手柔らかにお願いしますね」

これは難しいレースになりそうだ。

俺は気合を入れなおすとパドック周回を終えて若井騎手の元へ向かった。

SIDE：実況

「今年の有馬記念、天候は曇りで馬場は稍重となっております。さあ、間もなくゲートの準備が完了しそうです。改めまして今日の出走馬を見ていきましょう。1枠1番シンボリクリスエス。今年の天皇賞秋を勝利した実力馬。末脚自慢です。2枠2番コイントス。鞍上岡部幸雄です。3枠3番アメリカンボス。この有馬記念で引退であります7歳馬。3枠4番エアシャカール。頻繁に変わる騎手に息は合うのか。4枠5番テイテムオーシャン。2001年最優秀牝馬です。4枠6番サムシングブルー。今年の菊花賞を制した未恐ろしい牝馬。長距離レースは大得意です。5枠7番インパクトターボ。皐月賞、ジャパンカップを大逃げで制したまさに逃亡屋。この馬が出るレースは非常にハイペースになります。5枠8番タツプダンスシチー。今日がGI初出走です。6枠9番ジャングルポケット。2001年ダービー馬の意地を見せるか。6枠10番イーグルカフェ。芝ダート問わずの脚質は有馬記念で通用するのか。7枠11番ナリタトップロード。4年連続の有馬記念。4度目の正直はあるか。7枠12番ファインモーション。無敗の女王が有馬記念に参戦です。果たして無敗の有馬女王は誕生するのでしょうか。8枠13番フサイチランハート。鞍上をバルジュー騎手に乗せ換えての出走です。8枠1

4番アクテイブバイオ。日経賞を制し、中山競馬場は慣れたものか。さあスターターが今旗を振りました。ファンファールです。中山競馬場に熱い歓声が響き渡ります。係員の誘導に従い、各馬が次々とゲートに収まってまいります。今、最後の1頭が収まりました。体制完了。・・・スタートしました今年の有馬記念！やはり1頭、7番インパクトターボが飛び出しました！しかし大逃げは許しませんと今日は何頭もの馬がついていく！2番手には6番サムシングブルーが3馬身から4馬身ほど後ろにつききました！さらにその外にファインモーションが居ますがどうやらサムシングブルーに前を譲る様子！タツプダンスシチーも上がってまいりました！その後ろにはコイントス、テイエムオーシャン、外にナリタトップロード、そしてシンボリックリスエスはこの位置、アクテイブバイオ、ちよつと落ち着かない様子のアメリカンボス後方から進んでおります！さあ、正面スタンド前をインパクトターボが先頭で駆け抜けます！その後ろサムシングブルーは変わらず3馬身から4馬身！ファインモーションがその後ろについています！やや縦長のまま向こう正面を通過していく！4頭！おっとここでファインモーションがサムシングブルーに並びかけます！行こうというのでしょうかファインモーションがサムシングブルーを抜きました！その様子を見たインパクトターボがさらに飛ばします！ファインモーション追い掛けますが差が詰まりません！相変わらず3馬身から4馬身後方を引き離しますインパクトターボです！サムシングブルーがもう一度上がってファインモーションに並びます！向こう正面に入りました！インパクトターボ快調に飛ばしております！その後方3馬身から4馬身にサムシングブルーとファインモーションが並んでいます！タツプダンスシチーもその後ろにいます。そこからまた2馬身ほど開いてナリタトップロード、コイントス、アクテイブバイオ、シンボリックリスエスと続いております！テイエムオーシャン行っている！アメリカンボスにジャングルポケットも居ます！エアシャカールはまだ後方！インパクトターボ先頭のまま第3コーナーに突入します！変わらず4馬身後方にサムシングブルー！ファインモーションちよつとさがりましたか！タツプ

ダンスシチーが前に出ました！その後ろコイントスとテイエムオーシャンなどが差を詰めてまいりました！まもなく第4コーナーを抜けて残り310メートルの直線です！インパクトターボが先頭！サムシングブルーが上がっていきます！ファインモーションちよつと苦しいか！コイントス、ナリタトップロードが抜け出してきた！シンボリクリスエスが中から抜け出してきた！物凄い末脚！残り100メートル！インパクトターボ懸命に粘る！しかしシンボリクリスエスだ！シンボリクリスエスが恐ろしい末脚で差し切ったゴールイン！ジャパンカップの雪辱を果たしましたシンボリクリスエス！」

SIDE：インパクトターボ
「ッシー」

今日も完ぺきなスタートを切って先頭を取る。

「あらあら、やりますね」

なんと隣には同じく好スタートを切ったファインモーションが居た。

しかし先頭を走る気は無いらしく直ぐに後ろに下がっていった。
やっぱり怖い馬だ。

「大丈夫だ相棒！いつもどおり行くぞ！」
もちろんだ相棒！

幸いに他に前を狙う馬が居なかった為に素早く内側に入り込むとそのまま先頭を維持する。

「ついてくー！ついてくー！」

「あらあらうふふ」

サムシングブルーちゃんの声と共にファインモーションの声も聞こえてくる。

どうやら今日は沢山引き連れての旅になりそうだ。

「初めてのGIなんだががんばるぞー！」

どうやら他にもまだ着いてきている馬がいるようだ。

一度目のスタンド前正面を走り抜ける。

「これは・・・行けそうかしら？」

なんとファインモーションがサムシングブルーちゃんを抜いて前

に出始めた。

「相棒！」

若井騎手の指示を受けてさらに飛ばす。

「あ、あらあらあ？」

思った通りにならなかつた為か、それとも騎手との息が合わなかつたのか戸惑つた様子のファインモーション。

「邪魔しないで！」

サムシングブルーちゃんがもう一度ファインモーションと並ぶ。

「まだまだいくぞー！」

もう1頭もそのままついてくる。

「行けるぞ相棒！このまま突っ走れ！」

いや、まだまだ油断はできないぞ相棒！

第4コーナーを回り、最後の直線へと入っていく。

相棒のムチが入り、全力で先頭を維持する。

「逃しません！」

「ちよつと失敗しちゃったわ」

サムシングブルーちゃんが差を詰めてくる。

ファインモーションは作戦失敗したようで苦しそうだ。

「あと少しなのにくー！」

もう1頭は上がってこれないらしい。

しかし……。

「どけどけー！シンボリクリスエスのお通りだよー！」

「やっぱり来たか！」

最後の坂に入った所で物凄い末脚でシンボリクリスエスが追い付いてきた。

「負けるかあー！」

「抜いてやるうー！」

懸命に粘つたがあと少し、頭半分抜かれてしまった。

「やっつたー！今度は僕の勝ちだねー！」

「ちつくしよう！あと少しだったのに！」

残念ながらあと一歩及ばず、俺は有馬記念に勝てなかつた。

すまない相棒、山田調教師、室オーナー・・・それに父さん。

インパクトターボ 牡3歳 14戦11勝 主な勝鞍：G I 皐月賞

G I ジャパンカップ G I 日本ダービー2着 G I 菊花賞2着

G I 有馬記念2着

第2シーズン第8話 私の皐月賞、皆の皐月賞（ウマ娘）

私が札幌ジュニアステークスを勝利して直ぐの事……。

「ターボ、お前も重賞勝利できた事だしG Iに向けて勝負服を作るぞ」「はい！」

勝負服はウマ娘にとって非常に大事なものだ。

煌びやかな衣装に身を包んだウマ娘達の走るG Iはとても人気が高いし、何よりその衣装に身を包めるウマ娘は一握りである。

そして特殊な造り方をする勝負服はその見た目からは想像できないほど動きやすく、かつウマ娘に特別な力を授けてくれる物だ。

勝負服の起源は様々な説が有るが最も有力とされるのが神事に使う神聖な服が時代と共に変化したとされるものだ。

他には元々は戦場でウマ娘が花形だった時代にあえて目立たせる事で敵側の戦意を削ぐためだった等とも言われている。

実際に日本の合戦絵巻に派手な甲冑を身に付けて戦うウマ娘の絵があるなどこの説もまだまだ信憑性が高いと言われているが確定した説ではない。

余談が過ぎたがとにかくウマ娘にとって勝負服は憧れの存在なのだ。

「明後日のトレーニング後にデザイナーが来るから希望の衣装があればちゃんと考えておけよ」

「分かりました！どんな風にしようかな〜」

私は自分にはどんな衣装が似合うか考え始めた。

「ゼロからイメージするよりカタログから方向性のイメージを掴んでみるのはいかがかな？」

「そだねー。きつちりしたタイプかハデハデなタイプかだけでも色々あるし流石パーマー」

パーマー先輩が大手メーカーが出している勝負服カタログの最新号を手渡してくれた。

「これ、貰ってもいいんですか!？」

「家に送られてきたやつの一冊だから気にしないで。メジロ家ではお抱えデザイナーのオーダーメイドが殆どであんまりカタログから選ぶ事は無いんだけど、私もデザイナーとかの参考にしたりするし」

「さっすがメジロ家のお嬢様。セレブだねえ」

スカイ先輩の言葉を聞いて私はふとデザイン料の事が気になった。

「あのー……ところで勝負服のお値段って……」

「ん？ああ、心配はいらないぞ。メジロ家みたいにお抱えのデザイナーが居たり、個人的にデザイナーに注文するなら別だが、学園指定のデザイナーの勝負服を利用するならトウインクルシリーズ中は無料だ」

その言葉に私はちよつとホツとした。

お父さんの仕事の十分に余裕はある暮らしをしているけどウマ娘関連は何かとお金がかかる。

私が小学生時代に使っていた子供ウマ娘用スポーツ蹄鉄一对で10万円したのを覚えている。

しかも靴と別売りで、だ。

学園に入ってから学園指定の蹄鉄であれば格安で手に入るし、有名になれば大手メーカーからのスポンサー契約を結ぶ事で最新の蹄鉄を手に入れる事もできる。

トレーニングシューズ等はチーム備品として購入するので私がお金を払う必要はない。

なので私が自費で購入しているのは蹄鉄とGⅡ以下用の本番用シューズくらいだ。

「ターちゃんは安心してじっくり考えるといいの」

「はい、ありがとうございます」

アイネス先輩に笑顔でそう言われて私は少し照れ笑いをしながら返事をした。

「へく、勝負服ってメーカー品でもこんなに色々あるんだねく」

キタちゃんが私の貰ったカタログをペラペラと眺めながらそう呟く。

「でもなんでメーカー品なんてあるのでしょうか？ほとんどのウマ娘はオーダー品だと思うのですが」

「さ、サトちゃん、発言がお嬢様だよ」

まあ実際サトちゃんはお嬢様なんだけど……。

「中央トレセン学園所属の私たちは殆ど全員オーダーメイドだけど地方はそうじゃないからね」

「ああ、地方トレセン学園の事をすっかり忘れていました」

地方トレセン学園でも勝負服は使われている。

しかしオーダーメイドをするウマ娘はまず居らず、ほとんどがメーカー品だ。

「実際のオグリ先輩も勝負服はメーカー品にアレンジを加えただけらしいよ。お母さんや地元の人が必死に用意してくれたからって」

「そういうえばオグリ先輩は地方からの転入生でしたね」

私たちは雑談をしながら自分たちの衣装に思いを馳せた。

「はあい、子ウマちゃん。私はデザイナーの木谷利一、ギャリーさんって呼んでね」

「は、はい……私はインパクトターボです……」

私は派手な格好でオネエ言葉の男性を前に固まってしまった。

「あく、うん。気持ちは分かるがこれでも学園指定のデザイナーでチームとの付き合いも長い。一見珍妙な奴だが悪い奴ではないしこれで男気もある。まあ色々と説明の難しい奴だが安心して欲しい」「んもう！褒めるのか貶すのかどっちかにしてほしいわー！」

山田トレーナーの言葉に業とらしく怒った態度を見せるギャリーさん。

「ああ、それと安心してちょうだい。サイズを測ったりするのは助手のイブちゃんとメアリーちゃんがやるから。こんな風だけどアタシも男だし子ウマちゃんは気にするでしょ？」

「デザイナー助手の井部優華です」

「同じく助手のメアリーIIゲーターです」

若い女性の助手さん二人が頭を下げた。

どうやら本当に良い人そうなので私は体の力を抜いた。

「ギャリーさんは初見のインパクトデカすぎっしょ。あたし的にはアリ寄りのアリだけど普通はビビるって」

「そうねえ。物怖じせずにハイタッチしてくれたヘリオスちゃんみたいなのは貴重よねえ」

さすがコミユ強者のヘリオス先輩である。

多分このチームでギャリーさんと波長が合いそうなのはヘリオス先輩とファル子先輩ぐらいではなからうか。

アイネス先輩は普通に受け入れそうだし、スカイ先輩はその辺は気にしなさそうな気がする。

パーマー先輩は・・・案外大丈夫かも？

「中々面白い子ウマちゃんね」

色々と考え込んでしまった私を見てギャリーさんはそう笑った。

「話がだいぶそれちやったわね。それでどう言ったデザインが良いとか希望があるかしら？無ければ私の方である程度候補を出させてもらうけど」

「えつとその・・・歌舞伎衣装みたいなものって可能でしょうか？」

「へえ・・・中々渋い趣味じゃない。悪くないわね。歌舞伎衣装・・・」

歌舞伎ねえ・・・」

ギャリーさんはタブレット端末を取り出すと何やら調べたり書き込んだりし始めた。

「歌舞伎が好きなんてターちゃん中々凄い趣味なの」

「お父さんとお母さんがどっちも歌舞伎好きでして、私も何度か見てあの見得を切る演技が何だか格好いいな〜って」

主役が一番注目を浴びる瞬間。

それが見得を切る時だ。

緩急付けた歌舞伎特有の演技。

そして観客からの歓声と大常連からの大向こう（掛け声、〇〇屋！といった屋号を叫ぶ事）。

この一連の流れは伝統美であり、歌舞伎がとても長く、多くの人に愛されてきた証だ。

「インパクトターボさん、ギャリーさんがデザインラフを考えている

間に採寸しましょうか」

「あ、はい。お願いします」

私は助手の二人に付き添われて更衣室へと移動した。

「ん〜、とりあえずこんなところかしら?」

採寸を終えて少しした頃、ギャリーさんがようやくタブレットから顔を上げた。

「歌舞伎衣装を勝負服に、なんて注文中々難しかったけど丁度いいのがあったわ」

そう言つてギャリーさんが手渡してくれたタブレット端末を私は覗き込んだ。

そこにはミニの着物に黒のだんだら羽織の私が書かれていた。

「なんか新選組の衣装みたいだね」

隣から覗き込むスカイ先輩がそう言った。

確かにだんだら羽織は新選組が着ていた衣装で、それが歌舞伎と何の関係が・・・?

「うふふ、貴女達、忠臣蔵って知ってるかしら?」

「赤穂浪士が吉良上野介を仇討ちしたって話ですよね?」

パーマー先輩がそう答えてくれる。

「そう、その忠臣蔵を題材にした歌舞伎があるのだけれど、そこで赤穂浪士が着ているのがこのだんだら模様の羽織なの。新選組のだんだら模様の羽織はそこからマネて作ったのよ」

「ええ!? 新選組の方が後なんですか!」

どちらが有名かと言えばやはり新選組の方が様々な題材にされている事から当然有名だ。

さらに新選組と言えば浅葱のだんだら羽織に誠の文字とそれが決まったユニフォームであると言われている。

「実際は新選組ではだんだら羽織はあまり人気が無かったみたいね。今でこそ新選組のトレードマーク的な扱いを受けているけど、今風で言えばアイドルが着ていた衣装そっくりの制服ってところかしら? しかも警官が、よ?」

「それは・・・すごく不釣り合いですね」

「でしよ？」

アイドルがアイドルとしてその衣装を着るのなら分らないでもないが、警察官がアイドルの様な制服を着ていたらあまりに浮いてしまっただろう。

「襟には逃亡屋衝撃加速でどうかしら？」

無理やり漢字にすると確かにそうなるだろう。

「背中がちよつと寂しいわね。赤穂浪士がモデルだけど襟の文字からして原型は無いし……。亀甲紋に逃の文字を入れましょう。兎にも角にも逃げつて事ね」

横からギャリーさんが手を伸ばして背中に白抜きで六角形の中に逃の文字を書き加える。

「ベースはミニ着物だけど下は袴スカートにして和ゴス風でフリルは邪魔ね。袖は邪魔にならないように襷で袖まくりにすればいいわね。着物はあえて紺色で地味にするけれど羽織の裏地を赤にして、襷や腰紐に紫を入れて差し色で派手にするわよ。スカートも色と模様を明るくして目立たせる。ほら、歌舞伎衣装っぽくなったでしょ？」

「本当だ……」

そこには確かに歌舞伎衣装風の勝負服があった。

「後は靴のデザインね。ぱつと見は足袋に草鞋風でいいかしら。ううん、それじゃあ上に比べて軽いわね。具足風のデザインも追加しましょう」

靴は具足風の意匠が取り入れられたブーツになった。

つま先には黒い足袋と草鞋の鼻緒の様な模様が入っている。

「そうすると腕が袖まくりでちよつと寂しいわね。こつちにも手甲風アクセサリーを追加っつと」

腕にも手甲モチーフのアクセサリーが追加された。

「額にはあえて何もなしで。耳につけてるのがリボンだとちよつと浮いちやうから代わりに緑と白の二色の飾り紐を着けてっつと。後ろ髪を縛っているのも飾り紐にしましょうね」

「わあー！」

段々と出来上がる衣装のデザインに私は思わず声を出した。

「羽織の後ろは切れ目を長めにとって尻尾の邪魔にならないようにしてつと。こんな所かしらね」

「すごい・・・あつという間に・・・」

私はすっかり出来上がったデザインに見惚れていた。

「うふふ、その様子だと気に入ってもらえたみたいね」

こうして私の勝負服が決まった。

「さて、無事に勝負服も決まった事だし目標のGIを決めるとするか。ターボ、お前はどのGIを目指したい？朝日杯か？ホープフルか？」

「あのそれなんですけど・・・皐月賞でGIデビューしたいです」

それはキタちゃん達と話し合った結果だ。

皆でクラシック三冠で戦う。

誰が勝っても恨みっこなしの真剣勝負。

「・・・そうか。ただ一つ、俺はお前に残酷な事を言わなければならぬ。皐月賞とダービーは問題ない。だが菊花賞。これだけはお前の適正距離からは外れる。他の三人が長距離に強いかどうかは今の時点では分からないが、お前が菊花賞で勝てる見込みは薄い。それだけはお前に、トレーナーとして言わなければならぬ。どうする？」

「・・・今はまだ何も言えません。皐月賞とダービーを走ってみて・・・それから考えます」

「・・・そうか。分かった」

山田トレーナーはそれだけ言うのと私に練習の指示と皐月賞に向けてのレースの予定を伝えた。

SIDE：キタサンブラック&サトノダイヤモンド

「それで、二人ともクラシックに登録でいいんだな？」

沖野トレーナーが珍しく真剣な表情で二人に問いかける。

「はい、私たち皆で話し合って決めたいです」

「クラシックレースで真剣勝負をするって。勝っても負けても恨みっこ無しだった」

その言葉に沖野トレーナーは渋い表情をする。

キタサンブラック、サトノダイヤモンドは共に優れたウマ娘だ。

おそらくそれぞれが別々にクラシックレースに出れば三冠も不可

能ではないと思っている。

それが共に潰しあう。

しかも仲良しの4人組で、だ。

テイオーとマックイーンの時も悩んだ。

しかもたった一戦のレースであれほどに、だ。

しかし二人の決意は固い。

きっと残りの二人もそうなのだろう。

沖野トレーナーはしばらく胃薬の世話になるであろう予感と共に、

二人のクラシックレース申請を行った。

「決まっちゃったね。サトちゃん」

「もう後戻りはできませんね。キタちゃん」

ジョギングをしながら二人は語り合う。

「目指すのはやっぱり皆一緒だもんね」

「そうですね。それに、一生に一度のレースで、皆と本気でぶつかり合いたいです。友達だからこそ」

二人の足は自然と早くなる。

「全員で走れるといいね！クラシックレース！私！負けないよ！」

「はい！私だって負けませんよ！」

もはやジョギングではなく併走になった速度で二人はトレーニングコースを走り続けた。

SIDE：サムシングブルー

「もう一度確認するわね、ルーちゃん。ティアラではなくクラシックに出るのね？お友達とぶつかる。それが分かかっていても出るのね？」

「はい・・・私は皆と戦いたいです」

サムシングブルーの強い決意に的場トレーナーは溜息をついた。

大人しそうに見えるライスシャワーも勝負事では譲らない頑固な面があった。

サムシングブルーもまさかここまで頑固だとは思わなかった。

札幌ジュニアステークスに出たいと言っていた時から何かが変わだとは思っていたが、気弱な割に負けん気は強いようだ。

「そう、貴女が決めたのなら反対はしないわルーちゃん。でもね、これ

だけは言っておくわ。勝っても負けても、私は貴女のトレーナーとして、全力で応援して、誉めて、慰めてあげるからね」

「・・・はいー!」

あの時のライスシャワーに出来なかった事を、今はしてあげたい。(二度とあんな事あつてたまるものですか!勝者が称賛されないなんて事!)

あの時の自分はただどうして良いか分からずに狼狽えるだけだった。

自分が教え導いたライスシャワーが勝つたのになぜ批判されなければならぬのか。

悲痛な笑顔でライブに向かうライスシャワーになんて声をかければ良かったのか。

二度目の時はミホノブルボンが居てくれた為にそこまでではなかった。

でも、その役目は本来自分がしなければならぬ事だ。

(だからこそ今度は間違えない。あの子が笑って居られるように)

強い決意と共に的場トレーナーはクラシックレースへの登録届を作成する。

そして季節は流れ、私たちはついに皐月賞に出る事になった。

「ついに本番だね・・・」

「それにしても、衣装もお互い秘密にしてたけどまさかキタちゃんと和風で被るとは・・・」

「私のはお父さんの演歌がモチーフだけだね」

ターフに続く地下道を私たちはゆつくりと歩く。

「ルーちゃんはドレスにしたのですね」

「は、はい。その、実家にあるお人形さんが着ていたドレスがすつごく可愛くて好きだったので」

青をベースに、耳飾りのブーケのデザインに合わせた意匠のドレスに身を包んだルーちゃんはちよつと恥ずかしそうにそう答えた。

一つ気になるのはなぜ腰にガンホルダーっぽいものがついているのでしょうか?

ちよつと怖くて聞けない。

サトちゃんも袖の長い緑のドレスに身を包んでいる。

ゆつくりと歩いてきたけど、長かった地下道はもうすぐ終わりを迎える。

「さあ・・・全力で戦おう」

「そうだね。全力で逃げ切ってみせるよ」

「はい、全力で追い上げます」

「ぜ、全力で付いてきます」

そう言うが誰も出口を出ようとしなない。

「キタちゃん、お先にどうぞ」

「いやいやターちゃん、先頭を切るのはターちゃんでしょ？」

「ルーちゃん、たまには先頭はどうですか？」

「さ、サトちゃんこそ・・・」

私たちは無言で向き合うと右手を前に出した。

「二」最初はグー！ジャン！ケン！ポン！「三」

「さあ、！今年もやってきました皐月賞！生涯一度しか走れないクラシックレース第一戦が間もなく始まるうとしております！本日走る18人のウマ娘達！まず最初にターフに現れたのは大外18番になってしまいましたバイトアルヒクマ！苦難の道のりを乗り越えて皐月賞へとやってきました！続いて出てきたのは8番オータムマウンテン！さらに9番のサマーシーも居ます！おっと、11番スレツジハンマーは何やら機嫌が悪いのか他のウマ娘達を睨みつけています！12番ウインタードリームが怯えているぞ！場外乱闘はダメですよ！13番リヨコウバードはいい笑顔！5番メグロサーマンは緊張気味か？14番シャランラも落ち着かない様子！16番レッツラゴーはレースが待ち遠しい！17番スイーツラブ、大胆不敵な笑顔！4番イシムラシップ、神に祈るのはまだ早いぞ！6番ガルウイング、元気一杯です！13番ソーラール、太陽をお拜んでいる！15番スプリングフェスタ、やる気満々です！7番キタサンブラック、何やら様子が変ですが大丈夫でしょうか？10番サトノダイヤモンド、彼女も少し不満そうな表情です！2番サムシングブルー、ちよつとおつか

なびっくりですが落ち着いてレースに挑めるでしょうか？最後にやってきました1番インパクトターボ、ここまで9戦9勝無敗の大逃げウマ娘！今日も逃げ切れるか期待されています！以上18人です！

実況の声が《font:ul40》中山競馬場《font》に響き渡る。

準備運動を始める私たちの横で着々とゲートの準備が整えられていく。

やがて最終確認が終わるとスターターが旗を振り、ファンファーレが鳴り響く。

観客の歓声がまるで地鳴りの様に空気を振動させる。

私たちは係員に誘導されて一人、また一人とゲートに入っていく。

そしてゲートが開かれた！

SIDE：実況

「スタートしました！まず一人好スタートで飛び出しましたのはやはりインパクトターボです！その後ろにこれまたやはりサムシングブルーが追走しております！おっと今日はどうやら追いかけるメンバーが沢山いる模様！サムシングブルーに並びかける位置にキタサンブラック！その後方にこれは珍しいスレツジハンマーが居ます！後方集団を引っ張る形で走っております！後方集団にはリヨコウバード！メグロサーマン！外にレッツラゴー！その後ろにスイーツラブ！内にウインタードリーム！スプリングフェスタは横を塞がれたか！その後ろのガルウイングちよつと窮屈そうだ！サトノダイヤモンドは集団を避けて外に抜け出しました！最後尾はシャランラは間に合うでしょうか！先頭は変わらずインパクトターボが飛ばしております！早くも1000メートルを通過！タイムは58秒と尋常ではない速さです！三バ身ほど離れてサムシングブルー！その後ろにキタサンブラック！大きく離れて珍しい位置にスレツジハンマー！末脚は炸裂するでしょうか！その後ろリヨコウバードとメグロサーマンがポジション争い！スイーツラブ少し下がりましたウインタードリームが前に出ます！スプリングフェスタなんとか外に出たい所

！ガルウイング一旦後ろに下がりました！サトノダイヤモンドが外から前に上がっていきます！最後尾はシャランラのままだ！さあインパクトターボが早くも第4コーナーに入ります！サムシングブルーがジリジリと上がっていく！キタサンブラックもそれに続く！スレッジハンマーここまでハイペースだが大丈夫か!?サトノダイヤモンドが後方集団を抜いて一気に上がってきました！残りは300メートルの短い直線と強烈な坂！サムシングブルーとキタサンブラックがインパクトターボに並びかける！スレッジハンマーとサトノダイヤモンドも上がってきます！残り僅か！しかし坂がある！なんと完全に追い付かれたと思ったはずのインパクトターボがまた伸びる！きつい坂を駆け上がり！その差を僅かにだが広げていく！やりましたインパクトターボゴールイン！稀代の逃亡屋襲名披露の檜舞台！それに選ばれたのはこの皐月賞でした！見事に逃げ切りましたインパクトターボ！一度は追い付かれたかと思いましたが！渾身の走りで見事に先頭を守り抜きました！今、笑顔で手を振っています！おや？掲示板には写真の文字。どうやら3着から5着の判別時間がかかっている模様です。1着はインパクトターボ、2着はサムシングブルーです。3、4、5着が現在写真判定中。どうやら判定が終わったようです。なんと！これは珍しい3着が3人同着です！キタサンブラック、サトノダイヤモンド、スレッジハンマーが見事3着同着となりました！」

SIDE：インパクトターボ

「ッシー！」

私はゲートが開くと同時に全力で飛び出すと先頭を取りに行く。不器用な私が取れる唯一の作戦であり、最も得意で強力な武器だ。

「ついてくー！ついてくー！」

後ろにはやっぱりルーちゃんが追走してくる。

「前よりもずっと早い！やるねターちゃん！」

今日はキタちゃんも居るようだ。

「待てやゴオラアアアアアアア！」

スレッジハンマーがやはり怒声と共に追いかけてくる。

サトちゃんは後ろに控えているらしく今は様子が分からない。

落ち着け私、今は前に進む事だけを考えよう。

最後は必ず皆来るんだから！

SIDE：サムシングブルー

「ついてくーついてくー！」

私は今日もターちゃんについていく。

元々一人で走るのが苦手な私はどうしてもほかの人のペースを当てにしないと走れない。

そんな私を否定せず、色んな走りに合わせられるように教えてくれたトレーナーさんには感謝しかない。

ターちゃんについていくのはとても大変だ。

スタミナには自信がある私だけれどスピードにはちよつと自信が無い。

それでも私は必死にターちゃんについていく。

だって、ターちゃんを一人にするととっても強いから！

SIDE：キタサンブラック

「すごいなあターちゃんは！私もスタートには自信があつたのに！」

私も逃げや先行は得意だ。

スタートだって自信があつた。

でもターちゃんはそんな私を上回る速さで先頭に立つとドンドンと先へ進んでいく。

でもハイペースなレースは私だって得意だ。

今は追いかけるだけだけど、最後の直線は譲らないからね！

SIDE：サトノダイヤモンド

「一緒に走ってみて改めてターちゃんのすごさが分かりますね」

内に抑え込まれる事を避けるために私は外に出て前を追いかける。

四人の中では私だけが後ろからのレースをするのでどうしても離されてしまうけれどもレースはまだ始まったばかり。

「大丈夫です。レースは最後に先頭を取ればいいんです」

私は自分にそう言い聞かせると絶好のポジションを探して移動を始めた。

SIDE：インパクトターボ

「行ける！私なら逃げ切れる！だから諦めるなターボ！」

これがG I！

これが皐月賞！

プレッシャーが！

皆の想いが！

そんな見えない何かによって私の体力はドンドン削られていく！

いつもより足を速めて逃げるがルーちゃんもキタちゃんもきつち

りついてくる！

あのスレッジハンマーもサトちゃんも上がってきているようだ！

もうすぐ最終直線！

「今日は！勝ちます！」

「テイオーさんの様になる為に！負けられない！」

「マックイーンさんに恥ずかしくない様に！負けられません！」

「どけえ！勝つのはスレッジハンマー様だあ！」

上がってきた皆が私に並びかける！

「ターちゃん頑張るのー！」

「バクシンバクシン！」

「あと少しだよ！がんばって！」

「バクニゲゴー！」

「あと少し、気を抜かないでねー！」

「ターちゃんファイトー！」

「後ろなんか気にするな！ゴールだけ見ている！」

チームの皆の応援が聞こえてくる！

「行きなさい！ターボ！」

「インパクトならやれるぞー！」

イクノ先輩！ツイン先輩！

「インパクトターボ行けー！」

観客達の応援の声！

「うわあああああああああああああああああ！」

「嘘!？」

「すごい！」

「そんな!？」

「なんだとお!？」

多くの声に背中を押されて私は最後の気力で前に出ると先頭のままゴール板を走り抜けた。

「やった!やったやった!やった!やったぞお!」

私は勝利を噛み締めるように何度も叫ぶと、応援してくれた皆に笑顔で手を振った。

「また・・・逃げられちゃいましたね」

「凄かったよターちゃん」

「はい、今日は完敗です」

「二おめでどうターちゃん、次は逃がさないからね!」

三人は笑顔で拍手をくれた。

「ありがとう皆!でも次だつて逃げきつてみせるからね!」

他の出場選手達も拍手を送ってくれた。

ただ一人を除いて。

「チックシヨオ!何やってんだスレッジハンマー!こんなのが俺様の走りだとお!」

全力で地団駄を踏んでいるスレッジハンマーが自分に叱咤している。

「インパクトターボ!てめえダービーまで覚えてやがれ!絶対にダービーで負かしてやるからな!」

それだけ言うとスレッジハンマーはターフを立ち去って行った。

一方的に捲し立てられて若干私たちは置いてけぼりだった。

「えーっと・・・うん!ライブも頑張るぞ!」

「二お、お〜!!!」

気を取り直して私たちは右手を高く上げた。

育成目標：皐月賞を5着以内に入る CLEAR

固有二つ名獲得条件：9個以上のレースを全て逃げで勝利し、皐月賞を無敗のまま勝利する CLEAR

第2シーズン第9話 レース、レース、またレース (馬)

残念ながら有馬記念も二着に終わってしまった後……。

「惜しかったなターボ。大丈夫、お前はまだまだ成長できる。来年の有馬記念は必ず取るぞ」

落ち込んで戻ってきた俺に山田調教師がそう言って慰めてくれた。

「すみません山田さん、室さん。勝てませんでした」

「気にするな若井君。あの時ファインモーションが前に来なければきつと体力を使いすぎないで、逃げ切れただろう。勝負は時の運だ。今日は我々に運が無かっただけの事だ」

室オーナーがそう言って若井騎手を諭す。

「ターボはまだ若い。来年は必ず有馬記念を取るんだ」

「はいー」

こうして俺の3歳は終わりを迎えた。

そして年が明けて2003年1月……。

「やあ山田さん、あけましておめでとうございます」

「室さん、あけましておめでとうございます。今年もよろしく願います」

年明けから少し経った頃に室オーナーが訪ねてきた。

「ほら、ターボにお年玉だ」

そういつて室オーナーは沢山のリンゴが入った段ボールを見せてくれた。

リンゴだヤッター！

「ありがとうございますいます室さん。それで、ターボのレース計画を考えたのですがご相談よろしいですか？」

「ええ、構いませんよ」

ああん、リンゴお預けなのね。

「本当なら若井君にも参加して欲しかったのですが、皐月賞以降少しずつ声がかかるようになってきたらしくて、今日はあいにく関西に

行ってます」

「どうやら若井騎手も徐々に指名される事が増えてきたらしい。

「それで、どういった計画なのですか？」

「はい、今後なのですがターボは定期的にレースに出してやった方が調子が良いので、過密スケジュールにならない程度にレースに出してやろうかと思うのですがよろしいですか？」

「ほう、そうなのですか？」

「ええ、以前休みを取らせたり、レースに向けて調教を重視する為に長期レースに出さなかった時期があつたじゃないですか。あの時なんですがどうもフラストレーションが溜まるようで、悪戯の回数が目に見えて増えましてね。調教はまじめにやってくれるのですが明らかに物足りなさそうな雰囲気を出しては悪戯してましたね。幸いにも脱走したり放馬したりなんて事はなかったので良かったのですが・・・」

調教はまじめにやりますとも。

でも実際レースに比べると疲れるけど物足りないんだよね。

血が滾らないし、ただただ練習するってのは。

「唯一楽しそうなのは併せ馬の時なのですが、ターボは大逃げするの
で併せ馬の人氣が悪くて・・・」

変な癖を覚えられたら堪らないからとあんまり併せ馬してもらえないんだよね。

「なるほど、ならいつそレースに出してフラストレーションを解消してやりながら調教をしていこうと言うわけですね」

「その通りです。もちろん疲労や怪我などには十分注意して、獣医の健康診断も頻繁に行う予定です」

「山田さんに全てお任せしますよ。ターボ、大変だろうが頑張るんだぞ」

おっし、今年も頑張つてG I取るぞー！

1月 調教に専念の為レース無し

2月 G II 京都記念

「インパクトターボ一人旅！後続はまったくついてこれません！堂々

たる走りで今1着でゴールイン！」

3月 GⅡ日経賞

「インパクトターボが有馬記念の鬱憤を晴らすかのような大逃げです！インングランディーレが必死に追いかけますが届きません！インパクトターボ逃げ切りましたゴールイン！」

4月 今月は休ませる為にレース無し

5月 天皇賞春は適性外なので回避、GⅡ目黒記念

「インパクトターボ先頭！後続はまだもがいている！インパクトターボ直線に入っても速度が落ちません！そのままゴールを駆け抜けましたゴールイン！」

そして6月 GⅠ宝塚記念

「さあ！今年の宝塚記念は18頭フルゲートでのレースとなりました！注目馬が揃いました今年の宝塚記念！特に注目なのが、大逃げで連戦連勝のインパクトターボでしょう！ハイペースになる事が決まった今年の宝塚記念！はたして勝つのはどの馬なのでしょうか！」

蒸し暑い阪神競馬場のパドックをグルグルと回る。

「やあ、久しぶり。また会ったね」

「シンボリクリスエスか。有馬記念以来だな。今日は負けなぞ」

久しぶりに見たシンボリクリスエスと火花を散らす。

「お久しぶりです。インパクトターボさん」

「サムシングブルーちゃん。天皇賞春はおめでどう」

「はい！」

嬉しそうに笑うサムシングブルーちゃんだが今日はライバルなので負けるわけにはいかない。

「フヒヒ・・・尊い・・・尊くて溶けそう・・・」

「うわ!?どっから現れた!?!」

「き、君は?」

「フヒヒ・・・アグネスデジタルだよ・・・」

アグネスデジタルって確か・・・。

「1枠2番、アグネスデジタル。日本芝、海外芝、ダートの全てを制したまさに適性問わずの傑作馬です！前走の安田記念も見事に1着で

す」

な、何という変態適性！

「フヒヒ．．．恥ずかしい．．．やばい恥ずか死しそう．．．」

ぶ、不気味な奴だ．．．。

「フヒヒ．．．君の走り．．．楽しみだなあ．．．」

何とも言えない視線でこちらを見た後アグネスデジタルは去っていった。

妙な気分になったが気を取り直すと相棒の元へ向かう。

行くぞ相棒！レースの時間だ！

SIDE：実況

「さあ、ファン投票によって選ばれた18頭の人気馬達。果たして今年の宝塚記念を制するのはどの馬なのか。まもなく各馬のゲートインが完了します。今、最後の1頭が収まりました．．．スタートしました。1頭飛び出しました逃亡屋インパクトターボ今日も大逃げです。その後ろ3馬身から4馬身を女ハンターサムシングブルーが追走します。この2頭のお決まりと言った体制です。その後ろ2馬身の位置にマイソールサウンドが居ます。やや離れてサイレントデイル、アグネスデジタル、ダンツフレームがこの位置。その後ろにシンボリクリスエスなどがいます。大きくばらけたまま第1コーナーへと各馬が向かいます。先頭のインパクトターボ足を緩める事なくコーナーを曲がっていきます。サムシングブルーとの差は変わらず4馬身といったところ。その後ろマイソールサウンドが詰めています。少し離れて3馬身ほど後ろにバランスオブゲーム、サイレントデイルなどがいます。その後ろにタップダンスシチーとアグネスデジタル。シンボリクリスエスにダンツフレームはやや後ろ。最後尾はファストタテヤマです。早くも第3コーナーを回っていきまますインパクトターボ。サムシングブルーがじりじりと差を詰め始めました！マイソールサウンド苦しいかついていきません！タップダンスシチーが上がっていきます！シンボリクリスエスもそれに続きます！第4コーナーを回って最後の直線！インパクトターボまだ先頭！サムシングブルーも追い上げますが今日は差が中々詰まりませ

ん！インパクトターボ逃げる！インパクトターボ逃げる！今日はまだ余裕がある！これは見事に逃げ切りましたゴールイン！舞台の主役は譲らない！インパクトターボ見事な大逃げで勝利いたしました！」

SIDE：インパクトターボ

「ッシ」

いつも通り、ゲートが開くと同時に全力で飛び出す。

「ついてく！ついてく！」

今日はサムシングブルーちゃんがすぐ後ろにいるから警戒を外す事ができない。

「大丈夫だ相棒！後ろは俺が気にする！」

相棒の声に警戒を止めて走る事だけに集中する。

「せ、先頭を取られるとは不覚！」

どうやらもう1頭逃げ馬が居た様だが悪いが先頭は譲らんとぞ！

俺はそのままの勢いでコーナーを曲り、向こう正面へと駆け抜けていく。

「フヒヒ・・・これは・・・まずいねえ・・・」

あの不気味な声が遠くから微かに聞こえてくる。

シンボリクリスエスの声はまだ聞こえてこない。

「相棒！まだ行けるな！」

もちろんだ相棒！

向こう正面を抜けて第3コーナーを内側一杯に走り抜ける。

そのまま第4コーナーに入ると後ろのプレッシャーが強くなってくる。

「今日も！捕えて見せます！」

じりじりと、しかし確実に距離を詰めてくるサムシングブルーちゃん。

しかし今日は俺の距離だ！

言葉はもう要らない！

相棒の鞭が全身の力を引き出す！

「うう！追い付けない！」

必死に追いかけるサムシングブルーちゃんだが今日は2馬身ほどリードを残したまま俺はゴール板を駆け抜けた！

「やったな相棒！やっぱりお前は最高の馬だ！」

相棒が首筋を叩いて褒めてくれる。

「やっぱり強いですターボさん。悔しいなあ・・・」

「今日は勝たせて貰ったよサムシングブルーちゃん」

落ち込むサムシングブルーちゃんを騎手さんが宥めている。

「やられた〜完全に前をふさがれた〜」

「フヒヒ・・・見事に負けました・・・鬱だ・・・」

思ったように走れなかったらしいシンボリクスエスと暗い空気を漂わせるアグネスデジタル。

「くそー！天皇賞秋でリベンジしてやるからなー！絶対出るよー！」

「ああ！次も逃げきってやるさー！」

口調はのんびりしているが負けん気は十分なシンボリクスエスにそう宣言する。

「フヒヒ・・・やっぱりデジタルはもうオワコンなんだ・・・」

「あー・・・うん・・・がんばれ？」

尋常じゃないくらい落ち込むアグネスデジタルになんて声を掛けたらよいか分からず、取り合えず励ましておいた。

「次は負けません！」

「ああ、楽しみにしてるよ」

サムシングブルーちゃんはそう言って去っていった。

さて、次に目指すはどのレースかな？

インパクトターボ 牡4歳 18戦15勝 主な勝鞍：02年G I 皐月賞 02年G I ジャパンカップ 03年G I 宝塚記念 02年G I 日本ダービー2着 02年G I 菊花賞2着 02年G I 有馬記念2着

第2シーズン第9話　ダービー、ダービー、いざダービー（ウマ娘）

「・・・日本ダービーを制したのは・・・！」

ゴール直前で私は抜かれ、黒い背中がゴールを駆け抜けた。

「ッ！」

私は驚いて目を覚ますと体を起こそうとしたが微動だにできなかった。

「・・・ルーちゃん・・・また私のベットに・・・」

「・・・ターちゃんに・・・ついてく・・・ついてく・・・すー・・・」

幸いにセミダブルサイズのベットなので二人で寝てもそこまで狭くはない。

特に私もルーちゃんも小柄なのでなおさら余裕がある。

元々大家族で一緒に寝ていたらしいルーちゃんは同じ部屋とはいえ一人で寝るのが寂しいらしく時々こうして私のベットに潜り込んできくる。

動けなかったのはルーちゃんが私のパジャマの袖をしつかりと握っているからだだった。

先ほどの夢が頭を離れず、私はルーちゃんを起こさないようにうまくパジャマを脱いでベットから起きるとジャージに着替えてまだ日の出前の外でジョギングを始めた。

「はっはっはっはっ・・・ふう・・・」

朝露で湿る地面を蹴つて、学園の中をあてもなく走っているといつの間にか三女神像の噴水広場にやってきていた。

「・・・三女神・・・か・・・」

特段信心深い方ではないが、何か分からない力のような物を感じる女神像はようやく顔を出した朝日に照らされて神々しく輝いていた。

「うん、もうちよつと走ろう」

息が整ったところで私は再び走り出した。

「はあっ！はあっ！はあっ！・・・ちよつと走りすぎたかな・・・」

私は偶然見つけた自販機に寄り掛かって息を整えながらICカードを取り出すとスポーツドリンクを購入した。

「んっんっんっんっ！ふう・・・」

半分ほどを一気に飲み干すと私は近くのベンチに座った。

視線の先には朝露で輝く練習コースがあった。

「私は・・・勝てるんだろうか・・・」

臯月賞ではギリギリの勝利だった。

果たして日本ダービーで私は勝てるのか。

漠然とした不安がグルグル頭の中で渦巻き、私はただただ見えない何かに怯えていた。

「・・・ツケンナコラー！」

「ん？」

ターフの方から誰かの声が聞こえてきた。

「はあっ！はあっ！はあっ！ぎけんなよスレッジハンマー！あの臯月賞みたいな腑抜けた走りをダービーでもするつもりか！気合いれろや！」

汗だくで息を整えているスレッジハンマーがそこにはいた。

「はあっ！はあっ！はあっ！もう一本だ！俺様はスレッジハンマー様だ！誰にも負けねえ！あのまま終わるのは俺様じゃねえ！ダービーがなんだ！インパクトターボがなんだ！勝つのは俺様だ！」

私はスレッジハンマーのその姿を見て頭を殴られたような衝撃を受けた。

私はいつしか自分が勝てる事が当たり前になっていた。

勝つことより負けてしまった時の事ばかり考えていた。

誰もが勝てるかどうかなんて分からない。

分からないからこそトレニングを積んで挑むのだ。

気持ちの段階で驕っていたら勝てるはずがない。

「うん、もうちょつと走ろう」

残ったスポーツドリンクを飲み干すと私はジョギングを再開した。

その後、朝食の時間に合わせて部屋に戻った私に、目を覚ましたらもぬけの殻だった私のベットで涙目になっていたルーちゃんの強烈

すぎるハグが決まったのは言うまでもない。

その日、美浦寮では押しつぶされたカエルの様な悲鳴が響き渡った。

「なるほど、それで今朝はターちゃんの調子が悪そうだったんだね」

昼休みの食堂でいつもの4人でご飯を食べながら今朝の事を話す。

「ルーちゃんのベアーハグは強烈でした・・・」

「ご、ごめんなさい」

ルーちゃんがちよつと涙目で謝る。

「でもターちゃんもせめて一言声をかけるべきでしたよ」

「はい、サトちゃんのおっしやる通りです・・・」

あるいはメモでも残しておけば結果はまた違っただろう。

「とりあえず次の授業は移動教室だから早めに食べちゃおうよ」

「そうですね」

私たちは食事を手早く済ますと食堂を後にした。

「クリス！まったくお前は！」

「この声ってルドルフ会長？」

どちらかと言えば冷静であり怒声を上げる方ではないルドルフ会長の怒鳴り声が廊下に響き渡った。

声の方を見るとルドルフ会長が一人の生徒にガミガミと説教をしていた。

「あの・・・ルドルフ会長？どうしたのですか？」

「ああ、すまない。騒がしくしてしまったようだな。私もまだまだ落ち着きが足りないな」

ハアつとため息をつくルドルフ会長。

「そちらの生徒が何かしたのですか？」

「ああ、この子は私の遠縁の親戚にあたる子でな。今年から新入生として学園に入ったからご両親からよしなに、と頼まれていたのだ」

そういえばルドルフ会長もかなりの名家出身だったはず・・・。

「しかし、この子は昔からのんびりしたところがある子だったのだが学園に来てそれが治らないとは・・・」

「初めまして。シンボリクリスティです」

間延びした声でシンボリクリスティが挨拶をしてくれた。

「初めまして。キタサンブラックです」

「サトノダイヤモンドです」

「インパクトターボです」

「さ、サムシングブルーです」

私たちも自己紹介を返す。

「君たちも仲良くしてやってくれ。あとできれば尻を叩いてやっても欲しい」

「どういうことですか？」

「いつものんびりぼんやりしているせいで授業を全く聞いていないと苦情が来てな……」

「な、なるほど……」

実際シンボリクリスティはつい先ほどまで叱られていたにも関わらずボンヤリと窓の外の雲を眺めていた。

「あの雲……人参みたいで美味しそう……」

うん……会長の苦勞が忍ばれる。

その後、まだ説教が足りないとルドルフ会長はクリスティを引きずる様にどこかへと連れて行った。

「あのーアイネス先輩、ちよつと相談いいですか？」

「ターちゃんから相談なんて珍しいの。構わないから話してみるの」

トレーニング前に私はアイネス先輩に相談を持ち掛けた。

「……アイネス先輩がダービーを走った時はどうでしたか？その……レース前の気持ちとか心持といいますか……」

「不安なんだね」

私は無言で頷いた。

「ターちゃんが不安な理由は何となく分かるの。ターちゃんはまだ公式戦で負けた事がないの。だから勝ちたいって気持ちより負けたらどうしようって気持ちが強いの。だから不安なの」

アイネス先輩は私の今の状況を簡単に言い当てた。

「はい……今の自分を振り返って、いかに自分が傲慢な考えになっていたのかを自覚して……」

次の瞬間私の両頬をアイネス先輩の手がぎゅつとつまんで引つ張った。

「ひたいれふ・・・」

「いいのターちゃん？誰だって負けたら不安なの。だからこそ勝ちたいの。それが傲慢だなんて誰にも言わせないの。ウダウダ悩むくらいなら、誰にも負けない強さを手に入れるの」

「へんふあい・・・」

そろそろ辛いのですが・・・。

「さ、練習頑張るの」

「はいー」

やっと離してもらえた頬をさすりながら私は返事をした。

こうして私は日本ダービーを迎えた・・・。

「今年もやってきました日本ダービー！クラシックレースの中でも最も重いこのレースを制するのは誰か！わずか18人のウマ娘、その中でも頂点を手に入れられるのはただ一人です！」

《font:ul40》東京競馬場《font》に実況の人の声と多くの観客の歓声が響き渡る。

そんな《font:ul40》東京競馬場《font》の地下道を私たちはゆつくりと歩く。

「皐月賞は負けちゃったけど、ダービーは私が勝たせて貰うよ」

「いいえ、勝つのは私です」

「わ、私だって負けたくないです」

「・・・うん、皆勝ちたいよね。でも譲らない。譲りたくない」

それぞれの思いを胸に、私たちは地下道の終わりまで来た。

「今日はどうする？」

「・・・公平に皆一緒に出ようか」

「そう、ですね」

「はい」

私たちは手を繋いで4人同時にターフへと出た。

SIDE：実況

「さあターフへとやってきました18人を紹介しましょう！まず最初

にやってきましたのは1番バイトアルヒクマ！やや緊張した面持ちです！続いて18番ウインタードリーム！大外ですが果たしてどうでしょうか！その次は2番ソーラールル！今日も太陽礼拝を欠かしません！3番スレッズジハンマー！皐月賞は同着での3着でした！相変わらずの不機嫌な表情を隠そうともしません！16番サマーシー！やる気十分です！4番オータムマウンテン！しきりにブーツの調子を窺っています！5番スプリングフェスタ！ちよつと元気がなさそうですが大丈夫でしょうか！15番シャランラ！笑顔で手を振っています！6番ガルウィング！自慢の末脚は今日こそ炸裂するでしょうか！14番レッツラゴー！ちよつと落ち着きがない様子！7番スイーツラブ！とある筋の情報ですと皐月賞後にスイーツやけ食いをしてトレーナーに叱られたとの事です！9番イシムラシップ！今日も神に祈りを捧げている！10番メグロサーマン！褐色の肌が輝いています！おつと4人同時に出てきました！奥から12番インパクトターボ！皐月賞を逃げ切った無敗の逃亡屋！2冠なるか！13番サムシングブルー！僅かに届かなかった皐月賞！リベンジに期待です！8番サトノダイヤモンド！17番キタサンブラック！両名共にスレッズジハンマーと同着の3着でした！今度こそ勝利を期待しましょう！そして遅れてやってきたのは11番シンボリクリスティ！青葉賞を勝ち上がって日本ダービーに参戦です！以上18人の紹介でした！」

S I D E：インパクトターボ

ウォーミングアップをする傍らでゲートの準備が進み、係員が最終チェックをしている。

観客席の方を見るとチームの皆が、イクノ先輩とツイン先輩が私を応援してくれている。

他にもいろんなチームの人がそれぞれのメンバーを応援している。もちろんスピカのメンバーもキタちゃんやサトちゃんを応援している。

ルーちゃんのトレーナーさんもチームメンバーやライス先輩と一緒に応援していた。

ルドルフ会長も居るところを見るにクリステイを応援・・・という
か監視しにきたのだろう。

ゲートの準備が終わったらしくスターターの合図でファンファー
レが鳴り響く。

私は大きく深呼吸すると両頬を軽く叩いて気合を入れなおすと、係
員の指示に従ってゲートに入っただけだった。

S I D E：実況

「さあ最後の一人が収まりました！・・・スタートしました！やはり先
頭を取りましたのはインパクトターボです！その後方についたのは
サムシングブルーとキタサンブラック！間3バ身から4バ身といっ
たところ！さらに4バ身程離れて後方集団が形成されていますが激
しいポジション争いです！僅かにメグロサーマンが前に出たでしよ
うか！レッツラゴーがその外にいます！ウインタードリームが内側
に、その斜め後ろにサマーシーが居ます！中団あたりにスレッジハン
マー！皐月賞では攻めた走りをしたスレッジハンマー今日は後ろか
ら前を狙っています！その外にサトノダイヤモンドが居ます！サト
ノダイヤモンドは今日は前よりです！シンボリクリステイがその後
ろにつけています！出遅れたバイトアルヒクマ完全に置いてけぼり
です！インパクトターボ早くもコーナーを曲がり終えて向こう正面
です！サムシングブルー、キタサンブラックとの差は変わらず3バ身
ほど！その後ろ4バ身にレッツラゴーとメグロサーマン！ウイン
タードリームが続いています！サマーシーがゆっくりと前にでて
レッツラゴーの外側に並ぼうかというところ！スレッジハンマーは
まだ我慢！サトノダイヤモンドも位置は変わりません！シンボリク
リステイも動きません！スプリングフェスタとスイーツラブ思った
ように走れないのかズルズルと下がっていきます！ガルウイング前
を塞がれてもがいています！最後尾バイトアルヒクマが必死に追い
上げてオータムマウンテンとシャランラに追いつきました！非常に
ハイペースになりました今年の日本ダービー！早くもインパクト
ターボが櫂の向こうを走り抜けます！サムシングブルーとキタサン
ブラックが徐々に差を詰め始めました！後方集団は直線を狙ってい

るかまだ動きません！第4コーナーを抜けて残り500メートル！インパクトターボ懸命に逃げます！サムシングブルーとキタサンブラックがその差を2バ身まで詰めました！スレツジハンマーとサトノダイヤモンドが大外から一気にまくり上げて優勝争いに名乗りを上げました！シンボリクリスティも上がってきます！インパクトターボ坂を上り切りしました残り300メートル！サムシングブルーとキタサンブラックが並びかけます！その後ろにスレツジハンマーとサトノダイヤモンド！驚異的な末脚で並びかけます！シンボリクリスティはちよつと追い付けないか！インパクトターボがまだ先頭ですがその差は僅か！5人が完全に並んでいます！懸命にシンボリクリスティも追い上げますがこれは届きません！5人が並んだままゴールイン！誰が勝ったのか全く分かりません！大混戦の日本ダービー！タイムはなんと2分25秒2！ですが1着はまだ分かりません！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー！」

何時もの様にゲートが開くと同時に飛び出す。

「ついてくー！ついてくー！」

「負けないよ！ターちゃん！ルーちゃん！」

後ろにルーちゃんとキタちゃんがついてくる。

今日は怒声が聞こえてこないからスレツジハンマーは後ろの方にいるのだろう。

サトちゃんも後ろにいるから油断はできない。

だからこそ負けたくない！

負けてたまるものか！

私はいつもより力を入れて地面を蹴ると全力で前に進み続ける。

素早く後ろとの差を作り、内側へと入り込んでコーナーを内側ギリギリで曲がる。

最高速度に自信がないのなら、最短距離を走って、平均速度で勝つんだ！

先輩たちだって私のスタートダッシュの良さと最後まで速度を落

とさずに走り切れる持続力の強さは褒めてくれたんだ！

山田トレーナーだって私の強みを生かしたトレーニングを沢山考えてくれたんだ！

負けるのはまだ怖い！

いつかきつと負ける時が来る！

でもそれは！

今日じゃない！

負けられないんだ！

大櫓を通り過ぎ、第4コーナーを曲り、最後の長い直線には私が入った！

ジリジリとルーちゃんとキタちゃんが差を詰めてくる！

スレッズハンマーとサトちゃんも自慢の末脚で上がってきた！

もう一人シンボリクリスティも居るみたいだけどあつちは厳しそうだ！

上り坂は苦手じゃない！

それでも末脚が弱い私では他の皆に並ばれてしまう。

必死に足を回して追い抜かれないように走る。

他の皆だって必死だ！

「今日は！負けません！」

「必ず勝つ！勝ってお父さんに褒めてもらうんだ！」

「私だって！負けたくありません！」

「邪魔するなあ！勝つのはスレッズハンマー様だあ！」

「絶対に抜かせるかあ！」

全員の叫びと共に私たちはゴールへと向かう！

そして雪崩れ込むようにゴールを駆け抜けた！

SIDE：実況

「長い長い審議が続いています。実況席からはまったくもって判別がつきませんでした今年の日本ダービー。なんと5人が並んだままという前代未聞の事態。よほどギリギリの決着だったのか中々写真の文字が消えません。いまだに掲示板には番号が表示されないという異例の事態です。あ、どうやら審議が終了したようです。掲示板に注

目しましょう。まず表示されたのは17番キタサンブラックと8番サトノダイヤモンド！なんと再びの同着です！4着が同着となりました！3着にサムシングブルー！ハナ差です！最後に1着と2着が同時に表示されます！1着になったのはなんとインパクトターボです！表記はハナ差ですが今伝えられた情報によりますとその差はわずか5センチです！5センチに泣きましたスレッジハンマー！今年のダービーウマ娘はインパクトターボです！」

SIDE：インパクトターボ

「あ……」

私が……1着……。

その事を理解するのに少しだけ時間がかかった。

そして理解すると同時に視界が歪んだ。

気が付けば滂沱の涙を流していた。

私はついに、夢を叶えたのだ。

大逃げでダービーを制する。

その夢が叶った嬉さと勝てたんだという安堵感。

その他様々な感情が混ざり合って私はただただ泣き続けた。

「ターちゃん、おめでとう。悔しいけど、強いね」

「おめでとうございますターちゃん」

「ターちゃん、おめでとう」

三人が私の手を取って私を讃えてくれる。

負けて悔しいのに、勝ちたかったはずなのに私を褒めてくれる何事

にも代えがたい友人たち。

「ありがとう……皆ありがとう……」

私は頑張ってお礼の言葉を返すと皆の手を握りしめたまま泣き崩れた。

育成目標：日本ダービーを5着以内に入る CLEAR

第2シーズン第10話 いざ！秋古馬三冠へ！（馬）

宝塚記念が終わり、俺は夏季休業に入った。

7月8月は新馬戦が増えることや気温が暑すぎて馬を潰したくない馬主が多い事など様々な理由でGIレースが無く、GIIIレースばかりなのである。

なのでリフレッシュを兼ねて7月8月は北海道の牧場に放牧される馬も非常に多い。

俺も宝塚記念勝利のご褒美を兼ねて牧場へと帰ってきたのだが……。

「今年は天候が悪くて少し肌寒いな……」

どうやら今年は天候不順による冷夏になってしまったらしく、本土に比べれば幾分か涼しい北海道の夏が、今年は肌寒いほど涼しい夏になっている。

毎日雨続きで思うように放牧もできず、天候不順の影響で野菜類の値段の高騰。

飼葉だって湿気てしまわないように牧場長なんかは苦勞していた。

俺たち馬もいつもと違う夏に何とも変な気分で過ごすことになったのだった。

そして9月、俺は美浦トレセンに戻ってきたが……。

「……あぢい」

冷夏の反動か、9月は異常なまでに気温が上がり、肌寒い気温に慣れてしまった俺はすっかり暑さに参ってしまった。

「どうですか？」

「ん……体に異常は見られませんし、単純にこの暑さにやられてしまっただけですわね」

獣医さんがそう言って耳から聴診器を外した。

「やれやれ、冷夏が続いたと思っただけの暑さ。人間でも倒れて病院に運ばれてますからね」

「熱射病……ああいや熱中症と名前を変えたんですけどつけね。馬でも熱中症で死亡した例がありますから十分注意してくださいね」

獣医さんはそう言つて山田トレーナーに諸注意を告げると去つていった。

「やれやれ、天気ばかりはどうしようもないな。9月も休んで秋天に直接いくか」

すまねえ相棒・・・大変申し訳ありません母上殿。

知られたら・・・説教だろうなあ・・・。

こうして俺は9月のレースを回避する事になってしまったのだつた。

SIDE：掲示板

【爆走】インパクトターボについて語るスレ【暴走】

＜001

以下のルールを守つて楽しく語り合ひましょう。

1. お互いの意見は尊重しましょう。
2. 罵詈雑言は無視しましょう。
3. 全く無関係な話題はなるべく避けましょう。

＜002

スレ立て乙

＜003

インパクトターボ 父：ツインターボ 母：イクノデイクタス 馬

主：室満男（代表者）

戦績：18戦15勝

主な勝鞍：02年GI皐月賞 02年GIジャパンカップ 03年

GI宝塚記念 02年GI日本ダービー2着 02年GI菊花賞2

着 02年GI有馬記念2着

特記事項：皐月賞まで9戦9勝で皐月賞を勝利 連続連対記録18

回（歴代2位） GI以下無敗 全てのレースで逃げ（大逃げ）

・・・なにこの完璧超馬

＜004

血統だけが非常にマイナーな分異常さが際立つな

＜005

ダービーはタニノギムレットに、菊花賞はサムシングブルーにやら

れたけど、どっちも惜しかったよな

＜006

血統的に長距離は苦手なのかもな

＜007

いうてツインターボあのナリブ抑えて有馬取ったぞ

＜008

あれは師匠の逆噴射装置が故障してたからだろ（笑）

＜009

むしろナリブが逆噴射してたよな

＜010

超ハイペースでシャドーロールの怪物潰すとか師匠はやっぱ師匠
やったんや！

＜011

今有馬の映像見てるんだけど鞍上との折り合いが悪いのかなリブ
だいぶ落ち着きが悪いぞ

＜012

強いけど繊細な馬だからなあナリブ

＜013

それ言ったら師匠も繊細だが（笑）

＜014

ツインターボが大逃げするのは他の馬が怖いからだっけ？

＜015

ってことはインパクトターボも他の馬が怖いのか？

面子してるし

＜016

調教師の話だと後ろから抜かそうとすると極端に苛立って言う事
聞かないから大逃げになつたらしいぞ

＜017

師匠と違って息子は気性難なのか

＜018

普段は大人しいと聞いたぞ

負けん気が強すぎるのが理由だと言っていたな

あとツインターボも結構気性難というか癖が強い性格だったらしいぞ

▽019

それにしても皐月賞までに9戦9勝とか走らせすぎだろ

普通の馬なら絶対折れてる

▽020

イクノ姉さんの血だねえ

61戦走り抜いた馬なんてそうそう居ないぞ

▽021

ついた名前が鋼鉄の女だもんな

▽022

イクノ姉さんには現役時代なんど裏切られたか・・・

▽023

人気無い時に限って勝つからな

▽024

それにしても何でインパクトターボってこんなに成績がいいんだ？

▽025

ススズと同じ理由だな

▽026

どういうこっちゃ？

▽027

ススズは大逃げで早いってイメージがあるけど足の速さ自体はそれほどでもない

ただ中距離の長さをマイルの速度で走り抜けられる息の長さがあつたから大逃げで強かつたんだよ

▽028

仮にパクターの最高速度を8、ボリクリの最高速度を10とした場合

スタートから中盤を6で、ラストを8で走り切れるのがパクター

スタートから中盤を5で、ラストで10を出せるのがボリクリ
ボリクリの場合10出せるけど長続きしない、パクターは8までし
か出せないけど殆ど落とさずにゴールまで走れる

この違いだな

∨029

なるほど、つまりターボはスタミナがいいって事か

∨030

長距離になるともたないからスタミナが、というよりは速度を落と
さずに走れる足ってわけだな

∨031

逆を言うと最高速度が低いからラストで抜かれると厳しいんだよ

な

∨032

ギムレットやボリクリの末脚は強力だからな

∨033

じゃあもしパクターの子供が最高速度がいい馬だったら・・・

∨034

そこまで簡単にはいかないが仮にいたとしたらまさに最強の馬だ

な

∨035

俺ちよつとパクターの子供予約してくる!

∨036

個人馬主になるには年収1700万いるぞ

∨037

0一つまかりませんか?

∨038

馬の代金にもならんぞ

∨039

オワタ

SIDE：インパクトターボ

気温が下がった事で体調も戻り、順調なタイムも出せたので、心配

なしに天皇賞秋に参戦が決まった。

「ようやくお前に乗れるな相棒」

すまなかつたな相棒。

また元気に逃げるからよろしくな！

こうして天皇賞秋を迎えた。

「さあ、今年もやってまいりました天皇賞秋。歴戦の馬たちが争い出すこのレース。やはり注目はこの2頭。前年度覇者シンボリクリスエス。18戦15勝、宝塚記念を見事に逃げ切ったインパクトターボ。得意距離の近いこの2頭はすでに多くの激闘を繰り広げております。多くの観客がどちらが勝つのか注目しております」

そんな実況の声を聞きながらパドックを回る。

「5枠10番、インパクトターボ。2番人気です。前走の宝塚記念を見事に逃げ切りました。9月に体調を崩していたとの事ですが見た感じ全く問題はなさそうです」

今日は2番人気か・・・

まあ期待されてないって事は無いし今日もがんばるぞ。

「6枠11番、アグネスデジタルです。芝、ダート問わずの優秀馬です」

おっと、どうやら隣はアグネスデジタルらしい。

変わった馬だが知らない仲ではないし挨拶はしておこう。

「今日も負けないぜ。アグネスデジタル」

「デュフフ！拙者でゴザルかな!？」

あれ？こいつこんなキャラだっけ？

「おやおやこれはターボ氏ではゴザらんか！今日もよろしく頼むでゴザル！」

「お、おう・・・」

前回の陰鬱としたアグネスデジタルとは全然違う様子に俺はただただドン引くばかりだった。

「それでは拙者は急用を思いついたのでこれで！」

そう言って去っていくアグネスデジタル。

「・・・馬にも解離性多重人格とか躁鬱病ってあるんだな」

どちらなのかは分からないがあまりの変貌っぷりに思わずそう関心してしまった。

「8枠18番、シンボリクリスエス。1番人気です。去年の天皇賞秋を制した強者。二連覇なるでしょうか」

おっと、シンボリクリスエスがこちらにやってきたようだ。

「やあ、宝塚記念は負けちゃったけど天皇賞は僕が貰うよ。二連覇できたらきつとすごい褒めてもらえるからね」

「ならそれを阻止してやるさ」

俺たちは火花を飛ばした後、騎手の元へ移動する。

さあ相棒、レースの時間だ！

SIDE：実況

「さあ第128回天皇賞秋が間もなく始まります。スターターが旗を振り、ファンファーレが鳴り響きます。各馬が次々とゲートインしていきます。体制完了。…スタートしました！今日もインパクトターボが先頭を取りました。ローエングリンがその後ろ2馬身。ゴーステデイが押して押してローエングリンを抜いてインパクトターボに並ぼうとしますがローエングリンも譲りません。インパクトターボ後ろの2頭を引き離そうとさらに押します。向こう正面に入りました。大きく離れてトーセندانデイがぽつんと一人。そこからさらに離れてカンファースト。少し離れてエイシンプレストン、テンザンセイザなどがこの位置。その外にシンボリクリスエスが追走しています。中団にはアグネスデジタルもいます。最後尾はツルマルボーイ。さあ第3コーナーに向かいます！先頭はインパクトターボ！譲りません！その後ろローエングリンとゴーステデイが追いかけている！早くも中間1000メートルを通過！タイムは56.7秒とこれは早い！間が大きく空きました！トーセندانデイ。その後ろ3馬身にエイシンプレストン、テンザンセイザ、トーハウシデン！その外を回りまして差を詰めてくるシンボリクリスエス！後は内をついてサンライズペガサスです！アグネスデジタルはまだ中団で足を溜めています！最後方はまだツルマルボーイです！さあ第4コーナーから直線コースへ！逃げる逃げるインパクトターボ！リードは

6馬身と開いている！ローエン格林懸命に追いかける！ゴーステ
デイは一杯か！400メートルを切りましてようやくシンボリクリ
スエスがやってきました！もの凄い脚だ！アグネスデジタルも上
がってきた！しかしインパクトターボも先頭を譲りません！並んで
いる！アグネスデジタルが先頭にでたか!?!いやしかしシンボリクリ
スエスです！シンボリクリスエスが抜き返して1着でゴールイン！
2着にアグネスデジタル！インパクトターボ惜しくも3着です！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー！」

久しぶりのゲートから勢いよく飛び出す。

「んな！俺より先に行くだと！」

「悪いが譲らないぜ！」

同じ逃げ馬らしい馬を追い抜いて先頭を走る。

「待ちやがれこの野郎！」

もう1頭やや出遅れ気味だったが強引についてきた。

「ついてこられるかな！」

俺はさらに足を速めて後ろの2頭を引き離す。

いつもよりさらにハイペースになったが問題は無い。

「いいぞ相棒！このまま逃げ切るぞ！」

相棒もしつかりと押してサポートをしてくれる。

「くっそー！このままじゃあー！」

先頭を取り損ねた逃げ馬に勝ち目は無い！

譲ってなるものか！

俺はそのままのペースで中間を過ぎ、コーナーを曲がっていく。

「気張れよ相棒！シンボリクリスエスが必ずくるぞ！」

分かっているさ相棒！

直線に入ったところで後ろの2頭は限界が来たらしく落ちていく。

だが同時に強いプレッシャーがやってきた。

「どけどけ〜！シンボリクリスエスのお通りだよ〜！」

「来たか！今日も譲らないぞ！」

後方から一気に上がってくるシンボリクリスエス。

だが俺だって先頭を譲るわけにはいかない！

「負けるかー！」

「なにおー！」

必死に競り合う俺たち。

その時だった。

「うひょー！やっぱライバル同士の鎬を削る戦いは前から見るに限りますぞ！」

「なあーいつの間になー！」

なんとアグネスデジタルがいつの間にか俺たちを抜いて前にいた。

「チャンス！」

「しまった！」

アグネスデジタルに気を取られたせいで集中力が欠けた俺はシンボリクリスエスに抜かれてしまった。

そして末脚が弱い俺ではシンボリクリスエスはおろかアグネスデジタルすら抜けずに3着になってしまった。

や、やっちゃまっただー！

おらとんでもねえことやっちゃまっただ！

すまない相棒！

俺より相棒の方がまずいじゃないか！

今更乗り替わりとか勘弁してほしいぞ！

やってしまった事に慌てたり落ち込む俺を相棒は首筋を撫でて気遣ってくれる。

その気遣いが猶更苦しかった。

SIDE：若井騎手

「すみません室さん、山田さん。自分のミスです」

これで降ろされるかもしれない。

そんな思いが頭の中を渦巻く。

「さすがはアグネスデジタルとシンボリクリスエス、と言ったところだな。末脚勝負になるとターボはどうしても不利だ」

山田さんの言葉通りターボの末脚はあまり強くない。

そして今日はアグネスデジタルに抜かれた時に明らかにターボの

集中が乱れた。

あの時、俺がアグネスデジタルに気が付いていたら結果は違っていたかもしれない。

「それで若井君、君は降りるかね？それとも続けるかね？」

「まだ乗せてもらってるんですか!?!」

室さんの言葉に俺は驚いた。

「私は馬の良し悪しも騎手の事も分からない。だが君とターボの信頼関係は良く分かる。きつと今更載せ替えてもターボが納得しないだろう。それにまだ3着だ。次は勝つ。その気持ちで努力しなさい」

「はい！」

そうだ！次は相棒と勝つんだ！

インパクトターボ 牡4歳 19戦15勝 主な勝鞍：02年G I

皐月賞 02年G I ジャパンカップ 03年G I 宝塚記念 02年

G I 日本ダービー2着 02年G I 菊花賞2着 02年G I 有馬記

念2着

第2シーズン第10話 いざ！夏季強化合宿！（ウマ娘）

薄氷の勝利だった日本ダービー。
でも勝利には違いはない。

そんな私の元には沢山の取材などが押し寄せてきた。

流石にメディアをあまり蔑ろにはできないので学園側が用意した
会場での取材を受けた。

「インパクトターボさん、無敗の2冠おめでとうございます」

「ありがとうございます。まさかあのメンバーに勝てるとは思って
ませんでした」

事前に山田トレーナーやたづなさんからのインタビュウに対して
の受け答えの講習を受けたので緊張しつつもよどみなく答える。

「次に目指すのはやはり菊花賞でしょうか？」

「はい、そのつもりでいます。私の適性では厳しい戦いとなりますが
トレーナーの指導のもと、距離延長トレーニングを重点的に行い、菊
花賞までに走り切れるだけの体を作りたいと思います」

「宝塚記念には出場なさらないのですか？」

「今の私では菊花賞以外の目標に手を出す余裕がありません。大変失
礼な事ではありますが宝塚記念は辞退させていただきたいと思いま
す」

他にも幾つかの質問がなされたが想定された範囲の質問であった
為に私は何とか取材を終える事ができた。

後になって事前に学園側から強い注意と悪質なインタビュアーの
排除が行われていた事を知って私は改めて学園に感謝した。

SIDE：キタサンブラック&サトノダイヤモンド

「ダービーは惜しかったな。インパクトターボとお前たちの差は1バ
身もなかった。あの中の誰が勝っていてもおかしくはないレース
だった」

沖野トレーナーはそう言うけど負けは負けだ。

ターちゃんは強い。

それが私たちの今の思いだ。

「だが俺の見込みではインパクトターボは菊花賞では勝てない。彼女の適性距離では菊花賞は長すぎるだろう。もちろんそれをそのままにすると到底思えないが最初から適性のあるお前たちと訓練で適性を得たインパクトターボでは土台が違う。次は勝つ。そのつもりでトレーニングに励め。俺もお前達をより強化するトレーニングを考える」

「はい！」

私たちは返事をする。先輩たちの居るトレーニングコースへと向かった。

SIDE：サムシングブルー

「いい？ルーちゃん。皐月賞、ダービーを経て分かったと思うけど貴女の適性はステイヤー。距離が長ければ長いほど強いわ。クラシックレース最長距離の3000メートルは貴女が一番本領を発揮できる距離よ」

的場トレーナーさんの言葉に私は頷く。

皐月賞よりダービーの方がターちゃんに近づけた。

それはトレーナーさんの言葉通り距離が長ければ長いほど私が得意という証拠だった。

「ルーちゃん、貴女なら大丈夫。自信を持って。菊花賞は貴女がセンターよ」

「はい！」

私はその言葉を現実にする為にトレーニングに励んだ。

SIDE：インパクトターボ

「ターボ、菊花賞は前にも言った通りお前の適性距離からは外れる。しかしすでにメディアに言ってしまった以上後戻りはもうできない」
「分かっています。トレーニングに手を抜くつもりはありませんしレースも全力で挑みます。でも私は勝てないでしょう。でも・・・勝ち逃げだけはしたくないんです・・・友達だからこそ・・・」

その言葉に山田トレーナーは真剣な表情のまま頷いた。

「分かった。俺ができうる限りの事はしてやる。スカイ、今日からターボと併走を頼む。長距離の逃げのコツを教えてやってくれ」

「はいはい」

「先輩、よろしくお願いします」

私はスカイ先輩に頭を下げた。

「いいねえ青春だねえ」

スカイ先輩は楽しそうに笑っていた。

そして7月になり、中央トレセン学園名物、夏季強化合宿の時期がやってきた。

「「海だ〜!」」

バスから勢いよく飛び降りた私たちは砂浜を走ると海に向かって叫んだ。

「お前たち〜!遊ぶのは宿に行つてからにしろ〜!」

沖野トレーナーがそう叫ぶので私たちは引率のトレーナー達のもとに戻る。

「楽しみにしていたのは分かるが他の生徒やトレーナーも居るんだからあまり勝手な行動はするな」

「「すいませんでした」」

他のトレーナーさん達も苦笑いしているのは毎年の誰かの恒例なのだろう。

その後中央トレセン学園が貸切っている宿に移動して荷物を下ろした私たちはそれぞれのトレーナーの部屋に集まってミーティングを開始した。

SIDE：キタサンブラック&サトノダイヤモンド

「各種トレーニングのスケジュールはこの冊子の通りにやってくれ。ノルマを達成したら自主練を続けるか遊ぶかはお前たちに任せる。ただしいつもよりトレーニングはハードだし基本的に毎日朝からトレーニング

になるからあまり疲れすぎないように注意しろ」

「はい!」

私たちはトレーニングメニューが書かれた冊子をトレーナーから

受け取った。

「テイオー、マックイーン。二人を良く見てやってくれ」

「オツケーだよ」

「はい、お任せください」

テイオーさんとマックイーンさんが頷いた。

二人の期待に応える為にも頑張らないと。

SIDE：サムシングブルー

「ルーちゃん、今日は貴女にサプライズよ」

「なんですか？」

トレーナーさんがそう言って誰かを部屋に招き入れた。

「あ、ライスお姉さま！」

「ルーちゃん、ライスと一緒にトレーニング頑張ろうね」

なんとライスお姉さまが忙しい合間を縫ってトレーニングを手伝ってくれるのだという。

「ライスとルーちゃんは作戦が似てるからいい練習になるわよ」

「ありがとうトレーナーさん！ライスお姉さま！」

菊花賞に向けてがんばるぞ！

SIDE：インパクトターボ

「いいかターボ、スカイとの練習で長距離の逃げ方のコツはつかんだと思う。この合宿中はスタミナ強化と距離延長を中心に言うからな。多少は友人と遊べる時間は確保するがあまりハメを外さないようにな」

「はい、よろしくお願いしますね山田トレーナー」

合宿前の練習でスカイ先輩から息の入れ方を教えてもらった。

長距離の場合ただ早く走るだけでなく、早く走るフリをしてこっそりと足を残すのが重要だそうだ。

上手にできるかは分からないが知らないのと知っているのでは大違いだ。

「よし、早速近くの山でトレーニングするぞ」

「はい」

この夏の特訓でどう変わるのか。

負けたくはない。

出きる事はやり切るんだ。

こうして合宿は忙しく過ぎていく。

勿論トレーニング漬けという訳ではないので遊ぶ時間もある。

早めにトレーニングが終わった時などは海で泳いで遊んだりビーチバレーなんかをやったりした。

夜に近くの神社の夏祭りに出かけたり、コンビニで買った花火をやったりもした。

夏祭りの様子・・・

「あんまり遅くまでは禁止ってトレーナーさん達にも言われてるし、最初は何をしようか？」

「私これに出たいなあ」

キタちゃんが取り出したチラシにはカラオケ大会の参加者募集と書かれていた。

ウマ娘も大歓迎！と書いてある辺り毎年何人かは参加しているのだろう。

「門限は9時までですしカラオケ大会は7時からですから出られますね。やっぱりお父さんの演歌？」

キタちゃんは恥ずかしそうに頭をかいた。

「わ、私は応援に回るね」

ライブは何とか慣れてきたがまだまだ人前でパフォーマンスするのは苦手なルーちゃんは参加はしないようだ。

「キタちゃんは受付を済ませてきなよ。そうしたら屋台を回って色々買おうよ」

「うんー！」

キタちゃんは喜んでカラオケ大会の受付に行った。

そんな様子を笑顔で私たちは見送るとどんな屋台を回るか相談を始めた。

その中で全員がやはり綿菓子や焼きそばと言った食べ物系なのはウマ娘だから仕方がないだろう。

キタちゃんが戻って来たので私たちは相談した屋台を回る事にし

た。

「オジサン！ニンジン焼きそば4個ウマ娘盛で！」

「あいよーニンジン焼きそば4個ウマ娘盛ね！」

威勢のいいオジサンがこんがり焼けたニンジンを一本丸ごと上に乗せた焼きそばを4個手渡してくれる。

並盛の4倍はあるウマ娘盛だがウマ娘からすれば大した量ではない。

コンビニの大き目の弁当サイズのパックにみっちり詰め込められた焼きそばを受け取るとお金を渡した。

「まいどありー！」

威勢のいいオジサンの声に送られて私たちは次の屋台を目指す。

綿菓子、かき氷などいくつかの屋台をめぐって品物を購入した後キタちゃんが参加するカラオケ大会の会場へと向かった。

「~~~~~（コブシの効いた熱唱）」

大体がライブ曲や流行りの曲を歌う事が多いウマ娘がガツチガチの演歌を歌う様子に周りは最初騒然としたが、キタちゃんの熱唱にお爺ちゃんお婆ちゃん世代ががつつり心を掴まれて大盛り上がりである。

私たちもキタちゃんの熱唱を聞きながら購入した食べ物を食べた。

「優勝は出来なかったけど特別賞貰ったよ」

優勝したのは圧倒的歌唱力とパフォーマンスで会場を沸かせたファル子先輩だった。

さすがウマドルを自称するだけあって3年連続での優勝で今年見事殿堂入りを果たしたとの事だった。

キタちゃんは特別賞のニンジンクッションを抱きしめて嬉しそうにしている。

その後色々遊び系の屋台を回る。

私は輪投げで、ルーちゃんは射撃で、サトちゃんはくじ引きでそれぞれ景品をゲットできた。

私たちは手に入れた景品を手にながら宿へと帰っていった。

夜の花火の様子・・・

「他の皆も買ってたからこれ一個しか残ってなかった」

夕食後に近くのコンビニに買いに行ったが考える事は皆同じなのか花火セットはもう一個しか残っていなかった。

「今日で合宿もおしまいですからね」

長かった合宿も今日で終わる。

濃厚で、大変で、充実した強化合宿。

過ごしてみたらあつという間に終わってしまった。

「宿からバケツ借りてきました」

ルーちゃんが水を入れたバケツを持ってきてくれた。

宿の方も毎年の事なので借りられるのも慣れているのだろう。

私たちは手早く準備を終えると花火を手にもって火をつけた。

様々な色の花火が暗くなった海岸や私たちを照らす。

「楽しかったね」

「うん、来年が待ち遠しいね」

手持ち花火の時間は短い。

私たちは次々と花火を変えては火をつけていく。

「菊花賞・・・負けませんから」

「私もです」

最後の線香花火が終わると私たちはゴミを片付けて宿へと帰る。

もうすぐ菊花賞がやってくる。

第2シーズン第11話 ジャパンカップ大逃走！ (馬)

インパクトターボ絶不調!?

そんな見出しの記事が競馬新聞に書かれている。

天皇賞秋で負けてしまった俺に対してメディアの無責任な記事を見た山田調教師の手が僅かに震えている。

「ちっ！今まで散々持ち上げておいて負けたらあっさり手のひら返しか！」

必ず勝ってきた訳ではないがそれでもいくつものレースを勝利してきた俺はメディアにとつていい客寄せだったのだろう。

本人にとつて少し調子が悪かったという話をまるで不治の病の様に書き上げるその脚色技術だけはすごい。

決して誇れる技術ではないが……。

「いいかターボ！お前はまだまだいけるって事を皆に見せてやれ！」
勿論だとも！

SIDE：掲示板

▽672

秋天は惜しかったな

▽673

あそこでまさかアグデジ来るとは思わなかったよな

▽674

悲報：インパクトターボ連帯記録途絶える

▽675

後1勝で1位タイだったのにな

▽676

シンザンの壁が厚すぎるんよ

▽677

そもそも勝つ馬はあんまりレースに出さないしなあ

▽678

そう考えるとビワハヤヒデってすごい馬だったんだな

▽ 679

最後の天皇賞以外必ず連帯に入ってるからな

▽ 680

ターボの場合デビューからの連戦が異常だもんな

▽ 681

今でもかなりの頻度で出走してるもんな

▽ 682

無事之名馬とは言うけどターボの頑丈さはあの走りではありえな
いよね

▽ 683

普通ならどっかで怪我してもおかしくないよね

▽ 684

その前に普通はガレて勝負にならなくなる

▽ 685

ターボは全然ガレないもんな

▽ 686

ジャパンカップ連覇してくれるかなあ

▽ 687

ポリクリ以外ライバルになる馬がないからポリクリがこなけ
りやいける

▽ 688

海外馬は正直良くわからんしな

SIDE：若井騎手

相棒に関してのメディアの憶測記事がいくつも目に入る。

その中には騎手である俺について書かれたものも少なくはない。

その内容は大体が名馬に跨る駄目騎手という内容だ。

碌な戦績の無かった俺がGIを勝っているのは相棒のお陰で寧ろ
足手まといである。

名騎手が乗ればもつと勝っていただろう。

そんな事は俺自身が一番思っている。

ベテラン騎手は沢山いるし武さんの様に誰からも知られるほどの名騎手だっている。

降りたくない。

相棒を一番知っているのは俺なんだ。

先輩からも意地でもお前から降りるなんて言うなと言われている。

騎手が一度折れてしまったら、二度と専属なんて貰えないと思えと言われている。

そうでなくても降りるつもりはない。

次のチャンスは必ずモノにするんだ！

相棒が勝つまでしばらく断酒する。

俺はそう誓った。

S I D E：インパクトターボ

いつもより真剣に調教を受ける。

よりスピードを、よりスタミナを求めてトレーニングを積む。

末脚に期待はできない。

元々弱いモノを鍛えるより長所を生かす為にスタミナとスピードを鍛え続ける。

最終で追い抜かれてしまわないように圧倒的なリードを作れるように。

相棒は俺を良く分かってくれている。

俺が走りやすい様に、俺が余計な意識をしなくていいように誘導してくれる。

アグネスデジタルに気を取られたのは俺の油断が招いた結果だ。

追い付かれない速度を手に入れるんだ！

こうして二度目のジャパンカップを迎えた。

「第23回ジャパンカップ！先日からの悪天候の影響を受けまして馬場は重馬場、コンディションの良くないレースとなりました。今年も9頭の海外馬が集いました東京競馬場。去年はインパクトターボの独壇場でした。連覇なるか期待がかかります」

実況の声に多くの観客の歓声。

あの天皇賞秋の結果を受けてもなお2番人気の俺への期待。

負けるわけにはいかない。

そんな思いを胸にパドックを回る。

「やあ、この間はどうも」

「シンボリクリスエスか。この間はやられたが今日は負けるわけにはいかない。連覇がかかっているんでね」

「3枠5番シンボリクリスエス。1番人気です。前走の天皇賞秋ではインパクトターボを破り見事2連覇を達成しております」

今日もシンボリクリスエスと静かに睨みあう。

「6枠12番インパクトターボ。2番人気です。天皇賞秋では3着と連続連帯記録が途絶えましたがそれでもまだまだ人気の1頭。ジャパンカップ連覇が期待されています」

「あくんらまたあんた達なのね」

ん？このオカマ声は……。

「ヤンキーオカマか」

「サラファンよ！オカマなのはワタシのせいじゃないわよ！」

まあそうなんだが……。

「前はあんたの作戦にしてやられたけど今度はそうはいかないわよん」

「はん！オカマに負けてたまるか！」

「オカマオカマうるさいわね！覚えてらっしゃい！」

苛立ちながらヤンキーオカマは去っていった。

「やや落ち着かない様子が見られます8枠16番サラファン。本番までに落ち着いてくれると良いのですが」

大丈夫、今日はやれる。

いくぞ相棒！レースの時間だ！

SIDE：実況

「第23回ジャパンカップ。前日からの雨の影響で非常に馬場が悪くなっております。この重たい馬場がどういった影響を及ぼすかといったところであります。今日の出走馬を振り返ってみましょう。1枠1番トップダンスシチー。京都大賞典を勝利しております。1枠2番デノン。どういった走りを見せてくれるでしょうか。2枠3

番サクラプレジデント。鞍上は武豊騎手。2枠4番はフォールズオ
ブオマー。日本の馬場に適応できるでしょうか。3枠5番は1番人
気、シンボリクリスエス。天皇賞秋を連覇したまさに強豪馬。3枠6
番アナマリー。エリザベス女王杯にも参戦した牝馬です。4枠7番
ツルマルボーイ。鞍上は横山騎手。4枠8番ネオユニヴァース。今
年のダービー馬です。5枠9番アンジュガブリエル。今年のフォワ
賞優勝馬です。5枠10番ザッツプレンティ。今年の菊花賞を制し
たステイヤーです。6枠11番アクティブバイオ。アルゼンチン共
和国杯を勝利しております。6枠12番インパクトターボ。2番人
気です。去年のジャパンカップを見事に逃げ切った日本が誇る逃亡
屋。果たして連覇なるか。7枠13番ジョハー。アメリカのブリー
ダーズカップを制しております。7枠14番イズリントン。イギリ
ス、ヨークシャーオークスを制した名牝です。7枠15番スルーヴァ
レイ。アメリカからの参戦です。8枠16番サラファン。去年に引
き続きジャパンカップに挑戦です。8枠17番タイガーテイル。エ
リザベス女王杯に引き続き参戦です。8枠18番サンライズペガサ
ス。天皇賞秋の逆襲はなるか。以上18頭フルゲートでのレースと
なります。ゲートの準備が終わりスターターが旗を振りまし
た。ファンファーレが鳴り響きます。さあゲートインが無事完了しまし
た。体制完了。・・・スタートしました。やはり飛び出しました1
頭・・・いやーもう1頭います！インパクトターボとタップダンスシ
チーです！なんとタップダンスシチーがインパクトターボに真っ向
勝負を挑みました！先頭はインパクトターボですがその横にタップ
ダンスシチーがいます！その後ろには大きく離れてザッツプレ
ンティ！また少し離れてアクティブアイオ！フォールズオブオマー！
アンジュガブリエルと続いております！その後ろにイズリントン、そ
してジョハー！そして中団固まってシンボリクリスエス、サラファン
がその後ろでマークしております！アナマリーがそれを追走！3
コーナーへ向かいます！ネオユニヴァースはやや後ろの集団を走っ
ております！後ろの方にはサンライズペガサス、ツルマルボーイ、サ
クラプレジデントが足を溜めています！果たして間に合いますで

しょうか！さあ各馬第3コーナーへ向かいますが先頭2頭が飛ばしまくっておりますその差はなんと13馬身！2番手にザツツプレんティがつけていますが4番手にアクティブバイオ！7枠の2頭の外を回ってイズリントンが上がっていきます！スルーヴァレイがいまして押していますフオールズオブオマー！3、4コーナー中間です！アンジュガブリエルとシンボリクリスエスも外から上がっていきませんがまだ中団です！さあ先頭インパクトターボとタツプダンスシチーまったく譲らないまま直線に入ります！譲りません！どちらも先頭を譲りません！後ろとの差は7馬身ほどまで縮まりました！しかしどちらにもまだ足色は衰えていません！三番手はアクティブバイオ！デノンデノン！シンボリクリスエスはまだ中団にいます！先頭はインパクトターボとタツプダンスシチー並んでいます！激しいにらみ合いでまだ先頭争いを続けています！リードはまだ4馬身から5馬身！アクティブバイオ疲れたか追い上げが悪い！ネオユニヴァースか！ザツツプレんティか！シンボリクリスエスちよつと伸びが悪い！残り200メートルを切りました！先頭はインパクトターボとタツプダンスシチー！リードは3馬身！必死に追い上げるザツツプレんティ！シンボリクリスエス漸く上がってきましたがこれは厳しい！先頭はインパクトターボとタツプダンスシチー！インパクトターボか！タツプダンスシチーか！どっちだ！どっちだ！並んだままゴールイン！勝ったのはインパクトターボかタツプダンスシチーか！3番には必死に上がってきましたシンボリクリスエスが入りました。しかし何とも恐ろしい大逃走を見せたインパクトターボとタツプダンスシチー。果たして勝ったのはどちらか。写真判定を待ちましょう」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー」

今日も完ペきなスタートを切れた。

そのまま勢いに乗って後ろを引き離し……。

「おりゃあああああああ！」

誰だコイツ!?

なんと隣にもう1頭いるではないか。

「僕だつてG I欲しいんだ！いつも勝ってるじゃないか！1個ぐらいくれよ！」

「嫌なこつた！連覇が掛かってるんだ！それに1個だつて多く勝ちたいんだ！譲るもんか！」

「なんだとケチ！」

「なんだと負け馬！」

「やるか！」

「なめるなよ！」

売られた喧嘩だ！

買わないなら男じゃない！

「相棒！負けるなよ！」

「タツプ！男をみせてみる！」

鞍上の騎手たちも必死に追う。

「負けるかあ！」

「邪魔するなよお！」

後ろの事など一切無視して隣の馬、タツプダンスシチーと競り合い続ける。

「どけよお！」

「嫌だねえ！」

他の馬など知ったことか！

今は隣のこいつしか眼中にない！

今どこを走っているのかすら分からない！

だが相棒がきつちりと導いてくれる！

「ぬおおおおおおお！」

「うりやあああああ！」

必死に前を目指して走り続ける！

譲るわけがない！

譲りたくない！

「だあああああああ！」

「がああああああ！」

互いの全身全霊を出し切って最後の直線走り切った。
どっちが勝ったのか、自分たちですら分からなかった。

SIDE：実況

「さあとても長い審議が続いています。すでにレース終了から15分が経過しています。会場が騒めております。あ、今審議が終わったようです！結果はなんと同着！1着が2頭！日本中央競馬会史上初のGI同着優勝です！ありえないと言われていた事が起きました！写真でも、映像でも差を確認できないとの事です！なんとという決着！史上初！ジャパンカップ同着優勝です！」

SIDE：インパクトターボ

「同・・・着・・・？」

「勝て・・・た・・・？ない・・・？」

中々理解が及ばずにただただ茫然とする。

相棒達も予想外の結果に困惑しているようだ。

その後、それぞれに優勝の表彰と撮影が行われるなどなんだか異様な雰囲気のままジャパンカップは終わりを迎えた。

うくん、なんかスッキリしないなあ・・・。

インパクトターボ 牡4歳 20戦16勝 主な勝鞍：02年GI

皐月賞 02年GIジャパンカップ 03年GI宝塚記念 03年

GIジャパンカップ 同着1位 02年GI日本ダービー2着 0

2年GI菊花賞2着 02年GI有馬記念2着

第2シーズン第11話 菊花賞大闘争！（ウマ娘）

夏季強化合宿が終わり、トレセン学園に戻って日常に戻ると久々の授業に戸惑う生徒も多い。

特に濃密な合宿の後でレースも近い生徒はなおさら授業とトレーニングの両立で苦勞しているものも多い。

私も菊花賞に向けての猛トレーニングの影響で授業に中々身が入らない。

朝の自主トレも積極的に行っているのですがどうしても疲労で眠気が酷い。

真面目なサトちゃんやルーちゃんは眠そうにしつつもちちゃんと授業を受けているが授業はやや不真面目なキタちゃんは完全に寝ている。

私も何とか起きようとはするのだがついつい寝てしまう事もあった。

最もその辺りは先生も慣れたものなのか眠ってしまったと思うとすぐに起されたり質問を当てられたりなどで生徒が寝たままにはならないようにしていた。

ただ偶に寝ぼけた生徒が妙な発言をして笑われたりなどもあったが・・・。

キタちゃん、お父ちゃんっ娘だねえ。

「うう・・・穴があつたら入りたい・・・」

先生をお父さんと呼んでしまったキタちゃんは顔を真っ赤にしたまま昼食を食べている。

「今日は一段と酷い寝ぼけっぷりだったね」

キタちゃんの授業中の居眠りは決して少ない事ではなかったが成績は悪くない事から先生も多少のお目こぼしはしてくれているが流石に連日の居眠りは見逃せず、揺さぶり起こした所のお父さん発言に教室は笑い声に包まれた。

私も眠気が吹き飛んで笑ってしまった。

「キタちゃんはもう少し真面目に授業を受けないと反省文になっちゃう

いますよ」

「生活指導の先生はとても厳しいって話ですから注意してくださいね」

「うう・・・がんばる・・・」

キタちゃんが元に戻るにはもう少しだけ時間がかかった。

SIDE：山田トレーナー

「それでスカイ、ターボは菊花賞は走り切れそうか？」

「う〜ん厳しいね。息の入れ方やトリックのやりかたなんかは教えたけど、実際のレースがどうなるか、だね〜」

一見すると楽天家の怠け者にはしか見えないセイウンスカイだが、その実は努力する姿を見せたり必死になるのを恥ずかしいと思っただけで非常に努力家だ。

その為にその評価は自他共にかなりシビアに見る。

だから俺はスカイの評価をかなり信頼している。

「そう・・・か・・・」

「ただ有《font:ul40》馬《font》記念なら十分勝機はあるよ。ターちゃんの凄い所はスタミナ切れの直前まで殆ど速度が落ちない事なんだ。普通はスタミナが減ってくるとそれに合わせて速度も落ちてくる。でもターちゃんは速度が落ちた所が限界距離なんだよね。あれだけの全力疾走を限界ギリギリまで続けられるのは貴重な才能だね〜。私の教えた走りどスタミナ強化で2700メートルまでだったら走り切れると思うよ」

つまり3000メートルまではもたないという事か・・・。

スカイの評価でそれならおそらく上手く息を入れる事が出来ればギリギリ3000メートルを走り切れるだろう。

しかしそれは≡勝てるにはならない。

明らかにステイヤーとしての資質が強いサムシングブルー、キタサンブラック、サトノダイヤモンド。

この3人の友人がターボにとって分厚すぎる壁となる。

(・・・たった一度の敗北で潰れてくれるなよ。ターボ)

たった一度の敗北が原因で極度のスランプに陥り引退してしまう

ウマ娘もいる。

アイネスフウジンから敗北に強い恐怖を感じていたと聞いている。無敗という称号がターボにとって重荷にならないといいが……。

SIDE：沖野トレーナー

「それにしても思い切った作戦を考えたねトレーナー」

「……俺があいつの才能を見誤ったのが原因だ。すべての責任は俺にある」

テイオーの言葉に俺は自分の見立てが間違っていた事を思い出して渋い表情をする。

キタサンブラックは俺の見立てでは先行が得意だと思っていた。

しかし実際は先行も得意であっただけで実際は逃げの方がさらに得意だった。

スズカの事があつたから俺は少し臆病になっていたようだ。

勿論スズカの指導に手を抜いたりはしていない。

だがスズカも実感している様に以前ほどの走りは出来ていない。

それでも強いのだがやはり以前に見惚れたスズカの走りからは程遠い。

ウマ娘達の自主性を優先させる俺の育成方針はどうしてもウマ娘にかかる負担が大きい。

さぼり癖のあるゴルシはまだいいが他の娘達は真面目過ぎるゆえに根を詰めすぎてしまい体を痛めてしまう。

関節が柔らかいが故に骨折しやすいテイオー。

ステイヤーとしての強い資質と素早い走りが関節に負担をかけるマックイーン。

速すぎた走りが己の体を破壊したスズカ。

立て続けに起きた事態に俺自身が指導方針や見立てを守りに入らせてしまったのかもしれない。

「大丈夫ですわトレーナーさん。貴方の指導は間違っておりませんわ」

「マックイーン。来てたのか。結果は？」

「ええ、定期健診は良好でしたわ。再発の様子は無いそうですわ」

病院での定期健診を終えて戻ってきたマックイーンがそう答える。「私たちも、あの娘たちも貴方の指導で大きく開花しています。ですから自信を持つてください」

「・・・すまない」

俺はマックイーンにそう謝ると二人のトレーニングをもう一度考える事にした。

SIDE：的場トレーナー

「お姉さま、ルーちゃん勝てるかな？」

「大丈夫よライス。あの子は強いわ」

夏の合宿以降やはり気になるのかライスシャワーが何度も私の元を訪ねてくる。

私が育て上げた現状唯一のGIウマ娘。

未熟な私ではドリームトロフィーリーグに移行したウマ娘を指導できない為に今はミホノブルボンのチームに移籍している。

今でもこうして関係は続いており、私にルーちゃんを紹介してくれた。

夏の合宿ではルーちゃんのトレーニングを手伝ってもらえたのはとても大きい。

ライスもルーちゃんも自分でペースを作るのを苦手としている。

一度試しに先頭を走らせてみた事もあるがペースが分からずにスタミナが余ったままになってしまった。

それでも悪いタイムではなかったがやはり本領発揮できるのは先行か差しだろう。

追い込みも悪くはないが仕掛け処がやはり難しい様で追い付けない事もあった。

そこでライスがあ的那天賞春で使った作戦、『幻のブルボンとマックイーンを追いかける』をルーちゃんに伝授してくれた。

自分の理想とするライバルの姿を心に焼き付けてペースを作る。

この作戦のお陰でルーちゃんはさらに強くなった。

後は菊花賞で勝つだけだ。

お友達には悪いが菊花賞はルーちゃんが取る。

私はそう信じている。

SIDE：スレッジハンマー

「はあ！はあ！はあ！クソ！」

「スレッジハンマー！いい加減にしろ！また怪我をするぞ！」

トレーナーが怒鳴るが俺は無視する。

日本ダービーでの敗北で焦った俺は練習をミスして怪我をした。

あまり大した怪我では無かった為に復帰にそれほど時間は掛からなかったがそれでも夏季強化合宿に遅れて参加する事になった。

その分のロスを取り戻すために俺は走り続ける。

俺が負けたままなんて許されない。

一族で肩身の狭い思いをしているお袋の為にも……！

俺は滴る汗を拭うと練習を再開した。

やがて私達は菊花賞を迎えた。

「さあ、クラシックレース最終戦菊花賞がやってきました。初めて3000メートルという長距離を走りますウマ娘達。一番の注目は現在無敗の2冠ウマ娘、インパクトターボでしょう。インタビューでは長距離は厳しいと答えていましたが果たしてどうなるのか。ライブルとなるウマ娘たちも実力はぞろいです」

実況の声と観客の歓声が響く京都競《font:ul40》馬《font》場に私たちはやってきた。

いつもの様にパドック披露を終えた私たちは地下道を通ってターフへと移動する。

「ついに菊花賞だね」

「クラシックレースも最後ですね」

「き、今日は負けませんか」

楽しそうにする3人と違い私は少し厳しい表情をしている。

適性距離が私一人だけが違い、難しいレースになる。

しかも無敗で2冠を達成した私に対しての注目は非常に強い。

その強いプレッシャーが私には降りかかってくる。

「ターちゃん」

「あ、ごめんね。何？」

自分の事で精一杯でみんなの話を聞いていなかった。

「色々言われるかもしれない。がっかりされるかもしれない。でもね、私たちはずっと友達で、ライバルだからね」

「そうですよ。負ける事は確かに辛いですが、でも皆と一緒に走れない方がもつと辛いです。マツクイーンさんも、テイオーさんもそう言っていました」

「キタちゃん・・・サトちゃん・・・」

そうだ、皆通ってきた道なんだ。

「わ、私のもつともつとターちゃんと勝負したいです」

「ルーちゃん・・・皆、ありがとう」

私達は手を重ねあった。

「一発気合を入れるよ！トレセー！」「ファイ！オー！」「」

トレセン学園でよく使われる掛け声が地下道に響いた。

「さあ、ターフにやってきました18人のウマ娘を改めて紹介しましょう。まず最初にやってきましたのは1枠1番バイトアルヒクマ。皐月賞、ダービーと参戦していますが苦戦しています。はたして長距離菊花賞は勝てるでしょうか。続いて4枠7番トコトコ。クラシックは初参戦です。ちよつと緊張気味の様ですが大丈夫でしょうか。8枠18番ソーラール。今日も太陽礼拝は欠かしません。7枠15番スレツジハンマー。僅差でダービー2着と悔しい思いをしています。菊花賞でリベンジなるか期待されます。次に8枠16番タンDEMシート。スレツジハンマーに怯えているのか少し表情が引きつっております。8枠17番ヤマノゴツデスが心配そうにタンDEMシートに寄り添います。1枠2番シユガービート。少し体調が悪そうですが大丈夫でしょうか。4枠8番オータムマウンテン。元氣いっぱい手を振っております。7枠14番イシムラシツプ。今日も神へのお祈りをしています。5枠9番サマーシー。笑顔が眩しいです。7枠13番ウィンタードリーム。サマーシーと一緒に笑顔で手を振っております。5枠10番スプリングフェスタ。ダービーよりさらに長い菊花賞で果たして走り切れるでしょうか。6枠11番スイーツラブ。ダイエツトには成功した模様です。6枠12番アシ

ダカグンソー。スタミナには自信ありとの事です。2枠4番キタサンブラック。皐月賞、ダービーと接戦を繰り広げています。2枠3番サトノダイヤモンド。菊花賞を手にするにはできるでしょうか。3枠6番サムシングブルー。皐月賞3着、ダービー3着、1着が欲しい処です。最後に3枠5番インパクトターボ。1番人気です。現在無敗の2冠を達成しております。長距離は厳しいと言っていました。がはたして無敗の3冠を達成できるでしょうか」

そんな実況の声と多くの声援を受けつつ私たちはレースの為にウォーミングアップを開始する。

さあ、レースの時間だ。

SIDE：実況

「さあ、ファンファーレも終わり次々とウマ娘たちがゲートに入っていきます。最後のウマ娘がゲートに収まりました。・・・スタートしました。まず最初に1人・・・いや！2人が飛び出しました！先頭争いはインパクトターボとキタサンブラックです！今までインパクトターボの後ろを走っていたキタサンブラックが今日はインパクトターボに真っ向勝負を挑みました！先頭争いを続ける2人の後ろ3バ身程にサムシングブルー！そこから大きく離れましてウインタードリームが4番手！その外にサマーシーとタンDEMシート！今日はやや前にいますサトノダイヤモンドがこの位置！その内にスレツジハンマー！最後尾は出遅れましたトコトコが懸命に追いかけている！一度目のスタンド前正面を走り抜けていきますウマ娘達！先頭はインパクトターボとキタサンブラックが激しく争っている！後方集団はオータムマウンテンとアシダカグンソー、タンDEMシートが展開をうかがっています！先頭はまだ2人が争っていますインパクトターボとキタサンブラック！互いに決して譲りません！早くも向こう正面に入ります！その後ろ3バ身をサムシングブルーが追走！大きく離れてウインタードリーム、サマーシー、タンDEMシートが集団を形成しています！サトノダイヤモンドが外に出て前を狙っています！スレツジハンマーは内側から隙間を狙っている！最後尾のトコトコはまだ追い付けない！さあまもなく二度目の坂を上がって第

3コーナーに入ります！サムシングブルーがジリジリと上がり始めました！サトノダイヤモンドも大外から上がっていきます！スレツジハンマー内側から上がろうとしますが苦しそうです！さあ最終コーナーを曲がって最後の直線！先頭は辛うじてインパクトターボでしようか！しかし苦しいか！キタサンブラックが先頭に立った！インパクトターボ必死に追いますがこれはもう無理か！サムシングブルーが抜いてキタサンブラックに並びます！サトノダイヤモンドも上がってきました！残り200メートル！キタサンブラック！サムシングブルー！サトノダイヤモンドの3人が争っています！インパクトターボは追い付けないか！優勝争いは3人に絞られました！残り100メートル！3人並んでいる！勝つのは誰だ！並んだままゴールイン！誰が勝ったのかまったく分かりません！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー！」

私はいつもの様に勢いよく飛び出した。

しかし隣に黒い影が見えた。

「キタちゃん!？」

「今日は私が行かせてもらおうよ！」

まさかキタちゃんが私に逃げで勝負を挑むなんて！

この時、私は自分の作戦が崩されたことを理解した。

スカイ先輩から教えてもらった長距離の逃げ方をするには私がペースを作らなければならない。

今まで通りルーちゃんと同じ位置にキタちゃんが居たのならうまくやれたかもしれない。

しかしキタちゃんが私と真っ向勝負を挑んできてしまった以上その作戦は使えない。

末脚の弱い私がキタちゃんの後ろに回ってしまえばもう先頭に出ることはできなくなってしまう。

最悪の状況だ。

しかしどうする事もできずに私は走り続けるしかなかった。

SIDE：キタサンブラック

「キタちゃん!？」

いつも私はターちゃんの後ろを走っていたが今日はルーちゃんに逃げ勝負を挑むことにした。

驚いた表情をするターちゃんだったがすぐに前を向くといつも通り飛ばし始めた。

私はそれに全力で勝負を挑む。

ターちゃんのペースに負けない走りで行き続ける。

スズカ先輩から逃げのコツはしっかりと教わった。

トレーナーさんともしつかり作戦はたてた。

だから行けるはずだ!

SIDE：サムシングブルー

「キタちゃんが前にいる・・・想定外だけどなんとかなるはず!」

私はキタちゃんの作戦に驚いたが作戦に変更はない。

ターちゃんが前にいる以上私はターちゃんを追い続ける。

「大丈夫、いける」

私は自分にそう言い聞かせると2人を追い続けた。

SIDE：サトノダイヤモンド

「キタちゃん、思い切った作戦を取りましたね」

トレーナーさんから色々指導を受けていた様子から何かいつもと違う作戦を取るとは思っていたけどまさかターちゃんに逃げで挑むなんて・・・。

もちろん私もトレーナーさんから新しい作戦の指導を受けて今日は前の方に出た。

先行というほどではないが前目に走ることです3人に追いつけるように狙いをつけ続ける。

さらにゴルドシツプさんからロングスパートのコツも教わった。

だから私は3人に追いつけるはずだ。

SIDE：スレッズジハンマー

くそ!あのターボとブラックとかいうやつらが競り合うせいでいつもよりさらにハイペースになってやがる!

俺の自慢は末脚だが最終までスタミナが残せなかったら意味がな

い。

どんどんと減っていくスタミナに俺は焦る。

勝てない俺になんの価値があるっていうんだ！

SIDE：インパクトターボ

レースはもう終盤だ。

息を入れる暇もないまま走り続けたが限界が近い事は分かっている。

さつきから足が上がりなくなりつつある。

そしてその時が来てしまった。

最後の直線で私はついにキタちゃんに抜かれてしまった。

必死に足を動かすが速度は上がるところかどんどん下がっていく。

ルーちゃんが、サトちゃんが私を抜いていく。

3人の背中が遠くなっていく。

ああ・・・これが負けるって事なんだ・・・。

私はゆがむ視界をこらえつつ懸命にゴールを目指した。

遠くなっていく3人の背中。

いつかきつと追い付いて見せると硬く誓った。

SIDE：キタサンブラック

最終直線で力尽きたらしいターちゃんを抜いて、私は前に出た。

悔しそうな表情をするターちゃんを置いて、私は走る。

隣にはルーちゃんとサトちゃんが並んできた。

負けない！

負けたくない！

必死に走り続けて、私たちは並んだままゴールを通過した。

SIDE：サムシングブルー

ターちゃんはここまでみたい。

やっぱり長距離は苦手だったんだ。

でもまだ前にはキタちゃんがいる！

私は必死に前を目指す。

トレーナーさんの為に、ライスお姉さまの為に、私の為に！

SIDE：サトノダイヤモンド

途中でターちゃんを抜いて、私はキタちゃんとルーちゃんに並んだ。

残りの直線はあと僅か。
大丈夫です。

ゴールドシップさんとマツクイーンさんに教えてもらった長距離の息の入れ方は完璧にできました。

後は差し切るだけです！

S I D E：スレツジハンマー

俺は最終直線で勝てない事を悟った。

俺には長距離の適正は無い。

トレーナーにそう言われてきたが無視して参加した菊花賞。

チクシヨウ！チクシヨウチクシヨウ！

お袋・・・すまない・・・。

S I D E：インパクトターボ

「さあ長い長い審議が続いています！トウインクルシリーズにおいて、クラシックレースにおいてここまで長い審議は初めての事です！一体何がどうなっているのでしょうか!? 4着インパクトターボと5着スレツジハンマーだけが掲示板には表示されています！1着から3着までが表示されなのまま15分が経過しています！あ！今ようやく表示されました！なんと！1着が3人です！写真でも！映像でも差を確認できないとの事です！信じられない事態が起きました！トウインクル史上初の同着優勝です！なんとという事でしょうか！」

人々の激しいざわめきが京都競《font:ul40》馬《font>

nt》場に響き渡る

「同・・・着・・・？」

「これは・・・勝てた・・・のでしょうか？」

「どう・・・なんでしょう？」

3人は掲示板の表示に戸惑っている。

「キタちゃん、サトちゃん、ルーちゃん、3人ともおめでとう」

私は3人に拍手を送った。

次第に観客からも拍手が響き始めた。

「なんだか変な感じだけど・・・ありがとうターちゃん」

「ありがとうございますターちゃん」

「あ、ありがとう」

私はなんとか笑顔で3人を祝福できた。

育成目標：菊花賞に出走する CLEAR

第2シーズン第12話 目指せ！有馬記念！（馬）

やや納得がいかない決着となったジャパンカップ。

その走りを見ていた山田調教師はこう言った。

「どうやらターボはあまり重馬場は得意ではないみたいだな」

「みたいですね。少し走り辛そうな様子でした」

そう、重い馬場に足を取られて思ったように走れなかったのは事実だ。

「タップダンスシチーがまさか真つ向勝負を挑んでくるとは思わなかったがどうも重馬場が得意だったようだな。これがもし不良だったら負けていたかもしれない」

うーんこればかりはトレーニングでなんとかなるものでもないし天気は祈るしかない。

「有馬記念、天気が良いのを祈るしかないな」

「今度こそ有馬記念を手にして見せます！なあ、相棒！」

勿論だ相棒！

SIDE：掲示板

▽ 812

ジャパンカップまさかの同着とかどういう事なの

▽ 813

おかげで払い戻し半分になっちゃって赤字なあ！

▽ 814

タップダンスシチーがまさか喧嘩売るとはなあ

▽ 815

しかし写真とか映像で判定するとかなんで競馬はこう古臭い判定方法なんだろうな？

▽ 816

最新のセンサーとか導入しないのかね？

▽ 817

それやろうとするなら馬の鼻先にセンサー埋め込む必要があるぞ

▽ 818

それはさすがに問題があるな

◇ 819

カーレースなんかとは違うからどうにもならんな

◇ 820

鼻先がゴールラインに触れた時、って条件だから付ける場所が限定されるからな

◇ 821

それより有馬記念ターボは勝てそうか？

◇ 822

ボリクリがいるからなあ

◇ 823

戦績はどっこいどっこいだからどうなる事か

◇ 824

問題はターボが長距離苦手なんだよなあ

◇ 825

有馬は2500だからギリ行けなくない？

◇ 826

2400でも勝ってるし去年も2着だから可能性は十分ある

◇ 827

雨降るとキツイかも。明らかにジャパンカップは遅かった

◇ 828

いうてボリクリも遅かったから雨苦手な馬は多いよね

◇ 829

不良馬場特異な馬の方が少ないわな

◇ 830

今からテルテル坊主作っておこうぜ

◇ 831

あと内枠になるように祈ろうぜ

SIDE：室満男

「今年もやってきましたなあ。有馬記念の抽選会場に」

「ええ、本当にターボのお陰です」

山田さんと共に今年も有馬記念の抽選会場に向かう。

二度目の抽選会場は一度目の時とは違う緊張があった。

一度目は慣れない状況に対する緊張だったが二度目はより有利な番号を引けるかどうかといった緊張の方が大きい。

自分の運の無さでターボを足を引つ張りたくないという思いがとも強くなっていた。

こんな緊張は子供の授業参観以来かもしれない。

「今年は良い番号を引けるといいですね」

「まあターボの場合大外でも無い限りそれほど不利にはなりません。それでも内枠の方がありがたいですな」

山田さんと言った話ができるのも後どれぐらいあるだろうか。

競走馬の全盛期は短い。

ターボも走れて後1年といったところだろう。

早い馬なら今年で引退も十分にありえる。

少なくともターボは晩熟ではない。

(少しでもいい。ターボが長く走れますように)

馬に纏わる逸話のある加茂神社のお守りを胸元のポケットに入れて、私はそう祈った。

SIDE：山田調教師

室さんと一緒に抽選会場へと向かう。

二度目となった有馬記念の抽選へ俺は強い願いと共に向かう。

ターボは強い馬だ。

ただ突き抜けた強い馬ではない。

シンボリルドルフ、ナリタブライアン、テイエムオペラオー、シンザン、数々の名馬を思い浮かべるがターボは成績だけで言えば決して見劣りしない成績だ。

だがGⅠでの勝利は接戦ばかりだ。

どれもこれもギリギリの勝利。

ターボの資質と作戦が上手く合致した結果、辛うじて勝利に繋がっている。

もつと俺が優れた調教師だったらターボをもつと勝たせてやれた

かもしれない。
だから頼む。

少しでもいいからターボに有利な番号で頼む。
俺の実力の無さがターボに苦勞させていると思うと情けなくはあるが運の悪さで足を引つ張る事だけは避けたい。

そう思いながら俺は会場へと入っていった。

S I D E：若井騎手

今回も早めに会場入りして室さんと山田さんを待っている。

去年あれほどの緊張を持っていた有馬記念の抽選会場に今年は少し落ち着いて入る事が出来た。

それでもやはり緊張と興奮から眠りが浅くていつもよりはるかに速い時間に目を覚ましてしまった。

(この緊張になれる時は来るんだろうか)

ベテランの先輩達でもダービーや有馬記念は特別だと言っていた。

まだターボ以外の馬では重賞は殆ど勝てていない。

(今年こそ、今年こそ相棒を勝たせてみせる)

俺は会場にやってきた室さんと山田さんを見つけると立ち上がった。

S I D E：インパクトターボ

俺は頭一つ抜けた強さというものは持っていない。

最後の最後まで速度を落とさない息の長さはあるが、反面最高速度はそれほど早くない。

その結果が粘り勝ちできるか差し切られるかという勝負になってしまう。

俺がもう少し速度に秀でていたら、俺がもう少し何か才能を持っていたらもつと勝っていただろう。

勝っている身からすれば贅沢な悩みと言われるだろう。

実際多くの馬が勝てずに消えていく。

G Iに勝てる馬は少ない。

その中でも複数勝っている俺は名馬と呼んでも差し支えない馬だろう。

だがこの体の闘争本能はまだ勝ちを求めている。
より強く、より早く。

自分が優れた存在である事を証明するために。
踏みつぶしてきた幾多の同族に誇れるように。

(怖いな……。これが血統に染み付いた人間の執念と闘争本能の権化……。サラブレッドの呪いとも呼ぶべきものか……。)

走れば走るほど、競えば競うほどこの思いは強くなる。

(他の皆もこんな思いなのだろうか……。)

自分だけなのか、それとも他の馬ものだろうか。

何となく聞きたいような聞きたくないようなそんな奇妙な気分だった。

こうして2度目の有馬記念を迎えた……。

「さあ！第48回有馬記念、今年最後のGIレース。果たして今年はこの馬が勝つのか。貴方の夢、私の夢を乗せて走ります本日14頭。果たしてどの馬が有終の美を飾るのか。中山競馬場に押し掛けた多くの観客が今か今かと待ちかねております」

多くの視線と期待を背中に受けながらパドックを回る。

「3枠4番、3番人気インパクトターボです。ジャパンカップをタツブダンスシチーと同着になった事は記憶に新しいでしょう。大逃げだけでここまで走り続けてきましたインパクトターボ。去年は惜しくもシンボリクリスエスに敗れて2着。今年こそ1着が欲しいところですよ」

3番人気……。長距離の成績が悪いからしょうがないとは言え少し悔しいな。

「4枠5番、2番人気サムシングブルーです。天皇賞春を制した名牝。長距離では牡馬以上の成績を収めています。長距離とはいえ短めの有馬記念。果たして勝てるでしょうか」

おっと、どうやらサムシングブルーちゃんがいるようだ。

「お久しぶりですターボさん」

「やあ、久しぶりだねブルーちゃん」

夏の宝塚記念以来の勝負だ。

うくん見ない間にますます綺麗に・・・おっと、馬ツケ出してる場合じゃないな。

「今日は勝たせてもらいますね」

「俺も負けられないからね。いい勝負をしよう」

「フヒヒ・・・やっぱり尊い・・・」

おっとこの声は・・・。

「7枠1番アグネスデジタルです。真の勇者は戦場を選ばない。ターフで、ダートでと活躍してきたアグネスデジタルですがこの度の有馬記念が引退レースとなつてしまいました」

「アグネスデジタルか。天皇賞秋ではやられたが今日は負けられないぞ」

「フヒヒ・・・デジタルはオワコンなのでお気になさらずに・・・」

どうやらこの間のやや気持ち悪い躁状態ではないらしい。

「僕も今日で引退なんだよね」

「クリスエス、もう引退するんだな」

4歳で引退する馬もかなりの数がある。

全盛期が3〜5歳あたりなのだが成績次第では早期引退して種牡馬入りする事も多い。

「7枠12番1番人気シンボリクリスエスです。天皇賞秋連覇いたしました強豪馬。ジャパンカップこそインパクトターボに譲つていますが長距離では負けがありません。今年も有馬記念を制して連覇なるか期待されております。引退レースで勝利する事ができますでしょうか」

「僕はまだまだ行けそうなんだけどね。まあ僕には決定権無いしね」

経済動物である以上俺たちの自由になる事は極々僅かだ。

「そうか・・・だが引退レースだからって譲らんぞ」

「あはは、僕だって負けるつもりはないよ。全力の君にね・・・」

またライバルが居なくなる。

その理由は様々だが寂しい限りだ。

ふう・・・気を入れなおそう。

少し寂しさに襲われたが振り切ると俺は相棒の元へ行く。

いくぞ相棒！レースの時間だ！

SIDE：実況

「さあ今年の閉めのレースであります第48回有馬記念。貴方の夢、私の夢を託す14頭を振り返ってみましょう。1枠1番ツルマルボーイ。鞍上は横山騎手。2枠2番ゼンノロブロイ。ダービー2着、菊花賞4着と好走をしております。鞍上は柴田騎手。3枠3番リンカーン。鞍上は武豊騎手。3枠4番インパクトターボ。ジャパンカップ連覇の強豪馬。鞍上は若井騎手。4枠5番サムシングブルー。天皇賞春を制したステイヤー。鞍上は的場騎手。4枠6番ウインブレイズ。鞍上は木幡騎手。5枠7番タツプダンスシチー。ジャパンカップではインパクトターボと同着優勝。鞍上は佐藤騎手。5枠8番チャクラ。鞍上は後藤騎手。6枠9番ファストタテヤマ。鞍上は安田騎手。6枠10番はダービーレグノ。鞍上は蛭名騎手。7枠11番アグネスデジタル。ライバルたちと同じく有馬が引退レースとなりました。鞍上は四位騎手。7枠12番シンボリクリスエス。天皇賞秋連覇、去年の有馬記念制覇の王者。連覇なるでしょうか。鞍上はペリエ騎手。8枠13番ザッツザプレンティ。今年の菊花賞覇者。鞍上は安藤騎手。8枠14番アクティブバイオ。鞍上は武幸四郎騎手。以上14頭でのレースです。さあまもなくゲートの準備が終わります。スターターが台の上に立って今旗が振られました。ファンファーレと観客の熱い歓声が中山競馬場に響き渡ります。さあ次々とゲートへ入っていきます。今最後の1頭が納まりました。体制完了。・・・スタートしました。好スタートを切りましたのはインパクトターボとアグネスデジタル。しかし先頭を走りますのはやはりインパクトターボでアグネスデジタルは後ろに下がりました。その後ろややスタートは遅れたかタツプダンスシチーが追いかけますが今日は並びません。いや、並びせないようにインパクトターボが飛ばしております。なんとというハイペースでしょう。そこから4馬身離れてサムシングブルーがインパクトターボをロックオン。3馬身離れてアクティブバイオも追っています。ザッツザプレンティも同じ位置で前を狙っております。4馬身離れましてゼンノロブロイ。その

後ろシンボリクリスエスはここにいました。ウインブレイズが並んでいます。1週目の4コーナーをカーブしてスタンド前に入ります。先頭は変わらずインパクトターボ。タツプダンスシチーは下がりました。2番手にサムシングブルーが上がりました。タツプダンスシチーは3番手になりました。アクティバイオとザッツザプレンティと並んでいます。そこから6馬身ほど離れましてゼンノロブロイとリンカーン。そしてウインブレイズ。その外シンボリクリスエスは中段グループ。あとは4馬身5馬身離れましてアグネスデジタルにチャクラ、そしてファストタテヤマにダービーレグノ。ぽつんと最後方ツルマルボーイになりましてインパクトターボ早くも1コーナーから2コーナーへと差し掛かります。その後ろ3馬身から4馬身にサムシングブルー。8馬身ほど離れて3番手に上がりました。ザッツザプレンティ。その外にアクティバイオ。やや離れてタツプダンスシチー。早くも先頭は向こう正面に入りました。そこから6馬身差にゼンノロブロイとリンカーン。その後ろ2馬身に外シンボリクリスエスに内ウインブレイズが並んでいます。そこからさらに9馬身程離れまして後方はアグネスデジタルなどが居ます。最後方は変わらずツルマルボーイがポツンと一人。インパクトターボ早くも中間を通過して第3コーナーへ向かいます。非常に縦長でばらけた展開となりました。インパクトターボはまだ全開で飛ばしておりません。その後ろ3馬身にサムシングブルー。ザッツザプレンティとアクティバイオは疲れたのか下がっていきます。タツプダンスシチーも下がります。ゼンノロブロイとリンカーンが前に出てきました。第3コーナーにインパクトターボが入ります！シンボリクリスエスが動きました！第4コーナーに入りますインパクトターボ！サムシングブルーがジリジリと差を詰めます！3番手にリンカーン！その後ろにシンボリクリスエス！外から追い込みますゼンノロブロイ！さあ直線コースに入りましたインパクトターボ！サムシングブルーが懸命に追いますがまだ2馬身の差があります！先頭はインパクトターボ！シンボリクリスエス！シンボリクリスエスが一気に上がってきます！サムシングブルーを抜いて今インパクトターボに並

ぼうかという所！しかし譲らない！インパクトターボなんと譲りません！先頭はインパクトターボ！シンボリクリスエスも凄い末脚だがインパクトターボ今日は抜かせません！苦しいシンボリクリスエス！頭半分が越えられません！サムシングブルーも必死に差を詰めますが苦しい！インパクトターボまだ粘る！残り100メートル！坂を駆け上がってまだ先頭！インパクトターボだ！インパクトターボが今1着でゴールイン！父ツインターボがあのならタブライアンを破って勝利したように！インパクトターボが前年度覇者シンボリクリスエスを破って勝利しました！有馬記念親子制覇の偉業を達成しましたインパクトターボ！ツインターボも喜んでいるでしょう！これぞまさに逃亡屋！ターボの名前は伊達じゃない！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー！」

いつもの様に全力で飛び出す。

「フヒヒ・・・竜頭蛇尾だよデジタルは・・・やっぱオワコン・・・」
出足こそ良かったアグネスデジタルだったがあっさり下がっていった。

「今度こそー！」

むしろタップダンスシチーの方が追いかけてきた。

「今日はやらせんぞー！」

乾いた芝は非常に走りやすく、タップダンスシチーに追い付かれずに速度を出し続ける。

「な、なぜだ〜！」

「邪魔しないでください！」

サムシングブルーちゃんが前にいるタップダンスシチーに怒る。

「今日は良い調子だ！行けるぞ相棒！」

もちろんだ相棒！

完璧に逃げ切って見せるさ！

コーナーを抜けて1度目の正面スタンド前を走り抜ける。

「ついてくー！ついてくー！」

どうやらタップダンスシチーは早くもついていけなくなったのか

2番手はサムシングブルーちゃんになった様だ。

後ろはさらに遅れてシンボリクリスエスは大分後方にいるようだな。

あいつの末脚は強いが、追い付けないほどに離し切ってやる！

第1コーナー、第2コーナーと素早く抜け、向こう正面へと入る。

サムシングブルーちゃんは変わらず後ろにいるが中段グループとの差はかなり大きく開けた。

これだけの差があっても絶対に勝てるとは言えないが押し切って見せる！

俺はさらに気合を入れると第3コーナーを走り抜けて第4コーナーに入る。

「コーナー！」

サムシングブルーちゃんがじりじりと差を詰めてくるのが分かる。後ろもどんどんと上がってきている。

ここからが正念場だ！

全力で走り切るんだ！

「くっ！追い付けない！」

サムシングブルーちゃんを追い付かせない事には成功した。

しかしヤツは必ず来る！

「どけどけ〜！シンボリクリスエスのお通りだよ〜！」

「来たな！クリスエス！」

ものすごい末脚でシンボリクリスエスが上がってくる！

しかし序盤に大きく差をつけた成果が出たのかいつもよりその末脚は鈍い！

「抜かせるかあ！」

「後少し！」

頭半分まで並ばれた！

けど抜かせない！

得意の坂を勢いよく駆け上がる！

「ぬああああああああああああああああああ！」

「ま、負けたあ！」

頭半分も無かったかもしれないが、俺は何とか先頭を維持して走り切ったのだった。

「やったぞー！父さん！アンタが勝った有馬記念！俺も勝ったぞー！」

「ちつくしよー！連覇で引退したかったのにい！」

「はうう・・・届きませんでした・・・」

喜ぶ俺、悔しがるシンボリクリスエスとサムシングブルー。

「凄いですね・・・」

そんな俺に声をかけてくる馬が居た。

「ありがとう。君は？」

「初めまして。僕はゼンノロブロイ。貴方に興味が沸きました。もしレースでお会いしたら、その時はよろしくお願いします」

どこか色気のあるしっとりした声のゼンノロブロイはそう言って去っていった。

「おう、全力でかかってきな！」

若干自惚れた発言ではあったが相手の方が年下みたいだしまあいいだろう。

とにかく今日は堪らなく嬉しいんだ！

何度か撮った写真撮影も、皆今日が一番嬉しそうな表情だった。

インパクトターボ 牡4歳 21戦17勝 主な勝鞍：02年G I 皐月賞 02年G I ジャパンカップ 03年G I 宝塚記念 03年G I ジャパンカップ 同着1位 03年有馬記念1着 02年G I 日本ダービー2着 02年G I 菊花賞2着 02年G I 有馬記念2着

第2シーズン第12話 目指せ！ジャパンカップ（ウマ娘）

私の前を走る3人。

キタちゃん、サトちゃん、ルーちゃん……。

待って！置いてかないで！

「ツ！夢……か……」

「ターちゃん……ついてくう……すう……」

相変わらず左腕をルーちゃんに抱きしめられたまま（以前の抜け出し事件以降抱き着き具合が酷くなった）私は目を覚ました。

まだ薄暗い窓の様子を見るに夜明けまではまだ時間がかかるだろう。

「ふう……もう一回寝よう」

同じ夢は見たくない。

そんな風に思ったが幸いにも夢を見る事は無かった。

「ターボ、体調でも悪いのか？」

「いえ、体調は特には……」

タイムを計ってくれていた山田トレーナーが渋い表情をしながら私に尋ねた。

「最近タイムの伸びが悪いな。停滞期かスランプか。どちらかは分からないが今のままだとジャパンカップは厳しいぞ」

その言葉に私は思う所があった。

「多分……気持ちの問題だと思います」

「……菊花賞か」

山田トレーナーの言葉に私は頷いた。

「お前にとって公式戦で初めての負けだ。今までの負けとは重みが違う。それが勝負というものだ。簡単に切り替えれるとは言えん。俺が何を言った所でお前の中で決着をつけないければならない事だ。無論相談には乗る」

「はい、ありがとうございます」

私は山田トレーナーにお礼を言った。

「ふう……ここまで私は精神的に弱かったんだなあ……」

気持ちが乗らないままトレーニングを続けても怪我の原因になるから少し休めと言われて私は行く当てもなく学園を彷徨っていた。

周りでは多くのチームがトレーナーの指導の下、トレーニングに励んでいる。

その光景を見るとこんな事をしていない場合ではない、と思うのだが残念ながら心は動いてくれなかった。

「たりやー!」

そんな私にあの声がまた聞こえてきた。

どうやらチームカノープスが近くでトレーニングをしているらしい。

運命的な何かに引き寄せられて私はそちらに向かった。

「ふう……やつとターボも調子が戻ってきたぞ」

「そうですね。不整脈も出ていませんしとりあえずは問題は無いかと。ただ、まだまだ油断は禁物ですよターボ」

ツイン先輩とイクノ先輩が仲良さそうに会話をしていた。

「相変わらずの世話焼き女房ねえイクノは」

「ターボは危なっかしくて放っておけませんから。それよりネイチヤ、あの子は?」

「今はタンホイザと一緒に少なくなった消耗品類の購入に行ってるわ。あの子にも覚えて貰わないといけないしね」

どうやらカノープスの新人さんはタンホイザ先輩と買い出しに出ているらしい。

「あれえ?インパクトじゃん!どったの?」

「お久しぶりですツイン先輩、イクノ先輩、ネイチヤ先輩」

私に気が付いたツイン先輩が声をかけてきたので私は頭を下げた。

「どうしたのですか?何やら元気が無いようですが」

「あの……少しだけお時間いいですか?」

「私は運命的な何かを信じてお二人に相談してみる事にした。なるほどなくトランプか」

「ターボ、トランプではなくスランプです」

ボケなのか天然なのか若干定かではないがツイン先輩は真剣に考えてくれているようだ。

「私の悩みなんて非常に贅沢だとは思うんですけど……どうしても意識がそちらにばかり行ってしまうって……」

「そうですね。私も61戦ほどトウインクルシリーズでは走りましたがGIは一つもとれていませんからね。皐月賞とダービーの2冠を達成した貴女の悩みは非常に贅沢とも言えます。ですが、そんな赤の他人の妬みや僻みなど関係ありません。今、貴女がどう思っているのか。これが一番大切です」

「イクノ先輩……」

イクノ先輩はいつものキリつとした表情を柔らかい笑顔に変えて私を見つめてくれていた。

「厳しい事を言います。インパクト、貴女が勝負の世界で走り続ける以上これからもその悩みは尽きる事はないでしょう。私だって答えは出ませんでした。でも走り続ける事で見える何かがある。私はそう思うからこそ幾多のレースに出続けてきたのです。今はまだ見えなくても、いつかきつと見えると信じて」

「そうそう、イクノの言う通りだぞ。私たちに出来る事は、どんなレースだって諦めずに走る。これしかないんだぞ」

「ツイン先輩……ありがとうございます」

重く押し掛かっていた暗い気持ちだが、幾分か晴れた気がした。

「まだ気持ちに整理はつきませんけど……次のレース、ジャパンカップ……諦めずに走り切りたいと思います」

「頑張りなさい、インパクト。きつと貴女の先に光り輝く何かがあります」

「がんばるんだぞインパクト。諦めなければきつと良い事が待ってるぞ」

「はい……」

私は心からの笑顔を浮かべた。

「さあ、今年は中山競《font:ul40》馬《font》場で開

催されますジャパンカップ。海外からの招待ウマ娘達と日本のウマ娘達が激闘を繰り広げます。果たして勝つのは海外か！それとも日本か！皆さんの注目が集まります！」

もうすぐパドック披露が始まる。

衣装に着替えた私はまだ落ち着かない気持ちを胸にパドックステージへと向かう。

「5枠9番、2冠ウマ娘インパクトターボです。日本らしい衣装に海外からのお客さんも歓声を上げております」

衣装を披露し終えた私はターフに移動する為の地下通路に移動する。

「やあ、久しぶり〜」

「シンボリクリスティ・・・」

「クリスでいいよ〜長いから」

近代的な将校軍服風の衣装のクリスがそう言った。

「ダービーは負けちゃったけど今日は負けないよ〜」

そう言つてクリスは先に歩いて行つた。

負けたくない。

その気持ちは皆同じだ。

「シケたツラしてやがるな。インパクト」

「スレッジハンマー・・・」

パンクな勝負服に身を包んだスレッジハンマーが居た。

「ケツ・テメエみたいなのヤツに負けた俺様が情けねえ！」

それだけ言うとスレッジハンマーは不機嫌さを隠さずに去つていった。

そうか、私が情けないままじゃ勝ってきた相手にも申し訳ないんだ・・・。

スレッジハンマーの言葉に私は目を瞑つて強く深呼吸すると両頬を自分で叩いた。

「よしーやるぞー！」

まだすべての迷いが消えたわけじゃあない。

それでも誰もが誇れる自分である為に私は走ると決めた。

SIDE：実況

「さあ、世界の強豪ウマ娘が日本に集いますジャパンカップ。今年は例年の東京競《font:ul40》馬《font》場2400メートルではなく今年は中山競《font:ul40》馬《font》場2200メートルでの開催です。海外からの招待ウマ娘は今年は9人。果たして日本は世界に届くのか。今日走るウマ娘達をもう一度紹介いたしましょう。1枠1番フォルネウス。フランス凱旋門賞にも参戦しております。1枠2番インディジェーン。香港のクイーンエリザベスカップ3着です。2枠3番コーラス。去年に引き続きジャパンカップに参戦です。2枠4番インテリジエンスジュエル。アイルランドから参戦です。3枠5番スレッズハンマー。今年のダービー2着、GIが欲しいところです。3枠6番アグネスフレイ。天皇賞秋ではシンボリクリスティに敗北、逆襲はなるでしょうか。4枠7番シンボリクリスティ、2番人気です。天皇賞秋では歴戦のウマ娘達を下して見事1着でした。4枠8番セイラフィン。日本の雰囲気慣れないのか先ほどの勝負服披露で観客を睨むような気配がありました。5枠9番1番人気インパクトターボ。皐月賞、ダービーを制した2冠ウマ娘。果たして世界に届くのか。5枠10番アマゾンバック。去年のダービーウマ娘にしてジャパンカップ覇者。6枠11番テイエムシー。去年の桜花賞と秋華賞を制覇しました。6枠12番ブレイブスカイ。フランスG1ディアヌ賞の勝者です。7枠13番ナリタトップジョー。天皇賞秋2着と悔しい思い。7枠14番ストームホーク。アラブの王族ウマ娘が今年も参戦です。8枠15番マグナムテン。毎日王冠1着です。8枠16番エアシャカール。最近調子が思わしくないとの事ですがどうでしょうか。以上16人です。さあゲートの準備が整いましてスターターが旗を振りました。ファンファアレです。多くの観客に見守られながらウマ娘達が次々とゲートインしていきます。最後の一人が収まりました。…スタートしました。先行争いはここまで負け無しのインパクトターボがやはり飛び出しました。他のウマ娘達はまだそれほどペースを上げていません並んでいます。今日は一人旅になりましたインパクトター

ボが大きくリードを開いていきます。後方集団先頭を取りましたのはマグナムテン。ナリタトップジョーなどがごった返していますこの辺り、シンボリクリステイは中団内側にいますが周りを囲まれてちよつと苦しいか。集団を抜けてスレッズジハンマーが外に出てきました。インパクトターボはそんな後ろを振り返る事なく飛ばしております早くも10バ身以上差を広げています。後方集団はまだ落ちて着きません。各ウマ娘達の熾烈なポジション争いが続いています。2番手はマグナムテン。その後ろにナリタトップジョーとセイラフィンが居ます。その後ろではシンボリクリステイが前と横を塞がれてもがいています。外からスレッズジハンマーが前を狙います。早くもインパクトターボが残り1000メートルを切りました。マグナムテンが上がっていきます。シンボリクリステイはやはり身動きが取れません。インパクトターボ早くも第3コーナー。マグナムテンが後方集団を引き連れて差を縮めていきます。セイラフィンが内側からマグナムテンを抜いて前に出ました！第4コーナーを回り切ってインパクトターボが直線に入ります！2番手はセイラフィン！懸命に差を詰めます！シンボリクリステイが漸く集団を抜け出しました！ファウルネスとスレッズジハンマーがすごい末脚！一気にセイラフィンを抜いてインパクトターボに迫ります！インパクトターボ懸命に逃げる！ファウルネス届くか！スレッズジハンマーが先に前に出た！インパクトターボ逃げ切れるか！残り1000メートル！スレッズジハンマー届くか！届くか！並んだ！並びました！インパクトターボも譲らない！スレッズジハンマーが抜いた！スレッズジハンマーが僅かに抜けると同時にゴールイン！スレッズジハンマー！ダービーの借りを返しました！インパクトターボ惜しくも2着！今年のジャパンカップを制したのはスレッズジハンマーです！今右手を高く高く上げています！」

SIDE：インパクトターボ

「ッシー」

ゲートが開くとともにいつもの様に私は飛び出した。

今日は誰もついてこない。

キタちゃんもルーちゃんも居ない。

その事がありがたくもあり、同時に寂しくもあつた。

一瞬余計な事を考えた私は頭からその事を消し去ると走る事だけに集中する。

海外のウマ娘達は日本のコースを確かめるようにやや緩やかな走りの様だ。

「あの子ーレースの定石を知らないの!？」

誰かのそんな声が聞こえてきたがこれが私の定石なんだ。

知らないなら黙っていて。

「ハッ！腐つても走りだけは上等じゃあねえか！今日こそやってやらあー！」

スレッヅハンマーのそんな声が聞こえてくる。

「どいてよ。上手に走れないじゃないか。また会長に叱られる」

マークされてしまったのか思うように走れないであろうクリスの情けない声も聞こえてくる。

「くうーこのまま逃がす訳にも行かないけどどうしたらいいの」

2番手の娘はまだ迷っているようだ。

だったらこのまま大きなリードを作って逃げ切つて見せる。

私はそう決めるとさらにリードを広げた。

最後の直線に向けてコーナーを勢いよく曲がる。

「待ちなさいー！貴女の勝手は許さないわよー！」

アメリカウマ娘が追い上げてくる。

「やつと出れた〜！待て待て〜！」

クリスもやつと追い上げてきた。

でもこのプレッシャーは彼女じゃない。

「待たせたな！今日こそ俺様が勝つ！」

「スレッヅハンマーー！」

「サマを付けるこのメガネー！」

残り僅かな距離を私とスレッヅハンマーは懸命に走つた。

「勝つのはスレッヅハンマー様だあ！」

後ほんの僅か私は優勝に手が届かなかった。

「やったぜお袋！見てるか！あんたの娘は！最強だ！」

右手を上げて勝利を宣言するスレッツジハンマーに私は拍手を送った。

「惜しかったですねインパクト」

「2着おめでとう！よくがんばった！」

出場者用の控室に戻った私に応援に来てくれていたイクノ先輩とツイン先輩が声をかけてくれた。

「すみませんイクノ先輩、ツイン先輩。折角応援に来てくれたのに：私・・・勝てませんでした・・・」

堪えていた涙を流す私をイクノ先輩がそつと抱きしめてくれた。

「大丈夫です。貴女にはまだ次があります」

「・・・はい」

「そうだぞ！諦めるなインパクト！テイオーがそうだったみたいに！ターボがそうだったみたいに！諦めなければきつと夢は叶うぞ！」

「・・・はい！・・・はい!!」

私はイクノ先輩の胸に抱かれたまま涙を流し続けた。

育成目標：ジャパンカップを3着以内に入る C L E A R

第2シーズン第13話 5歳を迎えて（馬）

念願の有馬記念を勝利して、そして年が明けた。

シンボリクリスエスが有馬記念で引退式をし、俺はまたライバルを一人失った寂しさを感じながら年明けの美浦トレーニングセンターで過ごしていた。

室オナーはまだ俺を引退させるつもりではないようだが俺ももう5歳だ。

競走馬の全盛期は短い。

俺があとどれくらい走れるのかは分からないが俺はまだ走れる。

新たな馬達もどんどんと登場している。

勝つのは難しくなってくるだろう。

「ようターボ。今日も元気そうだな」

そんな事を考えているとほかの馬の調教を終えた山田調教師が俺に声をかけてきた。

「お前のおかげで担当する馬が増えてうれしい限りだよ。本当にお前のお陰だ」

よしてくれ山田調教師。

それにそんな言い方されるとまるで今すぐにでも引退するみたいじゃないか。

「本当に年月つてのはあつという間だな……。お前ももう5歳だ。競走馬としての時間はもうそれほど長くないな」

頑張れば6歳や7歳でも走れるかもしれない。

しかしそれは怪我のリスクを高めるし、何より血を繋ぐ事を第一とするサラブレッドにおいてリスクは避けなければならない事だ。

「残り少ない時間。お前の好きなだけ走らせてやれる様、俺も頑張るからな」

ああ、俺も後悔しない様がんばるさ。

俺はそう決意を固めると次のレースに向けての調教に励んだ。

2月 GⅡ京都記念

「有馬の覇者！インパクトターボが完全に逃げ切り体制！去年に引き

続きGⅡ京都記念を逃げ切ったゴールイン！」

よし、まだまだいけるな。

俺はそう思ったが残念ながら山田調教師や相棒はそうではなかったらしい。

「若井君、今日のレースを走ってみてターボの様子はどうかだったかね？」

「はい、やはり山田さんに指摘されていた通り僅かではあります。ラストの息が続かなくなっていました。余裕があつたので無茶はさせませんでした。が以前に比べると速度が落ちてますね」

「どうやら山田調教師にも相棒にも俺は目に見えて弱くなって来ているらしい。」

「まだまだ行けるとは思いますがターボの強みは活かし辛くなってくるでしょうね」

「やはりそうか・・・一度室さんと話をした方がいいな」

ここからどれだけ衰退していくか。

まだ分からないがやはり俺の競走馬としての寿命は終わりを迎えるところらしい。

残念だが仕方がない。

悔いの無い走りがしたいものだ・・・。

SIDE：室満男

「そうですね・・・ターボも引退時期ですか・・・」

『はい、今すぐに、と言うわけではありませんが私の見立てでは今年一杯が限界でしょう。無理して来年以降も走らせる事は不可能ではありませんが勝利するのは難しいでしょう。また怪我や病気のリスクを考えますと・・・』

電話越しにも山田さんの苦悩が伝わってくる。

「分かりました。山田さんがそう判断したのならそうしましょう。ただ・・・できればもう一度だけ有馬を走らせてやりたいのですが可能ですか？」

『そうですね。多くの馬が有馬で引退をしていますからタイミング的には問題は無いかと。負担を掛けすぎない様に様子を伺いながら

レースを組んでいきたいと思います。ただGIは勝てないかもしれない』

「ええ、無事にターボが走り切ってくれたらそれでかまいません」

『分かりました。最善を尽くします。失礼します』

そういつて山田さんは電話を切った。

私は携帯電話を下すと大きくため息をついた。

本当に競走馬の寿命は短いものだ。

あつという間の浪漫だったな。

幸いターボが稼いでくれた賞金は非常に潤沢で次の馬を買うだけの余裕もある。

すぐに次の馬を、とは気持ち的にもなれないが共同馬主の皆さんにも話だけはしておかないといけないな。

私は携帯電話を再び持ち上げると共同馬主たちに電話を掛けた。

S I D E：インパクトターボ

どうやら予想以上に俺の体は劣化してきているらしい。

「どうだ？ターボの様子は」

山田調教師が助手に俺の様子を尋ねる。

「はい、飼食いは普段とそれほど変わらないですがやはり以前に比べるとレース後の疲れが残るみたいで元気が無いですね。毛艶もあまり良くないです」

以前ならもっと早くに回復して直ぐに次のレースに出る事が出来たが、回復に時間がかかる様になっていた。

俺自身が自覚した一番最初の症状がこれとはな・・・。

「そうか・・・やはりレースの頻度は落とさなければならぬな」

「次はどうしますか？」

「産経大阪杯を考えていたが念の為に見送った方がいいな。5月の金鯨賞にしよう」

3月4月と休みか・・・。

やれやれ、短い全盛期だったぜ・・・。

幸いにもあれから直ぐに体調は良くなったのでどうやらまだこの体は大丈夫の様だ。

ただ今年引退する事などを考えて山田調教師も少し神経質になっている様で大阪杯は回避して金鯱賞に変更になった。

そんな金鯱賞に向けての調教を受けている時だった……。」「そうか……。サムシングブルーも引退か」

「はい、先日行われた天皇賞春に出走した後右前足に熱が出たよう。繁殖牝馬として期待されていますからそのまま引退を決めたそうです」

なんとブルーちゃんまで引退してしまったのだ。

あれほど戦ったライバルがまた一人減った事に俺は少し落ち込んだ。

同じ美浦トレセンに居たけどトレセンだと数えるほどしか顔を合わさなかったなあ……。」

所属している馬の数が数なだけにどうしても中々顔を合わす機会がなかった。

そんな事を考えていると……。

「やあ、山田さん」

「鈴木さんと……。サムシングブルーじゃないですか」

どうやらブルーちゃんの調教師さんがブルーちゃんを連れてきたらしい。

「もしかしたら最後になるかもしれませんが、ずっと競い合ってきたライバルですからここを離れる前にと思いました」

「そうですか。2頭ともすごく仲が良かったですからね。きっとターボも喜びますよ」

俺が馬房から顔を覗かせるとブルーちゃんが少し悲しそうな表情をしていた。

「やあブルーちゃん。引退なんだってね……。足、大丈夫かい？」

「はい、痛みはあんまり。できればターボさんとはもつと走りたかったですけど……。残念です」

中々言葉が見つからない。

「俺も残念だよ。でも無理しちゃったらそれこそ大変だ。ブルーちゃんはこれからお母さんになって強い子を沢山産まなきゃいけないん

だから」

「そうですね。私のお母さんがそうだったように、私も強い子を産まないといけないですね」

ブルーちゃんはそう言って精いっぱい笑顔を見せてくれた。

「ブルーちゃん。俺も遠くないうちに引退する。種牡馬入りは出来る。だからもしかしたらまた会えるかもしれない」

「はい、その時は優しくしてくださいね」

本当に会えるかどうかは分からない。

それでもその言葉を嬉しそうに受け取ったブルーちゃんは鈴井さんに連れられて去っていった。

この寂しさが俺をまた弱くした。

そんな気がした。

5月 GⅡ金鯱賞

寂しさに浸っていても時間は止まらない。

気が付けば金鯱賞の日がやってきた。

体力は十分あるがやる気が少し足りないままパドックを回っている俺に1頭の馬が突っかかってきた。

「おいお前！やる気が無いなら帰れ！」

「お前は・・・？」

「聞いて驚け！あの有馬記念に何度も出走し！ジャパンカップにも勝利したナイスネイチャの息子！ナイスファイトとは俺の事だ！」

「ナイスファイト・・・ん？どっかで聞いたような・・・？」

俺がそんな風に思っていると・・・。

「今日は負けないぞインパクトターボ！」

「む、タップダンスシチーか。なあなあ、ナイスファイトって知ってるか？」

俺は以前引き分けたタップダンスシチーにナイスファイトの事を聞いてみた。

「ん？ああこいつか。シルバーコレクターで有名なやつだな」

シルバーコレクター・・・それってつまり・・・。

「永遠の二番手か」

「うう・・・お前たちなんて大っ嫌いだー！」

ナイスフアイトは大きく嘶いた。

ちなみにレースはまたも俺に逃げ勝負を挑んできたタツプダンス
シチーとのマツチレースになった。

ちよつと危なかつたがなんとか勝てたぞ。

その後、体調は問題ない状況だったが宝塚記念は季節が悪く負担が
かかるという理由で回避。

7月8月はじっくりと休養に充てる為に放牧。

そして9月にレース勘の取り戻しと調子を見る為にGⅡオールカ
マーに出ることになった。

「インパクトターボだけが！インパクトターボだけが早くも第4コー
ナーのカーブに入ってきました！後続とは大きな差が開いています
！インパクトターボが大きく逃げる！トーセンダンデイが必死に追
いかけますがこれは届かないか！トーセンダンデイこれはもう無理
！見事に決めました！逃亡屋インパクトターボ！」

うむ、しつかり休んだおかげが悪くない。

ちよつと他の馬には悪い事をしたかもしれないが有馬記念に向け
ての作戦も試してみたが上手くいった。

さて・・・次は直接有馬なのかな？

それとももう一回走るのかな？

11月 GⅠジャパンカップ

山田調教師も室オーナーも三連覇を期待していないと言えば嘘に
はなるが縁の深いジャパンカップを外す事は出来ないと出走を決め
た。

「さあ、今年もやってまいりました第24回ジャパンカップ。今年
は5頭の招待馬が走ります。注目すべき馬は前回同着ながら2連覇を
達成しましたインパクトターボ。3年連続での出走となりました。
果たして史上初のジャパンカップ3連覇なるか。それともほかの馬
がそれを阻むのか。注目しましょう」

お客さんの注目が集まる中パドックをグルグルと回る。

流石にヤンキーオカマはもう居ないか。

元々海外の馬なのだから居なくても不思議では無いのだが寂しさを感じてしまう。

「4枠8番インパクトターボ。3番人気です。以前の出走ペースからすれば非常に今年は少ない数となりましたが今年もジャパンカップにやってまいりました。3連覇なるか、多くのファンが期待しています」

3番人気か・・・。

流石にファンも引退が近い事を悟っているんだろう。

それでも応援してくれるんだからありがたい。

「お久しぶりです。また会いましたね」

「ゼンノロブロイか。今日はいいいレースにしよう」

「5枠9番ゼンノロブロイ。1番人気です。前走の天皇賞秋では見事1着。クラシックでは芽が出ませんでした。古馬戦に入ってから頭角を現してきました」

「すごいじゃないか。これは俺もウカウカしてられないな」

「はい、皆のお陰です。そして貴方のお陰でもあります。僕は貴方に勝ちたいんです」

ゼンノロブロイはそう言って闘志を露わにした。

物静かな外見に反して熱い馬だったらしい。

「なら超えてみるんだな。悪いが簡単には負けないぞ」

「はい、もちろんです」

パドック周回を終えて、俺たちはそれぞれの騎手を乗せる。

さあ相棒、残り少ないレースの時間だ。

SIDE：実況

「さあ、間もなく始まります第24回ジャパンカップ。今年は5頭の海外馬が出走いたします。果たして勝利するのはどの馬か。勝つのは日本か海外か。本日より16頭を振り返ってみましょう。1枠1番ポリシーメイカー。フランスからの参戦です。1枠2番リュヌドール。同じくフランスから参戦です。2枠3番ハーツクライ。鞍上は武豊騎手。2枠4番ナリタセンチュリー。京都大賞典では1着です。3枠5番フェニックスリーチ。海外のGIカナディアンイ

ンターナショナルステークスを勝利しています。3枠6番マグナーテン。このレース最高齢の8歳です。4枠7番デルタブルース。今年の菊花賞馬です。4枠8番インパクトターボ。史上初のジャパンカップ連覇の王者。果たして3連覇なるでしょうか。5枠9番ゼンノロブロイ。今年の天皇賞秋を制した実力馬。期待されます。5枠10番コスモバルク。地方所属からクラシックレースに参入した地方の星。果たしてでしょうか。6枠11番ヒシミラクル。鞍上は角田騎手。6枠12番ハイアーゲーム。鞍上はデムーロ騎手。7枠13番トーセンダンディ。オールカマーではインパクトターボにしてやられました。逆襲なるか。7枠14番ホオキパウエーブ。今年の菊花賞2着です。8枠15番パワーズコート。イギリスからの参戦です。8枠16番ウオーサン。ドイツGIバーデン大賞を勝っております。以上16頭の紹介でした。さあゲートの準備が整ったようです。スターターが旗を振り、今ファンファーレです。東京競馬場を歓声が包みます。さあ次々と馬たちがゲートインしていきます。今最後の1頭が収まりました。・・・スタートしました。ややバラついたスタートになりました。好スタートを切りましたのはインパクトターボ、ゼンノロブロイの2頭。先頭争いはやはりインパクトターボが取りました。その後ろにつけましたマグナーテン。トーセンダンディも並んでいきます。コスモバルクは4番手。さあルメールとの相性はどうかでしょうかコスモバルク。その後ろ、ゼンノロブロイはここにいます中団前目。さあ1コーナーから2コーナーに、縦長になりました。先頭はインパクトターボその差は7、8馬身といったところででしょうか向こう正面に向かいます。その後ろマグナーテンが追いかけます。6、7番手を走っているのがゼンノロブロイです。さあ向こう正面に入ってきましたペースはますます早いといったところか。インパクトターボリードは8馬身程。マグナーテンが懸命に追います。その後ろにコスモバルクがつけています。ルメールとの折り合いはどうか。その外にトーセンダンディ。ヒシミラクルが続いている。フェニックスリーチイギリス馬。その外にゼンノロブロイがいます6番手。その後ろにフランス馬2頭がいましてこの辺りが

真ん中でしようか。デルタブルー ス菊花賞馬。その外にナリタセン
チユリー。その後ろにウオーサンがいます。そしてその後ろからパ
ワーズコート。パワーズコートは後ろに控えている。パワーズコー
トは後ろに控える形になっています。インパクトターボ早くも3
コーナーを終えて4コーナーへ！インパクトターボ若井騎手逃げは
慣れたものだ逃げています！まだ縦長のままだ！マグナーテン疲れた
か！コスモバルクが2番手！ゼンノロボロイが外に出て前に上がっ
てきた！直線に入って先頭はインパクトターボ！コスモバルク必死
に追い上げます！ゼンノロボロイが一気に上がってくる！コスモバ
ルクを抜いてインパクトターボに並びかける！インパクトターボま
だ粘る！ゼンノロボロイも必死に走る！インパクトターボか！ゼン
ノロボロイか！ゼンノロボロイ前に出た！ゼンノロボロイ！ゼンノ
ロボロイ！ゼンノロボロイが差し切りましたゴールイン！2着にコ
スモバルクが滑り込みましてインパクトターボ惜しくも3位！ジャ
パンカツプ覇者敗れました！勝ったのはゼンノロボロイです！」

S I D E：インパクトターボ
「ッシー！」

スタートは完璧にこなせた。

何頭か出遅れた様だが俺には関係ない。

隣にいたゼンノロボロイも俺に引つ張られたのか良いスタート
だったが後ろに下がっていった。

別の馬が前に押し出される形で2番手になり少し悩んだ末に俺に
ついてくるようだ。

何時もの様に後ろは無視してただ先頭を一人走り続ける。

後ろにはブルーちゃんもクリスエスも居ない。

だがしっかりと感じるプレッシャーはゼンノロボロイのものだろ
うか。

そうか、ライバルはまだ居るんだな。

そう思うと俺は足に力を込めて逃げ続ける。

展開が動いたのは第4コーナーを曲がった後だった。

「うおおおおおお！オラだって勝ちてーべや！」

コスモバルクが訛り全開で追い上げてくる。

「そこです！捕らえました！」

「来たか！ゼンノロブロイ！」

俺は必死にゴールを目指して走る。

抜かせない！

簡単に抜かせてなるのもか！

しかし、そう思う俺の心とは裏腹に、体の方がついていかなかった。

ゴール手前のわずか数十メートル。

一瞬の息切れを見逃さなかったゼンノロブロイが俺を追い抜いて行った。

しかも最後の最後で道産子の意地を見せたコスモバルクにも抜かれてしまった。

くっ！やはり厳しいか！

・・・老兵はやはり去らねばならないな。

「おめでどうゼンノロブロイ。俺のラストランになる有馬記念。一挑戦者として挑ませてもらうぞ」

「ありがとうございますいますインパクトターボさん。こちらからも貴方に全力で挑ませていただきます」

俺はそうゼンノロブロイに声をかけた。

インパクトターボ 牡5歳 25戦20勝 主な勝鞍：02年G I

皐月賞 02年G Iジャパンカップ 03年G I宝塚記念 03年

G Iジャパンカップ同着1位 03年有馬記念 02年G I日本

ダービー2着 02年G I菊花賞2着 02年G I有馬記念2着

第2シーズン第13話 有マを迎えて（ウマ娘）

惜しくも負けてしまったジャパンカップ。

心からの走りができなかった事が原因だとして、私は山田トレーナーに頼んでメンタルトレーニングをする事にした。

肉体的にはもちろん精神的にも追い詰めたトレーニング。

もちろんカウンセリングを受けるなどして過度な負担がかからない様に注意する。

もう負けたくない。

もし負けたとしても戦った相手には恥ずかしくない走りをしたい。

その思いが私をさらに強くしてくれると信じて。

SIDE：キタサンブラック

ジャパンカップを回避して、私は有《font:ul40》馬《font》に向けてのトレーニングを積んできた。

サトちゃんとは別メニューを行い、テイオーさんとスズカさん、スカーレットさんに指導を受ける。

菊花賞は3人同着だった。

それは完全な勝利ではない。

今度こそ私が勝つ。

その思いと共に私はトレーニングを続けた。

SIDE：サトノダイヤモンド

私はマックイーンさん、ゴールドシップさん、ウオッカさんの指導の下トレーニングを続けています。

菊花賞は3人同着という結果に終わった事は私の中ではまだ喉に引っかかった小骨の様に残っています。

友人達に、ライバル達に勝ちたいという思い。

その思いが私を突き動かします。

次はきつと私が勝ちます。

SIDE：サムシングブルー

菊花賞はキタちゃん和サトちゃん和同着に終わってしまった。

的場トレーナーさんはよく頑張ったねと褒めてくれた。

でもやっぱりすつきりしない。
ちゃんと勝ちたい。

ライスお姉さまが何度も私の練習に付き合ってくれる。

私が得意な長距離の有《font:ui40》馬《font》記
念。

長距離としては短い2500メートルだけれどもそれでも長距離
は長距離。

的場トレーナーの為、ライスお姉さまの為、私は勝ちたい。

SIDE：推しウマ娘を応援する掲示板

▽961

今年のお前らの押しウマ娘はどの子だい？

俺はキタサンブラックだな。

あの元気ツ娘でお父さんツ娘で演歌とか属性盛り過ぎだろ。

▽962

俺はサトノダイヤモンドちゃんだな。

あの子になら踏まれてもいい。

むしろ踏んでくれ！

▽963

俺はサムシングブルーちゃんだな。

やはりメカクレは至高だな。

▽964

インパクトターボちゃんもいいだろ。

パドックで見栄を切ってくれるとか中々個性的でいいじゃないか。

髪の毛は染めてるのかな？

▽965

URAのプロフィールによると地毛らしいぞ

ウマ娘の髪の毛は摩訶不思議だな。

▽966

俺はスレッジハンマーだな。

あいつとならいいツーリングが出来そうな気がするぜ。

▽967

ウマ娘がバイク乗るのかな？

∨ 968

マルゼンスキーは時々スポーツカーに乗って爆走してるのを目撃
されているぞ

∨ 969

あの娘は一体何歳なんだ？

∨ 970

ウマ娘七不思議の一つかもしれないな。

∨ 971

話が逸れてるぞー

∨ 972

次の有《font:ul40》馬《font》は誰が勝つか楽し
みだな

∨ 973

今年は生で見れるぜやったー！

∨ 974

悲報：ワイ仕事で有《font:ul40》馬《font》無理

∨ 975

仕事ニキ乙

こうして様々な思いを乗せて、有《font:ul40》馬《font》
ont》記念がやってきた。

「さあ、今年もやってきました有《font:ul40》馬《font》
t》記念。あなたの夢、私の夢を乗せて走ります18人のウマ娘たち。
今年一年の締めとなりますこのレースを制するのは誰か。中山競《f
ont:ul40》馬《font》場は大勢の観客で埋め尽くされ
ております」

SIDE：インパクトターボ

実況の声を聴きながら私は控室で準備を終えてパドックへ向かう。
出きる事は全部やってきた。

まだ負けるのは怖いけど、皆に誇れる走りをしたい。

チームの皆、イクノ先輩とツイン先輩、戦うライバル達。

私は、前だけを目指して走ります。

「さあ、今日走るウマ娘達を紹介しましょう！1枠1番シンボリクリステイ！有《font:ul40》馬《font》記念で有利と言われる内枠を見事手にしました！今年の天皇賞秋で見せた末脚は今日も炸裂するでしょうか！」

シンボリクリステイが衣装を披露して観客にアピールをして舞台裏に戻ってくる。

いつもの様にのんびりした表情で、何を考えているのか分からない。

次々と出場ウマ娘たちが衣装披露とアピールを終えて戻ってくる。

「3枠6番サムシングブルーです！今年の菊花賞をなんと3人同着で優勝という奇跡を起こしました！長距離はお手の物！有《font:ul40》馬《font》記念で単独優勝なるでしょうか！」

ルーちゃんはジャージを脱ぐと丁寧に畳んで床に置くと手を振ってアピールする。

相変わらず恥ずかしそうにはしているが、以前の事を思うと視線に怯える様子はなくなった。

「ブルー！父さんが見守ってるからなー！」

ブルーちゃんのお父さんが観客の歓声に負けない大声で応援する。ルーちゃんはその声にちよつと恥ずかしそうにしたがなんとかアピールを継続する。

控えめのアピールタイムを終えるとルーちゃんが戻ってきた。

次は私の番だ。

「4枠7番インパクトターボです！今年の皐月賞、ダービーの2冠ウマ娘！菊花賞では4着と長距離は少し苦手の様ですが果たして2500メートルはどうでしょうか!？」

私は衣装の上から羽織っていたジャージを脱ぐと（ジャージを投げる必要は無いが大体のウマ娘は投げるので私も投げる）歌舞伎の見栄を切る。

観客の中にはもう馴染みになった人から「よ！逃亡屋！」と言った大向こうをかけてくれる。

海外のお客さんも居るのか「Oh! Amazing!」といった声も聞こえてくる。

「ターボちゃん頑張ってるねー!」

観客の中にお母さんを見つけて私は手を振った。

お父さんは仕事が空けられないからと聞いていたのでお母さん一人だ。

アピールタイムが終わると私はジャージを拾いながら舞台裏に戻っていく。

間に何人か挟んでキタちゃんの番になった。

「6枠11番キタサンブラックです!先ほどのサムシングブルーと同着で菊花賞を優勝しました内の1人!皐月賞、ダービーは先行でしたが菊花賞では逃げに作戦を変えました。果たして有《font:ul40》馬《font》記念ではどんな作戦を立てるのでしようか!」キタちゃんもジャージを脱ぎ捨てて衣装を披露するとアピールをする。

流石にパドックで歌うのは禁止されているので歌いはしなかったが何やら軽く踊っている。

「ブラックウウウ!」

何とも力強い声が聞こえてきた方をこっそり伺うとテレビで見た事ある男性、キタちゃんのお父さんが手を振っていた。

「どうやら今日は応援に駆け付けたようだ。」

お父さんに嬉しそうに手を振ったキタちゃんはジャージを拾って戻ってきた。

続いてはサトちゃんの番だ。

「6枠12番サトノダイヤモンド!菊花賞を同着で優勝した3人目!末脚が自慢です!今度こそライバルたちを差し切って勝利をつかみたいところですよ!」

お嬢様育ちなサトちゃんは綺麗にジャージを畳むと長い袖に隠れた手を振ってアピールする。

「お嬢様!頑張ってくださいね!」

「ダイヤ!頑張るのよ!」

「さあ、レースの時間だ。いい勝負をしようね」

「はっ」

私たちは暗い地下道を抜けてターフに出た。

SIDE：実況

「さあ！ターフに次々とウマ娘達がやってまいりました！改めて今日走るウマ娘達を紹介しましょう！1枠1番シンボリクリスティ！今年の天皇賞秋を勝利した実力ウマ娘！1枠2番アシダカグンソー！追い込みには定評があります！2枠3番パントマイマー！先行差しと自在な戦術は果たして炸裂するのか！2枠4番ホッポウセンキ！北国出身希望の星！3枠5番ナントクロス！ロングスパートが得意の追い込みウマ娘！3枠6番サムシングブルー！狙った獲物は逃さない！変幻自在の脚質は今日も優勝に狙いを定めている！4枠7番インパクトターボ！先頭は決して譲らない！大逃げ自慢の逃亡屋！4枠8番コクタンボクトウ！大きな体で他者を蹴散らします！5枠9番チャールズケリー！アメリカ出身日本育ち！5枠10番ガーデルマン！ドイツからやってきた留学生！鋭いまなざしで優勝を狙います！6枠11番キタサンブラック！かの有名な演歌歌手の娘さん！親子ライブは果たしてなるか！6枠12番サトノダイヤモンド！郷野家の御令嬢！狙うは優勝ただ一つ！7枠13番フラインモーション！秋華賞、エリザベス女王杯を無敗で勝利したまさに女王！無敗の有《font:ul40》馬《font》女王は誕生するのか！7枠14番フラワーフライデー！後半の爆発力に注目です！7枠15番プリンスキー！名前は甘いが走りは甘くないぞ！8枠16番スレッジハンマー！今年のジャパンカップを制した直線番長！今日も優勝に向かって一直線です！8枠17番ホンダーカブ！スタミナ自慢のウマ娘です！8枠18番ミュータイプ！今日も優れた勝負勘でチャンスを逃しません！以上18人の紹介でした！ゲートの準備も整い、今スターターが旗を振ります！ファンファーレと観客の歓声が中山競《font:ul40》馬《font》場を包みます！次々とウマ娘たちがゲート入りしていきます！・・・スタートしました！好スタートはインパクトターボ、キタサンブラック、フラインモ―

シヨンの3人！鋭い加速で先頭を取ったのはインパクトターボ！そのすぐ横につけましたキタサンブラック！ファインモーションは少し下がりました！4番手につけましたのはサムシングブルー！ここから大きく差が開きまして集団が形成されています！後方集団を引っ張るのはチャールズケリー！その外にガーデルマン！その後ろにシンボリクリステイがいます！ミュータイプが内側、サトノダイヤモンドがその外にいます！パントマイマーは今日は中団で待機しています！スレツジハンマーはちょうど中央にいます！早くも先頭は第1コーナーに入っていきますがファインモーションがインパクトターボとキタサンブラックに並ぼうという所！しかしこれは掛ったのか!?並ばれる事を嫌ったインパクトターボとキタサンブラックが加速するとファインモーションは並ぶのを諦めました！サムシングブルーの位置まで下がりましたファインモーション！向こう正面に入りまして後方集団にはコクタンボクトウ、ホップウセンキ、アシダカグンソーなどがいます！最後尾はナントククロスがやや置いて行かれています様子！プリンスキー外から上がってサトノダイヤモンドの外につきました！フラワーフライデイは落ち着かないのかポジションが定まりません！その隙についてホンダーカブが外に出ました！スレツジハンマーは周りを囲まれてしまったが大丈夫か！中間を過ぎまして先頭は変わらずインパクトターボ！その外にキタサンブラック！3バ身程離れてサムシングブルーとファインモーション！そこから5バ身ほど離れて5番手チャールズケリー！少し苦しいかガーデルマン！シンボリクリスエスは外に抜けている！ミュータイプは内側で狙いを定めている！サトノダイヤモンドは外に抜けていく！パントマイマーも上がってきています！プリンスキーはまだ我慢！スレツジハンマーは外に出るチャンスをうかがっている！ホンダーカブが中団まで上がってきました！コクタンボクトウ、ホップウセンキ、アシダカグンソーはまだ足をためている！ナントククロスがロングスパートで上がっていきます！さあ第3コーナーから第4コーナーにかかります！インパクトターボとキタサンブラックが競り合ったままコーナーを曲がる！サムシングブルーがじりじりと差を

詰める！ファインモーションちよつと疲れたか！後方集団を抜け出して上がってきたのはシンボリクリステイとサトノダイヤモンド！ようやく集団が崩れて抜け出してきたスレツジハンマーが懸命に追い上げる！さあ第4コーナーを曲がって残り300メートル！先頭はわずかにインパクトターボ！キタサンブラックも譲りません！サムシングブルーも並びかける！ファインモーションは疲れたか！シンボリクリステイとサトノダイヤモンドがファインモーションをかわして上がっていく！スレツジハンマーは出遅れが厳しいか！パントマイマーとホンダーカブは前をふさがれています！先頭はインパクトターボとキタサンブラック！サムシングブルー懸命に追いつきます！残り100メートル！坂を懸命に上がって！先頭は僅かにインパクトターボか！キタサンブラックも粘る！サムシングブルーはどうか！シンボリクリステイとサトノダイヤモンドが追い付いた！5人が並んで！どの娘が勝者に！最後にわずかに抜け出したのはシンボリクリステイだ！シンボリクリステイが有《font:ul40》馬《font》記念を制しました！

SIDE：インパクトターボ

「ッシー！」

ゲートが開くと同時にいつも通りに飛び出す。

「勝負だよターちゃん！」

「うふふ、やりますね」

菊花賞と同じくキタちゃんが並んできた。

ファインモーションさんも好スタートだったが逃げではないので下がっていく。

「ついてくー！ついてくー！」

いつも通り後ろにはルーちゃんがいるみたいだ。

サトちゃんはいつも通り後ろだろう。

なら私はいつも通り飛ばしに飛ばすだけだ！

「キタちゃん！ついてこれるかな！」

「もちろんついてくよー！」

私は勢いよく地面を蹴って前に進む。

1回目のスタンド前を通過して第1コーナーから第2コーナーに入った時だった。

「これは行けそうですね」

後ろにいたファインモーションさんが前を狙って上がってきた。

想定外の出来事だったが私はさらに速度を上げて先頭を譲らなかった。

もちろんキタちゃんも私を追いかけて速度を上げてくる。

「あらら・・・これは失敗しましたね」

どうやらファインモーションさんの予測とは違った結果になったらしく少し悔しそうに下がっていった。

「邪魔しないでください！」

ルーちゃんがファインモーションさんを抜いて前に出てきた。

予定外の加速に少しスタミナを消費してしまったが大丈夫、私はまだいける！

そのままキタちゃんと競り合いながら向こう正面を走りきって第3コーナーに入った。

「ハニー」

ルーちゃんが速度を上げて私たちに迫る。

「これは・・・ちよつと無理そうですね」

ファインモーションさんの悔しそうな声が聞こえてくる。

「待て待てー！私だつて負けないよー！」

クリスが上がってきた。

「皆さん捕らえましたよ！」

サトちゃんもやってきた。

「チクショーー！すまねえお袋ー！」

スレッズジハンマーの叫びが聞こえてくる。

譲らない！負けたくない！

皆の気持ちはきつと同じだろう。

私たちはゴールを目指して全力で走った。

そして、僅かにクリスが前に出たところがゴールだった。

「やったあ！これで会長に怒られずに済むよお！」

私はまた負けてしまった……。

「ああ……悔しいなあ……」

「本当に……悔しいね……」

「悔しいです……」

「あと少しでしたが……悔しいです」

こうして私たちの1度目の有《font:ul40》馬《/font》
t》記念は終わってしまった。

育成目標：有《font:ul40》馬《/font》記念を3着
以内に入る CLEAR

第2シーズン第14話 ラストラン（馬）

ジャパンカップを終えて、俺は有馬記念に向けて体調を整える事を第一にしていた。

以前に比べて回復が遅くなってきている為にギリギリの調整が難しくなって来ている為に山田調教師も調整に必死だ。

そんな中メデアからの取材があった。

そういえば久しぶりの取材だなと思ったが考えてもみれば引退を発表しているのだからそれに合わせた取材なのだろう。

山田調教師も随分と取材慣れしてきたのか落ち着いた様子で取材を受けている。

「今日は残念ながら今度の有馬記念を最後に引退となりますインパクトターボ号の厩舎にお邪魔しております。こちらはインパクトターボ号の調教師をしていらっしやいます山田さんです。山田さんよろしくお願いします」「はい、よろしくお願いします」

「今日はインパクトターボ号の歩みを振り返ってみたいと思います。VTRどうぞ！」

どんなVTRかちよつと興味あるなあ。

ちなみに事前に山田調教師にはどういった内容の話をして欲しいか台本が渡されているらしい。

「どうですか山田さん、デビューから皐月賞までを振り返ってみて。しかし10戦10勝とは凄いですね」

「正直なところ私もここまで勝てるとは思っていませんでした。確かにターボはスタミナがある馬ですから大逃げとの相性は悪くないんですが、まさか無敗のまま皐月賞を取るなんて誰も思ってませんでしたよ」

「それにしてもデビューしてからレースに次ぐレースと出走ペースがすごいですね」

「実は少しお恥ずかしい話なんです、ここまで走らせるつもりは最初はなかったんですよ」

「といますと？」

「大抵の競走馬はレースに出た後は疲れ切ってて餌の量も減るし体重も減るしで復帰に時間がかかるのが当たり前なんですよ。ですがターボは走らせても翌日にはケロリとしてまして餌を与えればもつと寄越せとおねだりするし体重だって減るどころか増えていく。調教だと今一やる気がでないのか太りすぎないようにするのに苦労しましたね。併せ馬、つまり他の馬と競い合うのは好きなのかやたらとやる気を見せるのですが生憎大逃げするターボでは併せ馬の人气が悪くて中々やる機会が無い。なので馬主さんと相談してだったらいつそレースで好きなだけ走らせてやろうって話になりましたね。他の馬には失礼な話ですが勝ち負けよりは調教の延長線みたいな出走が殆どだったんですよ。なので重賞レースが少ないのです」

「なるほど、確かに言われてみれば重賞レースは札幌ジュニアと弥生賞の二つしか走ってませんね」

なるほど、あのレース三昧にはそういった意味もあつたのか。

・・・多分後付けだろうけど。

「それでは続いて惜しくも敗れてしまったダービーに菊花賞を続けてどうぞ！」

ダービーか・・・。

タニノギムレットは元気でやってるだろうな。

確かウオツカちゃんはまだもう生まれてるはずだよな？

ん？ってことはそろそろ日本競馬の最高傑作もデビューするのか。

今年引退で助かったような気もするな・・・。

名前が似てるから色々比較されそうな気もするし・・・。

いや流石に自意識過剰か？

いやしかし俺だって悪い成績では・・・。

そんな事を考えている内に取材は終わったらしく、最後に山田調教師と並んでの写真撮影で終了した。

SIDE：室満男

3度目の有馬記念抽選会場。

もしかしたらこれが最後になるかもしれない。

本当にターボには沢山の浪漫を貰った。

たった3年。

しかし今までにない程充実した3年間だった。

仕事の都合で中々レース場に足を運ぶ事は出来なかったが、それでも仲間全員でレースのたびに話が弾んだ。

あまり競馬には興味がない妻も引退レースだけは直接見たいと言ってくれた。

他の共同馬主達も今回は全員そろって応援すると言っていた。

ああ、ターボ。

お前は本当に最高の馬だよ。

「さあ室さん。ターボの最後の抽選に行きましようか」

「ええ、そうですね」

山田さんに促されて私は会場に入ってしまった。

SIDE：山田調教師

ターボ最後の有馬記念。

最初に訪れた時はただただ緊張で足が重かった。

しかし今日は別の理由で足が重い。

今まで多くの馬の引退を経験してきているが、ここまで重い引退は

俺の中では初めてだ。

これが名馬の引退なんだと初めて実感した。

あいつはまだ走れる！

あいつはまだやれる！

そんな風に思う自分が居ることも自覚している。

しかし無理をさせればそれは最悪の事態をもたらす可能性すらある。

時間の流れがこれほど残酷であると初めて実感した。

安穩と生きてきたこれまでの自分がちっぽけに見えた。

だからこそ重い脚に力を込めて前に進むのだ。

「さあ室さん。ターボの最後の抽選に行きましようか」

その言葉は自分への促しでもあった。

SIDE：若井騎手

「引退……か……」

人間と違いはるかに短い競走馬の現役期間。

無名騎手からたつた3年で有名騎手・・・とまではいかないかもしれないが少なくとも人から認められるレベルの騎手にはなった。

それもこれも全て相棒のおかげだ。

その相棒がこの有馬記念を最後に引退する。

もつと相棒と走りたい。

もつと相棒と活躍したい。

そう思うがそれは相棒に無理をさせるだけだ。

だから俺は見送らなければならぬ。

相棒の最後の花道を・・・。

俺は会場にやってきた室さんと山田さんを見つけると決意と共に立ち上がった。

S I D E：掲示板

▽ 1 5 1 2

悲報：インパクトターボ有馬で引退式

▽ 1 5 1 3

やっぱりかー。そろそろだと思ってたよ

▽ 1 5 1 4

今年の出走回数目に見えて減ってたもんな

▽ 1 5 1 5

また個性派が居なくなる・・・

▽ 1 5 1 6

種牡馬入りはできますのん？

▽ 1 5 1 7

血統は微妙だが成績は悪くないから少なくとも用途変更にはならんやろ

▽ 1 5 1 8

用途変更ってなんぞ？

▽ 1 5 1 9

種牡馬としての登録抹消Ⅱ隠居or処分

▽ 1 5 2 0

経済動物の闇は深い・・・

▽ 1521

オーナーさんが少なくとも寿命までは面倒見るってこの前取材に答えてたからそれは大丈夫だぞ

▽ 1522

よかった!

▽ 1523

功労馬基金募るとかやらないと厳しいよな

▽ 1524

1頭あたりの年間維持費がなあ・・・

▽ 1525

出遅れた! パクター引退ってマジ!?

▽ 1526

今年の有馬で引退式やるってさ

▽ 1527

よし! パパ有給使って有馬に行っちゃうぞー!

▽ 1528

有給取れるとか羨ましい・・・

▽ 1529

労監さん! ここに違反企業がー!

▽ 1530

いや、単純に使い切っただけだが(笑)

▽ 1531

俺も有給残ってたし有馬行くかー

▽ 1532

悲報: 遠方のワイ、有馬に行けず

▽ 1533

お前の分まで応援しとくよ

▽ 1533

サンクス

SIDE: インパクターボ

ジャパンカップ後の疲労も完全に抜けて、有馬記念に体調を整えた状況で出走できそうだ。

最後のレースが体調ボロボロで負けましたなんてのは悔いが残るからな。

今の俺が2500メートルを走り切るのはギリギリになる。

元々長距離の適性が低い俺では2400を超えるとは厳しいのだ。限界まで走ってなんとか2600まではいける。

だがジャパンカップでもはつきりしたが今の俺は2400でも僅かに息切れしてしまう。

息の長さが売りだったが続かなくなってきたのだ。

だがラストランの有馬記念。

連覇して引退してやるぞ。

俺はそう決意を固めた。

そして最後の有馬記念がやってきた……。

「さあ、今年もやってまいりました第49回有馬記念。貴方の夢、私の夢を乗せて走ります16頭。やはり注目は秋古馬2冠のゼンノロブロイと去年の有馬覇者、インパクトターボの2頭でしょう。残念ながらこれがラストランとなってしまいましたインパクトターボ。最後の雄姿を見ようと大勢の観客がここ、中山競馬場に押し寄せています」

最後になるパドック周回。

多くのファンが俺に手を振ってくれる。

応援旗の中には精巧に刺繍された俺の姿に『浪漫をありがとう！浪漫ホースクラブ』と書かれた旗もあった。

そこには室オーナーに声をかけて出資してくれたメンバーが全員揃って手を振っていた。

勿論その先頭には室オーナーとその奥さんらしき女性も居た。

この後馬主用の観覧席に移動するつもりなのだろう。

俺は心の底からの嬉しさに包まれながらパドックを回る。

「1枠1番ゼンノロブロイ。1番人気です。秋古馬2冠を達成した今一番脂の乗った馬です。ジャパンカップでは見事にインパクトター

ボを差し切りました。今日も強烈な末脚に期待がかかります」

「今日が最後ですね。残念ですが期待されている以上貴方に花を持たせてあげるわけには行きません」

「いや、自分の花道は自分で突っ走る。後輩に気を使われての勝利は粹じゃない」

ゼンノロブロイが静かに闘志を燃やす。

「1枠2番インパクトターボ。2番人気です。前年度有馬記念を制した実力馬。残念ながらこの有馬記念で引退であります。皆を沸かせてきた大逃げが見られなくなると思うと寂しい限りです」

「全力で勝負だ。ゼンノロブロイ」

「ええ、僕も負けません」

やがてパドック周回を終えると俺は相棒の元に向かう。

相棒はいつもの集中した表情に少しだけ寂しさを滲ませながら俺に乗った。

さあ・・・相棒・・・最後のレースだ！

もう二度と通る事の無い地下馬道を通って俺は最後のターフへと移動した。

SIDE：実況

「さあ、間もなく出走いたします第49回有馬記念。本日出走する16頭を振り返ってみましょう。1枠1番ゼンノロブロイ、1番人気。秋古馬3冠なるでしょうか。1枠2番インパクトターボ、2番人気。有馬記念連覇での引退となりますでしょうか。2枠3番ピサノクウカイ。鞍上は藤田騎手。2枠4番ハイアーゲーム。今年のダービーを3着でした。3枠5番コスモバルク。地方競馬からの参入馬。3枠6番ハーツクライ。鞍上を横山騎手に乗り換えての出走です。4枠7番シルクフェイマス。GIが欲しいところです。4枠8番ユキノサンロイヤル。GI初挑戦です。5枠9番ダイタクバートラム。ステイヤーズステークスで1着を取っております。5枠10番タツプダンスシチー。インパクトターボと同着になった事もあります。6枠11番デルタブルース。今年の菊花賞馬です。6枠12番ヒシミラクル。長距離はお手の物か。7枠13番グレイトジャーニー。

厳しい戦いになりそうです。7枠14番ツルマルボーイ。今年の安田記念を制しております。8枠15番コイントス。2度目の有馬記念です。8枠16番アドマイヤドン。ダート最強馬が有馬に挑戦です。ゲートの準備が終わりスターターが旗を振りました。ファンファーレと熱い声援が中山競馬場を包み込みます。今最後の1頭が入り終わりました。係員が出ました。体制完了。．．．スタートしました！好スタートを切ったのはインパクトターボとタップダンスチーの2頭！しかし先頭は譲りませんインパクトターボ！早くも2馬身、3馬身と開いていく！それを追いかけるタップダンスチー今日は少し抑えていく模様！それをヒシミラクルが追走します！コイントスが外からそれを追走！その後ろアドマイヤドンがいますがゼンノロブロイが内からスーッと前に出てきました！今日は前の方で勝負をするようです4番手あたりまで上がってきましたゼンノロブロイ！インパクトターボは早くもコーナーを曲がり終えて正面スタンド前にきました！ゼンノロブロイの後ろにデルタブルース！1馬身差でグレイトジャーニーとその外にアドマイヤドン！2馬身離れまして内から行ったシルクフェイマス！あとは2馬身差コスモバルク！コスモバルクは今日は中団を進んでいます正面スタンド前！その後ろにダイタクバートラム！ピサノクウカイがいてツルマルボーイがその外！あとはハイヤーゲーム外にユキノサンロイヤル！最後方最後方ポツンと1頭ハーツクライといった体制で正面スタンド前を通過していきます！インパクトターボ1000メートル通過タイムは58秒8とまずまずといったところか！早くも1頭1コーナーにかかる！その差は8馬身は開いているでしょうか！タップダンスチーが2番手で後ろ集団を引っ張ります！ゼンノロブロイ、いつの間にか3番手に並ぼうかというところまで上がってきています！外にはコイントス！インパクトターボはどんどん先に行つてその差をさらに広げようとしています！タップダンスチーがそれを追いかけて後ろとの差が少し開きました！なんとゼンノロブロイが3番手に上がりました！その外半馬身差にヒシミラクル！デルタブルースもいつております！それから1馬身差コイントス！2馬身離れてグ

レイトジャーニー外目！半馬身後ろシルクフェイマス！インパクトターボ早くも向こう正面に入って独走状態！差は10馬身以上開いているでしょうか！中団外目にコスモバルク今日は追いやっております！半馬身内からアドマイヤドン！その後は2馬身差ダイタクバートラム！少し離れてツルマルボーイとユキノサンライズ！後方2番手の位置にハイアーゲームがいて最後方は3馬身差ハーツクライという隊形！非常に縦長の隊形！先頭インパクトターボ早くも3コーナーを曲がります！ゼンノロブロイが動きました！ゼンノロブロイがタップダンスシチーを抜いてどんどん前に進んでいきます！インパクトターボとの差が詰まっていきます！インパクトターボ4コーナーを曲がって間もなく直線！2番手に上がりましたゼンノロブロイがものすごい勢いで追い上げます！さあ直線に入ってインパクトターボリードは3馬身！ゼンノロブロイ追い付けるか！インパクトターボ懸命に逃げる！ゼンノロブロイが追い上げる！残り20メートル！ゼンノロブロイ追い付いた！インパクトターボに並んだ！譲らない！インパクトターボ譲りません！ゼンノロブロイか！インパクトターボか！3冠か！連覇か！どっちだ！どっちだ！どっちだああああ！2頭並んだままゴールイン！タイムはなんと2分29秒1！有馬記念のレコードをなんと1秒以上も縮めました！」

SIDE：インパクトターボ

「ッシー！」

最後まで完璧なスタートを切ることができた。

「むう！今日は控えろって指示が出るしなあ・・・」

同じく好スタートを切ったタップダンスシチーだったが騎手から抑えるように指示を出されて食らいについてはこなかった。

「いいぞ相棒！作戦通りにいくぞ！」

もちろんだ相棒！

俺と相棒のペアは最高だって知らしめてやるんだ！

俺はリードを取るとそのまま走り続けた。

1度目の正面を通過しコーナーへ。

よしよし、ちょうどいいペースでここまで来れているな。

そのままコーナーを曲がり切って向こう正面へ。後ろがやってくる気配はまだない。

だが確実にこちらを見つめている気配が一つ。きつと彼ならやってくるだろう。

向こう正面を走り抜けて3コーナーへ。

そこで気配が変わった。

「はあああああああ！」

やっぱり気が付かれたか！

「相棒！」

分かっているさ！

俺は全力で足を動かすとコーナーを曲がり切って最後のストレートに入った！

「危うく騙されるところでした！インパクトターボさん！息を入れていましたね！」

「やはりばれていたか！そうだ！老兵の小賢しいトリックさ！慣れないロングスパートで最後まで走り切れるかな!？」

そう、俺は飛ばすフリをしてこつそりと息を入れていた。

去年は序盤からハイペースだった為に全ての馬が後半失速していた。

末脚勝負のシンボリクリスエスを潰すためにハイペースの消耗戦をしかけた。

結果バテていつもの速さが出ないシンボリクリスエスにギリギリのところまで勝つことができた。

しかし今日はあえて中盤の速度を控えめにして体力を温存していたのだ。

もちろん例年の有馬記念に比べればペースは速い方だろう。

全ては息の続かなくなりつつある俺を少しでも長く走らせる為の小細工だ。

「負けません！」

「譲らない！」

最後の直線をこれまでの全てを出し切る勢いで走り抜ける！

ゼンノロボロイに並ばれたが先には行かせない！

我が身がどうなろうと構わない！

今ここで燃え尽きてもいい！

最高の走りをここに！

それはゼンノロボロイも一緒だ。

「はあああああ！」

「だあああああ！」

お互いどちらが先にゴール板を通り抜けたのかすら分からなかった。

SIDE：実況

「さあ写真判定が続いております。果たして勝ったのはどちらかテイ
エムオペラオー以来の秋古馬3冠か。はたまた3頭目の有馬連覇か。
今判定が終わりました。勝ったのはゼンノロボロイ！秋古馬3冠達
成です！タイムはコースレコードの2分29秒1！顔の上げ下げ！
ハナ差僅か5センチでの勝利です！インパクトターボ惜しくも敗れ
る！しかし負けてなお強しの走り！引退してしまうのが本当に惜し
い馬です！」

SIDE：インパクトターボ

「負けた……か……くっ！」

僅かに届かずに俺は負けてしまった。

悪態が口をつきそうになったが必死に堪えた。

「……おめでとうゼンノロボロイ。いい……良いレースだった」

何とか気持ちを落ち着けてゼンノロボロイの方を振り向いた。

「こちらこそ……良いレースでした……もうこれ以上の走りはでき
そうにありませんよ」

バテバテのゼンノロボロイがそう力なく笑う。

「貴方に勝負を挑んで本当に良かったです。お陰で僕はこんな素晴らしい
レースを走る事ができました。最も、もう二度とごめんですけど
ね」

「そうか……そうか……」

胸の奥からこみ上げる衝動。

様々な感情が織り交ざったそれを胸に抱いたまま。

俺は引退式を迎えた。

全てのレースが終わった後に開かれた引退式。

山田調教師、相棒、室オーナー夫妻、共同馬主一同、生産牧場長、応援してくれた競馬ファン・・・俺に係る全ての人が一堂に集まり、厳かに引退式は行われていく。

記念撮影なども行われ、ターフでの俺の最後の仕事が終わった。

ゆつくりとターフを去る俺を、多くの人々が見送ってくれた。

こうして、俺の競走馬としての時間は終わりを迎えた。

インパクトターボ 生涯成績26戦20勝 主な勝鞍：02年G I
皐月賞 02年G Iジャパンカップ 03年G I宝塚記念 03年
G Iジャパンカップ同着1位 03年有馬記念 02年G I日本
ダービー2着 02年G I菊花賞2着 02年、04年G I有馬記念
2着

第2シーズン第14話 r u n a l o t (ウマ娘)

有《font:ul40》馬《font》記念が終わり、私たちは短い冬休みに入った。

実家への帰省は新年が少し過ぎてからにする事にした。

折角だから学園での年越しからの初詣をする事にしたのだ。

それにお正月限定の食堂特性お節料理があるのだから。

両親も楽しんでおいでと後押ししてくれた。

他のみんなも大丈夫との事なので私たちは今日だけは許されている大晦日からの2年参りをする事にした。

学園からほど近い神社に出かけると私たちは人混みに揉まれながら参拝する。

私は人混みが苦手なのだが今日ばかりは我慢する。

学園から沢山のウマ娘たちが2年参りに訪れている。

マチカネフクキタル先輩とメイシヨウドトウ先輩と一緒に巫女さんをやっていた。

普段だったら中々我慢の難しい列に並ぶ行為だが友達と一緒にいる事でなんとか我慢できる。

ようやく私たちの番が来るとお賽銭を投げて願い事をする。

(もっともっと強くなれますように！)

願い事を終えた私たちは屋台を見て回った後寮へと戻った。

そして冬休みが明けて初めてのミーティング。

「さて、最後はターボのレースの事だが・・・」

「はい」

先輩たちの予定などを話し終えた山田トレーナーが私の方を向いた。

「1月はトレーニングに集中して2月に京都記念、3月に日経賞を目指すぞ」

「あれ？大阪杯は出ないの？」

3月の末に開かれる大阪杯は春のGIとして人気が高い。

「今のお前に必要なのはレースの楽しさを思い出す事だ」

「レースの楽しさ……」

「そうだ、今のお前はレースに対して楽しさを忘れている。皐月賞の時も、ダービーの時も負けるといふ恐怖はあつたかもしれないがなによりレースを楽しんでいた。だが菊花賞以降、ジャパンカップの時も有《font:ul40》馬《font》記念の時もお前はレースを楽しんでいなかった。走るのを苦痛に感じるウマ娘は弱くなる。だからまずはお前にレースの楽しさを思い出してほしいんだ」

そう言つて山田トレーナーは笑顔を浮かべた。

レースの楽しさ……。

そつか、私はレースに勝つ事だけを考えすぎてレースの楽しさをすつかり忘れてしまつていた。

確かに負けるのは怖いし辛い。

でもレースで走るのには確かに楽しかった。

それを思い出させる為に山田トレーナーはあえてGIIを選んだんだ。

GI恐怖症にならないように……。

時は進んで早くも2月の京都記念。

久しぶりの標準レース服とシューズによるレースだ。

やっぱりGIに比べるとお客さんからの注目度が低い為に参加するウマ娘たちも幾分か落ち着いた様子が見られる。

もちろん中にはピリピリしたウマ娘もいるようだ。

「ちよつとそこの貴女！」

「私？」

そんなちよつとピリピリしたウマ娘に声をかけられた。

「イクノ先輩とターボ先輩に期待されているからつて調子にのらない事ですわ！」

「えつと……誰……？」

少なくとも見知つた顔ではない。

「自己紹介が遅れましたわね。私の名前はナイスファイト！ナイスネ

「イチャお姉さまの一番弟子ですわ！」

なるほど、チームカノープスの新人さんは彼女なのか。

「そういえばちょうどタイミングの関係で顔を合わせた事は無かったな。」

「私はインパクトターボ。今日はよろしくね」

「ふん！ライバルとなれ合う気はありませんわ！」

「どうやら気が強いようだ。」

結局そのまま彼女は行ってしまった。

チームカノープスはGⅢでも全員でレースを見に来るらしいしくノ先輩もツイン先輩もいるだろうからレースががんばるぞ。

SIDE：実況

「スタートしました。1人好スタートはダービーウマ娘インパクトターボ。後続を引き離してどんどん加速していきます。2番手は大きく引き離されてグッドレディ。その後ろにパクパツクン。外からビオフェルン。その後ろにナイスファイト。マツハシンディ。少し離れてハローラビット。外にテラリアン内にマイクラン。最後方はポツンと一人シンバシエレジ。先頭インパクトターボは大逃げの体勢。後ろとの差は10バ身以上開いている。さらにさらにその差が広がっていきます。これはセーフティリードになるのでしようか。それとも後ろの娘達が間に合うのか。インパクトターボ早くも第3コーナーを曲がって第4コーナーへと抜けていく！懸命に後ろの娘たちが追い上げるがこれは届かないか！直線に入ってインパクトターボ一人旅！後続はまったくついてこれません！堂々たる走りです！今1着でゴールイン！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー！」

スタートを上手く決めて私は先頭をひた走る。

いつもと同じ。

でも久しぶりに周りに誰もいないレース。

山田トレーナーも脅威になるウマ娘は出ていないから気楽に走ってこいって言っていた言葉通り、私に追いつけるウマ娘はいなさそう

だ。

唯一あのナイスファイトだけが強いようだが私に追い付いてくる気配はない。

ああ、レースってこんなにも楽しいものだっけ。

手を抜いている訳ではないが、勝てるか勝てないか分からないレースばかりしていた今の私には確かにちょうどいいリハビリになりそうだ。

私は余裕をもってレースに勝利することができた。

「いい走りでしたねインパクト」

「ナイスな大逃げだったぞ」

レース後の控室にイクノ先輩とツイン先輩が訪ねてきた。

「あ、イクノ先輩、ツイン先輩。ありがとうございます」

二人に褒めてもらって私はまた少しレースの楽しさを思い出した。

「うわーん！すみませんお姉さまー！」

そんな事を思っていると隣の控室・・・ナイスファイトの控室から大きな泣き声が聞こえてきた。

「ふう・・・ファイトも悪い娘ではないのですがもう少しネイチャ以外にも心を開いてくれると良いのですが・・・」

「ネイチャもあの娘には妙に甘いもんね」

きっと運命的な何かなんだろう。

イクノ先輩も一見厳しく見えるけど私には結構甘いし、ツイン先輩は誰にでも元気で優しい。

チームリーダーはナイスネイチャ先輩なのだがあまりにナイスファイトを甘やかすのでイクノ先輩が苦言役に徹しているらしい。

「GⅢでは勝てるのにGⅡ以上では2着の常連・・・もう少し根性が欲しいところですね」

「イクノー、また額に皺が出来てるぞー」

イクノ先輩が頭を悩ませている様子をツイン先輩が苦笑しながら見ていた。

そして3月日経賞・・・。

「あ・・・」

そこにはナイスファイトが居た。

「今日こそ貴女に勝ってお姉さまに褒めていただきますわ！」

「えーつとがんばってね？ 負けないけど」

まさか再び会うとは思わなかったけどうん、負けるつもりはないぞ。

SIDE：実況

「スタートしました！ 1人飛び出しましたインパクトターボ！ 他のウマ娘達についていけない様子！ 悠々と後ろを引き離していきますインパクトターボ！ 早くもその差は6バ身以上！ 後方集団先頭にはユニオンディーレが居ますが険しい表情をしています！ ちょうど中間にはナイスファイト！ 最後方はポツンと1人トテトテがいます！ 早くも第3コーナーを回ったインパクトターボ！ 有《font:ul40》馬《font》記念の鬱憤を晴らすかのような大逃げです！ ユニオンディーレとナイスファイトが懸命に追いかけますがこれは届きません！ インパクトターボ逃げ切りしましたゴールイン！」

SIDE：インパクトターボ

「ッシー！」

私は今日も先頭を走る。

後ろはついてこれない。

グツと力を込めて走ればさらに後ろを引き離す。

うん・・・やっぱりこれだ！

後ろから何やら大きな叫び声が聞こえた気がしたけど私は気にすることなくゴールを駆け抜けた。

「さすがですね。インパクト」

「これはターボも負けてられないぞ」

今回もイクノ先輩とツイン先輩が控室を訪ねてきてくれた。

「お姉さまあああああー！」

隣からやはり大きな泣き声が聞こえてくる。

「はあ・・・もう少しあの娘も精神的に成長してくれると良いのです

が・・・ヤハリモットレースニ・・・(ボソリ)」

「イクノー、リラックスリラックス」

何やら不穏な事を言うイクノ先輩にターボ先輩が肩を揉んでリラックスさせようとしていた。

4月は新入生のスカウトやクラス替えなどで落ち着かないだろうからとレースは無しになった。

なおクラス替えは行われたが私たち4人は同じクラスだったのでとてもありがたかった。

なおスレツジハンマーは別クラスだった。

5月は私は適性外なので出ない天皇賞春が開かれる。

キタちゃん、サトちゃん、ルーちゃんが出場するので私は応援に来ていた。

誰が勝ってもおかしくない。

「キタちゃん、サトちゃん、ルーちゃんががんばれー！」

ターフに出てきた3人を私は応援する。

3人はそれぞれのチームや私に手を振るとゲートへと入っていった。

勢いよく飛び出したのはキタちゃん。

その後ろをルーちゃんがついていく。

中間辺りで様子を伺うサトちゃん。

その光景は私にとってはいつもの私たちのレースによく似ている。

唯一の違いはそこに私が居ない事……。

「確かに天皇賞春はお前には無理だ。だが有《font:ui40》馬《font》記念ならお前もあそこに入れる。それまでにレースの楽しさを思い出せ」

「はー。」

私は食い入るようにレースを見る。

キタちゃんと私は並んでいる……。

ルーちゃんはずつとついてくる……。

サトちゃんは後ろから狙いを定めてくる……。

第3コーナーから第4コーナーで二人が上がってくる。

私とキタちゃんはスタミナの限り速度を維持する。

でもゴール直前で私の幻影は失速してしまった。

「うっ！くっ！」

涙を堪える。

頭に山田トレーナーの手が置かれた。

「大丈夫だ・・・お前だつてあいつらに引けを取らないウマ娘だ・・・」

「はい・・・！はいっ！」

天皇賞春・・・キタちゃんの逃げ切りで勝負がついた。

大丈夫！きつと！きつと今年の有《font:ul40》馬《f

ont》記念なら！

顔を上げた私の眼は潤んでいたが涙を流してはいなかった。

そしてGⅡ目黒記念・・・。

「・・・」

またナイスファイトが居た。

「がるるるる！」

「いや犬じゃないんだから・・・」

敵意剥き出しのナイスファイトに私は何も言えなかった。

SIDE：実況

「スタートしました！飛び出したのはやはりインパクトターボ！後続も懸命に追いかけますが引き離されていきます！2番手にはオーバードロッド！今日は珍しく前目にいますナイスファイトが3番手！その後ろにサファイヤリング、ゼニガタピッチャーなどがいます！最後方はドカドカ！インパクトターボ我が道を行くとばかりに飛ばしまくります！2番手オーバードロッド懸命に追いますが苦しそうです！ナイスファイトが2番手に上がります！インパクトターボ先頭！後続はまだもがいている！インパクトターボ直線に入っても速度が落ちません！そのままゴールを駆け抜けましたゴールイン！」

SIDE：インパクトターボ

「ッシー！」

安定したスタートダッシュ。

私の売りを完璧に生かして私は一気に前に出る。

いつもの景色、いつもの走り。

そうだ・・・これが私の走りなんだ！

何かを思い出した私はそのまま逃げ切ってゴールした。

「きいー！なんで勝てないんですの！」

ナイスファイトが地団太を踏んでいる。

「えっと・・・2着おめでとうー！ナイスファイト！」

「貴女嫌いですわああああ！」

ナイスファイトは泣きながら走って行ってしまった。

うん・・・ちよつと悪い事しちゃったなあ・・・。

育成目標：宝塚記念を3着以内に入る 残り2ターンの

第2シーズン第15話 まだ血は続いている（馬）

「お、起きたかターボ？どんな夢を見ていたんだ？」

どうやらブラッシングの最中に気持ちよくて寝てしまっていたらしい。

懐かしい夢を見たものだ。

まだ引退してからそれほど経っていないのに随分と遠くに感じる。それだけあの3年間のレースは俺にとって色濃く忘れがたいものなのだろう。

引退した俺は生まれ故郷の牧場に戻り、種牡馬として登録された。GI5勝の種牡馬として期待されてはいるが、父方も母方もマイナー血統な上に大逃げ馬の子は大成し辛いという前例がある為に、高値を付けると依頼が来なくなるだろうという判断からGI勝利馬としてはかなりリーズナブルな値段になった。

そのお陰か、あるいははまだ種牡馬として未知数であるからか、お得なGI血統と判断されたのか、種牡馬登録された初年度の2005年には30頭ほどの依頼があった。

大半が零細牧場でお得な価格でGI馬の種が買えるならもしかしたら、という奴だ。

その中で唯一例外と言えるのがブルーちゃんとの種付けだった。馬主さんが非常に仲の良い2頭なのだからと言ってくれたらしい。最も話題のライバルカップルの子馬なら高く売れるかもしれないという打算もあつただろうが・・・。

まあ初年度はそんな感じで割と平凡に終わったのだが次の年にまさかあんな事になるとは思わなかった。

それはそろそろ今年の種付けシーズンだなと俺がこっそり牧場でアップしていた時だった。

やたら慌てた牧場長が俺の元に走ってきた。

「ターボ！お前のブルーの子供が生まれたぞ！」

はてさてどんな子供が生まれたのかと俺は楽しみに牧場長の言葉を待った。

「それがなー！なんと白毛馬だそうだ！ほら！」

W a t t s ?

牧場長が差し出した携帯電話の写真にはかなり荒い画像ではあるがブルーちゃんと思わしき牝馬とその乳を一生懸命に吸っている白毛馬が写っていた。

そう、まさかの1頭目で奇跡的な確率、1万頭から2万頭に1頭という確率を引き当てたのである。

ちなみに他の子馬はすべて俺または母譲りの体毛だった。

当然ながらこのニューースは競馬界は愚か一般世間にすら知られるようになつた。

最初は地元のニューースで珍しい白毛の馬が誕生・・・程度だったのだが噂が広まりいつの間にか全国ニューースになつていたようである。

その結果、2匹目の何とやらを狙った生産牧場から次々と種付け依頼が殺到。

まだ1年目の産駒しか居ない為に種牡馬としての評価よりは奇跡の白毛馬の種牡馬としてしか認知されていないので著名な生産牧場からは殆どお声がかからなかったがそれでも2年目は100頭を超える数を種付けする事になった。

もはや苦行である。

俺は殆ど評価されずに年間10頭くらいあれば御の字で生活できるな程度にしか考えていなかったなので全くの予想外だった。

あのお願いだから餌に精力剤混ぜないでください。

美味しくないんです・・・。

その後、1歳になつたサムシングブルーの2006はセリで非常に高値で取引された為、またも沢山の種付け依頼があつた事は言うまでもない。

経済動物の闇ここに極まれりである。

そんなこんなでそのサムシングブルーの2006はその美しい白毛とライスシャワー、サムシングブルーと結婚に関する名前から取つて、牝馬だったのでシルクヴェールと名付けられた。

シルクヴェールはその後中央競馬でデビュー。

中々勝利はできなかつたがそれでも何とか未勝利は脱出し、時折重賞にも出るようになっていた。

残念ながら牝馬3冠には出られなかつたが秋に何とか天皇賞秋の出走条件であるオールカマーを勝利し、天皇賞秋へと出走が決まったのである。

そう言えばそろそろ出走の時間でなかつたかしら？

そんな事をブラッシングを受けながら考えていると厩務員さんがラジオの電源を入れてチャンネルを合わせてくれた。

牧場の間では競馬の放送をラジオで馬たちに聞かせておくとなぜか大人しくなる事が知られている為にラジオが厩舎内に設置してあるのだ。

実際今まで厩舎内で落ち着かなかつた他の馬たちも聞き入るようにラジオに集中している。

もちろん俺もシルクヴェールが気になるので聞き耳を立てる。

『さあ、今年もやってまいりました第140回天皇賞秋。今日の東京競馬場は晴れ、馬場は良馬場となっております。注目の1番人気は4枠7番女帝ウオツカ。海外遠征を終えてヴィクトリアマイル、安田記念を勝利しておりますウオツカ。天皇賞連覇に期待がかかっております。そしてもう1頭注目馬がいます。奇跡の白毛馬。あのサムシングブルーの産駒、7枠13番シルクヴェールです。オールカマーを見事に勝利し、天皇賞への切符を手に入れました。父はあの大逃げで話題となったGI馬インパクトターボです。はたして初の白毛馬のGI勝利となりますでしょうか。これがGI初挑戦であります。まもなく出走となります天皇賞秋。出走馬を振り返ってみましょう。1枠1番コスモバルク。地方の星。1枠2番スクリーンヒーロー。前年度ジャパンカップを制しています。2枠3番カンパニー。毎日王冠ではウオツカを下しております。2枠4番アドマイヤフジ。鞍上はスミヨン騎手。3枠5番ヤマニンキングリー。札幌記念を勝利しております。3枠6番アサクサキングス。07年菊花賞馬。4枠7番ウオツカ。1番人気です。鞍上は今年からの相棒武豊騎手。4枠8番キャプテントゥーレ。こちらは葦毛です。5枠9番サクラオ

リオン。函館記念を勝っております。5 枠 10 番シンゲン。新潟大賞典、エプソムカップを勝利しております。6 枠 11 番スマイルジャック。鞍上は三浦皇成騎手。6 枠 12 番ドリームジャーニー。今年の宝塚記念を制しております。7 枠 13 番シルクヴェール。奇跡の白毛馬。美しい鬣と尻尾を靡かせております。7 枠 14 番サクラメガワンダー。今年の金鯉賞を 1 着です。7 枠 15 番オウケンブルースリ。京都大賞典を 1 着。8 枠 16 番ホツコーパドウシャ。福島民報杯 2000 メートルのレコード持ちです。8 枠 17 番エイシンデピュティ。08 年の宝塚記念を勝利しております。8 枠 18 番エアシェイデイ。大外枠ですがどうでしょうか。以上 18 頭フルゲートでの出走です。今スターターが旗を振りましてファンファールです。東京競馬場に押し掛けた観客たちの歓声が響き渡ります。さあ間もなくゲート入りが完了します。係員がどきまして体制完了。：スタートしました。綺麗に並んだスタートになりました。ドリームジャーニーは勢いがつきません最後方。オウケンブルースリなども後ろから行きます。先頭争いはスクリーンヒーロー。外からエイシンデピュティが行きます。間に挟まれてキャプテントウレと 3 頭の先頭争いです。コスモバルク 4 番手。その後ろにヤマニンキングリーとサクラメガワンダー。内側にアドマイヤフジ。中団グループにシンゲンが居ます。内にカンパニー、外にホツコーパドウシャが居ます。中段グループ後ろ側、内にオウケンブルースリ外からエアシェイデイ。その後ろに白い馬体のシルクヴェール。そしてウオッカは後方から 5 番目の位置に居ます。その後ろにスマイルジャック、アサクサキングスが続いています。ドリームジャーニとサクラオリオンが後ろの 2 頭です。3 コーナーカーブに向かいます。先頭はエイシンデピュティ。キャプテントウレが 2 番手になりました。まもなく 1000 メートルを通過タイムは 59 秒 8 です。つとここで後方に控えていましたシルクヴェールがどんどん前に進んでいきます。中間 1000 メートルを過ぎたところでシルクヴェールが前に上がっていきます。物凄い勢いで早くも先行馬集団を追い抜いて先頭のエイシンデピュティに並ぶ・・・いや並びません

！エイシンデピュティを抜いてシルクヴェールが単独で先頭に立ちました！その差を3馬身、4馬身と広げていきます！ロングスパートをかけましたシルクヴェール！しかし早すぎないでしょうか!?最後まで走り切れるのか分かりません！さあシルクヴェールが先頭で直線に入りました残り500メートル！まず集団を抜け出してきたのはカンパニー！後方から内側についてウオツカも上がってきます！先頭はシルクヴェールその差はまだ3馬身！懸命に逃げる残り300メートル！シルクヴェール逃げる！カンパニーが追いつがる！ウオツカが内側から抜け出してカンパニーに並びかける！シルクヴェールがまだ先頭その差は2馬身！ウオツカがカンパニーを抜いて前が出る！ウオツカ届くか！シルクヴェールが逃げ切るのか！残り100メートル！ウオツカ渾身の走り！しかしシルクヴェールだ！シルクヴェールが逃げ切ってゴールイン！これが私のヴァージンロード！なんと1000メートルものロングスパートで走り切りましたシルクヴェール！最後の直線は父インパクトターボを思わせる走り！差して逃げる！なんとという走りを見せてくれたのでしょうかシルクヴェール！白毛馬史上初のGI勝利です！』

やったー！よくやった我が娘シルクヴェール！

「うおお！お前の娘はすごいなターボ！」

一緒に聞いていた厩務員さんがそう言っただけ一緒に喜んでくれる。

「やったなターボ来年また種付けでモテモテだぞ！」

しまったそうだったあ！

いや種付けは行為自体は嫌いじゃあないんですよ？

ただ数が多すぎてちよつとね？

そこ！贅沢モノめなんて言うな！

お前も数か月で100回種付けとかやってみろ！

後半なんかただの苦痛だぞ！

それに精力剤入りの餌は不味いんだぞ！

それからしばらく俺は他の牡馬から贅沢モノと呼ばれてちよつと

仲間外れにされたのだった。

俺が悪いのか!?

そんな風に不貞腐れているとまだつけっぱなしだったラジオから裏でやっていた新馬戦の実況が流れ始めた。

『スタートしました。やばらついたスタートになりました。1頭飛び出したのはバクソウオー。しかし様子がおかしいです。鞍上今田平太騎手懸命に手綱を引いてバクソウオーを制御しようと思死ですがバクソウオー全く言う事を聞きません！完全に暴走状態に陥っておりますバクソウオー！そのままコーナーに入りますボウソウオー・・・失礼しましたバクソウオー！今田騎手がなんとかコーナーを曲がらせていますが大きく膨れ上がって曲がっております！膨れ上がった結果後続が一気に迫りますがボウソウオーはまだ先頭！なんとという馬なんだボウソウオー！大回りをして追い付かれたのにまた後ろを引き離す！ボウソウオー先頭！騎手との折り合いがつかないままゴールしましたボウソウオー！・・・あ、バクソウオーです！1着はぼうそ・・・バクソウオーです！』

おいおい大丈夫なのかボウソウオー・・・じゃなかったバクソウオー。

ん・・・？

バクソウオー・・・はてどこかで・・・。

ああ！確か2年目に種付けした中に確かサクラバクシンオー産駒の牝馬が1頭いたはずだ！

そいつの名前がバクソウオーだったはず！

こいつも俺の子供かあ！

その後もバクソウオーは乗り換えられた騎手の言う事を聞かず、暴走を繰り返した為に某新世紀アニメになぞらえて暴走モード突入などと言われてしまったのである。

短距離戦メインで暴走しつつも勝ってしまっているのだから質が悪い。

1戦ごとに騎手が変わり、4戦目のマイル戦にて乗り替わったのが俺の元相棒若井騎手だった。

インパクトターボの息子だから若井騎手ならいけるのでは？という馬主と調教師の願いが見て取れる。

なお相棒でもバクソウオーの暴走癖は治らなかったが、元々馬の邪魔をせずにコースを誘導する事に慣れていた・・・というか慣れざるをえなかった相棒はバクソウオーを見事にコントロールしてゴールに導けるという事で専属が決まったらしい。

その後バクソウオーは徐々に出走距離を伸ばし、勝ったり負けたりしていったのである。

親父、あなたの血はまだ続いてるぜ・・・。

インパクターが代表産駒：シルクヴェール バクソウオー

第2シーズン第15話 まだ想いは続いている（ウマ娘）

立て続けのGⅡレースの最中の出来事……。

4月下旬頃……。

「皆さん！バクシンしてますかー！私は今日もバクシンです！」
いつもよりハイテンションのバクシンオー先輩がチームルームにやってきました。

その右腕には何かが抱えられている。

「わはー」

それは小柄なウマ娘だった。

純粋な目を輝かせて楽しそうにしている。

「えつとスマホスマホ……」

「ちよわ！待ってください！誘拐ではないのですよ！」

スカイ先輩がボケなのかマジなのか分かり辛いリアクションをバクシンオー先輩が止める。

「トレーナーさんに頼まれて新人さんを連れてきたのですよ！」

そういつてバクシンオー先輩は新人ウマ娘を下した。

「初めまして！バクソウオーです！好きな事は走る事と褒めてもらう事です！座右の銘は我武者羅！」

バクシンオー先輩に負けないぐらいの元気っ娘、バクソウオーちゃんがそう言って自己紹介した。

「バクシンのな何かを感じますのできつと素晴らしいバクシンを見せてくださいましょう！」

そういうバクシンオー先輩だが私も運命的な何かを感じる。

少し認めたくはないが……。

「ば……ぜえ……バクシンオー……ぜえはあ……嬉しいのは……分かるが……少し落ち着け……」

恐らくバクシンオー先輩の暴走を見た山田トレーナーさんが大慌てで追いかけてきたのだろう。

ウマ娘を追いかけるのはやはり辛かったらしく肩で息をしている。

「そもそもまだスカウトの了承を得てはいないんだぞ」

「やっぱりバクシンオーちゃんの早とちりなの」

「アイネス先輩がそう言ってバクシンオー先輩にメツとやっている。でもボクは嬉しかったです！今まで評価してくれる人が少なかつたですから！」

うーん何かちよつと困った癖でもあるのかな？私みたいに。

「評価されない・・・か・・・なんか親近感湧いちゃうな」

「パーマーのいいところはアタシが全部知ってるから！」

少し思う所がある。パーマー先輩をヘリオス先輩が慰めている。

「改めてどうする？バクソウオー」

「はい！今日からお世話になります！」

こうしてバクソウオーが私たちのチームに参加する事になった。

「よろしくねバクソウオーちゃん」

さすがにちよつと突然すぎたので新人歓迎会は翌日にする事にしてチーム恒例の新人歓迎レースをする事になった。

「芝の2000メートル、各自好きに走れ。いくぞ。よいい、スタート！」

「ッシー！」

スタートダッシュが得意な私は先頭に出る事に成功した。

「相変わらずスタートが上手なの！」

「くう！流石アイネス先輩！」

先輩としての意地か、アイネス先輩が並びかけてくる。

もちろん私も簡単には抜かせない。

「バクシーン！」

そんな私たちを勢いよく抜いていったのがバクシンオー先輩。

流石に最高速度ではバクシンオー先輩が一番だ。

ただやっぱり適正距離が短いので2000メートルは途中で力尽きてしまうのだが・・・。

その時だった。

ゾクリと背後に恐怖を感じた私たちは思わず後ろを振り返ってし

まった。

最後方にいるバクソウオーちゃんの様子がおかしい。

そう思った次の瞬間だった。

「ウオオオオオオオオオオ!!!バ!!!ク!!!ソオオオオオオオオオ!!!」

物凄い咆哮と共にバクソウオーが物凄い速度で走り出した。

後ろにいた他の先輩たちを追い抜いて、あっという間にバクシンオー先輩に並びかけた。

「うっそ!?!」

「ちよつとありえないっしょ!?!」

「へえ!?!」

「うそー!?!」

後ろに居た他の先輩方も驚いている。

何せ明らかにオーバーペースだからだ。

「そのバクシン力は素晴らしいです!ですが負けません!バククシンン!」

「バククソー!」

もはや逃げというよりただただ暴走する二人だったがその速さは実に恐ろしいものだった。

しかし流石に無理があつたのか、あるいは適正距離の限界か1400メートルを過ぎた辺りで二人とも失速。

バクシンオー先輩は1600メートルを超える前に抜かれ、バクソウオーちゃんは何とか1600メートルまで頑張っていたけどそこから完全に力尽きて途中でリタイアしてしまった。

「はい、スポーツドリンクだよ」

ファル子先輩がバクソウオーちゃんにスポーツドリンクを手渡す。

「ありがとうございます」

私はまだ疲労でちよつとフラフラしているバクソウオーちゃんをどうしても放っておけず後ろで支えてあげる。

「まだトレーニングも受けてないのにバクシンオーちゃんに追い付くなんてすごいの」

アイネス先輩が言う通り、私たちの中で一番最高速度が速いのはバ

クシンオー先輩だ。

スプリンターとして最高と言われるほどのバクシンオー先輩に追いつけるのはチームでもアイネス先輩だけだった。

そのアイネス先輩でもかなりの無理をしての走りなのでバクシンオー先輩がいかにも優れたスプリンターかが分かる。

そのバクシンオー先輩に追い付いたバクソウオーちゃんがスプリンターとして優れているのは間違いない。

「でもあんな走りしてたら体壊しちゃうよ？」

「確かにアタシらもラスパにはガンダ（ガンガンダツシュ）全力疾走するけどあれはちよつとやりすぎっしょ」

確かにパーマー先輩やヘリオス先輩の言う通り、スパートは全力を出すけど最初からというのは滅多にしない。

私だつて序盤から後ろを引き離す走りをするけど全力を出し続けている訳ではない。

それを最初から最後まで全力疾走を続けたバクソウオーちゃんは異常といつても良い。

「その・・・昔からスイッチが入っちゃいますと手が抜けなくなってしまうんです」

恥ずかしそうに頭をかくバクソウオーちゃん。

そのせいでスカウトも無く諦めかけていたところを山田トレーナーに勧誘されたらしい。

そしてちよつどその時居合わせたバクシンオー先輩が早とちりして抱きかかえてチームルームに連れて来たのが先程の出来事らしい。

バクシンオー先輩も暴走癖があるからなあ・・・。
あれでレースは本能的にペースメイキングするんだよね。

中距離以上走ろうとすると暴走するけど・・・。
「なるほどねえ。浪漫癖のある山田トレーナーが気に入る訳だね。私も大逃げ癖でスカウトされた訳だし」

その言葉に先輩方もウンウンと頷く。

「お前らなあ・・・」

微妙にデイスられた山田トレーナーがため息をついた。

GⅡ目黒記念から少し後……。

チームルームに向かっている途中の出来事だった。

「見つけたぞシルクヴェール！」

「ひゃい!? ウオツカさん!？」

大きな声に驚いて向いた方にはスピカのウオツカさんと白い髪のウマ娘、シルクヴェールちゃんがいた。

「この前のリベンジだ!俺と勝負しろ!」

「ええ!?ただ合同練習で並走しただけですけど!？」

「いいから勝負だ!」

そう言っつてウオツカさんはシルクヴェールちゃんを捕まえると引き摺って行ってしまった。

「うええ〜!?私今日ハッピーミックちゃんと白毛ウマ娘のお茶会なのに〜!」

シルクヴェールさんの悲痛な叫びは残念ながらウオツカさんには通じないようだ。

なんだろう……シルクヴェールちゃんとは運命的な何かを感じるなあ……。

とはいえ無関係の私が静止するわけにもいかず結局そのまま見送るしかなかった。

助けてあげた方が良かったかなあ?

その翌日……。

「え!?サトちゃん短期留学に行くの!？」

「はい、お父様とお母様の教育方針で今年の夏から冬にかけてフランスに行く事になりました」

日本のウマ娘が海外のトレセン学園に短期留学する事も良くある。実際スピカのスズカ先輩はアメリカに留学していたしウオツカさんもドバイに留学した経験がある。

「じ、じゃあ、フランスのレースにも参加するんですか?」

「はい、沖野トレーナーさんとも相談して凱旋門賞に挑戦する予定です」

「頑張っつてねサトちゃん。私たちは応援に行けないけど放送はちゃん

と見るから」

「はい！」

こうしてサトちゃんは6月にフランスに向かって旅立っていった。そんな日常を過ごしつつ、気が付けば宝塚記念がやってきた。

「さあ今年もやってまいりました宝塚記念。注目ウマ娘はこの5人。前回の皐月賞、ダービーを大逃げで制しました逃亡屋、インパクトターボ！菊花賞を同着で勝利したキタサンブラックとサムシングブルー！天皇賞秋、有《font:ul40》馬《font》記念を見事に勝ちましたシンボリクリスティ！芝、ダート、海外と戦う戦場を選ばないオールラウンダー、アグネスデジタル！この5人の内誰が勝利するのでしょうか！」

なんと！オールラウンダーで有名なアグネスデジタル先輩が参加しているとは！

有名人と戦えるとはありがたい。

そう思っていると何やら息の荒いピンクの髪色のウマ娘が1人。

緊張しているのだろうか？

声をかけようと近寄ると何かブツブツと喋っているのが聞こえる。

「あああ……！デジタンは幸せ者です！大逃げる傾奇者インパクトターボちゃんに大逃げ演歌歌手のキタサンブラックちゃんの逃げ対決！そしてそれに挑むサムシングブルーちゃんにシンボリクリステイちゃん！これは心の4K動画に納めなければウマ娘ちゃんファン失格！いやもはや義務レベル！三女神様！デジタンをウマ娘として産んでくださってありがとうございます！」

……うん、個性的な方らしい。

「あの……」

「ふあ!?だ、誰え?あ!……モ、モシカシテゼンブキイテマシタカ?」

「はい……」

「Oh……」

しばらく気まずい沈黙が流れた。

「えつと……改めましてインパクトターボです。今日はアグネスデジタル先輩の胸を貸してもらおうつもりで全力で挑まさせていただきますま

す」

「ひよわ！そ、そんなデジタンには恐れ多い！」

「いや・・・芝ダート海外問わずに戦って勝利してる先輩がそんな卑屈にならなくても・・・」

「いえ！デジタンは主役ではないのです！主役は輝くウマ娘ちゃん達！デジタンは脇役！勝利は色々と滾つちやった結果にすぎません！」
な、難儀なお方の様だ・・・。

その後は色々とおふれ出そうなおアグネスデジタル先輩と別れてキタちゃんとおルーちゃんの元へ行った。

「ターちゃん、アグネスデジタル先輩はどうだった？」

「その・・・個性的だった・・・」

「あ、やつぱり？先輩たちに聞いてた通りだったか」

「どうやらキタちゃんは先輩たちからおアグネスデジタル先輩の話を聞いていたらしくそこまで戸惑いは無い様だ。」

「わ、私は以前お会いした事があるのですけど・・・なんていうか・・・突然気絶するのでびっくりしました」

色々だなあウマ娘も・・・。

こうして宝塚記念が始まった。

SIDE：実況

「さあ間もなく始まります宝塚記念。皆様には選ばれました18人の人気ウマ娘達。果たして勝利するのはどのウマ娘でしょうか。今日走るウマ娘を振り返ってみましょう。1枠1番サイレンスドール。1枠2番アグネスデジタル。2枠3番アスカデイベイト。2枠4番マイハートソング。3枠5番シンボリクリスティ。3枠6番シンユニヴァース。4枠7番サンライズジャガー。4枠8番ファルコンカフェ。5枠9番サムシングブルー。5枠10番インパクトターボ。6枠11番チェストココヤマ。6枠12番ベストオブゲーム。7枠13番タンクフレール。7枠14番メグロランページ。7枠15番キタサンブラック。8枠16番ステツプザワールド。8枠17番タツプダンスシテイ。8枠18番ダイテツバートラム。以上18人フルゲートでのレースです。スターターが今旗を振ってファン

ファールです。多くのファンに見守られながらウマ娘たちが次々とゲートインしていきます。今最後の1人が収まりました。：スタートしました。まず飛び出したのは2人。インパクトターボとキタサンブラックが先行争い。互いに譲りません。その後ろ3バ身から4バ身の所にサムシングブルーが付きました。その後ろに少し離れましてマイハートソング。少し間が空いてサイレンスドール。外にアグネスデジタル。ダンツフレームがその後ろにつけて内にはシンボリクリスティ。縦長の展開のまま第1コーナーに向かいます。先頭のインパクトターボとキタサンブラック足を緩めないままコーナーを曲がっていきます。サムシングブルーはその後ろ3バ身から4バ身の位置をキープ。そこから3バ身離れてマイハートソング。少し引き離されたか3バ身ほど後ろにベストオブゲームとサイレンスドール。その後ろにタップダンスシティとアグネスデジタル。シンボリクリスティとダンクフレールはやや後方。最後尾はチェストヨコヤマ。早くも第3コーナーに入りましたインパクトターボとキタサンブラック！サムシングブルーがジリジリと上がっていきます！マイハートソング苦しいのかついていきません！タップダンスシティが上がっていきます！シンボリクリスティもそれに続きます！アグネスデジタルもスパートをかけます！第4コーナーを曲がって最後の直線！インパクトターボとキタサンブラックが激しい先頭争い！サムシングブルーも追い上げるが中々差が詰まりません！シンボリクリスティは前が詰まって進めません！アグネスデジタルが上がってきますがこちらも厳しい！先頭はインパクトターボとキタサンブラック！どちらも譲りません！譲らないままゴールイン！果たしてどちらが勝ったのか！僅かにインパクトターボが先にゴールしたように見えましたがどうでしょう！判定は・・・インパクトターボです！インパクトターボが宝塚記念を勝利しました！」

S I D E：インパクトターボ
「ツシー」

ゲートが開くと同時に勢いよく飛び出す。

素早く先頭を取るがキタちゃんも並んでくる。

ちらりと横目で見て互いに微笑むとさらに加速する。

「ついてくー！ついてくー！」

後ろにはやっぱりルーちゃんが居る。

クリステイとアグネスデジタル先輩は中団あたりだろうか。

久しぶりのG1レース。

負けたくないと言う思いはあるが怖くはない。

キタちゃんと、ルーちゃんと競い合うのが楽しい。

大丈夫、私は行ける！

足に力を込めて前に進む。

最後のコーナーを曲り、ゴールに向けて全力疾走をする。

「ううー！追い付けないー！」

ルーちゃんは今日は少し調子が悪いようだ。

「邪魔だよー！」

シンボリクリステイは前を塞がれているようだ。

「ウヒー！！滾りますうー！でも届かないー！それもまたヨシ！」

アグネスデジタル先輩も無理なようだ。

なら残るは隣のキタちゃんだけ！

「負けるかあー！」

「私だあー！」

2人でもつれ合うようにゴールを走り抜けた。

「判定は？」

私たちは直ぐに掲示板の方を見た。

そこには私の番号が表示されている。

「やったあー！私の勝ちだあー！」

「ちえー！あとちよつとだったのにー！」

久しぶりのG1ライブセンター頑張るぞ！

私はキタちゃんルーちゃんと健闘を称えあうと控室に向かった。

育成目標：宝塚記念を3着以内に入る CLEARR

第2シーズン第16話 いざ名種牡馬（馬）

春……。

それは出産を迎える馬、種付けをする馬で牧場が最も忙しい時期である。

G I勝利産駒種牡馬となった事で去年に引き続き俺には大量の種付け依頼がやってきた。

流石にリーズナブルなお値段のままだとG I種牡馬というブランドを維持するのに問題があると他の生産牧場などから言われた為に値上がりしたが、それでもかなりの数である。

いや〜……俺なんか180頭もの種付け依頼とか……震えるぜ……。

いくら馬の種付けシーズンが2月から7月までと比較的期間があるとはいえ1日に複数回こなす必要がある。

優良種牡馬が短命なのも分かる気がする……。

「いいか新入り。君は競争成績はあまり良くなかったが良血統故に種牡馬として非常に期待されている」

「はい、ターボ先輩」

俺は新入り種牡馬君に種牡馬としての心構えをアドバイスしていた。

「そしてそんな君に一つだけアドバイスをしておこう。50を超えたらやばいと思え」

「え……？」

「いいか！50を超えた辺りでもはやただの苦行だ！100を超えた辺りで出てはいけない何かが出ていく感覚になり！150以降は『あ、俺命削ってる』ってなるからな！」

「ええ……」

困惑する後輩種牡馬だがそれが現実だからな！

他の種牡馬達も大げさな、といった様子だがお前ら負け組種付け馬に言われとーないわ！

悔しかったら50回以上種付けしてみろ！

今年の種付け回数言ってみ!

俺のその言葉にはかの種牡馬が黙った。

種牡馬の格付けはこの牧場では俺がダントツでトップなのだから。ふん! 分かればよろしい。

そんな俺の様子にどうやら本当らしいと思っただ新人種牡馬君が密かに怯えていた。

まあ来年以降どうなるか分からんがね。

俺はそんな事を思いつつラジオの競馬中継に耳を傾けた。

今日は皐月賞。

マイルレースであるスプリングステークスをギリギリ3着入賞したバクソウオーが出走するのである。

正直なところ勝てる見込みは無い。

何せ1600のレースでは勝ち星があるが1800以上ではまだ0なのである。

調教師もオーナーも勝ち目はないと見ているが折角権利があるのだから記念出走させてやろうという事らしい。

そもそも暴走癖が治らず1600のレースですら時々へ口へ口になつて負けることがあるバクソウオーが果たして皐月賞を走り切れるのだろうか。

そんな事を思いながらラジオに耳を傾けた。

『まもなく始まります第70回皐月賞。今年も世代最速を決めるクラシックレースのシーズンがやってまいりました。注目は1番人気のヴィクトワールピサ。ここまで非常に優秀な成績を収めております。またもう一頭の注目馬は暴走でお馴染のバクソウオーがまさかの皐月賞に挑む事でしょう。短距離とマイルでは悪くない成績ですがそれも1600以下のレースに限られます。果たして皐月賞の2000メートルを走り切れるかが注目されます。荒れたレースになりそうです今年の皐月賞。出走馬を振り返ってみましょう。1枠1番リルダヴァル。鞍上福永祐一騎手。1枠2番ハンソデバンド。鞍上蛭名正義騎手。2枠3番トーセンアレス。鞍上田中勝春騎手。2枠4番ネオヴァンドーム。鞍上安藤勝己騎手。3枠5番ローズキングダ

ム。鞍上小牧太騎手。3 枠 6 番バクソウオー。鞍上若井武志騎手。
4 枠 7 番レッドスパークル。鞍上秋山真一騎手。4 枠 8 番バーデイ
バーデイ。鞍上松岡正海騎手。5 枠 9 番サンデイエゴシチー。鞍上
浜中俊騎手。5 枠 10 番シャイン。鞍上和田竜二騎手。6 枠 11 番
エイシンフラッシュ。鞍上内田博幸騎手。6 枠 12 番エイシンアポ
ロン。鞍上池添謙一騎手。7 枠 13 番ヴィクトワールピサ。鞍上岩
田康誠騎手。7 枠 14 番レーヴドリアン。鞍上藤岡佑介騎手。7 枠
15 番ダイワファルコン。鞍上北村宏司騎手。8 枠 16 番ヒルノダ
ムール。鞍上藤田伸二騎手。8 枠 17 番ガルボ。鞍上後藤浩輝騎手。
8 枠 18 番アリゼオ。鞍上横山典弘騎手。以上 18 頭フルゲートで
のレースとなりました。今スターターが旗を振ってファンファール
です。さあ春の王者は誰になるのか。次々とゲートインしていきま
す。最後の 1 頭が無事に収まりました。体制完了。．．．スタートし
ました！1 頭ものすごい勢いで飛び出してきましたのはバクソウ
オー。いつでもどこでも大暴走のバクソウオー、果たして 2000
メートル走り切れるのでしょうか。2 番手につきましたのはハンソ
デバンド。レッドスパークルは勢いが付きません最後方。2 番手争
いはバーデイバーデイ、サンデイエゴシチー、外からアリゼオも追い
上げてきます 4 番手。後ろに続きますのはネオヴァンドームにロー
ズキングダム。さらに内から 1 番リルダヴァル。1 番人気ヴィクト
ワールピサは後方から 4 番手の位置にいます。先頭はググッと離れ
てバクソウオー。果たしてどれだけ開いているのか最早分かりませ
ん。2 番手はバーデイバーデイ。少し離れて 3 番手ハンソデバンド
足を貯めます。外にはサンデイエゴシチーが並んで集団を形成して
います。その後ろローズキングダムとネオヴァンドーム。外にはア
リゼオが続いています。バクソウオー早くも 1000 メートルを通
過、タイムは 54 秒：．．．54 秒!?! スプリントレースではありません。
繰り返しますこのレースはスプリントレースではありません。後方
集団がやつと向こう正面に入りました。ローズキングダムが中団あ
たりで少し控えるような動きを見せています。他にはリルダヴァル、
エイシンアポロンなどがグループを形成しております。後はシャイ

ン。そしてその後ろのヴィクトワールピサが徐々に上がっていきま
す。ガルボ、エイシンフラッシュ、この集団は固まっています。その
後ろにレッドスパークル。その後ろ3馬身はなれてヒルノダムール
は後方から3番手です。後方集団残り800を切りました3コー
ナーに入ります。先頭バクソウオーは早くも第4コーナーに入って
いますが疲れてしまったか足色が鈍くなってまいりました。果たし
て2000メートルを走り切れるのでしょうか。2番手集団も残り
600を切りました！バクソウオー必死に前に進みます残り500
メートル！2番手はバーデイバーデイが辛うじて前にいますがサン
デイエゴシチーが並びかけてきます。内からはハンソデバンド！バ
クソウオー直線に入りましたがここでさらにガクつと失速！懸命に
若井騎手がムチを入れてなんとか前に進ませています！さあ馬郡が
バクソウオーに迫ります！残り200メートルを切りましたバクソ
ウオー届くのか！届いてしまうのか！2番手には内をついてヴィク
トワールピサが抜け出してきた！バクソウオーはまだ辛うじて走っ
ている残り100メートル！どんどん差が詰まってこれは追い付か
れそうだ！必死に前に進むバクソウオー！ヴィクトワールピサが伸
びる！エイシンフラッシュも伸びてきている！バクソウオー届くか
！ヴィクトワールピサが差し切るのか！バクソウオー限界か！ヴィ
クトワールピサが抜いたところでゴールイン！なんと2000メー
トルであわや勝利かと思われたバクソウオー！しかし勝ったのは
ヴィクトワールピサです！2着には何とか走り切りましたバクソウ
オーです！』

おお！適正距離外のはずのバクソウオー頑張ったじゃないか！

走り切れれば御の字だったはずの皐月賞で2着はすごいな！

こうしてやや波乱に満ちた皐月賞は終わった。

なおダービーには流石に無謀すぎるといふ理由で出走は辞退した
そうだ。

シルクヴェールは世界初のGI白毛馬という事で海外から熱いオ
ファーを受けてドバイのGIとフランス凱旋門賞に参戦するとの事
で現在は日本に居ない。

また数少ない白毛の繁殖牝馬としての期待が強いため今年で引退との事。

可能な限り多くの白毛馬を生んでほしいのだろう。

現在活躍している俺の産駒はこの2頭のみ。

珍しい産駒と言えば3年目、まだ格安GI種牡馬だった時に種付けした農業高校の牝馬の産駒だろう。

高校からの依頼の話を聞いた室オーナーが種付け料を寄付して種付けしたのである。

子供たちの為になるし税金対策にもなる、とは本人の話だが単純に照れ隠しだろう。

セリでは程々の値段で取引され、中央競馬でデビューする為に今調教中との事。

今年のデビューはもう少し先だし残念ながらまだ代表産駒は増えなさそうだ。

大した活躍できなくてもいいから逃亡屋の異名を継ぐ産駒が出来てほしいぜ。

そんな風に思いながら俺は日々を過ごしていた。

8月・・・。

種付けも一段落し、牧場も少し落ち着きを取り戻した頃・・・。

「今日はあの名馬は今。という事で大逃げで一世を風靡しましたインパクトターボ号の故郷へとやってきました」

どうやら競馬番組の撮影らしい一向が牧場へとやってきた。

厩舎内でのんびりしていた俺の所に女子アナとスタッフが牧場長と室オーナー、それに相棒を連れてやってきた。

さすがに山田調教師は忙しいのかこれないようだ。

「それでは改めまして皆さんよろしくお願ひします」

「「よろしくお願ひします」」

こうして撮影がスタートした。

「しかし父親インターボの命日の翌日に生まれるとはまさに運命的ですね」

「ええ、当時は一部ファンの間では走り足りなかったインターボが

生まれ変わった、なんて言われてましたね」

もちろんそんな事は無いだろうがファンとしてはそういった思いもあるだろう。

「生まれた時はそれほどかからずに立ったから悪くなさそうだという評価でしたね。もともとツインターボもイクノデイクタスも優秀な血統とは言い難いですから期待値も程々でした」

「では室さんは何が決めてでインパクトターボを購入されたのですか？」

「私はツインターボに惚れてましてね。その血を受け継ぐ馬がどうしても欲しかったというただそれだけの理由だったんですよ。セリにも出されていないから他の馬主さんに色々と情報をいただきまして出会えたのがこのインパクトターボだったんです」

へえ、室オーナーにもそんな苦労があつたんだな。

「それでは今話題の暴走馬、バクソウオーの騎手で元インパクトターボ専属騎手の若井騎手にもお話を伺ってみましょう。若井さん、最初にお聞きしたいのですがインパクトターボとバクソウオーの違いはどんながありますか？」

お、騎手目線からの俺と息子の違いも知りたいな。

「そうですね。インパクトターボもバクソウオーも序盤から飛ばして先頭を走るといふ走りは似ていますが全く異なりますね。ターボの方は意外に見えるかもしれませんが頭が非常に良くてですね。一度走ったレース場を覚えているんですよ。あと私の手綱さばきでレースの距離を凡そ判断していましたね」

「どういう事なんですか？」

「そうですね。分かりやすい比較で言えば同じ年で勝った宝塚記念と有馬記念の手綱さばきを見ていただければ分かるんですが、宝塚記念と有馬記念では有馬記念の方が追う回数が少ないんですよ。その回数でターボは今日は長いんだなって理解するんですよ。そうすると自分である程度速度を調節して走り切れるちよほどの速度を維持するんですよ」

「ええ!? そうなんですか!?!」

レース場を覚えていたのは事実だ。

「押された回数は距離というよりは速度を決める基準にしていた。

作戦は相棒に任せて俺は走る事に集中していたからな。」

「ええ、本当に素晴らしい馬ですよ。バクソウオーの方は頭は悪くはないんですが・・・その頭の良さが逆にああ成ってしまった原因という状況ですかね?」

「と、言いますと?」

ほう?

「あの子は体も小柄で当初は全く期待されてなかったらしいんです。でも調教を始めると悪くない走りをするので周りがバクソウオーを誉めまくったらしくて、どうもそれを覚えちゃったみたいなんですよね」

「あーあれだな。小さい子供が大人から褒めてもらった行動を繰り返すみたいなのやつだな?」

「ええ、その通りです。バクソウオーにとっては調教でもレースでも兎に角速く走れば褒めてもらえるから暴走する。騎手が抑えようとしても褒めてもらうのを邪魔されてるとしか思っていないんじゃないですかね」

「なるほど、バクソウオーの暴走にはそういった理由があったんですね」

「ええ、ですからターボとバクソウオーの飛ばしっぷりは似ていて異なるものですね」

「こうして撮影は問題なく終わり、俺は久しぶりに相棒を背中に乗せた。」

久しぶりに乗せた相棒を重く感じたのは俺が衰えたのかそれとも想いがそう思わせたのか。

相棒、息子を頼むぜ・・・。

第2シーズン第16話 いざ名ウマ娘（ウマ娘）

7月、トレセン学園恒例夏季強化合宿がやってきた。

「海だー！」「バックソー！」

約一名違う叫びだったような気がするが海へと飛び出していく新人ウマ娘たち。

「お前らー！宿に迷惑かかるから後にしろー！」

今年は山田トレーナーがそう言っただけで声をかけた。

しかし走り出したなら止まらないバックソーちゃんが既に海に突撃し始めていた。

「バックソー！バックソーを止めろ！」

「分かりました！バックソー！」

最高速度に優れるバックソー先輩が何とかバックソーちゃんに追いつくと抱きかかえて戻ってきた。

「バックソーちゃん、嬉しいのは分かるけど遊ぶのは後で、ね？」

やっぱりどうしても放っておけない私がそう言っただけで声をかける。

「はい、すみません」

明らかにシヨボーンとするバックソーちゃん。

素直な子なだけだなあ……。

スイッチが一度入ってしまうと本人でも抑えられないらしい。

その辺は山田トレーナーも諦めているのでバックソー先輩にお目付け役を申し付けた。

少なくとも追い付いて止める事が出来るので暴走被害は最低限に抑えられている。

それでも抑えきれないのだが基本人がいいトレセン学園の生徒たち。

微笑ましいレベルで済んでいるのでお咎めは無いらしい。

まあカワカミプリンセス先輩の件もあるし学園の懐は広い。

「さて、ターボ。お前が次に目指すのは秋3冠になる」

「はい」

私たちはトレーナーさんの部屋でミーティングをする。

「天皇賞秋、ジャパンカップ、有《font:ul40》馬《/font》記念の3つを制したウマ娘は現状ではテイエムオペラオーしか居ない。この意味が分かるか？」

「クラシック3冠は何人居る・・・それだけ難易度が高いって事ですね」

私の言葉に山田トレーナーは頷いた。

「その通りだ。クラシックは同年代での対決となる。その中で特出した強さがあるウマ娘が制覇する事がある。一方のシニアレースでは熟練から若手までが一堂に会する。当然ながら世代最強が凡人だったという事がありえる。玉石混淆の中で秀でた何かを持っていないければただただ埋没する事になる」

クラシックレースと違い1回きりの勝負ではない反面、同じ相手と戦えるかどうか分からないシニアレースはライバルの強さが分かり辛い。

去年圧倒的な強さだったウマ娘がスランプになっている場合もあれば、今まで芽の出なかったウマ娘が覚醒したかのように強くなる事もありえる。

同級生で言えばシンボリクリスティは後者だろう。

「レースの厳しき、楽しさはお前は十分に理解している。後はそこに勝てるように努力を重ねるだけだ」

「はいー」

「後すまんがバクソウオーの面倒も見てやってくれ。あいつはお前にもかなり懐いているからな」

「分かりました」

私は山田トレーナーに頷いた。

「バクソウー！」

トレーニングでも全力疾走のバクソウオーちゃん。

私も自分のメニューを進めながらバクソウオーちゃんにアドバイスをする。

私が得意ではないスプリントレースの知識はバクシンオー先輩に教わった方が良いのかも知れないと思うが、感覚派で言語化するのが

苦手なバクシンオー先輩だと良い助言を貰う事が難しい。

私が出来た事はフォームのアドバイスやスタートのコツ、上手なコーナリングの仕方だ。

バクソウオーちゃんはどこでも全力疾走するのでコーナを膨らみがちだったが私のアドバイスをしっかりと吸収して大分コーナが上達した。

これならマイルレースでも十分対応できそうだ。

それに教えるという事は私自身がしっかりと理解していないといけない。

私自身もう一度学びなおす事でより上達できたと思う。

そんな私たちを山田トレーナーは満足そうに見つめていた。

トレーニングメニューを終えた自由時間の時・・・。

遊ぶのも全力のバクソウオーちゃんがバテテしまったので水分補給のドリンクを買いに売店に向かっている時だった。

「待ちやがれシルクヴェール!」

「いやです〜!」

ウオツカさんがシルクヴェールちゃんを追いかけていた。

ジャージを着たウオツカさんと学園指定水着姿のシルクヴェールちゃん。

どうやらまたウオツカさんがシルクヴェールちゃんにレースを挑んでいるようだ。

「待ちなさいウオツカ!アンタいつつもシルクに迷惑かけて悪いと思わないの!?!」

「なんだとスカレット!俺はただコイツに負けっぱなしなのが気に入らないだけだ!邪魔すんな!」

「いい加減にしなさい!シルクが嫌がってるでしょ!」

「うえ〜スカレットさく〜ん」

スカレットさんに止められて憤るウオツカさんとスカレットさんの背中に隠れるシルクヴェールちゃん。

シルクヴェールちゃんのなつき具合から多分何度もスカレットさんが庇ってるんだろうなあ。

何だか放つてはおけないし私もそちらに合流する。

「どうしたんですか？揉め事ですか？」

状況は分かってはいるが矛先をずらす為にあえて質問してみる。

「アンタは確かチームハダルのインパクトターボだったわね。キタちゃんとサトちゃんがいっても世話になってるわね」

「いえ、私こそ二人に良くしてもらってますから。それより何があったんですか？」

「ああ、このアンポンタンがシルクに負けたからってウザ絡みしてるだけよ」

「な！アンポンタンとはなんだアンポンタンとは！」

あ、アンポンタンはなかなか酷い言い方である。

「何でも良いわよ！人様の迷惑を考えなさいっていつつも言ってるでしょー！」

「何だとお！」

「何よお！」

ああ、学園でもお馴染みの光景になってしまった。

最もシルクヴェールちゃんから矛先をそらすのには成功したようだ。

私はこっそりシルクヴェールちゃんに合図を出して死角に誘導するとそのまま行くように促した。

シルクヴェールちゃんは恐縮しつつもその場から去っていった。

「んあ!?シルクの奴どこに行きやがった!？」

「さあね！ほら、さっさと戻るわよ！アンタまだノルマ終わってないんだからね！」

私がシルクヴェールちゃんをこっそり逃がした事に気が付いていたスカーレットさんがウインクするとウオツカさんを引き摺って行った。

「くそー！俺は諦めねえからなシルクヴェールー！」

私は待ちかねているであろうバクソウオーちゃんの為にドリンクを購入すると急いで戻っていった。

合宿中の夏祭り・・・

今年はサトちゃんやんが居ないが代わりにバクソウオーちゃんが一緒に夏祭りに参加した。

「キタちゃんは今年もカラオケ大会にでるの？」

「うんーもちろん今年も優勝を狙うよ！」

去年はファル子先輩が優勝してたけど今年は殿堂入りしたので特別ゲスト扱いで歌うらしい。

キタちゃんがカラオケ大会への受付をしている間に私たちは回る屋台の相談をする。

「バクソウオーちゃんほどの屋台に行きたい？」

「綿菓子にりんご飴にお好み焼きに・・・」

「食べ物系ばかり・・・」

「ま、まあいいんじゃないですかね？」

受付を済ませたキタちゃんと合流して私たちは屋台巡りをした。

食べ物系以外だとルーちゃんが金魚掬いで黒の出目金をゲット。

どうやって持ち帰るのかと聞いたら宿で一時的に水槽で預かってくれるらしい。

合宿中に金魚を飼育するための小型の水槽などを通販しておくそうだ。

ヒシアマ姉さんに確認したところ寮はペット不可ではあるが金魚ならギリギリOKとの事。

流石に大型水槽や熱帯魚は不可らしい。

樽では鳥をこっそり飼っている先輩もいるらしいのだが現行犯逮捕が出来ていないという話だ。

私は去年に引き続き輪投げで景品をゲット。

バクソウオーちゃんは大好きなロボットアニメのお面を発見して購入。

キタちゃんのカラオケ大会は準優勝だった。

優勝はウオッカさんに無理やり参加させられたシルクヴェールちゃんだった。

繊細な歌声で見事に会場を感動の嵐に巻き込んでいた。

その様子をファル子先輩が『恐ろしい娘ッ！』的な表情で見つめて

いた。

なおウオツカ先輩は3位だった模様。

今度からファル子先輩にも絡まれるんだろうなあ……。

シルクヴェールちゃん頑張れ！

可能な限り逃がしてあげるから！

合宿最終日は今年も花火。

去年の反省を活かして早めに花火をゲットしておいたので今年は大きめのセットを購入済み。

バケツを借りて花火を楽しむ。

「今年の夏ももう終わりだね」

「サトちゃんはフランスで元気にしてるかな？」

まだサトちゃんが旅立って2か月ほどだけど随分と会ってない気分になる。

定期的に連絡はしてるんだけど時差があるからどうしてもメールが主になるから余計にそう思うのだろう。

「来年はきつと皆一緒ですよ」

「その時はボクはお邪魔ですね……」

「そんな事ないから安心してバクソウオーちゃん。サトちゃんは優しい子だから」

ちよつと寂しそうにするバクソウオーちゃんにそう言う嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

最後の花火が終わると私たちはゴミを綺麗に片付けると宿へと戻っていった。

季節は流れ私が出走する天皇賞秋がやってきた。

「さあ、やってまいりました天皇賞秋。歴戦のウマ娘達が集いますこのレースを制しますのはどのウマ娘か。注目のウマ娘はこの2人。前年度覇者のシンボリクリスティと今年の宝塚記念を見事に逃げ切りましたインパクトターボです。得意距離の近いこの2人はまさにライバルと言っても過言ではないでしょう」

パドックの順番が来たので私は舞台に立って衣装を披露する。

「2番人気5枠10番、インパクトターボです。宝塚記念を見事な走

りで逃げ切りました。天皇賞秋も逃げきれませんでしたか？」

2番人気・・・うーんちよつと悔しい。

そんな事を思いながら舞台裏に戻る。

「6枠11番、アグネスデジタルです。芝、ダートを選ばないオールラウンダーウマ娘です」

お、アグネスデジタル先輩も出るんだ。

「宝塚記念以来ですね。今日も負けませんよ」

「ウヒイ！デデデデデジタンはオワオワオワコンですのでえ!？」

相変わらずの挙動不審っぷりである。

「そんな事言わないで良い戦いにしましょう」

なんとなく私はアグネスデジタル先輩の手を取った。

「あ・・・尊みが過ぎる・・・」

おっと、どうやら凶らずとも限界を迎えさせてしまったようで意識がどこかに行ってしまったようだ。

そういうつもりはなかったんだけどなあ。

鼻出血は気合で耐えていたので出場停止には多分ならないだろう。

「8枠18番、シンボリクリスティ。1番人気です。去年の天皇賞秋を制した強者。二連覇なるでしょうか」

シンボリクリスティか・・・宝塚記念では勝てたけど今日も勝てるようにがんばらないと。

「やあ、宝塚記念では負けちゃったけど今日は負けないよ。2連覇すれば会長にも怒られないで済むだろうし」

「簡単には負けないよ」

軽くにらみ合った後私たちはターフに移動するために地下道へ向かった。

さあ！レースの時間だ！

SIDE：実況

「さあ秋のシニア3冠レースの第1戦目、天皇賞秋。秋の栄冠に輝くのはどのウマ娘か。ゲートの準備が終わりましてスターターが旗を振ります。ファンファーレと大観衆に見守られながらウマ娘たちが次々とゲート入りしていきます。体制完了・・・。スタートしました。

まず1人抜けだしましたのはインパクトターボ。ローリンググリーンがその後ろ2バ身後ろ。ゴースタデイも抜け出してローリンググリーンに並びかけます。2人並んだままインパクトターボを追いかけていきます。早くも先頭集団は向こう正面に入ります。大きく離れてトーゼンダンデイがぼつんと1人。そこからさらに離れてカンフーベスト。少し離れてエイシンプレイテン、テンセイセイザなどがこの位置。その外にシンボリクリステイが追走しています。中団好位にアグネスデジタル。最後方はマルマルボーイ。さあ第3コーナーに向かいます！先頭は譲りませんインパクトターボ！その後ろローリンググリーンとゴースタデイが追いかけています！早くも中間1000メートルを通過！タイムは56秒7とこれは早い！間が大きく空きました！トーゼンダンデイ！その後ろ3バ身にエイシンプレイテン、テンセイセイザ、トーホクシデン！その外を回りまして差を詰めてくるシンボリクリステイ！あとは内をつけてムーンレイペガサスです！アグネスデジタルはまだ中団で足を溜めています！最後方はまだマルマルボーイです！さあ第4コーナーから直線コースへ！逃げる逃げるインパクトターボ！リードは6バ身はと開いている！ローリンググリーン懸命に追いかける！ゴースタデイは一杯か！400メートルを切りましてようやくシンボリクリステイがやってきました！もの凄い脚だ！アグネスデジタルも上がってきた！しかしインパクトターボも先頭を譲りません！シンボリクリステイ間に合うのか！アグネスデジタルもあと少しが届かない！シンボリクリステイ並びました！しかし僅かに届かないままゴールイン！ギリギリで逃げ切りましたインパクトターボ！シンボリクリステイ僅かに届きませんでした！1着はインパクトターボです！」

SIDE：インパクトターボ

「ッシー！」

ゲートを勢いよく飛び出して先頭に立つ。

他にも逃げの作戦を取るウマ娘が居たが出足の良さが売りの私は敵わない。

それでも諦めずに追いかけてくるのでいつもより速度を出して逃げ続ける。

シンボリクリスティとアグネスデジタル先輩は中団辺りで狙っている様だ。

「待て〜!」

「先頭寄せ〜!」

「断る!」

あつという間に1000メートルを通過し、中間を過ぎ、第3コーナーに入った。

「どいたどいた〜!シンボリクリスティのお通りだよ〜!」

どうやら早めにシンボリクリスティが上がってきているようだ。

アグネスデジタル先輩はまだ上がってこないか。

コーナーを曲がり切り直線に入る。

「待てえ!」

シンボリクリスティが物凄い勢いで上がってくる。

「嫌だねえ!」

私も全力で逃げ続ける。

「ああ!ライバル同士の激戦を前から見たいのに足がついていかなしい!」

アグネスデジタル先輩も上がってきたが届かないようだ。

「届けえ!」

「させるかあ!」

全身全霊で私はゴールを駆け抜けた。

「どつち!?!」

掲示板には私の番号が表示されていた。

「やったあ!」

「うわ〜!会長に怒られる〜!」

やった!このまま秋3冠目指すぞー!

育成目標:天皇賞秋を3着以内に入る CLEAR

????:条件フラグ1取得

第2シーズン第17話 繋がる血脈（馬）

時は遡って2010年春……。

室オーナーが牧場を訪ねてきた。

「いや〜お待ちしてましたよ室さん」

「いえいえ、いつもわがママを聞いてもらってありがとうございます」
室オーナーを出迎える牧場長。

その傍らには去年生まれた俺の息子が居た。

「この子がスズカミラーの2009です」

スズカミラーは確かサイレンススズカの全弟の娘だったな。

どっちの娘だったかは忘れたが。

見た目がサイレンススズカの生き写しかと思う程に似ているらしいのだが牝馬である。

性格が大人し過ぎて競走馬に向かなかったとの事で競走馬登録こそされたものの未出走のまま繁殖牝馬になったが目立った産駒がなく、良血統だが格安でこの牧場に譲られてきた。

そうして俺が種付けをして生まれたのがこの息子だ。

俺は少し離れた場所からその様子を心配そうに見つめている。

息子は初めて見る室オーナーに興味津々の様子で興奮している。

「おーよしよし、お前もターボに似て人懐っこいな」

「この子をお買い上げたいただきありがとうございます」

「いえいえ、そちらこそ私の為にセリに出さずにおいてくれてありがとうございます
どうございます」

牧場長も期待する良い体躯をした息子。

セリに出せばいい値段が付いたかもしれないが室オーナーの為に取っておいてくれたらしい。

「それでこの子の名前はどうしましょうか？」

「ええ、仲間たちと相談してターボの息子ですからターボの名前を使うか車関係の名前にするかで少しもめましてね。最終投票でマキシ
ママターボに決まりました」

マキシママターボ、最大のターボ……か。

名前に負けずに頑張つてこいよ。

こうして室オーナーの新しい馬、マキシマムターボが登録された。その後2010年は、皐月賞ではバクソウオーがあわや勝利という走りを見せた後、圧倒的速さでスプリンターズステークスを勝利し、白毛馬のシルクヴェールはドバイデューティフリー2着、凱旋門賞5着入着という成績で無事に日本に戻るとそのまま引退して繁殖牝馬となった。

そして2011年・・・。

今年の種付け数に戦々恐々としている俺は何とか気持ちを落ち着けようとラジオを聞いていた。

『さあ間も無く出走となります東関東大震災被災地支援競馬、第41回高松宮記念GI。芝1200メートル馬場は良馬場です。今年は阪神競馬場で行われる高松宮記念です。1番人気はスプリンターズステークスを暴走しきりましたバクソウオーです。短距離に置いてはもはや敵なしと言われているバクソウオー。暴走ばかりしているせいで最初は人気がありませんでしたがあわや1着の皐月賞以降人氣が出て去年のスプリンターズステークスからは短距離ならば間違いないと言われるほどになりました。さあゲートの準備が終わりましてスターターが旗を振ります。ファンファーレが響き渡ります。各馬が次々とゲートインしていきます。今係員が外に出ました。：スタートしました。ハナを切ったのはやはりバクソウオー。しかしヘッドライナーも続いています。レッドスパード、ダツシャヤーゴーゴーがその後ろにつけるか。キンシャサノキセキ、ジョーカプチーノが前へ。さらにはワンカラット、ウエスタンビーナス先行グループ集団のまま3コーナーへ。直後中団がビービーガルダン、内側にアーバニティ、外がサマーウインド。あとはサンカルロ、エーシンフォワード。内側2番のショウナンアルバ。後方から3番手がスプリングソング、おつとウエスタンヴィーナス故障発生かズルズルツと後退。後方3番手になりましたシンボリグラン。最後方サンダルフォンで4コーナーカーブに向かいます。先頭はバクソウオー譲りません！ダツシャヤーゴーゴーとキンシャサノキセキが追い上げる！ビービー

ガルダンも追い込んでくる！まもなく残り200メートル！バクソウオー先頭！これにダツシャーゴーとキンシャサノキセキが追い抜こうと必死です！バクソウオー懸命に逃げる！キンシャサノキセキが並ぶか！しかしバクソウオー逃げ切ったゴールイン！キンシャノキセキの連覇を阻みましたバクソウオー若井武志！掲示板には赤いレコードの文字！タイムはなんと1分6秒3！99年アグネスワールドが出した1200メートルのレコードを0.2秒更新しました！』

やるじゃない・・・(吐血)

また種付け依頼が増えそうな予感がヒシヒシとしていた。

その事を今年で3回目の種付けとなったサムシングブルーちゃんに言ったら『牡として認められてるからすごい事ですよ』と言われて『そうなんだけどさあ・・・』と落ち込んでいたら慰めてくれたのでまあ良しとしよう。

マキシمامターボは9月にデビュー。

デビュー戦こそ騎手との折り合いが悪くて負けてしまったが、騎手を変えて順調に未勝利戦に勝利し、皐月賞を目指して若葉ステークスに出る様だ。

さて、2012年か・・・あの茸毛の奇行種が居るが果たして勝てるのかねえ我が息子は。

年が明けて2012年。

俺も14歳と馬として中年になってきた。

今年も命を絞り出す時間が始まる(震え声)

そんな事を思いながら若葉ステークスに出走するマキシمامターボのレースに耳を傾ける。

『さあ、皐月賞トライアルレース若葉ステークス。芝2000メートルを走ります16頭。果たしてどの馬が皐月賞へと進むことが出来るでしょうか。各馬が次々とゲートインしてまいります。最後の1頭が無事に収まりました係員が退きます。・・・スタートしました。ややバラついたスタート。先行争いですがマキシمامターボとメイショウカドマツが狙います。ハナに立ったのはマキシمامターボそ

の後ろにメイショウカドマツが付きました。外からグランプリブラッドがやってきて3番手につきました先頭集団を形成します。4番手はアドマイヤレイ外側にショウナンタケルが居ます。その後ろにオソレイユ。1コーナーに差し掛かります。ケイワイツヨシが中団前の方、ドリームトレイン、グララーネと続いています。ワールドエースは後ろから4、5頭目にいます。2コーナーに入りまして先頭変わらずマキシマムターボリードを広げています。その差が3馬身から4馬身になりましたでしょうか。2番手にはメイショウカドマツ、グランプリブラッドは3番手にいます。その内にアドマイヤレイ。外からショウナンタケル。オソレイユが先行集団の一番後ろにいます。向こう正面に入ります。4馬身ほど間が空いてケイワイツヨシが後ろを引つ張っています。外にグララーネ、その後ろにドリームトレイン。・デアアデラバンデラ、ミルドリームと続いています。少し間が空きましてメイショウブシドウがいます。その後ろにワールドエース。先頭まで16馬身ぐらいの所を走っています。内からラフィングインメイが上がっていつて後方にアルキメデスとククイナツツレイ。最後方にローゼンケーニツヒという展開です。まもなく第3コーナーに入ります。先頭マキシマムターボ間は3馬身から4馬身を保っています。残り800メートルを切りまして2番手は変わらずメイショウカドマツ、3番手にグランプリブラッドという隊列のままレースは進んでいきます。3、4コーナー中間を抜けましてショウナンタケルとアドマイヤレイが並びました。そしてオソレイユが先頭集団を形成しています。さあ4コーナーに入りまして後方集団も前へ前へと差を詰めていきます。ワールドエースは先頭からまだ10馬身ほどの位置に居ます。4コーナーから直線に入りました！先頭はマキシマムターボ！ここにきて後ろを引き離す勢いで走っています！ワールドエースが大外から一気に追いついてきますが届きますでしょうか！ワールドエースが2番手まで上がってきました残り200メートル！マキシマムターボ逃げる！一度詰まっただけの差が開いていく！3馬身4馬身開いた所でゴールイン！見事に逃げ切りましたマキシマムターボ！父インパクトターボも走った

皐月賞へ大きな一步を踏み出しました!』

ふう、危なげない勝利だったなマキシマム。

流石に俺に誓いを立てて旅立っていっただけはあるな。

俺はマキシマムがトレセンへと移る日の事を思い出した。

『父さん。俺、父さんの忘れ物、持って帰ってくるからね!』

『そうか・・・苦しい道だが頑張れよ。応援してるぞ』

その言葉と共に旅立っていったマキシマム。

きつとその誓いを達成してくれると信じて、俺はその日を楽しみにしながら日々ノルマをこなしていくのであった。

そして皐月賞を迎えた・・・。

馬房内で多くの馬達がラジオに耳を傾けている。

厩務員も作業をしながらではあるがマキシマムターボの様子が気になっていいのか時々ラジオに意識を向けている。

『さあ、間もなく始まります第72回皐月賞。選抜かれた18頭が競い合うクラシックレース第1戦目。果たしてどの馬が勝つのか。出走馬を振り返ってみましょう。1枠1番モンスター。1枠2番アダムスピーク。2枠3番トリップ。2枠4番マキシマムターボ。3枠5番アーデント。3枠6番デュープリランテ。4枠7番ベルドインパクト。4枠8番サトノギヤラント。5枠9番ワールドエース。5枠10番スノードン。6枠11番マイネルロブスト。6枠12番フジマサエンペラー。7枠13番シルバーウエイブ。7枠14番ゴールドシップ。7枠15番コスモオオゾラ。8枠16番ゼロス。8枠17番ロジメジャー。8枠18番グランデッツアです。以上18頭フルゲートでのレースです。ゲートの準備が終わり、今スタートが旗を振りました。ファンファーレが中山競馬場に響き渡ります。各馬が次々とゲートに収まって行きますが1頭ゴールドシップが中々ゲート入りしません。係員に押し込まれるようにして漸く収まりました。体制完了・・・スタートしました!内から押して押して上がっていきますマキシマムターボ!父インパクトターボがそうであったように息子マキシマムターボも皐月賞を逃げ切ろうとハナを切ります!負けじと並びかけるのはゼロス!やはりこの2

頭の逃げ争い！僅かに先頭はマキシマムターボですがゼロスも外から並んでいきます！その後ろ3馬身4馬身抑えてディープブリランテが集団を形成します。コスモオゾラ、アダムスピークと続いてその後トリップ、ロジメジャーにベールドインパクト、モンストールが中団を形成！その後サトノギヤラント行きました！さらに内はアーデント最内にとったスノードン！グランデツア後方その後ろにワールドエースです！1、2コーナー中間点マキシマムターボ行きました2馬身半のリード！ゼロス2番手になりました！その後が7馬身8馬身開いてディープブリランテがかなり抑えて3番手！モンストール、アダムスピーク2頭が続きました！向こう正面に入りました1馬身半差コスモオゾラ、トリップ！その後2馬身さスノードンとロジメジャー！その後ろにベールドインパクト、アーデント、サトノギヤラントが行きました！ここは縦1列マイネルロブスト、フジマサエンペラーの追走で1000メートル58秒5！58秒5と早いペースで行っています！あと後方はシルバーウエイブ追走グランデツア後方から3、4番手で3コーナー！2馬身空いてワールドエースが構えて！最後方からゴールドシップ！3コーナーを回りましてマキシマムターボが依然先頭4馬身5馬身のリード！ゼロスが2番手4コーナーカーブ！その後は4馬身空いてアダムスピーク3番手！ディープブリランテ4番手！その後ろコスモオゾラ！さらにロジメジャーが動いて！まだグランデツアとワールドエースは差がある後方大外に出していく！第4コーナーから直線！内ラチ沿いマキシマムターボが先頭！マキシマムターボが逃げる！ゼロスも差を詰めるが苦しいか！その内からゴールドシップが上がってきた！200を切ってゴールドシップがマキシマムターボに迫る！マキシマムターボ懸命に粘る！ゴールドシップを抜かせない！大外からワールドエースとグランデツアが追い込んでくるが3着争い！マキシマムターボとゴールドシップが引き離す！並んだままゴールイン！ですが勝ったのは僅かに内のマキシマムターボでした！マキシマムターボ1冠目！父と同じく見事に皐月賞を逃げ切りました！』

いよっし！見事だ息子よ！

先ほどまでラジオに意識が行きがちだった厩務員も大声を出さな
いように喜んでいいる。

他の馬達からも息子を褒める声が聞こえる。

血が続くつてのは良いもんだな・・・親父・・・。

あんたにもそう思わせてやりたかったよ・・・。

インパクトターボ代表産駒：シルクヴェール、バクソウオー、マキ
シマムターボ

第2シーズン第17話 繋がる想い（ウマ娘）

天皇賞秋を優勝する事が出来た私が次に目指すのはジャパンカップ。

今度はキタちゃんも参加するのでさらにライバルが増えるだろう。より一層トレーニングに精を出す。

そう思いながらチームルームに向かう途中の事だった。

「見つけたぞマキシママターボ！ここで会ったが百年目え！この前の借りを、あ！返してやらあ！」

「・・・ああ、ゴールドシップか」

何故か歌舞伎の見栄を切るゴールドシップさんと意にも介さないマキシママターボさん。

うん？何やらマキシママさんに運命的な何かを感じるぞ？

「キイー！この間のレースで勝ったからって調子に乗りやがってえ！何でもいい！勝負だあ！」

「・・・それは（トレーナーさんに過度のトレーニングを禁止されているから）できない。（本番のレースで勝負しなければ）意味がない」

んん!?何か致命的に言葉が足りない様な!?

「だあー！煽ってるんだなそうだな！ゴルシちゃんキックを喰らえい！」

そう言つてマキシママさんにドロップキックを仕掛ける。

しかしマキシママさんはそれをヒョイつと勢いを殺して受け止めるとゴールドシップさんをスタツと着地させた。

「格闘技の訓練か？それこそ（レースとは無関係の訓練であつて個人的に興味はあるがレースには）無意味だ」

「キエーーーーー!!!」（怒りで最早言語化不可能）

て、天然や・・・ほんまもんの天然や！

つて思わずエセ関西弁になっちゃったけどこれは強敵だなあ。

暖簾に腕押し、真面目天然にこれほど似合うことわざも無いだろう。

結局マキシママさんはゴールドシップさんが何故怒っているのか

理解できないまま時間だからと去っていった。

後にはただただ怒りの矛先を失ったゴールドシップさんが取り合えず近くに居たトーセンジョーダンさんに襲い掛かる事で解消しようとしていた。

うん、トーセンジョーダンさんドンマイ！

「・・・という事がありました」

「マキシママターボかく、欲しかったんだが今の俺にはちよつと手一杯でなく」

チームとしては中堅のチームハダルではこれ以上の人数は許可が下りないらしい。

山田トレーナーはトレーナーとしては非常に優秀で沢山のG I ウマ娘を出してはいるが浪漫癖が災いしてチームランキングは真ん中より上を維持するのが精一杯だ。

最も逃げウマ娘だけのチームで真ん中より上を保ち続けるのは非常に凄い事である。

「いずれお前とも勝負する事になるだろうな。運命的な何かがあつても手は抜くなよ」

「分かってます。先頭は譲るつもりはありませんから」

私の言葉に山田トレーナーは満足げに頷いた。

「よし、じゃあ次のジャパンカップに向けてのトレーニングを開始するぞ。今日は特別ゲストも居るしな」

「特別ゲスト？」

私は首を傾げた。

「それは後のお楽しみだ」

悪戯っぽく笑う山田トレーナーに何とも言えないモヤモヤを抱いたまま私はトレーニングコースへと移動した。

「ミホノブルボンです。本日はよろしくお願ひします」

「おお！ミホノブルボン先輩！こちらこそよろしくお願ひします！」

トレーニングコースで待っていたのは坂路の申し子、ミホノブルボン先輩だった。

「ブルボンのトレーナーとは同期だな。丁度ブルボンのリハビリも終

わった処だと聞いたから併せを頼んだんだ。今のハダルには居ない走法の逃げウマ娘の走りをお前にも生かせると思つたからな」

一括りに逃げウマ娘と言つてもその走りは様々だ。

中距離を圧倒的ハイペースで走り、他者を置き去りにするアイネス先輩。

長距離を完璧なるマイペースで相手を翻弄するスカイ先輩。

スタートからゴールまで兎に角バクシンのバクシンオー先輩。

努力と根性で今の走りを作り上げたパーマー先輩。

テンシヨンの赴くままに走るヘリオス先輩。

己の最高の輝きを見せられる走りが逃げだつたファル子先輩。

それぞれに特徴のある逃げを私は見てきた。

そしてミホノブルボン先輩は完べきなタイムを刻む逃げ。

1寸の狂いもないその走りはまさに走るマシーン。

それを私の走りに活かせと言うことだ。

「私も以前から貴女の走りに興味がありました。互いに良き研鑽となるでしょう」

「はいー」

私の走り、それはどうしても立ち上がりが悪いウマ娘達を置き去りにして、最初から飛ばすという走りだ。

一見バクシンオー先輩の走りと似ているが、私の場合もつとも疲れ難いペースが早めのペースだという事だ。

バクシンオー先輩のように全力疾走をしている訳ではない。

私の場合最大速度はチームの中では遅い方だろう。

だが一方で加速能力の高さと早めのペースを保ち続けられる息の長さを併せ持つ私の走りは序盤から中盤で大きなリードを作りやすい。

どうしても後半にかけて体力を残す戦法を取らざるを得ないウマ娘が多いなか、この特性は強みである。

一方でラストの伸びが悪い為に追い付かれてしまうと抜き返せないという欠点もある。

「いいかインパクト、ミホノブルボンの走りは自分の中のベストタイ

ムを本番にも出せるように常にタイムを刻み続ける走りだ。お前もそれが出来るようになればラストまでにさらに大きなリードを築けるようになるだろう」

「分かりましたー」

こうして私はミホノブルボン先輩と併走をして、その走りを学習していったのである。

そしてジャパンカップを迎えた。

「さあ、海外からの強豪ウマ娘が複数参戦いたしますジャパンカップ。先日からの雨の影響を受けてましてコンディションの悪いレースとなってしまうました。今年も9人の海外ウマ娘が参戦しています。前年度勝者のスレッジハンマーの連覇となるでしょうか」

この実況を聞く限り、スレッジハンマーも参戦しているのだろう。

大丈夫、私なら勝てる。

そう思いながら勝負服に着替える。

「ターちゃん貴女なら大丈夫なの」

「まあ気張り過ぎずに気楽に行こうね」

アイネス先輩とスカイ先輩が控室にやってきた。

「アイネス先輩、スカイ先輩。ありがとうございます」

山田トレーナー達他のチームメンバーはバクソウオーちゃんのデビュー戦の応援に行ったので不在だ。

本来であれば夏にデビューする予定だったバクソウオーちゃんだったがデビュー前のゲート訓練中に自分を抑えきれずにドアが開く前に走り出して衝突。

幸い今回は大した怪我ではなかったもののこのままではいつか大怪我をする可能性があったので山田トレーナーがゲート訓練の合格を出すまでデビューを延期。

どうにかこうにか合格をもらったバクソウオーちゃんのデビューが偶然重なってしまったのである。

「インパクト、調子はどうですか？」

「応援にきたぞー！インパクトー！」

「イクノ先輩！ツイン先輩！」

「ターちゃんを心配してたから誘ったの！」

「ありがとうございます！アイネス先輩」

「これだけ応援して貰っているんだ。」

「落ち着いてやれば勝てる！」

私はそう決意を固めると先輩方にお礼を言っただけでパドックの舞台裏まで移動した。

「さあ、本日出走いたしますウマ娘達のパドック披露です。1枠1番はキタサンブラック。和風衣装の似合う元気ウマ娘です」

キタちゃんが衣装を披露すると海外からのお客さん達から『Oh！ゲイシャガール！』と言った様な声が聞こえる。

「ちよつと違うんだけどまあ細かい事を言うのは野暮だろう。」

キタちゃんが戻ってくるのと2番のウマ娘がステージに出ていく。

「へっ！俺様がまたぶち抜いてやるからな！」

「スレツジハンマー、最近見なかったけど調子はどう？」

「ちつと張り切りすぎちまってな。大した事は無かったんだがトレーナーがあんまりにも煩く言うからな」

以前のトレーナーとは折り合いが着かず、幾つかのチームを渡り歩いたスレツジハンマーが落ち着いたのが新人トレーナーだったので一時噂になったのだ。

見た目が貧弱そうなトレーナーに何日でスレツジハンマーが飛び出すか、と密かに賭けが行われている程だったが以外にも長続きしている。

「さて、俺の番だな」

そう言っただけでスレツジハンマーはステージへ出て行った。

「2枠3番はスレツジハンマー。今日もパンク衣装でキメています。前年度ジャパンカップの覇者。今年はどんな走りを見せてくれるのでしょうか」

「悪そうな見た目のファクションに若干ヤジっぽい歓声が聞こえるがスレツジハンマーは舌を出してそれに答えた。」

「この間負けたせいで会長に怒られたんだから今日は負けないよ」

「怒られたのは負けたせいでは無くて普段の生活態度なんじゃないの」

？」

「勝てばあそこまでのお説教にはならなかったはずなんだ」

「そういう問題なの？クリステイ」

「ボクには深刻な問題なの」

そう言つてシンボリクリステイはステージに出て行つた。

「3枠5番はシンボリクリステイ。軍服姿のウマ娘です。最終直線での末脚が強烈です」

あ、観客席からルドルフ会長が険しい表情で睨んでる。

その様子を見たシンボリクリステイがちよつと嫌そうな表情をしていた。

パドック披露は進んでいき、私の番になった。

「6枠12番はインパクトターボ。今日も黒いだんだら模様の羽織が似合う逃亡屋。すべてのレースで大逃げと言うまさに個性派です」

私の衣装に海外の人たちも『Oh!サムライガール!』と中々の評判の様だ。

何時もの様に見得を切ると会場からも大きな声援が聞こえる。

よし、今日もレースを楽しもう。

私はそう決意するとターフに移動する地下道へ向かった。

SIDE：実況

「さあ、間もなく始まりますジャパンカップ。前日からの雨の影響で非常に荒れたバ場となりました。この荒れ具合がレースにどういった影響を与えるのでしょうか。海外から参戦する9人のウマ娘を含む18人フルゲートでのレースとなりました。出走するウマ娘達を振り返ってみましょう。1枠1番キタサンブラック。1枠2番デモン。2枠3番スレッジハンマー。2枠4番フォーマルオブオマー。3枠5番シンボリクリステイ。3枠6番アンメアリー。4枠7番ツルマイボーイ。4枠8番シンユニヴァース。5枠9番アンジエガブリエル。5枠10番レッツプレステイ。6枠11番ネイティブバイオ。6枠12番インパクトターボ。7枠13番ジョアー。7枠14番イギリンドン。7枠15番スルーヴァーリ。8枠16番セイラフィン。8枠17番ジャガーテイル。8枠18番ムーンレイペガサ

ス。以上です。ゲートの準備が終わりスターターが旗を振ります。ファンファールです。大勢の観客に見守られながらウマ娘達が次々とゲートインしていきます。今最後の一人が収まりました。体制完了。・・・スタートしました！先頭争いはやはり1番キタサンブラックと12番インパクトターボの2人！荒れたバ場でも見事な加速で先頭争いをしています！2人が競り合ったまま後続をどんどん引き離していきます！大きく離されて3番手になりましたのはレツツブレンティ！少し間が空いてネイティバイオ！フォーマルオブオマー！アンジエガブリエルと続いています！その後ろにイギリントン！そしてジョアー！中団固まってシンボリクリスティとスレッジハンマーが睨み合っています！セイラフィンはその後ろで2人を警戒しています！アンメアリーがそれを追走！3コーナーに向かいます！シンユニヴァースはやや後ろの集団を走っています！後ろの方にはムーンレイペガサス！ツルマイボーイが足を溜めています！果たして間に合いますでしょうか！さあまもなく3コーナーに入ります！先頭キタサンブラックとインパクトターボ全く譲らずひたすら飛ばし続けています！後ろとの差はなんと13バ身という大きな差！3番手のレツツブレンティその後ろネイティバイオ！ジョアーとスルーヴァーリの外を回ってイギリントンが上がっていきます！スルーヴァーリも上げていきます！3、4コーナー中間を過ぎましてアンジエガブリエルとシンボリクリスティ、スレッジハンマーの3人が上がっていきませんが間に合いますでしょうか！先頭キタサンブラックとインパクトターボが全く譲らないまま直線に入ります！譲らない！どちらも先頭を譲りません！後ろとの差は7バ身まで縮まりましたがどちらも足色は変わらない！3番手はネイティバイオとデモン！シンボリクリスティとスレッジハンマーはまだ中団でもがいている！先頭キタサンブラックとインパクトターボ激しい睨み合いで互いに譲りません！リードはまだ4バ身から5バ身！ネイティバイオ疲れたか追い上げが悪い！シンユニヴァースか！レツツブレンティか！シンボリクリスティとスレッジハンマーは足を取られているのか伸びが悪い！残り200を切って先頭はキタサンブ

ラックとインパクトターボの激しい競り合い！リードは3バ身！必死に追い上げるレッツプレンティ！シンボリクリステイとスレッズジハンマーが漸く上がってきましたがこれは届かないか！先頭はキタサンブラックとインパクトターボが並んだままだ！どっちだ！どっちだ！大接戦のゴール！勝ったのはキタサンブラックかインパクトターボか！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー」

ゲートが開くと同時に飛び出す。

しかし今日はいつものより加速が悪い。

濡れて滑りやすい芝がどうしても力を逃してしまいいつもより速度を上げるのに苦労する。

それはキタちゃんも一緒の様で私たちは滑る芝に苦労しながらなんとか先頭に躍り出た。

それは他のウマ娘たちも同じのようで滑り、走り辛い芝に思うように走れていないようだ。

「これは厳しい戦いになりそうだねキタちゃん！」

「でも負けないよターちゃん！」

私たちは互いにそのまま後ろを引き離していく。

抜けない！

でも抜かせない！

走り辛い！

足が滑る！

濡れた芝生が重い！

でも・・・楽しい！

そして負けたくない！

後ろの事はどうでもいい！

今この私たちだけの勝負の邪魔をしないでほしい！

それはキタちゃんも同じだろう！

私たちは全く譲らないままコースを走り切り、ほとんど同時にゴールを駆け抜けた！

「どっち!?!」

写真判定の結果、僅か2センチ先にゴールした私の勝利だった。

「やったあ!」

「うわーん! 2センチってそんなのないよお!」

いける! 今の私ならきつと秋シニア3冠を達成できる!

私は有《font:ul40》馬《font》記念に強く思いを馳せた。

育成目標：ジャパンカップで1着 CLEAR

????: 条件フラグ1取得 条件フラグ2取得

第2シーズン第18話 忘れ物（馬）

日本ダービー。

歌謡曲にも歌われるほど競馬にとっては切っても切り離せない重いレース。

馬は勿論の事、ジョッキーにとっても憧れのレースである。

俺はその栄冠を僅かの差で逃した。

誇る事の出来る成績を残してきたがそれでもダービーを手にする事が出来なかったのは俺にとって非常に悔しい思いがある。

タニノギムレットやサムシングブルーちゃんとの対決は勿論熱く燃えるものだったから、恨む気持ちは一切ない。

それでも相棒や室オーナー達にダービーを取らせてあげられなかった事はやはり心のどこかで悔やんでいた。

そんな俺の息子が今日ダービーに挑む。

無事に走り切れるだろうか。

皐月賞の走りを警戒されて潰されてはしまわないだろうか。

あるいは故障して予後不良になりはしないだろうか。

そんな思いばかりが募り、不安と心配で餌が喉を通らない事もあったが、個人的な事情で牧場長を心配させる訳にもいかなないので何とか喉に押し込んだ。

いやまあ体力的な理由もあって食べない訳にはいかなかったと言うのもあったのだが……。

そんな俺の不安を感じ取ってなのだろうか、それとも自分も不安なのだろうかスズカミラーが俺の所にやってきた。

「体調の方はいいのか？」

「はい、もう慣れた事ですから」

当然だがスズカミラーのお腹の中には次の子供がいる。

やはり自身が生んだ子供がダービーを走るので不安で堪らないのだろう。

「大丈夫だ。俺たちの息子は絶対に大丈夫だ」

「はい……」

毛繕いをして気持ち落ち着かせてやりながら俺たちはラジオをひたすら見つめていた。

ダービーの放送に合わせられたラジオは淡々とダービーの様子を告げていた。

『さあ、間もなく始まりますクラシックレース第2戦目、第79回東京優駿日本ダービー。最も運の良い馬が勝つと云われております。晴天に恵まれましたこのレース、馬場は良馬場となっております。果たしてどの馬が勝つのか。東京競馬場に詰めかけました多くのファンが出走の時を今か今かと待っております。本日出走する馬のご紹介に参りましょう。1枠1番スピルバーグ。鞍上横山典弘。1枠2番ヒストリカル。鞍上安藤勝己。2枠3番マキシマムターボ。鞍上若井武志』

相棒!? 相棒じゃないか! マキシマムターボには今まで乗ってなかったのにどうして!?

室オーナーがそうしたのか。

あるいは調教師がそうしたのか。

理由は全く分からないがマキシマムターボの鞍には相棒が乗っていた。

「急に騎手が変わってあの子は大丈夫でしょうか」

スズカミラーが不安そうにそう呟く。

「大丈夫だ・・・乗ってるのは俺の元相棒だ。俺の血の事は良く知っている。だから大丈夫だ」

頼んだぜ・・・相棒。

『3枠6番ゴールドシップ。鞍上内田博幸。っとゴールドシップ激しくイレ込んでおります。3番のマキシマムターボを激しく威嚇しております。威嚇されたマキシマムターボは全く動じておりません。寧ろ鞍上の若井騎手の方が驚いています。何とか引き離されていくゴールドシップに首をかしげた様な仕種を見せるマキシマムターボ。何とも凶太い馬です』

・・・本当に大丈夫なんだろうか。

本当に頼むぜ相棒。

そしてついにその時が来た。

『さあ、ゲートの準備が終わりましてスターターが旗を振ります。ファンファールです。各馬がゲートに次々と収まっていきます。やはり1頭ゴールドシップがゲート入りを嫌がりましたが何とか押し込んで全馬ゲートイン完了です。．．．スタートしました！各馬揃った綺麗なスタートです。先行争いはやはりマキシマムターボがハナを主張します。デイープブリランテ、外からトリップも上がってさらに外トーセンホマレボシ。そしてグランデツア今日は先行策。さーらにはコスモオゾラ。その後にフェノーメノが行きましてエタンドール、ブライトライン、インコースからはベールドインパクトが行きます。1コーナーカーブに入ります。その後ろ中団にワールドエースがつけましてその内でゴールドシップ続いていきます。1コーナー曲がりましてマキシマムターボ若井武志3馬身のリード。2番手トーセンホマレボシ、ウイリアムズ騎手。2コーナー曲がつて13番クラレントが3番手で10番デイープブリランテが4番手抑えています。その後ろ2馬身差グランデツア今日は先行策で行きます。その後ろにトリップ、フェノーメノといった体制です。また少し間が空いてコスモオゾラが続いています。1馬身差でブライトライン。さあ1000メートルは58秒7と早いペースで行っています。その後ろ9番のエタンドール。その外中団の外にワールドエース。さあゴールドシップが外に持ち出して前を伺っています。そのインコースにベールドインパクト。1馬身後ろにアルフレード武豊が上がって4番ジャスタウェイ。3コーナーに入ります。モンストールが後ろの方にいまして4馬身程あいてヒストリカルが後方から2番手。スピルバーグが最後方。さあ大櫓の向こう3、4コーナー中間で先頭マキシマムターボとそれを追いかけるトーセンホマレボシその差は3馬身！そのあとはもう10馬身ぐらい空いているでしょう！クラレントが3番手！デイープブリランテが4番手！外からゴールドシップが進撃を開始します！直線に入りまして先頭は変わらずマキシマムターボ！トーセンホマレボシ苦しいか失速！坂を駆け上がるデイープブリランテその差は5馬身と迫ってきてい

る！外からゴールドシップがすごい勢いで突っ込んで行く！マキシ
ムターボ若井武志懸命にムチを入れて後ろを引き離す！しかし
ゴールドシップ凄い末脚だ並びかける！ディープリランテも追い
上げる！マキシナムターボとゴールドシップが並びます残り200
メートル！ディープリランテも半馬身差まで迫ってきた！マキシ
ムターボ粘ります！ゴールドシップも凄い脚だが僅かに抜けませ
ん！いや前に出たか!?!しかしマキシナムターボが意地で抜き返す！
ディープリランテは苦しいか！マキシナムターボか！ゴールド
シップか！並んだままゴールイン！僅かにマキシナムターボが有利
に見えましたでしょうか!?!判定は・・・マキシナムターボです！3代
目逃亡屋、ダービーを制しました2冠目達成！』

「やりましたよターボさん！私たちの息子が！」

勝った・・・息子と相棒が・・・勝った。

「ああ・・・そうだな・・・勝ったんだ・・・勝ったんだ！」

徐々に実感が湧いて俺は大きな声を上げた。

周りの馬達も息子を褒め称える声を上げる。

ラジオは相棒へのインタビュに切り替わった。

『おめでとうございます若井騎手』

『ありがとうございます！』

『ダービージョッキーになった気持ちはいかがですか？』

『もうこれ程に無いほど嬉しいです！インパクトターボに取らせてや
れなかった忘れ物を息子のマキシナムターボが取ってくれた！あの
時から胸に刺さったままのトゲが抜けたような気分です！お前の息
子がやったぞ！相棒！』

『馬主さんの意向でダービーだけは若井騎手にとの事でしたが本当で
すか？』

『はい！室さんが僕にあの時の忘れ物を取ってこいと発破をかけてく
れました！本当に感謝しかないです！』

そうか・・・室オーナー・・・貴方は素晴らしいオーナーです。

『今日はおめでとうございました！若井ダービージョッキーでした
！』

『ありがとうございます！』

ありがとうございます、室オーナー……ありがとうございます、相棒……ありがとうございます、マキシマム……。

俺はただただ涙を流し続けた。

そんな俺をスズカミラーはそつと慰めてくれた。

なお号泣する俺を見た厩務員が目の病気かと大慌てで獣医を呼んだのは余談である。

第2シーズン第18話 忘れ物（ウマ娘）

とある日の風景……。

「そこまでだ！怪人アカチャンニシテヤルノ！正義のヒーロービコーペガサスと！」

「正義のロボットバクソウオーが相手だあ！」

「あらあら〜」

どうやら同じ中等部でヒーロー物ファンのビコーペガサスとロボット物ファンのバクソウオーがスーパークーク先輩相手にヒーローごっこをしているようだ。

方向性は多少異なるものごっこ遊びが好きな二人は意気投合したらしくこうして一緒に良く遊んでいる。

そんな二人の相手をしてくれるのは大体は面倒見の良い先輩ウマ娘やノリの良い先輩ウマ娘が多い。

「うふふ！今日はどうしちやいましょうかね〜」

うん、それは別の意味で怖いですーパークリーク先輩。

近くで見ているタマモクロス先輩も若干青い顔をしている。

「さあさあ一緒に悪戯しちやいましょうね〜ウインディちゃん」

「わかったのだ〜！」

悪戯好きで有名なシンコウウインディもごっこ遊びを一緒にしている。

「わわ！どうする!?ビコーペガサス！」

「大丈夫！こっちもスケツトを読んであるから！」

「呼ばれたので参上した。マキシمامだ」

おおっと、今日は珍しいウマ娘と一緒に居る様だ。

「あらあら〜、だったらこっちも秘密兵器を投入よ〜」

「了解、ミホノブルボン発進します」

うん、非常に似合っていない気がする。

「ではブルボンの相手は私がするでしょう」

「いっけー！マキシمام！」

そう言って相対する二人。

「……かかってくるが良い」

「……」

「何故だ？何故動かん？私では興が乗らんとでも言うのか？」

「ピーツ、バッテリーが不足しています。セーフティモードに入ります」

「……認めたくないものだ。己の若さ故の過ちを……」

「いやどないな状況やねん！」

関西出身の性でタマモクロス先輩が思わずツッコんでしまった。

……まあギャグアニメなら良くあるパターンでは？

それにしてもミホノブルボン先輩もマキシマムも案外ノリ良いのね。

どちらも無感情系キャラだったので意外だった。

そして有《font:ul40》馬《font》記念の半月前：

「……という訳でサトノダイヤモンド、帰って参りました」

「「お帰りサトちゃん」」

サトちゃんがフランスから帰ってきた。

と言っても短期留学を終えた訳ではなく有《font:ul40》馬《font》記念に出走する為だけの一時帰国だ。

年明けと同時にまたフランスに戻り、本格的に戻ってくるのは来年の4月になる。

「サトちゃん凱旋門賞は大変だったでしょ」

「はい、慣れない芝に変わった形のコースと戸惑う事ばかりでした。フランス語も覚えるの大変でしたし」

日本の芝に比べて西洋の芝は走り辛い分足への負担が少ないと聞く。

サトちゃんのパワーでもどうやらフランスの芝は辛かったようである。

「でもいい経験になりましたから有《font:ul40》馬《font》記念は私がもらいます！」

「わ、私も負けません！」

「私だって負けないよ！」

「絶対に今度は逃げ切ってみせるからね！」

全員気合十分で有《font:ul40》馬《font》記念を
迎えた。

「大丈夫・・・私は行ける・・・」

控室で衣装に着替えながら私はいつものように呟く。

今までだって楽な戦いは一度も無かった。

だからこそライバル達に勝ちたい思いはどんどん強くなる。

特に秋3冠がかかっているととなるとプレッシャーはさらに大きい。

「ターちゃん、応援にきたの」

「アイネス先輩・・・皆さんは？」

「場所取りに行ってくれてるの。それに皆で来ても邪魔なだけなの」

確かに控室はそこまで広くはない。

でも全員入れない程ではない。

きっと私に必要な以上のプレッシャーが掛からないように気を使っ

てくれたのだろう。

「それとお客さんなの」

「インパクト、体調管理は万全ですか？」

「インパクト、今日も頑張って逃げ切るんだぞ！」

「はい、イクノ先輩、ツイン先輩」

この二人に見守ってもらえるのならきつと大丈夫だ。

「今日もきつと勝ってみせます！」

「それでこそインパクトです」

「おう！流石だな！」

イクノ先輩に優しく頭を撫でてもらって私はさらに気合が入った。

よし！レースの時間だ！

「さあ、本日出走いたしますウマ娘達のパドック披露の時間です」

私たちはステージ裏で順番待ちをしている。

そんな時、私は声をかけられた。

「ふふ、勝負では初めましてですね」

「ロブroy先輩」

そこに居たのは勝負服に身を包んだロブroy先輩だった。

「貴女との勝負、ずっと楽しみにしてましたから」

「ありがとうございます。お互いに全力を尽くしましょう」

私たちは硬く握手をした。

「1枠2番、ゼンノロボロイです。物静かな外見からは考えられない末脚の持ち主です。眼鏡の奥に潜む冷静な瞳でレース展開を読み切れるでしょうか」

ファンの皆さんに丁寧にお辞儀をしてロボロイ先輩はステージ裏に戻ってきた。

「おう、今日は負けねーぞ」

「スレッジハンマー」

「オレ様もがんばってアイツに箔をつけてやらねーとな」

そう言って笑うスレッジハンマーの表情はとても柔らかく自然なものだった。

以前の敵意剥き出しのスレッジハンマーからは想像もできない。

「いい人なんだね」

「・・・さあな」

それだけ言うとスレッジハンマーはステージへと出て行った。

「2枠3番、スレッジハンマーです。最終直線での爆発力は見ものです。今日もヒールな見た目にファンがヤジを飛ばします」

すっかりスレッジハンマーに対するヤジが固定してしまったようだ。

まあ本人もファンも楽しんでやっているのだから問題は無いけど。

「さあ、私の番だー」

私は係員に促されてステージへと出ていく。

「2枠4番、インパクトターボです。秋2冠を制した注目のウマ娘。全てのレースを大逃げするという傾奇者。果たして今日このウマ娘を捕らえる娘は現れるのでしょうか」

私は何時もの様に見栄を切る。

勿論一番に見せるのは私の両親に、だ。

今年は何とか休みを取って二人で来てくれた様だ。

周りで一緒に応援してくれているのはどうやら父のお得意様の様

だ。

こんなにも応援してくれるなんてとっても嬉しい。

ノリの良いファンの人たちからの大向に答えながら私はステージ裏に戻った。

「行ってきますね」

「行ってらっしゃいルーちゃん」

ルーちゃんが私と入れ違いでステージに出ていく。

「3枠5番、サムシングブルーです。狙った獲物は逃さない。自在な作戦で優勝を狙うハンター。今日はどんな作戦で優勝を獲得するのでしょうか」

ルーちゃんもご両親を見つけたようで嬉しそうに手を振っていた。

パドック披露は順調に進んでいく。

「次は私だね」

「キタちゃん行ってらっしゃい」

「4枠7番、キタサンブラックです。インパクトターボとの逃げ合戦が記憶に残ります。今日も元気なお祭り娘です」

「ブラックウウウ！」

今年もキタちゃんのお父さんの力強い声援が聞こえる。

流石現役演歌歌手、肺活量が違う。

キタちゃんは嬉しそうに右手を突き上げるとステージ裏に戻ってきた。

「最後はサトちゃんだね」

「はい、行ってきますね」

サトちゃんがステージに出て行った。

「4枠8番、サトノダイヤモンドです。可憐な見た目からは分からない強烈な末脚。最終直線に注目です」

今年のご両親揃っての参観らしく沢山の黒服を連れた男性と女性がサトちゃんに手を振っていた。

流石名家のご両親。

お母さんの時は使用人が数人だけだったが流石にご両親が揃うと色々と大変なのだろう。

サトちゃんが披露を終えて戻ってきた。

「今日も全力で逃げるね」

「一人では行かせないよ」

「ついていきますね」

「最後の直線が勝負です」

私たちは笑顔で見つめあう。

「はうくくく…素晴らしい友情！滾りますうくく！」

「…あのくアグネスデジタル先輩？」

「ほわあ！デジタルの事はその辺の小石と思ってえ!?」

「いえ…その…順番だって係員さんが怒ってますよ？」

「あ…自意識過剰でした…鬱だ死のう…」

トボトボとアグネスデジタル先輩が出て行った。

「6枠11番、アグネスデジタルです。芝ダートのオールラウンダーです。少し元気が無いようですが大丈夫でしょうか？」

うくくちよつと悪い事しちやったかも？

どうやらアグネスデジタル先輩はテンションの影響が強い人の様だ。

かなりしよんぼりした様子のアグネスデジタル先輩を見たトレーナーさんが頭を抱えている。

「連覇すれば会長も怒らないよねく」

「…それで前向きになれるのならそれでいいと思うよ」

クリステイは相変わらずの様だ。

やっぱり覇気の無いままステージに出て行った。

あれでレースに強いんだからもうちよつとやる気出せば良いのに…。

「6枠12番、シンボリクリステイです。去年の有font:ui40馬font記念を制した強力な末脚。のほほんとした表情の下で何を考えているのか不気味なウマ娘です」

やっぱりルドルフ会長がクリステイを睨んでいる。

大変なんだろうなあ…。

パドック披露を終えた私たちは地下道に向かった。

「全員で競うのは久しぶりだね」

「去年の有《font:ul40》馬《font》記念以来ですね」「た、楽しみですね。やっぱり皆で走るのが一番楽しいです」

「そうだね。他の誰かと走るより、皆と一緒に走る方が楽しいね」

どうしても勝負と言う形である以上差は出来てしまう。

それでもこの4人で走るレースはやっぱりとても熱く楽しい。

だからこそ負けたくない。

特に今回の有《font:ul40》馬《font》記念は私にとって秋3冠の掛かったレースだ。

来年もこの条件を達成できるとは思えない。

私が強くなると同時にライバルたちも強くなるからだ。

新しいライバルだってデビューしてくる。

今回が最初で最後のチャンスと思つて決めるんだ。

応援してくれる皆の為に。

SIDE：実況

「さあ間もなく始まります有《font:ul40》馬《font》記念。今年の締めめのレースのであります有《font:ul40》馬《font》記念。今年はこのウマ娘が勝利するのでしょうか。注目は去年の勝者シンボリクリスティ。そして現在秋2冠のインパクトターボ。この2人が勝つのか。はたまた他のウマ娘が勝つのか。注目のレースを一目見ようと多くのファンがこの中山競《font:ul40》馬《font》場に押し寄せています。さあ今日出走するウマ娘を振り返ってみましょう。1枠1番ツルマイボーイ。1枠2番ゼンノロブロイ。2枠3番スレッジハンマー。2枠4番インパクトターボ。3枠5番サムシングブルー。3枠6番ウインドブレイブ。4枠7番キタサンブラック。4枠8番サトノダイヤモンド。5枠9番チエストヨコヤマ。5枠10番ダービレッジ。6枠11番アグネスデジタル。6枠12番シンボリクリスティ。7枠13番レッツプレンティ。7枠14番ネイティバイオ。7枠15番リンリーン。8枠16番チャクラム。8枠17番タツパダンスシティー。8枠18番ビターココア。以上18人フルゲートでのレースです。

ゲートの準備が終わりましてスターターが旗を振ります。ファンファーレです。ファンファーレに促されてウマ娘たちが次々とゲートに入っていきます。体制完了。・・・スタートしました！さあ好スタートを切ったのはインパクトターボ、キタサンブラック、アグネスデジタルの3人ですがアグネスデジタルは後ろに下がって先頭はインパクトターボとキタサンブラックの2人が争っています。その後ろにタツプダンスシティーがついていきます。サムシングブルーが4番手で4バ身後ろを走っています。さらに3バ身開いてネイティバイオとレッツプレンティ。少し離れてゼンノロブロイ今日は前の方から攻めていきます。間3バ身開いてスレツジハンマーとサトノダイヤモンドがけん制しあっています。その後ろにシンボリクリステイがいます。1週目4コーナーを走り終えまして正面スタンド前にウマ娘達がやってきます。先頭は変わらずインパクトターボとキタサンブラック。タツプダンスシティーは少し下がりました。サムシングブルーが3番手に上がりました。4番手に下がったタツプダンスシティーにネイティバイオオとレッツプレンティが並んでいきます。ゼンノロブロイもその後ろにつけました。そこから5バ身は慣れましてリンリオン。そのすぐ後ろにスレツジハンマーとサトノダイヤモンド。そして内ウインドブレイブ、その外にシンボリクリステイという順番。まだ5バ身ほど間が空きましてアグネスデジタルにチャクラム。チェストヨコヤマ、ダービーレッグ、ビターココア。最後方はポツンと1人ツルマイボーイです。先頭に戻りましてインパクトターボとキタサンブラックが1コーナーから2コーナーへと入っていきます。その後ろ3バ身にサムシングブルーが追走。8バ身程離れてレッツプレンティが前に出ました4番手。外にネイティバイオ。タツプダンスシティーはちよつと下がりました。ゼンノロブロイが外に出ました。早くも先頭が向こう正面に入りました。6バ身開いて中団グループ先頭はリンリオン。しかしスレツジハンマーとサトノダイヤモンドが並んでいきます。そこから2バ身開いて外シンボリクリステイに内ウインドブレイブ。そこから大きく9バ身程離れまして後方集団を

引つ張るのはアグネスデジタルです。最後尾は変わらずツルマイボーイ。インパクトターボとキタサンブラックが早くも中間点を通り過ぎて第3コーナーに向かいます。非常に縦長でばらけた展開となりました。インパクトターボとキタサンブラックどちらも譲らず全開で飛ばしていきます。その後ろ3バ身をキープし続けていますサムシングブルー。レッツプレンティとネイティブバイオが疲れたのか下がりました。ゼンノロブロイが4番手に上がります。リンリーン、スレッズハンマー、サトノダイヤモンドが下がったレッツプレンティらをかかわして上がっていきます。第3コーナーに先頭が入ります！シンボリクリスティが動き始めました！アグネスデジタルも差を詰めてきます！先頭は第4コーナーを曲がります！サムシングブルーがギリギリと差を詰めていきます！ゼンノロブロイにリンリーン、スレッズハンマー、サトノダイヤモンドが迫ります！外からシンボリクリスティが上がってきます！アグネスデジタルは間に合うのか!?最終直線に入りました先頭は僅かにインパクトターボでしょうか！キタサンブラックも追いつがる！サムシングブルーが追い上げますがまだ1バ身の差があります！ゼンノロブロイ、スレッズハンマー、サトノダイヤモンド、シンボリクリスティが横並びで一気に上がってきます！リンリーンは直線で失速！さあ残り200メートルを切ったところで先頭は辛うじてインパクトターボ！キタサンブラックも必死に並ぶ！サムシングブルーも追いついた！末脚勝負の4人も完全に追いついた！なんと7人が並んだまま最後の坂を駆け上がる！残り100メートル！先頭はまだインパクトターボが懸命に維持している！インパクトターボが譲りません！全身全霊を込めた走り！気合の咆哮と共に僅かに体半分前に出たところでゴールイン！勝ったのはインパクトターボです！秋3冠達成です！これぞまさに逃亡屋！ターボの名前は伊達じゃない！」

SIDE：インパクトターボ

「ツシー」

いつもの様に全力で飛び出す。

「負けないよターちゃん！」

「はううー！滾りが過ぎましたあー！」

同じく好スタートを切ったキタちゃんが並んできて、どうやら好スタートするつもりは無かつたらしいアグネスデジタル先輩は下がっていった。

「いつも逃げられると思わないで！」

もう1人追いかけてきたけど私たちの加速についていけずに正面に入るころにはルーちゃんに抜かれていた。

「ついてくー！ついてくー！」

ルーちゃんのいつもの声が聞こえてくる。

「大丈夫・・・このペースでも後半十分に行けます・・・」

冷静なロブroy先輩の声も微かに聞こえてくる。

スレツジハンマーとサトちゃんは中団辺りで前を狙う。

シンボリクリステイはその後ろだからちよつと位置取りを失敗したのかな？

それなら後ろを思いっきり引き離して追い付けなくしてやる！

私はそう作戦を決めると足を速める。

私が速度を上げた事にすぐに気が付いたキタちゃんとルーちゃんも速度を上げて着いてくる。

向こう正面に入る頃には後ろとはかなり大きな差をつける事ができた。

もちろんこれで安心なんかは出来ない。

押し切る準備の為に気合を入れなおすと第3コーナーを走り抜け

て第4コーナーに入る。

「ハニー！」

ルーちゃんがじりじりと上がってくる。

キタちゃんもずっと隣にいる。

ここからが正念場、最終直線だ！

「負けないよー！ターちゃん！」

「あと少しですー！」

キタちゃんを引き離せない！

ルーちゃんもさらに迫ってくる！

「捕らえました！」

「ツシヤア！ブツチギツテヤラア！」

「皆さん勝負です！」

ロボロイ先輩、スレツジハンマー、サトちゃんもやってきた！

「どいたどいた〜！シンボリクリステイのお通りだよ〜！」

クリステイも突っ込んでくる。

しかし私の作戦が功をそうしたようで末脚組の伸びが悪い！

それでも皆並んでくる！

「気張れ！ターボ！」

「ターちゃん！あと少しなの！」

「やれるよ！」

「ウエーイ！」

「ほらほら〜！ゴールが待ってますよ〜！」

「ターちゃんの煌めきで〜！」

「バックシーン！」

「バックソー！」

チームの皆の声！

「ターボ！」

「ターボちゃん！」

「「「ターボちゃんファイター！」」」

お父さんとお母さん、それにお得意様達の声が私を後押しする！

思い出せ！私の原点！私の憧れ！

「イッケー！インパクト！」

イクノ先輩！

「ターボ全開だ〜！」

そうだ！あの日聞いたこの声！

ボロボロになりながらも先頭を譲らなかつたあの青い小さな背中を！

「負けられないんだあ！！今日だけはあああああ！！」

私は超えに来たんだあ！

全力全開の咆哮と共に、私はゴールを駆け抜けた。

「やった！やったあ！」

掲示板に表示された私の番号を見て私は大きな声を上げた。

「おめでどうターちゃん！」

「おめでどうございます！」

「お、おめでどう！」

「ありがとう皆！」

私は感極まって皆に抱き着いた。

「参りましたターちゃん。でも次は負けません」

「はい、ロボロイ先輩」

ロボロイ先輩が握手をしてくれた。

「ツケ！次は負けねーからな！」

「こつちだつて負けないよスレッヅハンマー」

「スレッヅでいいぜ」

スレッヅが拳を突き出したので私もそれに軽く当てる。

「うえゝ負けたゝゝゝ次は負けなぞゝ」

「会長のお説教がンばつてね」

クリステイが嫌そうな表情をしたので皆で笑ってしまった。

「はあくん！やっぱり有《font:ul40》馬《font》記念は最高ですう！この光景が見られるだけでも参加した甲斐がありま
すう！やっぱりゝゝしゆきゝゝゝ」

それだけ言うのとアグネスデジタル先輩は倒れた。

近くにいた係員が慌てて居るけど安心してください。

ただの尊死ですから。

こうして私は秋3冠を達成したのでした。

育成目標：有《font:ul40》馬《font》記念で1着

CLEAR 全育成目標終了

隠しイベント：『秋の忘れ物』条件達成 条件：シニア期に秋3冠を
達成する

第2シーズン第19話 ライバル（馬）

マキシマムターボのダービー制覇に号泣して牧場が少し騒ぎになつてから早くも2ヶ月が経過した。

夏の暑さを避ける為、また重賞レースが少ない為に夏は放牧のシーズンとも呼ばれている。

我が息子マキシマムターボも菊花賞に向けて体調を整える為に生まれ故郷の牧場へと帰つてきた。

「父さん、ただいま」

「お帰りマキシマム。良く・・・良く頑張った」

再び目頭が熱くなり始めたが息子の前で号泣するのは格好悪いと必死に堪えた。

「皐月賞、ダービーと走つてどう思った？」

「うん、やっぱり中央競馬って凄いなって思ったよ。強い馬が沢山居るし。特にゴールドシップが凄くて、ちよつとでも気を抜いたら負けるかも！つて思ったよ」

それは俺も思った事だった。

「いいライバルに出会えたな。その出会いを大切にしろ。ライバルの居ないレースはただ自分との闘いでしかない。それはそれで大事な事だがライバルが多ければ多い程俺たちは強くなる」

「父さんのライバル達の事、知りたいな」

「そうだな・・・最初に出会ったのはサムシングブルーだ。今は俺とも子を生す間柄だが一番最初の時は怖い馬だと思ったな。何せ俺がどれだけ飛ばしても必ず後ろについてくるんだからな」

「そうなんだ・・・それはすごいな」

「ああ、凄い牝馬だぞ。次に出会ったのがタニノギムレット。俺からダービーを奪つていった奴だ。気性の荒い奴ではあったが誰よりも己に厳しい奴だったな。俺はアイツの気迫に僅かに届かなかった」

そう、あの時俺は無敗で居た事で僅かにだが天狗になっていた。

俺ならダービーでも逃げ切れる。

そんな思いが絶対に俺を打ち負かすと誓うタニノギムレットに負

ける原因を作った。

俺はあの時絶対に逃げ切つてやる！と思わなければいけないかったのだ。

「父さん……」

「だがそんな思いもお前のお陰ですっかり消えたよ。ありがとう」

「ううん、俺が勝ちたかったんだ」

「そうか……。さて、次のライバルの話だな。次はそうだな、一番戦った数で言えばシンボリクリスエスが一番だな。同じ様な距離適性だったからあいつとは何度も競り合った。勝つ時もあれば負ける時もあった。それでもアイツとの闘いが一番燃えた。負けたくないが一番強く思つたのもアイツだったな」

もつとも数多く戦つたシンボリクリスエスがどうしても印象が強い。

実力は数字にすればほぼ同格。

あいつの方がスピードに優れる分スタミナに余裕が無い。

燃費の良さと持続力で優れる俺に潰される事も多かった。

逆に俺は末脚の弱さが理由で抜かれて負けていた。

「タツプダンスシチーは唯一俺と引き分けた奴だな。重馬場という特殊な条件ではあつたがそれでも引き分けたのはアイツの根性だな」

「重馬場は俺も苦手かも……」

日本産駒の馬で重馬場が得意な馬の方が少ないだろうな。

「そして最後のライバルがゼンノロブロイ。俺に引導を渡した名馬だ。アイツとの勝負は俺の中で最高の走りを最後に出来た。勝てなかった事は悔しいが恨みはない。それがライバルだ」

「ライバル……。アイツも俺の事そう思つてくれるかな？」

おそらくゴールドシップの事だろう。

「ははは、あれだけお前に牙をむいてる奴は他に居ないぞ。少なくとも負けたままにはしないだろうさ」

「そっか、うれしいな」

落ち着いた性格のマキシマムがそう言って少し嬉しそうにしていた。

「マキシマム。ダービーを俺の為に走ってくれたのは嬉しい。だが今は自分の為に。そしてお前を応援してくれる皆の為に走れ。俺を重きに置くな」

「・・・はいー」

マキシマムは夏が終わる少し前にトレセンへ戻っていった。

時は流れて菊花賞がやってきた・・・。

「マキシマム・・・無理だけはするなよ・・・」

「お願い・・・無事に帰ってきて・・・」

長距離の適性は俺もスズカミラーも低い。

特に長距離を逃げて勝つのはさらに厳しい。

足にかかる負担は普通に走るより大きい。

俺は頑丈さには自信があったからギリギリまで頑張った。

しかしマキシマムにそれが受け継がれているかどうかは分からない。

「少しは自分の息子を信じなさい。それでも私の息子ですか」

「お袋・・・」

「イクノさん・・・」

以前の事を思えば年を取って少し丸くなってきたがそれでもまだまだ牧場内の牝馬リーダーダーとして厳しいイクノ母さん。

「私たちに出来るのはただ信じて待つ。それだけです」

「そう・・・だな・・・」

「はい・・・」

そう言うイクノ母さんも落ち着かない様子だ。

それでも良く知っている俺が辛うじて気が付く程度だ。

きつとイクノ母さんもこんな気持ちでラジオを見つめていたのだろう。

ラジオは菊花賞の様子を伝えてくれる。

『さあ、第73回菊花賞。注目は1番人気のマキシマムターボ。皐月賞、ダービーを制し、3冠に挑みます。果たして菊花賞を逃げ切れるでしょうか。初めて挑みます3000メートル。他の馬が追い抜くのか、マキシマムターボが逃げ切るか。本日走る馬をご紹介いたしま

しよう。1 枠1 番ゴールドシップ、2 番人気です。マキシマムターボに強く威嚇したのでパドックでは別周回となりました。1 枠2 番マキシマムターボ、1 番人気です。皐月賞、ダービーを逃げ切りしました3 代目。菊花賞も逃げ切りなるでしょうか。2 枠3 番ベルドインパクト。2 枠4 番ラニカイツヨシ。3 枠5 番アーデント。3 枠6 番ロードアクレイム。4 枠7 番エタンダール。4 枠8 番ニューダイナステイ。5 枠9 番フジマサエンペラー。5 枠1 0 番マウントシヤスタ、3 番人気です。6 枠1 1 番ビービージャパン。6 枠1 2 番コスモオオゾラ。7 枠1 3 番ダノンジエラート。7 枠1 4 番ミルドリーム。7 枠1 5 番ユウキソルジャー。8 枠1 6 番スカイデイグニティ。8 枠1 7 番タガノビツグバン。8 枠1 8 番トリップ。以上1 8 頭フルゲートでのレースです』

頑張れ・・・マキシマム・・・。

馬の神に祈りを捧げながら俺はただラジオを見つめ続けた。

『さあ、ゲートの準備が終わりましてスターターが旗を振ります。ファンファアレを京都競馬場に響き渡ります。各馬が次々とゲートインして行きますがゴールドシップがやはり嫌がり中々入ろうと・・・いや！今日はやる気かゴールドシップ！先に収まったマキシマムターボを睨みつけながらゲートに収まりました！係員が出ます。・・・スタートしました！2 番マキシマムターボやはり好スタートですがスツと取ります！同じく1 番ゴールドシップも好スタートですがスツと後ろに下がります！2 番手は外からビービージャパンが行きます！3 番手はコスモオオゾラが果敢に攻めます！坂を下りまして8 0 0 標識を通過しました！その後タガノビツクワン！その後ろにトリップ1 8 番！その後ろ8 番ニューダイナステイが馬郡に飲まれながら走っています！この間に9 番藤政エンペラーが外に出ます！さらに1 4 番ミルドリーム！5 番のアーデントも上がっていきます！先団馬郡のちょうど真ん中1 5 番のユウキソルジャーいい位置！4 コーナー回ってスタンド前に入りました！その後ろに1 0 番のマウントシヤスタ！ここから先頭までは9 馬身ぐらいの位置！最内はベルドインパクトスタンド前を通過！外から1 6 番のスカイデイ

グニテイが上がっていきます！さあ拍手に迎えられて最初の1000メートルですが59秒5と3000メートルにしては少し早いペースかもしれません。7番のエタンダールも先団を追って徐々に上がります！後方ですが6番ロードアクレイムが後ろから4番手！その後ろに4番ラニカイツヨシですが後方2番手ゴールドシップが前方を強く睨みつけて狙っています！第1コーナーカーブ！これを見るように最後方ダノンジェラート！ゴールドシップは後方から2番手で第1コーナーを曲がっていきます！さあ行きます2番のマキシマムターボ！リードは3馬身取っています！単独2番手ビービージャパン。その後ろにトリップが上がってきました3番手！フジマサエンペラーも外から上がっていく！インコース少し控えてコスモオオゾラ！その斜め後ろにタガノビックワン！外に5番アーデントと続いて向こう正面に出ています！その後ろに8番ニューダイナスティ、その外から10番マウントシャスタがジワツと前を追って上がり始めました！後は14番ミルドリームが坂の上りに入ります！内から7番エタンダール！その後スカイデイグニテイ！その後馬郡の中ユウキソルジャーが居ます！そして外から1番ゴールドシップが進撃を開始する！グングンと加速して一気に馬郡を追い抜いて前に出ていく！坂の上りで仕掛けましたゴールドシップ！一気に先団に追いつき！そして追い越しました2度目の坂越え！さあ3コーナー坂の下りに入ります！2番マキシマムターボ先頭でリードは3馬身！11番ビービージャパンが2番手！その後トリップ、マウントシャスタ、大外にゴールドシップが動いた！皐月賞2着！ダービー2着！菊花賞はどうか!?マキシマムターボがまだ先頭のまま4コーナーカーブ！2番手争いはビービージャパン！トリップ！ゴールドシップが並んでいる！その後ろにラニカイツヨシ！外からベールドインパクトが上がってきた！直線に入りました！マキシマムターボ逃げろ！ゴールドシップが一気に上がって追い付いた！2頭が並んでいる！しかし先頭はまだマキシマムターボ！懸命に前に進む！ゴールドシップが抜いたか！なんとマキシマムターボが抜き返した！ゴールドシップも渾身の走りでもう一度抜き返す！何という2頭の叩き

合い！抜きつ抜かれつ！2頭並んだままゴールイン！しかし最後の最後で外ゴールドシップが僅かに前に出たか！内田博幸が右手を高く上げました！マキシマムターボ惜しくも3冠ならず！』

「ああ・・・」

思わず零れてしまった声。

しかしそれは俺では無かった。

「・・・お袋」

「私も年を取りましたね・・・」

イクノ母さんはそれだけ言うのと恥ずかしそうに去っていった。

何だかんだで勝負に一番強い思いがあつたのはイクノ母さんだつたのだろう。

「よく頑張つたね・・・マキシマム・・・」

「そうだな・・・今度帰ってきたら沢山誉めてやろうな」

3冠は確かに残念だった。

だがアイツの全力の走りだ。

父である俺が認めてやらないで誰が認めてやるんだ。

「いいライバルに出会えたんだ。あいつも今以上に強くなるさ」

「頑張つてね、マキシマム」

いいレースを楽しんで来い。

第2シーズン第19話 ライバル（ウマ娘）

有《font:ui40》馬《font》記念を制し、秋3冠を達成した私にとある招待状が届いた。

「インパクト、お前にURAFファイナルへの招待状が来ている」
「本当ですか!？」

URAFファイナルとは人気に陰りの出始めたレースを盛り上げようと中央トレセン学園が主体となって企画、URAと共同で運営されている特殊なレースである。

予選、本選、決勝戦の計3回全てをGIレースと同等に扱い、さらにはトウインクルシリーズ、ドリームトロフィーリーグ、ローカルリーグの垣根を超えた一大レースに日本中は愚か世界からも注目を集めている。

しかし他のレースとの兼ね合いもある為、非常に限られた期間に連戦を強いられる事になる為、様々な事情で辞退してしまうウマ娘も居る。

「どうする?今年辞退するという方向でも問題は無いが」

「いえ、出ます!私の走りがどこまで通用するか知りたいんです!」

そもそもURAFファイナルに呼ばれる事だけでも非常に名誉なのだ。

「分かった。ではまずはURAFファイナル予選レースに向けてのトレーニングを開始するぞ!芝2200メートルだ」

「はい!」

私は元気よく返事をした。

そして予選レースの日を迎えた。

「まさか早速お前と当たる事になるとはな。インパクト」

「それはこっちの台詞だよスレッツ」

足への負担を考えて、今年でドリームトロフィーへの移行を表明したスレッツと最初の予選で勝負する事になってしまった。

「足は?」

「アイツが心配しまくるから医者に見せてるよ。保証は貰った」

ウマ娘特有の病気、屈腱炎。

スレツジは一度発症している。

完治は難しく、仮に治ったとしても再発する可能性の高い病気の為、競走に復帰するのを諦めなければならぬウマ娘も多い。

スレツジの足は常に見えない爆弾を抱えてしまったのだ。

「手え抜くなんて真似はすんじゃねえぞ」

「分かってるよ」

私たちは拳を軽くぶつけた。

本選への出場権はたった一枠。

譲るわけにはいかない。

「さあ！間もなく始まりです！URAファイナル予選第5レース！芝2000メートルです！このレースの1番人気はこのウマ娘！秋3冠を達成いたしました2枠4番、インパクトターボです！実力は引けを取りません2番人気！ドリームトロフィーリーグへの移行を表明した4枠7番、スレツジハンマーです！この評価は少し不満か！3番人気は8枠16番ハッピーミークです！各ウマ娘がゲートに収まりました。・・・スタートしました！4番インパクトターボが好スタートを切りました！同じく好スタートを切ったハッピーミークは少し下がりました！中団に控えました！先頭はインパクトターボリードを広げていきます！」

「ッシー！」

いつも通りゲートが開くと同時に飛び出す。

「わあ・・・すごい・・・」

外枠の白毛ウマ娘、ハッピーミークも好スタートだったがそれを上回る勢いで私は先頭を取る。

ハッピーミークは差しを選んだのか慌てて私を追いかける他のウマ娘達にあえて先に行かせて下がっていった。

スレツジはいつも通り最初から中団に居る。

さて・・・逃げ切らせて貰うよ！

「インパクトターボは今日也大逃げです！2番手につきましたヨコヨコとは間10バ身と大きなリード！3番手には今日は先行策かマイ

モルホウホウ！その外にゴーゴーマイク！さらに外からジョニーザ
ジョニーが上がってきます！その後ろでキラキラフォースがちよつ
と落ち着かない様子！左をダークベンダー、右をマスターヨーガに囲
まれて走りづらそうだ！その後ろ内ハッピーミック、外スレッジハン
マーと末脚自慢の2人！少し間が空きました後方集団を引っ張りま
すのはブラウンシュガー！出遅れが響いているかシルバーウィーク
！展開を伺いつつ足を溜めているのはチャージバスター、マツチーガ
イル、レッドサイクロンの3人！最後方はポツンと1人オサカベプリ
ンセスです！非常に縦長の展開となりました！」

安定したレース運びで私はほとんど前に進む。

しかしやはりURAFファイナルに招待されるウマ娘達だけあって
まったく油断できない。

これだけ引き離していても必ず誰かが追い付いてくる。

そんな予感が消えないまま私は第4コーナーを曲り、直線に入っ
た。

「最終直線にインパクトターボが入りました！後ろから集団を抜け出
してスレッジハンマーとハッピーミックが追い上げてくる！最後方
を走っていたオサカベプリンセスもいつの間にか4番手まで来てい
るぞ！逃げるインパクトターボリードは3バ身まで縮まっている！
スレッジハンマーとハッピーミックが物凄い追い上げだ！しかし残
りは200メートル！インパクトターボ逃げ切れるか！それともス
レッジハンマーとハッピーミックが差し切るのか！オサカベプリンセ
スはちよつと苦しいか！インパクトターボが懸命に粘る！スレッジ
ハンマーとハッピーミックが必死に追い上げる！並ぶか！しかし僅
かに届かないままゴールイン！インパクトターボが勝ちました！U
RAファイナル本選への切符を手に入れました！」

「やったあー！」

「チッククシヨーー！負けたらしょうちしねえからな！」

「・・・負けた・・・悔しい・・・トレーナー・・・がっかりする・・・」

何とか逃げ切った私にスレッジが怒りながらそう言った。

ハッピーミックは・・・うん、物静かな子なんだな。

育成目標：URAFファイナル予選で1着 CLEAR

そして次のレース、URAFファイナル本戦……。

「皆と戦うのは決勝戦だと思ってただけど……」

「確かに18レースもあるのに全員が同じレースに振り分けられるのはかなり奇跡的だよね」

「確かにそうですね。運が良いのか悪いのか分かりませんね」

「ぞ、残念です……」

まさか決勝戦を前にキタちゃん、サトちゃん、ルーちゃんと戦う事になるとは思わなかった。

「なんか締まらないけど、決勝戦に行けるのはただ一人……」

「負けないよ」

「私だつて負けたくありません」

「が、頑張ろうね」

私たちはいつもの様に笑いあうとターフに出た。

「さあ！まもなく始まりますURAFファイナル本戦第3レース！芝2400メートルです！このレースの1番人気は秋3冠ウマ娘、3枠6番インパクトターボ！2番人気はこの娘！お祭りウマ娘5枠10番キタサンブラック！3番人気はまさかの同票！2枠4番サトノダイヤモンドと4枠7番サムシングブルー！さあ各ウマ娘やる気十分でゲートに収まります！体制完了！……スタートしました！綺麗に揃ったスタートになりました！ハナを切るのはインパクトターボとキタサンブラック！逃げを得意とする2人のウマ娘が激しい先頭争い！間3バ身開いて3番手に着きましたのはサムシングブルー！この3人が先行集団です！そこから間が7バ身ほど開きまして4番手にはテイテンカンソク！その外にアブラトリパーパー！その後ろ集団に囲まれてオーレガシユヤク！外から押さえつけるサイドバック！その後ろにサトノダイヤモンドが外に抜け出してきました隊列真ん中辺り！」

「ッシー！」

「行くよターちゃん！」

キタちゃんに負けないように勢いよく前に飛び出す。

逃げが得意な私たちはこうして競り合うのはもうお馴染みだ。そして私たちの後ろにはしっかりと私たちを追いかけてくるルーちゃんが居る。

唯一サトちゃんだけが後ろからになるけれども当然ながら末脚は私たちの中では一番だ。

後ろにいるからと言って決して決して油断はできない。

私は足に力を込めて加速していく。

「さあ先頭集団は早くも1000メートルを通過いたしました！真ん中より後ろに内マイティーボム、外デンジャーデンジャー！その後ろにサトウシュガー！マインクラフターもここに居ます！ハルハアケボノはちよつと落ち着かないか？ピクシースキーとアリスラバーは後方で足を貯めて居ます！後ろから3番目はサルンパス！最後方の2人はストームアラシとトキオシゲル！さあ先頭が第3コーナーを曲り第4コーナーへと向かいます！各ウマ娘の動きが激しくなってきました！」

「コーナー！」

ジワリジワリとルーちゃんが上がってくる。

キタちゃんはまだ隣に並んでいる。

サトちゃんも外に抜け出して上がってきている。

残るは直線のみ。

後は根性で走り切るのみ！

「第4コーナーを抜けて直線に入ります！先頭はインパクトターボとキタサンブラック！サムシングブルーがジワジワと差を詰めて追いつきます！外に持ち出したサトノダイヤモンドも末脚を炸裂させる！ピクシースキーとアリスラバーも溜めた足を使って上がってくるが届くでしょうか！インパクトターボ懸命に粘る！キタサンブラックが必死に追いつがる！サムシングブルーとサトノダイヤモンドも並んでくる！しかしインパクトターボ決して先頭は譲らない！体半分を抜かせない！渾身の走り！辛うじて先頭を維持したままゴールイン！」

「ツハア！あつぶなあ！」

「むうー！あと少しなのにい！」

「やっぱり強いです」

「け、決勝戦頑張ってください」

「うん、ありがとうー！いい勝負だったね！」

私たちは握手をした。

育成目標：URAファイナル本選で1着 CLEAR

そして迎えたURAファイナル決勝……。

「やっぱりここまで来たね。クリステイ」

「……出ないと会長に実家に報告するって言われたからね」

相変わらずやる気が見えないクリステイ。

「会長の苦勞が忍ばれますね……」

ロブロイ先輩もそう言って目を伏せた。

今回会長はクリステイのお目付け役としてURAファイナルには出場していない。

その代わり、と言うわけではないが生徒会のナリタブライアン先輩が参加している。

以前負った怪我の影響で全盛期より速度は落ちていると言われていたがそれでも怪物の異名を与えられるほどの実力者だ。

トウインクルシリーズは引退してドリームトロフィーリーグに移行し、足への負担を減らしてまだレースを続けている。

そんなナリタブライアン先輩と戦える。

あの時の背中を追い越したい私にとってはまたとない機会だ。

「いつも通り走るだけ……逃げ切って見せる……！」

私はそう小さく呟くとターフに出た。

「さあ！URAファイナル決勝は東京競場《font:ul40》馬／font》場、芝2000メートルで行われます！各レースを勝ち残った18人のウマ娘達！今年のURAファイナルを制するのは誰か！1番人気はこのウマ娘！怪物ウマ娘、4枠8番ナリタブライアン！2番人気はこのウマ娘！大逃げばかりの歌舞伎者！6枠11番インパクトターボ！3番人気だからと言って実力不足ではありません！大人しい外見からは想像できない末脚を持つ1枠1番ゼンノロブ

ロイ！他のウマ娘たちも決して引けを取りません！泣いても笑ってもこれが最後のレースです！各ウマ娘ゲートイン完了！・・・スタートしました！1人出遅れましたが後は綺麗にそろったスタートです！先頭争いはインパクトターボが抜け出しました！その後ろは2バ身離れてビービーダッシュ！そこから間が開きまして集団を形成しています！3番手には今日は先行策、ダンプレミア！その後ろに怪物ウマ娘ナリタブライアン！そして珍しい事にゼンノロボロイが5番手に居ます！その後ろにマークエックス！その外にムーンラビット！シンボリクリスティ今日は中団前目にいます！」

「ッシー！」

今回も完璧なスタートができた。

ナリタブライアン先輩もロボロイ先輩も今日は先行策で勝負するようだ。

クリステイは中団につけたようだがひそかにやる気なのか前目にいる様だ。

私の後ろに居る逃げウマ娘は私に先頭を取られてしまったせいで苦戦しているようだ。

行ける！

いや、行ってみせる！

戦ってきた皆の為に！

私の為に！

「隊列真ん中辺りで争うのはハシルゼミテロとアメリカンバイク！その後ろ内リーダーテン、外マリアリア！間が開きまして後方集団メーテルナイン、ブラックゼロ、スカイドロップ！後ろから3番手オジョウサン！その後ろにトムキャット！最後方は出遅れたパースです！さあ先頭インパクトターボがビービーダッシュを引き離しに掛ります！中間を過ぎて第3コーナーに入ります！インパクトターボリードは5バ身！ビービーダッシュも慌てて速度を上げますが追い付きません！3番手はナリタブライアンが上がりゼンノロボロイもそれを追走！ダンプレミアは下がっていきます！まもなくインパクトターボが3、4コーナー中間を通過！中団ではシンボリクリステイが

「ナリタ・・・ブライアン先輩・・・」

「おめでとう。お前の勝ちだ」

一瞬言われた事を理解するのに時間が掛かったけれど、直ぐに私はナリタブライアン先輩の手を取った。

「ありがとうございます！ナリタブライアン先輩！強かったです！」

「お前もな！」

私はついにあの憧れに追いついたのだ。

育成目標：URAFファイナル決勝で1着 CLEAR

第2シーズン第20話 韋駄天（馬）

時は流れて2014年になった・・・。

菊花賞の後もマキシمامとゴールドシップは度々レースで争い続けた。

互いを強く意識しあうライバルの為に、片方しか出ていない時はつまらなさそうに走っていると専らの噂だ。

その結果、2013年の多くのGIレースでは、ゴールドシップかマキシمامどちらかの名前が常に優勝にあつたほどだ。

マイル中距離が主戦のマキシمامと中長距離が主戦のゴールドシップが競うレースはどうしても重なりやすい。

お蔭で中距離戦のGIは完全に2頭の独壇場となつてしまったのだ。

そんなマキシمامとゴールドシップは今年フランスに向かう。

当初、マキシمامは凱旋門賞に出る予定では無かつた。

理由は単純に費用の問題だつた。

海外のレースに出るのには非常にお金がかかる。

室オーナーは共同馬主ではあるが資金の多くを出している為に海外遠征分の出費はかなりの金額になる。

さらには海外遠征への伝手も無い室オーナーでは条件を整えるのが中々難しいと言うのが理由でもあつた。

ところが何とゴールドシップのオーナーから是非マキシمامを帯同馬として凱旋門賞に参加させてほしいとお願いがあつたのだ。

気性が荒く、気まぐれで、頭が良いせいで人を小馬鹿にする性格のゴールドシップ。

その結果レース途中でもやる気を失くしてしまい勝てるはずのレースで勝てないなんて事もあつた。

しかしマキシمامと出会ってからは見違えるようにレースにやる気を見せるようになり、マキシمامが参加していないレースだと明らかにやる気を失うという具合だ。

凱旋門賞に参加するにあたってやる気を出させるにはマキシمام

が参加するのが一番だ。

海外遠征の費用も一部負担するし遠征の諸々の手配を全て引き受けるからと言われて、室オーナーは仲間と相談した上で同意した。

問題は輸送中にゴールドシップとマキシマムが喧嘩しないだろうかという事だったが間にもう1頭挟むから大丈夫だろう、との事だ。

本当に大丈夫なんだろうか・・・。

かなり心配ではあるが、しかし俺にはどうしようもない事だ。

そんなマキシマムは凱旋門賞に向けての準備の為、夏の放牧は無しになった。

少し寂しい限りである。

そんな事を思いながらモシャモシャと餌桶から餌を食べているとラジオから七夕賞の様子が流れてきた。

そう言えば俺は結局七夕賞とは縁が無かったな。

親父は七夕賞で有名になったが・・・。

その時だった。

『それでは本日のメインレース七夕賞の前に開かれます準メインレース、JRA60周年記念記念競走メモリアルレース、韋駄天ツインターボカップです』

おお!?何と親父の名前のレースじゃないか!

これは飯が美味しい!

『血の宿命か、はたまた名前前に引き寄せられたか。韋駄天ツインターボカップに出走いたします11頭の内なんと7頭がツインターボの息子、インパクトターボの血を引いております』

ブーッ!

な、なんだってえ!

思わぬ出来事に食べていた餌をおもいつきり嘔き出してしまった。

運悪く偶然俺の馬房の前を通りがかった厩務員がそれを被ってしまい恨めしそうな目でこちらを見ている。

かんにんや!悪気はなかったんや!

ってそれよりどうしてそうなった!

残念ながらラジオはそれに答えぬままレースは始まった。

『各馬がゲートに収まりました。・・・スタートしました！さあ7頭の先行馬による先頭争い！祖父の名を手にするのはどの馬か！先頭は3頭並びました！内が1番イーエツクスキタク！真ん中が5番エヌイーエンジン！外が10番ダツシユマツシユ！その後ろに内が2番テイエムニトロ！外に7番デュアルジェット！6番ネコキックが外に抜け出しました！4番ターボチャージは前を塞がれてしまいました！3番ワイワイジョイは後方からのレース！最後方は11番サンライズポパイ！後方集団8番カシノエルフと7番レッドガルシアです！さあ第4コーナーを曲がって直線です！先頭は僅かにイーエツクスキタク！エヌイーエンジンとダツシユマツシユも懸命に走る！イーエツクスキタクが伸びる！エヌイーエンジンとダツシユマツシユは引き離される！イーエツクスキタクです！イーエツクスキタクが1着のままゴールイン！勝ったのは1番イーエツクスキタク！見事なエクストリーム帰宅です！祖父の名を冠したレースを勝ちました！』

ええ〜・・・まさかの珍名馬が勝ちよった。

しかも俺の血かい！

なんかすつごく喜べない。

そして10月・・・。

『さあ、間もなく始まりますフランスGI凱旋門賞。今年は日本から3頭の馬が出走いたします。皆さんご存じゴールドシップとマキシマムターボ、そしてジャスタウエイです。互いにライバルとして切磋琢磨するこの3頭が揃つての凱旋門賞出走には多くのファンが期待を寄せています。全20頭という数で行われますこのレース。果たして日本競馬は世界に通用するのか。ゴールドシップは2番ゲートでゼッケンは6番、マキシマムターボは12番ゲートでゼッケンは19番、そしてジャスタウエイは14番ゲートでゼッケンは7番となりました。日本競馬と違ってゲート番号とゼッケンが一致しませんので分かり難いですがご容赦願います』

「頑張れよ・・・マキシマム・・・」

「無事に帰ってきて・・・」

「・・・」

俺とスズカミラー、そしてイクノ母さんはラジオに全神経を集中している。

他の馬達も心配そうにラジオに意識を向けている。

『さあ、20頭もの馬が順々にゲート入りしていきます。日本のゴールドシップ、マキシマムターボ、ジャスタウェイはゲート入りが終わっています。さあ、今最後の1頭がゲートに収まりました。フランスロンシャン競馬場芝2400メートルのレースです・・・スタートしました！20頭もの世界最高峰の馬達が轟音とともにストレートを走ります！先頭争いですがやはりマキシマムターボは宣言通り逃げを狙います！その後ろにつきましたのは12番のモンヴィロン！ゴールドシップはやはり最後尾からのレースのようです！ゴールドシップから数えて4頭前にジャスタウェイ！先頭と最後尾に日本馬という布陣になりました！』

「行け！世界にお前の走りを見せてやれ！」

「マキシマム・・・！」

「・・・！」

『さあ！第3コーナーのきつい上り坂！先頭はマキシマムターボのまま！第3コーナーを抜けまして今度は10メートルもの落差のある下り坂！そしてコーナーを曲がり終えても最終直線ではありません！フォルスストレート！偽りの直線と呼ばれるロンシャン競馬場名物の第3コーナーから第4コーナーにかけての250メートルの直線があります！さあここでゴールドシップが動いた！なんとフォルスストレートで進撃を開始する！果たして届くのか！それとも走り切れるのか！第4コーナーをカーブして残り533メートルの直線！マキシマムターボムチが入る！後方を引き離す！行けるのか！日本勢初の勝利となるのか！ゴールドシップが大外から一気に上がってくる！ジャスタウェイは内から抜け出すチャンスを伺う！マキシマムターボに欧州馬が迫る！ゴールドシップが一気に上がる！マキシマムターボも懸命に粘る！ジャスタウェイはチャンスが中々訪れない！残り200メートル！日本勢の思いは届くのか！マキシマム

ターボに欧州馬が並ぶ！ゴールドシップも先頭集団に追いついた！マキシマムターボがもう一度引き離そうと必死に走る！』

「マキシマム!!」

『先頭並んでいる！日本勢が並んでいる！マキシマムターボとゴールドシップだ！届くか！届くか！届け！届け！届いた！届いたああああああああああああ！勝ったのはゴールドシップかマキシマムターボか！まだ分かりませんが日本勢が勝ったことには間違いありません！やりました！凱旋門賞に日本が初めて届きました！優勝は！ゴールドシップだあ！黄金船が凱旋門賞を制しましたあ！マキシマムターボ惜しくも2着！どちらが勝ってもおかしくない大接戦！やりました日本競馬！今！世界に日本競馬が届きました！』

「・・・よく頑張った・・・マキシマム」

「本当に・・・よく頑張りました・・・」

「さすがは私の孫ですね・・・」

世界最高の荣誉には残念ながら僅かに届かなかった。

だが十分すぎる成果だ。

親父・・・あなたの血はここまで来たぜ・・・。

第2シーズン第20話 韋駄天（ウマ娘）

私がURAファイナルを勝利した後……。

季節は3月、分かれの季節。

そう、今日は中央トレセン学園の卒業式……。

長らく生徒会長を務めていたシンボリルドルフ会長が今日をもって中央トレセン学園を去る。

次期会長にはシンボリルドルフ前会長直々の指名でスペシャルウィーク先輩が就任。

補佐としてプライドは高いが面倒見の良いキングヘイロー先輩が副会長に、文武両道のグラスワンダー先輩が書記として就任した。

また問題児を監視するとの名目で生徒会事務係（急遽作られたので名称は適当）としてセイウンスカイ先輩とシンボリルドルフ前会長が頼み込んで要監視対象のシンボリクリスティが就任。

両名は非常に嫌がっていたがグラスワンダー先輩の圧に屈して入る事になったそうだ。

なお当初はゴールドシップ先輩も入れる予定だったが、入れた方が寧ろ制御が困難になるという沖野トレーナーからの忠言により中止。

トウカイテイオー先輩は大好きなシンボリルドルフ前会長の後継ぎに成れなかった事を酷く悔しがっていたが、卒業式で本来であればスペシャルウィーク新会長が手渡す感謝の花束をトウカイテイオー先輩が特別に渡すという事で話をまとめた。

「私達は今日、ここ中央トレセン学園から卒業する。しかしそれは終わりではなく、新しい航海への旅立ちである。七難八苦、どの様な困難が立ち塞がろうと、諦める事無く立ち向かっていく所存だ。以上、シンボリルドルフからの最後の言葉とさせて頂く」

割れんばかりの拍手と、幾多の泣声に包まれる大講堂。

舞台の上には懸命に涙を堪えながら笑顔を作るトウカイテイオー先輩が、彼女の体より大きな花束をシンボリルドルフ会長に渡す。

「ずいぶんと大きな花束だな……」

「それだけ皆カイチョーが……ううん、シンボリルドルフが大好きな

んだよ！皆の思いを込めたらこんなになっちゃった」

「そうか・・・ありがとう皆。ありがとうティオー」

「ボクこそありがとうシンボリドルフ・・・永遠の皇帝・・・」

必死にこらえていた涙が頬を伝ってしまいがトウカイテイオー先輩は最後まで笑顔だった。

こうして、多くの人に見送られてシンボリドルフ前会長を始め、幾多の先輩ウマ娘達が卒業していった。

そして4月・・・。

「えつと・・・と言う訳で・・・そのく・・・あのく・・・」

「カイチヨウ！カンペワウスレテマスワヨ！」

「アリガトウキングサン。・・・えつと、皆さん文武両道を目指し、切磋琢磨して、し、シンシユカカン？に学園生活を送ってください！以上、生徒会長のスペシャルウィークです！」

若干危ない部分が見受けられるが周りからフォローされながら何とかスペシャルウィーク会長は業務をこなしている。

多分カンペ書いたのグラスワンダー先輩なんだろうなあ・・・。

新生生からはしつかりとした拍手が、在校生からは若干の笑い声と拍手が送られた。

「それで、ドリームトロファイリーグに移行するんだな？」

「はい、もつと色々なウマ娘と戦いたいですから。例えばチームハダルの先輩方と本気のレースで・・・」

トウインクルシリーズがつまらないというわけではない。

しかしより高見に居る先輩たちと戦いたいと言う気持ちは変わらなかった。

それに、あの憧れの青い背中とも戦える期間はもうそれほど残っていない。

「そうか・・・そんなお前に朗報だ。実は7月に・・・」

そうして山田トレーナーはとあるレースの名前を私に告げた。

5月・・・。

「ルーちゃん、大丈夫？」

「お見舞いに来たよ」

「お怪我の具合はいかがですか？」

天皇賞春出走後に病院に運ばれたルーちゃん。

「軽度の屈腱炎だそうよ。今すぐ引退するほど酷い状況では無いけれど、今後の事を考えたらドリームトロフィーリーグに移行した方が良さそうね。ルーちゃん、お疲れ様」

「ま、的場トレーナー・・・」

「ふふ、私の事なら大丈夫よ。シルクも居る事だし、貴女の大好きなお姉さまのライスの所に入れる様にしてあげるわ」

「ううん、私は的場トレーナーの所がいいです。シルクちゃんのお蔭で的場トレーナーもドリームトロフィーリーグの許可が下りますよね？」

「ルーちゃん・・・ありがとう」

ルーちゃんは怪我が理由ではあったものの、ドリームトロフィーリーグへの移行を決めた。

キタちゃんとサトちゃんは今年一杯は頑張るらしい。

6月・・・

「・・・と言うわけで凱旋門賞出走の為に一時的にチームハダルに移籍になったマキシマムターボだ」

「マキシマムです。よろしくお願いします」

どうやらマキシマムのトレーナーさんは海外遠征のノウハウが無い新人トレーナーらしく、ベテラントレーナーで海外遠征も経験のある山田トレーナーに依頼したらしい。

もちろん現地へは両方のトレーナーが赴き、海外遠征のノウハウを教えるらしい。

「よろしくね。マキシマム」

「はい、運命（的な何かを感じる私）の先輩」

「うん、括弧の中身をちゃんとと言うところから始めようか!! 私のために!!」

やっぱり誤解が生じたマキシマムの言葉にバクソウオーちゃんが食って掛かり、先輩方（特にスカイ先輩）に揶揄われた。

先が思いやられる・・・。

そして7月……。

「さあ！まもなく始まりますUR A 60周年記念特別協賛レース、ドリームトロフィーリーグ韋駄天杯！このレースは逃げウマ娘の！逃げウマ娘による！逃げウマ娘の為のレースです！ここ、福島競馬場《font》場に多くの逃げウマ娘が集まりました！芝2000メートルで争う逃げの頂点を取るのはどのウマ娘か！」

4月に山田トレーナーに告げられたレース。

常設レースでは無いがUR A 60周年という事で多くの意見が寄せられて開催されたレース。

その意見とは、『逃げウマ娘は誰が一番早いのか』というものだった。

逃げウマ娘は元々少ない。

その上大成する逃げウマ娘は殆ど一握りと言っても良いだろう。

いやまあチームハダルみたいなロマンチームも有るけれども……。

そんな意見から作られたこのレースには当然の様にチームハダルのメンバーも揃って出場する。

勿論他のチームからも逃げ脚自慢のウマ娘達が参戦する。

「それでは注目のウマ娘達を見てみましょう！1枠1番は何で貴女がここに居る！至高のスプリンターサクラバクシンオー！トレーナーさんを半ば脅迫しての出場です！」

「どんな距離でもバクシンあるのみです！」

「2枠2番は異次元の逃亡者！サイレンススズカ！」

「先頭の景色は譲りません」

「3枠3番はバク逃げコンビのメジロの方！メジロパーマー！」

「いやその紹介はどうなの!？」

「4枠4番はバク逃げコンビのギャルの方！ダイタクヘリオス！」

「いえーい！バク逃げゴーゴー！」

「4枠5番は元祖スパーカー！マルゼンスキー！」

「テンションアゲアゲよ〜！」

「5枠6番はミスパーフェクト！ダイワスカレット！」

「1番は譲らないんだから！」

「5枠7番は砂の女お・・・ウマドル！スマートファルコン！」

「ファル子がんばりまくす☆」

「6枠8番は個性派逃亡者！ツインターボ！」

「ターボが一番！」

「6枠9番は大逃げ傾奇者！インパクトターボ！」

「逃げる阿呆に追う阿呆、同じ阿呆なら逃げなきや損々！」

「7枠10番はマイペースな曲者！セイウンスカイ！」

「まく程々に頑張るよ〜」

「7枠11番は天真爛漫の自在な脚質！マヤノトツプガン！」

「今日のマヤノは逃げるよ〜！」

「8枠12番はまさに風神！アイネスフウジン！」

「皆で一緒に逃げるの！」

「8枠13番は坂路の申し子！ミホノブルボン！」

「指令へオーダー〜を確認、ミノホブルボン発進します」

「以上13人の逃げウマ娘です！皆さんの逃亡者は誰ですか!？」

まさに逃げウマ娘の祭典！

果たして私は勝てるのか！

ワクワクが止まらない！

このワクワクはあの憧れの背中と一緒に走れる事も関係している。

ついにツイン先輩と走れるんだ！

さあ！レースの時間だ！

「各逃げウマ娘がゲートに収まりました。・・・スタートしました！全員見事な好スタート！13人全員が先頭争い！流石のスプリンターサクラバクシンオーがハナを取りましたがその隣にマルゼンスキー！しかし他のウマ娘達も先頭を諦めた訳ではありません！暫定3番手はツインターボとインパクトターボが競り合っています！そこにサイレンススズカも参戦！アイネスフウジンも外から行く！ミホノブルボンとダイワスカレット、メジロパーマーはその後ろ！ダイタクヘリオスは一旦下がって外に持ち出した！スマートファルコンとセイウンスカイ、マヤノトツプガンが最後尾ですが先頭との差はわず

か5バ身！しかしとてつもないハイペース！スプリントレースではありません！繰り返します！スプリントレースではありません！」

皆早い！

スタート自慢の私が先頭を取れない！

キタちゃんも競り合った事は何度もある！

でも先頭が取れなかったのは初めてだ！

興奮が止まらない！

もつと早く走って先頭を取らなくちゃ！

「さあクラバクシンオーとマルゼンスキーが先頭のまま！いやそこにツインターボとインパクトターボも加わりそうだ！第1コーナーを回って第2コーナーに向かいます！先頭は4人！僅かに先を行くクラバクシンオー！そのすぐ横にマルゼンスキー！それを抜こうとするツインターボとインパクトターボ！サイレンススズカはあえて内に入ってスタミナを温存！その外にアイネスフウジン！ミホノブルボンとダイワスカレットも上がってきました！向こう正面入りましてメジロパーマーとダイタクヘリオスが並びましてスマートファルコンとセイウンスカイ、マヤノトップガンが不気味な静けさ！後ろにいますが追い込みではありません！」

クラバクシンオー先輩はそろそろ距離限界か！

マルゼンスキー先輩はまだ余裕がありそう！

隣を走るツイン先輩もまだまだ元気！

後ろだってまだ全員先頭を諦めて無い！

「さあ残り800メートル！第3コーナーに向かいます！先頭クラバクシンオー表情が険しくなってきました！マルゼンスキーがここで先頭に！いや、！外からツインターボとインパクトターボが並ぶ！先頭は3人！マルゼンスキーとツインターボにインパクトターボ！クラバクシンオーは4番手に・・・いやそのままズルと下がっていきます！やはり適正の壁は分厚いか！4番手に上がったきた集団はサイレンススズカ、アイネスフウジン、ミホノブルボン、ダイワスカレット！メジロパーマーとダイタクヘリオス、そしてスマートファルコンにセイウンスカイ、マヤノトップガン上がってくる！」

小さいコーナーは速度が出た状態では外に膨れ上がってしまう！
けれども少しでも速度を緩めればもう追い抜く事は出来ない！

小柄でコーナーの得意なツイン先輩が内側に切り込んで先頭を取ろうとする！

私も内側に入る！

マルゼンスキー先輩はどうしても少し膨れ上がってしまった！

「さあ第4コーナーを曲がって残りは短い直線だけだ！先頭ツインターボ！インパクトターボとマルゼンスキーもほぼ横一列！サイレンススズカ、アイネスフウジン、ミホノブルボン、ダイワスカーレットも並ぶ！メジロパーマーとダイタクヘリオスはちよつと苦しうだが上がっていく！セイウンスカイ、マヤノトップガンが先に行く！スマートファルコンはやはり芝は苦手か！先頭並んでいる！ツインターボ必死の表情！インパクトターボ限界を超えるか！マルゼンスキー行けるのか！サイレンススズカはどうか！アイネスフウジン風になれるか！ミホノブルボン想定通りか！ダイワスカーレット1番になれるか！マヤノトップガンは持つのか！セイウンスカイの作戦は上手くいったのか！メジロパーマー根性で追いついた！ダイタクヘリオス苦しい中でも笑顔だ！スマートファルコンも気合の走り！並んでいる！12人の逃げウマ娘が並んでいる！そのままなだれ込むようにゴール！最後にポツンとサクラバクシンオーもゴールです！」

果たして誰が勝ったのか！

「勝ったのは・・・マルゼンスキーです！しかし2着ウマ娘との差はわずか1センチ！マルゼンスキー！スーパークーの面目躍如です！」

くう！マルゼンスキー先輩を超えられなかった！

でもとつても楽しいレースだった！

これからも私は逃げ続けるだろう！

この想いが続く限り！

第2シーズン第21話 時は流れて

2014年・・・。

日本競馬が初めて凱旋門賞を制したその年末・・・。

日本国内の競馬ファンの間ではゴールドシップとマキシマムターボの格付けは済んだ。

そんな風に言われていた。

そして迎えた有馬記念。

当然の如く長距離が得意なゴールドシップが勝つだろうと言われていた。

『これはどうした事だ凱旋門賞馬のゴールドシップ！マキシマムターボに全く歯が立ちません！3馬身の差を詰められないままゴールイン！1着はマキシマムターボです！凱旋門賞の雪辱を晴らす余裕の3馬身！』

あの凱旋門賞は何だったんだと言わんばかりの光景に思わずゴールドシップファンはズコーつとこけたのであった。

当然ながら競馬新聞では『ゴールドシップ慢心！』などと大々的に書かれたのであった。

そのせいなのかは分からないが2015年も燃え尽きる事なくマキシマムターボに食って掛かるゴールドシップが見られた。

2015年の凱旋門賞にも参加したが残念ながらどちらも入着に終わっている。

2頭はその年の有馬記念を最後に引退。

最後はどちらが勝つかと期待されていたがまさかのゴールドアクトーが勝利するという大番狂わせで幕を閉じた。

2頭揃っての引退式は終始落ち着いたマキシマムターボと暴れまくるゴールドシップという2頭らしい引退式となったのであった。

2016年・・・。

残念ながらこの年は俺の産駒で目立った成績を残す馬は居なかった。

高額種牡馬入りしたマキシマムは初年度から多くの種付けをする

事になった。

「父さんって・・・偉大だったんだね・・・」

と、死んだ目で話すマキシマムに俺も死んだ目で乾いた笑いを返す事しかできなかった。

2017年・・・。

「・・・でかいな」

「・・・でかいね」

俺とマキシマムがそろってそう言う理由は去年生まれた俺の産駒である。

まだ1歳だと言うのに既に馬体重が500キロを遥かに超えている。

隣に並んでいる同い年の馬がまるで子供の様だ。

室オーナーが新しく買ったお前の息子だぞと態々見せに来てくれたのだ。

「母親は・・・？」

「確かシンボリドルフ産駒の牝馬の娘・・・だったかな？」

「まだ残ってたんだね。シンボリドルフの血統の牝馬・・・」

「残ってたんだよ。競走馬登録はされて無かったらしいけどな」

体つきこそ大柄で頑丈そうで走るかと思われたのだが、蹄に問題があつたらしく裂蹄を良く起こすのでそのまま繁殖に回されたそう
だ。

当初は処分予定だったが古くからの競馬ファンがシンボリドルフの血を絶やさないと欲しいと強く願い、基金を募って繁殖牝馬として残されたらしい。

そんな牝馬と一昨年種付けをして生まれたのがこの馬だ。

「あれか？俺の血筋は親より息子の方がデカくならなきゃならないっていう意思でもあるのか？」

「父さん・・・それ笑えないから・・・」

親父より俺の方が、俺よりマキシマムの方が体がでかい。

もちろん偶然だろうが今の所俺より小柄で活躍したのはバクソウオーくらいだしなあ・・・。

そんな事を思いながらモリモリと草を食べる息子の映像を見つめるのだった。

「まあ頑張ってくれよ。ターボエンペラー」

名前負けしないか非常に心配である。

2018年・・・。

順調にマキシマムの子供たちがセリに出されていく。

中には非常に高額で取引される子も居た。

果たしてこの中でどれだけの子が大成できるのか・・・。

ゴールドシップの産駒も次々と出てくるから因縁はまだまだ続きそうである。

そして迎えた10月の新馬戦。

体が大きいせいでゲートが苦手なターボエンペラーがようやくデビューするのである。

『さあ、間もなく始まりです京都競馬場第4レース、2歳新馬戦。何とも非常に珍しい光景になりました。6枠11番メロディーレーンと6枠12番ターボエンペラーの2頭、JRA2歳馬最軽量馬体重336キロでのデビューのメロディーレーンとなんと600キロにも迫ろうかという巨漢のターボエンペラー。親子ではありません。同い年です。遠くから見ると遠近感がおかしくなった様な錯覚に陥ります』

いきなりとんでもない注目を浴びることになったターボエンペラー。

果たして大丈夫なのだろうか。

『さあ各馬がゲートに収まりました。・・・スタートしました。1頭ターボエンペラーやや出遅れたか。しかし強引な走りで先頭に立ちました。その巨体からは想像できない様な加速で先頭リードは3馬身。小さな馬体メロディーレーンですが・・・いました集団中央、ちやうど真ん中に囲まれるように走っています。中間を通過しまして先頭は変わらずターボエンペラー。注目のメロディーレーンは完全に周りを囲まれてしまつて動けそうにありません。さあ第4コーナーを曲がつて直線に入ります。先頭ターボエンペラーその巨体が生み

出すパワーで後ろを引き離す！後ろは全くついてこれない！5馬身！6馬身開いたところでゴールイン！見事な走りでしたターボエンペラー！』

いやはやとりあえず勝利おめでどうエンペラー。

名前負けせずに頑張ってくれよ。

2019年……。

年越しした辺りからイクノ母さんの調子が悪くなった。

既に32歳という高齢のイクノ母さんが体調を崩すのは嫌な予感しかない。

「御袋……大丈夫か？」

「ふふ……私もそろそろお迎えが来るようですね……」

以前の様な弱さを見せないイクノ母さんは其処には居らず、弱り切った牝馬がそこに居た。

「インパクト……私が産んだ子供たちの中でも格別に活躍した子……」

イクノ母さんの子供はその殆どが大成しなかった。

「貴方なら大丈夫……貴方は強い子です……」

イクノ母さん……。

「ああ……メジロマックイーンさん……ツインターボさん……迎えに……」

その日、鋼鉄の女は馬房で静かに息を引き取った。

息子とその孫たちに見送られて、イクノデイクタスは天へと昇っていった。

その表情はとても穏やかで幸せに満ちた表情だった。

その年、祖母に捧げると言わんばかりにターボエンペラーはクラシック3冠を達成したのである。

2020年……。

穏やかな日光を浴びながらモシヤモシヤと放牧地で草を食べていると室オーナーが誰かを連れてやってきた。

「わー……本物だー……」

それは若い女性だった。

室オーナーの子供では無いし……まさか浮気!?!……な訳ないか……。

誰だろう？

「しかしこいつがこんな美少女にねえ？ほら、これがお前らしいぞ」

そう言つて室オーナーが何やらイラストを見せてくれる。

そこには黒に白の三角模様が入った羽織を着た馬の耳としっぽが生えた少女が描かれている。

傾奇者逃亡屋インパクトターボと文字が書いてあるからどうやら俺らしい。

そういえば相棒の勝負服も黒に白の三角模様だったっけ。

懐かしいなあ。

「初めまして、私がインパクトターボ役をやらせてもらいます悠木碧です」

初めまして、インパクトターボです。

「一応サイゲームスさんからも話は聞いているけどどんな感じのキャラなんだい？」

「そうですねー・・・基本は真面目なんですけど、どこかちよつとズレている感じですかね？レースは負けず嫌いで負けると拗ねちゃうんです」

「ほうほう、確かにターボっぽいな。ちよつとセリフを言ってみてくれないかい？」

「それでは決め台詞的なのをやりますね。ンンツ・・・逃げる阿呆に追う阿呆、同じ阿呆なら逃げなきや損々！なんてね。こんな感じですね」

「はははは、それはいいなあ。私もプレイしてこいつを育てるのを楽しみにしてますね」

「はい、今日はありがとうございました」

その後、イクノ母さんの墓参りをしていたらしいイクノ母さん役の声優さんとマキシマム役の声優さん達と合流し、写真撮影をした。

馬生何が起るか分かりませんなあ。

残りの馬生、何があるか楽しみだ・・・。

そして2021年・・・。

SIDE：室満男

「だ〜またダメか〜！このマルゼンスキー強すぎるだろ」

「あら、またゲームなの？」

スマホを持ったまま天を仰いだ俺に妻の卓子がそう言った。

「ああ、例の競馬擬人化ゲームだよ。インパクトとマキシマムが出てから育ててるんだけどな。このイベントがクリア出来なくてな〜」

それは条件指定ミッションと言うイベントである。

殿堂入りウマ娘の中で指定された条件を満たしたウマ娘を出場させてレースに勝つと各種報酬が貰えると言うものである。

「逃げウマ娘限定ミッションの韋駄天杯っていうのがあるんだけどいい感じに育成できたインパクトで挑戦したんだけど全然ダメでなく〜」
「そうなのね」

妻はゲームには全く興味が無いので返事も御座なりである。

まあ俺が個人的に遊んでいる分には小言も言わないし競走馬購入だって認めてくれた妻だからその程度で怒ったりはしない。

「それより明日はフランスに出発するから早めに寝ましようよ」

「おっと、もうこんな時間か。いつも俺の趣味につき合わせちゃって悪いな」

今度の凱旋門賞にターボエンペラーが出走する。

マキシマムの時はどうしても仕事の都合がつけられずに行けなかったフランスに応援に行く事に決めていた。

もちろんただ応援の為だけにフランスに行くのは勿体ないので新婚旅行以来の妻との海外旅行でもある。

「いいのよ。私もあの子たちが走るのを見るのは好きだもの。それに色々観光もするんだから楽しまなくっちゃね」

本当に良い妻だ。

「ああ、久しぶりの海外旅行なんだ。沢山楽しもう」

俺はスマホを置くと妻と一緒に寝室に向かった。

これからも浪漫は続いていく。

それが楽しみで仕方がない。

END

インパクトターボとは？

Wikipediaより引用

インパクトターボ

インパクトターボ（英：Impact Turbo、1999年4月2日―）とは日本の競走馬、種牡馬である。主な勝ち鞍は、02年皐月賞、02年ジャパンカップ、03年宝塚記念、03年ジャパンカップ（注1：タップダンスシチーと同着優勝）、03年有馬記念のGI5勝とGI2などを含む20勝を上げた。特に2歳時の出走数は異常であり、デビューから皐月賞まで9戦9勝という非常に多くのレースを勝利している。皐月賞を含めてデビューから10戦10勝の無敗馬はあの幻の馬と呼ばれたトキノミノル以来の快挙である。GI以下無敗、入賞率100%などの記録の他、連続連帯記録も歴代2位の18回とシンザンに後一步及ばなかった。特筆すべきはその走りのスタイルである。父ツインターボもそうであったが引退まで1度も逃げ以外の作戦を選ばなかった事から逃亡屋の異名を持つ。最後の個性派と呼ばれたツインターボに対し、韋駄天の後継者、2代目逃亡者などと呼ばれていた。現役時代の騎手は若井武志で一度も乗り換えをしていない。

来歴

1999年4月2日にイクノデイクタスから生まれる。本来であればインパクトターボの父馬はツインターボではなく別の馬の予定であったがその馬が体調を崩した為に急遽代役として種付けしたのがツインターボであった。イクノデイクタスの産駒は優秀な種を貰っても大成していなかった事、ツインターボが非常にマイナーな血統であった事から牧場内の期待はまったくであった。その為にセリにも出されなかったのだが根っからのツインターボファンであった室満男氏がセリで知り合った馬主達から情報を貰い、牧場との直接交渉で800万円で購入された。

2001年、2歳（注2：デビューした2001年から国際競馬に合わせる形で変更）のデビューから怒涛の6連戦で2歳札幌ジュニア

ステークスを勝利し、夏を挟んだ後に再びレースとレース漬けの日々を送る。

2002年、3歳になり、皐月賞トライアルの弥生賞をやはり大逃げで勝利し、そして皐月賞をも大逃げで勝利する。そして無敗のまま東京優駿へと駒を進めるが、最終直線で己の足を顧みずに差し切ったタニノギムレットに敗れ、惜しくも2着に終わる。その後、宝塚記念からの招待を菊花賞に向けての調教に専念する為に辞退し、迎えた菊花賞は牝馬サムシングブルーに残り150メートルで躲されてしまい2着となった。その後ジャパンカップに出場し、外国馬や天皇賞馬シンボリクリスエスを警戒する他馬を無視した大逃げで見事に優勝した。そして有馬記念ではその逆襲とばかりにシンボリクリスエスに差し切られ2着に終わった。

2003年、4歳ではGⅡ京都記念、GⅡ日経賞、GⅡ目黒記念と立て続けにGⅡを制し、GⅠ宝塚記念に出走し、見事に逃げ切り優勝した。9月は当初GⅡオールカマーに出走予定だったが冷夏からの厳しい残暑で体調を崩した為に出走を取り消し、直接天皇賞へと出走する事になった。体調が戻りきっていなかったのか、最終直線でアグネスデジタルとシンボリクリスエスに抜かれ初めて3着となった。ここで残念ながら連続連帯記録が途絶えてしまい、1位であるシンザンに後1歩及ばなかった。そして迎えたジャパンカップでは雨の影響で重馬場となったレースをタップダンスシチーとの逃げ合戦を行い、その結果JRA史上初のGⅠ同着優勝となったのである。2年連続出場となった有馬記念では終始ハイペースに徹し、末脚自慢のシンボリクリスエスとスタミナ自慢のサムシングブルーを潰して勝利を奪い取った。

2004年、5歳になってGⅡ京都記念を勝利した後、しばらく出走が無くなる。この時、既にインパクトターボの限界を察していた山田調教師が有馬記念での引退を考えて、出走ペースを控えたからである。5月のGⅡ金鯱賞を逃げ切るとそのまま9月のGⅡオールカマーまで出走が無く、天皇賞秋も出走を控えてジャパンカップ三連覇に全力を注いだ。しかし全盛期を迎えていたゼンノロブロイに差し

切られ3着に、そして引退レースの有馬記念もゼンノロブロイとのレコードを出した走りに僅か2センチ届かず2着となった。

引退後

生まれ故郷の牧場に戻り種牡馬として登録される。この時父母共にマイナー血統である事と、大逃げ馬の産駒は大成しないという流れからGI種牡馬としてはかなり安い金額であった。その為に種牡馬入り初年度は30頭程度の種付けであったがライバルであった菊花賞馬サムシングブルーとの産駒になんと1万頭から2万頭に1頭の確率である突然変異の白毛馬、サムシングブルーの2006、後のシルクヴェールが生まれた為に翌年から100頭もの繁殖牝馬と種付けをする事になった。シルクヴェールはその後のセリで1億もの高価で取引された事から産駒実績が無いまま120頭の種付けをする。

その後、シルクヴェールが2009年天皇賞秋を勝利した事により産駒実績もついた事で150頭へと増加した。ここであまりに種付け料が安すぎるからと各方面から指摘を受けて相応の値段に値上げしている。

その他の有名産駒は暴走馬バクソウオー、3代目逃亡屋マキシマムターボ、黄泉がえりし皇帝の血脈ターボエンペラーが居る。

2021年を最後に年齢を理由に種牡馬を引退、功労馬として生まれ故郷の牧場で余生を過ごしている。

エピソード

インパクトターボがデビューしてからレース潰けだったのは「1頭で走る調教はサボりはしないが真剣にやらない。併せ馬だと張り切るが併せ馬の人气が悪い」事が理由だと山田調教師が後に語っている。しかしその後も中々の頻度でレースに出ているが、その理由は「調教だけだとストレスが溜まってコンディションに響く」とその理由を語っていた。

デビューから鞍上を務めた若井騎手は当初、「馬の好きに走らせてくれ」と言われて実力を見込まれてではなく恩のある山田調教師の言葉に逆らえない騎手だから選ばれたのだと落ち込んだと後のインタビューで語っていた。しかし実際にレースに出てその言葉が違う事

に気が付き、「インパクトターボの走りはあれが正解だったんです。頭が良くて1度走ったレース場は全部覚えていて。序盤の押した回数でレースの距離を知るんです」と語っている。「最初から全力疾走でバテるまで走ると思われがちですが、実際は最も効率よく走れるペースが他の馬より速いペースだっただけで全力疾走は最後の直線でした。でしかしていません」とも語っている。

子供の頃から人懐っこく遊び好きで、厩務員と遊んでほしくて悪戯する事が良くあったという。その中でも特筆すべきエピソードは帽子投げと輪投げである。厩務員に遊んでほしくて厩務員が被っていた帽子を啜えたと首を振って放り投げた先にちょうどあった棒に引つ掛けたのである。1度なら偶然だろうと厩務員も思ったのだが、それ以後味を占めたのか隙あらば帽子を奪っては棒に投げつけるのを繰り返した。上手く引つ掛かると嬉しそうにしているものでどうやら面白い遊びとして覚えてしまったようだ、との事だった。その為に当時の厩務員の帽子には必ずインパクトターボの歯形が付いていたようである。その後、厩務員の1人が帽子を取られない様にロープで作った輪つかを与えたところ、最初は悩んでいたがその内棒に向かって投げるようになったようである。実際にインパクトターボが輪投げをして遊んでいる様子が動画サイトに上がっている。

インパクトターボの覚醒（若井騎手インタビュー記事より引用）

「インパクトターボは2回覚醒してますね。1回目は札幌2歳ステークスの時ですね。今まで自分に追いつける馬は居ないと思っていたので走りもただ楽しんでいただけでしたが、サムシングブルーに迫られて初めて焦りを覚えたのかその後のレースからは最終直線になっても気が抜ける事がなくなりましたね。2回目の覚醒は日本ダービーでタニノギムレットに負けた時ですね。初めての敗北でもっと強くなりたいと思ったのか、それ以降の調教から真剣にやるようになりましたね」

U m a m u s u p e d i aより引用

インパクトターボ

インパクトターボ（本名：室インパクトターボ）は日本の競争ウマ娘である。母親が《font:ul40》馬《font》性ではなく女性の所謂「借腹」（注1：別項目参照）の産まれである。

来歴

20XX年4月2日誕生。幼少期はウマ娘の少ない町で育った為に遊び相手にウマ娘が少なく、もっぱらゲームばかりだったとインタビューに答えている。

走りのトレーニングが本格的に行われるようになったのは中央トレーニングセンター学園入学後で、それまでは地元の子供ウマ娘塾でのトレーニングしかやっていなかった。

学園入学後は当初その走りのスタイルからスカウトが全く来ず、トレーナーに悩んでいたところチームハダルのトレーナー山田武志氏に声をかけられてチームハダルに所属。小さな時から負けん気が強く、いつでも先頭を走りたいがる癖があったがそれを見事な逃げに昇華させて現在の走りを作り上げた。

主な勝ちレース

トウインクルシリーズ

札幌ジュニアステークス（GⅡ）

弥生賞（GⅡ）

京都記念（GⅡ）

日経賞（GⅡ）

目黒記念（GⅡ）

皐月賞（GⅠ）

日本ダービー（GⅠ）

宝塚記念（GⅠ）

ジャパンカップ（GⅠ）2回

有《font:ul40》馬《font》記念（GⅠ）

URAFファイナル

XX年中距離決勝戦優勝

ドリームトロフィーリーグ

韋駄天杯（2着）

趣味

ゲーム、走る事

特技

輪投げ（地元のお祭りの縁日で出禁になったとの事）

注1：借腹

借腹とは女性が《font:ul40》馬《font》見を産む現象の俗称である。

今日ではそれが遺伝子のなせる仕業であると多くの者が理解しているが医療技術が未熟な時代、神からの使い等として信仰されてきた《font:ul40》馬《font》性が女性の腹から産まれるのは奇跡的な出来事だとして腹を借りて産まれてきたと信じられてきた。

《font:ul40》馬《font》性を産んだ母親は神に腹を貸した女としてありがたられたものである。

一方《font:ul40》馬《font》性から女兒が生まれた場合、父親の信仰心が足りなかったとして厄男と呼ばれる事もあったと言う。

《font:ul40》馬《font》性遺伝子の劣勢

人間の性別を決める遺伝子には男性のY遺伝子、女性の『Xα』遺伝子、《font:ul40》馬《font》性の『Xβ』遺伝子の3種類である。この中で『Xβ』遺伝子は極度の劣勢遺伝であり、『Xβ』Yの組み合わせの場合、《font:ul40》馬《font》性の特徴は全く現れず必ず男性になる。

また『Xα』『Xβ』の組み合わせの場合、『Xα』が先であれば女性、『Xβ』が先であれば《font:ul40》馬《font》性となる。しかし『Xβ』が先に来る確率は低く、『Xβ』しか持たない《font:ul40》馬《font》性と『Xα』の男性が結婚した場合、高確率で『Xα』が優先されてしまう。

逆に『Xα』を持つ《font:ul40》馬《font》性の場合も子供には『Xα』が優先されてしまう。

その為に『Xβ』だけしかもたない《font:ul40》馬《font》性と『Xβ』の男性以外の子供の場合、《font:ul40》馬《font》性が生まれる確率は10%程度まで低下する。
世界的に《font:ul40》馬《font》性の数が少ないのはこの『Xβ』遺伝子の極端な劣性遺伝によるものであるというのが現在の定説である。

I F . . .

もしもゴールドシップが騙馬だったら

S I D E : 馬

マキシマムターボが日本ダービーを終えて牧場に戻ってきた時

「父さん、ただいま」

「お帰りマキシマム。良く . . . 良く頑張った」

再び目頭が熱くなり始めたが息子の前で号泣するのは格好悪いと必死に堪えた。

「皐月賞、ダービーと走ってどう思った？」

「うん、やっぱり中央競馬って凄いなって思ったよ。強い馬が沢山居るし。特にゴールドシップが凄くて、ちよつとでも気を抜いたら負けるかも！って思ったよ。ただ」

「ただ？」

何やら歯切れの悪いマキシマムに俺は訝し気に聞き返す。

「なんか変なんだよねあいつ。時々妙に遠い目をしたり、哀愁漂う感じで無くした何かを探しているみたいな感じがするんだよね」

「あ」

その言葉で俺は察してしまった。

そうか . . . 守れなかつたんだな

「 . . . マキシマム、俺たち競走馬の中には性格が荒い奴がいるのは知っ
ているよな? . . .」

「え? . . . うん」

「牝馬ならどうしようもないんだがな、俺たち牡馬にはある手術をす
ると大人しくなるという性質があるんだ」

「牝馬にできなくて牡馬に . . . ? あ . . . ! ?」

どうやらマキシマムも気が付いたらしい。

周りで俺たちの会話を聞いていた牡馬達も遠い目をする。

「 . . . 憐れむな。ただ強いライバルとしてだけ見てやれ。それがせめ

てもの情けだ」

「うん……」

ゴールドシップ……ドンマイ……。

SIDE：ウマ娘

「やめるタキオーン！それをアタシに近づけるなあ！はっ！」

チームルームで寝ていたゴールドシップが大声で叫びながら飛び起きた。

『大丈夫か？』

「あ……ああ……ちよつと夢見が悪かったただけだ……」

明らかに青い顔をしたゴールドシップだったが本当に大丈夫だろうか。

「ゴールドシップさん、寝るのは構いませんが静かにしてくださいまし」

「す、すまねえマックイーン……」

本を読んでいたメジロマックイーンが迷惑そうにゴールドシップを睨んでいる。

ゴールドシップは本当に夢見が悪かったらしく冷や汗を何度も拭っている。

タオルでも渡そうと立ち上がった時だった。

ガチャーンッ！

手を引掛けてしまい机の上に置いてあったペン立てをひっくり返してしまった。

「ああもう、トレーナーさんまで何をやっているのですか」

『ご、ごめんなさい』

メジロマックイーンが本を置いて散らばってしまったペンやハサミを拾ってくれる。

「あら……？これは……メスですの？こんな危険物がなぜここに？」
メジロマックイーンが拾ったのは手術などで使われるメスと呼ばれる小型の刃物だ。

「ひい!?な、なんでそんなものが!？」

「ゴールドシップさん?」

何故かメスを見て驚くゴールドシップ。

『それは友人の医者から貰ったメス型ペーナイフだよ』

「あら、本当ですね。刃が引いてありませんわ」

そう言っつてメジロマックイーンが刃先を触るがある程度薄くはなっているが丸みのある刃先は当然マックイーンを傷つける事はない。

「ま、マックイーン！そんな物騒なモノ早くどっかにやっつけてくれよお！」

「ただのペーナイフに危険も何も・・・」

『ゴールドシップ・・・まさかメスが怖いとか？』

「ままままままさか！このゴールドシップ様がそんな小さな刃物ごときが怖いなんてあるはずか無いだろう！」

明らかに動揺するゴールドシップ。

その挙動不審っぷりはもはや芸術である。

「へえ・・・」

「ま、マックイーン・・・？」

ゆらりと近寄るメジロマックイーンに後退るゴールドシップ。

「ゴールドシップさん・・・？」

「ま、マックイーンさん・・・？」

ジリッ！ジリッ！

「ま、マックイーンさま!?!」

「今までのあれこれ！色々含めてお覚悟なさい！」

「ひいっ！悪かった！悪かったから許してマックイーンさま！」

追いかけるメジロマックイーンと逃げるゴールドシップ。

いつもなら明らかにからかいの表情を浮かべたゴールドシップが逃げているのだが今日は本気で逃げている。

そんな珍しい光景に俺はただただ見守るしかなかった。

ゴールドシップの体力が20下がった。

ゴールドシップのやる気が下がった。

もしバクソウオーが臯月賞を勝ってしまったら・・・。

SIDE：馬

『先頭バクソウオーは早くも第4コーナーに入っていますが疲れてしまったか足色が鈍くなっています。果たして2000メートルを走り切れるのでしょうか。2番手集団も残り600を切りました！バクソウオー必死に前に進みます残り500メートル！2番手はバーデイバーデイが辛うじて前にいますがサンデイエゴシチーが並びかけてきます。内からはハンソデバンド！バクソウオー直線に入りましたがここでさらにガクつと失速！懸命に若井騎手がムチを入れてなんとか前に進ませています！さあ馬郡がバクソウオーに迫ります！残り200メートルを切りましたバクソウオー届くのか！届いてしまうのか！2番手には内をつけてヴィクトワールピサが抜け出てきた！バクソウオーはまだ辛うじて走っている残り100メートル！どんどん差が詰まってこれは追い付かれそうだ！必死に前に進むバクソウオー！ヴィクトワールピサが伸びる！エイシンフラッシュも伸びてきている！バクソウオー届くか！ヴィクトワールピサが差し切るのか！バクソウオー届いたあ！皐月賞を勝利したのは！何と何とバクソウオー！馬券が宙を舞います！信じられない事が起きました！バクソウオーがまさかの皐月賞馬です！暴走したまま勝利いたしました！』

マジで!?!バクソウオーやるじゃないか!?

マイルですら走り切れるかどうか怪しいバクソウオーのまさかの勝利。

当然ながら世間での評価は荒れに荒れた。

バクソウオーに届かなかった他の馬を情けない、期待外れだと言う者も居れば、暴走して他の馬のペースを崩させたバクソウオーを罵る者も居る。

バクソウオーのオーナーはまさか勝つとは思っていなかったのだから喜んだが、同時に日本ダービーに出してボロボロに終わってしまったら何と言われるかと非常に複雑な表情だったと言う。

いや本当に・・・競馬って何が起こるか分からないね！

俺が考えることでは無いと思いを放棄した。

だがバクソウオーの勝利で翌年の短距離血統牝馬から大量の種付け依頼が殺到し、ついに200の大台に乗ってしまった。

その事を聞いた俺はチベットスナギツネみたいな目をするしかなかった。

SIDE：ウマ娘

バクソウオー育成目標：皐月賞に出走

皐月賞優勝時イベント

イベント名：まさかまさかの大爆走！

『なんとバクソウオーの勝利です！』

「バクソウー！」

バクソウオーがどうしても走りたいうから適性外ではあるが参加した皐月賞。

スイッチが入ってしまうと自分でもどうしようもできないバクソウオーがまさか2000メートルを走り切れるとは思ってもいなかった。

トレーナーとして担当ウマ娘を信頼しないなんてトレーナー失格と言われそうだが、適性を見極めるのもトレーナーとして重要なことだ。

短距離適性は抜群なバクソウオーだがマイルでも適性がギリギリであり、中距離以上は完全に適性外だ。

それをまさか覆して勝利してしまうとは……。

「トレーナーさんトレーナーさん！ボクの走り見ましたか！褒めて褒めて〜！」

『もちろんだバクソウオー！よくやった！最高の走りだった！』

「えへへ〜」

本当に嬉しそうにバクソウオーは笑う。

幼い頃から褒めてもらう事が大好きだというバクソウオーはその為常にどんな事でも全力だ。

それが良い方向に今回は出たのだから素直に褒めてあげるのがいだろう。

『本当に良く頑張ったな！次のレースも頑張ろうな！』

「うん！次はダービーを爆走だー！」

スピードが20上がった！

スタミナが20上がった！

根性が10上がった！

スキル春ウマ娘のヒントLv1を手に入れた！

次の育成目標レースが日本ダービーに出走になりました。

フアンが選ぶ名馬ランキング

フアンが選ぶ名馬ランキング

大逃げ部門！

第5位！

バカ逃げコンビ！メジロパーマーとダイタクヘリオス！

『フアンが選ぶ大逃げ馬の中でも同じレースで同じ作戦を選ぶ馬という印象に残る走りをしたのがメジロパーマーとダイタクヘリオスの2頭である。2頭が出るレースで2頭だけが逃げをするのでファンからはバカ逃げコンビと呼ばれて親しまれていた。それぞれ単体ではなく2頭合わせてのイメージが強いので2頭合わせてのランクイン！』

第4位！

勝利か逆噴射か！ツインターボ！

『強い馬だけが名馬ではない。フアンに強い印象を残す事で記録より記憶に残る馬と言えはやはりこのツインターボを外すことはできないだろう。逃げ切りか大敗か。勝利したレースはたった6度。その内GIレースはたったの一つ。それでもなお強烈な記憶をフアンに残した平成最後の個性派。ナリタブライアンから逃げ切った伝説は今なおフアンに熱く語り継がれている』

第3位！

どこまで行っても逃げてやる！サイレンススズカ！

『他を寄せ付けない大逃げと言えはサイレンススズカだ。その圧倒的走りにフアンは魅了され、圧倒的な支持を得た。そのあまりに強すぎる走りはあの武騎手をもってしても最高と言わしめた程だ。しかしその早すぎる走りが己の体を破壊してしまうとは誰も思わなかっただろう。どこまでも逃げ続ける姿を見たかった。そんなフアンの思いを受けての第3位だ』

第2位！

その走りはまさにマキシマム！マキシマムターボ！

『最強馬を語るとフアンの口に上がるのは必ずマキシマムターボと

ゴールドシップの最強馬論争だ。日本競走馬として凱旋門賞を逃げて2着となったマキシマムターボは最強の一角と呼ばれる事もある。たればの話にはなるがもしゴールドシップが居なければ三冠も凱旋門賞もマキシマムターボが取っていたかもしれない。ファンは今でもそう信じている』

第1位！

まさに逃亡屋！インパクトターボ！

『逃げは競馬の定石ではない。その常識を覆し、逃げを初めて上策として用いたのがインパクトターボだ。その走りによつてそれまでの競馬を一新する新しい風を吹き込んだ。その印象から大逃げと言えども最初の名前が上がるのがインパクトターボである。決して最強馬ではないがその安定した強さと粘り強い走りは今なお多くのファンに愛し続けられている』

短距離馬部門！

第3位！

恐るべきスプリンター！サクラバクシンオー

『サクラバクシンオーはその驚異的な走りで他馬を圧倒し、その強烈な走りは衰える事を知らなかった。もはや戦うべきライバルが居ない。そう言わんばかりのレコード勝利での引退は今なお人々の記憶に残っている』

第2位！

暴走？爆走？バクソウオー！

『名は体を表すとは言うがまさにそのことわざ通りなのがこのバクソウオーだろう。スタートと同時に後先考えないその走りは様々な意見を呼んだがそれでもその強さは本物だ。短距離ならば間違いない。あわや皐月賞ですら走りきりそうだったその根性は素晴らしいの一言に尽きる』

第1位！

まさに龍王！ロードカナロア！

『国内スプリントレースを総なめにし、海外の短距離レースすら勝利

したロードカナロア。その圧倒的な強さはその子供達にもしっかりと受け継がれている。まさに至高のプリンターとして名高い名馬だろう』

番外編！競馬関係者が選ぶ困ったちやんな名馬ランキング！

第4位！

シンコウウインデイ！

『ダートレースでその実力を奮ったシンコウウインデイ。しかし非常に困った癖があり、関係者を悩ませていた。その癖とは・・・、噛み付き癖である。馬房でも、調教中でも、レース中でさえ噛み付くその噛み付き癖はしばしば勝てるレースを逃す事となったのである。抑えようにも抑えられないその噛み付き癖は今でも語り草である』

第3位！

オグリキャップ！

『アイドルホースとして名高いオグリキャップ。引退レースの有馬記念で勝利したのは多くのファンの記憶に残っている事だろう。そんな名馬のオグリキャップの困った癖とは・・・、大食いである。オグリキャップは食べる、食べる、兎に角食べる。さらには食べ足りないとばかりに寝藁を食べたり餌桶を齧ったりとまさに暴食。食べ過ぎは厳禁な競走馬にとってこの大食いは厩務員泣かせだったと言う』

第2位！

バクソウオー！

『名前が上がらない訳がないと皆さんも予想していた事だろう。暴走特急バクソウオーの困った癖はお馴染みの暴走癖である。騎手が手綱を引こうが何をしようがお構いなしに、走り出したら止まらない。レースでは勿論だが調教でも暴走癖は止まらない。調教師は最早お手上げ状態でバクソウオーが満足するまで暴走させるしかない。しかも暴走が終わった後にしっかりと褒めてあげないと走りが悪かったのかとさらに暴走する。褒めたら褒めたでもっと褒めて欲しくて暴走する。叱っても逆効果。もはや成す術が無い。我々はただ諦めて彼が暴走するのを見守るしかない』

第1位！

ゴールドシップ！

『もはやゴールドシップの奇行については語るまでも無いだろう。負けたマキシマムターボに威嚇しまくる。気に入らない馬に蹴りをいれる。ゲートが大嫌いで中々入ろうとしない。マキシマムターボが居ないとまじめにレースを走らない。調教は気分次第。毎日遊ばないと拗ねる。写真撮影ではまともな表情の方が珍しい。その姿はまさに暴君。それでいて実力があるのだから振り回される周りは堪らない。それがゴールドシップだから・・・とファンすらも諦めた。これ以上語る必要は無いだろう』

ウマ娘プリティダービー 公式動画編

「Heroes ただ一度も先頭を譲らなかつた事実」篇

「時に圧倒的に」『その先の景色へ、異次元の逃亡者サイレンススズカ』

「時に計算高く」『真紅の閃光、スーパーカーマルゼンスキー』

「時に泥臭く」『正確無比なる、努力の権化ミホノブルボン』

「逃げに正解などない」『観衆を魅せる、砂塵の隼スマートファルコン』

「あるのは、ただ一度も先頭を譲らなかつたと言う事実！」『韋駄天を継ぐもの、逃亡屋インパクトターボ』

「ウマ娘プリティダービー！好評配信中！」

「Heroes 見果てぬ栄冠に手を伸ばせ」篇

「勝つ事だけが優秀の証ではない」『無故障61戦、鋼鉄の女イクノデイクタス』

「例え届かずとも諦めない」『悲運の名優、絶えぬ闘志マチカネタンホイザ』

「己の中に流れる」『霸王の宿敵、不屈の挑戦者メイショウドトウ』

「走るという意味の元」『主役を喰らう名脇役、尽きぬ夢ナイスネイチャ』

「今こそ、見果てぬ栄冠に手を伸ばせ！」『怪物を倒した伝説、個性派逃亡者ツインターボ』

「ウマ娘プリティダービー！好評配信中！」

「Heroes 世界に蹄跡を刻め」篇

「君が行くのは完全なる敵地」『大胆不敵、女帝ウオツカ』

「万雷の喝采は君には向かない」『純白無垢、白い軌跡シルクヴェール』

「強い敵意が君を襲う」『戦場自在、真の勇者アグネスデジタル』

「日の丸の声を背中に乗せて」『最優の流星、鋼鉄の逃亡者マキシマムターボ』

「さあ、世界に蹄跡を刻め！」『黄金不沈艦、奇想天外ゴールドシップ』

「ウマ娘プリティダービー！好評配信中！」

「Rivals マキシマムターボ」篇

「あいつは必ずやってくる。あいつは恐ろしい」

『因縁の宿敵！最優VS最凶！』

「だからこそ！全力で逃げ切って見せる！」

『マキシママターボ逃げる！ゴールドシップが一気に上がって追い付いた！2人が並んでいる！』

「激闘の行く末を見よ！ウマ娘プリティダービー！好評配信中！」

「Rivals ゴールドシップ」篇

「アタシはアイツが嫌いだ。今までアタシに敵う奴なんて居なかった」

『因縁の宿敵！最優VS最凶！』

「アタシを本気にさせた事！後悔させてやるぜ！」

『マキシママターボ逃げる！ゴールドシップが一気に上がって追い付いた！2人が並んでいる！』

「激闘の行く末を見よ！ウマ娘プリティダービー！好評配信中！」

「Rivals サムシングブルー」篇

「は、始めて出会ったあの日から、ターちゃんには負けたくありませんでした」

『最愛の宿敵！逃亡屋VS狩人』

「スタミナ勝負なら！私負けません！」

『先頭は変わらずインパクトターボ！しかし苦しいか！サムシングブルーだ！サムシングブルーだ！』

「激闘の行く末を見よ！ウマ娘プリティダービー！好評配信中！」

「Rivals インパクトターボ」篇

「初めて会った日の事は今でも覚えてるよ。ずっと私の後ろをついてきたね」

『最愛の宿敵！逃亡屋VS狩人』

「先頭を走るのは私の役目！ルーちゃんにだって絶対に譲らない！」

『先頭は変わらずインパクトターボ！しかし苦しいか！サムシングブルーだ！サムシングブルーだ！』

「激闘の行く末を見よ！ウマ娘プリティダービー！好評配信中！」

「トレセン学園生徒紹介 バクソウオー」編

「いっっぱい褒めてください！どんな距離でも爆走してみせますから」

！」

『バクソウオー』

「アナタがボクのトレーナーさんですね！初めまして！バクソウオーです！」

「座右の銘は我武者羅！褒めてもらえればどんなレースだって爆走しますよ！」

ウマ娘プリティダービー！好評配信中！

「トレセン学園生徒紹介 シルクヴェール」編

「見掛けで判断しないでよね！私、やつちやうんだから！」

『シルクヴェール』

「初めましてトレーナーさん。真っ白白のシルクヴェールちゃんです」

「さてと・・・それじゃあいつちよったりしますか！」

ウマ娘プリティダービー！好評配信中！

「トレセン学園生徒紹介 インパクトターボ」編

「定石？そんなものは私には通用しません！」

『インパクトターボ』

「トレーナーさん、逃げしかしない私を指導するなんてアナタも浪漫派ですね」

「ならば見ててください。その浪漫、本物にしてみせます！」

ウマ娘プリティダービー！好評配信中！

「トレセン学園生徒紹介 マキシマムターボ」編

「了解、目標を達成する」

『マキシマムターボ』

「トレーナー、私に（逃げ以外の）指示を出すのは（不器用な私には）無駄だ・・・なに？そのままでもいい？逃げていいのか？そうか・・・」

「ならば証明してみせよう。アナタ（の指導）が素晴らしいと言うことを」

ウマ娘プリティダービー！好評配信中！

「トレセン学園生徒紹介 サムシングブルー」編

「ど、どんな走りにだって、ついていきます」

『サムシングブルー』

「ひゃあ!?!とと、トレーナーさん!? 私なんかでいいんですか!?!」

「うれしいです! 私を選んでくれて!」

ウマ娘プリティダービー! 好評配信中!

「うまよん モテモテ編」

1コマ目

「ああ、イクノさん、丁度良かったですわ」

「おや? どうしましたかマックイーンさん」

「実は新しく出来た洋菓子店と一緒に「イクノー!!」(イクノデイクタスに話しかけるメジロマックイーン)

2コマ目

「どうしたんですか? ターボ」

「イクノー! ターボと一緒にゲームしようよ!」(ツインターボの方を向くイクノデイクタス)

3コマ目

「ちよつとターボさん! 私がイクノさんを先に誘っていたのに!」

「ターボとイクノはチームメイトだもん! ターボが優先!」

「私はイクノさんとルームメイトですわ! 私が優先ですわ!」

「ターボだもん!」

「私ですわ!」

「あのお二人とも・・・」(言い争いをするメジロマックイーンとツインターボを何とか抑えようとするイクノデイクタス)

4コマ目

「ターボだー!」

「私ですわー!」

「も、モテモテですわねイクノ先輩」

「インパクト・・・見てないで助けてください」(両腕をそれぞれに引つ張られて目を閉じて困っているイクノデイクタスと偶然通りがかったインパクトターボ)

「うまよん ついてく編」

1コマ目

「ライスお姉様から教わった秘訣！私も試してみよう！」（気合を入れるサムシングブルー）

2コマ目

『授業中・・・』

「ターちゃんについてく・・・」（机をインパクトターボの隣に引っ付けて授業）

3コマ目

『トレーニング中・・・』

「ついてく・・・ついてく・・・！」（インパクトターボの後ろを追走）

4コマ目

『トイレ・・・』

「ついて「ルーちゃんお願い！ここはついてこないで！」」（トイレのドアを必死に抑えるインパクトターボ）

「うまよん 気に入らないアイツ編」

1コマ目

「今日こそあいつに吠え面かかせてやるぜ！」（木に登って何かを準備するゴールドシップ）

2コマ目

「マキシマム！これでも喰らいやがれ！」（木の下を通りがかったマキシマムターボに大量の爆竹を投げつける）

3コマ目

「なーなにーいー！」

「な、なんだこれはあー！」（無意識で器用に全ての爆竹を爆発する前に回避するマキシマムターボと偶然通りがかって巻き添えを喰らうエアグルーヴ）

4コマ目

「ゴールドシップ！お前という奴は！ガミガミガミガミ！」

「ちつくしよー！やっぱりあいつは気にいらねえ！」（あちこち焦げたエアグルーヴに説教される正座で涙目なゴールドシップ）

「うまよん お悩み編」

1コマ目

「はぁ・・・」

「あら？何か悩み事なの？シルク」(ため息をつくシルクヴェールと心配するダイワスカーレット)

2コマ目

「私で良かったら相談に乗るわよ」

「スカーレット先輩・・・」(手を取るダイワスカーレットに喜ぶシルクヴェール)

3コマ目

「実は「シルクー!!!!」

4コマ目

「オレより小テストの点数が良かったら嬉しいな！勝負だ！」

「こういう事なんです・・・ハア・・・」

「なるほど・・・」(小テストを突き出しながら怒鳴るウオツカとため息をつくシルクヴェール、そして飽きた様子の子のダイワスカーレット)

コラム インパクトターボ 『日本競馬を変えた馬』

インパクトターボ、その名前を知らない競馬ファンは少ないだろう。かの馬が現れてから日本競馬は大きく変わった。

インパクトターボ以前の競馬は停滞感に溢れていた。

人気のある馬は軒並み引退し、圧倒的实力を持つ馬は居らず、ギャブル行為に対して世間の冷たい視線もあり、競馬人気は低迷していた。

特にレースの盛り上がりが悪かった。

日本の馬場は高速馬場と言われている。

実際海外の馬場に比べてスピードが出しやすい作りにはなっていない。

一方で馬にかかる負担が大きいと言われている。

その為に馬が故障する事を恐れて最終直線まで本気で走らない馬が増えていった。

特に個人馬主が激減し、馬主も純粋に競馬を楽しむより利益性を優先し、結果レースでの盛り上がりが最終直線のみになってしまった。

その為に馬の評価点もスタミナよりもスピードを、特に最終直線での立ち上がりと最高速度が重視されるようになり、先行馬や逃げ馬は評価が厳しくなっていた。

長距離のレースも数が少なくなり、中距離が主体となった事もそれに拍車をかけた。

その結果レースが単調になり、盛り上がりには欠け、駆け引きよりも最終直線で何とかできる馬が勝つという面白味のないレースが増えってしまった。

時折逃げ馬が勝つ事もあるが、それはあくまで奇襲、奇策であってレースの定石には成り得なかった。

それは逃げ馬にかかる負担が大きい事とリスクに見合ったりターンの無いと思われていたからだ。

事実大逃げで持て囃されたサイレンススズカがレース途中で破裂骨折で予後不良となった事は記憶に残っている。

その為に逃げは勝てない馬がギャンブル的に行う奇策として日本競馬では倦厭されていった。

だが、その常識を打ち破ったのがインパクトターボだった。

大逃げ一辺倒でファンに愛されたツインターボの息子、インパクトターボ。

その血を強く受け継いだのか、インパクトターボはデビューから引退まで大逃げしかなかった。

通常であれば馬主はそんな馬は買わないし、調教師もその様な指示は出さない。

だがツインターボに強い魅力を感じていた室満男氏率いる浪漫ホースクラブはこのインパクトターボを喜んで購入し、逃げ一辺倒の作戦にも異議を唱えなかった。

また調教師の山田伝輔氏も逃げ一辺倒の作戦を考えた。

調教師としては中堅どころであった山田氏はインパクトターボとの出会いをこう振り返っている。

『最初見た時は平凡な馬だと思いました。牡馬にしては小柄で、体つきも何かに秀でた様子は無い。たまたま重賞に絡めれば御の字。そう思っていました』

事実インパクトターボは最高速度に優れた馬ではない。

同年代で言えば悲運のダービー馬、タニノギムレットや天皇賞馬のシンボリクリスエスの方が明らかに最高速度は速い。

特に最終直線の上り3ハロンでインパクトターボの名前が上位に来ることはない。

だがそんな馬がなぜあれだけの勝利を重ねられたのか。

『インパクトターボが大逃げしかなかったのにはいくつかの理由があります。まず一つ目は負けん気の強さです。先行馬が居ると途端に掛かって前を走ろうとするという悪癖がありました。結果逃げで先頭を走らなければまともなレースが出来ないのです。二つ目はインパクトターボのペースが他の馬より早い事です。人間でもそうですが最高速度を出せば勝てる短距離走と違い、長距離走の場合自分のペースで走れるかどうかが大きなポイントになります。所謂マイ

ペースと言う奴ですね。競馬で言えば馬なりですね。その馬なりのペースが他の馬に比べて早いのがインパクトターボなんです。その反面最高速度はあまり良くないですね。だから最終直線勝負になると不利になります。なので最初から速い馬なりを活かしてリードを作る事で勝利を重ねられたのです』

こうして皆に愛される大逃げ馬、インパクトターボが誕生した。

長年競馬解説者をしていた杉本氏はこう語る。

『インパクトターボは停滞していた日本競馬を大きく動かしませんでしたね。誰も彼もが最終直線だけで勝負する。それまでの道中は殆どオマケみたいなものでした。それを最初から勝つ為の過程として走り抜ける。その姿は多くの人に新鮮に映った事でしょう。時々現れる大逃げ馬が人気になるのもこれがあるからです。大体がそういった馬は記憶には残りますが記録はほとんど残せずに終わってしまいます。ですがインパクトターボは大逃げ馬として類い稀なる記録を残していきました。その結果、今まで見向きされなかった馬にも注目が当たるようになりました。もちろんそれらの馬が必ず彼のような記録を残す事が出来た訳ではありません。しかし最終直線だけに全力を注ぐレーススタイルばかりだった日本競馬はここで大きな改変を受けることになったのは事実です。その結果、高速馬場と呼ばれていた日本の馬場は超速馬場とでも言うべき状況になりました。ですが一方ですべての馬が最初から最後まで早く走る訳ではありません。それぞれの馬の適性に合わせた作戦で道中も走るようになりました』

これによって日本のレースは面白みを増した。
最終直線の加速力だけではなく、道中での駆け引き、スタミナの管理、そして最終直線での展開と見所が増えた。

もちろん今までだってこれらの要素が無かった訳ではないが、殊にインパクトターボ以降のレースでは最終直線まで詰まったままのレースが少なくなったのは事実だ。

結果として無理をして引退してしまう馬も少なくは無い。

だが近年では日本のレース展開を嫌い、減りつつあった海外からの参戦も増加傾向にあるのだから決して悪いことばかりではない。

またインパクトターボの血は海外からも高い評価を受けている。

彼はその走りと血でもって日本競馬界に大きく貢献したと言っても過言では無いだろう。

一方でこう言った声もある。

ベテラン調教師の古居氏はこう語る。

『インパクトターボの前と後では調教師や騎手に求められる能力が格段に変わりましたね。それまでの調教師は競馬の定石を踏まえた上で強みを生かすと言う調教が主体でした。その為にどうしても馬のスタミナよりはスピードを活かす調教が主体で、馬の資質もそちらに向いた馬の方が強い馬とされてきました。レースも序中盤は抑えて後半に向けて速度を上げると言うスタイルが一般的で騎手もそう言ったレース運びをよく指示されてきました。結果としてレースに面白みがないと言われ続けてきましたが馬を守るため、確実に勝てるようにする為にどうしてもそうせざるを得ないと言われてきましたし、事実そうでした。ですがインパクトターボ以降、彼の産駒が増え、今まであまり見向きもされなかった血統にも注目が集まるようになると同じような調教や作戦では勝てなくなりました。何せ今まで扱ってきた馬とは資質の方向性が大きく異なるのですから。結果として色々な戦術が見られるようになって日本競馬は盛り上がるようになりました。半面我々裏方や騎手の苦労が増えたり、無茶をして故障する馬が増えたのは憂慮すべき事ですね』

ご存じの通り、サラブレッドはガラスの足と呼ばれるほど繊細な足をしている個体が多い。

巨大な馬体を支えるには細すぎる足は速く走る事だけに特化している。

その為に負担のかかる走りは故障率を高めてしまう。

インパクトターボ以前は馬を守ろうとするあまりレースが単調になるという弊害はあったが、それでも故障率を抑えるのに一定の効果があった事は事実だ。

第2のインパクトターボを目指した結果、馬に負担がかかり、故障してしまつた馬が増加してしまつていふ事実は見逃せない。

我々に求められるのは人間のエゴを馬に押し付けない様にする強い自制心だろう。

もしサイレンススズカが生存していてその子供がスズカミラーだったら・・・

「こいつがスズカミラーですか。あのサイレンススズカの娘の」

「ああ、大人し過ぎて競争馬に向かないって事でそのまま繁殖牝馬に回されたらしい」

ほうほう、どうやら新入りさんが来たらしい。

しかもサイレンススズカと言えば大逃げの先輩じゃあないですか。

これは中々の大物さんの娘さんが来ましたなあ。

そんな事を思っていると厩務員がそのスズカミラーを連れてやってきた。

「ほら、お前の旦那さんだよ」

おおっと、私のお相手さんでしたか。

「やあ、始めまして。俺はインパクトターボ。親父はツインターボ。親子そろって大逃げ一筋の変わり者さ」

「初めまして、スズカミラーです。父はサイレンススズカでお父さんも大逃げは得意でした」

うん、確かに大人しいが美しい体付きのいいお嬢さんじゃあないか。

こうして俺とスズカミラーは出会い、そして子作りをした。

そして生まれたのがスズカミラーの2009、マキシマムターボである。

逃げ馬×逃げ馬血統なんていう浪漫溢れた配合の馬を希望するのは当然浪漫大好き室オーナーだ。

こうしてマキシマムはデビューした。

鞍上を武騎手で・・・。

そしてマキシマムはデビュー戦から逃げに逃げ続けた。

懸念されていた足も俺の血・・・イクノ母さんの血のお陰か頑丈で問題無く、優れたスタミナに優れたスピード、あのサイレンススズカを彷彿とさせる逃げて差すというまさに至高の逃げ馬として君臨す

る事になった。

サイレンススズカも俺も長距離は苦手だった為にマキシマムもあまり得意では無い様だがそれでも事前により上げたリードで押し切ってしまう。

国内にもはや敵無しと言われて海外のレースに次々と参戦。

特に得意な左回りコースの多いアメリカのGIを次々と制覇、蹂躪してきた。

あまりの強さに元々勝てるレース以外を避ける傾向の強いアメリカ競馬で出走辞退が頻発して危うくレース不成立になるという珍事まで発生した。

ちよつと我が息子強すぎませんか？

そのままアメリカ競馬界から恐ろしい程の金額を積まれてマキシマムターボはアメリカに永住する事になった。

それと同時に親父の俺も種牡馬現役の内にアメリカに！と言われてたらしいが室オーナーはこいつだけは、と言って首を縦には振らなかったらしい。

その代りと言っては何だがその後の俺とスズカミラーとの子供がアメリカの富豪馬主に日本セリ史上最高価格で落札されるという事態までになった。

そうして多くの俺の血統がアメリカに渡っていったらしい。

勿論全ての俺の子供が活躍できた訳ではないが、それでもそれなりの数の子供がアメリカで活躍していったらしい。

元々親父はアメリカ種牡馬の血統だし故郷に返り咲いたって事なのかなあ？

そんな事を俺は思いながらアメリカに高く売れるからとやたらと増えた種付け数にただただ恐怖するだけだった。

もしウマ娘達が前世の記憶を持っていたら・・・

春・・・

それは出会いの季節・・・

そしてこれは初めての再会・・・

「ねえイクノ．．．全然前が見えないよお」

「もう少しだけ我慢してください」

前世からの知り合いであるイクノデイクタスに目隠しをされてツインターボはどこかへと連れていかれる。

イクノとはかつて子を成す仲ではあったが自分もウマ娘である以上は流石に恋をするという事は無かったが、元は牡であった自分が牝．．．ウマ娘になった為に妙に小恥ずかしい。

それはマックイーンも同様の様で、同室という事もあつてか時々色々大変らしい。

最も前世の記憶全てを覚えている訳ではなく、時折夢のように思い出すウマ娘が殆どなので特に何も思わないウマ娘も居る。

例えばオグリキャップなんかは「ご飯が美味しければそれで．．．」とどうでも良さそうである。

一方でシンボリドルフとトウカイテイオーは最初かなりギクシヤクしていたが今は普通にトウカイテイオーが甘えている。

ダイワスカーレットに至っては「．．．聞かないで」とどうやらアグネスタキオンに対して思うところがある様である。

ゴールドシップは．．．良く分からないが少なくとも嫌ってはいないだろう。

いつもと違ってやや強引な．．．いや、そうでもないかも？と思いつつツインターボはイクノデイクタスに手を引かれてどこかの教室へと入っていく。

「さあターボ、目隠しを取っても良いですよ」

「やつとかあゝ」

イクノデイクタスに言われてツインターボはようやく目隠しを外す事ができた。

「一体なんなのさあ．．．こんな事し．．．て．．．」

「初めまして、インパクトターボです。ようやく会えましたね。お父さん」

初めて見るその顔には嬉しさがあふれ出ている。

自分より少し背が高い、イクノデイクタスによく似た髪色に青のグ

ラデーション。

少なくとも自分は知らない。

それでも何かが訴える。

「・・・始めまして・・・ターボは・・・ツインターボだぞ」

なぜか涙が溢れて止まらない。

ゆっくりと近寄ってくるインパクトターボをツインターボはそのまま受け入れた。

「良く・・・良く頑張った・・・お前はターボの自慢の息子だぞ・・・」

「うん・・・うん・・・！」

抱きついて、同じように涙を流すインパクトの頭をそつと撫でてあげる。

その様子を見ていたイクノデイクタスも涙を流しながらそつと二人を抱きしめた。

春は出会いの季節・・・。

奇跡とも呼べる出会いを、桜の花が穏やかに見つめていた。

もしスズカミラーがウマ娘として登場していたら・・・

ある日の事・・・。

「た、ターちゃん、久しぶりに二人だけですね」

「そうだね・・・」

いつもの授業後の時間。

今日はスピカでの特別トレーニングがあるとかでキタちゃんもサトちゃんも居ない。

どうしてもチームが異なる為に予定が合わなくて別々になってしまふ事も珍しくは無いが確かにルーちゃんと二人なのは久しぶりだ。

「あれ？門前に車が・・・」

「本当だ・・・週末じゃないのに珍しいね」

通常門前に車を付ける人は少なく、週末は自宅で過ごすメジロ家御一行など名家出身者を除くと滅多に居ない。

今日は週末では無いから恐らく生徒の誰かの出迎えでは無いと思うんだけど・・・。

そんな風に思っているとドアが開くと一人のウマ娘が降りてきた。

「お久しぶりです。ターボさん」

「ミーちゃん！久しぶり！」

車から降りてきたのはミーちゃん、スズカミラーちゃん。

「お、お知り合いですか？」

「うん。スズカミラーちゃんって言って私の幼馴染なんだ」

「初めまして、スズカミラーと申します」

「は、初めまして。サムシングブルーです」

この時、サムシングブルーとスズカミラーの脳裏にはある共通の思いがあった。

(こいつは敵です！)

ウマ娘の本能に突き動かされて二人は行動を開始した。

「ターボさん、久しぶりの再会ですからどこかで二人でゆっくりと話しませんか？」

「ターちゃん、久しぶりに二人なんだからどこかでじっくり遊びませんか？」

「ミーちゃん？ルーちゃん？」

それぞれ左右の腕を掴まれて私は身動きが取れなくなった。

「ターボさんは私と行くんです！」

「いいえ、私とです！」

「ちよ、ちよっと二人とも痛いよ！」

ウマ娘の握力で握りしめられて私の腕が悲鳴を上げている。

「ターボさん！」

「ターちゃん！」

「どっちの味方ですか!?!」

「あだだだだだだ！う、腕がもげるー！」

大岡裁きの如く両腕を引っ張られて私は悲鳴を上げた。

「何をやっているのですか！」

その時、偶然通りがかったイクノ先輩が助けてくれた。

「二人とも何を考えているのですかまったく」

「す、すみません」

怒るイクノ先輩に二人はシュンとして俯く。

「インパクト、大丈夫かー？」

「はい、何とか大丈夫ですツイン先輩」

「お二人の事を笑えませんわね。私達も同じ過ちを犯していますし」

イクノ先輩と一緒にいたツイン先輩とマックイーン先輩が私を心配してくれていた。

「あれ？マックイーン先輩今日スピカの特別トレーニングでは？」

「私は膝への負担を考えて今日はお休みですわ。テイオーも休んでいきますから多分会長さんの所でしょうね」

復帰こそできたもののマックイーン先輩の足にはまだ不安が残っている。

それはツイン先輩の心臓も同じだ。

「それにしてもイクノ先輩にはいつも助けて貰っちゃって・・・」

「あー・・・インパクト、その事なんだけど・・・」

ツイン先輩が言い辛そうに頬をかく。

「今回だけはあまり助けにはなつて無いかと思いますわ・・・」

マックイーン先輩も目を逸らしている。

「どういう事なんですか？」

「イクノさんはその・・・魔性のウマ娘なのです・・・」

「しかも色々無自覚なのにアドバイスだけは適格で・・・魔性のウマ娘製造機なんだぞ・・・」

私はさび付いた機械の様に鈍い動きでルーちゃんとミーちゃんの方を向いた。

そこにはお説教ではなく何かのアドバイスをするイクノ先輩とキラキラした表情でアドバイスを聞くルーちゃんとミーちゃんが居た。

「ご愁傷様ですわ・・・」

「インパクト・・・ドンマイ・・・」

「ははは・・・」

私は乾いた笑いしか出てこなかった。

競馬四方山話

とある競馬雑誌・・・

インパクトターボ産駒について

インパクトターボの産駒の数はディープリンパクトやキングカメハメハ、サンデーサイレンスと言った大種牡馬に比べれば少ないが、それでも中々の数を誇る。有名なのは世界初の白毛GI牝馬のシルクヴェール、最強暴走短距離馬のバクソウオー、凱旋門賞にも出走し、ゴールドシップと争い続けた3代目逃亡屋マキシマムターボが特に有名だが他にも活躍した産駒は居る。

ダート戦で活躍したバックファイア、地方重賞を複数獲得したワイダッシュなど目立つような活躍とは言えないが、非常に馬主孝行な産駒も多い。

そんなインパクトターボの血統評価を様々な競馬関係者に聞いてみたのでその評価を見てみよう。

Sグループ系列牧場関係者

インパクトターボの血は飛びぬけて強い産駒を生み出す血統ではありません。特にスピードに優れた産駒は少なめの傾向にありますね。一方で加速力とスタミナ、それに勝負根性は非常に優秀で安定してマイル、中距離に強い馬が生まれやすいですね。また頭が良く、性格も普段は素直で穏やかな傾向が見られます。一方で強すぎる勝負根性が災いしてレース中に掛かりやすかったり、先行馬や逃げ馬が多いかと思います。特に調教助手に言わせると1頭だけの調教と併せ馬の最中では別の馬かと思う程変貌する馬も居るようです。有力種牡馬を保有する大手生産牧場からは、もし所有権を売ってもらえるのなら有力候補に上がるぐらいには評価されていますね。特に荒い性格の血統との掛け合わせが期待されていますし血の濃さ的にも融通が利くので。

評価 最高速度：特に秀でてはいない 加速力：非常に優秀 スタミナ：かなり優秀 頭の良さ：非常に優秀 性格：非常に穏やか（但しレース中を除く）勝負根性：非常に強い 父血統：かなりマイナー

母血統：現在はマイナー（ノーザンテースト1／4）

Rファーム関係者

私たちの間では生まれた産駒の性格が穏やかな馬が多い事から非常に高い評価を受けていますね。能力的にも申し分なしと言ったところなので能力は高いが性格の荒い血統との掛け合わせが良いですね。もしあのゴールドシップがああ能力のまま大人しい性格だったらどうでしょうか？ファンとしては物足りないかもしれませんが私たち牧場関係者からすれば非常にありがたい事です。だってゴールドシップにかける時間を大幅に減らせますからね。（笑）冗談はさておき、今後も性格面で期待のできる血統じゃないですかね。どうしても強い馬は気性が荒い事が多いので少しでも中和できるのならばと私たちも期待してますよ。

評価 最高速度：問題無い程度 加速力：非常に優秀 スタミナ：優秀 頭の良さ：非常に優秀 性格：極めて穏やか（レース中の掛りは問題無いレベル） 勝負根性：極めて優秀（あの性格ではあり得ない程） 父血統：マイナーなのが逆にありがたい 母血統：ノーザン1／4は使い勝手が良い

実際にインパクトターボ産駒を調教している調教師Y氏

インパクトターボの産駒は近年では珍しくなった逃げ、先行馬に向いた馬が多いですね。以前は差し、追い込みの能力が高い産駒が非常に評価されてきました。調教師としてもその方が故障率を下げられるので安定した成績を残す事が出来ました。一方で逃げ、先行馬の数が少なくなった事を寂しく思う調教師も居ました。そういう意味ではインパクトターボの産駒が増えている事を喜んで居る調教師も居るでしょうね。私も当然その一人です。特にインパクトターボの産駒は全体的に頑丈な足をしている事が多いので安心して逃げ、先行策をとれるのがありがたいですね。

評価 最高速度：逃げ、先行には十分なレベルが多い、強い個体も居る 加速力：極めて優秀な個体が多い スタミナ：マイル、中距離ならば問題なし、長距離行ける個体もある 頭の良さ：全般的に優秀な個体が多い（良すぎて人間を嘗める個体も） 性格：素直な個体が多

い印象（荒い個体も居ない事はない） 勝負根性・全般的に高い（中には落ち着いた個体も居る） 父血統：アメリカ血統は良く知らないが日本には珍しい 母血統：ノーザン1/4と聞いているが今は非常に数が少なくなってきた

有名馬主T氏

インパクトターボ産駒は中々評価の難しい馬が多いですね。ぱつと見は落ち着いていて体つきも悪くない子が多いのですが、レース中は掛かりやすいという傾向がありますからね。インパクトターボの評判だけ聞いてその産駒を買おうとすると、その癖に苦勞する馬主も居ると聞きますね。私も数頭インパクトターボ産駒を所持していますが、どの子もレース中は落ち着かせるのが大変だと騎手がぼやいていましたね。その反面レースでやる気を出さない事がない事と、コースを逸脱したり騎手を振り落としたりする事が無いので乗るのを怖がる必要が無いのは助かるとも言っていましたね。

評価 最高速度：母方次第で変わるが見極めが難しい 加速力：悪くない子が非常に多い スタミナ：母方次第だがマイル、中距離が多い印象 頭の良さ：非常に優れた子が多い 性格：普段は大人しい子が多い印象 勝負根性：強すぎる子も居るので見極めが大変 父血統：日本ではほぼ居ない血統 母血統：かつて一世を風靡したノーザンテーストの流れをもっている

ツインターボの伝説を語るスレより・・・

▽001

ツインターボ師匠の伝説を語るスレはコチラ

▽002

スレ立て乙

▽003

師匠の伝説

その1：デビューから引退まで逃げ率100%（息子も同じ模様）

その2：勝つ時は圧倒的に、負ける時は逆噴射とまさにエンターテインナー

その3：スタミナ自慢のイルトンシンボリをバテさせて勝利

その4：徹底マークのライスシャワーを完璧に騙して勝利

その5：シャドーロールの怪物と呼ばれた全盛期ナリタブライアンから逃げ切り勝利

▽004

当時ナリタブライアンの馬券を買っていたワイ、見事に外して財布を空にした模様

▽006

翌日の競馬新聞の一面まだ覚えてるぞ

『怪物まさかの敗北！ツインターボ快勝！馬券吹雪が宙を舞う！』

▽007

あれで事前の調査では3番人気だったんだよなあ師匠

▽008

あの子のメデイアのナリタブライアンの叩きっぷりだったらなかったよなあ

▽009

あの走りで師匠が燃え尽きちゃったから一瞬の栄光だったんだよなあ

▽010

しかも引退後の産駒も微妙なのばかりで唯一残った最後の落とし種がインパクトターボってのもドラマチックだよなあ

▽011

あの走りでいくつものGI勝ってるんだからすごいよなあ

▽012

馬体も牡馬にしては小さめだしスピードもそこまで早い訳じゃないのにな

▽013

スピードだけで言えば師匠のが早いのかな？

▽014

そもそもその走りが違うから何とも言えない

▽015

馬が怖くて全力疾走のツインターボと先頭に立っていないと気が済まないインパクトターボだからな

▽016

似ていて非なるのにどちらも大逃げを貫き通すのはまさに血だね

▽017

走り方が似ていると言うのならボウソウオー・・・じゃなかった
バクソウオーのが似てるぞ

▽018

バクソウオーも勝つときは圧勝だけど負ける時は逆噴射だもんな

▽019

皐月賞・・・はかない希望に掛けてバクソウオー買ったが惜しかった！今でも悔しくて夢に見る！

▽020

当たってれば単勝120倍だったか

▽021

普通短距離馬が皐月賞で勝てるとは思わんな

▽022

そもそもあのレースで当たり馬券は出たのだろうか？

▽023

単勝なら当ててるやついたな

▽024

バクソウオー2着は誰も予想できんて

▽025

ツインターボの有馬は結構当ててる人いたんだっけ

▽026

応援馬券的な感じで買って当てたワイ。そのお金で祝勝会と称してちよつと良い御飯食べました

▽027

俺も当てたぞ。陣営のやる気見てたからもしかしたらって思って
買ったから見事的中

▽028

懐かしい名前を見て個人的にスクラップしてた競馬新聞を探してきたので記事の内容を書き込みするぜ

＜029

おお！サンクス！

＜030

『平成の最強馬と名高いナリタブライアンが有馬記念にてまさかの敗北をした。勝利したのはあの犬逃げ逆噴射で有名なツインターボだ。まさかの出来事に競馬場は騒然となった。調教師はレース後の会見で「ナリタブライアンなら絶対に勝てるという驕りがあった。一から出直したい」とコメントを残している』

＜031

実際あの時誰もがナリタブライアンが勝つて疑ってなかったからなあ

＜032

有力馬が軒並み出場してなかったからな

＜033

そしてノーマークだった師匠が気合の逃げ切りで勝利しちゃったからナリブ陣営は面目丸つぶれだよな

＜034

しかもその後ナリブ怪我して尚更色々言われるようになったしな

＜035

師匠は怪物相手に燃え尽きるまで戦ったって称賛されてたのにな

＜036

ファンもメディアも残酷だよな

祝勝会

有《font:ul40》馬《font》記念を見事に勝利したツインターボの祝勝会。

チームカノープスのメンバーは勿論の事、協力してくれたチームスピカのメンバーを招待して大規模に開催する事になった。

チームカノープスのチームルームをツインターボ以外のメンバーで飾り付けて、料理などを運び込んで盛大に行われる事になった。

「せーの」「優勝おめでとうツインターボ!!」「」

パンツ!パンツ!とクラッカーが鳴る

「にしし、皆ありがとうね」

頭に王冠(南坂トレーナーお手製)を載せたツインターボが照れたように笑う。

ここまで盛大に祝われることは初めてなので嬉しいのと同時に照れくさい。

「それにしてもあのナリタブライアン先輩に勝つなんて本当に凄いわね」

「ああ、あのすっげえ走り、最高だったぜ!」

ダイワスカーレットとウオツカがそう言って褒めてくれる。

「ターボはただ夢中で走ってただけだぞ」

実際ツインターボはレース中の事は臆気にしか覚えていない。

限界まで出し切ってしまった為に覚えて居られるほど余裕がなかったのだ。

「うーん、私も有《font:ul40》馬《font》記念走りたかったなあ」

「スズカさんはそのままアメリカに行っちゃってドリームトロフィーリーグに移行しちゃいましたからね」

ツインターボを羨ましそうに見るサイレンススズカにスペシャルウィークが苦笑いをする。

「あれだけトレーニング頑張ったんだし、師匠が勝ててボクも嬉しいよ」

「本当ですわ。トレーナーさんの指導が実を結んで良かったですわ」
トウカイテイオーとメジロマツクイーンも我が事のように喜んでい
る。

「おいおい、少しは俺を信用してくれよ」

「日頃のトレーナーの行いが悪いからだろ」

完全管理型のトレーニング指導は取らない沖野トレーナーとウマ娘の関係性はトレーナーと生徒と言うよりは共に戦う仲間と言った関係性の方が近い。

一方で自主性に任せる部分が大きく、さらに沖野トレーナー自体のうっかりもあってどうしても尊敬される対象には成り難い。

その結果チーム間の仲は良いがどうにも信用される関係にはならないのである。

一方で押しが弱くウマ娘に負けてしまいがちな南坂トレーナーはここぞと言う時の行動力や調整力に優れているので尊敬される関係では無いが信頼と信用はされている。

トレーナーという仕事はとても大変なのである。

「チームカノープスの初めてのG I、取られてしまいましたね」

「ホントね。私がこっそり狙ってたんだけどね」

「でもうれしいです。ターボちゃんのお蔭で私もセンターで踊れましたから」

今までG Iにあと一步届かないレースばかりだったチームカノー
プス。

同じチームメイトとは言え取られてしまったのは悔しいがそれよりも誇らしい気持ちで一杯だ。

「だからいつも言ってるでしょ。ターボが一番だって」

ツインターボはそう言っただけで笑う。

その言葉はいつもどこかに居る弱気な自分を鼓舞する為の言葉だった。

でも今はその言葉を心から喜べる自分がある。

それがとても嬉しい。

「ちよつとターボおトイレ行ってくるね」

「早く戻ってきてね」

チームルームを出ていくツインターボを南坂トレーナーだけが真剣な表情で見つめていた。

「ツハア．．．」

ツインターボは少し周りから影になった壁にもたれ掛かると胸を押さえて大きく深呼吸した。

「大丈夫．．．ターボはまだ大丈夫．．．」

「やはり無理をしていたんですね」

ツインターボが驚いて顔を上げるとそこには南坂トレーナーが居た。

「トレーナー．．．どうして．．．」

「以前からターボさんの走りには問題があると思っていました。通常のウマ娘は限界ギリギリまで走るといふ事はしません。本能的に出来ないんです。心臓にかかる負担が大きすぎるからです。ですがターボさんはいつも限界ギリギリまで走ってしまいます。特にレースでの走りはいつ見てもヒヤヒヤしていました。いつかレース途中に倒れてしまうのではないかと」

有《font:ui40》馬《font》記念では辛うじてレースを終えてからだだったがそれでも倒れた時は非常に驚いた。

周りには悟られないようにしていたがあの時は生きた心地がしなかった。

レース中のアクシデントで引退するウマ娘を何人も見てきた。

あの時は最悪の事態が起きたかもしれないと覚悟した。

幸いにもすぐにツインターボは目を覚ました。

表彰式もライブも問題なく終える事が出来た。

しかしカノープスメンバーを常に細かく見ている南坂トレーナーはツインターボの表情が僅かに歪んでいるのを見逃してはいなかった。

周りは転倒した後に体を痛めた程度に思っていた。

事実レース後の軽い診察でも軽い打撲が見つかった程度だった。

だがその内側はボロボロだった。

常に限界まで出し切るツインターボは本人も知らないうちに体を蝕み続けていたのだ。

そしてついに体が悲鳴を上げたのだ。

「ターボさん、近いうちに病院で精密検査を受けましょう。そしてその後の事を考えるべきです。貴女自身の為に……」

「ターボは……ターボは……まだ……」

「ターボさん、貴女は十分頑張りました。そして1番にもなりました。もう……無理をする必要は無いですよ……」

ツインターボはずっと無理をしてきた。

強気で勝気な発言をずっと続けてきた理由、それは自分が本当に強いウマ娘では無い事を知っていたからだ。

もちろん強いウマ娘でありたいとは思っている。

だがそれを叶えられるだけの才能が無いこと、小柄な体が競争に向いていない事は理解していた。

それでも諦めなかったのはレースへの強い憧れがあったからだ。

「ターボは……ターボはあ……」

泣きじやくるツインターボを南坂トレーナーはそっと抱きしめた。

「大丈夫ですターボさん……貴女は強く素晴らしいウマ娘です。これまでも……そしてこれからも……」

「うん……」

ツインターボは耐えきれぬ悔しさを拭い去るように南坂トレーナーの胸に顔を押し付けた。

「あ、師匠やつと帰ってきたね。ほらほら、主役が居なくちゃこれを出せないでしょ」

「ごめんねテイオー、ちょっと寄り道しちゃってたんだ」

涙の跡を隠す為に少し寄り道をしていたのは事実だ。

「ケーキの準備ができましたわ」

そう言ってメジロマックイーンが大きなホールケーキを持ってきた。

『優勝おめでとう』と書かれたチョコレートプレートに乗った大きなホールケーキには蠟燭が刺して灯してある。

「ローソクは何か違わなくないですか？お誕生日じゃないんですから」

「ケーキの箱と一緒に入っていたからついやっちゃったけれど確かに違うかも・・・？」

スペシャルウィークの言葉にサイレンススズカも同意する。

「まあいいんじゃないかしら。お祝い事には違いないだし」

「細かい事は気にした方が負けだぜ」

こういう時は意見が合うダイワスカーレットとウオツカが先に進めようとする。

「まあいいじゃないか。こう言ったパーティーの醍醐味的なもんだろうさ」

「早くケーキ食わせろよお」

揉めるよりは先に進ませた方がいいだろうと促す沖野トレーナーと食い気のゴールドシップがケーキを催促する。

「にやはは、今日は皆ありがとうね。それじゃあ！フーツ！」

ツインターボが蠟燭を吹き消すと拍手が起こる。

その後にキツチリと同じサイズに切り分けられるイクノデイクタスの手で切り分けられたケーキを楽しむと、寮の門限も考えて解散となった。

こうしてツインターボの祝勝会は終わりを迎えた。

そして翌日、トレーニングを休んでツインターボは病院で精密検査を受けた。

「全身を検査いたしましたですが骨格などには大きな影響は見られませんが、ですが心電図に少し異常が見られます。そこまですはありませんが不整脈の兆候があります。これまでも激しいトレーニングやレース中に心臓が痛む事がありましたか？」

「確かにギリギリまで走ると胸が痛い事があったぞ。それとこの前の有《font:ul40》馬《font》記念の後は何もしてなくても少し変な感じがした事があったぞ」

その言葉を聞いた医師がカルテに書き込む。

「やはりそうでしたか。今回の気絶は恐らく過労が原因であってそこ

までの危険な気絶ではないでしょう。ですが気絶自体は決して安心できる事ではありません。今後同じような走り続けられれば最悪命にかかわります」

その言葉にツインターボは俯いた。

「ツインターボさん。何もレースを諦める必要はありません。まずは少し体を休め、その後リハビリを行えば問題なく走れるようになりますよ」

「本当？」

「ええ、本当です」

医者顔は決して嘘は言っていないかった。

「決して楽な道ではありませんが一緒に頑張ってくださいませ」

「おう！ターボ頑張るぞ！」

ツインターボはそう言って笑った。

二人だけの有マ記念

それはとある日の事……。

「それで、ボク達に用事ってなんなのさ？アグネスタキオン先輩」

「トレーニングもありますからお話は短いと嬉しいのですが……」

トウカイテイオーとサイレンススズカがチームルームを訪ねてきたアグネスタキオンを困惑しつつも応対していた。

「すまん、紅茶なんて気の利いたものは無くてな。ニンジンジュースでいいか？」

「ああ、ここでコーヒーを出されなくて良かったよ。そうしていたら何をしていたか分からないよ」

さり気無く怖いことを言うアグネスタキオンに沖野トレーナーは顔を引き攣らせた。

「実は私の研究の過程で偶然とある薬品が完成してね。私が目指している薬品では無いが今後の開発の役に立つかもしれないからデータが欲しくて君たちにも試して欲しいんだよ」

そう言ってアグネスタキオンは栄養ドリンクの瓶に入った薬品を2本机に置いた。

「えく……ボク虹色に発光したりするのは嫌だよ」

「私も流石に発光するのは……」

「君たち待ちたまえ。私がいつも発光する薬ばかりを作っていると思っているのかね？」

アグネスタキオンは心外だと言わんばかりの態度をする。

「でもアグネスタキオン先輩のトレーナーさんいつも変な色に光ってるよね」

「……科学の発展に犠牲はつきものさ」

アグネスタキオンはそう言って白々しく視線を逸らした。

「ンンッ！話を戻すがこの薬はそう言った面白ろ薬ではない。私が作ろうとしている薬の事は知っているよね？」

「確かウマ娘の新たな可能性を開花させる薬……でしたよね？」

「ああ、その通りだ。この薬はその過程で出来た偶然の副産物だね。」

ウマ娘の全盛期と同等の能力を取り戻す薬さ」

「全盛期つてうえく!?」

「嘘でしょ!」

「なんだつて!」

その言葉に全員が驚いた声を上げた。

「ただ残念ながら永続性は無い。あくまで一時的だ」

「いや・・・それでも十分に凄い薬だな」

この薬さえあればケガで引退したウマ娘達にも希望が見えてくる。

「あと勘違いしないで欲しいのはあくまで全盛期と同等の能力という点だ。体の不調が完全に治り、元通りになる訳ではない」

「それって・・・全盛期と同じ速さで走れるけれども全盛期と全く同じ走りは無理つて事?」

「ああ、あくまで体は今のままだ。ケガをした後の走りの癖はどうしようもない。それに全盛期の能力以上にはならない。ブースト薬とは違うと言う事だ」

その言葉にトウカイテイオーとサイレンススズカは少し残念そうにな表情をした。

どちらも大きなケガを体験しているだけに今なお若干の後遺症がある。

それらが消えてなくなる訳ではないのが非常に残念である。

「今はまだそれが限界だが今後も研究を続けていけば完璧に全盛期を取り戻せる薬が出来るかも知れない。だから君たちにデータ集めの為に飲んでレースをして欲しいのだが・・・」

「ねえスズカさん」

「何ですか?テイオーさん」

「スズカさんの薬・・・ボクに譲って貰ってもいいかな?」

「マックイーンさんと走りたいんですね」

サイレンススズカの言葉にトウカイテイオーは首を横に振った。

「マックイーンじゃなくて・・・師匠と・・・ツインターボと走りたいんだ」

「ターボさんと・・・」

「結局ボクとツインターボはレースを走れなかった。ボクが体調を考えてドリームトロフィーに移行しちゃったって言うのもあるけど…… ツインターボはもう全力で走れない……」

ツインターボが心臓に不調を抱えている事は学園内にも広まっている。

リハビリを続けながらレースに出る為にドリームトロフィーに移行したがそれでもかなり厳しいと言われている。

「多分ボクとツインターボが戦えるチャンスはもう無い。タイミングを合わせてレースに出るにしてもお互いの体調を考えると難しい。だからこのチャンスを逃したくは……」

「テイオーさん……私は大丈夫ですから是非どうぞ」

「ありがとうございます」

「あく……テイオー君スズカ君……盛り上がってる所大変申し訳ないのだがこの薬はまだ沢山あるから別にスズカ君の分を譲る必要はないぞ」

「早くいってよ〜!」

その言葉に盛り上がっていた二人は色々恥ずかしくて真っ赤になった。

「……と言うわけでツインターボ君にも是非協力して欲しいのだがどうかね?」

「おう! 難しい事は良く分からないがターボで良ければいつでも手伝うぞ!」

「……非常に不安だがまあ何かしらのデータは手に入るだろう」

若干人選ミスだなとアグネスタキオンも思ったがリハビリしながら現役続行しているウマ娘は中央トレセン学園でも少ない。

大した事のない怪我でも恐怖から走る事がトラウマになってしまいいそのまま引退してしまうウマ娘も少なくはないのだ。

選好みできるほどの人数が確保できる訳ではないし、少しでもデータが欲しい以上は多少の不確実性は諦めるしかないだろうとアグネスタキオンは気を取り直した。

「その心配は不要だと思いますよアグネスタキオンさん」

「おや？ どういう事かね南坂トレーナー」

「こう見えて以外かもしれないかもしれませんがターボさんは口で説明するのは苦手ですが説明が出来ない訳ではありません。それになぜか良く気の合うイクノデイクタスさんがターボさんの説明を補足してくれますから抜けは少ないかと思えます」

「ふむ、ならばよろしく頼むよ。私は他にも頼みに行くのでこれで失礼させていただくよ。邪魔もしたくはないからね」

そう言つてアグネスタキオンはカノープスのチームルームを出て行つた。

それと入れ替わるように真剣な表情をしたトウカイテイオーが入ってきた。

「あれ？ テイオーどうしたの？」

「ツインターボ、あの日の約束・・・ボクとの勝負、受けてもらうよ」
そう言つてトウカイテイオーは以前ツインターボから送られた様に果たし状をもつてきた。

誤字を良くするものの意外な達筆のツインターボと違い、子供っぽい丸文字じみたトウカイテイオーの果たし状をツインターボは一瞬キョトンとした表情で見つめたあと、満面の笑顔で受け取つた。

「おう！ 勿論だぞ！」

「しかしテイオーさん、ターボさんはまだリハビリ途中で・・・あ!？」

南坂トレーナーは先ほどアグネスタキオンが渡した薬を見る。

「うん、ボクも同じ薬を貰つたよ。これを飲んで真剣勝負しよう」

「コースは？」

ツインターボの表情がどこか獲物を狙う様な笑みへと変わる。

「・・・芝、右回り、距離・・・2500メートル」

「・・・有《font:ul40》馬《font》記念」

そのレースはトウカイテイオーにとつても、ツインターボにとつても思い入れの深いレースだ。

「流石に有《font:ul40》馬《font》記念と全く同じには出来ないけれど、ボク達が戦うには一番相応しいと思うんだ」
「おう！ 勿論だぞ！」

トウカイテイオーが突き出した拳にツインターボが拳をぶつける。
「感ツ動ツ！そのレース是非私に手伝わせて欲しい！」

「うわぁ！理事長どつからいたのさ!？」

突如現れた秋川理事長に全員が驚く。

「些事！そんな事より折角の真剣勝負、相応しい舞台を用意しようではないか！」

「あの秋川理事長・・・流石に職権乱用では・・・？」

「愚問！ウマ娘達を輝かせるのが我々の使命、よって問題は無い！万事任せて貰おう！」

そう言っただけ置いてきぼりなトウカイテイオーとツインターボを残して秋川理事長は去っていった。

その後、事がばれてたづなさんにお説教される秋川理事長が居たとか居ないとか・・・。

しかし二人の真剣勝負の舞台は滞りなく整い、後日二人は中山競馬場《font:ul40》馬場《font:ul40》場に訪れた。

『さあ！本日は行われますエキシビジョンレース！トウカイテイオーVSツインターボのマッチレースです！このレースは現在URAにて協議中のアグネスタキオンが新規開発した、ウマ娘の全盛期と同等の能力を取り戻せる薬を使用したテストレースです！今後の結果次第では怪我で惜しくも引退したあのウマ娘達が再びターフに戻ってくるかもしれません！』

「うおおおおおおおおおお!!!」

中山競馬場《font:ul40》馬場《font:ul40》場を地鳴りのような歓声が包み込む。

「たはは・・・なんかすっごい大事になっちゃったなあ・・・」

ただツインターボとの約束を果たしたかっただけだったのに、トウカイテイオーは苦笑する。

「応援ある方がターボは嬉しいぞ！」

細かい事は気にしないツインターボは嬉しそうに観客にアピールしている。

「やれやれ・・・私までこんな舞台上がる事になるとはね」

トレーの上に2本の薬を乗せたアグネスタキオンが若干飽きれながら二人に近寄ってきた。

「個人的にデータが取ればそれで良かったんだが、まさかURAまで巻き込んだ大騒動になるとは思わなかったよ。秋山理事長の行動力は侮りがたいね」

そう言ってアグネスタキオンは二人に薬を渡した。

『今アグネスタキオンからトウカイテイオーとツインターボに件の薬が渡されました!』

「そんな所まで実況しなくていいよう!」

いつもと異なる状況に少し照れながらトウカイテイオーは薬を飲んだ。

ツインターボはいつもと変わらずに笑いながら薬を飲む。

「少ししたら体が熱く感じると思うがそれが薬が効いている証拠だ。その熱が有るうちは全盛期と同等の能力を発揮できる。念の為に医者も居るし私も待機しているから不調を感じたら直ぐに走るのを止めるように。いいね?」

「うん!」「おう!」

アグネスタキオンはそう言って空き瓶を受け取るとターフから出て行った。

残ったトウカイテイオーとツインターボは薬が効いてくるまでストレッチなどで体を解す。

やがて二人とも体の奥底から熱くなってきた事を係員に告げ、軽く走ってウォーミングアップを済ませるとゲートへと入った。

『さあ!薬の効果が十分に発揮され!二人のウォーミングアップも終わりました!1番にツインターボ!2番にトウカイテイオーです!・・・スタートしました!先に行きますのはやはりツインターボ!トウカイテイオーも好スタートでしたがハナを譲りました!』

「いっくぞー!ターボ全開だー!」

「負っけないぞー!」

二人は気合と共に走り出した。

『さあ二人ともスタート直後のコーナーを曲がり終えて1週目のスタ

ンド前を走ります！先に行くのはツイインターボ！あの時を思わせる全力疾走です！大きく離されましてトウカイテイオーが行きます！その差は40メートル程とやはりツイインターボが大逃げ！それを追うトウカイテイオーと言った展開です！ツイインターボ間もなく第1コーナータイムは57秒2とかなりのハイペース！追うトウカイテイオーも58秒8とこちらもハイペース！2500メートル果たして勝つのはどちらか！』

SIDE：ツイインターボ

動ける！行ける！走れる！

心臓は正常な鼓動をまだ刻んでいる！

肺もまだ痛くない！

これが自分本来の走りだと本能で理解する。

その中でも最高の走りが出来ている。

それはきつとトウカイテイオーも同じだろう。

だからこそきつと引き離さなくてはいけない。

「だってテイオーが一番怖いのは！先行のペースで走りながら最終直線での末脚なんだから！」

その柔軟な体から生み出される全身のバネを利用した驚異的な末脚。

通常末脚に自信のあるウマ娘は序中盤はやや抑え気味な事が多い。

しかしトウカイテイオーは速いペースで進みながら、後半でもしっかりと加速できる優れた足の持ち主だ。

もし怪我さえなければ無敗の3冠ウマ娘として名を挙げていたに違いない。

だからこそ……。

「負けられないんだ！絶対に！」

もつと引き離すんだとツイインターボはさらに加速した。

SIDE：トウカイテイオー

足が軽い！確かに以前はこんな走り方だったかもしれない！

足のバネを最大限に活用し、地面を跳ねるように加速していく。

嘗ての自分の走りと遜色無い。

もちろん全てが完璧に同じではないだろうがそれでもここまで走れるのは久しぶりだ。

自分の中でも最高の走りと言える。

それはきつとツインターボも同じだろう。

だからもつと早く走って追い上げなければいけない。

「だってターボが一番怖いのは！限界ギリギリまで出し切れちゃうその走りなんだから！」

通常限界寸前まで走れるウマ娘は非常に少ない。

本能的に制限してしまうからだ。

しかしツインターボはその制限が無い。

いつでも疲れ果ててしまうまで走り切ってしまう。

その走りがあの伝説を生んだのだから。

だからこそ……。

「負けられないよね！絶対に！」

追い抜くためにトウカイテイオーはさらに加速した。

『さあ向こう正面を回って早くも第3コーナーにツインターボが掛かる！トウカイテイオーもその差をギリギリと詰めていきます！ツインターボ見事なコーナーリングで第4コーナーへと入ります！追うトウカイテイオーその差がどんどんと縮まります！さあツインターボが最後の直線に入りました残り300メートル！トウカイテイオーとの差はもう残り4バ身だ！トウカイテイオーがどんどんと追い上げる！ツインターボが懸命に逃げる！さらに差が縮まる！残り200メートルでその差は1バ身！トウカイテイオーがツインターボを捕らえた！しかしツインターボも粘る！トウカイテイオー差し切れるか！残り100メートル！並んでいる！ツインターボとトウカイテイオーが並んでいる！』

「負けられないんだあ！」

「勝つのはボクだあ！」

『並んだままゴールイン！勝ったのはどっちだ！ビジョンにご注目ください！これは……トウカイテイオーが僅かに先にゴールイン！勝つたのはトウカイテイオーです！しかしツインターボも数センチでの

敗北！実に良いレースでした！二人に惜しめない拍手をお願いいたします！』

「ゼヒーツゼヒーツ．．．負けたあ．．．さすがテイオーだぞ．．．」
「ハア．．．ハア．．．強かったよ．．．ツインターボ．．．」

やはり限界まで出し切つて地面に寝転がるツインターボにトウカイテイオーが大きく息をしながら手を差しだした。

ツインターボがその手を握つて握手をすると一段と大きな歓声が轟く。

次の瞬間トウカイテイオーは膝から力が抜けてツインターボに押し掛かった。

「ぐええ．．．テイオー重いよお．．．」

「ごめんねツインターボ．．．薬の効果が切れちゃって力が入らなくなつちやつた」

近くで待機していた係員がすぐに駆け付けてトウカイテイオーをストレッチャーに乗せてくれた。

同じくツインターボもストレッチャーに乗せられた。

「ふむ．．．激しいレースだと効果時間が短くなるようだな。それに効果時間切れで脱力か．．．。いいデータが取れたよ。二人とも今日はありがとう。後日体感レポートを提出してもらおうよ」

アグネスタキオンが何かをメモしながら二人にそう告げる。

「うええく．．．レポート苦手だなあ．．．」

「ターボと一緒にイクノに手伝ってもらおう」

「あははは、そうだね」

二人は笑いながらも一度握手をした。

そして観客に二人で手を振るとそのままストレッチャーで退場した。

インパクトターボの産駒（一部のみ）

サムシングブルー

2006年 シルクヴェール 牝 白毛 勝ち鞍 G I 天皇

賞（秋）

2007年 テイエムブルー 牡 黒毛 勝ち鞍 G II ステ

イヤーズステークス

G II 阪神大

賞典

2011年 メモリアルレイク 牡 鹿毛 勝ち鞍 G III ダイ

ヤモンドステークス

バクシンレディ

2007年 バクソウオー 牡 鹿毛 勝ち鞍 G I 高松

宮記念

G I スプリ

ンターズステークス

2009年 スパークレディ 牝 鹿毛 勝ち鞍 G II フィ

リーズレビュー

フリソデ

2008年 バックファイア 牡 栗毛 勝ち鞍 G I ジャ

パンダートダービー

G I チャン

ピオンスカップ

G I 帝王賞

スズカミラー

2009年 マキシマムターボ 牡 鹿毛 勝ち鞍 G I 皐月

賞

G I 東京優

駿

G I 天皇賞

(秋)

念 他多数

G I 有馬記

2011年 ホークスター

牡 鹿毛 勝ち鞍 G II 金鯱

賞

2014年 ワイダツシユ

牡 鹿毛 勝ち鞍 全日本2

歳優駿

東海ダー

ビー

G I ジャパ

ンダートダービー

名古屋グラ

ンプリ

ハルウララ

2009年 ハルノスミダガワ 牡 鹿毛 勝ち鞍 大高坂賞

ダイワスカーレット

2016年 スカーレットランス 牝 栗毛 勝ち鞍 G I 桜花

賞

G I ヴイク

トリアマイル

クイーンダイアナ

2016年 ターボエンペラー 牡 鹿毛 勝ち鞍 G I 皐月

賞

G I 東京優

駿

G I 菊花賞

念 他多数

ブチコ

G I 有馬記

2020年 ブチコの2020 牝 白毛 勝ち鞍 デビュー

前

年度産駒数（種付け頭数）	
2006年	21頭（32頭）
2007年	73頭（112頭）
2008年	93頭（131頭）
2009年	111頭（157頭）
2010年	149頭（181頭）
2011年	155頭（183頭）
2012年	159頭（184頭）
2013年	161頭（195頭）
2014年	134頭（171頭）
2015年	159頭（194頭）
2016年	155頭（195頭）
2017年	141頭（193頭）
2018年	132頭（185頭）
2019年	138頭（181頭）
2020年	121頭（163頭）
2021年	109頭（140頭）

各繁殖牝馬とのエピソード集

サムシングブルー（2回目の種付け）

「驚いたよ。まさかブルーちゃんが白毛馬を産むなんて」

「私も驚きました。最初は何が起こったか分かりませんでしたし」

ブルーちゃんとは2度目の種付けだからか安心感も強い。

初めての種付けだと相手の性格次第では中々上手にいかなくて手間取る事もある。

俺自身がまだまだ不慣れというのもあるだろう。

幸いブルーちゃんは大人しいのでそこまで恐れる必要がないのがあるがたい。

まあ種付け自体は嫌いじゃないので嬉しいっちゃ嬉しいのだが……。

ただ今年から100頭以上になってるから頻度が多くてなあ……。お楽しみより作業感が強くなってきているのが何とも辛い……。

「どうしたんですか？」

「ああごめん、ちよつと考え事をね・・・」

ブルーちゃんに謝ると俺は気持ちを集中させた。

バクシンレディ（1回目）

「初めまして！私がバクシンレディです！」

「お、おう・・・初めまして」

明るいを通り越して眩しいレベルのバクシンレディ。

勢いが強くて思わず若干引いてしまう。

「貴方のお話はしつかりと聞きました！是非強い子供を残しましょう！」

「いやまあ・・・嫌がられるよりは良いんだが・・・」

前向き過ぎると引いてしまうものなんだな。

とりあえず何とか種付けを済ませたが常に前向きで明るいバクシンレディには何とも言えない感覚だけが残った。

スズカミラー（1回目）

「あの・・・本当に私なんかで良いんですか？」

「いやいや、スズカミラーさん綺麗だし何をそんな卑屈に・・・」

「だって・・・私結局怖くて1度もレース出来なかったのに・・・」

どうやらスズカミラーさんにとってレースに出られなかった事は大きなトラウマになっているようだ。

「そうは言いますがスズカミラーさん、繁殖牝馬全員がレースに出ている訳じゃあないですし、レースに出ても勝てずに終わっちゃった牝馬も多いですから何もそこで卑屈になる事は無いですよ」

「そうですかあ・・・？」

「ええ、折角なら強い子供を産んで見返してやりましょう」

「・・・はいー」

どうやら気持ちを乗せることに成功したらしいスズカミラーさんと何とか種付けに成功した。

その後生まれたマキシマムターボがまさかの記録を作るとは思わなかったが、そのお陰でスズカミラーさんの自信にもなったので良い事だった。

フリソデ

北海道静内農業高校では日本で唯一サラブレッドの繁殖と育成、セリに出すまでが行われている。

「よろしくお願いしますね」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ・・・ちよつと落ち着かないが・・・」
「うふふ、生徒さん達が興味津々ですものね」

種付けの時は当然だが多くの厩務員が係わる。

嫌がった牝馬が暴れて種牡馬が怪我をすれば大事だし、何より種付けがスムーズに済むとは限らないからだ。

しかし本日はそれ以外の存在、種付け見学に来たまだ若い生徒が興味津々にこちらの様子を伺っているのは落ち着かないものである。

邪魔にならないように隅っこの方で大人しく見ているだけが緊張の瞬間で気の抜けない牧場側に対し、あくまでお客さんの生徒から受ける熱い視線と時折聞こえる女子生徒の恥ずかしそうな声は何とも気になる。

近年では農家出身以外の生徒も増えてきているらしく種付けを見るのは初めてな生徒も多いのだとか。

特に血統維持の為にあって自然交配（人の手で管理はされているが）しか認められていないサラブレッドとは違い、牛や豚などは人工交配が中心で種付けをマジマジと見たことのある生徒も少ないのだろう。

「まあ見られているのはいつもと変わらない・・・か」

「うふふ」

優しく笑うフリソデさんと色々注目されながら種付けを終えた。

ハルウララ

「はあ・・・まさか私が種付けする事になるなんてねえ・・・」

「噂には聞いてたけどこう言った愛され方もあるんだなあ・・・」

多くのファンからの支援を受けて、当初はディープリンパクトを種付けする予定だったがあまりに高額な為に諦めたらしく、ある程度値上げされたものの、そこまで高額種牡馬では無いが活躍馬の居る俺が選ばれたらしい。

馬主は当初種付け料をファンドで集めるつもりだったのだが上手くいかず、キャンセルの意向が伝えられたのだが、馬主に振り回されるハルウララを可哀想に思ったのか室オーナーが半額提供する事で実現したらしい。

裂蹄の影響で思った走りが出来ず、預託料を稼ぐ為だけに出走させられ続けたハルウララ。

確かノーザンダンサー系列の父を持っているから俺からしても遠い親戚になるんだよな。

「まあ私の子供じゃあそんな優れた子供は生まれないうさ。ある程度走ってくればそれでいい」

色々と人間の都合に振り回された結果随分と擦れてしまったハルウララとは結局その1度きりだった。

ダイワスカーレット

「アンタが今年の私の相手ね」

「おう、よろしく頼むぜ」

かなり気の強い性格をしているらしいダイワスカーレットと種付けする事になった。

陣営としては少し強すぎる気性を抑えたいのだろうが俺もレース中はある程度落ち着いているとは言いい辛いんだが大丈夫なんだろうか。

まあそれを考えるのは人間であって俺たちじゃあないか。

「それにしても美しい毛並みだな」

「あら、この毛並みが解るなんてアンタ見る目があるじゃない」

毛並みを誉められた事で気を良くしたダイワスカーレットとはレース展開も似ている事から気が合った為にスムーズに種付けできた。

クイーンダイアナ

「初めまして、私はクイーンダイアナ。レースの経験こそありませんが私の父上はかの有名なシンボリルドルフですわ」

クイーンダイアナさんは非常に落ち着いた雰囲気のお馬だ。

「これはご丁寧に。俺はインパクトターボ。父はツインターボ、母は

イクノデイクタスと貴女の父とは比べものにはならない血筋だがよろしく頼む」

「そんなことはありませんわ。貴方様と言う存在こそ、貴方様のお父上とお母上の功績ですわ」

その言葉に俺は嬉しくなった。

「ありがとう。決して卑屈になったつもりじゃあ無かったんだがその言葉に俺は救われたよ」

「どういたしまして」

こうして生まれたのが後のターボエンペラーである。

ブチコ

「アンタ誰よお」

「俺はインパクトターボ。今年の君のパートナーさ」

どうやらこの白毛馬もかなり気性が荒いらしい。

「今更拒んだってアンタの代わりが来るだけだからしょうがないから相手してあげるわ」

「ははは、意外と可愛いところもあるんだな」

「ふ、ふん！」

照れた様子でブチコはそっぽを向いた。

掲示板小ネタ集

インパクトターボ実装発表公式動画と掲示板の反応

「はい、それでは次回アップデートで実装される新規ウマ娘のご紹介動画です！どうぞー！」

『定石？そんなものは私には通用しません！』

ツケ（歌舞伎で板に木を打ち付けて足音などを表現する道具、徐々に早くなつていく表現が一番有名だろうか）の音と同時に『イヨオツ！』という掛け声。ゲートの影とウマ娘の影が画面奥からズームアップ。

『逃げる阿呆に追う阿呆！同じ阿呆なら逃げなきや損々！あ、一世一代の大逃げで！目にモノ見せてやろうじゃあねえかあ！』

ウマ娘の大見得を切ると同時にゲートが開く。

『なんてね！』

『いよっ！逃亡屋！』の掛け声と同時に飛び出す。

『新規実装！傾奇者逃亡屋！インパクトターボ！☆☆☆』

「と言うわけで新しいウマ娘、傾奇者逃亡屋インパクトターボが新規実装となります。固有スキルは『いよっ！逃亡屋！』と言う名前で、効果は『出遅れなくスタートに成功した場合、勢いに乗って速度を上げ続ける』という効果になります。ただし作戦逃げで無いと効果を発揮しないそうですのでご注意ください。それから開発部の方からメッセージを頂いております。『この度、インパクトターボ実装にあたり、以前から要望のあった脚質：大逃げの実装といきたかったのですが、非常に複雑なシステム改造が必要であり、もはや新規に作り直したほうが早い可能性すらあり、現時点での作戦：大逃げは事実上不可能であると判断いたしました。その為に妥協案としてはありますが、新規レアスキル『大逃げ』を作成いたしました。こちらのスキルは非常に高確率で発動するように設定しており、習得している場合と習得していない場合で大きく差が出るようになっております。言葉で説明するより比較動画を見ていただいた方が早いと思いますのでどうぞご覧ください』との事ですので早速比較動画をお願いします！」

画面上下で同じステータス（スピード1200、スタミナ1000、パワー1100、根性500、賢さ600）のインパクトターボ、上がレアスキル：大逃げ所持、下が未所持の状態、他スキルは無し。同条件のレース（6人レースでインパクトターボと同じステータスで作戦：逃げのツインターボが必ず居る状況）でスタート。スタートと同時にどちらもインパクトターボの固有が発動。その後、最初のハロン棒を過ぎると同時にレアスキル大逃げが発動。

発動した上の動画は大きくツインターボを引き離しているのに対し、未発動の下の動画では僅かに先に行く程度に収まっている。

「以上新規レアスキル、大逃げの比較動画でした。効果説明に移りたいと思います。レアスキル大逃げはレース序盤に先頭に立った時、とても大きなリードを作りやすくなるというスキルでして、効果の内容としては速度上昇と加速力上昇の複合スキルです。発動する事で大きく後ろを引き離す事が出来るようになります。効果持続時間も長めに設定されており、本物の大逃げの様なレース展開が楽しめるようになるとの事です。それと同時に実装されます配布サポートカード、『逃亡』屋は伊達じゃない！インパクトターボ』からもイベントで確率ですがヒントレベルが貰えるとの事です。皆さん頑張つて大逃げを習得してくださいね」

S I D E：掲示板

▽ 7 2 1

インパクトターボ実装キター！

▽ 7 2 2

脚質：大逃げ来たのか!?

▽ 7 2 3

残念脚質は逃げのままだ。

▽ 7 2 4

ちよつとサイゲームス何してんの！

▽ 7 2 5

なんかサイゲームス開発部から手紙があるらしいぞ

▽ 726

作り直したほうが早いってそりやそうだよな

▽ 727

無理に実装すると多分バグだらけでゲームが壊れちゃうんだろう
なあ

▽ 728

正直難しいよね大逃げ実装は

▽ 729

スキルとして実装かあ

▽ 730

お、スキル有り無しと比較動画はありがたいな

▽ 731

おー、同じステータスでここまで違うのかあ

▽ 732

所謂ポジションコンキヤップ破壊系スキルなのかな？

▽ 733

速度上昇と加速力上昇の複合、効果時間長いのか・・・強ない？

▽ 734

短距離マイルならそのまま行っちゃいそうだけど中長距離はどう
だろうなあ？

▽ 735

しかも配布サポートカードで確率とは言え大逃げスキル配布とか
大盤振る舞いじゃね？

▽ 736

インパクト「あげません！」

▽ 737

インパクト大明神様是非私のスズカに大逃げをですね・・・

▽ 738

インパクト「あげません！」

▽ 739

皆頑張って上ブレを狙うしかないね

ツインターボ(ウマ娘)の有《font:ul40》馬《font:ul40》馬《font:ul40》馬
t》記念中の掲示板

◇ 881

今年の有《font:ul40》馬《font:ul40》馬《font:ul40》馬
たでゴウス

◇ 882

やっぱり優勝候補は怪物ウマ娘のナリタブライアンだよな

◇ 883

女傑ヒシアマゾンも期待大だぞ

◇ 884

ワイは個人的にツインターボを応援してる

◇ 885

確か同じチームのマチカネタンホイザの代わりに走るんだっけ？

◇ 886

マチカネタンホイザはギリギリまで出走取消しなかったらしいな

◇ 887

そりゃあ可能性は潰したくないもんなあ

◇ 888

とは言え厳しいだろうなあ。そもそもツインターボは長距離レースでの勝ちが無いから

◇ 889

最近も殆ど最下位ばかりだもんな

◇ 890

おい、今中山に居るんだけどツインターボがマチカネタンホイザの帽子被ってるぞ！

◇ 891

まじ!? テレビテレビ！

◇ 892

俺も中山に居るけどマジで被ってるな。

◇ 893

はくこれはオジサンには眩しすぎる光景ですわく
く894
もう直ぐレースも始まるしどうなるか楽しみですわ
く895
ドキがムネムネします！
く896
ファンファアールですわく
く897
ゲート入り完了く
く898
そしてスタート！
く899
ナリタブライアン好スタート！
く900
いや！ツインターボの方が早いぞ！
く901
ちよつと飛ばしすぎじゃあないか？
く902
それがツインターボのいいところだろ！
く903
後先考えない大逃げは見ていて清々しいよな！
く904
いやちよつとまで！レース全体が早すぎないか！
く905
言われてみれば確かに2500とは思えないほど早いな！
く906
おいおい大丈夫なのか？
く907
分からん・・・がどうなるのか・・・楽しみだ！
く908
確かに燃えるな！

◇ 909

どこまでツインターボが先頭走れるかな！

◇ 910

イツケーツインターボ！

◇ 911

吼えろツインターボ！

◇ 912

お前らツインターボ好き過ぎだろw

◇ 913

なんか凄い差が開いてないか？

◇ 914

お前ツインターボのレースは初めてか？力を抜けよ。ツインターボがでかいリードを作るのはいつもの事だぞ

◇ 915

それにしてもいつもより開いてないか？

◇ 916

掛かっているかもしれませぬ。冷静さを取り戻せると良いのです
が・・・

◇ 917

ツインターボに関しては掛かっているのかいつも通りなのか分から
ん

◇ 918

ツインターボが早くも第3コーナーに入ったぞ！

◇ 919

ナリタブライアンまだ動かないのか？

◇ 920

先にライスシャワーが動いたぞ！

◇ 921

ナリタブライアンも動いた！

◇ 922

ナイスネイチャも動いてるな。ヒシアマゾンが出遅れたっぽいな

- ＜ 9 2 3
ツインターボまだ頑張ってるな
- ＜ 9 2 4
ライスシャワーが2番手まで上がったぞ
- ＜ 9 2 5
ツインターボが直線に入ったがこれは逃げ切れるか？
- ＜ 9 2 6
ナリタブライアンが一気に来たぞ！
- ＜ 9 2 7
でもなんか苦しそうだぞ！ハイペースが辛いか！
- ＜ 9 2 8
行けるのかツインターボ！G I勝利まで後200メートル！
- ＜ 9 2 9
届け！届け！届け！
- ＜ 9 3 0
ナリタブライアンが抜けないだど!?
- ＜ 9 3 1
残り100メートル！
- ＜ 9 3 2
ツインターボが凄い粘りだ！
- ＜ 9 3 3
イケー！
- ＜ 9 3 4
ナリタブライアン行けるか！
- ＜ 9 3 5
ツインターボ届いたあ!?
- ＜ 9 3 6
うおおおおおおおおお!?
- ＜ 9 3 7
ツインターボヤッタア！
- ＜ 9 3 8

か、怪物が敗れたあ！

∨ 9 3 9

マジカアアアアアアアアアアアアアアアア！

∨ 9 4 0

アリエナーイ！

∨ 9 4 1

イヤアツハー！

∨ 9 4 2

宴じゃ！宴の準備をせい！

∨ 9 4 3

ツインターボ祭りじゃい！

∨ 9 4 4

ウエーイ！

この日ウマ娘速報掲示板はツインターボをたたえる声で溢れた。

そして数日後・・・。

∨ 1 2 4 5

悲報：ツインターボ不整脈発症！今後のレースは絶望的！

∨ 1 2 4 6

嘘だと言ってよバーニー！推しが！やっと活躍できた推しが引退だなんて！

∨ 1 2 4 7

燃え尽きちゃったのか・・・

∨ 1 2 4 8

確かにレース直後に倒れてたしきつと前々からの蓄積が限界を迎えちゃったんだな・・・

∨ 1 2 4 9

このまま消えちゃうのかな・・・

∨ 1 2 5 0

少なくともトゥインクルシリーズからは引退だろうな

∨ 1 2 5 1

追加情報きたぞ。トゥインクルシリーズからは引退するけどド

リームトロフィーリーグでリハビリしながらレースを続けるそうだ

∨ 1 2 5 2

命を大事にレースを走って欲しいな。

∨ 1 2 5 3

推しのレースがまだ見られるんですねヤッター！

その日の掲示板はツイインターボの無事と今後のドリームトロフィーリーグでの活躍を祈る言葉が書き込まれた。

皇帝の凱旋

とあるドキュメンタリー番組より……。

フランス、ロンシャン競馬場。

今日、ここに日本の期待を背負った馬が走る。

その馬の名はターボエンペラー。

かつて日本で7冠を成し遂げた皇帝シンボリルドルフの血と、ジャパンカップ連覇の偉業を成し遂げた大逃げ馬インパクトターボの血を引く新たな皇帝だ。

世界競馬で最も栄誉あるレースの凱旋門賞。

日本競馬はここにたった1度だけ手を掛ける事ができた。

ゴールドシップに続けとばかりに多くの馬が凱旋門賞に参戦したが、残念ながら2つ目の栄誉を手にした馬はまだ居ない。

このレースに一際強い思いを馳せる人物が居る。

彼の名は室満男さん。

ターボエンペラーの馬主である。

インパクトターボの馬主でもあり、そしてゴールドシップと凱旋門賞を争ったマキシマムターボの馬主でもある。

半兄マキシマムターボが成し遂げられなかった凱旋門賞制覇を、今度こそ成し遂げるのだと気合が入っている。

「私は馬を見極める目なんてものはありません。ただただ浪漫を追い求めて買ってきただけです」

そう言つて室さんは笑った。

マキシマムターボの時は応援に行けなかったからと、今度はフランスまで応援にやってきた室さん。

緊張した面持ちでロンシャン競馬場へと入っていく。

「いやあ、競馬場の空気は日本でもフランスでもやっぱり同じですね。誰も彼もが自分が応援する馬に勝ってほしい。そんな熱気が渦巻いて居ますね」

そんな事を言いながら室さんは奥さんと一緒に調教師や騎手の元を訪れ、激励の声をかけた。

もちろんターボエンペラーにも声をかける。

室さんをしっかりと覚えているターボエンペラーも嬉しそうにしている。

そんなターボエンペラーの最大の障壁と呼ばれているのがゼツケン1番のカイザーシユラーク。

前年度凱旋門賞覇者であり、同じ父インパクトターボの血を引くドイツ最強馬だ。

同じ血を引く2頭の皇帝。

果たして勝つのは日本の皇帝かドイツの皇帝か。

運命のスタートが切られた。

「スタートしました！20頭もの世界最強馬達が一斉に走り出しました！先行争いはやはりドイツの絶対皇帝カイザーシユラークがハナを取りました！日本の皇帝ターボエンペラーは今日はどこに居ますでしょうか・・・居ました！後ろから数えて4頭目に我らが日本の皇帝ターボエンペラーが居ます！ステツプレースのフォア賞では逃げを打ちましたターボエンペラーですが今日は追い込みを選びました！日本でも見せた変幻自在の脚質！逃げ、先行、差し、追い込み、その全てを使い分けて勝利を重ねてまいりましたターボエンペラー！凱旋門賞の一番で追い込みを選びました！果たしてその作戦は吉と出るか凶と出るか！きつい上り坂の第3コーナー入口を抜けて下り坂から偽りの直線フォルスストレート！先頭は変わらずカイザーシユラーク！ターボエンペラーはまだ後ろに控えたままです！さあ短い第4コーナーを抜けて正面スタンド前！オープンストレッツチでインが大きく開いた！そこに突っ込んでいくターボエンペラー！物凄い加速で欧州馬を追い抜いていく！」

「いけー！エンペラー！そこだー！」

「エンペラーちゃんがんばってー！」

夫婦の熱い声援がターボエンペラーを後押しする。

「残り300メートル！先頭は変わらずカイザーシユラークだが果たして日本のターボエンペラーは届くのか！残り200メートル！並ぶか！いや並ばない！皇帝は並び立たない！皇帝は二人も要らない

！真の皇帝はただ一人！あつという間にカイザーシユラクを追い抜いて単独で先頭に立った！残り100メートルで完全にターボエンペラーが前に出ました！しかしカイザーシユラクも負けてはいません！もう一度ムチを入れてターボエンペラーを追いかけろ！しかし勝ったのはターボエンペラーだ！やりました日本競馬！2度目の凱旋門賞制覇です！」

「貴方！エンペラーちゃんが！」

「うおおおおおおお！やった！やったぞお！」

手を取り合い、喜び合う室夫婦。

この日、日本の皇帝は世界を制した。

そしてついに……。

新規育成ストーリー実装！『目指せ！海外レース編！』

これまでの『URAFファイナル編』と『アオハル編』に続く第3弾育成シナリオがついに登場！

新たに設定された育成目標には世界各国のG1レースが設定され、それぞれの目標に応じてレースに参戦する事になります。

育成期間は『URAFファイナル編』と『アオハル編』とは異なり、4年間となっています。

ただし1回のトレーニングでのステータス上昇量は『URAFファイナル編』の1/2となっており、また海外レースでは非常に能力の高いうライバルウマ娘が登場するなど難易度が高い育成シナリオとなっております。

皆さんも是非お気に入りのウマ娘で世界に挑みましょう！

同時実装新規ウマ娘！

『我が凱旋を阻む者無し！ターボエンペラー☆☆☆』

初期能力（☆3時）

スピード：95 スタミナ：98 パワー：93 根性：81 賢

さ：85

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離G マイルB 中距離A 長距離A

脚質適性：逃げA 先行A 差しA 追い込みA
成長率：速10% 体10% 力10% 根0% 賢0%
スキル：初期所有 末脚 コーナー回復

覚醒：Lv1人気者 Lv2全身全霊 Lv3威圧感 Lv
4円弧のマエストロ

人気者（新スキル）説明：緑スキル、人気が一番の時、実力を発揮し易くなる。（スピードステータス上乘せ）

威圧感（新スキル）説明：赤スキル、レース終盤で自分より前にいるウマ娘達の加速力をわずかに下げ、自分より後ろにいるウマ娘達の速度をわずかに下げる。

固有スキル：真の皇帝は並び立たない！ 説明：最終直線に入った時、道中でスキルが発動した数が多ければ多いほど速度を物凄く増加させる。（0～1個だとノーマルスキルレベル。2～4でレアスキルレベル。5～7でシンボリドルフの固有レベル。8以上でそのさらに上。ただし因子継承の場合は0～4でノーマルスキルレベル。5以上でレアスキルレベル止まり）

固有二つ名：武芸百般 条件：朝日杯を逃げ、皐月賞を先行、ダービーを差し、菊花賞を追い込みで勝利する。

隠しイベント：皇帝は戦術を選ばない 条件：上記二つ名の条件を無敗のまま達成すると発生。全ステータスに+5ポイント、スキルポイント+50、逃げのコツ、先行のコツ、差しのコツ、追い込みのコツ各ヒントLv1獲得

お知らせ：新シリーズについて

続けて欲しいというお声もいただきましたので折角ですからターボエンペラーのウマ娘としてのお話を第3シリーズとして投稿しようと思います。

ただし以下の点をご了承いただきたく思います。

1. 馬のお話は書きません。
2. 参加レース、及び勝利敗北はターボエンペラーの歩んだ（と作者が構想した）歴史を再現いたします。
3. 先に書いたインパクトターボ（ウマ娘）のお話はゲーム版をベースにした展開ですが、ターボエンペラーのお話はアニメ版（あるいは漫画版）をベースにした世界線です。その為にインパクトターボのお話とは違いがあります事をご了承願います。（例：インパクトターボ（ウマ娘）ではシンボリルドルフ会長が卒業しましたがターボエンペラー（ウマ娘）では卒業していません）
4. サイゲームス非登場ウマ娘については名前を変更するという方針のままにいたします。
5. 各話の最後にターボエンペラーのキャラクター付けに対するファンのお話を載せます。
6. 現在プロットを考え中です。投稿まではもう少しだけお待ちください。
7. 第3シーズン投稿後、暫くしたらこのページは削除します。

以下投稿用文字数稼ぎです。

インパクトターボ 初期能力（☆3時）

スピード：90 スタミナ：90 パワー：94 根性：85 賢
さ：85

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離E マイルA 中距離A 長距離C

脚質適性：逃げA 先行G 差しG 追込G

成長率：速0% 体0% 力20% 根10% 賢0%

スキル：初期所有 逃げのコツ 勢い任せ

覚醒：Lv1 急ぎ足 Lv2 コンセントレーション Lv3
押し切り準備 Lv4 大逃げ

大逃げ（金スキル）作戦：逃げ 説明：レース序盤に先頭に立った時、とても大きなリードを作りやすくなる

下位スキル：ペースメイカー 作戦：逃げ 説明：レース序盤に先頭に立った時、わずかにリードを作りやすくなる

固有スキル：いよつ！逃亡屋！ 作戦：逃げ 説明：出遅れなくスタートに成功した場合、勢いに乗って速度を上げ続ける

サムシングブルー 初期能力（☆3時）

スピード：86 スタミナ：100 パワー：82 根性：100
賢さ：84

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離G マイルD 中距離B 長距離A

脚質適性：逃げB 先行A 差しA 追い込みB

成長率：速0% 体20% 力0% 根10% 賢0%

スキル：初期所有 徹底マーク 深呼吸

覚醒：Lv1 長距離直線○ Lv2 クールダウン Lv3 長距離コーナー○ Lv4 全身全霊

固有スキル：ハンティングチャンス！ 説明：最終コーナーにて好位置にいた場合狙いを定めて加速力を高める

シルクヴェール 初期能力（☆3時）

スピード：90 スタミナ：100 パワー：92 根性：94
賢さ：91

バ場適性：芝A ダートD

距離適性：短距離D マイルA 中距離A 長距離D

脚質適性：逃げG 先行C 差しA 追い込みB

成長率：速5% 体15% 力5% 根0% 賢5%

スキル：初期所有 差しのコツ 直線回復

覚醒：Lv1 直線巧者 Lv2 好転一息 Lv3 ペースアツ
プ Lv4 乗り換え上手

固有スキル：『It's my virgin road』説明：
レースが残り1000メートルを切ったときに後ろの方にいると、
ゴールまでいけるだけの体力がある場合ロングスパートをしかける。
バクソウオー 初期能力(☆3時)

スピード：123 スタミナ：78 パワー：120 根性：90
賢さ：70

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離A マイルB 中距離D 長距離G

脚質適性：逃げA 先行G 差しG 追い込みG

成長率：速30% 体0% 力0% 根0% 賢0%

スキル：初期所有 大きなリード 短距離のコツ

覚醒：Lv1短距離直線○ Lv2スプリントターボ Lv
3直線加速 Lv4圧倒的リード

短距離のコツ：短距離レースの時スピード上昇

固有スキル：暴走モード！突入！ 説明：レース中掛かってしま
うと後先考えずにスタミナが尽きるまで全力で走り続ける。(スタミナ
消費が非常に大きくなるデメリツト有)

育成イベント中獲得スキル：落着き× 説明：レース中に非常に掛
かりやすくなる。

メイクデビュー戦前にイベントで確定取得。スキルポイントで解
除不可だが評価値には影響を持たない変わったマイナスキル

マキシマムターボ 初期能力(☆3時)

スピード：91 スタミナ：95 パワー：90 根性：81 賢
さ：86

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離G マイルA 中距離A 長距離B

脚質適性：逃げA 先行C 差しG 追い込みG

成長率：速10% 体10% 力10% 根0% 賢0%

スキル：初期所有 勢い任せ 逃げのコツ

覚醒：Lv1先駆け Lv2脱出術 Lv3逃げコーナー
Lv4じゃじゃウマ娘

固有スキル：鋼鉄の逃亡者 説明：最終直線に先頭で入った時、スタミナに余裕があればあるほど力強く前に進む（速度と加速の複合スキル。スタミナ残量で効果量変化）

ターボエンペラー

初期能力（☆3時）

スピード：95 スタミナ：98 パワー：93 根性：81 賢さ：85

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離G マイルB 中距離A 長距離A

脚質適性：逃げA 先行A 差しA 追い込みA

成長率：速10% 体10% 力10% 根0% 賢0%

スキル：初期所有 末脚 コーナー回復

覚醒：Lv1人気者 Lv2全身全霊 Lv3威圧感 Lv

4円弧のマエストロ

人気者（新スキル）説明：緑スキル、人気が一番の時、実力を発揮し易くなる。（スピードステータス上乘せ）

威圧感（新スキル）説明：赤スキル、レース終盤で自分より前にいるウマ娘達の加速力をわずかに下げ、自分より後ろにいるウマ娘達の速度をわずかに下げる。

固有スキル：真の皇帝は並び立たない！ 説明：最終直線に入った時、道中でスキルが発動した数が多ければ多いほど速度を物凄く増加させる。（0～1個だとノーマルスキルレベル。2～4でレアスキルレベル。5～7でシンボリドルフの固有レベル。8以上でそのさらに上。ただし因子継承の場合は0～4でノーマルスキルレベル。5以上でレアスキルレベル止まり）

第3シリーズ 皇帝のキセキ 01話 皇帝入学

春、入学のシーズン。

1台の黒いセダンが中央トレーニングセンター学園の校門前につけた。

即座に運転手が下りると後部座席のドアを開ける。

「お嬢様、行ってらっしゃいませ」

「ああ、ありがとう。行ってくる」

高身長 of ウマ娘が運転手に礼を言って学園内に入る。

「……ここがトレセン学園か。お母様、貴女への誓い。私は必ず果たして見せます」

決意を新たにそのウマ娘は歩き出そうとした。

「わぷっ！」

……が、その瞬間何かにぶつかった。

「す、すまない。大丈夫か？」

それはとても小柄なウマ娘だった。

「あはは、こっちこそごめんなさい。憧れのトレセン学園に入れたのが嬉しくてよそ見しちゃってましたから。えっと……先輩……ですか？」

小柄なウマ娘が首を傾げたのは先輩と思わしきウマ娘の制服が明らかに新品だったからだ。

「いいや、今日入ったばかりの新生だ。私の名前はターボエンペラー。よろしく頼む」

「わあ！貴女とっても大きいのね。私も新生だよ！メロディーラインって言うの！よろしくね！」

「ああ」

同じ新生にはどうやっても見えないがターボエンペラーとメロディーラインは握手をした。

「さて、あまりのんびりしては式に遅れてしまう。早く講堂へ向かうとしよう」

「うん、そうだね」

二人は揃って……大柄なターボエンペラーが歩幅を合わせながら講堂へと向かった。

「歓迎ッ！諸君らは栄えある中央トレーニングセンター学園へと入学した！どの様なウマ娘を目指すのかは個人個人の思いがあるだろうが！切磋琢磨して素晴らしきウマ娘になる事を期待する！以上、理事長の秋川である！」

どうやら長い演説は嫌いらしい秋川理事長の簡潔ながらも的確な挨拶に拍手が送られる。

「続きまして生徒会長のシンボリドルフより入学生への挨拶です」

その言葉に何人かのウマ娘たちの声が聞こえる。

7冠と言う前人未到の榮譽を手にしたウマ娘シンボリドルフ。

その凜とした姿に憧れを抱くウマ娘は少なくない。

「あれが皇帝シンボリドルフ……」

その姿には運命的な何かを感じえないターボエンペラーだが、その目は憧れの存在を見つめる目ではなかった。

「今はまだ皇帝の名は預けておこう……。だがいずれ私のモノとさせてもらう！」

小さく、けれどもはつきりとターボエンペラーはそう言葉にした。

入学式が終わると教室へと移動し、自己紹介の時間となった。

「スカレットトランスよ。憧れのウマ娘はミスパーフェクトのダイワスカレット先輩よ。あの人みたいに1番は譲らないわよ」

明るい栗毛のウマ娘がそう強気に宣言をする。

大柄なターボエンペラーほどの身長がある訳では無いが、その発育具合は非常に良く、同年代よりも明らかに良い体をしている。

「メロディールーンです。こんなちっこい見た目ですけど飛び級じゃないですよ。一生懸命頑張りますので仲良くしてください」

可愛らしいメロディールーンに思わずクラス全員が笑顔になる。

大柄で大人びているせいで可愛らしいものと縁が薄かったターボエンペラーは一際表情が緩んでいる。

しかし自分の番が次である事を思い出すと表情を引き締めて立ち上がった。

「ターボエンペラーだ。体が弱かった為に競争ウマ娘になれなかった母の為に、そして自分の為にこの学園へ入った。目指す目標はまずはクラシック3冠を第1に狙っていききたいと思う」

その発言に教室の空気が変わる。

ここにいるのは才能の上澄みとも言えるウマ娘達ばかり。

思いは色々あるだろうが当然誰もがクラシック3冠を狙っている。あえて口にはしなかった自分たちの夢を、ただの第1目標と言い切ったターボエンペラーに様々な視線が絡みつく。

だがターボエンペラーはそれらをあえて無表情で受け流した。少なくとも退屈な学園生活にはならなさそうだと心の中で思いながら。

その後数人の自己紹介を終えた後、ホームルームの終了を教員が宣言して生徒達は各寮へと向かった。

「ここが美浦寮か。さて、同室は誰だろうか」

ターボエンペラーは事前に渡されていた寮の振り分けを確認しつつ中へと入っていった。

「よく来た新入生達、アタシは寮長のヒシアマゾン。気軽にヒシアマ姉さんとも呼んでくれ」

寮のロビーに集まった新入生達に寮長のヒシアマゾンがそう言つて笑顔を見せる。

「さあまずは寮の中を案内するよ。ついてきな」

新入生達はヒシアマゾンにゾロゾロとついていく。

寮の施設の説明や諸注意を終えるとヒシアマゾンは新入生の名前を次々と呼ぶと部屋番号が書かれた紙とシーツ類を手渡していった。「次、ターボエンペラー・・・こりやまたデツカイのが入ってきたね。ヒシアケボノよりデカイんじゃないか？つとすまない、話がそれたね。アンタの部屋は415号室だよ。相方は同級生じゃなくてお前の先輩だ。悪い奴じゃあ無いんだが色々と誤解を受けやすい奴でな。気を悪くしないで付き合っやってってくれ」

「分かりました。ありがとうございます」

シーツ類を受け取ったターボエンペラーは部屋へと向かった。

「失礼します。今日からお世話になりますターボエンペラーと申します。先輩のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします」

「ああ、（ヒシアマ姉さんから）話は聞いている。私はマキシマムターボ。（未熟な）私では（指導は）難しいだろうがよろしく」

部屋の中で「アナタもこれでコミュニケーション能力不足なのだろう真面目な表情で読んでいたマキシマムターボが雑誌を机に置いてそう答えた。

「・・・なるほど、そういう事ですか」

恐らく非常に不器用かつコミュニケーション能力不足なのだろうマキシマムターボの様子にターボエンペラーは苦笑した。

気難しい先輩では無いのはありがたいが気楽に打ち解けられる先輩でもなさそうなのは色々と大変かもしれない。

そんな事を考えながらシートを空いているベットに置いて振り返るといつのまにか共用のテーブルの上にコーヒーの入ったマグカップが2つ置かれていた。

もちろん砂糖とミルク付きで。

「・・・ありがとうございます」

「大した事ではないさ・・・」

言葉は少なく色々と不器用な先輩だが少なくとも本人なりに打ち解けようとしてくれているのだ。

私から拒絶してどうする。

ターボエンペラーはそう思いなおしてコーヒーを飲んだ。

その味は少し苦いがとても美味しかった。

翌日・・・。

「それではこれより第1次選抜レースを始める。名前を呼ばれたものからこちらに並ぶように」

選抜レース進行役のトレーナーが名簿を片手に次々とウマ娘を呼んでいく。

呼ばれたウマ娘は返事をするスタートラインに並び、お手伝いのウマ娘の合図でレースを開始する。

「早く私の番にならないかなー。ワクワク」

レースへの興奮を全身で表現するメロディールンについて、ターボエンペラーは顔を綻ばせてしまう。

良家故にどうしてもある程度は厳しくならざるをえない生活だったが、それでも決してガチガチの生活ではなかった。

しかし幼少期から大人びていた性格をしていたターボエンペラーに贈られる物は、どうしても可愛いからは縁が遠い物が多かった。

そんな中でも数少ない可愛い物が精巧に作られたビスクドールだけだった。

それもある程度の年齢になるとやはり貰うことは無くなり、可愛い物に若干飢えていた。

両親は流石に自分の娘が可愛い物が好きだという事は知っていたが周りの目もある為に中々プレゼントする事も難しかった。

その結果、行き処を失った可愛い物を愛でたいターボエンペラーの気持ちは未だに心の奥底でしっかりと燻ぶっている。

見た目も仕草も可愛いメロディールンは、ターボエンペラーのそんな気持ちを激しく刺激して堪らない。

そんな事を緩んだ頭で思っていると何やら下半身に違和感がおきた。

怪我をした様な事は無い筈だがと思って下を見ると黄色いシャツに黒いベストの男性が真剣な表情をしながら自分の足を無遠慮に触っている。

「これは凄い・・・頑丈な足にそれを支える見事な筋肉・・・強力な瞬発力を生み出すのに十分過ぎる力強さだけではなくここまでのはなやかさを併せ持っているなんて・・・」

「・・・何をしている」

蹴り飛ばすのは流石に問題があるだろうからと不審者の頭を驚掴みにした。

「あだだだだだだだだだ！」

「乙女の足を無断で触るとはどういうつもりか弁明があるのなら聞こう」

慌てふためいたりはいしないがそれでも流石に不機嫌になったター

ポエンペラーの容赦ないアイアンクローが男性の頭にめり込む。

「す、すまない！俺はこの学園のトレーナーの沖野だ！有力なウマ娘の足をみるとつい発作的に触ってしまうんだ！」

トレーナーの証であるピンバッチを指さしながら沖野トレーナーが必死に弁明する。

「そうか・・・一応この件は後で他の教員と相談させていただく。悪気がないとはいえ不愉快だ」

「う・・・また減給されるのか・・・」

痛む頭を抑えながら沖野トレーナーは去っていった。

「やれやれ・・・あのトレーナーに指導されるウマ娘が可哀想になってきた・・・」

「次！1番にアッシュストーリー、2番にディープモッド、3番にレミゼラブル、4番にエービオン、5番にフィルムコート、6番にディアフォン、7番にメロディールン、8番にターボエンペラー」

自分の番が来たらしく名前を呼ばれたターボエンペラーは色々あつて緩んでいた気持ちを引き締めると練習用コースに入っていく。

「一緒にがんばろうね」

「ああ、いいレースにしよう」

隣に並んだメロディールンに声をかけられ、先ほどの事もあつてかやつぱり気持ちがいレースに集中できなかつた。

「ヨーイ、スタート！」

その結果ターボエンペラーは出遅れてしまった。

「ここからアッシュさんの伝説が始まるツスよ！」

アッシュストーリーは得意の逃げをうった。

他のウマ娘も先行策なのかアッシュストーリーに続く。

数少ない差しを選んだメロディールンと出遅れたターボエンペラーが最後尾だ。

「このままぶつちぎってやるツス！」

アッシュストーリーがそう思った時だった。

ゾクリッ！

後ろから強烈なプレッシャーを感じたアッシュストーリーは後ろ

に視線を向けた。

すると他のウマ娘達も後ろからのプレッシャーを感じたのか全員後ろを見ていた。

「あ……」

そして、視線の先には獯猛^牙な笑^をみを浮^いかべた^たウマ娘^化が居た。

「大丈夫！アツシユさんの足なら十分に逃げ切れ……る？」

慌てて前を向いて全力疾走しようとしたアツシユストーリーの目に信じられないモノが映った。

「何で前に居るツスか!? さっきまで後ろに居たはずツスよね！」

自分の前を走るウマ娘^化。

つい先ほどまで一番後ろに居たはずのウマ娘^化が、逃げ足自慢の自分を置いてどんどん先に進んでいる。

「認めないツス！認めないツスうううううううううう！」

もう後半の事なんてどうでもいい！

今ある全力で前を走るウマ娘^化を打ち倒す！

そんな気持ちとは裏腹にウマ娘^化の背中中は小さくなっていった。

秀才では本物の天才^化には敵わない。

そんな光景をマジマジと見せつけられたレースとなった。

「凄いわね……あの子……」

「あの出遅れからあそこまで突き放すなんて……」

新入生のスカウトに来ていたトレーナー達がざわつく。

「早すぎて逃げに見える、ウチのマルゼンスキーと同じね」

「違う……そうじゃない……」

チームリギルを率いる東条トレーナーの言葉に沖野トレーナーが口を開けたままそう呟いた。

「あら、沖野君。どういう事かしら？」

「俺はいつもの癖であいつのトモを触ったんだが……」

東条トレーナーはまたなのねと額に手を当てたがとりあえず話を聞くことにした。

「頑丈な骨格を支えるしつかりとした筋肉、僅かに違和感があったが差し、追い込み向きの脚だと思っていた。だがあの走りは完全に逃げ

の走りだ」

「差しや追い込みが得意なウマ娘だって逃げをしない訳ではないわよ」

実際に自分の可能性を広げるためにあえて苦手な走りをするというウマ娘はある程度居る。

「だがそれは逃げっぽい走りであって本当の逃げの走りじゃない。どう足掻いても本物の逃げとは似ても似つかない。けれどもさっきの走りは本物の逃げの走りだった……。」

その言葉に東条トレーナーの表情が変わった。

「沖野君、何が言いたいのかしら？」

「さっき言った違和感なんだが実は少しだけ心当たりがある……その違和感を感じた事があるウマ娘は俺の中でもたった2人だけ……マヤノトップガンとサムシングブルーだ」

「……脚質自在、まさに才能の塊ね」

学園No.1チームを率いる東条トレーナーでさえ冷や汗を隠せない。

「さらに付け加えれば恐らく彼女の才能は先ほどの2人を上回ると私は見えています」

「桐生院トレーナー……」

2人の元に桐生院トレーナーがやってきた。

「私は彼女の母親を知っています。まだ私が幼い頃、桐生院家前頭首、私の御爺様が指導に当たっていたウマ娘、クイーンダイアナ。恵まれた体躯に抜群のスタミナを持っていた彼女は残念ながら競争ウマ娘にはなれなかった……」

「……何かあったのね」

「はい……彼女の足は……強すぎる自身の脚力に耐え切れなかったんです……もし骨がぜい弱でさえなければ無敗の3冠は勿論、それ以上の偉業を成し遂げていただろう。御爺様は晩年そう語っていました……」

「まさに至高のウマ娘……それ故に指導するとなると並大抵の覚悟じゃあ無理だな……」

沖野トレーナーの言葉に2人は肯いた。

「脚質自在のウマ娘を指導するのは簡単では無いわ・・・そこにくわえてあれだけの才能ともなれば・・・」

「下手な指導をすれば逆効果・・・トレーナーとしての資質を疑われてしまいますね・・・」

恐るべき才能のウマ娘を目にしたトレーナー達は唯々驚愕するだけだった。

「ふう・・・」

息一つ乱さずにターボエンペラーは深呼吸をした。

そんな様子を見た一緒に走っていたウマ娘達は息も絶え絶えの状態で絶望の表情をしていた。

ただ1人を除いて。

「エンペラーさんすごい！私もあんな走りをしてみたい！」

そこには憧れの視線を隠そうともしないメロディールーンが居た。

「いいや、私の走りはまだまだだ。今はただ力任せの強引な走りに過ぎない。これではいざ勝てなくなる」

ターボエンペラーはそう自分の走りを評価した。

「なら私ももっともつと強くなる！エンペラーさんと一緒に走れるくらいに！」

「ああ、その時を楽しみにしているよ」

ターボエンペラーが差し出した握手をメロディールーンは笑顔で握り返した。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 02話 鍛錬の日々

先日行われた選抜レースの結果を受けて多くのトレーナーが次々とウマ娘達に声をかけていく。

特に注目を浴びたのは圧倒的な走りを見せたターボエンペラーだったが、そのあまりの才能に気後れしたトレーナー達は声を掛けられずに居た。

チームリギルを率いる東条トレーナーでさえターボエンペラー獲得を悩んでいる。

何人か声を掛けるトレーナーも居たが、ターボエンペラー自身がトレーナー達に魅力を感じず返事を保留している状態だった。

そんな状況で早いものは既にチームに所属してトレーニングを受けているがターボエンペラーは一人で自主トレーニングを続けた。

「はっはっはっはっ！・・・ふう」

ジョギングを終えたターボエンペラーは大きく息をついた。

「自己流では限界がある・・・早くトレーナーを見つけなければならぬが・・・」

声を掛けてきたトレーナー達はどれも魅力に欠けた。

彼らのチームは良くて一流半といった所で恐らくターボエンペラーの才能を見てそれにあやかろうとしているのだろう。

「やはり現状No.1のチームリギルか・・・あのトレーナーには些か不安だが才能の塊のチームスピカだろうか・・・」

逆オファーを掛けるべきかどうかとターボエンペラーが悩んでいた時だった。

「うむ、惜しい。実に惜しい」

特徴のある男性の声ができる方を向くとそこには初老の男性が立っていた。

「貴方は・・・？」

「素晴らしい才能を持ち合わせてはいるが、己の中のケモノを御しきれんとは実に勿体無い」

男性はターボエンペラーの問いには答えずそう告げた。

「ケモノ・・・」

「そのままではたとえどんなトレーナーの指導を受けようとも、遠からず己のケモノに内側から食い殺されるだろう」

そう言つて男性はターボエンペラーを見つめる。

ターボエンペラーもまた男性を見つめる。

「それはつまり、自分ならそのケモノを御する方法を指導できると？」

「はっはっはっ！そんな大それた事なんぞ出来るものか。己の中のケモノを御するのは己しかあるまい」

「ではなんだと言うのだ！」

愉快そうに笑う男性にターボエンペラーはやや苛立つ。

「怒るな怒るな。ケモノを御する方法を教えてやる事は出来ん。だが手助けならしてやろう」

「・・・本当にできるのか？」

「無論、こいつは久方ぶりに腕のなる相手に出会えたわい」

ターボエンペラーは男性の目が恐ろしいほど真剣にこちらを見つめている事に気が付いた。

「・・・ターボエンペラーだ。ご指導ご鞭撻をお願いします」

「元チームベガトレーナーの大塚だ。チームは弟子に譲ったがこれでも嘗てタマモクロスという怪物を生み出した男だ」

こうしてターボエンペラーは大塚トレーナーの指導を受ける事になった。

「さて、まずは目標を定めるとしようか。何を目指したい？」

チームルームは弟子に譲ってしまったらしいのでトレーナールームでの作戦会議となった。

「ジュニア期は特にこれと言った目標は無い。できれば朝日杯かホープフルには出ておきたいところだ。そしてクラシック3冠は確実に取りに行きたい」

「ふむ・・・そこはあくまで通過点と言うわけか。最終目標は？」

「・・・皇帝の名前を手に入れる」

その言葉に大塚トレーナーは野心的な笑顔を見せる。

「ほう、シンボリルドルフを超えると言うか。仮に7冠を達成したとしても厳しいぞ？それ程までにアヤツは絶対的だ」

勝利した数で言えば世紀末霸王と呼ばれたテイエムオペラオーも同数だ。

しかし絶対的王者として君臨しているのはシンボリルドルフである。

なぜならテイエムオペラオーは遅咲きであり、シンボリルドルフとは違い活躍できた期間が短い。

一方のシンボリルドルフは無敗の3冠に始まり、16戦の内敗北はたったの3回。

それ故に同じGIの勝利数を持ってしてもシンボリルドルフを超えられなかったのである。

「8冠以上を取れば！」

「可能性はあるだろうな。だが世論はそれほど単純ではないぞ？シンボリ家の血筋ではな」

「・・・知っていたのか」

「お主が思っておるより世間とは狭いものよ」

ターボエンペラーはシンボリルドルフと同じシンボリ家の血を引いている。

「くそーこの血を忌々しく思った事はあれど感謝した事など一度も無い！」

「お主の母君か・・・」

シンボリ家出身でありながらシンボリの名を与えられなかった母、クイーンダイアナ。

脆弱な娘などシンボリ家に相応しくないとばかりの態度はクイーンダイアナにとって屈辱的だった。

それでも腐らず、決して自分に重責を負わせないように育ててくれた母に感謝はしている。

シンボリルドルフへの強い思いは単なる自分の自己満足にすぎない。

だがそれすら敵わないともなればどうしたらよいのか最早分から

なかった。

「お主とシンボリ家の血は切つても切り離せないものだ。だがそんなシンボリ家が唯一達成できていない成果を上げればお主個人に目を向けさせる事もできるかもしれない」

「それは一体・・・」

「日本がまだ1度しか手にした事が無い至高の榮譽、凱旋門賞だ」

それはチームスピカのゴールドシップがたった一度だけ達成した日本競《font:ui40》馬《font》界の悲願。

「だがゴールドシップの評価は・・・」

「うむ、アヤツは国内の成績はそこまで良くないからな。まあマキシムターボという最大のライバルが居たのも理由なんだがな・・・」
お互いに勝つたり負けたりしていた為に完全に評価が割れてしまい、どちらも皇帝ほどの絶対王者といった雰囲気にならなかったのも大きい。

偶然ゴールドシップが勝った。

世間にはそう思われてしまったのだ。

「だからこそだ。たった一度の偶然ではない完璧な凱旋門賞制覇。それがお主の下克上への道だ」

「偶然ではない・・・完璧な凱旋門賞制覇・・・」

その言葉はターボエンペラーの胸にスツと入ってきた。

「目指します。完璧な凱旋門賞制覇を・・・」

「うむ、ではまず早速やるべき事があるぞ」

そう言つて大塚トレーナーは何やら意味ありげな表情をした。

『しばらくは体を鈍らせない程度のトレーニング以上のトレーニングは禁止だ。少し準備が整うまで勉強でもしとれ』

そう言われてしまったターボエンペラーは渡されたトレーニングメニューを終えると手持無沙汰になってしまった。

何もしないのも落ち着かないので仕方がなく図書室でレース教本やフランス語入門書などを読んでみる。

レース教本は為にはなるが読めば読むほど走りたくなってしまうし、フランス語はボソボソとした発音が何とも気になる。

早く本格的なトレーニングがしたいと思いつつながら数日過ごした。

「待たせたな。相手方の都合がようやくついたのだな」

「初めまして。インパクトターボです。よろしくね」

「初めまして。ターボエンペラーです。こちらこそよろしくお願いします」

大塚トレーナーが連れてきたのは少し小柄なウマ娘、運命的な何かを感じるインパクトターボ先輩だった。

「それでは早速並走するぞ。距離は2000だ」

「はい」

練習用コースのスタートラインに二人は並んだ。

「ヨーイ、スタートー！」

「ツシー！」

大塚トレーナーの合図と同時にインパクトターボが飛び出した。

ターボエンペラーもそれを追う形で走っていく。

前を走る存在が居る。

その光景がターボエンペラーは許せない。

『走れ！追い抜け！何者にも負けるな！』

内側から膨れ上がる衝動に任せて足を速める。

流石に先輩だけあって中々追いつけなかったがそれでもコースの中頃には追い付く事が出来た。

だが抜けない。

必死に前に進もうとするが並ばれる事を嫌がって速度を上げたインパクトターボを追い抜けない。

『その程度か！』

「私は！負けない！」

内なる声に押されてさらに力を込めて前に進んだ。

「どうだ！」

ついにコース終盤で抜く事に成功した。

しかしそこまでだった。

「え!？」

抜いたと思った瞬間、足から力が抜けた。

転倒する事は無かったが速度はどんどん落ちてゆく。

結局抜き返されてゴールする事になった。

「それがお前の弱点だ」

「何故・・・2000なら走り切れるはずなのに・・・」

「エンペラー、私がちよつとずつ速度を上げてた事に気が付いてた?」

「え・・・?」

インパクトターボの言葉にターボエンペラーは顔を上げた。

「エンペラーの走りは確かに凄いよ。でも走りに余裕が無すぎる。

私のペースに無理に合わせて逃げようとするから明らかに余計なスタミナを消耗してるね」

「その通りだ。インパクトターボのペースを追い抜こうとしてお前はペースを自分で乱している。それではいかに優れた才能を持っているようとも無駄だ」

「し、しかし私は!」

「最初から最後まで一番は譲りたくないよね。私もそうだから分る分る」

インパクトターボの言葉に味方を得たと思ったターボエンペラーは大塚トレーナーを睨む。

「だからこそ自分のペースを自分で乱しちゃ駄目だよ。全体のペースを自分が掌握してやらなきゃ」

「あ・・・」

その言葉にターボエンペラーは思い違いをしていた事に気が付いた。

「エンペラー、私は大逃げしかできないウマ娘だけど、それでもレース毎に作戦を変えてるんだ。貴女は私なんかより凄い才能を持ったウマ娘だって大塚トレーナーから聞いてるよ。同じ逃げでも色んな作戦がある。さらには貴女には逃げ以外の作戦だってある。それを潰しちや駄目だよ」

「・・・はい!」

明らかに今までと表情が変わったターボエンペラーに大塚トレーナーは口角を上げた。

「さて、今後のトレーニングの予定だが・・・俺の弟子のチームに合同練習の手伝いを頼んである。お前にとっても有意義な練習になるからしつかり学べ。お前の中のケモノに負けないようにな」

「分かりました。インパクト先輩、ありがとうございました！」

「ふふ、がんばってね」

インパクトターボの差し出した右手をターボエンペラーは強く握った。

「本日より合同練習に参加させていただくターボエンペラーです。ご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします」

「大塚先生より話は聞いています。私は新井と言います」

まだまだ若い新井トレーナーがそう言って頭を下げた。

「トレーナーちゃん、マヤも挨拶したいな」

「ああ、すみません。こちらは私が指導しているウマ娘のマヤノトップガンさんです」

「アイハブ、初めまして。マヤノトップガンです」

新井トレーナーが紹介したのは小柄なウマ娘のマヤノトップガンだった。

「初めまして、私はターボエンペラーです」

「おつきくていいなあ・・・。マヤもこれぐらいおつきかったら大人の女として魅力的になれるかなあ？」

「えっと・・・」

「すみません、マヤノさんは大人の女性に強い憧れがありました」

「なるほど、マヤノ先輩、大人の女性の魅力とは身長が大きいからと言ってなれる訳ではありません。知識と経験、その二つがとても重要です」

ターボエンペラーはとりあえず無難な返答をする事で話を進めようとした。

「知識と・・・け、経験!?!」

ボフンツ！と、音が聞こえてきそうぐらいにマヤノトップガンは顔を真っ赤にした。

「や・・・やっぱりエンペラーちゃんは大人の女なんだね・・・」

「・・・何か非常にまずい勘違いを与えてしまったみたいですね」
「すみません・・・思春期特有のものですから・・・」

私の方が後輩のはずなのだが・・・と、ターボエンペラーは途方に暮れてしまった。

その後、どうにか落ち着いたマヤノトップガンとターボエンペラーはトレーニングコースにやってきた。

「まずは芝2000で並走をしましょうか。マヤノさん、走り方は任せますよ」

「アイコピー、マヤにお任せ!」

二人はスタートラインに並んだ。

「ヨイ、スタート!」

新井トレーナーの掛け声と共に二人は走り出した。

マヤノトップガンは差しか追い込みを選んだのか前を走ろうとはしなかった。

「相手にペースを握らせず・・・自分のペースで走りきる・・・」

ターボエンペラーはインパクトターボの言葉を思い出しながら前を走る。

今まで兎に角速く走る事しか意識してこなかったが自分のペースを探して迷いながら走るターボエンペラーは走り辛さを感じていた。

「マヤ分かっちゃったかも!」

レースも終盤に差し掛かった辺りでマヤノトップガンが未だに戸惑い気味のターボエンペラーを追い抜こうと足を速めた。

「くっ!させるか!」

ターボエンペラーも抜かせまいと足を速める。

『お前はどの程度でいいのか?』

「だまれえええ!」

内なる声を振り切るようにターボエンペラーは叫びながら走り切った。

2人は並んだままゴールした。

「何かずいぶん走り辛そうな様子でしたが・・・」

「それは・・・その・・・」

誰かに頼る事が苦手なターボエンペラーは言葉にできなかった。

「トレーナーちゃん。マヤ、エンペラーちゃんの事分かっちゃったかも」

「マヤノさん、何が分かったのですか？」

「エンペラーちゃんはマヤと同じ脚質だと思うの。だけど今までそれを知らなかったから違う走りを試そうとして頭と体が混乱しちやってるんだと思うんだ」

マヤノトップガンはそうターボエンペラーを評価した。

「マヤノさんと同じ脚質・・・なるほど、先生が気に入る訳です」

「では私は追い込みが得意なのですか？」

先ほどのレースを思い出しながらターボエンペラーはそう尋ねた。

「いいえ、マヤノさんの脚質は自在・・・全てが得意というまさに天才型とも言えるべき脚質です」

「脚質自在・・・」

今まで積んできた練習は全て逃げのものだった。

いきなり全ての脚質が得意だと言われても戸惑ってしまう。

「大丈夫です。先生も私も自在脚質の指導には慣れていきます。いきなり全ての戦術はできなくてもいいんです。一つ一つしっかりと練習していけば必ず勝てる様になります」

「・・・よろしくお願いします」

ターボエンペラーはこの時初めて真剣な気持ちで指導を受ける気持ちになった。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 03話 ケモノの衝動

大塚トレーナーの指導を受けながらターボエンペラーは学園生活を楽しんでいた。

当初ライバル心剥き出しだったクラスメイト達とも少しずつ距離感を掴み、友人もできた。

チームスピカに所属した勝気なスカーレットランス、小柄な体で頑張るチームカノープス所属のメロディールーン。

そしてチームリギルに所属したゴールデンドライブとゴールデンマキシマである。

名前もよく似た二人は遠い親戚にあたるらしい。

「よう、デビューおめでとさん」

「ブッチギツタらしいな」

性格もどこか似ている二人から祝福の声をかけられた。

「ああ、ありがとう」

「やっぱりエンペラーちゃん強かったあ・・・」

本当に偶然にもデビュー戦が重なったメロディールーンが項垂れている。

「寧ろちよつとデビューが早すぎたと私は思うわよ」

スカーレットランスの言う通り小柄なメロディールーンにデビューはまだ早かったと誰もが思った。

「でもエンペラーちゃんと戦うには今デビューしないと・・・」

「それにしたって早えな」

「ギリギリまで粘ったって悪くはないと思うぜ」

「皆イジワルう・・・」

ゴールデンドライブとゴールデンマキシマにそう言われてメロディールーンはちよつと拗ねてしまった。

「まあまあ、私は嬉しかったぞ」

そう言ってターボエンペラーはメロディールーンの頭をヨシヨシ

と撫でる。

やっぱりメロディールーンにデレデレなターボエンペラーだった。授業を終えたターボエンペラーは、大塚トレーナーの指導の下、新井トレーナーのチームメンバーと合同練習を重ねる。

新井トレーナーも師匠の指導を改めて見ながら自分の指導するウマ娘たちに様々な指導をする。

「どうでしょうか・・・?」

「まだまだケモノが抑えきれておらん。今のままでは無理に押さえつけるよりそのまま走ったほうがマシだな」

明らかにペースが安定せずタイムも遅れている様子に大塚トレーナーはそう言った。

「そうですか・・・」

「そう焦るな。お前が打ち倒すべき相手と見ているシンボリドルフですら己の中のケモノを御するのは簡単では無かった。無理矢理押さえつけるのでは無い。必要な時まで息を潜め、そして開放できるようにするのだ」

「はい!もう一本行きます」

「やれやれ・・・。少し真面目が過ぎるな・・・」

返事をしてもう一度コースに向かうターボエンペラーを見て大塚トレーナーはそう零した。

「今のままでは2000はちと厳しいな・・・。適性からやや外れるが朝日杯の方が良いだろうな」

2000でも走り切れない事は無いだろう。

だが万全を期する為に敢てマイルレースを選択する事にした。

そしてレース当日・・・

「いいか、今日は無理にケモノを制御する必要は無い。今のお前にはケモノを抑えたまま勝利するのは不可能だ。まずは1冠、これを目標としろ」

「はい!」

控室で大塚トレーナーの言葉にターボエンペラーはしっかりと返事をした。

「3 枠 4 番、ターボエンペラー、2 番人気です」

「これは中々攻めた意匠の勝負服ですね」

ジャージを脱いだターボエンペラーの勝負服が観客の目に映る。

黒を基調とした日本軍の勲一等正装によく似せた上着に黒いスカートを翻る。

足は黒いタイツで覆われ軍靴を履いている。

流石に制帽までは被っていないがそれでもキリつとしたターボエンペラーの表情も相まって非常に格好いい。

多くの観客から歓声が上がった。

ターボエンペラーはそのまま一礼するとジャージを拾ってステージ裏に戻った。

「・・・まずは1冠・・・抜かるなよ・・・ターボ・・・」

通路を歩くターボエンペラーはそう小さく呟いた。

「さあ、朝日杯フューチュリティステークス、デビューしたばかりのウマ娘達が初めて挑むGIレース。早くも頭角を現している本日走ります15人。果たして誰がGIの栄冠を掴むのでしょうか。出走ウマ娘を振り返ってみましょう。1 枠 1 番、クリタアウディー。東京スポーツ杯に出走経験があります。2 枠 2 番、1 番人気アランミリアリア。サウジアラビアRCを勝利しております。2 枠 3 番、アウターペガサス。函館ジュニアステークスを勝利しています。3 枠 4 番、2 番人気ターボエンペラー。見事な体躯のウマ娘。重賞初出場ですがデビュー戦からの圧倒的走りに期待がかかっています。3 枠 5 番、マイネルサービス。果たして実力は如何に。4 枠 6 番、3 番人気アドマイヤカース。デイリー杯ジュニアステークスを勝利しています。4 枠 7 番、シユガーフブキ。未勝利戦を勝ったばかり、果たして重賞初制覇なるか。5 枠 8 番、デイープダイビング。レース経験は豊富です。5 枠 9 番、レッツクーラー。こちらもレース数では負けていません。6 枠 10 番テラベール。レース経験を生かせるでしょうか。6 枠 1 番、テイデンスクール。新潟ジュニアステークスを勝利しています。7 枠 1 2 番コバノマーフィン。中々厳しい成績と言わざるをえません。7 枠 1 3 番、ニホンピロタイソン。2 戦 2 勝でGI挑戦で

す。8 枠14 番、フアンタジースター。小倉ジュニアステークス、京王杯ジュニアステークスと重賞を制覇しております。8 枠15 番、エメラルドファイ。ちょっと厳しいかもしれませんが。以上本日出走の15 人でした。まもなくゲートの準備が終わります」

やがてゲートの準備が終わり、スターターの旗が振られてフアンファーレが響き渡る。

多くの観客の歓声が競《font:ui40》馬《font》場を震わせる。

そんな熱気に出走するウマ娘達の緊張とやる気が最高潮に達する。ウマ娘達は係員に促されて次々とゲート入りをする。

「体制完了。・・・スタートしました。ほぼ揃いましたまずは先行争いと言ったところ。アランミリアリア好スタート好ダッシュですがこれを外から9 番のレッツクーラーが追い抜きます。さらには4 番のターボエンペラーも追い抜いて先頭を狙います」

今日は内なる衝動を抑えきらなくてもいい。

やはりレースは血が滾る。

ここが私の居場所だ！

『だからそこをどけ！』

「ひい!？」

「ああ!？レッツクーラーが何かに怯えてコースを逸脱！足が竦んでしまったのか走るのを止めてしまいました!」

先頭を走ろうとしていたレッツクーラーが外に逃げてしまったのでターボエンペラーが先頭になった。

「先頭変わりました4 番のターボエンペラー!2 番手にはアランミリアリアという体制になりました!3 番手外にアドマイヤカーズ!1 番クリタアウディーと続いています!その後ろ8 番ディープダイビング!内に3 番アウターペガサス!外に14 番フアンタジースター!続いて10 番テラベル!あとは5 番のマイネルサービス!まもなく第3 コーナー回っていきます!外から13 番ニホンピロタイソンが押し上げていこうかと言うところ!12 番コバノマーフィンもそれを追走!その後ろに11 番ティデンスクール!15 番エメラル

ドファイと7番シュガーフブキが最後方！9番レッツクーラーは競技を中止しています！」

『走れ！走れ！走れ！』

ターボエンペラーは内から湧き上がる衝動に身を任せて走り続けている。

今はまだお前の自由にさせてやる。

だが必ずお前を制御しきってみせるぞ！

ターボエンペラーはそう強く誓うと前を向いてさらに加速した。

「まもなく残り800メートル！先頭は変わらずターボエンペラー！タイムは46秒後半です！4コーナーへ向かいますリードは3バ身！2番手単独のアランミリアリアですが少し表情が険しいか!?その後ろ2バ身に3番手のアドマイヤカーズこちらも何やら様子がおかしい！ターボエンペラーの猛烈な走りに気圧された様子！」

『もつと！もつとだあ！』

「はあああああ！」

ターボエンペラーはスパートをかけた。

「第4コーナーをカーブして直線に入ります！先頭は4番のターボエンペラーのまま！外から6番のアドマイヤカーズも懸命に上がろうとするが伸びません！ターボエンペラーがどんどん突き放す！3バ身！4バ身！どこまで引き離すんだ!?5バ身と少し離れたところでゴールイン！圧倒的走り！まさに横綱相撲！他者を寄せ付けませんでした！」

圧倒的なターボエンペラーの走りを見て多くの観客が歓声を上げる。

「・・・ふう」

ターボエンペラーは大きく息を吐くと表情を引き締めて右腕を高く上げた。

「凄い走りだったな」

「噂じゃシンボリ家の血筋らしい」

僅かに聞こえてきたその言葉にターボエンペラーは歪みそうになる表情を懸命に堪えた。

こんなものではまだ認めて貰えない。

そんな思いを抱いたままターボエンペラーはライブの為に控室に戻った。

「ふむ、勝ちはしたが納得していない様子だな」

「トレーナー……」

控室で顔を洗っていると大塚トレーナーがそう声をかけた。

「こんな事で腐っている暇はないぞ。お前の野望を達成するにはまだ一歩目に過ぎんぞ」

「分かっています」

ターボエンペラーは気持ちを静めるとライブの準備に向かった。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 04話 能鷹隠爪

朝日杯が終わり、ターボエンペラーは冬休みを実家で迎えていた。競争ウマ娘としては活躍できなかった母クイーンダイアナは半ばシンボリ家を追い出されるような形で父の元へと嫁いできた。

シンボリ家の為の政略結婚の様なものだったが、幸いにも父との仲は悪くない。

最も忙しくて中々家に帰ってこれない父に母は若干不満があるようだが……。

「折角のお正月をエンちゃんを迎えられないなんてあの人も薄情ね」

「あはは……」

海外で大きな取引がある為にどうしても帰る事が出来ないとと言われてちよつとむくれた母にどう接すれば良いのか分からず愛想笑いで乗り切るターボエンペラー。

「エンちゃん、貴女もよ。偶には顔を出しなさいって言っていたのに戻ってきたのは今日が初めて。レースの為にトレーニングが大切なのは私も分かっているわ。でもね、思い詰めないで欲しいの」

先ほどまでの不満げな表情から一変して心配そうにターボエンペラーを見つめる母。

「確かに私は競争ウマ娘になれず、シンボリ家から追い出された様に見えるかもしれない。でも私の父も母も私を愛していないなんて事はない。貴女には貴女の為に走ってほしい。私を理由に無理をしないで欲しい。そんな走りをしては、一緒に走る娘達に失礼だわ」
「お母様……」

「まあ、そんな事を言って変わる貴女じゃ無い事は良く知っているわ。だって私の娘ですもの」

私自身が諦め切れなかったから……。

そう言いたげな母の表情をターボエンペラーはただ見つめるしかできなかつた。

冬休みが明けた直後のトレーニング……

「何か吹っ切れる切っ掛けでもあったようだな」

「・・・そう・・・かもしれませんね」

休み明けのトレーニングの指導をしていた大塚トレーナーの言葉にターボエンペラーはそう答えた。

「お前はまだ若い。今までの真実が実はただの思い込みだった、なんて事はいくらでもある。前より表情にも、走りにも余裕が出来ている。いい傾向だ」

大塚トレーナーの表情が非常に明るいものになっている。

「私は・・・どこまで行けますか？」

ターボエンペラーの表情は、今までの成さねばならないと言う思いつめた様な表情から、どこまで自分で行けるのかという前向きな表情になっていった。

「はつきりした事は言えんよ。だが、お前ならばクラシック3冠は勿論、凱旋門賞も手中に収められると俺は確信している」

大塚トレーナーの言葉にターボエンペラーは力強く頷いた。

そして弥生賞・・・

「さあ、クラシックレース皐月賞のトライアルレース弥生賞。本日のレースを走ります11人のウマ娘達、1番人気は朝日杯を圧倒的な走りで勝利いたしました5枠5番のターボエンペラーです」

ターボエンペラーは控室で鏡を見つめていた。

「・・・大丈夫だ。必ず制御しきって見せる」

ターボエンペラーはそう呟くと控室を後にした。

「さあ、各ウマ娘のゲートインも完了いたしました。・・・スタートしました。先行争いですが好スタートを切ったラストドライブとヒガシノデイジー、さらにカントールが行きます。4番手には1番人気のターボエンペラーがつけています。初めて先頭を譲りましたターボエンペラーです」

大塚トレーナーから先頭を譲るような指示は出されていなかったが、この展開は好都合とターボエンペラーはあえて抜こうとしなかった。

『走れ！追い抜け！』

「黙れ・・・お前の出番は今じゃない・・・」

ターボエンペラーは内側から湧き上がる声を懸命に押さえつける。まだ抑えきれているとは言いい切れないが、それでも突き動かされるような衝動は少しだけ小さくなった。

「向こう正面先頭は変わらずラストドライブ。すぐ後ろ2番手に上がってきたました6番バンクドミンゴ。少し離れて3番手にカントール。4番手にヒガシノデイジーと外に並ぶようにターボエンペラー今日は抑えています」

『早く行け！』

まだまだ！

『負けていいのか!!』

まだまだ!!

『その程度なのか!!!』

「黙れえええ!!!」

「残り600メートルを切ったところでターボエンペラーが仕掛けました！物凄い勢いでコーナーを曲がります！ヒガシノデイジーもそれにつられて上がっていきます！先頭ラストドライブ懸命に逃げるがここで力尽きたか先頭を交代！さあ最後の直線に入ってきました！先頭は一気に抜き去りましたターボエンペラー！他のウマ娘達も懸命に走りますが明らかに実力が違います！先頭ターボエンペラーがどんどん突き放す！4バ身開いたところでゴールイン！力の差を見せつけましたターボエンペラーです！」

「・・・まずまずだな」

「・・・抑えきれませんでした」

レース翌日の反省会。

ターボエンペラーはレースの様子をそう振り返った。

「だがあそこからの仕掛けで突き放すだけの能力がお前にある事は分かっただろう？」

「はい」

今まで先頭を走らなければならぬと思っていた。

早く走る事が自身の証明だと思っていた。

「いいか、ただ押さえつけるだけじゃない。必要な時まで獲物に悟ら

れないように爪を隠すんだ。鷹の様にな」

「爪を隠す．．．はい！」

ターボエンペラーは強く頷いた。

そして迎えた皐月賞．．．。

「さあ！今年もやってきましたクラシックレース第1戦目皐月賞！今年はこのウマ娘がこのレースを制するのか！今日出走するウマ娘達を紹介いたします！1枠1番アドマイヤカーズ！朝日杯の逆襲なるか！1枠2番サトノルーデル！初めての重賞が皐月賞です！2枠3番ファンタジースター！京王杯を1着です！2枠4番ダノンキンブリー！3戦無敗のウマ娘！3枠5番ターボエンペラー1番人気です！こちらは無敗のウマ娘！朝日杯1着です！」

3枠6番クラージュゲリラ！ラジオNIKKEI杯1着です！4枠7番ヴァロックス！若駒ステークス1着です！4枠8番ヒガシノデイジー！東京スポーツ杯1着です！5枠9番メイショウデンゲン！弥生賞2着です！5枠10番シユバルツリーズ！少ないレースがどう響くのか！6枠11番ラストドライブ！京成杯1着です！6枠12番サートウルマリア2番人気です！ホープフルステークス1着の無敗ウマ娘！ターボエンペラーとどちらが無敗の皐月賞ウマ娘になるか期待がかかります！7枠13番ブレイキングボーン！苦難の道のでした！7枠14番ダンディマインド！レース経験は豊富です！7枠15番クリタアウディー！実力的にはもう少しと言ったところか！8枠16番ダガメディアマンタ！こちらもやはり厳しいか！8枠17番アドマイヤフェスタ！ホープフルステークス2着！逆襲なるか！8枠18番ノーマンマ！門別トレセン学園からの編入生です！以上18人フルゲートです！」

ステージでの衣装披露が終わるとターボエンペラーはターフへと移動した。

「これが皐月賞の空気．．．」

朝日杯の時よりもさらに大量の観客が客席を埋め尽くしている。

あの時ですら重い空気だったのがさらに重くなった空気がターボエンペラーに押し掛かる。

「能鷹隠爪・・・お前を殺す訳じゃない。獲物が欲しければ殺気を封じるんだ」

教えられた言葉を胸に、ターボエンペラーは胸の底で蠢く自分の衝動にそう話しかけた。

「さあ、全員が綺麗にゲートに収まりました。・・・スタートしました臯月賞！好スタートを切ったのは12番サートウルマリア！ダノンキンブリーも好いスタートでしたが先に行くのは14番のダンディマインド！クリタアウデーも3番手まで上がってきました！ダノンキンブリーは4番手！アドマイヤカースがその後ろにつけまして最内側！その隣に5番のターボエンペラーが居ます！そのさらに外に7番のヴァロックス！まもなく向こう正面です！」

ターボエンペラーは狙った通りの位置で走り続ける。

『まだか？』

まだ始まったばかりだ。

今日は弥生賞の時よりも大人しい。

おかげでペースが乱れずに済む。

『早くしろよ・・・お前も我慢が辛いだろ？』

「いいや・・・寧ろ心地良い！」

余裕の無かったあの時では分からなかったレースの楽しさ。

それが今ターボエンペラーにも漸く分かり始めてきた。

「さあ・・・決めるぞターボ！」

レースは半分を過ぎて終盤へと向かっていく。

「さあ3、4コーナー中間を回って先頭はダンディマインド先頭か!?残り400を切りました！」

「行くぞ！『狩りの時間だ！』」

ターボエンペラーは衝動を開放した。

先ほどまで冷静だった表情が獯猛に歪んだ。

「間を抜けて飛び出したのはターボエンペラーです！ターボエンペラーが第4コーナー終盤で一気にトップに躍り出た！7番のヴァロックス！その外から12番のサートウルマリアもすごい脚で追いつけるが全く追いつきません！引き離す！ターボエンペラーが完全

に後ろを引き離す！ヴァロックスもう一度懸命に上がる！サートウルマリアも必死の形相で追い上げる！しかし完全にターボエンペラーですゴールイン！無敗の皐月賞ウマ娘はターボエンペラーが奪い取りました！見事な走り！見事な勝利！皇帝の軌跡が皐月賞に刻まれました！」

ターボエンペラーは右手を高く上げ、人差し指を一本だけ伸ばした。

観客の巨大な歓声がターボエンペラーに向けられた。

その声にターボエンペラーは初めて笑顔で答えた。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 05話 栄光への道

皐月賞を勝利したターボエンペラーは記者から日本ダービーに向けてのインタビューに答えている。

「ターボエンペラーさん、まずは無敗の皐月賞制覇おめでとうございます」

「ありがとうございます。多くの方に支えられた勝利ですから今後とも慢心する事無く戦っていきたいと思えます」

「次の日本ダービーですが勿論出走されますよね？」

「はい、無敗のダービーは勿論、菊花賞も勝利して無敗の3冠ウマ娘を目指して行きたいと思えます」

強い言葉に記者達から感心する声と同時に嫌らしい視線が向けられる。

もちろん全ての記者がそういった視線をしている訳では無いが、どうしても一定数はその手の者は出てしまう。

「流石はシンボリ家に連なる者ですねえ。あの皇帝に続くおつもりですか」

明らかに相手をただの小娘と侮った者の発言が聞こえる。

一瞬表情が強張ったターボエンペラーだったが直ぐに気持ちを落ち着かせた。

「私は私個人としてレースに挑んでいます。家の事、血筋の事を持ち出すのは共に戦うライバル達には無礼な事ですから」

名家の血を引いている以上どうしてもその手の話題は消えないだろう。

だがしかし、母に言われた様に相手が居てこそそのレースだ。

「ふん、お嬢様には我々庶民の気持ちなど分からんのですな」

思った言葉を引き出せなかった記者が負け惜しみ気味にそう言った。

流石にその言葉には周りの記者達も少々不快な表情をしている。

「どの様に生きるのか。それは生まれで決まる訳ではありません。私は私の意志で栄光への道を走り抜きたいと思えます」

不愉快そうな表情をした記者以外からは称賛の拍手が送られた。

「なかなか上手に受け流したな」

「以前の私では無理だったでしょう」

あまりにも余裕のなかったターボエンペラーではきつと激高してしまっただろう。

「いい事だ。焦って大人になる必要は無いが無意味な争いを生む必要は無いからな」

「はい」

「さて、話を変えるぞ。次の日本ダービーだが……2400メートルと中距離の中では最も長い。さらに東京競《font:ul40》馬《font》場の都合上内枠有利、外枠不利となる」

大塚トレーナーは日本ダービーに話を変えた。

「元々大外枠はどのレースでも不利になりやすいが日本ダービーはそこでもかなり影響の大きいレースだ。だからと言って大外枠で勝てない訳ではない。数は少ないがな」

公平性を可能な限り謳ってはいるがどうしても有利不利が発生してしまうのは仕方がない。

「内枠なら逃げるのも悪くは無いだろうが外枠の場合無理して前を取るの危険だ」

「斜行ですね」

一定のレーンを走るわけではないウマ娘の競走において失格とされるルールが斜行である。

斜めに走ったことで他ウマ娘の走りを妨害した、あるいは危険な走りをしたと判断された場合どんな好成績を残したとしても失格となる。

「お前ならその自在の足を生かしてどの枠番でも戦う事ができる。まだまだ不慣れな差し、追い込みを中心に鍛えて確実にダービーを狙えるようにするぞ」

「はい」

ターボエンペラーは力強く返事をした。

以前は関係者以外は立ち入り禁止で知る事の出来なかった出走抽

選会の様子は近年のインターネット配信の流行を受けて公開配信されるようになった。

そうなれば地味な抽選会ではなく、大きなイベントにしたがるのが人間と言うもの。

その為に日本ダービーや有《font:ul40》馬《font》記念などの抽選会は注目度の高さから一大イベントと言っても過言ではない。

以前はUR A幹部が内枠から籤を引いて決めるだけの単純なものだったがエンターテイメント制を持たせるために籤で選ばれたウマ娘が自ら抽選券を引くというスタイルに変更になった。

ターボエンペラーはこの茶番に付き合わされる事に多少の苛立ちを覚えたが、それだけ世間が注目しているのだから止む無しか、と自分を納得させた。

「次の抽選を行うウマ娘は……！出ました無敗の皐月賞ウマ娘ターボエンペラーです！」

係員に促されてステージへと上がる。

「ターボエンペラーさん！既に幾つかの枠番は埋まっていますが望みの枠番はありますか？」

「いえ……特に狙っている枠番はありませんね。内でも外でも私の出来る事をする。以上です」

「な、なんとも強気な発言！それではさっそく籤を引いていただきましょう！何番が出るでしょうか！」

他のウマ娘と違い淡々と答えるターボエンペラーに司会は多少驚きながらも進行を続けた。

「さあ！他のウマ娘達は祈るように引いた籤をあっさりと決めてターボエンペラーが引きました！番号は！なんと大外18番です！これは運に見放されたか!？」

参加しているウマ娘やトレーナー達はターボエンペラーが大外枠を引いた事に明らかに安堵した表情を浮かべた。

だが大塚トレーナーだけは不気味な笑顔でターボエンペラーを見つめていた。

「奥様、こちらを・・・」

「あら？エンちゃんからお手紙なんて珍しい」

電話すればいいのにといいながらクイーンダイアナはターボエンペラーからの手紙を開いた。

「あらあら、あの子らしいわね」

「それは・・・」

クイーンダイアナの手には上質な紙で丁寧に作られた招待状があった。

「日本ダービーへの招待状。素直じゃ無いのは誰に似たのかしらね」

そういつてクイーンダイアナは娘に良く似た笑顔で笑った。

そして、日本ダービーの日がやってきた・・・

「さあ！今年もやってまいりました日本ダービー。今を時めく18人の精鋭ウマ娘達が生涯一度の栄冠を求めて競い合います！本日注目すべきはやはり無敗の皐月賞ウマ娘ターボエンペラーでしょう！運悪く大外枠を引いてしまいましたですが彼女は同期から頭一つ抜けた才能を持っています！果たしてどの様な結果になるのか注目です！」

実況の声が東京競《font:ul40》馬《font》場に響き渡る。

そしてその実況の声を掻き消さんとばかりに観客たちの声援が響き渡る。

ターボエンペラーは分厚い壁越しに僅かに聞こえるその声を聴きながら控室で大塚トレーナーと最後のミーティングをしていた。

「いいな、作戦通りやれば必ず勝てる。レースを楽しんで来い」

「・・・はい！」

ターボエンペラーは笑顔で頷いた。

「それでは本日の出走ウマ娘の披露です！1枠1番ロジャーバーロオ！今日がG I初挑戦です！1枠2番ヴェント！苦難の道のりを経て日本ダービーに挑戦です！2枠3番エメラルドファイ！皐月賞は間に合いませんでしたがダービーには間に合いました！2枠4番サトノルーデル！皐月賞のリベンジに燃えています！3枠5番マイネルサービス！朝日杯より打倒ターボエンペラーを掲げています！3枠

6番サートウルマリア！ホープフル1着、皐月賞2着、ターボエンペラーを打ち倒すのは彼女でしょうか！4枠7番ダノンキンブリー！今度はこちらが泥をつける番だと気合十分！4枠8番メイシヨウデングエン！悔しいレースが続いています！5枠9番ヒガシノデイジー！クラシックに入ってから調子が今一良くありません！5枠10番クラージュゲリラ！トレーナーを頻繁に変えているとの事ですが果たしてどうなのでしょう！6枠11番レッドジェイアル！京都新聞杯からダービーへの挑戦です！6枠12番アドマイヤフエスタ！中々芽が出ませんがダービーで花開けるか！7枠13番ヴァロックス！重賞勝利が欲しいところ！7枠14番ランファザローズ！少し厳しい戦いになるかもしれません！7枠15番レオンレオン！青葉賞を勝ち上がったの参戦です！8枠16番ダガメディアマンタ！厳しい成績と言わざるをえません！8枠17番ノーマンマ！レース経験だけが頼りです！お待たせしました本日の1番人気！無敗の皐月賞ウマ娘！8枠18番ターボエンペラーです！」

ターボエンペラーはステージに上がるとジャージを脱いで衣装を披露する。

視線を巡らせるとこちらに手を振る母の姿を見つけた。

ターボエンペラーは一礼するとジャージを拾って戻っていった。

「さあ、各ウマ娘のゲートインが完了いたしましたまして間もなくスタートです。・・・さあスタートしました！おっと6番のサートウルマリアタイミングを逃したのか出遅れてしまいました後方につけます！好スタートを決めましたのは3番エメラルドファイと1番ロジャーパーロオ！4番のサトルデルと15番レオンレオンが一気に上がって先行争いはこの4人となりました！そのまま第1コーナーへと向かいます！」

『恐らく他のウマ娘の作戦は大外枠になったお前に前を走らせないようにするだろう。少なくとも3人・・・あるいはもっと多くの数の先行逃げ切りを選ぶ奴らがいる筈だ。特に10番から15番辺りのウマ娘は必ず1人は逃げようとするはずだ』

大塚トレーナーの読みは的中した。

大外枠で斜行を避ける為には全力で前を狙うか後ろに下がるかしかない。

そして15番のレオンレオンが私の妨害を兼ねて全力で先頭を取りに行った。

だから私は最初から先頭を取りにいかなかった。

無駄にペースを乱すのではなく、身を潜め、相手にペースを乱してもらおうのだ。

「2バ身開いてバロックズ！続いてクラージュゲリラ！その内側にダノンキンブリー！後方集団にサートウルマリアが付けました！今1、2コーナー中間を過ぎまして先頭は15番レオンレオンが大逃げリードを6バ身！2番手にはロジャーパーロオ！その後ろにサトノルーデル！エメラルドファイマで先行集団です！向こう正面に入りました！5番手にダノンキンブリー！クラージュゲリラが続いてその後ろにマイネルサービス！13番バロックズが中段前の方！内側に14番ランファザローズ！外側に1番人気18番ターボエンペラーが居ます！明らかに先行するウマ娘達は中段に居るターボエンペラーを警戒して飛ばしております！」

先頭を走るレオンレオンは明らかにオーバーペースだ。

その後ろを走るウマ娘達も前を警戒するべきか私を警戒するべきかで悩み、必然とペースが乱れている。

後方は後方で中段を走る私を警戒して無意識にだが前に詰めている。

大逃げをするレオンレオンがペースを握っている様に見えるが私はその存在感だけでペースを支配しているのだ。

「インパクトターボ先輩・・・貴女のおっしゃった事！今分かりました！」

「向こう正面中間を過ぎました！ターボエンペラーの後ろにはヒガシノデイジー！外にサートウルマリア！先頭までは15バ身！いや20バ身はあるでしょうか！1200を切りました！後方集団レッドジェイアルとノーマンマが続いて！インコースは2番のヴェントが続いています！後方外からダガメディアマンタとアドマイヤフェス

タが上がるのかというところ！3コーナーカーブ！最後方はメイシヨウデンゲン！縦に長い展開で3、4コーナー中間！ジワツジワツとターボエンペラーが外から上がっていきます！」

少しずつ、上げすぎないようにしながら私は足を速める。

抜かれたら後がない先行集団は抜かれまいと足を速め、置いていかれまいと後方集団も足を速めた。

集団の真ん中にいながら私は完全にレースを支配する事に成功していた。

「先頭のレオンレオンリードは6バ身ほどありますがどうでしょうか！2番手ロジャーバーロオ少し間が広まりました3番手のサトノルーデルとは4バ身ほど開きました！その内からダノンキンブリーが前を狙います！エメラルドファイ！マイネルサービスが前を狙います600メートルを切りました！直線に入りましてレオンレオン栄冠まで残り500メートル！しかし大外から一気にターボエンペラーが上がってくる！中段からごぼう抜き！あつという間に差が詰まります残り400メートル！レオンレオンここで先頭を交代！ロジャーバーロオが先頭ですが明らかに次元が違う！ターボエンペラーがあつという間に追いついた残り300メートル！必死に追いついてサートウルマリアも上がってきたが届かないか！残り200メートル目前でターボエンペラーが先頭に立った！ロジャーバーロオ必死に食い下がるも離れていく残り100メートル！これはもう完全に決まったターボエンペラーゴールイン！大外不利と言われる日本ダービーでターボエンペラーが見事に決めました！無敗の2冠ウマ娘達成です！」

観客の声援に答えるように、ターボエンペラーは二本指を掲げた。

その光景を涙ぐみながらクイーンダイアナは拍手で見守った。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 06話 菊の戴冠

日本ダービーを終えて無敗のクラシック2冠を達成したターボエンペラー。

残るのは菊花賞。

3000メートルという長距離のレースはこの菊花賞が初めてとなる。

当然それに向けてのトレーニングも長距離に向けてのスタミナ強化が中心になる。

しかしそのトレーニングにおいてターボエンペラーはある壁にぶつかっていた。

「つく！はあつ！はあつ！はあつ！」

「これは・・・厳しいな・・・」

大塚トレーナーはターボエンペラーの様子を見て眉間に皺を寄せた。

菊花賞を意識した3000メートルを走らせてみたが、ターボエンペラーは3000メートルを走り切るのが精一杯だったのだ。

「私に長距離の適性は無いのでしょうか・・・」

「いや・・・お前の能力なら3000メートルでも問題なく行ける筈なんだが・・・」

能力を見極めるのもトレーナーの才能だ。

当然大塚トレーナーがそれを外したとは考え難い。

「マヤノさん、並走していて何か気が付きませんでしたか？」

「んん・・・何だろう？何か分かりかけててすっごいモヤモヤする」

並走していたマヤノトップガンと若井トレーナーも理由が分からず頭を抱える。

「分からん時は何度も走って原因を洗い出すに限る。マヤノ、もう一度並走頼めるか？」

「アイコピー、マヤにお任せ」

「マヤノ先輩、お願いします」

ターボエンペラーはもう一度マヤノトップガンと並走を開始した。

「2800メートル・・・ここが限界点か・・・」

残り200メートルがどうしても届かない。

走り切れるだけのスタミナは十分にあるが勝てるだけの速度が出せない。

「最後の伸びが足りない・・・このままでは勝てんな・・・」

「何かが・・・何かが分かれば・・・」

「んん、もしかしたらエンペラーちゃん疲れやすいのかも？」

「・・・そうか！そういう事か！」

マヤノトップガンの一言に大塚トレーナーが顔を上げた。

「どういう事ですか？」

「エンペラー、原因はお前の体格が良すぎる事だ」

「そういう事ですか・・・大きな体から生み出されるパワーとスピードは確かに素晴らしいですがその反面燃費が悪いという事ですか・・・」
ウマ娘の平均的体格からしても非常に大柄に分類されるターボエンペラーは体格の良さ故にスタミナの消耗が激しい。

その為にどうしても距離が長くなってしまうと後半で速度を上げるだけのスタミナを残し辛いのだ。

「ではどうしたら・・・」

「話は簡単だ。スタミナを温存する走りをすればいい」

「そうなると差し・・・いや追い込みになりますか」

「ああ、速度を控え、競り合いをしない最後方。全てを最後にかける追い込みだ」

「しかし菊花賞は追い込みの勝率は・・・」

菊花賞は先行や差しが有利とされている。

事実逃げや追い込みの勝率は非常に低い。

「下り坂からの平坦な直線は確かに追い込みには不利だ。だがターボエンペラー、その無理を押し通した奴もいる」

菊花賞で追い込みで勝つには3、4コーナーから大外を回って前に出る戦術をとらなければならない。

最終直線が400メートルでゴールまで平坦な京都競《font:u
l40》馬《font》場で追い込みが勝つにはまくりと呼ばれる

戦術を使うしかない。

どうしても大外を回る事になる為にさらに不利になる可能性が非常に高いが、道中のスタミナを温存しながら走るには他に方法が無い。

「追い込みならアイツを呼ぶ必要があるな・・・」

大塚トレーナーはそう言うところかへ歩いて行った。

『生徒の呼び出しです。タマモクロスさん、タマモクロスさんは至急校内練習コース18番に居る大塚トレーナーの元に向かってください』

暫くして小柄なウマ娘が練習コースにやってきた。

「なんや、おっちゃんから呼び出すなんて珍しいなあ」

そこに居たのは白い稲妻と呼ばれた怪物ウマ娘、タマモクロスだった。

「貴女がタマモクロス先輩ですか！初めまして、私はターボエンペラー。現在大塚トレーナーの元で指導を受けています」

「おう、こりやでつかい後輩やなあ。ウチの事はおっちゃんからよー聞いとるかもしれないらんがタマモクロスや。あんたの事は最近噂になつとるからよーしつとるで」

愛嬌のある笑顔に大きなリアクションのタマモクロスだがその目は明らかに面白そうな獲物を見つけた色をしている。

「そんで、ウチに何の用や？」

「おう、エンペラーと3000を追い込みで走ってくれ」

「へえ・・・それは面白そうやんか」

大塚トレーナーとの付き合いが長いタマモクロスはその言葉だけで何をするのかを即座に把握して愛嬌のある笑顔から獲物を狙う笑顔へと変わっていった。

「ええかエンペラー、追い込みのコツは兎に角争わん事や。ウチも先行や差しは得意やから分かるが中段はポジション争いが激しゆうてかなわん。その分小柄なウチはどうしても体力をつこうてしまうんや。あんたの場合はそのでつかい体で押し切れるかもしれないらんがそれでも体力を使うんは変わらへんやろうな。その点追い込みは争わへ

ん分体力を温存できるつちゆうわけや」

「なるほど・・・」

まずはタマモクロスから追い込みのコツを教わる。

「けどな、ただ単純にスタミナを温存できるからゆうて追い込みを選ぶとえらい目にあうで。追い込みは他の作戦と違って仕掛けるタイミングはホンマに厳しいんや。早すぎればへばってまう。逆に遅ければ力を持て余してまう。今回は菊花賞が目標やろ？淀の仕掛けはホンマに厳しいんや。なんせコーナーを曲がり切ったら後は平らな直線しかあらへん。つまり先行有利つちゆうわけや」

競《font:url40》馬《font》場にはそれぞれの特徴が存在する。

その中でも京都競《font:url40》馬《font》場はゴール位置の関係で先行が有利になりやすい。

「だからまくりが必要な訳なんですな」

「そや、だから仕掛けが難しいんや。どうしてもロングスパートになつてまうからスタミナをどこまで残せるか、大外を走る事になるコーナーでどこまで前に出られるかがポイントや」

それでもその困難を達成したウマ娘が居る。

「つまり不可能ではないって事や。あとはやるかやられるか。それだけや」

小柄な体からは信じられないほどのプレッシャーが沸き起こる。

「望むところです」

しかしターボエンペラーも一步も引かずに不敵な笑みを浮かべていた。

SIDE：メロディールーン

『やりましたメロディールーン！待望の初勝利です！』

「やったあー」

一際小柄な体のメロディールーンは何度も何度もレースに出走し、ついに初勝利を手にする事ができた。

普通であれば諦めてしまいうマ娘が多い中、メロディールーンはギリギリまで諦めなかった。

そしてついに競争ウマ娘の第一歩を踏み出す事に成功したのである。

「おめでとうございますメロディーさん」

「ありがとうトレーナー！」

温和な笑顔の南坂トレーナーに出迎えられてメロディールーンは嬉しそうに抱き着いた。

「メロディーさん、私の指導が未熟なせいで遅くなってしまいました。がここからが本番ですよ。どのレースを走りたいですか？」

南坂トレーナーはウマ娘の意見を優先してくれるトレーナーだ。

特に出場レースに関して言えばほぼほぼウマ娘の意見をそのまま採用する。(押し通されているとも言えるが……)

「あのね……笑わないで聞いて欲しいの……」

「ええ、もちろん」

意を決してメロディールーンは宣言した。

「菊花賞で……エンペラーちゃんと戦いたい」

それは、怪物に挑む勇者の目をしていた。

「……少なくとも後1勝すれば選ばれる可能性があります。ですがそれは茨の道です」

ここまでですらかなりのハイペースでレースに出てきている。

残り時間はそれほど多くはない。

「勿論！だって私はエンペラーちゃんに勝ちたいんだもん！」

「分かりました……何とかしてみせましょう」

南坂トレーナーはそう答えた。

「ありがとうトレーナー！」

メロディールーンは再び南坂トレーナーに抱き着いた。

そして夏の猛特訓を終えた二人は菊花賞で出会う……

『さあ！泣いても笑ってもこれがクラシックレース最後の1戦！初めて3000メートルという距離に挑みます菊花賞！果たして勝利するのはどのウマ娘か！皆の期待を一身に背負うのは無敗の2冠ウマ娘ターボエンペラーでしょう！無敗の3冠ウマ娘の誕生となりますでしょうか！』

地鳴りのような歓声が京都競《font:ui40》馬《fon
t》場を包み込む。

「まさか君が挑んでくるとは思わなかったよ。メロディー」

「あはは、だって私の目標はエンペラーちゃんなんだもん」

ステージの裏側で一際小さなウマ娘を見つけたターボエンペラーは驚きと共に嬉しきで一杯だった。

ここまで真剣に思ってもらったのは初めてだったからだ。

「ふふ、無敗を期待されている以上勝ちを譲る訳にはいかないぞ」

「譲ってもらわなくても大丈夫！私だって負けないよ！」

二人は握手をした。

『さあ！間もなく出走となります18人のウマ娘達を振り返ってみましょう！1枠1番シダル！1枠2番ヒガシノデイズ！2枠3番ガリバル！2枠4番ユニコーンタイガー！3枠5番ワールドプレシオン！3枠6番デイベインフォーク！4枠7番メロディーリオン！4枠8番無敗の2冠ウマ娘ターボエンペラー！5枠9番ヴァンフランミンゴ！5枠10番ガウディーリョウ！6枠11番ジブリマン！6枠12番レッドジェイアル！7枠13番ヴァロックズ！7枠14番サトノルーデル！7枠15番ホウオウサーバル！8枠16番ノーマンマ！8枠17番ダガメディアマンタ！8枠18番メイシヨウデングン！以上18人フルゲートでのレースです！』

係員に誘導されて、ウマ娘達が次々とゲート入りしていく。

「負けないよエンペラーちゃん！」

「悔いのないレースをしよう。メロディー」

全員が収まり、ゲートの中では隠し切れない闘志が渦巻いている。

『・・・スタートしました！ああつと!?ターボエンペラー出遅れた！淀に悲鳴がコダマします！』

多くの観客が悲鳴を上げた。

無敗の3冠が目前で遠ざかったから当たり前だ。

あるいは逆に自分の応援するウマ娘が有利になったと喜ぶ人もいるだろう。

だがそんな光景を大塚トレーナーはただ一人不敵な笑顔で見つめ

ていた。

『真ん中か・・・これはかえって面倒だな・・・』

通達された梓番を見た大塚トレーナーは本番前の作戦会議でそう言った。

『真ん中は前に行くのも後ろに下がるのも面倒な場所だ。特に徹底マークされているお前の場合はおさらだな』

周りを他のウマ娘に囲まれてしまう真ん中の梓は作戦次第では大外よりも不利になる事がある。

うかつに下がって周りを囲まれてしまえば例えどんな能力があろうとも本領発揮できないままに終わってしまいかねない。

さらに体力の消耗が激しくなる為にターボエンペラーにしてみれば絶対に避けたい状況だ。

『んく、ならいつそ出遅れるつちゆうんはどうや?』

『確かに!エンペラーちゃんなら出遅れちゃうってのもありかも!』

タマモクロスの提案をマヤノトップガンが後押しする。

『なるほど、確かに囲まれるリスクより出遅れた方がむしろ悪くないかもしれないね』

若井トレーナーもそれに賛同した。

『そうだな。確かに態と出遅れるのは悪くない。その作戦で行くぞ!』

『はい!』

こうしてターボエンペラーは態と出遅れる作戦をとる事にした。

『ターボエンペラー出遅れて最後方!先行争いですがガウディーリョウ、ヴァンフラミンゴの2人が行きます!1度目の坂を上ってハナに立ったのはガウディーリョウ!2番手にヴァンフラミンゴがなりまして外からメイショウデンゲンが上がってまいります!3番手!ホウオウサーバル!内にユニコーンタイガーで坂を下っていきます!』

この時、他のウマ娘達はターボエンペラーの事をマークから外してしまっただ。

今まで追い込みで走った事の無いターボエンペラーが完全に出遅れて後ろに回った事で警戒から外れてしまったのだ。

特に菊花賞で追い込みの勝率は非常に低い。

まして先行型のターボエンペラーが出遅れた時点で勝ち目がないと判断したのだ。

その結果ペースを上げる予定だった先行ウマ娘達が確実な勝ちを取りに行く為に速度を控えた。

ターボエンペラーが前、あるいは中段に居たらここまで遅くはならなかったであろうが出遅れた挙句、諦めてしまったのか前に行こうとしないターボエンペラーを見たウマ娘達は速度を緩めてしまったのだ。

それがターボエンペラーに有利に働くとは思いません。

『坂を下り終わりました3、4コーナー中間を過ぎていきます！ヴァロックス好位置につけていきます！その外にノーマンマがいます！さあ間もなく正面スタンド前にウマ娘達がやってきます！』

通常ここで多くの歓声がウマ娘達を出迎えるのだが今日はそれがない。

いや、全く無いと言う訳ではないが無敗の3冠ウマ娘の誕生を楽しみにしていた観客達からすれば最早誰が勝っても同じである。

ウマ娘達に贈られる歓声と拍手は何時もの事を思えばどこことなく投げやりなものだった。

『正面スタンド前先頭を走りますのはガウディーリョウ！その後ろにヴァンフラミンゴ！3番手内側にユニコーンタイガーですが外からメイショウデンゲン、ノーマンマ！そして間ヴァロックスにワールドプレシオン！そしてハウオウサーバルとレッドジェイアル！シダルとサトノルーデルが続いています！少し間が空きましたダガメディアマンタ！内側にヒガシノデイジー！3バ身ほど開いて小さなメロディールーンは後方から5人目ガリバルと共に並んでいます！あとはデイバインフォークにジブリマン！最後方には何と何と無敗の2冠ウマ娘ターボエンペラーが居ます！果たしてどうなってしまうのでしょうか今年の菊花賞！1000メートル通過タイムは1分3秒！』

やはり3000メートルという長距離に速度は控えめになる事が

多いが、この時ターボエンペラーが後方に居た事から平均よりも少し遅いタイムになっていた。

当初の予定ではターボエンペラーが前にいる事を考えて速度を上げる予定だった逃げや先行のウマ娘達が確実に勝ちに行くためにスタミナを温存しようとする速度を控えてしまった為だ。

特に前を走るウマ娘達はターボエンペラーが見えない事もあつてなおさら油断をしていた。

最後方のターボエンペラーが不気味に静かな事を何とも思つて居なかつたのだから……。

『さあ各ウマ娘達が1コーナーカーブ！2コーナーへ向かう所です！先手を奪っているのはガウディーリョウ！現在逃げてリードは3バ身です！そして2番手にはヴァンフラミンゴ！3番手は外からノーマンマで2コーナーから向こう正面へと入ります！後はユニコーンタイガー外ヴァロックズ！さらに外から18番メイショウデンゲンが追走して5番ワールドプレシオン！さあ向こう正面へと入っております！』

ここまで来てもターボエンペラーは上がってきていない。

完全に諦めたか、あるいは距離適性外だったのか。

もはや誰一人としてターボエンペラーを警戒するウマ娘達は居なかつた。

たった1人を除いて……。

『さあ2度目の坂越えに向かいます！後方でも動きが激しくなつてまいました！ダガメディアマンタが上がっていきます！ヒガシノデイジーが後方から5番手、メロディールンが後方から4番手に下がりました！ガリバルとジブリマン！最後方未だ動かずターボエンペラーが不気味な静けさ！坂に入って先行集団が詰まっています！頂上から下り坂残り800メートルを通過しました！』

その時、ついに沈黙が破られた。

「待たせてしまったな！『さあ！鎧袖一触にしてやろう！』」

『動きました！ターボエンペラーが残り600メートルを切った所で一気に外に抜けて前に進みます！大外を回っているのにあつという

必死の形相で追いつがるメロディールーン。

『ターボエンペラーか！メロディールーンか！並んでいる！2人並んでいる！しかし僅かにメロディールーン届かないまま無情のゴール！勝ったのはターボエンペラー！無敗の3冠ウマ娘誕生です！2着はクビ差でメロディールーン！』

一瞬の沈黙の後、割れんばかりの歓声が京都競場《font:ul40》馬《font》場に響き渡る。

誰もが息をのんだレースを制したターボエンペラー。

しかし限界ギリギリまで出し切った為に汗だけで、以前ほどの余裕は無かった。

それでもターボエンペラーは観客に笑顔を向けると右手を高く掲げて3本指を伸ばしたのだった。

「はひ・・・はひ・・・やっぱりエンペラーちゃんは強かったあ・・・」
息も絶え絶えなメロディールーンはそんな光景を地面に倒れながら見ていた。

「良く、最後まで諦めずにがんばりましたね・・・」

「トレーナー・・・」

南坂トレーナーがメロディールーンに優しい笑顔を向けてくれた。

「ごめんねえ・・・勝てなかった・・・勝ちたかったよお・・・」
涙を見せぬようにとメロディールーンは南坂トレーナーに抱き着いた。

それは決して諦めずにここまで走ってきたメロディールーンが流す、初めての悔し涙だった。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 07話 臥薪嘗胆

ギリギリのレースを制し、見事に無敗の3冠ウマ娘になったターボエンペラー。

しかし翌日の朝、彼女は起き上がる事が出来なかった。

「大丈夫か？エンペラー」

「すみませんマキシمام先輩」

足に熱と痛みを感じたエンペラーは何とか起き上がろうとしたが直ぐに異変に気が付いたマキシمامターボが無理に動かないように言ったのだ。

マキシمامターボはとりあえず寮長のヒシアマゾンに理由を話して朝食と湿布薬を持ってきてくれたのだ。

「今ヒシアマゾン寮長が（学園に）連絡を入れてくれている。今日は（学園を休んで）大人しくしていると良い」

「はい」

足のケガはウマ娘にはつきものだ。

ただし場合によっては深刻な事態もあり得るので素早く対応できるようにできている。

過去、怪我を隠したまま通学しようとして大惨事になったケースもあったからだ。

「エンペラー、9時頃にタクシーが寮の前に来るからそれに乗って病院に行くんだ。大塚トレーナーも一緒だ。マキシمامは悪いがアタシと一緒にエンペラーをタクシーに乗せる手伝いをしてくれ」

連絡を終えたらしいヒシアマゾンがそう言って部屋に入ってきた。

「ああ、もちろんだ」

「すみませんヒシアマ姉さん、マキシمام先輩」

「気にするな。昨日のレース、良く頑張ったな。皆お前を褒めてたぞ」

「・・・はい！」

ターボエンペラーは嬉しそうに笑った。

そして病院でターボエンペラーは診察を受けた。

「筋肉炎症と関節部に炎症が起きているようですね」

「・・・まさか！」

「ああいえ、言い方がまずかったですね。屈腱炎ではありませんのでご安心ください」

医者の言葉に大塚トレーナーは大きく息を吐いた。

もちろんターボエンペラーも握りしめていた拳から力を抜いた。

「幸いにも危険な炎症は無く、比較的軽度の炎症が殆どです。少し時間はかかりますが後遺症は残りませんし治療が難しいものでもありません。疲労が溜まった事が原因ですのでしばらく激しいトレーニングやレースはできませんが問題なく治る炎症ですのでご安心ください」

医者の言葉は非常に穏やかで安心させる響きだった。

「どれぐらい期間はかかりそうですか？」

「そうですね・・・体質や経過にもよりますが早ければ2ヶ月・・・安全をとって3ヶ月といったところでしょうか」

「そうすると有《font:url40》馬《font》も無理か：：」
11月に行われるジャパンカップはもちろん、年末に行われる有《font:url40》馬《font》記念も諦めざるをえない。

それはターボエンペラーにとっては辛い事だった。

「すみません・・・私が不甲斐無いばかりに・・・」

「無敗で3冠を達成したウマ娘を誉めこそすれ叱るトレーナーはトレーナーではない。ただの阿呆だ。お前は俺が育ててきたウマ娘の中でも最高のウマ娘だ。胸を張れ！そして誇れ！勝ったものがしよぼくれているは負けた者が惨めではないか！」

「大塚トレーナー・・・」

「起きてしまった事を悔やむより、未来を見据えて走れ！おっと、今走るのは厳禁だったな」

そう言つて大塚トレーナーは笑った。

「ありがとうございます」

その言葉にターボエンペラーは笑みを返した。

病院での診察を終えた後、ターボエンペラーは学園へと戻った。

「エンペラー、大丈夫だったか？」

「ああ、幸いにもそれほど酷い怪我ではなかったよ」

「そいつはゴールドデンだな」

学園に戻って直ぐに出会ったのはゴールドデンマキシマとゴールドドライブの2人だった。

「……ところでまだ2人は授業中のはずだが？」

当然ながらトレセン学園でも通常授業は存在する。

真面目なターボエンペラーは途中からでも授業に出ようと教室に向かっている途中だった。

「はっ！あまりにも退屈だから抜け出しちゃった！」

「オレはマキシマを引き戻す為に出てきたんだぜ」

マキシマは自分勝手に、ドライブはマキシマを連れ戻すという名目で2人ともサボっているらしい。

「2人とも少しは真面目に授業に出ないと後が怖いぞ」

「ふっ！俺達に怖いものなど！」

「あるわけが無いぜ！」

2人は決め顔でポーズを取る。

そんな2人の後ろに1人のウマ娘がやってきた。

「へえ……そいつあ凄いねえ……」

2人は決め顔のまま青くなりダラダラと大量の汗を流す。

「けどなあ……センスを困らせるのはちいと違うんでないかい？お2人さん？」

逃げられないように真ん中に入り2人の肩を素早く掴んだウマ娘。

「おおおおおおお親分ん!？」

「いいいつからそこにい!？」

「あんた等がまた授業を脱走したってエアグルーヴ副会長さんから連絡があつてねえ……。あんた等のご両親からもよく頼まれた以上は義理を欠く真似はできねえわなあ」

どこか普通でない雰囲気を持つそのウマ娘はゆっくりとした口調で話す。

「ワシはいつつも言つとるよなあ……。？カタギに迷惑かけるんじやねえって……」

2人の肩を音が聞こえそうなほど握りしめ、低く力強い声は威厳と共に強烈なプレッシャーを放つ。

「ひいひいひいひい!!す、すいやせんでしたああああ!!」

ゴールデンドライブとゴールデンマキシマは即座にその場に土下座した。

「謝るんはワシじゃねえだろうが!さっさと戻ってワビいれてきな!」

「し、失礼しますううう!!」

大慌てで2人は教室に向かって走っていった。

「あー……えつと……」

「おう、こいつあ失敬。ついついあいつらの事で手一杯になっちまって挨拶が遅れたねえ。ワシはアンタガタイショ。あのタワケ共の知り合いでねえ。昔は素直で良い子達だったんだが都会に来て変な影響でも受けたのか悪戯ばかりしやがってねえ。ワシがこうして尻拭いをしてやつとるわけだ」

「それは……大変ですね。あ、私はターボエンペラーと言います。彼女達とはクラスメイトになります。今日は病院で診察を受けていたのですがまだ授業に間に合いそうだと思いい向かっています」

「おお、噂はかねがね聞いとるよ。はあ……あのタワケ共に君の爪のアカでも飲ませてやりたいねえ」

その後アンタガタイショの愚痴を聞きながらターボエンペラーは教室に向かった。

「エンペラーちゃん大丈夫?」

教室に入ると真つ先にメロディーローンが声をかけてくれた。

「ああ、心配かけてすまなかったなメロディー。幸いそれほど酷い怪我ではなかったよ。君との勝負が楽しすぎて少し頑張りすぎてしまったらしい」

「そっかー、私も楽しかったよ!今度は絶対に負けないからね!」

自分との勝負をまた望んでくれるメロディーローンにターボエンペラーは嬉しく思った。

「全く、あんまり心配させないでよね。貴女は私がいつか倒すライバ

ルなんだから」

「相変わらず素直じゃないなランス。だがありがとう。君からの挑戦を楽しみにしているよ」

「分かればいいのよ」

言葉はキツイが心根は優しいスカレットランスもそう言つて胸を張つた。

ちなみに授業は逃げ出していたゴールデンドライブとゴールデンマキシマが教師に土下座をして謝り倒しているせいでストップしていた。

恐らくまた後でアンタガタイショーからお叱りを受ける事になるだろうなあとターボエンペラーは2人を見ながら思った。

そして週末を迎えた・・・

「エンちゃん！温泉に行くわよ！」

「お母様!？」

突如寮にやってきたクイーンダイアナにターボエンペラーは驚いた声を上げた。

「怪我の治療には温泉が一番よ！さあさあ急いで急いで」

「あのちよつとあああああああああ！」

強引に母に連れ出されてしまうターボエンペラーだった。

そんな様子を寮生たちはただポカンと眺めた。

「ふうーやっぱり温泉は良いわねえ」

ここは福島県いわき市の温泉宿である。

「ええ・・・確かに気持ちが良いです」

道中で色々と説得されてとりあえずは納得したターボエンペラーは仕方がないと諦めて温泉を堪能している。

「ごめんなさいね。貴女が怪我をしたってトレーナーさんから聞いていてもたつてもいられなくなっちゃって・・・」

「いえ・・・お母様の気持ちはとてもありがたいです」

温泉の温かさと母の気持ちが少し硬くなっていた気持ちを柔らかくしてくれた気がした。

「貴女は昔から真面目で一生懸命だから・・・今回の事も絶対に思い詰

めてるだろうって思ってた……」

「……お母様には敵いませんね」

「ええ、だって貴女の母ですもの」

そう言ってクイーンダイアナは微笑んだ。

「お母様」

「なあに？」

「私は私として、その上で皇帝を超えてみせます」

「ふふ……その時を楽しみにしているわね」

クイーンダイアナは娘に涙を見られぬように空を見上げた。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 08話 飛翔の時

ケガのリハビリの為、ターボエンペラーは軽いトレーニングしかできないので少しフラストレーションがたまりつつあった。

「・・・もう終わりか」

「物足りなさそうだな。仕方がないが我慢してもらおうしかないな」
炎症を悪化させない為には程々の運動で納めるしかない。

全く動かないのは体も固くなるので良いことは無いが、体が温まってきた辺りで運動を止めなければならぬのでどうしても今までのトレーニング量からすれば物足りない。

「春までは我慢しろ。復帰後にトレーニングもレースもしつかりと走らせてやるからな」

「ふう・・・そうですね。早く治して思いっきり走りたいです」

タオルで汗を拭きながらターボエンペラーはそう答えた。

「そうだな」

大塚トレーナーはそう答えた。

そして年明け後の診察にて・・・

「かなり炎症も治まってきていますね。この様子ならそろそろトレーニングの負荷を通常まで戻しても良いですよ。もちろん無理は厳禁ですが」

「本当ですか!」

医師のその言葉にターボエンペラーは喜んだ。

「ええ、今週中には完治するでしょう。よく我慢できましたね」
医者はその言つて微笑んだ。

『そうか。なら完治した頃を見計らって一度タイムを計り、その後に復帰レースをどうするか考えるぞ』

「はい!」

病院を出た後に大塚トレーナーに電話で連絡を入れたターボエンペラーは通話を切ると小さくガッツポーズをし、そのままジョギングしながら学園まで帰っていった。

そして翌週・・・

「ハアアアアアッ！」

「なるほど……」

タイムウオッチを止めた大塚トレーナーは少し顔をしかめた。

「どうですか？」

「そうだな……タイム次第では大阪杯を復帰レースと考えていたが、これは何か一つレースを走ったほうが良いな」

そう言って大塚トレーナーはタイムをターボエンペラーに見せる。

「やはりだいたい落ちていますね」

「ああ、特に後半の伸びが悪くなっているな。今後のトレーニングで取り戻せるだろうがレース勘の取戻しも考えればやはり一度レースに出たほうが良いだろう。今後の事も含めて一度ミーティングするぞ」

「はい！」

「さて、今後のレース予定だが……まず復帰レースは金鯱賞だ。競《font:ul40》馬《font》場は異なるが大阪杯と同じ2000のレースで勘を取り戻すぞ」

「はい」

「それとその後の話になるが……お前の体調を考えて3000メートル以上のレースには出ない事にする」

その言葉には口惜しさが滲み出ていた。

「それじゃあ春の天皇賞は……」

「お前の能力ならば勝てない事は無い。だがそれはお前の命と引き換えになる。お前の適性距離は2000メートルから3000メートルと幅広い。だが2800以上の距離は受けるダメージが大きすぎてお前の体がもたない。お前の目指す先は決して命を犠牲にした果てにあるわけではないだろう？」

「それは……」

ターボエンペラーは俯いた。

「これがルドルフの時代ならお前は走るしかなかったかもしれない。今はGIレースも増えてきている分負担のキツイレースを避ける事は決して悪い事ではない。それでも尚あいつを超える成績を残せて

いるウマ娘は居ないんだ。それが現実だ。すでに2個レースを逃して焦る気持ちも分る。だが無理をして引退するような事になってしまえば所詮その程度のウマ娘だったのだと言われるだけだ」

大塚トレーナーの言葉にターボエンペラーは拳を固く握りしめた。「7冠を超える。皇帝を超える為には時に引く事も重要だ」

「・・・分かりました」

大きく息をついてターボエンペラーは拳を解いた。

「エンペラー、何か悩んでいるのか？」

マキシマムターボは表紙にインパクトターボが描かれたウマ娘雑誌を手にもう尋ねた。

その表紙にはターフの2枚目、花道を征くと書かれている。

「すみません・・・表情に出ていましたか？」

「私で良ければ相談にのろう」

雑誌の途中に葉を挿みながらマキシマムターボがそう言った。

「ありがとうございます。実は今後の事で悩んでいます・・・」

ターボエンペラーは胸の内を話す。

「トレーナー以外にはあまり話した事は無いのですが・・・私はシンボルドルフを超えたいんです。その為には8冠以上を達成するというのが最低条件ではあるのですが・・・トレーナーから春の天皇賞は諦めろと言われてしまつて・・・」

「なるほど、（皇帝の勝利した春の天皇賞に）出ない事で本当に（皇帝を）超えたと言えるのか分からない・・・という所か？」

「・・・はい」

相変わらず言葉は足りていないが運命的な何かを感じる関係かマキシマムターボの言いたい事は良く分かる。

「意外に思うかもしれないがあの皇帝は当時はまだG1では無かったがジュニア期チャンピオン決定戦であった朝日杯に出していない」「えっ？」

その事にターボエンペラーは驚いた。

皇帝と謳われているシンボルドルフが朝日杯を走っていないとは思わなかったからだ。

「もちろんそれには理由があった。当時のU R Aは世界からはあまり評価されていなかった。だからジャパンカップと同日に開催されるレースで世界に対して日本をアピールするという目的だった。結局その行為が成功したかどうかは分からないが、当時はほぼ無名だったシンボリルドルフが日本に評価される様になったのはクラシック期に入ってからだ」

「あの皇帝にもそんな時期が・・・」

「そうだ。評価と言うものはどうあがいても先行しない。結果を出してこそ初めて評価される。そして7冠という頂を超えた者はまだ誰一人として存在しない。たった一度の功績である凱旋門賞を勝ったはずのアイツ、ゴールドシップでさえ皇帝を超えたと言われて居ない」

マキシマムターボの言葉は事実だった。

功績だけ言えば確かに初めての凱旋門賞を制覇したゴールドシップの方が凄いとされるかもしれない。

しかしタイミングを逃して海外レースに出走できなかったシンボリルドルフを絶対視する者からすれば国内成績で劣るゴールドシップが皇帝を上回ったとは言い辛い。

結局のところ人が評価するのは自身の物差しの範囲を超えないのである。

「8冠を達成して、初めてシンボリルドルフを超えた。世間はそう評価するだろう。例えばどんなレースであろうともな」

「・・・ありがとうございます。マキシマム先輩」

「・・・負けるなよ。自分に・・・」

「・・・はい!」

ターボエンペラーの表情からは迷いが消えていた。

3月、金鯱賞・・・。

『・・・スタートしました!好スタートでハナを奪ったのは無敗の3冠ウマ娘ターボエンペラー!菊花賞後に故障したとの報道がありました。だが問題なく完治したとの事です!』

ターボエンペラーはあえて先頭を取りに行った。

リハビリ後の走りではどうしても後半の伸びが足りないと判断した為だ。

『さあ2番手で先頭を狙うのはダイワキャバレー！外から12番のマイネルフェイロンがこれに加わります！その後ろにギバドン！外からサトノソルダンが並びます！間にサートウルマリアがダービーの雪辱を晴らさんと狙っています！先頭はターボエンペラーのまま第1コーナーを抜けて第2コーナーに入ります！向こう正面へ向けての緩い上り坂！今日は逃げを選びましたターボエンペラーリードは3バ身！2番手で前を狙うはダイワキャバレー！その後ろ1バ身離れてマイネルフェイロンと言った体制になりました！8番サトノソルダンが外に抜けて4番手まで上がってまいりました！斜め後ろ内側にギバドン！その後ろにサートウルマリア向こう正面に入りました！間が少し開きましてテイデンスクールとラストドライブ！その後ろ3バ身ヒガシノデイジー！その外に11番のジュンバルタン！その後ろルートマイウェイとプレイジャーニー！最後方はサトノサーキッドです！1000メートルは60秒ジャスト！』

早すぎ遅すぎず、ターボエンペラーが先頭を走る為に他のウマ娘たちはやや慌てているが決して急ぎすぎの速度ではない。

ただ今回のレースでは逃げを得手とするウマ娘が居なかった事もターボエンペラーにとつては有利に働いた。

2番手を走るダイワキャバレーも逃げよりは先行型のようなのである。

その為にターボエンペラーのペースが特段早いものでは無いが先頭を取ろうとはしなかった。

『ターボエンペラー豪快な走りで逃げ続けています！さあここからゴール手前300メートルまでは長い長い下り坂！ターボエンペラー早くも第3コーナー！早くも差を広げていきます！大きく曲がって間もなく第4コーナーに入ります！先頭変わらずターボエンペラー！後ろのウマ娘たちは間に合うのか！懸命に藻掻いているが差が詰まりません！さあコーナーを曲がり終えて最終直線です！ゴール手前には落差2メートルの急激な上り坂！しかしターボエンペラーモノともしません！あつという間に坂を上りきってそのまま

押し切る！必死にサートウルマリアが追い上げてきましたが届きません！ターボエンペラー堂々とゴールイン！無敗の3冠ウマ娘として見事な復帰レースでした！』

観客たちに向かってターボエンペラーは大きく右手を挙げた。

それに答えるように大きな歓声があがった。

「復帰戦としては悪くない走りだったな。後半も速度が落ちていないしこれならば来月の大阪杯もいけるだろう」

「ありがとうございます」

大塚トレーナーは満足そうにそう言った。

「油断はするなよ。クラシックレースと違いシニアレースはベテランが混じってくる。能力はお前の方が上でも技術でそれをカバーするウマ娘は必ず居る。まして無敗のお前は違反にならないギリギリのラインで潰しに来るだろうからな」

「はいー」

ターボエンペラーは力強く返事をした。

4月、大阪杯・・・。

『さあ間もなく始まります大阪杯！GIレースに昇格したのはごく近年！ですが新しい春のGIとしてその存在感を示しています！さあ本日走ります12人のウマ娘達をご紹介します！1枠1番ルートマイウェイ！2枠2番サトノソルダン！3枠3番去年の凱旋門賞に出走しましたブレストツープース！4枠4番一昨年のダービー馬娘ワイアリアン！5枠5番エリザベス女王杯のミツキーライラック！6枠6番1番人気！無敗のクラシック3冠ウマ娘ターボエンペラー！これが5つ目のGI挑戦です！6枠7番ステイパーフィッシュ！6枠8番ダノンキンブリー！7枠9番は大ベテランマカキ！7枠10番ジケンボー！8枠11番カナデ！8枠12番ティアラ路線で活躍しましたクロスジェンティス！以上のウマ娘達です！』

春にしては冷たい風の吹く阪神競《font:ui40》馬《font:場》に熱い観客の歓声が響き渡る。

ターボエンペラーはターフで体を温めながらも周りから突き刺さ

る視線を感じていた。

「・・・これがシニアレースの洗礼か」

先の金鯉賞でも気にはなっていたがここまで露骨ではなかった敵意。

やはりGIともなれば相手を引き摺り下ろしてでも奪い取ってみせると殺気立つウマ娘は多い。

当然無敗のターボエンペラーに初めて泥を付けてやるぞという気配を隠そうともしない。

「ふ・・・この程度で疎んでいて凱旋門賞がとれるか」

ターボエンペラーは無敗の王者として不敵な笑みでライバルたちを睨み返した後ゲートに入った。

『さあ最後に11番のカナデがゲートに収まりました。・・・スタートしました！なんと！大勢のウマ娘が出遅れた?!いや！違います！ターボエンペラーを警戒しすぎてゆっくりとスタートしたターボエンペラーに引き摺られてペースを乱した様です！その隙を見逃さずにターボエンペラーが間を抜けて一気に前にでます！先頭は珍しく逃げを打ったダノンキンブリーです！』

ターボエンペラーは真ん中の枠番から囲まれる事を避ける為にスタートをあえて急がなかった。

ところが前走で逃げを選んだターボエンペラーを警戒してか、多くのウマ娘が慌て気味のスタートで走りだそうとしたが、ターボエンペラーがゆっくりとスタートした事に気が付いて動揺したせいか勢いがかつかなかつたり躓いてしまったりとバラバラのスタートになってしまった。

「しめた！」

後ろから走るつもりだったターボエンペラーだったがその隙を見逃さずに前の好位置につく事に成功した。

『早くも大混戦の大阪杯！先頭はダノンキンブリー！2番手にジケンボー！続きましてクロスジェンティス！その内側にターボエンペラーが居ます！6番手にミッキーライラックが追走しています！まもなく第1コーナーに入ります！』

後ろの方ではペースを乱してしまつたウマ娘たちが必死に立て直しをしている。

逆に逃げ切りを図つたダノンキンブリーなどは明らかにペースが速い。

その中でも不気味なのはペースを乱さずにきつちりマークしているミツキーライラックだろう。

「ペースを乱すなよエンペラー！ペースは自分が掌握するものだ！」前にプレッシャーをかけつつ、不気味なミツキーライラックを警戒しながらターボエンペラーは走つた。

『先頭ダノンキンブリーペースが少し早いか!? 2番手のジケンボーがジワジワと迫ります！間が3バ身と少し離れて3番手にクロスジェンティス！4番手にミツキーライラックとターボエンペラーがけん制しあっています！その後ろまた少し間が空きましてワイアリアン！向こう正面に入ります！ステイパーフィッシュ何とかここまで持ち直してきました！間もなく1000メートルを通過タイムは59秒とやや速いペース！』

逃げはあまりした事のないダノンキンブリーはターボエンペラーを警戒してペースが乱れている。

おそらく逃げ先行が得意なジケンボーに追いつかれたせいかさらにペースを上げた。

そんなオーバーペースの2人を見ながらターボエンペラーは自分をマークするミツキーライラックを警戒する。

「流石は女王といったわけか！だが私も3冠ウマ娘の意地がある！」
「ッ!?!」

『さあ第3コーナーを曲がって先頭変わらずダノンキンブリーだがやや疲れが見えるか!? 2番手ジケンボーもペースが鈍くなってまいりました！3バ身ほど離れてクロスジェンティスその後ろにピツタリとターボエンペラーがつけています！ミツキーライラックは内側からターボエンペラーを警戒中！後方は序盤の乱れが原因かバラついたままです！さあ第4コーナーを駆け抜けて先頭はダノンキンブリー！直線に入って外からクロスジェンティスが上がってきた！し

かし新たな皇帝が！ターボエンペラーが間を割って一気に前に突き抜ける！ミツキーライラックも内側からダノンキンブリーをかわす！ミツキーライラックが僅かに先頭か!?しかしターボエンペラーが驚異の末脚で前に出る！あつという間に半バ身のリードを築いてゴールイン！勝つたのはターボエンペラー！無敗の5冠目！』

大きな歓声に出迎えられて、ターボエンペラーは右腕を高く上げた。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 09話 先を征く者

5月中旬……。

「きいー！悔しい！あとちよつとだったのにい！」

教室でスカーレットトランスが吠えていた。

「お、落ち着いてよランスちゃん」

メロディールンが何とかスカーレットトランスをなだめようと必死である。

「着差8ミリだっけか？」

「そりゃー悔しいわな」

「おだまり！」

煽るゴールドドライブとゴールデンマキシマにスカーレットトランスが再び吠える。

「7冠ウマ娘、ドリームアイか……」

ウマ娘雑誌の一面を飾っているのは7冠ウマ娘ドリームアイだ。

「8冠を達成するのはどっちが先か。楽しみになってきたなあオイ」

「このままだと先を越されるかもしれないなあエンペラー」

「……」

ターボエンペラーは複雑な表情でその雑誌の表紙を見つめ続けた。

「大塚トレーナー、次のレースですが……」

「ああ、次のレースは天皇賞秋を目指すぞ」

「宝塚記念には出ないのですか？」

大塚トレーナーの言葉にターボエンペラーは驚いた。

「宝塚記念は時期が悪い。お前の体調を考えると避けたほうが無難だな」

「そう……ですか……」

その言葉にターボエンペラーは納得していないようだった。

「どうした？何かあったのか？」

「いえ……その……実は……」

ターボエンペラーは胸の内を話す事にした。

「ドリームアイか……」

「すみません。7冠目を達成したと聞いてしまつて・・・」

「まあ気にするなと言うほうが無理があるだろうな」

大塚トレーナーもドリームアイの事は知っている。

「ドリームアイはマイルから中距離、お前は中距離から長距離と適性も重なっている。さらに海外GIであるドバイターフも勝利して当に女帝の名に相応しい走りを見せているな」

大塚トレーナーはそう言つて椅子に体を預けた。

「このままでは私は2番煎じになつてしまいます！だから宝塚記念も勝つて！」

「・・・おい、お前今なんて言つた？」

大塚トレーナーの表情が今までに見た事の無いほどに怒りの表情を浮かべていた。

「え？」

「お前はまさか宝塚記念に出れば必ず勝てるつもりか!? 確かにお前は今まで無敗で来ている！だがこれから先も無敗で居られる保証など何処にもないんだぞ！そんな気持ちで宝塚記念を走つてみる！お前は絶対に負ける！それでも宝塚記念を走ると言うのなら俺はお前のトレーナーを降りるぞ！」

「う・・・」

大塚トレーナーの剣幕にターボエンペラーは気圧された。

「・・・少し外を走つて頭を冷やしてこい。お前にはそれが必要だ」

大塚トレーナーはそれだけ言うと怖い表情のまま黙ってしまった。

ターボエンペラーは頭を下げるとトレーナールームを後にした。

「私は傲慢になつていたのか・・・」

なぜあんな事を言つてしまったのか。

私なら走れば勝てる。

いつからそんな事を思うようになったのだ。

ターボエンペラーはただ当てもなく学園内をジョギングし続けた。

やがてポツポツと雨が降り始め、ターボエンペラーは雨に打たれるままただグラウンドに立ち続けていた。

「あらあら、雨の中に立つてるからシービーちゃんだと思つたらエン

ペラーちゃんじゃない。風邪引いちゃうわよ?」

「マルゼンスキー先輩・・・」

マルゼンスキーが傘をターボエンペラーに差し出しながらそう言った。

「どうしたの?なんだがチヨベリバみたいな表情をしてるけど」

「その・・・自分がいかに傲慢な存在だったんだと思って・・・」

「・・・おねーさんで良ければ相談に乗るわよ」

マルゼンスキーはそう言っつてターボエンペラーの手を取った。

「はい、温かいカフェオレよ」

「ありがとうございます」

着替えたターボエンペラーにマルゼンスキーは売店で購入したカフェオレを手渡した。

「それで・・・傲慢ってどういう事?」

「・・・私の目標は7冠を超えること。それは今も変わりありませんしその事は傲慢だとは思っていません。あくまで目標ですから。ですがいざ私より先に7冠を超えそうなウマ娘が現れた時に私は2番煎じになってしまいかもしれないという気持ちを持ったんです。そのせいでトレーナーと喧嘩をしまして・・・」

「焦りが出ちゃったって事?」

「いえ・・・宝塚記念に出れば勝てる・・・そう言っつてしまっただんです・・・」

その言葉にマルゼンスキーは何とも言えない表情をした。

「エンペラーちゃん、おねーさんの話、聞いてくれる?」

「はい・・・」

「おねーさんはね、生まれが日本じゃないの。もちろん国籍は日本よ?でも私がトウインクルシリーズ現役時代日本生まれ以外のウマ娘はクラシックレースへの出場権がなかったの。その時は私は両親を恨んだわ。どうして私を日本で産んでくれなかったんだって」

その言葉にターボエンペラーはマルゼンスキーを驚いた表情で見つめた。

「特に日本ダービーに出られなかったのが一番つらかったわ。大外枠でも構わない。賞金も要らない。ライブに出れなくてもいい。走ら

せてくれるだけでいい。ただ私の実力を試させて欲しい。私のトレーナーさんはそう言ってURRに頭を下げに行ってくれた。でもダメだったわ」

制度のせいでクラシックレースに出られなかったウマ娘は少ない。

オグリキャップも笠松トレセン学園から中央トレセン学園への編入時期が遅かった事もありクラシックレースには出られなかった。

「だから私はトウインクルシリーズを1度も本気で走った事が無かったわ。私が本気を出さなくても容易に勝ってしまう。その程度のウマ娘しか日本には居ない。トウインクルシリーズを直ぐに引退しちゃったのもそう思っていたからよ」

今のマルゼンスキーからはとても考えられない言葉だった。

「そしてその思いがただの思い込みだと知ったのはドリームトロフィーリーグに移行してすぐだったわ。井の中の蛙とはよく言ったものね。エンペラーちゃん、今の貴女もそうよ。たかが無敗で5冠を達成した程度で頂点に立ったつもりならそれは大きな勘違いよ。貴女程度のウマ娘なんて五万と居るわ。今までライバルが居なかったからと言って今後も居ない訳じゃないのよ。貴女に本気で挑んでくれるウマ娘が居る限り」

その言葉にターボエンペラーは目を見開いた。

「だから道を間違えないでエンペラーちゃん。私はトウインクルシリーズで道を見つけられなかったけれどもドリームトロフィーでは道を間違えなかったわ。絶対王者になりたいのならば、1戦1戦を本気で勝ちに行きなさい。それが出来なければ貴女はただの暴君になるわ」

「・・・はいー」

ターボエンペラーの返事にマルゼンスキーは母性的な笑顔を見せた。

「大塚トレーナー、すみませんでした！もう我儘は言いません！今後とも是非ご指導をお願いします！」

「・・・どうやら頭は冷えたみたいだな。いいかエンペラー。俺がお前

に勝てると言うのは良い。それはトレーナーの仕事だからだ。だがお前が相手を下に見るのだけは止める。その慢心は敗北と挫折を作り出す。いいな」

「はいーもしまた私が思い上がった時は容赦なく殴ってください」

「阿呆、俺をクビにする気か」

そう言つて大塚トレーナーは笑つた。

SIDE：ドリームアイ

「ドリームアイさん、安田記念は惜しかったですね。あと少しで皇帝を超えたのに」

「別に・・・私はただ自分が走りたいから走っているだけ。8冠がすごいのは分かるけどそこだけに拘るつもりはないよ。行けるとこまで行くだけ」

ちよつとそつけない物言いに記者は言葉に詰まったがさすがはプロで顔には出さなかつた。

「で、では今ドリームアイさんが一番気になるウマ娘はいらっしゃいますか？」

「んー・・・無敗のターボエンペラーかな？多分天皇賞秋で直接対決になりそうだし」

思つた通りの言葉を引き出せて記者はホツと一息つくとさらにインタビューを続けた。

「ターボエンペラーさんには勝てそうですか？」

「それこそ走つてみないと分からないよ。私は7冠ウマ娘だけどあつちは無敗だからね。でも、負けるつもりは全然無いよ」

何とかインタビューがまともに終わったので記者は冷や汗をぬぐつた。

SIDE：大塚トレーナー

「ハアアアアア！」

「テヤアアアア！」

マヤノトップガンと並走するターボエンペラーを俺は真剣な表情で見つめる。

アイツの走りは確かに素晴らしい。

どの様な状況からでも完璧に熟せる柔軟さとそれを可能にするだけの土台がある。

その反面アイツ自身が無自覚な弱点もある。

それはアイツが頑張りすぎてしまう事だ。

元が真面目でレースでは熱くなりやすい。

その上、自分で皇帝を超えるというプレッシャーを課している。

それらがアイツの限界以上の走りを生み出している。

それ故に脆い。

もし精神的な支えが壊れた時、アイツは走れなくなるだろう。

「せめて・・・アイツに同格のライバルが居たならば・・・アイツが早い段階で敗北を知っていたなら・・・ここまで脆くはならなかっただろうに・・・」

たればを言っても仕方がないが時折見せるアイツの脆さに何度も焦りを覚えた。

故にこの間は信頼関係が崩壊する事を承知の上で怒鳴った。

学生でまだまだ若いアイツに調子に乗るなど言うほうが難しい。

一見大人びて見えるアイツだが年相応な部分も多い。

幸いにもあの後アイツは俺に頭を下げられる程度には冷静になれたようだ。

「たった一度の敗北で・・・壊れるなよ・・・エンペラー」

ここまで来てしまった以上俺にできる事はそれほど多くない。

壊れてしまった心を治すのは容易な事ではないのだから・・・。

S I D E：ターボエンペラー

マルゼンスキー先輩との出会いは私の思い違いを正してくれた。

きつと私の様子を見て過去の自分と重ねたのかもしれない。

それは同病相哀れむだったのかもしれない。

それでも私の自覚していなかった迷いや傲慢さを自覚させてくれたのはとてもありがたい。

そうだ、どの道7冠という頂はすでに皇帝に制覇されているのだ。

ドリームアイがそれを上回ると言うのなら私はそのさらに高みを目指してしまえばいい！

間違えるなターボ。

お前の進む頂は誰も到達したことのない前人未到の場所。少し出遅れた程度で諦める程の輝きではないだろう！

ターボエンペラーは足に力を込めてコースを走り抜けた。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 10話 天皇賞と来訪者

夏の合宿を大塚トレーナーによるキツイトレーニング漬で送ったターボエンペラーはその走りをさらにパワーアップさせていた。

焦る気持ちを抑え、驕る気持ちを殺し、必死にトレーニングをしたターボエンペラーの表情は鋭い目つきも相まってどこか現役時代のシンボリルドルフを彷彿とさせた。

「やあ、天皇賞へ向けての調整は上々かね？」

学園に戻って早々にシンボリルドルフがターボエンペラーに声をかけた。

「・・・会長さんですか。何か御用で？」

「いや、ただの世間話さ」

自分の憎しみは思い込みであったが、やはり良い思いの無いシンボリルドルフに対してはどうしても当たりがキツクなってしまう。

「・・・やはり似ているな」

「何がですか？」

「君と君の母君だよ。君にとっては屈辱に感じるかもしれないがシンボリ家の者として彼女の事は知っている。そして君のその眼は彼女もよくしていた。それは私もであり、そして私の母もだ」

「・・・」

「血の繋がりとさえ聞こえは良いだろう。だが私には同時にこう言えるとも思っている。血の呪いと・・・」

「血の呪い・・・」

「実際に君にとつては呪いでしかないかもしれない。だが君の血を否定する事は不可能だ。しかしそこで立ち止まってしまつては何も得られない。君は君だ。世間の声など気にするな。己の道を進め。それが、皇帝として君に送る言葉だ」

「・・・私は貴女を超えてみせます」

「その時は喜んで皇帝の名を君に譲ろう。ついでに会長の席も要るか

い？」

「・・・譲られた玉座に興味はありません。精々奪われるその時まで震えながら温めておいてください」

「ふっ、そう易々と奪われたりはしないさ」

トウインクルシリーズを退き、現役時代の鋭さは失われたと言われているシンボルドルフ。

しかし軽い喋りとは裏腹にその表情は研ぎ澄まされた日本刀の如く鋭利だった。

「時間を取らせてすまなかった。天皇賞秋を楽しみにしているよ」

一瞬でその鋭利な表情を温厚な笑みに変えてシンボルドルフは立ち去った。

ターボエンペラーはその背中を見送った。

いつの間にか固く握りしめていた拳をゆつくりと解きながら。

SIDE：ドリームアイ

「ドリームアイ！これ以上のトレーニングは許可できない！」

「ですがトレーナー！」

「落ち着くんだ！本番前に故障してしまつては意味がない！」

ドリームアイは焦っていた。

自分の思う通りに走らせてくれるトレーナーの期待に応えようと7冠まで手にする事ができた。

しかし8冠目はこの間逃してしまった。

表向きはさほど気にしていない風を装ったが実際には負けず嫌いのドリームアイは非常に悔しがっていた。

まして相手は無敗を誇る5冠ウマ娘。

例え自分のほうが戦績は良くとも油断できる相手ではない。

(私にはもう、時間が無いのに！)

ドリームアイは自分の全盛期が終わり、既に緩やかに下降し始めている事を悟っていた。

(恐らく私が勝てる可能性があるのは今年一杯！長距離の苦手な私が勝てるチャンスは天皇賞秋とジャパンカップの2回！あと一つ！あと一つで皇帝を超えられる！短距離絶対王者と呼ばれたお母様の誇

りにかけて！)

ドリームアイは悔しそうに拳を握りしめた。

そして天皇賞秋を迎えた。

『さあ！まもなく始まります秋の三大GIレースの第1戦目天皇賞秋！今年も多くの実力派ウマ娘達が勢揃いしています！注目は現在7冠を達成しています最強ウマ娘候補筆頭のドリームアイ！そしてもう一人は未だ無敗の5冠ウマ娘ターボエンペラー！果たして勝つのは7冠か無敗か！はたまた他のウマ娘達が下克上を果たすのか！注目の一戦です！』

実況の声と共に多くのファンからの熱い声援が東京競場《font: ui40》馬《font》場に響き渡る。

そんな熱いファン達の空気とは異なり、披露ステージ裏には張り詰めた空気が流れていた。

特に見ているだけで首筋に刃物を突き立てられている気分になれる2人が居た。

ドリームアイとターボエンペラーだ。

「楽しみだね。もう直ぐ貴女に初めての屈辱を味あわせる事が出来ると思うと」

「たかが7冠を達成した程度でもう勝ったつもりか？私は貴女を見くびっていたようだ」

「聞いてるよ？私が7冠達成したから焦ってトレーナーと大喧嘩したって」

「何、ちよつとした勇み足という奴だ。貴女こそトレーニング過多だってトレーナーと喧嘩したって聞いたけど？」

挑発に挑発を返す2人に周りの係員は冷や冷やしている。

勿論周りのウマ娘達もそんな2人を射殺さんばかりのキツイ視線で睨み付けている。

華々しいウマ娘達の活躍の裏にはこうした殺伐とした光景がある事をウマ娘関係者以外は知らない。

『まもなく出走します13人のウマ娘達を振り返ってみましょう。1枠1番ブレストツーピース！2枠2番カナデ！3枠3番ダイワキヤ

バレー！4枠4番ダノンキンブリー！4枠5番ウインブレイド！5
枠6番フェールメン！5枠7番クロスジェンティス！6枠8番、無敗
の5冠ウマ娘ターボエンペラー！6枠9番ミラクル！7枠10番、7
冠ウマ娘ドリームアイ！7枠11番スカーレットカール！8枠12
番ダノンプレミオ！8枠13番ジケンボー！以上13人のウマ娘で
す！』

係員に案内されてウマ娘達がゲートに次々と入っていく。

ターボエンペラーの恐ろしい雰囲気はまだ経験の浅い係員が少し
ビビりながらゲートに案内した。

最後のウマ娘がゲートに入り、係員が下がった。

そしてゲートが開かれた。

「スタートしました！綺麗に揃ったスタートになりました！3番のダ
イワキャバレーが好スタートでハナを取りに行きます！しかし外か
らダノンプレミオがスツと先頭に立ちます！ダイワキャバレーここ
は譲ります2番手につけました！3番手にはミラクルが追走してい
ます！向こう正面に入っていきます！先頭を走りますのはダノンプレ
ミオ！4バ身空きまして2番手にダイワキャバレー！また少し間
が空きまして3番手にミラクル！その外目4番手に7冠ウマ娘のド
リームアイ！その後ろ内側にダノンキンブリー！外側にウインブラ
イドが並びます！その後ろ内側ブレस्तツピース外側ジケンボー
！少し間が空きましてクロスジェンティスとフェールメンが並んで
います！その後ろに無敗の5冠ウマ娘ターボエンペラー今日は後方
に控えています後方2人はスカーレットカールと最後尾のカナデで
す！』

ターボエンペラーは中段に控えて走る事にした。

東京競《font:ul40》馬《font》は530メートル
もの長い最終直線が売りのコースだ。

だからこそターボエンペラーは末脚の活かせる追い込みを選んだ。

それは同時にどうしても焦りが募る自分の心を鎮める為でもあつ
た。

（いいかターボ。焦るなよ。仕掛けを間違えるなよ。心は熱く、頭は

冷静に・・・決めに行くぞ！)

レースは終盤に差し掛かり、東京競《font:ul40》馬《font》名物の大櫓を超えようとしていた。

『さあ残りは600メートル！間も無く最終直線です！先頭を行きますのはダノンプレミアムオ懸命に逃げています！ミラクルが2番手！ダイワキャバレーが並んでくる！400を通過してドリームアイが上がってくる！後方からターボエンペラーが大外に持ち出して中段を撫で斬りにして上がってくる！ドリームアイここで末脚を炸裂！残り200メートル！先頭はドリームアイ！ターボエンペラーが恐ろしい追い上げ！クロスジェンティスも懸命に追い上げてきたが厳しいか！ドリームアイか！ターボエンペラーか！8冠か！無敗か！並んだままゴールイン！勝ったのは果たしてどちらか！』

観客たちは固唾をのんで掲示板を見つめた。

『できました！勝ったのは8番ターボエンペラー！無敗の6冠達成です！ドリームアイ惜しくも敗れる！8冠の壁は険しい！果たしてこの巨大な壁を超えるウマ娘は現れるのでしょうか！』

「・・・よし！」

ターボエンペラーは密かにガッツポーズを決めた後観客に向かって手を振った。

「・・・くっ！ジャパンカップは・・・負けない！」

ドリームアイは踵を返すと控室に戻っていった。

SIDE:???

羽田空港に1人のウマ娘が降り立ち、入国手続きをしていた。

入国管理官は手続きに従い入国目的を訪ねた。

「Is the purpose of entry for tourism or business?」(入国目的は観光ですかビジネスですか?)

「I came to see my father's birth place. But that's not all」(父の生まれ故郷を見に来たの。でもそれだけじゃないわ)

入国管理官は怪訝な表情をした。

「It's combat」(戦いによ)

入国管理官があからさまに表情を変えたのを見てウマ娘は慌てた様子で訂正した。

「Just kidding!」(冗談よ!)

ウマ娘は噂には聞いていたが日本人って真面目でジョークが通じないのねと思った。

「Have a nice sightseeing」(よい観光を)

ウマ娘はパスポートを受け取った。

「Oh, und ich untersttze den Japan Cup」(それとジャパンカップ応援してますよ)

突然のドイツ語に振り向いたウマ娘は笑顔の入国管理官を見てしてやられた事に気が付いた。

その後タクシーに乗り、ウマ娘は目的地へとたどり着いた。

「いらっしやい。我が家のように寛いでね」

「Stieftante!」(義叔母様!)

ウマ娘を出迎えたのはクイーンダイアナだった。

「ドイツから日本へようこそ。カイザーシユラーク。凱旋門賞制覇おめでとう」

「Danke!」(ありがとう)

それはドイツの凱旋門賞ウマ娘、カイザーシユラークだった。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 11話 日本の皇帝
VSドイツの皇帝

『本日は今年の凱旋門賞ウマ娘！ドイツの絶対皇帝と呼ばれているカイザーシユラークさんへの独占インタビューです！カイザーシユラークさん！よろしくお願いします！』

『Mit freundlichen Grüßen.アー・・・ヨロシクオネガイシマス』

どうやら少なくとも日本語を話せないことはないカイザーシユラークが日本語でインタビューに答える。

『おや、日本語が喋れるのですか？』

『ワタシの Vater、オトーサンはニホン人デス。ウチではニホンゴあまり話さないからウマクナイです』

『そうなのですね。十分お上手ですよ』

『Danke!アリガト』

そんな風にテレビではカイザーシユラークと記者の会話が続いていた。

「凱旋門賞ウマ娘カイザーシユラーク・・・ドイツの皇帝ねえ。同じ皇帝として負けられないんじゃない？日本の皇帝ターボエンペラーさん？」

学食で隣の席に座ったスカーレットランスがターボエンペラーにそう言った。

「茶化すなスカーレットランス。それに君も走るのだろうか？」

「ええ勿論、ドリームアイも、勿論貴女も、カイザーシユラークにだって負けるつもりはないわ！」

マイル寄りの適性のスカーレットランスだが中距離でも勝ちが無いわけではない。

ただし長距離に近い2400のレースは厳しいとみられている。

「それにしても、貴女とカイザーシユラークが親戚なんてね」

「ああ、私の父の双子の弟が彼女の父親だ。最近は殆ど会わなかった

「が今は家に泊っているよ」

「さっすが名家ねえ」

「私の家などまだまだ歴史の浅い成り上がりの家だよ。メジロ家やシンボリ家には遠く及ばない」

丁寧に食事を終えたターボエンペラーがそう言ってお茶を飲む。

「ジャパンカップ、勝ちを譲るわけにはいかないがいい勝負をしよう」
「ふふ、貴女に黒星をプレゼントしてあげるわ」

2人のプレッシャーに周りのウマ娘達が引いていた。

SIDE：大塚トレーナー

「やれやれ、前はこの程度の荷物なら軽々と持ってたんだがなあ」

段ボールを抱えながら大塚トレーナーが歩いている時だった。

「えくもうやだく！きやあ！」

「危ない！」

よそ見をしながら歩いていたウマ娘が段差を踏み外して転びかけた。

「なっ！」

大塚トレーナーは咄嗟に段ボールを手放してウマ娘をかばった。

「ぐう！」

「ああっ！大丈夫ですか！」

「こ……腰が……」

幸いにもバランスを崩したウマ娘に怪我は無かったが大塚トレーナーは腰を痛めてしまった。

「すみません私のせいで！」

「俺の事はいい……怪我しなくて良かったな」

その後大塚トレーナーは保健室に運ばれて手当を受けた。

SIDE：ターボエンペラー

「大塚トレーナー！」

「心配かけたなエンペラー。年には勝てんな。腰をやっちゃった」
ベットに横になった大塚トレーナーがそう言った。

「大丈夫なのですか？」

「全治2週間ってところだな。無茶するもんじゃねえな」

「そう・・・ですか・・・」

「すまねえな・・・お前の大事な時期に・・・」

「いえ・・・起こってしまった事はしょうがありません。お大事になさってください」

ターボエンペラーは保健室を後にした。

「そうですか・・・大塚先生が・・・」

新井トレーナーに事情を説明し、ターボエンペラーは暫くの間は新井トレーナーからの指導でトレーニングをする事になった。

「私では先生ほどの指導ができるかどうか分かりませんが全力は尽くします。ジャパンカップ、がんばりましょう」

「はい」

ターボエンペラーの返事にはやはりいつもの元気がなかった。

SIDE：カイザーシユラーク

*会話はドイツ語だと思ってください

私は本番のコースでは無いが似せて作られた練習用コースを走る。

「走り心地はどうだシユラーク？」

ドイツから1日遅れで日本にやってきた私のトレーナーがそう声をかけた。

「トレーナー。何ていうか日本のターフは走りやすいけど硬いわ」

「ふむ・・・日本のターフはハイスピードターフと聞いている。欧州に比べてパワーが不要な分負荷が掛かると言う話だ」

実際に短く刈り揃えられたターフは足に纏わりつくことなく走りやすい。

その分地面から受ける反動が大きくなりクツションの効いたターフになれている私には反動が強くて制御が難しい。

「日本のウマ娘達は良くこんな固いターフで走れるわね」

「あちらからすれば欧州ではよくあんな走りづらいターフで走れるな、と言ったところだろうか」

トレーナーは個人的に日本と交流が深くどちらを最良するでもない回答をした。

「それはそうかも知れないわね。アウエーで全く同じだったら態々来

る必要性は無いものね」

私はもう一度ターフの硬さを確かめるように何度かジャンプをしながらそう答えた。

「やれそうか？」

「あら？自分が指導した絶対皇帝を信頼してくれないの？」

「信頼と妄信は別だ。で、どうなんだ？」

聞いた話では軍人の家系だったらしいトレーナーの冷静な言葉に私は考えた。

「そうね。相手があの子だもの絶対とは言えないわね」

「ターボエンペラーか・・・確かお前の親戚だったよな？」

「ええ、私の父の双子の兄の娘よ。幼い頃には何度も会っているわ。最近はあるまり会えてなかったけどまさかあつちも日本の皇帝なんて呼ばれてるなんて思わなかったわ」

「ドイツの皇帝VS日本の皇帝か。メディアが喜びそうだな」

「ホントにもうパラッチにはうんざりよ」

幸いにも日本にはパラッチが少ない為にやたらに追い掛け回されなくて助かっている。

「日本でも嘗ては酷い騒ぎがあったらしいがな」

トレーナーもパラッチには良い感情を持っていないので冷やかにそう言った。

「シユラーク、ジャパンカップ勝ちにいくぞ」

「ええ、もちろんよ」

私はトレーナーに頷くともう一度ターフを走り始めた。

そして、日本中が注目するジャパンカップの日を迎えた。

『さあ！今年もやってまいりました国際招待レースジャパンカップ！今年は何と凱旋門賞ウマ娘のドイツの絶対皇帝カイザーシユラークが参戦いたします！これに対するは日本の皇帝！無敗6冠のターボエンペラーです！さらには7冠の女王ドリームアイも8冠目に挑まんと気合十分です！』

スタンドには大勢の観客が押し寄せ、入場制限すらかかっている。「ずいぶんと我々は期待されているみたいだな」

ターボエンペラーがステージ裏から外の様子をうかがう。

「ドツチもコーテイの名前をもってるからシヨーガナイね」

そう言つてカイザーシュラクは不敵な笑みを浮かべる。

「私だつて負けるつもりは無いわよ」

ドリームアイが2人を睨みながらそう言つた。

「ふん！皆まとめてアタシが勝つんだから！」

スカーレットランスが勝気な笑顔を見せる。

様々な思いを持ちながらウマ娘達はターフに向かう。

『さあ！まもなく始まりですジャパンカップ！本日出走いたしますウマ娘を振り返つてみましょう！1枠1番カレンブーケドラン！1枠2番7冠ウマ娘ドリームアイ！2枠3番ワールドプレシオン！2枠4番ミラクル！3枠5番ベアリングタイト！3枠6番コンビレール！4枠7番ラッキーストロ！4枠8番ドイツの絶対皇帝カイザーシュラク！5枠9番スカーレットランス！5枠10番ホワイトパリス！6枠11番日本の皇帝無敗の6冠ターボエンペラー！6枠12番マカマカ！7枠13番ディアスマイル！7枠14番ホンダスキー！7枠15番ポールトウウィン！8枠16番シャークネード！8枠17番スリザリオン！8枠18番グローリーボイス！以上18人フルゲートでの出走です！』

ウマ娘達は係員に案内されてそれぞれゲートに収まつていく。

『さあ！最後のウマ娘がゲートに収まりました！・・・スタートしました！各ウマ娘揃つた綺麗なスタート！先行争いは好スタート好ダッシュのスカーレットランス！おおつとそれを躲して先頭に立ったのはなんとドイツの皇帝カイザーシュラク！欧州で活躍したその剛脚でジャパンカップも逃げきろうと言うのか！』

「嘘！完璧なスタートだったのに！」

「Ich beginne」(先に行くわよ)

逃げウマ娘であるスカーレットランスを悠々と抜いてカイザーシュラクが先頭に躍り上がる。

「Blitzkriegsangriff！」(電撃強襲！)

そして先頭に立つとそのまゝ後ろを大きく突き放す。

『おおつとー！なんとカイザーシユラークがどんどんとスカーレットランスを突き放す！5バ身6バ身と開いてこれは大逃げだ！まさかのジャパンカップでの大逃げ！この展開は傾奇者逃亡者のインパクトターボを思い出します！』

「やらせるもんですか！」

「そうはさせるか！」

スカーレットランスが追い上げ、ターボエンペラーも前に上がっていった。

「いかん！焦りすぎだエンペラー！」

かろうじて腰の痛みが引いて競font:ul40馬font《場までやってきていた大塚トレーナーがそう叫んだ。

しかし観客たちの強い歓声にかき消されてしまいターボエンペラーにその声が届く事はなかった。

『向こう正面に入りまして先頭は大きく離しました凱旋門賞ウマ娘カイザーシユラーク！その後ろ5バ身開いて懸命に追いかけてきますスカーレットランス！また少し間が開きまして3番手に上がってきましたのは無敗の皇帝ターボエンペラー！4番手に7冠ウマ娘のドリームアイといった並び！その後ろはごった返しております！』

まさか海外の凱旋門賞ウマ娘がジャパンカップで大逃げの様な走りをするとは思わず誰もが大慌てで追い上げる。

しかし後半に残さなければならぬ為にどうしても横に並ぶウマ娘はいなかった。

「このまま諦めるなんてえ！」

スカーレットランスは必死に追いかけるが大逃げはした事が無いためにどうしたら良いか分からない。

「やられた・・・ペースを乱された」

予想外のカイザーシユラークの走りにペースを乱されてしまった事をターボエンペラーは悔みながらも諦めずに走り続ける。

「大丈夫！私ならいける！」

ターボエンペラーの後ろを走るドリームアイも想定外の使わされた足に不安を覚えつつも強気に前を狙い続けた。

『さあ絶対皇帝カイザーシユラークが早くも第4コーナーを回り終えて最終直線に入りました！2番手スカレットトランス疲れたのか足色が鈍い！日本の皇帝ターボエンペラーとドリームアイが懸命に上がっていきます！』

「ううーむりい・・・」

どうやら適性距離外だったらしいスカレットトランスが失速していく。

「負けるかあー！」

「私があー！」

ターボエンペラーとドリームアイが懸命にカイザーシユラークを追い上げる。

『残り200メートル！渾身の走りでターボエンペラーとドリームアイがカイザーシユラークを追い上げる！カイザーシユラーク足色は衰えない！ターボエンペラー届くのか！日本の皇帝の意地を見せるか！ドリームアイがURA史上初の8冠達成なるか！カイザーシユラークが逃げ切るのか！残り100メートル！ターボエンペラー届くのか！ドリームアイか！僅かにカイザーシユラークが先頭のままゴール！ターボエンペラー敗れる！勝ったのはドイツの絶対皇帝カイザーシユラークです！』

「Ich gewinne！」（私の勝ちよ！）

カイザーシユラークは観客たちに手を振ってアピールする。

「・・・くっ！」

ターボエンペラーはその様子を拳を握りしめて見つめていた。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 12話 包囲網

ジャパンカップ終了後・・・

「エンペラー、ジャパンカップたのしかったワ」

「次は決して負けんぞ。カイザー」

空港のエントランスで2人は握手をする。

「来年の凱旋門賞、楽しみにしている」

「ええ、モチロンよ。次もにげきってミセルわね」

こうしてカイザーシユラークはドイツへ帰っていった。

その後、ターボエンペラーは有《font:ul40》馬《font>記念を目指しての大塚トレーナーとミーティングを開始した。

「ターボエンペラー、ジャパンカップの敗因は分かるか？」

「はい、焦るあまりペースを乱した事です」

その言葉に大塚トレーナーは頷いた。

「そうだ、お前の大事な時に怪我をしてしまった俺が言うのは申し訳ないがあのレースはもう少し落ち着いて走る事が出来ていたら勝っていただろう」

「いえ、全ては私が未熟なせいです。トレーナーのせいではありません」

「責任はどちらにもあつた。それでいいだろう」

「はい」

「話を変えるぞ。有《font:ul40》馬《font>記念だが7冠ウマ娘のドリームアイが引退したためにチャンスとばかりに狙ってくるウマ娘も多い。最も有力に見られているのは当然お前だ。全力で潰しに来るだろう」

無論反則になってしまつては元も子もないがそれでも周りを囲む、徹底的にマークするなど反則しない範囲で妨害する方法はいくらでもある。

「そしてお前は無敗では無くなった」

「はい・・・」

「それがお前にどの様な影響をもたらすのか。負けた体験はプラスに

働くウマ娘とマイナスに働くウマ娘が居る。いいか、初心に戻ってやり直すぞ」

「はいー」

SIDE：ゴールドドライブ&ゴールドデンマキシマ

「よう、有《font：ul40》馬《font》記念、お前も出るよな」

「ああ、そして一番のライバルは当然・・・」

ゴールドドライブとゴールドデンマキシマがスクワットをしながら会話をしている。

「ターボエンペラー、アイツのゴールドデンっぷりは半端じゃねえ」

「だが、俺たちのゴールドデンっぷりだって伊達じゃねえ」

「勝つのは俺だ！」

2人はそう言つて拳をぶつけ合った。

「威勢が良いのは良いことだが・・・お前ら何でスクワットさせられるのか理解しとるか？」

「ひい！すいやせん親分！」

アンタガタイショーにギロリと睨まれた2人は大慌てでスクワットを再開した。

そんな様子を見てアンタガタイショーはため息をついた。

SIDE：メロディールーン

「残念ですがメロディーさんは弾かれてしまいました」

「うーん、エンペラーちゃんとの再戦は遠いなあ・・・」

なかなか芽の出ないメロディールーンは残念ながら有《font：ul40》馬《font》記念には出られなかった。

「諦めるな！メロルーが頑張り続ければきっとターボエンペラーと戦えるぞー！」

「はい！ターボ先輩！」

小柄なツインターボがメロディールーンを慰めている様子を見ながら南坂トレーナーは来年こそメロディールーンを輝かせて見せると心に決めた。

SIDE：スカーレットランス

「私じゃ無理ってどういう事よ！」

「落ち着けランス」

食って掛かるスカレットランスに沖野トレーナーはニンジンジュースを差し出しながら落ち着く様に言った。

「お前の適性はマイルから中距離にかけてだ。その中距離でも2200以上はお前には厳しい。いくら長距離としては短い2500の有《font:ui40》馬《font》記念でもお前には長すぎる。無茶をすればそれこそ後に響くぞ」

「でも・・・スカレットさんは・・・」

ダイワスカレットに強いあこがれを抱くスカレットランスはどうしても有《font:ui40》馬《font》記念をあきらめきれない。

「お前の気持ちは良く分る。だがお前の無茶する姿を見て心配しているやつも居る事を忘れないでくれ」

そう言っつて沖野トレーナーが指さす先にはスカレットランスを心配そうに見つめているダイワスカレットが居た。

「ねえランス・・・貴女が私に憧れて真似をしてくれるのは嬉しいわ。でもそれで貴女が傷ついてしまうのは悲しいわ。だから無理だけしないで」

「スカレットさん・・・分かりました」

ダイワスカレットの言葉なら素直に聞いてくれるんだなと沖野トレーナーはため息をついた。

そして有《font:ui40》馬《font》記念を迎えた・・・『今年も年末最後のGIレース有《font:ui40》馬《font》記念がやってまいりました！あなたの夢、私の夢を乗せて走ります18人のウマ娘達。注目は6冠ウマ娘、日本の皇帝ターボエンペラー！このレースに出走するウマ娘達の中でも抜きんでた実力と実績を残しています！対抗するウマ娘はいますでしょうか！破天荒ウマ娘のゴールドエンドライブか！淀の狂ウマ娘ゴールドンマキシマか！はたまた他のウマ娘なのか！注目です！』

実況の声を聴きながらウマ娘達がステージで衣装を披露していく。

「やっとお前と勝負できるな！」

「ゴールドエンドライブか」

「オレもいるぜ」

ゴールドンマキシマも存在を主張する。

「ん？お前たちサングラスなんかしていたか？」

「どうだ？似合うだろう？」

「ゴールドンなデザインだろ？」

衣装に合わせたらしいサングラスを自慢げに見せる2人。

「前から何か物足りないと思っていたんだがつい先日偶然入った店で見つけてな」

「見つけた瞬間これだ！って思ってたな」

「・・・そうか」

恐らくトレーナーとは色々もめたのだろうがそれでレースに集中してくれるのならばと諦めたのだろう。

この2人の暴れっぷりはアンタガタイショー以外では押さえつけられない。

いや、アンタガタイショーが居ても完璧には収まらないのだからこの2人の行く末が心配ではある。

『さあ！本日走ります18人のウマ娘を振り返ってみましょう！1枠1番バニート！1枠2番ブレストツープース！2枠3番日本の皇帝ターボエンペラー！2枠4番ラブズオンリーミー！3枠5番ワールドプレミオ！3枠6番ミラクル！4枠7番ミツキーライラック！4枠8番ペルシャンデイ！5枠9番宝塚記念を制しましたクロスジェンティス！5枠10番カレンブーケドラン！6枠11番モズニツエ！6枠12番オーソリティア！7枠13番フェールメン！7枠14番今年の皐月賞ウマ娘ゴールドエンドライブ！7枠15番サラサア！8枠16番オセアグレイブ！8枠17番ユークャンスマイレ！8枠18番今年の菊花賞ウマ娘ゴールドンマキシマ！以上18人フルゲートでの出走です！』

ゲートに入りながらターボエンペラーは大塚トレーナーとのミーティングを思い出していた。

『いいかエンペラー。今度の有《font:ul40》馬《font》記念だが、枠番で内側のお前は逃げを選ぶのが今までの定石だった』
『はい』

『だが今度は先行か差し・・・できれば差しでいけ』

『それは・・・』

疲れやすい自分には囲まれてしまう可能性の高い内側での先行や差しは厳しいのではないだろうか。

ターボエンペラーはそう思った。

『そう、今までお前は囲まれるレースは殆どしてこなかった。来年、凱旋門賞を目指すのなら囲まれるレースを経験しておかなければお前は勝てない。日本では結託した妨害は倦厭されるからあまり行わないが海外では露骨に結託してくる。場合によっては同じトレーナーのウマ娘が優勝候補を勝たせる為に犠牲になる事さえある。その時の練習だと思え。勿論勝つ事を諦めるな！お前なら必ず抜け出せると俺は信じている』

『はい！』

ターボエンペラーはゆっくりと目を開いた。

目の前には硬くしまったゲートが映る。

「大塚トレーナー・・・必ず抜け出して見せます！」

全員がゲートに収まった合図が出され、ターボエンペラーはゲートが開く瞬間を待つ。

ガタンッ！

ゲートが開くと同時にウマ娘達は飛び出した。

『スタートしました！先行争いは大外からゴールデンマキシマが突っ込んでゆく！内側1番バニートもハナを譲ろうとはしません！最内と大外の先行争いとなりました！やはりゴールデンマキシマが走るレースは大荒れです！3バ身程離されて集団が形成されています内側からブレストツーピース、外からオーソリティアです！3番のターボエンペラー今日は控えて中段まで下がりました！その周りを他のウマ娘ががちりと押えます！ターボエンペラーを内側に押さえつけるように大きな集団が形成されました！1週目のスタンド前に入

ります！先頭は内バニート外ゴールデンマキシマの2人が争いながら走っています！少し間が開きまして3番手にオーソリティア！内側ブレストツープース！拍手と歓声に迎えられます！オセアグレイブ、フェールマン！その後ろ内側に押さえつけられる様にターボエンペラー！外側にカレンブーケドラン！ターボエンペラーの後ろを塞ぐのはワールドプレミオとミッキーライラック！この辺りは完全にターボエンペラー包囲網といった形！まもなく第1コーナー！後方で様子を伺うのはゴールデンドライブ！今はまだエンジンを温めています！』

予想通りターボエンペラーの周囲は彼女を警戒するウマ娘達でがちりと固められてしまった。

「なるほど・・・これは走りづらいな・・・」

囲まれたレースを避けてきたターボエンペラーにとってはこの走りは非常に辛い状況だった。

ペースを上げる事も落とす事もできず、周りのペースに強制的に合わせなければならぬ状況は非常にストレスが溜まる。

『こんなのさつきとぶち破ろうぜ！』

久しく表れていなかった内なる声が頭をよぎる。

「いいや・・・まだだ・・・」

ターボエンペラーは懸命に内側で堪えた。

『向こう正面に入りました先頭はどうやらゴールデンマキシマが奪ったもよう！バニートもまだ諦めてはいません！オーソリティアオ3番手！ブレストツープース少し様子がおかしいが大丈夫か!?フェールマンが4番手！最内にターボエンペラー外からオセアグレイブ、大外カレンブーケドランが押さえつけています！その後ろにワールドプレミオとミッキーライラック！ペルシャンデイもここに加わりました！外からクロスジエンティスが上がっていきます！ミラクル、ゴールデンドライブも上がり始めました！まもなく第3コーナーに入ります！』

その時だった。

「ううっ！」

ターボエンペラーの前を走っていたブレストツーパーイスが突如失速した。

「なっ！どけえ！」

一瞬慌てたターボエンペラーだったがコーナーに入って外に膨らみ始めた隙を見逃さずに強引に体をねじ込んでブレストツーパーイスを躲して前に出た。

「そんな！」

外側で押さえつけていたオセアグレイブが絶望的な声を上げる。

『ブレストツーパーイス失速！先頭はゴールデンマキシマ！バニート2番手だが苦しいか！フェールマン3番手だが内側にターボエンペラーが突っ込んでくる残り600メートル！クロスジェンティス！ゴールデンドライブが外から上がってくる！カレンブーケドランもいけるか！』

「ここからが俺のゴールデンタイムだぜえ！」

ゴールデンマキシマが全力で押し切ろうとする！

「主役は私よ！」

クロスジェンティスが追い上げる

「ようやくエンジンが暖まってきたぜえ！」

ゴールデンドライブがようやく本気を出した。

「皇帝の誇りにかけて！負ける訳にはいかない！」

バニートを躲し、2番手に上がったターボエンペラーが末脚を開放する。

『先頭ゴールデンマキシマ！しかしターボエンペラーが迫る！クロスジェンティスとゴールデンドライブも追い上げる！残り200メートル！ゴールデンマキシマ懸命に粘る！ターボエンペラーが並ぶ！クロスジェンティスとゴールデンドライブも並んだ！4人が横一線！』

「こんな所でえ！負けてたまるかあ！」『いくぜえ！』

『ターボエンペラーが抜け出た！わずかですがしっかりと前に出たところでゴールイン！勝ったのはターボエンペラーです！7冠目達成！初代皇帝シンボリルドルフに並びました！』

多くの歓声に迎えられて、ターボエンペラーは右手を高く上げた。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 13話 フランスへ

激闘を制したターボエンペラーだったがその代償は決して小さく
なかった。

「関節炎ですね」

「また・・・ですか・・・」

「今回は無理な体勢で力をかけた事が原因ですね」

医者言葉にターボエンペラーはブレストツープースを躲した時
かと思った。

接触しないようになり強引な走りになった為に体にかかった負
荷に関節が限界を迎えたのだ。

「おそらくですが今後も関節炎が起こる可能性がありますね。あまり
に悪化するようですと屈腱炎も起こす可能性があります」

前回の場合はそこまで深刻な状況ではなかったので医者の表情も
安心させるような笑顔だったが、今回の表情は真剣そのものだ。

「トレーナーさんとは今後の事をしっかりと話し合う事をお勧めしま
す。医者として、これ以上の無茶は賛同できません」

「はい・・・」

ターボエンペラーは熱を持つ右足をさすりながら返事をした。

「そうか・・・やはり秋のG13連戦はお前には負担が大きすぎたか」
大塚トレーナーはそう言って視線をターボエンペラーの右足に向
けた。

「いいえ、あの無茶な走りさえなければ問題なかったと思います」

あそこで抜け出なければ恐らく勝てなかった。

ターボエンペラーはあの判断に後悔は無い。

「治療期間を考えると大阪杯は無理だな・・・ならいつそ早めにフラン
スに行くか」

「早めに・・・ですか？」

「日本のターフと違ってあちらのターフはクッション性が高い。その
反面長い芝生が足にまとわりついてパワーが無いと速度がだせん。
さらに移動の負担や現地になれる事を考えれば早めに現地入りして

体調を整えた方がいいだろう。お前の体調次第だが現地でも1度レースを走ってから凱旋門賞に挑むべきだろうな」

「そうなるかとフォア賞でしょうか？」

「お前の体調次第だがそうなるな」

凱旋門賞の前哨戦として選ばれるフランス重賞のフォア賞。

しかし凱旋門賞での活躍ウマ娘が少ないので近年ではステップレースとしては疑問視されている。

「トレーニングは日本のトレセン学園と交流がある学校が受け入れてくれる。凱旋門賞に向けて俺も勿論学園側も全力でバックアップしてくれる。心配はするな」

「はいー」

ターボエンペラーの怪我の治療が終わり、渡航しても問題がない状況になった為に仲の良い友人達が旅立つ彼女に激励会を開いてくれた。

「それじゃあエンペラーのフランス凱旋門賞制覇を願って・・・カンパーイ！」

「カンパーイ！」「ゴールデン!!」

スカーレットトランスの掛け声と共に全員がグラスを鳴らした。

2名ほど異なる掛け声だったが気にする者は居ないだろう。

「ありがとう、応援してくれる皆の期待に応えられる様に全力を尽くすよ」

「がんばってねエンペラーちゃん、私ももう一度エンペラーちゃんと戦えるようにレース頑張るから！」

メロディールンがそう言つて笑顔を見せてくれる。

「有《font:ul40》馬《font》記念じゃあゴールデンにやられちゃったからな」

「今度は俺がゴールデンに決めてやるぜ」

ゴールデンドライブとゴールデンマキシマがそう言つて拳を突き出す。

「カイザーシユラクにリベンジしてきなさい！そして今度は私が貴女にリベンジするから！」

発起人のスカーレットフランスがそう言って指を突き付ける。

「ああ、必ずリベンジを果たしてくる。そして皆でもう一度勝負をしよう」

ターボエンペラーはライバルであり友人である彼女らが居る事がとてもありがたい事だと思った。

たった一度の敗北や2度目の怪我でも落ち込んでいる暇すらない。それは時々内向きに考えすぎてしまう自分には程よく前を向く機会をくれる。

「ああ絶対だ・・・絶対に・・・制覇してみせる」

そして渡仏当日・・・。

「まさか会長直々の見送りとは・・・」

「凱旋門賞制覇は我々としても決して見逃せないレースだからな。たった1度ではあるが手にした栄冠を再びと願うのはおかしな事ではないだろう」

空港には生徒会を始め多くの生徒が集まっていた。

「エンペラー、(フランスでは体調に) 気を付けてな」

「マキシマム先輩・・・」

マキシマムターボからの言葉少ない激励にエンペラーは笑う。

「エンペラー、何を渡したらいいのか悩んじゃって・・・結局こんなものしか用意できなかったけど・・・」

そう言ってインパクトターボが手渡したのは幾分かすり減った蹄鉄だった。

「これは・・・?」

「私が初めてGIを勝った時につけていた蹄鉄だよ。記念とお守りとしてずっと大切にしてきたんだ」

そう言ってインパクトターボは照れたように笑う。

「貴女が勝てるようにしっかりと願いを込めておいたから」

「インパクト先輩・・・ありがとうございます!」

ターボエンペラーは蹄鉄を胸に抱きしめると見送りに来てくれた全員に手を振って飛行機へと向かった。

そしてフランスの空港にて・・・

「Willkommen! Turbo Emperor!」(ようこそ！ターボエンペラー)

「カイザーシユラーク!? どうしてここに!？」

空港で待ち構えていたカイザーシユラークにターボエンペラーは驚いた。

「アナタがこつちに来るってキイテじつとシテラレナカッタノ！」

恐らくカイザーシユラークのトレーナーらしき男性がすまなさそうな表情でこちらを見ていた。

多分どうしても言う事を聞かないので諦めて連れてきたのだろう。

日本と違いさすがに一人で行かせるには欧州の治安は少し不安だ。

勿論ターボエンペラーにも大塚トレーナーと一緒に来ている。

「Vaterもエンペラーのひさしぶりにアイタイって！」

「ふう・・・大塚トレーナー」

ターボエンペラーは困った表情のまま大塚トレーナーの方を向いた。

「まあ1日2日なら問題は無いだろう。俺の方からこちらの学園には連絡を入れておく。親戚だから問題は無いだろうしな」

「すみません、よろしくお願ひします」

「Gehen wir schnell!」(早く行きましょう！)

「Beruhigen Sie sich Kaiser! Bitt
e kontaktieren Sie uns」(落ち着けカイ
ザー！連絡はこちらまでお願ひします)

カイザーシユラークのトレーナーはターボエンペラーの腕を引つ張っていくカイザーシユラークを何とか宥めながら大塚トレーナーに自分の連絡先を伝えて後を追いかけた。

大塚トレーナーは手を振ってそれを見送ると、まずはお世話になる学園に事の顛末を伝えるために電話を取り出した。

「久しぶりだねターボエンペラー。カイザーが無理を言ってしまったってすまないね。兄さんは相変わらず忙しく飛び回っているのかい？」

「お世話になります叔父様。ええ、正月はおろか結婚記念日すら仕事で居ないなんてと良く愚痴を聞かされています」

「ははは、兄さんらしいな」

そう言つて父に良く似た笑顔を見せる叔父にターボエンペラーは実家のような安心感を覚える。

「義叔母様もお元気そうで良かったです」

「ヒサシブリねエンペラー」

カイザーシユラークの母、カイザリンマリアがターボエンペラーをハグする。

「アナタとカイザーの凱旋門賞がイマから楽しみだわ」

数日後、ターボエンペラーはフランスのウマ娘学校の練習コースを走っている。

「どうだエンペラー、初めての海外ターフは」

「噂には聞いていましたがかなり力を籠めないと思ったように加速できないですね」

「日本の芝生と海外の芝生は種類が異なるからな。葉が長くてクッション性が強い反面そこから抜け出して加速するためのパワーが必要だ」

普段硬い地面で走っている者が柔らかいクッションの上で速く走る事が出来ないように、柔らかい地面をあまり走りなれていないターボエンペラーはその違いを実感していた。

「お前のパワーなら問題ないだろう?」

「簡単に言ってくれますね。慣れは必要でしょうがやれなくはないと思います」

足元の硬さを図るようにターボエンペラーは何度かジャンプする。

「フォア賞までにこのターフに慣れるぞ。それができなければ凱旋門賞など夢のまた夢だ」

「分かっています。もう一周、タイムを計っていただけますか」

「もちろんだ」

ターボエンペラーは大塚トレーナーの掛け声と共に走り始めた。

SIDE：カイザーシユラーク

※会話文はドイツ語だと思ってください

「またエンペラーの監視か?一度勝った相手になぜそんな事を?」

「あらトレーナー、最も有力なライバルについて研究するのは当たり前でしよう?」

カイザーシユラクの言い分にトレーナーは渋い表情をする。

「そう何度も何度もフランスまでくる必要性も無いだろう。経費で落とすにしても限度がある」

「けち臭いわね!知ってるわよ!私の指導してるからって色んな名家から臨時指導の依頼をされているの!」

「ぐう・・・」

痛い所をつかれたトレーナーがうめき声をあげる。

「・・・そんなに気になるのか?」

「・・・嫌な予感が消えないのよ。あの時の勝ちがまるで偶然だった。そんな気持ちが消えないの」

カイザーシユラクが見つめるターボエンペラーは足元の硬さを確かめながら何度も走っている。

「・・・予感か。その予感を現実にさせない為にも練習に戻るぞ」

「また来てもいいかしら?」

「俺の財布が空にならないかな」

カイザーシユラクは後ろ髪をひかれながらも帰っていった。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 14話 前哨戦

フランスでのトレーニングは順調に進み、気が付けば前哨戦となるフォア賞の開催時期となった。

念入りにトレーニングはしてきたが初めての海外レースにターボエンペラーは流石に緊張していた。

「顔が怖いぞ、エンペラー」

控室で最後の打ち合わせをしていた大塚トレーナーが眉間に皺を寄せているターボエンペラーにそう言った。

「少し・・・緊張してまして」

「だろうな。初めての海外レースだ。お前を応援する声は無い。そのプレッシャーがどれほどか、実感しておいて良かっただろう？」

「はい」

日本では同じレースを走るライバル達から敵意を向けられる事はあったが、観客から敵意を向けられる事は少なかった。

勿論応援しているウマ娘に勝ってほしいと思う気持ちはあっただろうが、それでも全員がこちらに敵意を向ける、あるいは最初から意識もされないと言うのは初めてだ。

「海外で走ると言うのはこう言うことだ。凱旋門賞に勝ちたければなれるしかない」

「はいー」

まだ不安が消え去った訳ではないがそれでもやるしかないとターボエンペラーは気持ちを切り替えた。

フランスロンシャン競《font:ui40》馬《font》場。

凱旋門賞が開催される伝統ある競《font:ui40》馬《font》場《font》場でその前哨戦として開かれるフォア賞。

近年は凱旋門賞での活躍ウマ娘を出せていない事もあってか注目度は下がりがつつある。

それでも同じ競《font:ui40》馬《font》場、同じ距離で走るレースには多くの観客が集まってくる。

※実況はフランス語だと思ってください

『まもなくこのロンシャン競《font:ul40》馬《font》
場にてGⅡフォア賞の開始となります。このフォア賞から凱旋門賞
へと出走するのはどのウマ娘なのでしょうか。今年は遠く日本から
参加いたしますウマ娘もいます。果たして実力はどうかでしょうか』
日本とは異なる雰囲気を感じながらターボエンペラーは地面の様
子を確かめる様に軽くジャンプをした。
何とかなれた柔らかい地面の感触を感じながらウォームアップを
する。

そんなターボエンペラーの様子を出場する他のウマ娘はいぶか
し気に見ている。

近年はフォア賞に参加する日本のウマ娘も少ない為に珍しいのだ
ろう。

「やれるだけの事をやる・・・それだけだ」

ターボエンペラーは係員に案内されて自分が身に着けている番号
と異なる番号のゲートに入っていた。

その事に違和感を覚えながらも頭を切り替えてスタートに集中し
た。

『さあレース開始です。おっと勢いよく飛び出したのは日本からやつ
てきたターボエンペラーです。果たしてその名前通りの実力を持っ
ているのでしょうか』

ターボエンペラーはあえて逃げを選んだ。

慣れないバ場を試すために、欧州のウマ娘達の様子をみる為に。

「さあ・・・どうでる！」

ターボエンペラーの逃げに欧州ウマ娘達は慌てて追いかけて始めた。
『さあ先頭は日本のターボエンペラー。その堂々たる走りっぷりは皇
帝の名前に相応しいか。追いかけるのはイプスズパピリオンだが果
たしてどうかでしょうか。その後ろにはバロンアンドレ。外からマー
キスオスカルが上がってきました』

最初の直線を駆け抜けて第3コーナー入口の上り坂を一気に駆け
上がる。

後ろを走っているウマ娘達は想定外だったであろうターボエンペ

ラーの走りへの困惑からまだ立ち直れていないのか体力を消耗してしまったようだ。

「どうした！欧州ウマ娘達の実力はその程度か！」

ターボエンペラーは態と後ろのウマ娘達を煽る。

「N e i · c h e p a s !」（舐めるな！）

欧州ウマ娘達も必死に追いかける。

しかしターボエンペラーに追いつけるウマ娘は居なかった。

『ターボエンペラーがまだ先頭だ！後ろを完全に振り切って逃げる！日本のウマ娘はこれ程やるのか！一切影を踏ませないままゴールイン！勝ったのは日本のターボエンペラーです！』

驚愕に包まれるロンシャン競《font:ui40》馬《font 》場の観客に向けてターボエンペラーは一礼すると立ち去って行った。

「優勝おめでとう。実際にレースを走ってみた感想はどうだ？」

「はい、思っていたよりは問題なく走る事ができました。これならば逃げを選ばなくても良い勝負ができたと思います」

大塚トレーナーはその言葉に頷いた。

「そうだな。だがあくまでこのフォア賞は前哨戦だ。本番よりはどうしても出場するウマ娘の格が落ちる」

「はい。そしてカイザーが居ます」

カイザーシユラクも早い段階で凱旋門賞への参戦を発表している。

「ああ、その事で俺なりに調べてみたんだがな・・・これを見てくれ」
大塚トレーナーが取り出したノートには凱旋門賞の出場を発表しているウマ娘の名前の横にマークがつけてあった。

「トレーナー、このマークは？」

「それはカイザーシユラクを邪魔する役として参加するウマ娘だ」

その言葉にターボエンペラーは少し不快感を覚えた。

「怒るなよ。それが欧州では一般的なんだ」

勝つためならば何でもやるのはターボエンペラーとて分からなく

はない。

しかし有力選手の邪魔をして勝利を奪うのは何か違うのではないだろうかと思ってしまう。

「正々堂々なんて言うのは頭の固い日本でしか通じない。ルールで反則と明記されていない以上は問題が無い。勝った方が正義だ」

勝負の世界はとても厳しい。

明らかなルール違反でもない限り敗者に抗議する権利はない。

「それにしてもこれは・・・」

「露骨すぎて俺も目を疑ったよ」

そこに記されている名前には実に5人もマークが付けられていた。

その全てが本来はスプリンターやマイラーで最高速度に優れるウマ娘達ばかりだった。

「そしてこいつらがそのペアだ」

次に大塚トレーナーがマークを付けていったのはいずれも中距離で活躍したウマ娘達である。

「これは・・・先行型は殆どいませんね」

「おそらくカイザーシユラクをオーバーペースで疲弊させて後ろから追い抜くという作戦なんだろうな」

先行型なのはわずか1人。

後はすべて差しか追い込みという非常に偏った組み合わせだ。

「これが欧州のレースですか・・・」

「徒党を組んで妨害するのは欧州では当たり前前だそうだ」

日本ではあからさまな包囲網は倦厭される傾向にある。

自分も包囲網を作られた事もあったが、あくまで個々の作戦が偶然かみ合っただけで包囲網になっただけであり、それぞれが競合して包囲網を作ろうとしたわけではなかった。

だが欧州では作戦として妨害する事が当たり前になっている。

「そして今日の走りを見てお前も警戒されると言う事だ」

今までターボエンペラーの情報は欧州では少なかった。

勿論今の世の中情報を仕入れるのは決して難しくはない。

だがこちらのレースに参加するかも分からないウマ娘の情報を仕

入れようとは思わないだろう。

何より日本のウマ娘が欧州で、欧州のウマ娘が日本で活躍できない事がよくある為に、情報がそこまであてにはならないという事もある。

「同じ逃げは危険だな。先行、差し、追い込み・・・どれでいく?」

「・・・追い込みで行きます。同じ距離で逃げ切った私が追い込みをするとは思わないでしょう」

「日本からの情報を相手がどれぐらい調べているかは分からないが、狙いを外すという意味では悪くないかもしれないな」

「必ず、勝利をもぎ取ってみせます!」

ターボエンペラーは力強く返事をした。

SIDE：カイザーシユラーク

※会話文はドイツ語だと思ってください。

「カイザー、こいつを見てくれ」

トレーナーがタブレットをしていた私にタブレットを見せた。

「これは出場メンバーね?これがどうしたの?」

「明らかにお前を潰しに来ているメンバーだ。こいつも、こいつも、こいつも全部スプリンターだ」

トレーナーがそう言っただけでいく名前は確かに全員欧州スプリンターとして有名なウマ娘達だ。

「だから?」

「カイザー!お前は状況が分かっているのか!」

怒鳴るトレーナーに私は顔をしかめた。

「煩いわね!怒鳴らないでよ!」

「カイザー。お前の走りは無尽蔵とも言えるスタミナでライバル達を蹴落とす強引な逃げだ。秀でた速度は持っていない。だから中距離がお前の適性なんだ。スプリンターやマイラーにはどうやって足速さでは勝てない。たとえば1000メートルしか走れなくてもその間にお前を潰してしまえばいいんだ」

トレーナーの表情は真剣だ。

私も言われている事は分かる。

でも……。

「私は今度の凱旋門賞でも逃げを選ぶわ」

「カイザー！」

「その程度の妨害で揺らぐほど私は弱くないわ！これ以上の議論は時間の無駄よ！それでも反対すると言うのなら今すぐ私のトレーナーを降りて！」

私はそう言つて練習コースへ向かつていった。

そんな私をトレーナーは複雑な表情で見つめていた。

「私は……絶対皇帝なのよ！」

その言葉はかつての自分への戒めでもあった。

それは忘れもしないドイツチェスダービーだ。

その頃は今のトレーナーとは別のトレーナーが私を指導していた。

豊富なスタミナを生かした豪快な走りで私は連戦連勝だった。

当然周りも強い期待を私に寄せた。

ダービーを制するのは私だと。

でも、私はドイツチェスダービーを勝つ事ができなかった。

負けた相手は前哨戦で勝利したウマ娘。

私の実力ならば負けるはずのない相手だった。

しかし、慢心が生んだわずかな調整不足が原因で私はダービーを逃してしまった。

そしてそこから私の迷走が始まった。

次々と作戦を変え、そして続く連敗。

あれほどあった名声はあっという間に消え去り、ついにはトレーナーも私の元を去つていった。

今のトレーナーは学園が丁度担当が居ないトレーナーだからと連れてきただけに過ぎない。

そんな彼は半ば学園から義務的に任された私に根気良く付き合ってくれた。

その結果、私はドイツの絶対皇帝と呼ばれる程の実力を身に着け、ついには凱旋門賞すら制覇した。

だからこそ私は逃げで勝つのだ。

「だってそうじゃなきゃ・・・」

一瞬過った不安をかき消すように私は走る事だけに集中した。

第3シリーズ 皇帝のキセキ 15話 皇帝の凱旋

世界から注目される凱旋門賞を前に、人々は慌ただしく動く。

例えばレースの準備だったり、あるいは参加選手への取材だったり。

ターボエンペラーも当然現地の取材や日本からやってきた報道陣からの取材を受けたりと忙しい日々を過ごしている。

取材その1、フランス新聞社からの取材

※通訳が同席して会話していると思ってください

「こんにちはターボエンペラー。フォア賞は見事でした」

「ありがとうございます」

「日本でも優秀な成績ですからこの程度は当たり前と言ったところでしようね」

「いえ、こちらと日本では芝の状況が大きく異なりますから正直初めてのレースで不安でした」

「やっぱり日本人って謙虚なんですね」

実際に正直に語っているだけなのだがやはりその辺りの反応もギャップがあるなどターボエンペラーは感じていた。

「凱旋門賞では一度敗れているカイザーシユラクとの闘いになりましたが自信はありますか？」

「自信がないとは言いませんが簡単ではないと思います。ただ・・・」
「ただ？」

「自信がないからと言って露骨な手段を取るつもりはありません」

その言葉に取材をしていた記者たちの表情が何を言っているんだと言った表情になった。

「実力が足りないのを策で補うのを否定はしません。だからと言って策ありきで己を鍛えるのを止めてしまうのは本末転倒でしょう」

「それはつまり・・・こちらのウマ娘達が手を抜いていると？」

「解釈はそちらに任せます」

その言葉に記者たちは面白くなさそうな表情をしていた。

取材その2、日本新聞社からの取材

「ターボエンペラーさん、凱旋門賞への意気込みを聞かせてください」
「はい、ジャパンカップでの雪辱を晴らす為、また日本のウマ娘達の誇りとなれるよう全力を尽くす所存です」

「カイザーシユラークですね。見込みはどうですか？」
「簡単ではないと思います。ですが私がだせる全力でもってリベンジを果たしたいと思います」

日本での取材ではどうしても悪意が混ざる事があつたが今回の凱旋門賞には日本のウマ娘はターボエンペラー一人しか居ない為に純粹に応援してくれる取材にターボエンペラーはある種の潔さを感じていた。

「日本からも沢山の応援が届いていると思います」

「はい、皆さんの期待に応えられる様に尽力いたします」

久しぶりの純粹な応援にターボエンペラーも気分よく受け答えができた。

SIDE：カイザーシユラーク

※会話はドイツ語だと思ってください

「ハアツ！ハアツ！ハアツ！」

「カイザー、これ以上はオーバーワークだ。一度休憩するんだ」

あの後、私のトレーナーは私のそばから離れる事無くトレーナーを続けている。

流石にそこまでしてくれる彼の言葉を無視する事はできない。

それにこれ以上無理しても能力が上がる事は無いだろう。

「ほら」

私はトレーナーが差し出したタオルを受ける。

「・・・ありがとう」

「俺はお前のトレーナーだからな。お前がやれると言うのなら、俺はお前を全力で支えるだけだ」

私の心を読んだのかトレーナーはそう言って微笑んだ。

私はそんな彼から視線を外した。

この間の喧嘩からどうしても彼に素直になれないからだ。

「カイザー、勝つぞ」

「・・・勿論よ」

素直になれない私を彼はどんな表情で見つめているのか知るのが怖い。

そして凱旋門賞が始まる・・・。

※実況はフランス語だと思ってください

『今年もやってまいりました凱旋門賞。世界各国から集いました20人のウマ娘。果たして勝つのはどのウマ娘でしょうか。前年度覇者カイザーシユラクでしょうか。それともはるか遠く東の国、日本からやってきたターボエンペラーでしょうか。皆さんが注目するウマ娘は誰ですか?』

様々な思いと歓声に包まれるロンシャン競《font:ul40》馬
《font》場。

私は控室でレースに向けて集中していた。

その時だった。

「エンペラー、お客さんだ」

「私に?」

誰かが訪ねてくるとは連絡を受けていなかったが・・・。

「エンちゃん、応援に来たわよ」

「お母様でしたか。連絡ぐらくれれば良かったのに」

しかしお母様は何やらニヤニヤしている。

「エンちゃん、サプラーイズ!」

お母様がそう言うともう一人誰かが入ってきた。

「お父様!」

「やあ、久しぶりだねエンペラー」

そこにいたのは忙しくて最近全く会えていなかったお父様だった。仕事仕事でお前の応援を全くできていなかったからな。何とかスケ

ジュールを調整して駆けつけたよ」

「流石のこの人も凱旋門賞は特別なのね」

自分の特別な日は仕事だったのと言いたげなお母様の表情に私は苦笑するしかなかった。

「ちゃんと補填はしているんだけどな。この間だつて行きたがつていた高級レストランに何とか頼み込んで予約したんだがな」

「つもー！そうだけどそうじゃないの！」

女心を分かってほしいお母様と仕事人間で気の利かないお父様。

しかしこれで時々私に隠れてはいちやついているのだから割れ鍋に綴じ蓋という奴なのだろう。

「あー・・・おほん！そろそろお時間となりますので・・・」

大塚トレーナーがそう言うのと両親は少し恥ずかしそうにしながら控室から出て行った。

「まあなんだ・・・緊張は解れたんじゃないか？」

「そうですね・・・気が抜けすぎてなければ良いのですが」

そう言つて私は軽く頬を叩いて気合を入れなおした。

『さあ！世界中が注目するウマ娘達が次々とゲートに収まっていきます！世界の頂点に立つのは一体誰でしょうか！』

全員がゲートに収まり、一瞬の静寂が訪れた。

ガタンツッ！

ゲートが開くと同時にウマ娘達が飛び出す。

『スタートしました！先頭争いですがやはり前年度覇者のカイザーシユラークが好スタート！しかしそこにアベイ・ド・ロンシャン賞優勝ウマ娘のフォートミストラルが突っ込んでいく！他にも各国のスプリンターとマイラーがカイザーシユラークを取り囲む！一方日本のターボエンペラーは勢いがつかないのか後ろにいます！』

SIDE：カイザーシユラーク

※会話はそれぞれの言語だと思ってください

私の周りを何人ものウマ娘が囲もうとする。

「その程度でえー！」

凱旋門賞までに鍛えに鍛えた加速で私は先頭を譲らない。

「嘘！私より早い!？」

「かまわない！このまま体力を消費させれば！」

困んで潰す事が出来なくなつたので私をオーバーペースで疲弊させる方向に切り替えたのだろう。

だが……。

「それが分かつて対策してないわけないわ！」

元々スタミナには自信がある。

長距離は流石に厳しいが2400メートルなら押し切れるだけのスタミナを確保した。

「やれる！私ならやれるのよ！」

SIDE：ターボエンペラー

「やはり気に入らん……。」

私は後ろの方から走りながら前の様子を伺う。

そこには5人のウマ娘に追い立てられるカイザーシユラークの姿がある。

トレーナーからは正々堂々は日本だけが守る頭の固いルールだと言われた。

それは事実だろう。

だが……。

「気に入らないものは気に入らない！ウマ娘たるもの！妨害有りきの勝利など誇るな！」

「ひっ！」

私の放つプレッシャーに前を走るウマ娘が怯えて速度を上げた。

『さあ第3コーナーを回ってフォルスストレートを通って第4コーナーに向かいます！先頭は変わらさずカイザーシユラーク！その後ろについたウマ娘達はそろそろ限界か！徐々にカイザーシユラークが抜け出して単独先頭に立ちます！後方集団では前を狙って動き始めました！』

SIDE：カイザーシユラーク

「はっ……ここまでか！もうね！」

「あとは……！頼んだ……！」

元々中距離適性の無いウマ娘達だ。

途中で完全に力尽きて速度が落ち始めている。

もうすぐ第4コーナーに入る。

ここからが勝負だ！

必ずエンペラーはやってくる！

SIDE：ターボエンペラー

「もうすぐ最終直線か……むっ！」

私の前を走るウマ娘達がスツと横に避けて前から疲弊したウマ娘達が下がってきた。

「ちい……ここに来て邪魔するか！」

私を確認すると横に広がって蓋をするように邪魔をする。

「やはりお前たちの走りは気に入らん！」

私は激情と共に強く踏み出すと前に突き進む。

「ぶつかるつもり!？」

「愚か者が！広がりすぎて内側がから空きだ！」

「しまった！」

元々内ラチ側の追い込みウマ娘が不利を受けやすいとしてロンシャン競《font:ul40》馬《font》場はオープンストレッチを使用できるように改修された。

毎年必ず使用される訳ではない上に改修されたのが近年だった為に妨害役のウマ娘達もオープンストレッチの事をすっかり忘れていたのだろう。

「カイザアアアアアアアアア！」

内側から全力で前に突き進む。

未だに先頭を走るカイザーを目指して。

『先頭はカイザーシユラクだ！しかし後ろから日本のターボエンペラーがもの凄い勢いで追い上げる！前を走る欧州ウマ娘達をあっという間に追い抜いて追いつきそうだ！』

「いけー！エンペラー！そこだー！」

「エンちゃん頑張つて！」

両親の声に後押しされて私は一気に他のウマ娘達を抜き去った。

S I D E：カイザーシユラーク

「カイザアアアアアアアアアアアア！」

やっぱり最大の敵はエンペラーだった。

「来たかエンペラー！」

他のウマ娘とは比較にならない末脚で私を追い上げてくる。

だが一度は勝った相手だ！

「負けるはずが．．!?」

しかしあの時とは違い私はあつさりと追い抜かれた。

「そんな！負けたくない！」

必死に私は追いつがった。

S I D E：ターボエンペラー

必死な表情で追いつがるカイザーを置き去りにして私はゴール板を駆け抜けた。

『ターボエンペラーがあつという間に突き抜けた！カイザーシユラークも懸命に追いつがるが引き離される！勝ったのは日本の皇帝ターボエンペラーだあ！まさに皇帝の名に相応しい走りでした！』

私は観客に手を振って応える。

「エンちゃん！」

「わっ！お母様！」

感極まったお母様が私を抱きしめた。

「おめでとう！本当におめでとう！よく頑張ったわね！貴女は私の最高の娘よ！」

「はい．．．ありがとうございます．．．お母様．．．」

私とお母様は涙を流したまましっかりと抱きしめあった。

S I D E：カイザーシユラークのトレーナー

「負け．．．た．．．」

カイザーはゴールを超えた辺りで崩れ落ちる様に膝をついた。

負けた事がそれほどショックだったのだろう。

俺はゆつくりとカイザーに近寄っていく。

「カイザー、惜しかったな」

俺が声をかけるとカイザーは壊れかけのおもちやの様な硬い動きでこちらを見た。

その表情は驚くほどに絶望に満ちたものだった。

「カ、カイザー?」

「お願い・・・見捨てないで・・・一人にしないで・・・」

そこに居たのは弱り切った少女だった。

そんな様子を見て俺はカイザーがかつてトレーナーに見放されたという事を思い出した。

「・・・大丈夫だ。俺はお前のトレーナーだ。たとえお前が絶対皇帝では無くなったとしても、絶対にお前を見捨てない」

俺はそうカイザーに言い聞かせながらゆっくりと抱きしめてやった。

「本当?」

「ああ、本当だ」

そうさ、俺が見捨てる訳が無いだろう。

俺を始めて一流トレーナーにしてくれた俺だけの皇帝を・・・。

第3シリーズ 皇帝のキセキ エピローグ+オマケ

フランス凱旋門賞を終え、ターボエンペラーは帰国の為に空港に居た。

「エンペラー、ゲンキでね」

「カイザー、君もな」

まだ少し落ち込み気味のカイザーシユラークとハグをするとターボエンペラーは飛行機に乗り込んだ。

その飛行機が遠く消えて見えなくなってもカイザーシユラークは空を見つめていた。

「カイザー、次のレースがお前を待っているぞ」

「ええ、今度は負けないわ」

トレーナーに促されて後ろ髪をひかれながらカイザーシユラークは空港を立ち去った。

長いフライトを終えて漸く故郷の地に降り立ったターボエンペラーを出迎えたのは多くのファンの声と無遠慮なフラツシユの嵐だった。

それだけの事をしたのだから当たり前だろうと言った雰囲気のマスコミに多少の不快感を覚えつつもファンの居る手前事を荒立たせる訳にはいかない。

仕方なしに笑顔でファンには手を振る。

すると早速記者が大量に群がってきた。

「エンペラーさん！凱旋門賞制覇おめでとうございます！」

「ありがとうございます」

「かつて敗れたカイザーシユラークをあっさりと躲した時の気分はいかがですか！」

「あの時は何かを考えている余裕はありませんでした。ただ終わった後に勝てたという実感が湧いてきた、それだけです」

矢継ぎ早の質問にターボエンペラーは次々と答えていくが流石に長時間取材に付き合うのは疲れたままの今ではやはり辛い。

「すみませんが後日トレセン学園にて記者会見を開きますので質問は

ここまでとさせてください。フランスから戻ったばかりのエンペラーを疲弊させたくはないので」

大塚トレーナーがそう言って記者に言うのと良識ある記者達は直ぐに退き、少し渋った記者達もファンに睨まれてスゴスゴと退いた。

ターボエンペラーはファン達の声を受けながら空港を後にした。

学園でも多くのファンと先輩後輩達に、ついでにマスコミのフラッシュにも出迎えられて何とかターボエンペラーは理事長室までたどり着いた。

「祝福ッ！実にめでたい！見事な走りだった！貴殿は学園の誇りだ！」

「ありがとうございます理事長」

秋川理事長からの言葉に頭を下げる。

そしてそこにはシンボリドルフも居た。

「ついに私の記録を打ち破られてしまったな。栄枯必衰会者定離の言葉通り、私も後塵を拝する時が来たようだ。皇帝の名は君のものだ。エンペラー」

シンボリドルフはそう言って私に手を差し出した。

「・・・いいえ、やはり貴女は皇帝のままですよ。皇帝が退位したとしても皇帝であった過去が消えてなくなる訳ではありません。いつか私が貴女の地位を篡奪するまで怯えていてください。初代皇帝殿」

差し出された手を握りつぶさん勢いで握るターボエンペラー。

「それはそれは・・・容易く奪われる程私は弱くはないぞ？」

一見すると穏やかで凜とした雰囲気のあるシンボリドルフだがプライドの高さは実は誰にも負けていない。

普段はどうしても怯えられてしまう為に人の好い空気を纏っているが実際は未だに鋭い切れ味を誇る名刀だ。

もしここに他のウマ娘達が居たら怯え切ってしまったであろう空気に秋川理事長は呵々と笑い、たづなさんはため息をついていた。

2人が何らかの形で決着をつけようとするのは時間の問題かもしれない。

（FIN）

祝！シンボリクリスエス&タニノギムレットウマ娘化記念SS

インパクトターボと本家版シンボリクリスエスとタニノギムレットの日常編

「クリスエス」

「・・・なんだ」

眼帯をした気の強そうなウマ娘、タニノギムレットが褐色肌のクールなウマ娘、シンボリクリスエスに声をかけた。

「お前はコイツのライバルを気取っているらしいが俺があいつに初めての黒星をくれてやったんだ！ライバルはワタシだ！」

「・・・くだらない」

「なんだと!?!」

「私に与えられた使命は勝利、ただそれだけだ。相手が誰であろうと勝つ。それ以外の言葉は不要だ」

機械的にそう答えるシンボリクリスエス。

「はんつ！所詮は出遅れウマ娘の戯言だな！」

「なんだと・・・!?!」

「クラシックで芽が出なかったからとさっさとシニアに逃げちゃった弱腰には分からねえだろうなあ！」

「貴様！」

流星にシンボリクリスエスもその言葉には我慢ができなかった。

「だー！煩ーいー！」

今にも喧嘩が始まりそうな2人を止めたのは間に挟まれて居眠りしていたインパクトターボだった。

「ギムレットにはいつかダービーの借りを返すしクリスエスには有
《font:ui40》馬《font》記念のリベンジを果たす！全
員まとめて私が逃げ切る！」

「なんだと！やれるもんならやってみる！」

「その言葉、飲み込めると思うな！」

3人は激しく睨みあう。

「・・・ギムレット、クリスエス、インパクト、3人とも宿題追加」

「「あ・・・」」

今が授業中だった事を3人は思い出した。

番外編 とある競馬番組にて インパクトターボ編

「こんばんは、朱雀の川中です。本日も張り切って名馬を語ろうをやっていききたいと思います」

競馬好きで有名な芸人と競馬は良く分らないがテレビ映えるアイドルが拍手をする。

「さあ！本日は皆さんお待ちかね。インパクトターボを語ろうの回でございませう！」

「待ってました！」

小太りな芸人がそう言って囃し立てる。

「もう近代競馬を語るうえで外せない名馬ですからもう競馬ファンならご存じなのは当たり前ですがNGYの皆さんはご存じ無いですよね？」

「私は競馬を全然知らないの……」

「私입니다」

アイドル達が申し訳なさそうに顔を見合わせている。

「いえいえ、この番組のコンセプトは競馬初心者に競馬の何が凄いか、競馬がなぜこうも人を魅了するのかを伝える為の番組ですので大丈夫ですよ」

そう言って川中は番組を進行する。

「ではこちらのモニターにドーン！はい、こちらがインパクトターボです。さてこのおウマさん、ある凄い特徴があるのですが何か想像がつきますか？清州さんどうぞ」

「えっと……とっても強かった……とかですか？」

指名されたアイドルが悩みながら答えた。

「まあある意味それも正解ではありますね。実際の成績から見てください。なんと！26戦20勝という好成績を収めています！」

「「すごいー！」」

アイドル達が驚いたようにはしゃぐ。

「勝ちに勝ちまくっているのも確かに凄いですね、一番すごいのは26戦というレース数なんです。中央競馬では基本的に勝てる馬程

出走数が少なくなる傾向があります。これはおウマさんが非常に繊細な動物だから無理をしまして事故を起こしてしまわないように馬主さん達も警戒するからなんです」

「へーそうなんですねぇ」

「しかもおウマさんの現役期間は短い馬ならたった2年。長い馬でも4年から5年と言われています。それ以上は基本的にレースには出れても勝てないのが普通です。人間に例えるならば現役バリバリの全国大会出ちやうような大学生に中年のオッサンが挑むようなもんです」

「えーそんなに短いんだ!」

アイドル達は感心したように声を上げる。

「こちらがインパクトターボの全出走レースです」

川中の声に合わせてモニターが切り替わる。

「見ての通り現役期間は3年と半年。そして見てもらえば分かりますが2着4回3着2回と4位以下になった事が一度もありません!」

「えーすごい!」

「そして持っている記録も凄いです。デビューから皐月賞まで10戦10勝の無敗記録、18連続連帯記録、連帯と言うのは昔は1着2着を予想しなければならなかったので2着までに入っておウマさんの事を連帯と呼んでいるんですがこの18連続連帯は歴代記録第2位です。第1位はかつて日本最強と呼ばれたシンザンという名馬中の名馬が19回でこの記録に迫る成績を出せる馬は今後出ないだろうとまで言われていました」

「ええー!めっちゃめっちゃ凄いですか!」

リーダー格のアイドルがそう言っ指をさす。

「そんな強い強いインパクトターボですが、もっと凄すぎる記録があるんですがそれが何なのかと言いますと、なんと!驚異の大逃げ率100%です!」

「大逃げって何ですか?」

手を挙げてアイドルが質問する。

「はい、勿論ご説明いたします。おウマさんの走り方にはいくつかの

種類があります。最初は一番後ろを走って最後に追い抜く追い込み、次に真ん中より後ろを走って全体の様子を伺いながら追い抜く差し、真ん中より前を走ってチャンスを狙う先行、そして最初から最後まで先頭を走り続ける逃げ、この4つが主な走り方です。そして大逃げとは逃げの中でも特に特徴的な走り方で通常の逃げが単純に先頭を走っているだけなのに対して大逃げはとにかく後ろを引き離して走ります。もう10メートル20メートルは当たり前前、場合によっては50メートル以上引き離す事もあります」

「そんな走り方があるんですね」

「でもこの走り方は一般的では無いと言いますか普通はめつたにやりません。それは何でかって言いますと大逃げはこう言う風に言われているんです。はいこちら」

モニターがまた切り替わる

「大逃げは、勝てない馬のする事だ」

「どういう事なんですか？」

「大逃げという作戦は最初から飛ばしますから当然おうまさんも疲れてしまいます。ほら、良く学校のマラソン大会とかで最初だけ張り切ってトップを走るけど途中で疲れ切っちゃって最下位でゴールする子って居るじゃないですか。あれと同じ様なものだと思います」

画面にデフォルメされた小学生が必死に走った後疲れ切ってゴールする絵が映る。

「あー確かにそんな子居ますね」

「ですから大逃げは勝てない馬が奇策として他の馬のペースをめちゃくちゃにしてやろうっていう一か八かの作戦なんです。偶にそのまま逃げ切っちゃおうおうマさんも居ますけど大体は途中で抜かれて負けてしまいますね」

「えー！でもインパクトターボは大逃げ100%でめちゃめちゃ勝ってるじゃないですか！」

「まさにその通り！そこがインパクトターボの凄い所なんです！実際にレースがどんな様子なのか見てみましょうか」

映像が切り替わりレースの映像になった。

「えーこれはインパクトターボのデビュー戦の映像ですね。普通デビュー戦で走るおウマさんはレースにも慣れてないですし騎手だってどんな作戦が得意なのか分かってないですから大逃げなんてまずやらないんですがインパクトターボは見ての通りドンドン後ろを引き離していきます」

川中の音声がかれて実況の音声に代わる。

「すでに20馬身近い差が開いています。後続はついに痺れを切らして上がっていくようですが思うように上がりません。インパクトターボだけが第4コーナーに入ります。後続がやっと上がってきませんがこれは完全にセーフティリードだ。直線に入ってインパクトターボ一人旅。ですが失速する気配も緩める気配もありません。鞍上の若井騎手ムチは打っていませんが流す様子もありません。インパクトターボ見事な逃走劇で今ゴール板を駆け抜けましたゴールイン」

映像がスタジオに戻った。

「これ以降インパクトターボは引退するまでずっと大逃げで走り続けるといふ信じられない事をしました。でもこう思いませんか？何でそんな走り方をしたのかと」

「たしかに」

「その理由はいくつかあります。まず一つ目！」

川中の声に合わせてモニターに表示される。

「常に先頭を走らないと気に入らない性格！」

「えー！」

若干わざとらしい驚きの声があがる。

「調教師や騎手のお話を伺うとインパクトターボは他の馬が自分の前を走っているのがとにかく気に入らないみたいです、それはもう全力で抜き去りに行ったらしいです。このせいでまず逃げ以外の選択肢が無くなってしまったそうです」

「でもそれだったら大逃げする必要は無いんじゃないですか？」

「ええ、ですので2つ目がこちら！」

再びモニターが切り替わる。

「末脚の弱さと驚異的な粘り強さ！末脚と言うのはおウマさんのラストパートの事です。ゴール直前の直線で全てのおウマさんは全力疾走します。そしてインパクトターボはこの末脚があまり早くなかったんです。一方で皆さんもそうでしょうけど全力疾走って長続きしませんよね？インパクトターボはこの全力疾走が長続きするおウマさんだったんです」

「なるほどー」

「良く分るレースがありますので映像をご覧ください。どうぞー」

映像が切り替わりレース場になった。

「こちらはインパクトターボと言えばこのレースと言われている2003年の有馬記念です。この時インパクトターボは3番人気、1番人気は去年の覇者シンボリクリスエスというおウマさんです」

川中が言い終わると同時にレースがスタートする。

「さあスタートしました好スタート好ダッシュを決めたのはインパクトターボです！間にタップダンスシチーを挟みましてその後ろにはやはりこの馬漆黒の追跡者サムシングブルーです！」

川中が自分なりのレース実況を行う。

「ゼンノロブロイと1番人気のシンボリクリスエスが力強い走り！1週目のスタンド前先頭を行くのは逃亡者インパクトターボ！その後ろ2番手に追跡者サムシングブルーがインパクトターボをロックオン！シンボリクリスエスは馬郡の中頃を走っている！万能勇者アグネスデジタルはここにいる！」

川中の実況にもどんどんと熱が入っていく。

「さあ最終コーナーを回ってインパクトターボがまだ先頭！漆黒の追跡者サムシングブルー今日はどうした追いつけない！前年度覇者のシンボリクリスエスもものすごい勢いで上がってきたが苦しい！抜かせない！抜かせないインパクトターボ！粘る！粘る！頭半分でも前に行かせるものか！粘って粘ってゴールイン！」

「うおー！」

他の競馬好き芸人たちの雄たけびが聞こえる。

「凄い凄い！」

アイドル達もレースを見て興奮したようだ。

「そんな素晴らしい活躍をしたインパクトターボですがお父さんとしても非常に優秀です。こちらをどうぞ！」

何頭かの馬がモニターに表示される。

「こちらはインパクトターボの子供で特に目立った活躍をした4頭をピックアップいたしました。まず1頭目が真っ白な白毛馬のシルクヴェール。このおウマさんは白毛という真っ白な毛を持つおウマさんとして世界で初めてGIレースに勝利したおウマさんです」

「世界で初めて!？」

「はい、そもそも白毛のおウマさんは競走馬の世界では非常に珍しいんです。世界中の競走馬の中でも0.04%とかそんなレベルの数しか居ません。当然そんな少ない数のおウマさんが勝つのもこれまた非常に珍しいんです。そんな中競馬に白毛馬が登録されてから世界で初めてGIレースで勝利したのがこのシルクヴェールなんです」

「うそー！」

「そんなに少ないんだー！」

「そして次がこちら、バクソウオーです。このおウマさんは短距離では負け知らずです。おウマさんのレースは1000メートルから1400メートル以下の短距離、1500メートルから1800メートル以下のマイル、1900メートルから2400メートル以下の中距離、2500メートル以上の長距離と距離で分けられていますが、このバクソウオーは1400メートル以下だと負けがありません！そもそも母方のお父さんがサクラバクシンオーっていうこちらも短距離で無敵を誇ったおウマさんですね」

「へー！」

「そして次がマキシムムターボ！このおウマさんは日本初の凱旋門賞制覇を達成したゴールドシップというおウマさん最大のライバルとして何度も戦っては勝利してますね。そして最後が皆さんご存じターボエンペラー。ついこの間普通のニュースや新聞でも凱旋門賞制覇したおウマさんとして有名になってましたね」

「あー確かにニュースで見ましたー！」

「そんな優秀な血統を残したインパクトターボの凄さ、皆さん分かっていただけたでしょうか」

「はい分かりましたー」

「ありがとうございます。それではまた来週お会いしましょう！バイバイ！」

番外編 とある競馬番組にて マキシمامターボ編

「こんばんは、朱雀の川中です。本日も張り切って名馬を語ろうをやっていききたいと思います」

競馬好きで有名な芸人と競馬は良く分らないがテレビ映えるアイドルが拍手をする。

「本日の名馬はこちら！最凶と名高いゴールドシップの最大のライバルマキシمامターボです！」

何人かの芸人がゴールドシップという名前を聞いて苦々しい表情になる。

「おや岳海さん表情があまりよろしくありませんがどうかしましたか？」

「いや俺はね、こりやもう絶対に三冠馬がみられると思って菊花賞をマキシمامターボで買ったのよ。そしたらゴールドシップにやられちゃってさ。もう悔しくて悔しくてその日寝られなかったんだよ」

「岳海さんはターボ党でしたか。いや本当にあれは悔しいレースでしたね」

競馬談義を始めてしまう司会者にカンペが見せられたのか会話を途中で切って司会に戻った。

「さて、それでは本日のゲストNGYの皆さんです」

「よろしくお願ひしま〜す」

ゲストのアイドル達がカメラに向かって手を振る。

「今回も競馬初心者のNGYと一緒に競馬が何故こうも人を魅了するのか、名馬とは一体どんな馬なのかを見ていききたいと思います」

会場にいる全員が拍手をする。

「はいそれではモニターにドーン！こちらがマキシمامターボです。お父さんは先週やりましたインパクトターボです」

「わ〜」

アイドル達が盛り上げる様に拍手をする。

「お父さんのインパクトターボと同じでマキシمامターボも逃げが得意なおウマさんです。ただインパクトターボとは違って大逃げはあ

「まりしませんでした」

「へーそうなんですね」

アイドルが相槌を打つ。

「さて先ほども言いましたがこのマキシマムターボというおウマさんはゴールドシップと言うおウマさんの最大のライバルと呼ばれていました」

「逆だよ。ゴールドシップがマキシマムターボのライバルなんだよ」

細かい事に拘りのある芸人がそう言う。

「まあまあ落ち着いてください。何でこんなにゴールドシップが恨まれているのか、その理由はマキシマムターボと何度も何度も戦って決定的な記録を妨害し続けてきたからなんです。こちらをどうぞー」

モニターの表示がマキシマムターボの戦績に切り替わる。

「見ての通り、マキシマムターボが負けたのはゴールドシップが殆どです！引退レースの有馬記念は別の馬が勝っていますがそちらはゴールドシップも負けてます」

「ほんとだ〜」

画面に表示されている戦績一覧にはマキシマムターボが1着かゴールドシップが1着のレースばかりでデビュー戦と引退レース以外は必ずどちらかの名前が1着である。

「そんなこんなで競い合う2頭ですがこの2頭の最大の見所と言えばやはりフランス凱旋門賞でしょう」

「その通りー」

競馬好き芸人達がにわかに騒ぎ始める。

「これまで幾多の日本の名馬達が挑んできましたが勝利する事が出来ていなかったのが凱旋門賞です」

「なるほど〜」

アイドルが感心したような声を出す。

「実はマキシマムターボは当初凱旋門賞に出走する予定では無かったです」

「え〜そうなんですか〜?」

アイドルが驚いたような声を上げる。

「では何でマキシマムターボは凱旋門賞に出走したのか。それはゴールドシップが強く関係しています。その理由とはコチラ！」

司会者がモニターを指し示すと画面が切り替わる。

「ゴールドシップに本気を出させる為に出場してほしいとお願いされたからなんです！」

「「えー！」」

態とらしい驚きの声上がる。

「ゴールドシップというおウマさんは非常に気まぐれで癖の強い性格をしていたおウマさんでしてレースの途中でもやる気を無くして走らなくなってしまう事すらあるおウマさんでした。そんなゴールドシップがライバル心むき出しだったのがこのマキシマムターボなんです。実際にマキシマムターボに食って掛かるゴールドシップの写真がコチラ！」

モニターが切り替わるとそこには全力で引っ張る厩務員を引き摺りながらマキシマムターボにもものすごい表情で威嚇するゴールドシップとそんなゴールドシップに首をかしげているマキシマムターボの写真が映された。

「こわーい！」

ゴールドシップの表情にアイドル達が怯える。

「こんな感じでマキシマムターボにだけは全力で挑むゴールドシップを見たゴールドシップの馬主さんがマキシマムターボの馬主さんに凱旋門賞に出走してほしいと説得されたそうです」

「へー！」

「そして挑んだ凱旋門賞！早速映像を見てみましょう！」

そして画面が切り替わる。

「はい、フランスロンシャン競馬場で行われる凱旋門賞の映像です。日本では最大でも18頭に制限されてますが海外ではそれ以上の数の出走数のレースがいくつもあります。凱旋門賞の場合は20頭です」

川中の解説が続いていく。

「はいまずは葦毛の暴れん坊ゴールドシップゼッケン6番！そしてそ

んなゴールドシップに睨まれているのがゼッケン19番のマキシマムターボです！さあ全馬収まりましてまもなくスタートです！」

そしてゲートが開いて馬たちが走り出す。

「スタートしました！先頭を取るのやはりこの馬日本が誇る名馬マキシマムターボ！凱旋門賞だつて逃げきつて見せると気合十分！間に沢山の欧州馬を挟みましてゴールドシップはやはり後方に位置して今はスタミナを温存します！」

川中の自分なりの実況にもドンドンと熱が入る。

「さあ第3コーナーを回って短い直線！先頭はまだまだ逃げるマキシマムターボ！そして後方待機のゴールドシップに火が付いた！ロングスパート！さあ第4コーナーを回って最終直線！マキシマムターボまだ先頭！ゴールドシップ追いつけるか！日本の悲願！凱旋門賞は取れるのか！欧州馬の伸びが悪い！そんな欧州馬を後目にゴールドシップがグングンと加速する！しかしマキシマムターボも譲らない！欧州を制するのはどっちだ！日本競馬は届くのか！マキシマムターボ！ゴールドシップ！行け！行け！行け！行ったああああああ！勝ったのはゴールドシップ！」

「ちくしよおターボが負けたああああ！」

画面が切り替わりターボ党の芸人が本気で嘆く。

「マキシマムターボにとっては非常に惜しいレースでしたがこのレースを見た欧州競馬関係者や新聞はこう評価したそうです。コチラです」

モニターが切り替わり競り合う2頭の写真の新聞記事が表示される。

「東洋からやってきた2頭の王者！同年に生まれたのは幸運なのか不運なのか！」

「「おお〜」」

アイドル達が感心した声を上げる。

「2頭のラストがあまりに凄すぎたので凄いレースが見れたという幸運と、2頭が同時に生まれてしまったという不運だった。という評価と、2頭が同年に生まれてくれたので欧州競馬は助かったという幸運

と2頭が同年に生まれてしまったので仔馬が高騰するだろうという不運だという2つの意味があるという話です」

「そうなんですね〜!」

アイドルが感心したような声を上げる。

「実際にこの後日本でマキシマムターボの弟になる仔馬やゴールドシップに近い血の仔馬が大量に買われて欧州に行ったという話です。おかげで日本産のおウマさんのセリの値段がかなり上がったらしいです」

「へ〜!」

「それでは皆さんマキシマムターボの事が良く分りましたでしょうか?」

「はい〜!」

「ありがとうございます! それではまた来週お会いしましょう! バイバイ!」

番外編 アプリ版インパクトターボ、サムシングブルー衣装違いVer&実装時開催イベント

新規イベント開始！

温泉宿SOS!?

第1話 危機到来

日頃の疲れを癒す為に温泉宿にやってきたインパクトターボとサムシングブルー。

インパクトターボ（以下イ）&サムシングブルー（以下サ）「どうちやくく!!」

電車を乗り継いでやってきた温泉宿についた2人は嬉しそうに両手を上げる。

イ「うわ〜こんなにいい感じの温泉旅館なんてよく取れたねルーちゃん」

サ「実はライスお姉さまに以前泊った事があるからオススメだよって教えていただいたんです」

イ「そうなんだ〜。う〜ん皆の都合が合わなかったのだけが残念だな〜」

サ「こればかりはしようがないですね。2人つきりで思いっきり楽しみましょう」

イ「そうだね。皆にはお土産で我慢してもらおうか」

そんな話を話しながら宿に入っていくと・・・

イ&サ「「ええ〜?!?!臨時休業〜?!?!」」

女将「本当に申し訳ございません。実は今朝温泉が出なくなってます。まいますて・・・」

頭を下げる宿の女将さんに2人は困ってしまふ。

そんな時だった。

オグリキャップ（以下オ）「む？インパクトターボとサムシングブルーじゃないか。お前たちもこの宿に泊まりに来たのか？」

タマモクロス（以下タ）「なんや様子がおかしいがどないしたんや

？」

女将「実は・・・」

女将さんが温泉が出なくなってしまうたという事をオグリキャツプとタマモクロスに説明をした。

タ「だーなんちゅー最悪なタイミングなんや!」

オ「むう・・・温泉と食事を楽しみにしていたのだが・・・」

4人「「「「シヨボッソん・・・」」」」

4人は完全に落ち込んでしまった。

女将「あの・・・せつかくここまでお越しいただいたのですからせめてお食事だけでもなさっていつてくください。勿論料金は結構ですから」

オ「いいのか!」

タ「女将はん、ウチラウマ娘やさかい食事の量だけでも半端やないで?」

女将「ですがこのまま帰っていただくというのも申し訳ないですし・・・」

サ「なぜ温泉は出なくなってしまったのでしょうか」

女将「それがどうやら源泉からくみ上げているポンプが止まってしまったみたいでして・・・予備のポンプを動かそうにも源泉まで向かう道が先日の大雨で埋まってしまつて直ぐにはどうにも・・・」

イ「私たちなら予備のポンプを動かしに行けないかな?」

全員「「「「ええ〜?!」」」」

第2話 諦めきれない温泉

女将「いくらお客様がウマ娘でも危険です。土砂崩れがどれくらいの規模なのかも把握できてないんですよ!」

タ「女将はんの言う通りや。無茶して怪我したらどないするんや」

オ「しかしタマ、このまま食事だけして帰るといのは寂しいぞ」

タ「なんやと!?!オグリが飯以外に関心を持つやと!」

オ「ん?タマは知らなかったのか?私は食事も大好きだが温泉もそれに並ぶくらいに好きだぞ?」

タ「ほえ〜初めて知つたわ。オグリにも飯以外の趣味あつたんや

な」

サ「そ、そんな事より！ターちゃん流石に無謀だよ！」

イ「そうかなあ？この辺の山はそこまで険しい感じはしないし埋まっちゃってるとは言っても道はある訳だし」

女将「確かに普段であれば車で向かえる道ですので危険で分かり辛い道と言うわけではありませんが・・・」

イ「私も温泉を諦めたく無いし困った時はお互い様って事で・・・ね？」

タ「そう言うてもなあ・・・」

オ「タマ・・・ダメなのか？」

タ「ああもうそないな表情やめーや。分かった分かったウチもつきおうたる」

サ「わ、私も行きます！」

女将「皆さん・・・分かりました。ご協力、感謝いたします」

タ「そんならまずは（グウ・・・）・・・オグリの腹ごしらえからやな」

オ「すまない・・・旅館の食事が楽しみすぎて・・・」

第3話 温泉修理大作戦：始動

女将「こちらが源泉までの地図です」

タ「大体こつからなら10キロも無いくらいやな」

女将「そしてこちらが源泉を組み上げているポンプ室へ入るためのカギです」

イ「確かにお預かりします」

女将「道の様子がどうなっているかは私では分かりません。決して無理だけはなさらないでくださいね」

サ「分かりました」

オ「大丈夫だ。お腹一杯で元気百倍だ」

タ「オグリとおると緊張感でーへんわあ・・・」

全員「「「あははは・・・」」」

第4話 温泉修理大作戦：第1関門

イ「ここが土砂崩れ現場かあ」

サ「おっきな岩が沢山だね」

オ「ふむ・・・」

オグリキャップはおもむろに岩に近づくと岩を押し始めた。

タ「オグリ、何するつもりなんや？危ないで」

オ「この岩をどかせば向こう側に安全にいけるかもしれない」

イ「ならどかしちやいましょう！」

サ「こっち側に動かすのなら安全だよね」

タ「ヨッシャ！ほな一緒にやるでえ」

全員「「せゝの！」「」」

ズツドゥン！

オ「よし！これで先に進めるな」

イ「それほど大きくはないけど岩がまだまだあるから注意しないとね」

サ「足元に注意しながらポンプ場を目指しましょう」

タ「まだまだ先は長いからこの程度でへバツてられへんな」

第5話 温泉修理大作戦：第2関門

タ「あっちゃー、ここも土砂崩れで埋もれとるやんか」

オ「この岩は小さいうえに複雑に組み合わさっているな。下手に

動かすとさらに崩れてしまいそうだ」

イ「そうなるか迂回するかどっちかだね」

サ「登るのもあまり安全じゃないかもしれないですね。細かい砂も

多いですから足を取られそうです」

タ「しゃーないなあ。迂回できそうな場所を探すしかあらへんな」

ウマ娘移動中・・・

サ「へ、蛇イー！」

イ「大丈夫だよルーちゃん、アオダイシヨウだから毒は無いよ」

オ「蛇か・・・食べられると聞いているが味は良いのだろうか？」

タ「何でもかんでも食べようとするんはやめんかい！」

第6話 温泉修理大作戦：第3関門

イ「地図とGPS情報からそろそろのはずなんだけど・・・」

オ「あそこにある建物っぽいものではないか？」

タ「他にそれらしいもんもあらへんし多分そうやろうな」
サ「早速行きましょう」

ウマ娘移動中・・・

イ「あれ？鍵が開かない？」

タ「なんやて!!？」

サ「壊れてしまったのでしょわか？」

オ「インパクト、私がやってみよう」

インパクトターボからオグリキャップがカギを受け取った。

オ「フン！」

バキッ！

タ「おわー！オグリなにしとんねん！」

オ「普通に開いただけだが？」

タ「なんでやねん！」

サ「多分蝶番が痛んでいて壊れたみたいな音がしたんですね」

イ「早速中に入りましょう」

第7話 温泉修理大作戦：最終関門

イ「女将さんからもらったメモによるとまず第1ポンプのスイッチをオフにする・・・っと」

タ「お、これやな。押したで」

イ「次に第1ポンプから伸びているパイプのレバーを捻ってパイプを閉じる・・・っと」

オ「これだな。よし、閉じたぞ」

イ「次に第2ポンプから伸びているパイプのレバーを捻ってパイプを開く・・・っと」

サ「開きましたよ」

イ「最後に第2ポンプのスイッチをオンにする・・・よし！動いた！」

タ「あかん！パイプにヒビが入っとる！」

タマモクロスが指さす先にはヒビが入ったパイプからボタボタと温水が漏れている。

イ「えーつとえーつとパイプにヒビが入っている場合は・・・あつ

た！資材置き場に応急修理用のテープがあるから一度ポンプを止めてテープをキツク巻いておけば大丈夫だって！」

サ「私探してきますね！」

オ「私も探そう」

それから暫くして・・・

全員「「「修理完了〜！」「」」」

ひび割れたパイプにテープを巻き付けて穴をふさぎ、ポンプを再起動させても漏れがない事を確認したインパクトターボ達はハイタッチして喜んだ。

イ「さあ！帰って温泉だー！」

全員「「「オー!!!」「」」」

第8話 温泉堪能

イ「ふう〜！いいお湯〜！」

サ「移動で疲れた体に染渡ります〜」

タ「はあくたまらんわ〜」

オ「やはり温泉は・・・いい・・・」

4人ともが温泉を堪能する。

女将「お湯加減はいかがですか？」

イ「最高です！」

サ「疲労がお湯に溶けていくみたいですよ」

タ「しっかしほんまに宿泊料も食事代も無料でええんか？」

オ「元々ウマ娘料金だから決して安くはない値段のはずだが・・・」

女将「はい、むしろこれぐらいさせて戴かないとこちらの方が申し訳ないですよ。道が直るまでポンプも直せないと何日休業しなければならぬか分かりませんでしたし大助かりです。晩御飯は主人が張り切ってご馳走を用意すると言ってましたからたっぷり召し上がってください」

4人「「「は〜い！」「」」」

ハッピーエンド

インパクトターボ 衣装違い 初期能力（☆3時）

スピード：89 スタミナ：92 パワー：92 根性：85 賢
さ：87

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離E マイルA 中距離A 長距離C

脚質適性：逃げA 先行G 差しG 追込G

成長率：速0% 体0% 力10% 根10% 賢10%

スキル：初期所有 集中力 先駆け

覚醒：Lv1逃げるコツ Lv2逃亡者 Lv3勢い任せ

Lv4ペースブレイカー

ペースブレイカー（赤金スキル）説明：「作戦：逃げ」レース中盤で
後ろを大きく引き離して先頭を走っている時、後ろを走るウマ娘を非
常にかかりやすくし、かかったウマ娘の速度を上げてしまう代わりに
とてつもなく疲れやすくなる

下位スキル：オーバーペース（赤スキル）説明：「作戦：逃げ」レー
ス中盤で後ろを大きく引き離して先頭を走っている時、後ろを走るウ
マ娘をかかりやすくし、かかったウマ娘の速度を上げてしまうかわり
に疲れやすくなる

固有スキル：突撃！1番風呂！

レース序盤で後ろを大きく引き離して先頭を走っていると、レース
中盤が近づいた時にスタミナを大きく回復する

サムシングブルー 衣装違い 初期能力（星3時）

スピード：86 スタミナ：100 パワー：82 根性：100

賢さ：84

バ場適性：芝A ダートG

距離適性：短距離G マイルD 中距離B 長距離A

脚質適性：逃げB 先行A 差しA 追い込みB

成長率：速0% 体30% 力0% 根0% 賢0%

スキル：初期所有 深呼吸 長距離コーナー○

覚醒：Lv1垂れウマ回避 Lv2完璧マーク Lv3直線

回復 Lv4スリップマスター

完璧マーク（金緑スキル）説明：どんな作戦を選んでもレース終盤まで1番人気のウマ娘の後ろを走って追い続ける。根性ステータス＋50 徹底マークの進化スキル

スリッパマスター（金スキル）説明：前のウマ娘のすぐ後ろに付くと風の抵抗をかなり受けにくくなる

固有スキル：ホットスクランブル

レース終盤に差し掛かった時にスタミナが沢山あるとスタミナを消費して速度をすごく上げて、加速力も上げる。

配布サポートカード

SSR 温泉フードファイター オグリキャップ スタミナ

取得可能イベントレアスキル

食いしん坊

ガチャ実装サポートカード

SSR 温泉卓球ファイター タマモクロス スピード

取得可能イベントレアスキル

昇り竜

番外編 アプリ版 インパクトターボ ウマ娘ス
トリー編 前編

『第1話 参上！大逃げウマ娘！』

ウマ娘達がその実力をトレーナーたちにアピールする学園最大の一大行事、選抜レース。

そんな選抜レースでスカウトするウマ娘を見つける為に私は先輩トレーナーとやってきた。

先輩トレーナー(以下先)「お前も早く担当ウマ娘をスカウトできるといいな。選抜レースで少しでも有力なウマ娘を見つけたら直ぐにスカウトに行けよ。基本取り合いになるから絶対にスカウトしたいウマ娘を見つけたら全力で行けよ」

主人公(以下主)「はい、ありがとうございます」

実際にあたりを見回すと多くのトレーナーがタブレット片手にウマ娘達を熱心に見つめている。

実況(以下実)「まもなく選抜レース1600メートル第1レースがスタートします。出場ウマ娘は係員の指示に従ってゲートに入ってください」

開始を告げる実況の声にトレーナー達が練習コースに視線を向ける。

すでにコースに設置されたゲートには係員に案内された出場ウマ娘達が納まっている。

実「スタートしました！おっと一人飛び出したウマ娘が居ます！ゼッケン4番は・・・インパクトターボです！」

1人のウマ娘が圧倒的な速さでリードを築いていく。
インパクトターボ(以下イ)「うりゃー！」

かなりの速さで先頭を走るインパクトターボと一緒に走るウマ娘達は困惑している。

先「あのウマ娘は無しだな・・・」

主「え!?!あんなに早いのですか?」

先「ああ、もうじき理由が分かる」

先輩の言う事がどういふ事なのか分からなかったのどにかくレースに集中した。

イ「まだまだあー！」

実「インパクトターボまだ先頭！しかし後方のウマ娘達も上がってくる！ゴールまで残り200メートル！インパクトターボ懸命に粘る！何とか1着でゴールイン！」

先「ほう、思ったよりも粘ったな」

主「やっぱり強いじゃないですか」

先「いや、やはり無しだ。上がり3ハロンのタイムだがインパクトターボが一番遅い」

主「それって・・・」

先「勝てたのは他のウマ娘が大逃げに慣れていなかったからだ。選抜レースで大逃げするウマ娘なんて普通は居ないからな」

主「そうなんですな・・・」

私はどこか納得できずにいた。

先「大逃げなんて勝てないウマ娘のやる事だ。あの子もきつとすぐに潰れてダメになる」

先輩の言う事は他のトレーナー達も思ったのだろう。

1着でゴールした彼女には誰も向かわず、2着や3着の子に声をかけるトレーナーばかりだった。

でも私は1着でゴールした彼女から目が離せなかった。

『第2話 鋼の肉体』

実「まもなく本日の選抜最終レース1800メートル第6レースが始まります。出走ウマ娘は係員の指示に従ってゲートに入ってください」

あれからいくつかのレースを見て何人かのウマ娘に声をかけたが色よい返事は貰えず、ただただ選抜レースを眺めるだけになってしまっている。

先「まあそう落ち込むな。何も今すぐ担当ウマ娘を決めなければならぬ訳でもないしな」

主「はい・・・」

先輩にそう慰めてもらいながら私は最後のレースを眺める。

実「スタートしました。1人飛び出しましたのはゼッケン1番のインパクトターボ：え!?ちよつと間違いないんですか!?え!?あつてる!?!」

実況の人が驚くのも無理はない。

周りのトレーナー達もざわついている。

なぜなら普通選抜レースを続けて走る事なんかはしないからだ。

先「おいおい!?何かの間違いだろ!?!」

選抜レースを複数走るにしても同日は避けるのが当たり前だ。

なぜなら体にかかる負担が尋常ではないからだ。

実「先頭を走るのはインパクトターボ!信じられないでしょうが2度目のレースでも大逃げ!本当に大丈夫なんでしょうか!?!」

イ「うりやいやー!」

先ほどのレースの疲れを全く感じさせない走りに私は完全に魅了されていた。

先「無茶苦茶だ!こんな事を続けていたら足がもたんぞ!」

先輩の言う通りだろう。

ウマ娘の足は繊細だ。

勿論人間に比べれば頑丈だ。

しかしその強すぎる脚力に耐え切れないウマ娘も多い。

骨折や屈腱炎といった症状はウマ娘とは切っても切り離せない怪我だ。

まして大逃げは通常よりも負担の大きい走りと言われている。

まさかの展開に会場がざわついている。

実「インパクトターボまだ先頭!本当に走り切れるのか!後ろの娘達は間に合うのか!?!まもなく残り200メートル!」

イ「抜かせない!」

実「なんと2戦目も逃げ切ったインパクトターボゴールイン!」

流石に疲れたのかゴール後に大きく息をつくインパクトターボ。

私はそんなインパクトターボから目を離せずにした。

先「やれやれ・・・癖ウマ娘は数多く居るがあんなのは指導できんな。どうあがいても怪我するのがみえている」

先輩はそう言つて立ち去つて行った。

2回目の勝利にもかかわらずインパクトターボにはやはりスカウトが向かわない。

自分では扱いきれないと思われたのだろう。

私はただ茫然と彼女を見つめ続けた。

『第3話 逃亡者魂』

選抜レース2日目・・・

前日のちよつとした騒ぎはあったものの問題があったわけではないので今日もレースが行われる。

今日は選抜レース最長の2000メートルレースだ。

まだ担当ウマ娘をスカウトできていない私は今日もレースを見学しにきていた。

先輩は今日は予定があるとの事で一人だ。

さすがに今日はスカウト候補くらいは見つけなければならないと気合を入れる。

そんな事を思いながら選抜レースを眺めていると・・・

実「まもなく選抜レース2000メートル第4レースを開始します。出走ウマ娘は係員の指示に従つてゲートに入ってください」

主「あれは!?まさか!」

私の視線の先にはあのインパクトターボが居たのだ。

実「スタートしました。1人飛び出したウマ娘・・・まさかとは思つたけどインパクトターボ!?またあ!」

実況の人も三度の出来事に驚愕を隠せない。

周りのトレーナー達も昨日の出来事を覚えている為にざわつきが止まらない。

イ「うりやりやりやー!」

しかもまたまた大逃げだ。

もはやアピールとしては意味がないどころか逆効果だ。

1度の大逃げならまだしも3度も続けての大逃げ。

その上選抜レースに立て続けに出るなんて常識ではありえない。実「イ、インパクトターボ先頭！その走りは無謀なのか挑戦なのか！後方ウマ娘達は流石に落ち着いた様子でレースを進めています！」何度も同じ作戦しかしないインパクトターボに他のウマ娘達も彼女を無視して走る事にしたらしい。

実「インパクトターボが先頭のまま最終直線に入りました！後方ウマ娘達も上がってきます！」

イ「負けないー！」

実「インパクトターボまだ先頭！届くのか！後方ウマ娘達は伸びが悪い！インパクトターボなんと逃げ切ったゴールイン！」

まさか3回共に逃げ切ってしまうとは誰も思わなかったのだろう。トレーナー達の騒めきが止まらない。

しかし誰一人としてインパクトターボをスカウトしようとするトレーナーは居なかった。それはそうだろう。

こんな無茶をするウマ娘を指導できるとは到底思えなかったからだ。

結局私も彼女に声をかける事は無く選抜レースは終わりを迎えた。そして夕方・・・

主「結局誰もスカウトできなかつたな・・・」
今年1年は先輩の補助でもするしかない。

そう思いながら私は夕暮れの学園内を歩く。

イ「はあ・・・はあ・・・はあ・・・もう一本」

主「あの娘は・・・」

トレーニングコースで一人走っているのはインパクトターボだった。

主「おーい、キミ」

イ「はい？私に何か御用ですか？」

主「昨日も今日も選抜レースに出たのにトレーニングするなんて無茶でしかない。怪我してもおかしくないぞ」

私は思わず彼女にそう言った。

イ「ああ大丈夫ですよ。私今まで走りで怪我した事ありませんから！」

主「それにしたってあんな無茶しなくたっていいじゃないか。あれじゃあスカウトがつかないぞ」

私はツイツイ思っていたことを言ってしまった。

イ「あー・・・その・・・笑わないで聞いてくれますか？」

彼女は恥ずかしそうに話しをしてくれた。

イ「あれは私がトレセン学園に入学する前に母が本物のレースを見ようって連れて行ってくれた時の事なんです。年末の有《font: ul40》馬《font》記念でした。その時私は憧れに出会ったんです」

主「憧れに？」

イ「はい、フォームはボロボロ。速度も速そうじゃない。1番人気のウマ娘には到底かなわない実力しかないはずの小柄な青いウマ娘 ツインターボ先輩・・・。それはロウソクが燃え尽きる直前の一瞬の輝きだったのかもしれない。でも私には何よりも輝いて見えたあの走り。私もあんな走りがしたい・・・うん、あの走りを超えたいと思っただけです」

インパクトターボはそう言って笑った。

私はその笑顔に魅了されていた。

『第4話 浪漫を目指して』

先「それで、結局昨日も収穫は無しか」

主「はい、何人かには声をかけたんですが・・・」

先「まあそこは相性もあるからな」

自販機で缶コーヒーを買ってベンチに腰掛ける。

主「・・・先輩」

先「なんだ？」

主「憧れを追い続けるのは悪い事でしょうか？」

先「何とも言えない。憧れで強くなるウマ娘もいる。逆に憧れに潰されるウマ娘もいる。どちらになるか、それはトレーナー次第とも言えるだろうな」

確か先輩は指導していたウマ娘が・・・。

先「俺はあいつの憧れを形にしてやれなかった。だから俺は無理な憧れを抱くウマ娘を指導する事を止めた。そこが俺の限界だったからだ。だがお前はまだトレーナーとして未熟で未知数だ。憧れを抱くウマ娘をそこまで導けるのか、はたまた憧れに押しつぶされるのかは誰にも分からない。今、お前がどうしたいか、だ。俺にはそれ以上言えんよ」

主「先輩・・・」

私は先輩の言葉に覚悟を決めた。

主「インパクトターボを・・・スカウトしたいと思います」

先「・・・やはりか」

主「気が付いていたんですね」

先「お前があの娘を見る時の目が嘗ての俺にそっくりだったからな。潰れるなよ。お前も、あの娘も」

主「はい、がんばります」

私は先輩に頭を下げると缶コーヒーを飲み干してインパクトターボを探して歩き始めた。

練習コースを探し回るがインパクトターボは見当たらない。

あの様子だと誰かにスカウトされたとは思わないのだが・・・

暫く探しているとようやくインパクトターボを見つけた。

イ「おや？アナタは昨日も会いましたね」

主「やあ、あれからスカウトは来たかい？」

イ「今私がここに一人で居るのにそれを聞くのは少し意地悪じゃないですか？」

インパクトターボはちよつと怒りながらそう言った。

主「じゃあ私がもし貴女のトレーナーになるって言ったらどうする？」

イ「ええ!?!本当ですか!?!」

主「ああ、君が言った憧れ、本物にしてみないかい？」

イ「トレーナーさん、逃げしかない私を指導するなんてアナタも浪漫派ですね」

浪漫派と言われればそうなのかもしれない。
イ「ならば見ててください。その浪漫、本物にしてみせます！」
インパクトターボはそう力強く宣言した。

番外編 アプリ版 インパクトターボ ウマ娘ス
トリー編 後編

『第5話 飽きました!』

インパクトターボのトレーナーになって早2週間が経過した……
インパクトターボ(以下イ)「トレーニング飽きました!」

主人公(以下主)「早くない!」

イ「トレーニングは退屈なんですよ!レースさせてくださいレース!
ス!」

主「そう言われてもなあ……」

残念ながらメイクデビュー戦まではまだ時間がある。

デビューしていない状態で出られるレースは学園内の選抜レース
くらいであるがあれはトレーナーが居ないウマ娘に限られている。

イ「うう……早くデビューしたいからとトレーナー選びを急ぎす
ぎました……レーススウ……」

どうやら選抜レースを走りまくっていたのはアピールがしたかつ
たと言うよりは単純に本人が走りたかっただけのようだ。

主「トレーニングでも走っているでしょ?」

イ「違います!レースで走るとトレーニングで走るのとは全ツ然違
います!例えるならばそう!白飯と生卵を別々に食べるのと卵かけ
ご飯にして食べるのが違う様に!」

そう断言されてしまった。

一見同じに見えて感じ方が異なると言いたいのだろう。

主「しかしレースが開かれていない以上はどうしようも……」

イ「させてくださいよお。何でもしますからあ」

うん、その言葉は方々に誤解を生む!

このままではトレーナーとしても社会人としても終わりを迎えて
しまう。

主「分かった分かった。本番のレースとはいかないが模擬レースみ
たいな事ができないか先輩に相談してみるから今日は大人しくト

レーニングしてくれないか？」

イ「本当ですか!?嘘だったら承知しないですからね!」

なんとかやる気を出してくれたインパクトターボに私は苦笑を返す事しかできなかった。

時計マーク

先輩トレーナー（以下先）「なるほどなあ・・・まさかそこまでの癖ウマ娘とは思わなかったって訳か」

主「はい・・・先輩、何とかありませんか？」

先「そうだな・・・俺の指導するウマ娘達の中で併走させてやるか。まあめつたな事じゃあ大逃げウマ娘と当たるなんて事は無いがいい経験にはなるだろう」

主「ありがとうございます!」

こうして先輩のウマ娘達の協力を得る事が出来た。

走るSDウマ娘

イ「うりゃー!」

モブウマ娘A（以下A）「む、無理いー!」

渋々とトレーニングしていた時とは打って変わって喜びを露にしながら全力疾走するインパクトターボ。

併走を受け入れてくれた先輩のウマ娘はインパクトターボの走り

にペースを乱されて本来の走りができなかったようだ。

A「うう・・・なんて無茶苦茶な走りなの・・・」

バテテしまったウマ娘がふらふらと戻ってきた。

イ「ふはー!やっぱりレースは最高ですね!」

反対に生き生きとした笑顔を見せるインパクトターボ。

先「これ程とはなあ・・・」

主「すみません無理を言ったのに・・・」

まったくもって何の練習にもならなかったであろう先輩に対して私は謝るしかできなかった。

先「いや、アイツは以前から逃げでペースを乱されると弱かったから無理もない。何かしらの学びはあった・・・とは思うな」

流星に先輩もはつきりとした事は言えなかった。

『第6話 念願のレース』

トレーニングに不満を述べるインパクトターボを何とか宥め、もうすぐデビューだからと必死にごまかしてなんとかデビューを迎える事が出来た。

開幕直ぐのデビューでまだまだ不安が多いのだがレースが始まっているのに我慢しろとはインパクトターボに言えなかった。

むしろここで我慢させると確実に信頼関係にヒビが入るだろうか、負けても構わないとデビューさせる事にした。

イ「待ちに待ったレース！今日も大逃げで頑張るぞー！」

張り切るインパクトターボに対し私は本当に大丈夫なんだろうか、と心配でたまらない。

トレーニングに対してどうにも真剣さが足りない上に時間だつて足りてないからだ。

イ「大丈夫ですよトレーナーさん。私を信じてください」

果たして彼女の自信は一体どこからやってくるのだろうか。

主「とにかくデビューレースを楽しんおいで」

ここまで来てしまつて文句を言うのもあれかと思ひ多少投げやりではあるが応援する。

いくら彼女の大逃げ戦術が珍しいとはいえ調整不足のデビュー戦で勝てるとは思わない。

それでも走る以上は全力を尽くしてほしい。

そしてついにレースの時間がやってきた。

走るSDウマ娘

実況(以下実)「スタートと同時に1人のウマ娘が飛び出しました！4番のインパクトターボです！」

イ「うりやー！」

いつも通りに飛び出したインパクトターボを見た観客からは大きな歓声があがる。

トレーナーからは倦厭される大逃げだが観客からすると大逃げは非常に見栄えがある。

最後の直線で抜き去る直線一気も盛り上がるが大逃げもそれに劣らないほどに盛り上がる。

ましてこれがデビュー戦である。盛り上がらない訳がない。

一緒に走るウマ娘達はどうしたらいいのか分からないのか互いにけん制しあつたまま逆に動けないようだ。

それが功を奏したようだ。

実「先頭は変わらずインパクトターボ！後続のウマ娘達を大きく引き離して逃げ続けています！」

イ「これでラストー！」

勝てるとは思っていなかったデビュー戦をインパクトターボは勢いだけで押し切つてしまった。

主「これは・・・行けるぞGIレース！」

今日の走りではインパクトターボの本当の実力を知った。

『第7話 逃亡者魂』

衝撃のデビュー戦から数か月後・・・。

実「インパクトターボ先頭のままゴールイン！今日も今日とて大逃げウマ娘のインパクトターボ！なんと9戦無敗のまま皐月賞への切符を手に入れました！」

どうしても真剣に練習しないインパクトターボだったがレースには真剣だ。

その為に練習を兼ねてのレース出走を重ねてきたがまさかその全部を勝つとは思わなかった。

そんな事を彼女は勿論周りに言うわけにはいかないがここまでやれるとは正直な話思っていなかった。

イ「見てましたかトレーナーさん！ターボさんまたまた大勝利ですよー！」

嬉しそうに手を振るインパクトターボに私も手を振って応える。

本当にレースを走るときは上機嫌でしかも勝ってくる。

果たして私は必要なのだろうかと思う事が無くもない。

一応トレーニングの指導はしているが真剣にやってくれないので本当にトレーニングの効果が発揮できているのか分からないからだ。

イ「・・・ナーさん！トレーナーさん！聞いてますか！」

主「うえ!?インパクト、いつの間に!？」

イ「もうとつくにインタビュウ終わってますよ！ライブやるんですから早く早く！」

私はインパクトターボに手を引かれるがままに移動するのだった。走るSDウマ娘

レースから数日後・・・

イ「なんだか様子が変わりますが何か悩み事ですかトレーナーさん」

どうやらインパクトターボに心配される程に私の様子はおかしいらしい。

主「実は・・・」

私は思わず心のうちを話してしまった。

もしかしたらインパクトターボに呆れられてトレーナーを止めなければならぬかもしれないと言わずにはいられなかった。

イ「あつはつはつはつ！」

しかしそんな私の心配は無用とばかりにインパクトターボは声を上げて笑った。

イ「トレーナーさん、アナタだからこそ私はここまでこれたんです。

私みたいな浪漫の塊に付き合ってくれたからこそです」

主「それは他のトレーナーでも・・・」

イ「いいえ、私の走りを否定せず、私のトレーニング嫌いを否定せず、私という存在をここまで育ててくれたのはトレーナーさん、アナタなんです！」

その言葉に私は思わず目頭が熱くなった。

イ「見ててください！トレーナーさん！私の大逃げの集大成を！」

そして皐月賞がやってきた・・・

実「先頭変わらずインパクトターボ！しかし後方から2人のウマ娘が迫る！ここまで徹底マークのサムシングブルーと今日は先行策のタニノギムレットです！」

イ「もってくださいよ私の足い！」

サムシングブルー（以下サ）「ライスお姉さまの為に！」

タニノギムレット（以下タ）「オレの走りに酔いしれなあ！」

末脚自慢の2人がインパクトターボを追い上げる。

主「行け！行け！行けええええええええ！」

力の限り私は声を張り上げた。

イ「これが私の逃亡者魂だあああああ！」

サ「そんな！」

タ「なんだとお！」

インパクトターボは渾身の叫びと共にゴールを駆け抜けた。

実「ゴール！皐月賞を制したのは大逃げウマ娘インパクトターボで

す！」

イ「やりましたよトレーナーさん！これがアナタの育てた逃亡屋で

す！」

いつもより疲労を隠せていないインパクトターボだったが笑顔で

右手を高く挙げた。

私はそれに無言で右手を挙げて答えた。

これからもきつと、彼女と共に浪漫を追い続けられると信じて……

E N D